# 松井田工業団地遺跡

## —遺　構　編—

1990

松井田町教育委員会
群馬県企業局

# 松井田工業団地遺跡

## —遺　構　編—

1990

松井田町教育委員会
群馬県企業局

# 序

万葉集にも歌われる碓氷峠を背に控え、本町は峠の町として古来より発展してまいりました。東山道・中山道の街道筋の宿場町であり、碓氷の関所や駅家推定地といった交通の要衝とも言える本地域は、後に鉄道の町として独自の文化を創りあげました。しかし、このような文化も時代の波を受け、その姿を変えようとしております。この貴重な歴史を正しく理解し、未来を拓くうえで、文化財はかけがえのないものと言えましょう。

松井田工業団地の建設は、産業活性化の一策としてその効果が期待されておりますが、本調査はその事前調査として行なわれたものであります。広大な地域からは縄文時代から平安時代にまでわたる数多くの発見があり、このたびその成果の一部として報告書を刊行する運びとなりました。これには、酷暑、厳冬の中でご苦労頂いた作業員さんをはじめ、関係各位の方々の多大なる御協力があり、心より感謝申し上げる次第であります。

日々変動してゆく環境の中で、私達が歩んできた道筋をしっかりと見据え、子孫に伝えることは、現代を生きる者の責務でありましょう。調査で得られた莫大な資料と共に本書がその一助として活用して頂ければ幸いと存じます。

平成２年３月

松井田町教育委員会

教育長　宮　下　初太郎

# 例　　言

1．本書は、群馬県企業局による松井田工業団地造成に伴い調査された、埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．本報告書の体裁は遺構編（兼、本文）、遺物編、写真図版編の３分冊である。

3．本遺跡は群馬県碓氷郡松井田町大字人見字大宮１番、他に所在する。

4．調査面積は総計92,960㎡である。

5．本調査においては、群馬県企業局と松井田町教育委員会で「松井田工業団地遺跡調査団」を組織した。

6．調査団組織

団　長　金子　允　（群馬県企業管理者）
副団長　廣瀬玉雄　（群馬県企業局次長）
〃　小板橋文夫　（松井田町教育長）
理　事　岩谷英二　（群馬県企業局開発課長）
〃　白石敏行　（松井田町教育委員会社会教育課長）
〃　赤山容造　（群馬県企業局開発課補佐兼調査員、文化財保護主事）
〃　田口　修　（松井田町教育委員会社会教育課主事補）
監　事　小板橋正昭　（松井田町収入役）
〃　藤井佑八　（群馬県企業局開発課用地対策室長）　（各人の役職は調査団発足時点のもの）

7．調査期間

第１次　昭和60年３月18日～昭和61年３月15日
第２次　昭和62年３月30日～昭和62年６月22日

8．担当者

赤山容造（第１次　昭和60年３月～昭和60年10月）
坂口　一（第１次　昭和60年11月～昭和61年３月）
～群馬県埋蔵文化財調査センターより企業局へ派遣、文化財保護主事
田口　修（第１次、第２次）

9．整理作業は群馬県企業局の委託を受け、松井田町教育委員会が行なった。

10．整理期間は昭和61年５月６日から平成２年３月31日までである。

11．整理作業従事者は以下のとおり。

担当　田口　修
補助員　五十嵐朋子　上原はつみ　萩原敏江　原田和美　伏田和代　山崎二三子　浦野昇平
佐藤　茂

12．報告書本文執筆

田口　修（遺構編Ⅵ・Ⅶと遺物編Ⅱ－２～７を除く全て）
村田敬一（遺構編Ⅶ）～上毛歴史建築研究所　主任研究員

13．本遺跡の地層については新井房夫氏（群馬大学教授）、小林二三雄氏（松井田教会幼稚園長）の御教示を得た。

14．石器以外の石製品、こも石状礫の石質は小林二三雄氏に鑑定して頂いた。

15. 石器、及びその石質については大工原豊氏（安中市教育委員会）の御教示を得た。

16. 石器の実測図作成にあたっては綿田弘実氏（長野県埋蔵文化財センター）の御協力を得た。

17. 調査及び整理における委託関係機関は以下の通りである。

（株）上毛測量（A区平板測量を含む現地測量）

（〃）シン航空写真（航空写真、遺構図作成）

（〃）測　研（遺構図及び遺物図のトレース）

（〃）第四紀地質研究所（土器胎土分析）

（有）古環境研究所（水田部土壌の花粉分析）

18.「周辺の遺跡分布図」は、国土地理院1：25,000「松井田」を使用した。

19. 出土遺物、図面等一切の資料は松井田町教育委員会で保管している。

20. 報告書作成にあたり、以下の方々より御教示、御指導を頂いた。記して謝する次第である。

（敬称略）

赤山容造　石関伸一　井上　太　上原富次　大塚昌彦　小野和之　加部二生　神戸聖語
菊池　実　坂口　一　坂爪久純　桜井　衛　佐藤明人　清水　豊　須永光一　田口一郎
田村　孝　津金沢吉茂　寺嶋俊郎　中沢　悟　中束耕志　新倉明彦　羽鳥政彦　原　明芳
原田恒弘　平野進一　三宅敦気　三浦京子　三好義三　宮下昌文　綿貫邦夫
群馬県教育委員会　尾島町教育委員会

21. 夏冬を通じて御苦労頂いた発掘調査従事者の方々は以下の通りである。

（敬称略）

飯野　直　一柳〆松　上原秋吉　上原きよ　上原志げる　上原スエ　上原知恵子　上原トメ
上原はつみ　上原好恵　浦野昇平　大島常吉　大沢けさ　小此木久美　小此木治郎　小此木起治
小此木智恵　小此木つね　小此木ハマ　片貝キヌ子　金谷清一郎　黒田久枝　小井土市郎治　小井土みさを
小井土みつ江　小林　清　佐藤牛五郎　佐藤重雄　佐藤　茂　佐藤寿作　佐藤武治　佐藤みよ
佐藤モリ　佐藤守雄　斉藤はる　塩谷武次　塩谷タマ　塩谷照雄　塩谷春江　下山伝一
須貝桂太郎　須藤乙一　須藤たか　須藤ひで子　須藤雅美　須藤　光　須藤みづの　須藤みや
須藤康雄　須藤わぐり　春原絹子　瀬間とき　田代正爾　田島保市　中山生三　中山　茂
新津栄吉　新津正次　馬場吉次　萩原敏江　原田和美　広瀬順子　広瀬洋子　伏田和代
伏田のぶ子　古谷眞造　堀込伶子　堀込ゆき江　前川信吉　前村小夜子　松原一成　松本　芳
松本祝司　松本秀子　三倉ミエ子　三好義三　武者勝視　矢島あき　山内教子　山口敦子
山口清子　山崎晴哉　渡辺あい　計83名

# 凡　　例

1．遺構実測図の縮尺は以下の通りである。

・住居跡、掘立柱建物跡……1：80

・土坑、井戸跡、カマド断面……1：40

（B区土坑は1：40）

2．遺構実測図中の方位記号はN－9°－Eを指す。但しその他の図では座標北を表している。

3．遺構実測図中の断面基準線は標高を表す。

4．遺構平面実測図中のトーンは焼土範囲を表す。

# 目　　次


序

例　言

凡　例

Ⅰ．調査に至る経緯……1

Ⅱ．調査の経過……1

Ⅲ．調査の方法……2

Ⅳ．遺跡の位置と環境……3

1　遺跡の立地

2　基本層序

3　周辺の遺跡

Ⅴ．遺跡各区の出土遺構集成……5

1　B区……（5）

2　D区……（87）

3　E区……（117）

4　G区……（197）

5　GⅡ区……（225）

6　I区……（251）

7　A区……（259）

Ⅵ．プラント・オパール分析結果報告……265

Ⅶ．大宮神社建造物調査報告……269

Ⅷ．ま　と　め……272

# 挿図目次


挿図　1　発掘調査区域全体図 ……2
　　2　基本層序模式図 ……3
　　3　周辺の遺跡分布図 ……4
　　4　B区全体図 ……（折り込み）5
　　5　D区全体図……87
　　6　E区全体図 ……（折り込み）117
　　7　G区全体図 ……197
　　8　GII区全体図 ……225
　　9　I区全体図 ……251
　　10　A区全体図 ……（折り込み）259
　　11　A区畦畔部セクション ……261
　　12　A区壁部セクション ……262
　　13　A区エレベーション ……263
　　14　プラント・オパール分析試料採取地点 ……265
　　15　試料別プラント・オパール出現状況(イネ)·268
　　16　各植物の推定生産量と推移 ……268
　　17　大宮神社境内配置図 ……269
　　18　社殿平面図 ……270
　　19　昭和10年の棟札 ……270
　　20　本殿平面図 ……271


# 表　目　次


表　1　周辺の遺跡の概要 ……4
　　2　各植物の換算計数 ……266
　　3　試料別プラント・オパール個数 ……267

# Ⅰ。調査に至る経緯

労働力の流出や人口減少等の理由から、町では工業団地造成により町の活性化を図るべく、昭和56年に群馬県企業局に調査を依頼した。その後、町内数か所の候補地が選定され、調査の結果、人見地区が最も適地との結論に至ったものである。

昭和59年12月、群馬県企業局、町企画財政課(当時)、及び町教委の３者で当該地の埋蔵文化財調査の話し合いがもたれた。ここでは企業局より調査を町に委託したい旨の申し入れがあり、町教委では担当職員が他の調査中であり、かつ、造成面積が27haと莫大なものであることから、町独自の調査は無理であると判断した。しかし、当該地では昭和54年に農道整備に伴う小規模な調査がなされ、平安時代の住居跡が数軒確認されており、周辺にも遺構の存在が充分予想される場所である。このことから町教委では先ず造成予定区域の分布調査を行なって現状を確認することにした。また、それに基づく調査計画も作成することとなった。

昭和61年１月、町教委は分布調査を開始したが、この頃企業局より、調査体制を企業局と町の合同で「調査会」を組織しては、との旨申し入れがあり、町教委はこれを受けて１月20日に「松井田工業団地遺跡調査会」が発足した。

分布調査は３月上旬まで続き、現況が畑地である台地部分については全般的に遺構の存在が予想されることが判明した。その後、作業員の募集を近隣地区を中心に行ない、３月18日を初日として調査が開始された。

なお、ＧⅡ区は大宮神社敷地にあたり、第１次の調査では残されたが、その後移転先が決定し、昭和62年になって調査されたものである。

# Ⅱ。調査の経過

〈第１次〉

調査期間は昭和60年３月18日から翌61年３月15日までの約１年間である。

当初、調査対象面積（面的調査面積）を９haと見積り、ほぼ同面積（90670㎡）の結果であった。担当者２人という制約のもと、遺構図作成には写真測量を導入して調査にかかる時間の短縮を図った。

古墳時代から平安時代にかけての遺構（主に住居跡）は昭和54年の調査及び分布調査等である程度の予想出来たが、その広がりの確認とＢ軽石下の水田跡の検出は、本町に於いての有効な資料となろう。

以下、調査日誌をもとに経過を概観する。

60年３月―伐根済の上物（桑など）の片付け。
　　―トレンチ掘削、精査。
４月―Ａ・Ⅰ・Ｇ各区の表土除去、及び平面精査開始。
　　―調査各区杭打ち
５月―Ⅰ区遺構精査
　　―企業局、町企画財政課、教委の３者で調査状況打合せ（国民宿舎裏妙義）
６月―Ｇ区遺構調査及びＥ区平面精査開始。
　　―梅雨期のため、室内で写真整理を進める。
７月―Ｂ区表土除去、Ｅ区杭打ち及び遺構精査開始。
７月―田口、写真測量研修（尾島町）
８月―Ｅ区遺構精査
　　―現場にて懇親会（バーベキュー）
９月―Ｂ区平面精査及び杭打ち。Ｄ区表土除去。
10月―Ａ区残り部分精査。
11月―Ｂ区遺構精査。
　　―16日、17日現地説明会。見学者339名。
12月―Ｂ区遺構精査。
61年１月―Ｂ区遺構精査終了。
　　―Ｄ区平面精査、杭打ち及び遺構精査開始。
２月―Ｄ区遺構精査、Ｇ区残り部分精査。
　　―Ｂ・Ｄ区空撮。
３月―土器洗浄、注記、写真整理。
　　―調査終了。事務所解体。

〈第２次〉

昭和62年３月30日から６月22日までの調査である。

第１次調査終了後、造成が進められたが、大宮神社敷地に関しては社殿、杉林共に残されていた。神社移転先が決定し、町教委が移転先の調査を行ない、終了したのが昭和62年１月19日であった。その後、社殿解体に先立って測量調査を行ない（本書に掲載）、３月末より発掘調査開始。

伐採した杉の枝と石垣の石の片付けから始まった調査は４月に入ると暑い日が続き、また雨も少なく、難航した。遺構の量的な予想は、第１次調査のＧ区と同地ということ

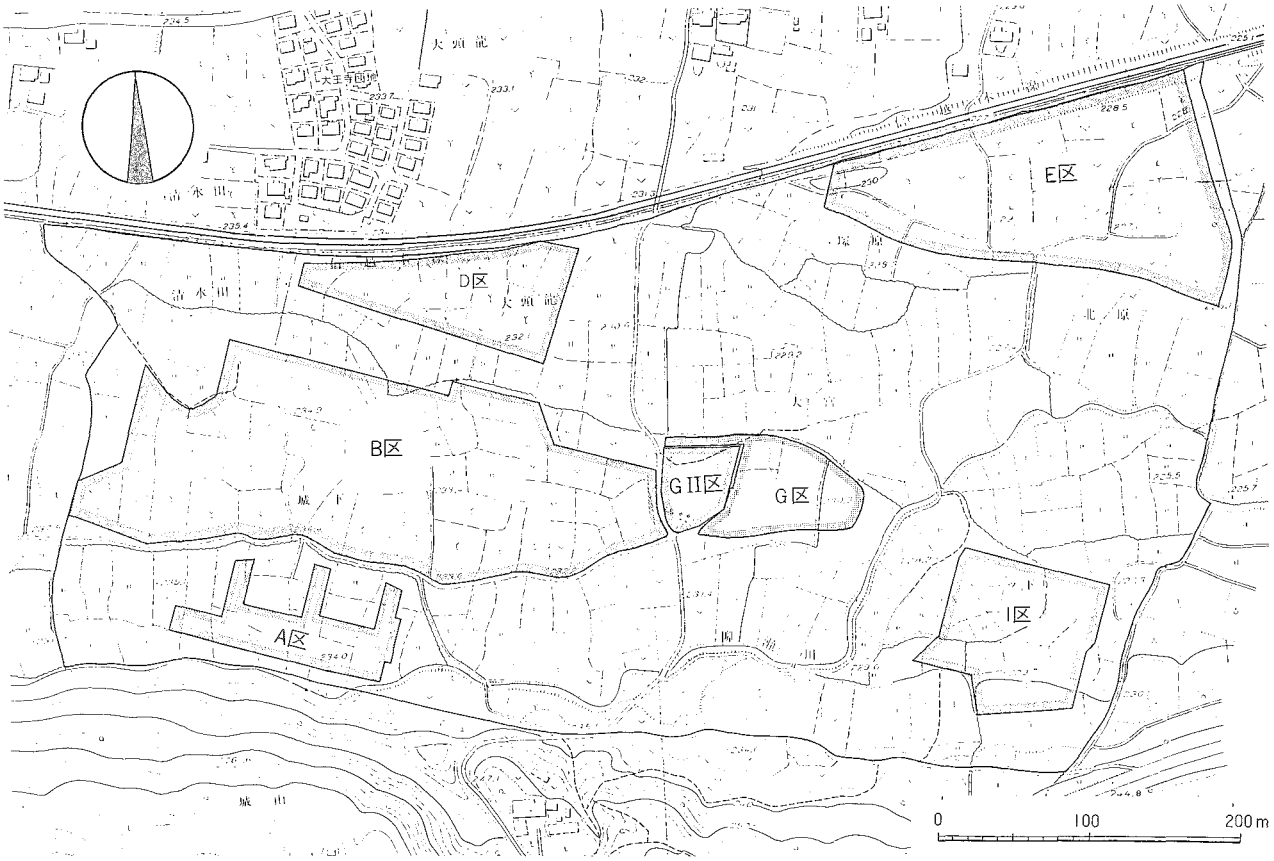
で比較的容易であり、ほぼ予想どおりの結果が得られた。調査区名はGII区とし、第1次調査のG区の座標を延長して杭打ち及びナンバリングをした。遺構図作成は第1次と同様に写真測量とし、㈱シン航空写真に依託した。調査面積は2,290㎡である。

3月30日―初日。伐採した杉、石垣の片付け。トレンチ設定。
31日―トレンチ掘削開始。
4月2日―トレンチ精査開始
7日―表土除去開始
8日―平面精査開始
16日―杭打ち開始
30日―遺構精査開始
5月　―遺構精査
6月15日―遺構精査終了
16日―空撮
19日―出土品、他の資料を教育委員会へ運搬
22日―片付け、調査終了

# III。調査の方法

調査対象地は東西約750m、南北は西側で280m、東側で450mを測り、面積約27haという広大なものである。この全域にメッシュを設定するにあたり、区域中央に存在するベンチマークを基準とし、先ずこのポイントを通る任意の東西軸を決定した。この軸を基に直交する南北軸を割り出し、ベンチマークを含む南北軸より東西に50m間隔で全域をある程度カバーし得る南北のトレンチを設定した。そしてトレンチで確認した遺構分布と先の分布調査の結果を基に面的調査の必要性のある部分を決定した。なお、現水田部分については古代水田跡の存在が予想されたが、造成が急を要する事と低地は基本的に盛土となることから、A区以外はトレンチを入れるに留まった。

各調査区の名称は、区域中央を南北に走る道路を境に西側の南から北に向かって地形の起伏（台地・低湿地）ごとにA・B・C・D、東側北より南へ向かってE・F・G・H・Iとした。また、ベンチマークを含むその東側は人見地区の総鎮守である大宮神社があり、この敷地部分は全く手をつけ




挿図1　発掘調査区域全体図

なかったが、後に神社の移転が決定し、その際（第２次調査）にＧ区の一部であることからＧII区と命名した。

面的調査を行なったのはＡ・Ｂ・Ｄ・Ｅ・Ｇ・ＧII・Ｉの各区である。平面精査で遺構の分布を確認しつつ、並行して杭打ちを行ない、遺構が平均して存在する部分は、５m間隔、希薄な部分では状況に応じてその間隔を粗くした。杭の名称は各区共に南から北へアルファベットを付し、東から西へは数字を順次増やすことにした。Ｂ・Ｄ・Ａ区は共通の座標を使用し、アルファベットはＺの後にはダッシュを付してカバーした。Ｇ区とＧII区も共通、Ｉ区とＥ区は各区独自のものである。また、Ａ区は平板測量のポイントのみを設定し、後にＢ区グリッドとの位置関係を記した。

遺構精査では、住居跡は基本的にカマドは十字に切って千鳥状にセクションを残し、住居部分は一文字とした。セクションは残存状況に応じて手測り作図を行なった。また遺構平面図、エレベーション、レベリングについては写真測量による作図とし、遺構内のピット底面などの写りづらい部分は現場でレベルを記録しておき、作図の資料として㈱シン航空写真へ渡した。

記録写真はカラー、モノクロ、カラースライドの３種類で全て35㎜フィルムを使用した。

# Ⅳ。遺跡の位置と環境

## １．遺跡の立地

松井田工業団地遺跡は、松井田町南東部の突出した位置にある。北方約500mを流れる碓氷川を境に隣接する安中市が西へ大きく入り込み、南は人見丘陵を登り上げて僅かの、遺跡より約１kmの所で妙義町と接する。調査区の東端は安中市磯部との境界であり、北はＪＲ信越本線までの区域である。ＪＲ磯部駅はここより東北東に1.5kmの距離にあり、駅前を通って安中駅、及び西の妙義山、松井田市街地方面へ向かう県道松井田・中野谷・安中線（磯部停車場・妙義山線）が、南に信越本線、北に碓氷川を眼下にしてほぼ並走している。

遺跡は碓氷川南岸の河岸段丘上に立地する。碓氷川は、その源を碓氷峠東方の長野県との県境付近に発しており、松井田町西部の山間地で中尾川、入山川、霧積川、さらに、下流で中木川と合流し、ほぼ中山道と並行しつつ安中市へと東流してゆく。この中山道は碓氷川の北岸の段丘上（中段、１段のみ）に東西に走るが、南段には上段（人見丘陵面）と、本遺跡の立地する下段の２段を形成しており、現河床との比高差は下段で30～40m、上段ではさらに30～40mを測り、下流に行くほど比高差は増す傾向にある。

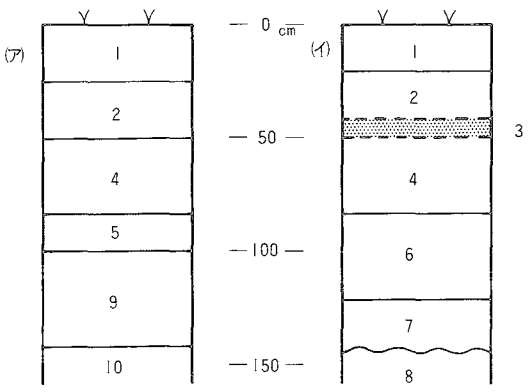
さて、この下段面には、妙義白雲山から流下する柳瀬川が東流し、遺跡地内では入見丘陵の麓から東側中央付近に向かって蛇行している。この川の浸食により、遺跡地内は低湿地と微高地が形成され、起伏に富んだ地形になっている。浅間山噴出源のＢ軽石は低湿地上では純層が確認されたが、台地部分に於いてははっきりしたものではなかった。また、Ａ軽石は低地、台地部分共に現耕作土かその直下ほどの位置に混在している、という状況であった。

## ２．基本層序

調査区が低地と微高台地からなることは前述した。ここでは低地（Ａ区中央―ア）と微高台地（Ｂ区中央―イ）の層序を提示し、他区の状況とあわせて概観する。

第１層―現耕作土でしまりのないＡ軽石混明褐色土。２・４層と共に全域に存在。第２層―基本的に１層と同様だが茶色がかり、よくしまる。第３層―Ａ軽石(註１)純層。Ｂ・ＧII区のみ部分的に確認。第４層―Ｂ軽石混暗褐色土。第５層―Ｂ軽石(註２)純層。Ａ区で平均30cm、台地はＢ区西部とＤ区南部で僅かに確認。第６層―主たる遺物出土層。ローム微粒子混暗褐色土で、遺構確認は本層及び７層直上である。第７層―ローム漸移層。６・８層と共に台地全域に存在。第８層―ローム層。Ｄ・Ｅ区での堆積は薄い傾向にあり、Ｄ区は基盤層である段丘礫層が所々露出する。第９層―古代水田耕作土。黒色粘質土層。第10層―暗灰色砂質土。

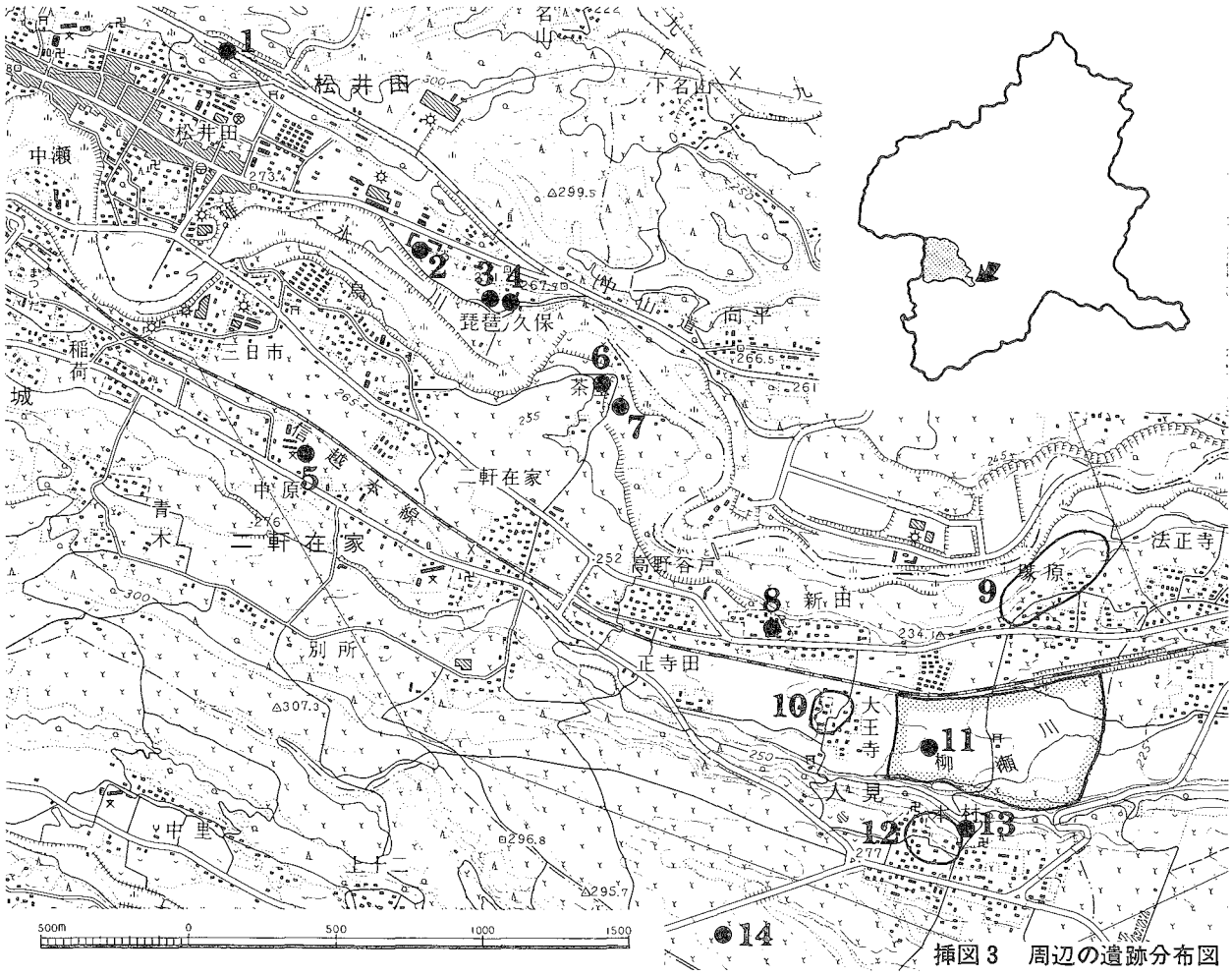
（註１）浅間Ａ軽石層。1783年降下とされる。
（註２）浅間Ｂ軽石層。1108年降下とされる。




**挿図２　基本層序模式図**

## 3．周辺の遺跡

遺跡の北～西方には同段丘上に終末期古墳が多く分布　　し、本遺跡との関連性が考えられる。分布は以下の通り。



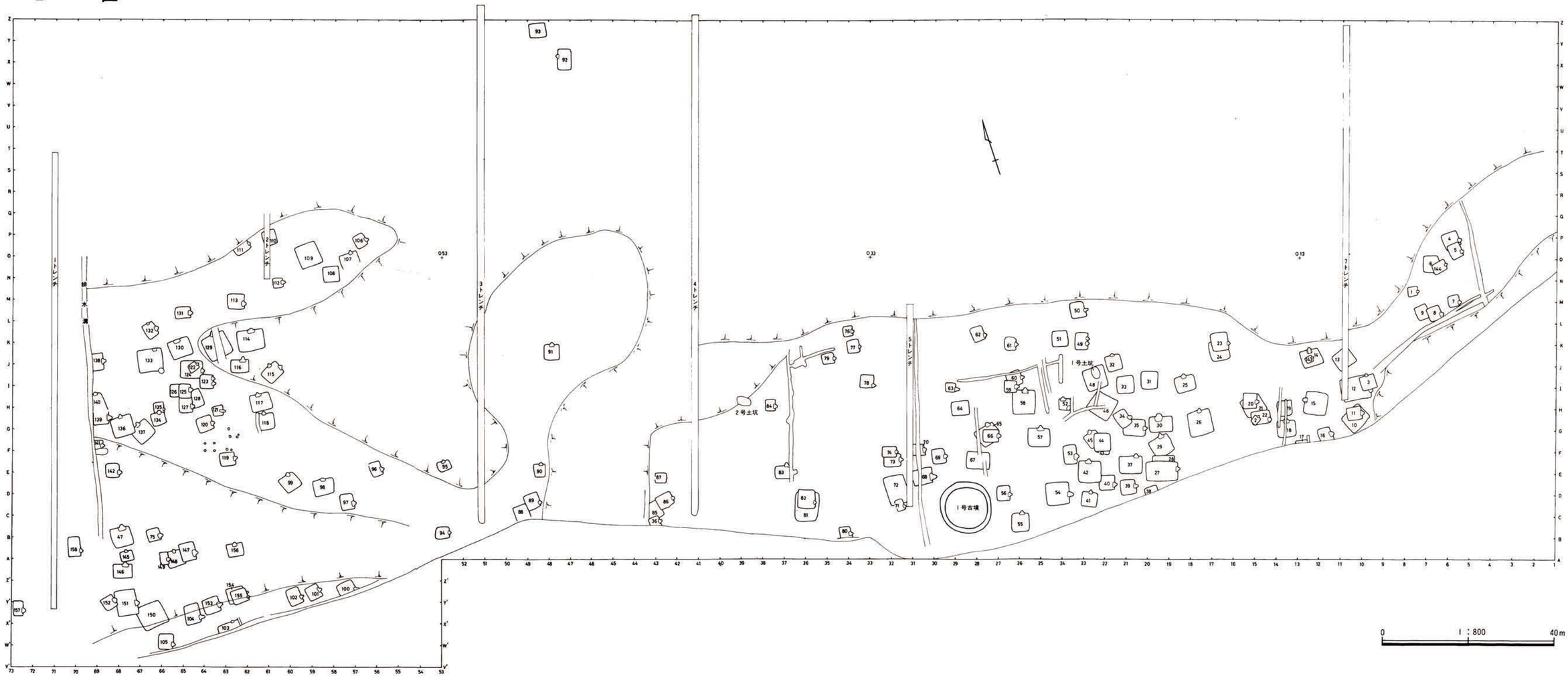

挿図３　周辺の遺跡分布図

表１　周辺の遺跡の概要

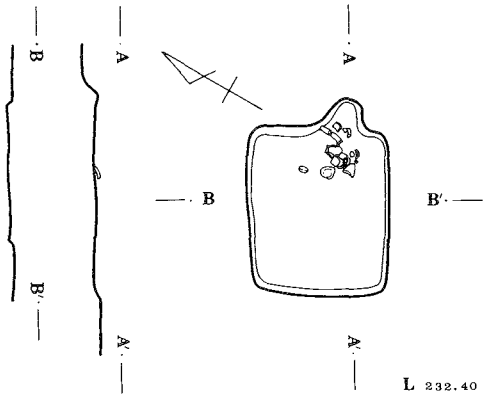
| No. | 名　称 | 時　代 | 概　要　他 |
|---|---|---|---|
| 1 | 愛宕山遺跡 | 奈良～平安 | 住居跡５軒が検出されており、うち１軒の焼失家屋では多種の生活用具が炭化材と共に残存。 |
| 2 | 松井田５号墳 | 古　墳 | 墳兵は削平され、石室部が僅かに残る。本墳以下全て横穴式石室の小円墳である。 |
| 3 | 〃　３号墳 | 〃 | 石室は土中に残存しているようである。墳兵上部は削平。 |
| 4 | 〃　２号墳 | 〃 | ほとんど原形を留めていない。石室奥壁と側壁基部の石が少々残存。 |
| 5 | 西横野５号墳 | 〃 | 石室の大石が少々存在する他はほとんど原形を留めない。 |
| 6 | 〃　20号墳 | 〃 | 石室の一部を残すのみ。 |
| 7 | 〃　21号墳 | 〃 | 墳丘部は残存しない。畑地面に玄室部の石が数個並んでいるのみ。 |
| 8 | 〃　６号墳 | 〃 | 戦前の調査で直刀２振が出土している。宅地内にあり、墳丘部は植込みになっている。 |
| 9 | 塚原古墳群 | 〃 | 10数基の小円墳群。数基は消滅し、うち１基は前方後円墳の可能性が指摘されている。 |
| 10 | 大王寺城 | 中　世 | 方形館址か。上原兵庫の城と伝えられる。 |
| 11 | 大王寺遺跡 | 奈良～平安 | 住居跡数軒が検出されている。 |
| 12 | 人　見　城 | 中　世 | 人見丘陵北面に築かれた山城。東西230m、南北150m。足利氏人見四郎恩和の館として創建。 |
| 13 | 人見谷津遺跡 | 縄文～中世 | 焼失家屋２軒検出。弥生後期の良好な一括遺物を伴う。他に縄文中期土器、人見城堀切跡等。 |
| 14 | 上人見遺跡 | 〃 | 昭和40年、県立博物館と東京大学との調査で、弥生中期の甕、壺等検出されている。 |

（参考）『松井田町誌』松井田町誌編さん室　1985

B　　区



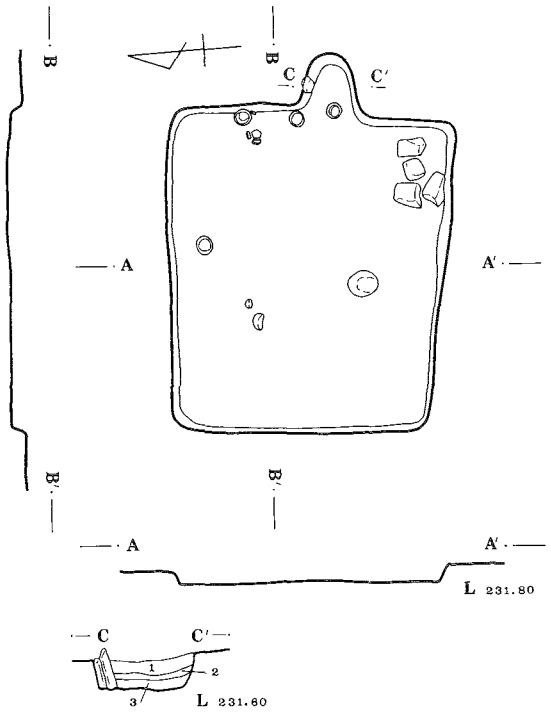

挿図4　B区全体図




B－1号住居跡

東西3.4m、南北は西壁2.6m、東壁3.0mと東西にやや長い台形状の長方形を呈す。カマドは東壁中央で、壁外へ60cm掘り込まれ、掘り込みに沿って左右に板状石を置く。床面は全面に貼床が施されている。柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物はカマド付近に集中し、須恵坏がまとまって出土、又、北壁中央付近より須恵の皿が、坏と同じく覆土より出土している。カマド右の南東コーナーからは、カマドのものと同じ板状石が床面より4枚出土し、住居中央やや南床面には、円形の扁平な石が検出された。




1層：黒色土層。
2層：焼土化した火床部分。
3層：貼床層。黒色土及びロームの混在。

B－2号住居跡

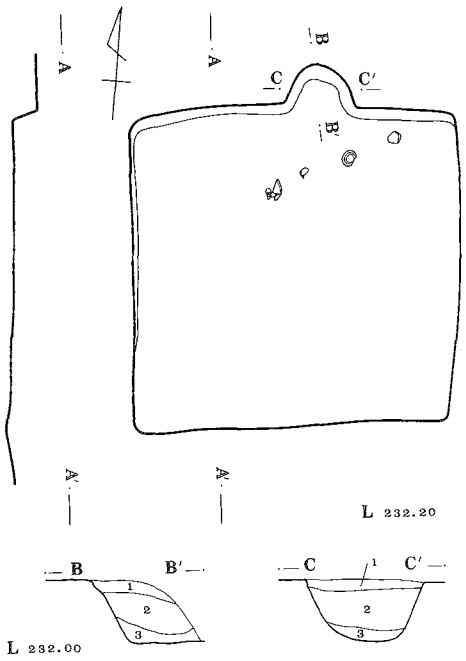
1.5m×1.8m東西がやや長い超小型の長方形。東壁南寄りにカマドが造られ、右側には板状石がよく焼けた状態で残っている。掘り込みは浅く、平均7cm程を残すのみ。無主柱で貯蔵穴もなし。カマド手前床面に、土師甕がまとまっており、又、欠損した自然石2片と、こも石状の小石も同じ所より出土している。

本住居は22号住居廃棄後、その南西コーナー付近に掘り込まれたものだが、居住するには小さすぎ、関連する遺構は不明ながら竈屋としての可能性が考えられる。

B－3号住居跡

3.5m×3.4mの正方形に近い、整ったプランの住居。カマドは北壁中央に造られ、手前幅70cmと比較的中広である。短い袖部をもつ形態だが、掘り過ぎてしまい痕跡の地山が残るのみとなってしまった。石は検出されなかった。遺物はカマド手前覆土より、灰釉小形瓶、土師質坏が、床面より土師甕が出土している。

本3号住居は、平面精査段階では未確認で、12号住居を掘りながら検出したため、西・南壁の残りが結果的に悪くなってしまった。又、東壁は掘り過ぎである。



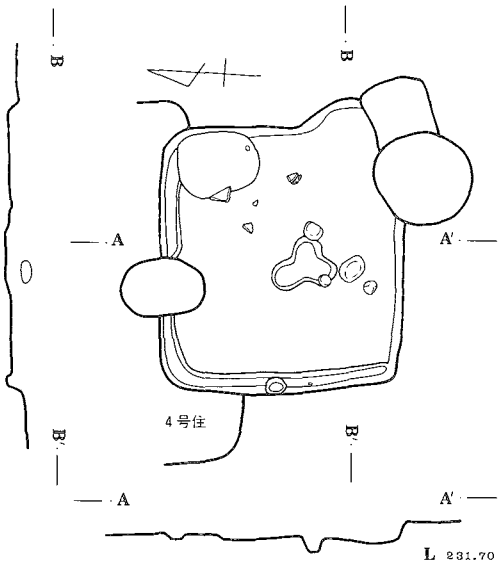

1層：褐色土層。
2層：粘質赤褐色土と褐色土の混在。
3層：黒色土層。

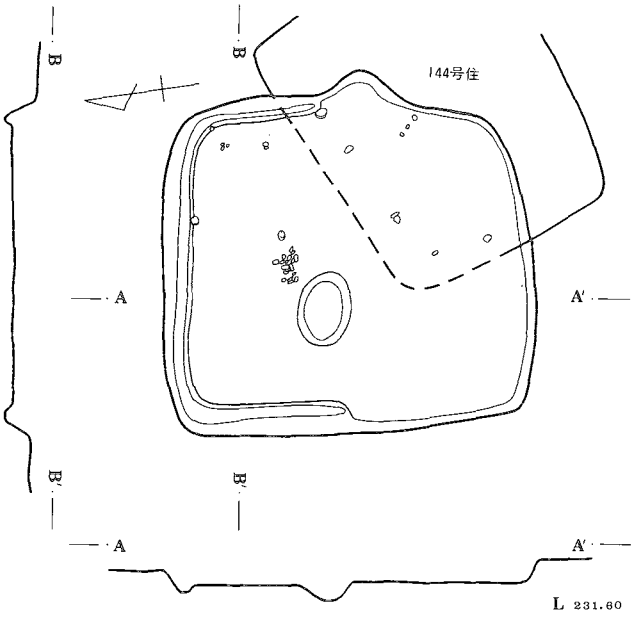
### Ｂ－５号住居跡

2.6m×2.7mの正方形に近い小型住居。カマドは東壁南端にあり、右側は土坑に切られている。燃焼部は壁外にあり、火床は住居床面と同じかやや高くにある。柱穴、貯蔵穴はなく北～西壁に、幅20cm深さ８cm程度の周溝が確認された。

遺物は覆土より須恵塊・坏・皿・甕・西壁際中央覆土より灰釉の皿が出土している。又、住居中央付近には扁平な台状の石が２個、床面やや上より出土している。

カマド右手、北東コーナー及び、北壁中央にかかるピットと、西壁にかかるものは性格不明である。

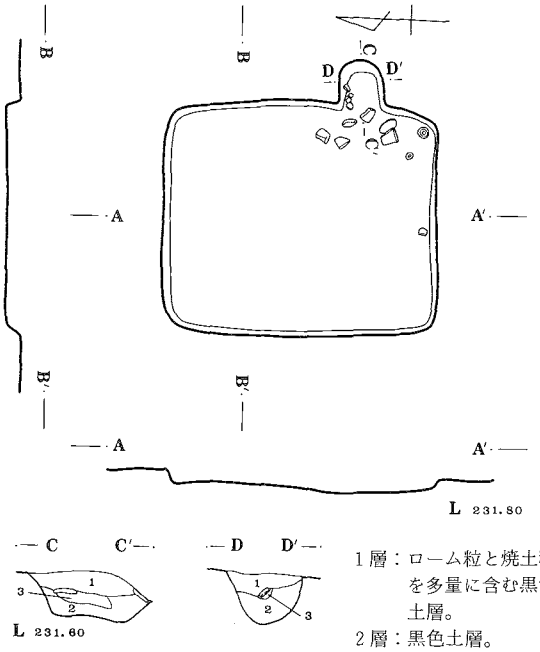



### Ｂ－７号住居跡

2.9m×2.5m、南北に長い長方形の小型住居。カマドは東壁南寄りで、燃焼部が大きく外へ張り出す。覆土及びカマド手前床面に板状の石が出ており、カマド右袖の位置の板状石の如く、壁及び、天井に使用されたものと思われる。住居内ピットは全く検出されていない。

遺物はカマド内左手の覆土より、須恵坏、塊、焚口付近に須恵甕、他に南東コーナー覆土より、酸化した須恵坏等が出土した。



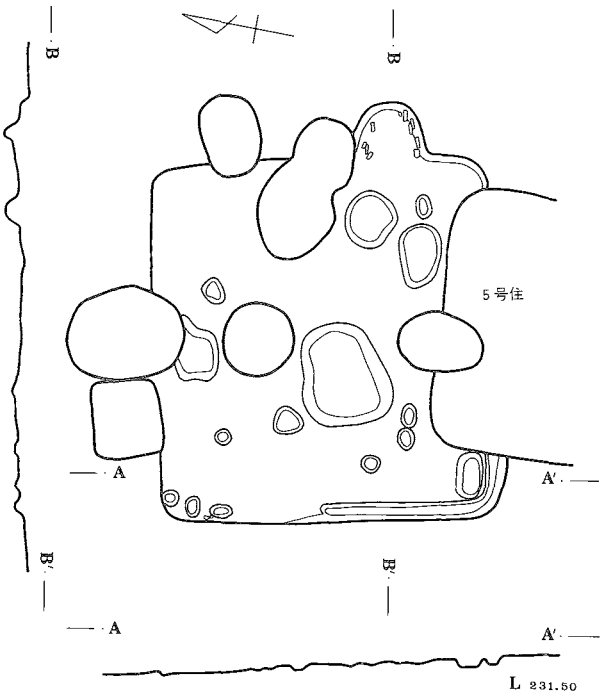

1層：ローム粒と焼土粒を多量に含む黒色土層。
2層：黒色土層。
3層：焼土層で、ブロック状にしまっている。

### Ｂ－６号住居跡

3.9m×3.6mと南北が長い長方形で、カマドは東壁中央やや南寄りに位置している。東壁から南壁中央にかけては、144号住居に切られているが、６号住居の掘り込みが深かったためプランが確認出来た。

カマド内壁は赤灰色によく焼けていたが、遺物は検出されていない。柱穴・貯蔵穴は無く、中央やや西に浅い擂鉢状のピットが検出された。又、西壁中央から北壁及び、東壁にかけて周溝があり、幅30cm弱、深さ７～８cmを測る。

遺物は多く、覆土より灰釉小型瓶、須恵塊等が、床面よりコの字状口縁の土師甕が出土した。

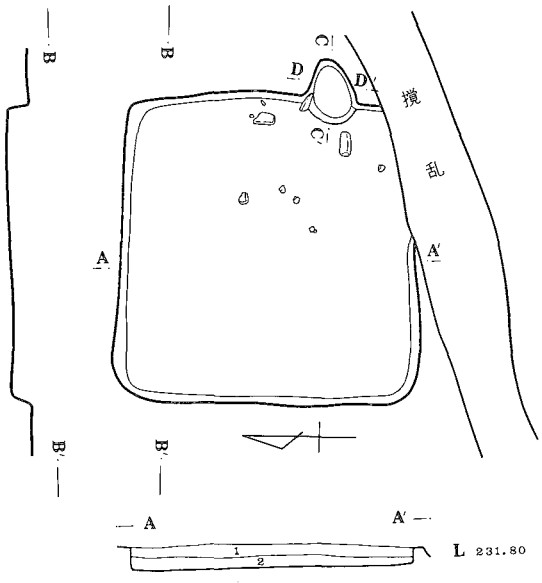



## B－4号住居跡

3.7m×3.5mでやや東西に長い住居である。東壁南寄りにカマドをもつ。掘り込みに沿って板状石が置かれており、中央やや左の凹みは、支脚の跡か。

柱穴、貯蔵穴はなく、西壁中央から南壁にかけて周溝が残っている。他に住居に伴うとみられる小ピットが数か所存在するが、性格は不明である。北壁から東壁付近は、掘り込みが残っておらず推定、又、南壁は5号住居に切られている。後に掘られた土坑が住居を覆い、全体的に残りは悪い。

遺物は覆土より、須恵埦・土師甕等が出ている。




1層：軽石粒を多量に含む暗褐色砂層。しまりよし。
2層：ロームブロックを多量に含む暗褐色砂層でやや粘性を帯びる。

1層：ローム微粒子及び焼土粒子を多量に含む褐色層。
2層：基本的に1層と同じで黒色を帯びる。
3層：ロームブロックを多量に含む黒色土層で湿気を帯びやわらかい。

## B－8号住居跡

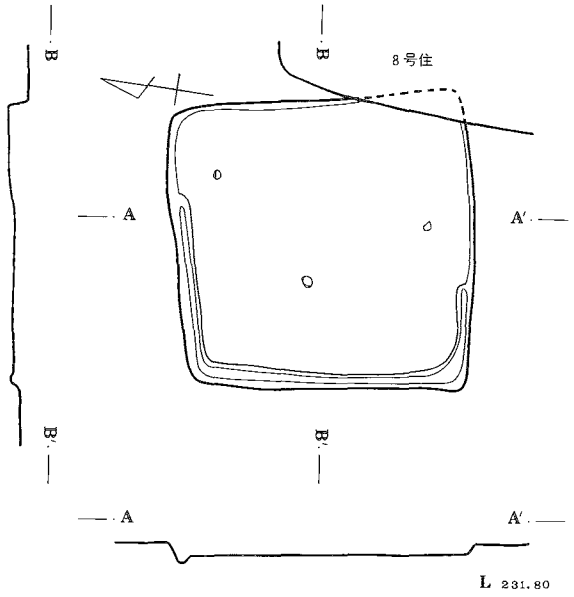
東西3.3m、西壁はやはり3.3mだが、中央付近の南北長は3.1mで、東にかけて徐々にすぼまりはじめる。南東コーナーが溝に切られており不明だが、台形状の方形といえよう。

東壁南寄りにカマドがあり、左側に残る板状石は袖を構成していたものと思われる。これと対応すると思われる石が、右袖推定部手前から検出されている。

柱穴・貯蔵穴等、ピット類は全く見当らず、南東コーナー部分においても住居の残存状況より、ピットは無かったようである。

遺物は少ない。覆土上位より、須恵坏、土師坏、コの字状口縁土師甕等、全て小片で出土した。これらは概ね住居東側に片寄っている。

北西コーナーは9号住居との重複であるが、8号住居の方が掘り込みが深く、重複部や他の部分に9号住居のカマドの痕跡が全く見られないことから、9号住居のカマド部分が8号住居によって切られた可能性が高い。

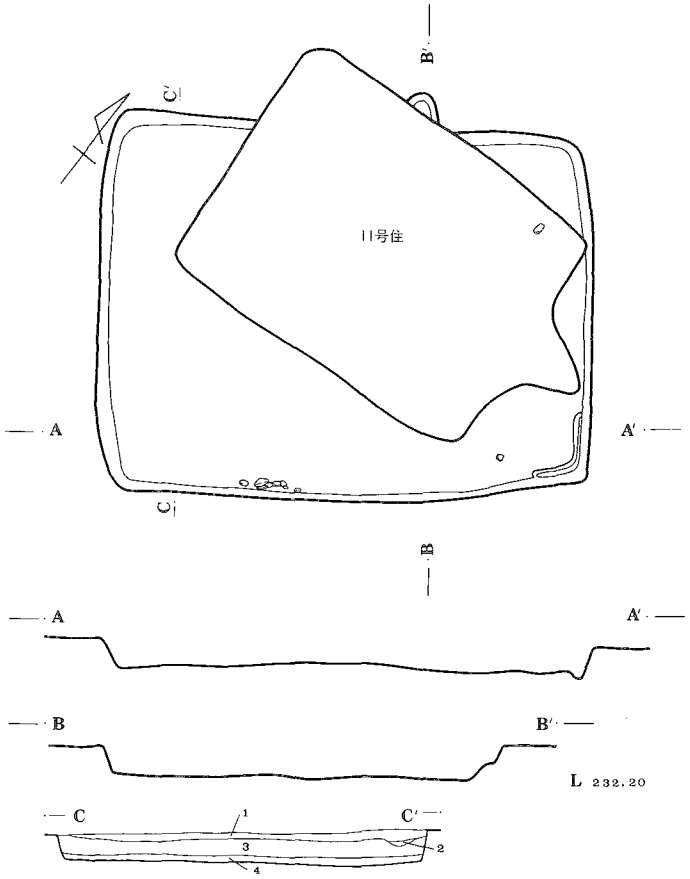



## B－9号住居跡

東西3.0m、南北は西側で3.0m、中央で3.2mを測る。正方形に近い形状である。カマドは検出されなかったが、これは8号住居に切られた可能性が強い。B区では15号、92号住居を除きカマドは住居の北壁か東壁に造られ、不明の住居1軒を除いては、攪乱によって北側か東側が壊されているものがわずかにある程度である。本住居の北壁はピットが重複しているが、覆土に焼土は全くなく、カマド部分とは認められない。又、東壁にカマドをもつ住居の大半が南寄りにカマドを造っている事から、本住居もその可能性は高い。痕跡が全く残らないのは、8号住居の掘り込みが深いことによるものと思われる。

住居に伴うピットは検出されず、住居の西側半周程周溝が見られた。

遺物は床面やや上で須恵坏、土師甕、床面より須恵長頸壺が出土しているが、全体的に少量と言える。




1層：軽石微粒子を多量に含む硬質の灰褐色砂層。
2層：径1～2㎜の砂利層。
3層：ロームブロック及び微粒子をまばらに含む黒色土層。
4層：貼床層。ロームブロック主体の黒色土層。

## B－10号住居跡

東西5.1m、南北は西壁4.0m、東壁3.7mを測る。東西に長い長方形を呈し、カマドは北壁東寄りに造られ、西側は11号住居に切り込まれている。壁高は30cmと比較的良く残っており、床面は地山を平坦に掘った面を使用している。

柱穴、貯蔵穴等は検出されない。南東コーナー付近はやや凸凹があり、周溝らしきものがわずかに認められるが、性格は不明である。

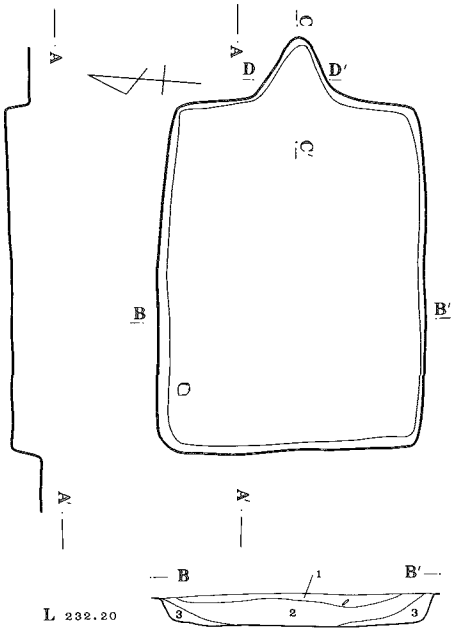
遺物は覆土より須恵埦、土師台付甕、甕片等が出土している。又、南壁際より、こも石状の石が壁に並ぶように8個出土した。

覆土中位に、一部暗灰色の砂層があり、水を受けた層と思われる。本住居の南側は徐々に低温地へ傾斜してゆくことから、住居埋没過程における河川の氾濫の痕跡かもしれない。

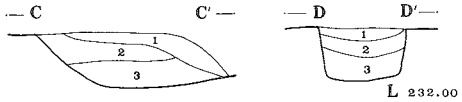
## B－11号住居跡

3.7m×2.8mで東西に長い長方形の住居。カマドは東壁中央に造られており、尖り気味に壁外へ張り出す。両袖には火を受けて脆くなった板状石が置かれており、燃焼部は壁の延長ラインにその中心がある。火床は地山であるローム層で、赤灰色によく焼け、覆土の下半は焼土を多量に含み、その上に天井崩落層と思われる粘質層がよく残っていた。

遺物は覆土より、須恵埦、甕、土師坏、甕片等が、床面より土師甕片が出土した。なお住居に伴うピットは、皆無であった。又、重複する10号住居との関係は、10号住居の北壁を切り込んでおり、10→11である。




1層：撹乱層。A軽石を多量に含む暗褐色土。
2層：ロームブロックをまばらに含む黒褐色土層。
3層：赤褐色土層。



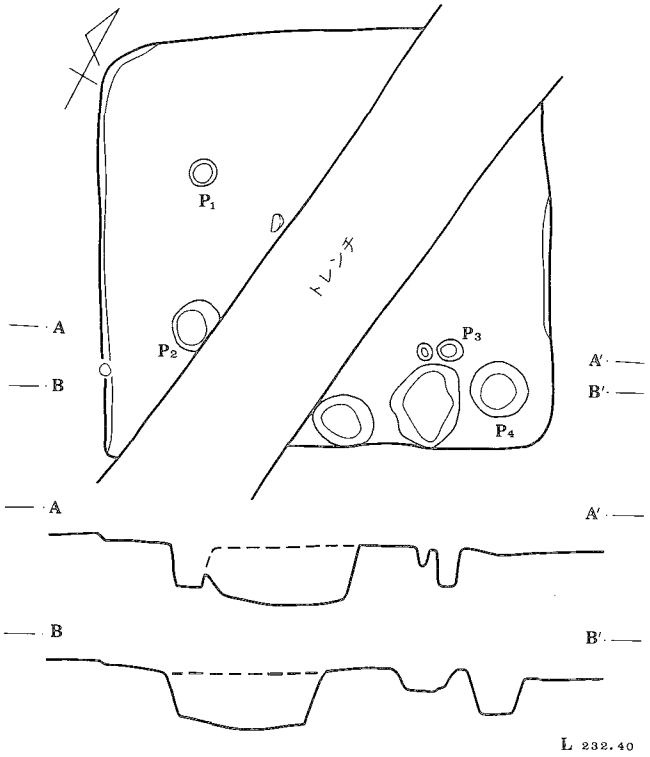

1層：黒褐色土層。
2層：天井崩落層で黄褐色粘質土である。
3層：焼土ブロックを含む茶褐色土層。

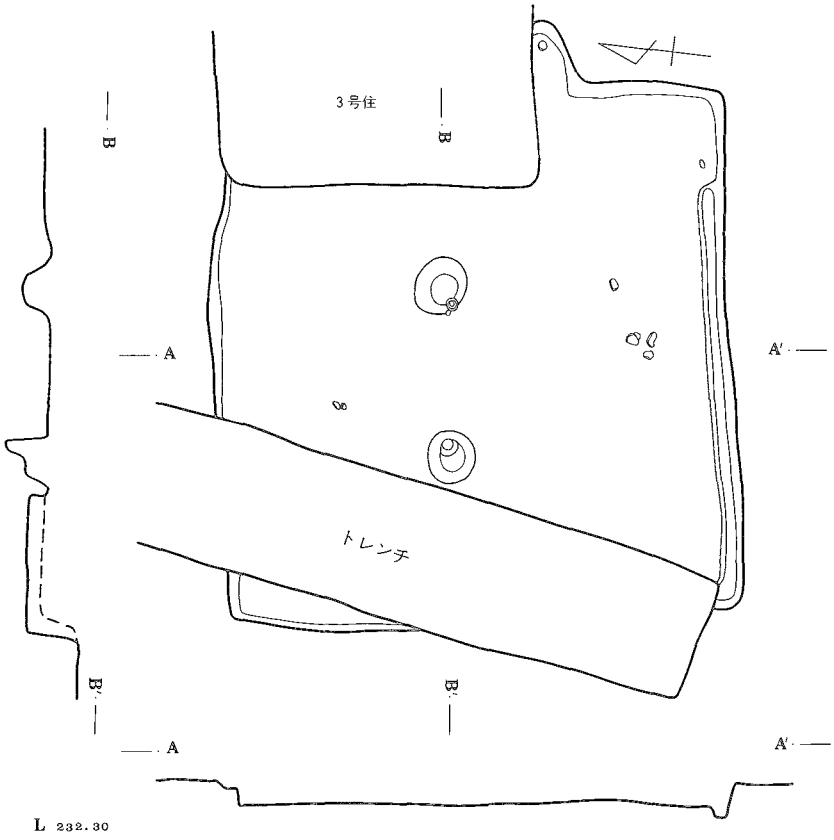
## B－13号住居跡

4.4m×4.8mで、やや東西に長い、正方形に近い平面形を呈す。試掘用トレンチにより住居中央が斜めに切られている。残存状態は悪く、西壁で10cm弱、他はごくわずかの凹みである。掘り下げた面は地山であるローム層で、全体的に凸凹が激しく、掘り方であろう。主柱は4本と思われ、$P_1$から$P_3$で残りはトレンチ内である。$P_1$、$P_3$は径30cm弱で$P_1$の深さ40cm、$P_3$42cm、$P_2$は径50cm強と他より大きいが、深さ45cmと$P_1$、$P_3$に近い。位置、深さより柱穴として対応するものとした。

カマドはその痕跡を留めていないが、北壁か東壁の可能性が強い。南東コーナーの$P_4$を貯蔵穴ととらえ、それとの位置関係より東カマドと推定する。尚、北東コーナーのピット（貯蔵穴となりうる）の有無が不明なので、北カマドを全く否定することは出来ない。他のピットは、住居に伴うものと思われるが、性格は不明である。

遺物は少なく、覆土より須恵埦片や羽釜の胴部らしき破片が、数個又、住居中央付近の浅いピット床面に貼りつくように石が1個出土している。





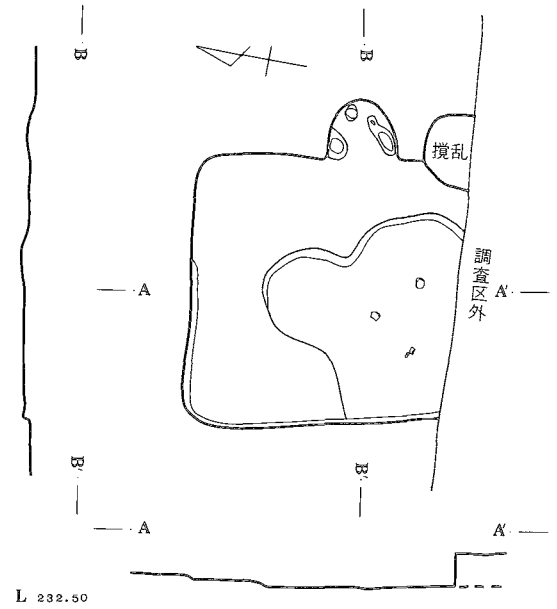

### B－12号住居跡

南北5.5m、東西は残存部からの推定で5.8m程と思われる。東西に長い長方形で、東壁南寄りにカマドをもつ。重複する3号住居は、12号住居発掘途中で確認したが、12号住居のカマド北半分が明確でなく、出土遺物が総体的に12号住居の方が古い様相を示すと思われることから、一応、12→3の新旧関係でとらえた。

住居中央、東西1.3mの間隔でピットが検出された。西ピットは径50cmで、深さ20cm、ピット内東側は深さ40cmと段差がある。東ピットは径60cm内外の楕円形で深さ30cm、擂鉢状の断面を呈す。位置的に2本主柱の柱穴の可能性があるが、柱穴にしては浅すぎることや、西ピットの掘られ方等から、断定は出来ない。

住居の南壁は周溝が検出されているが、これは西壁にも多少伴うようである。しかし、試掘用のトレンチに切られており、範囲は不明である。又、南東コーナーの方形の凹みは掘り過ぎた。

遺物は多量に出土した。カマド内より須恵埦、住居覆土中より須恵埦、坏、及び土師カメ片が大半を占めている。

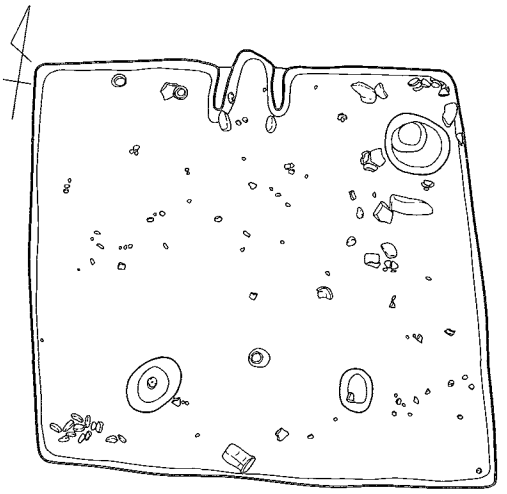


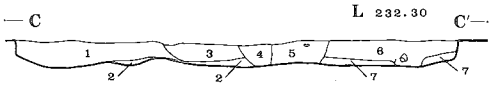

### B－16号住居跡

東西2.9m、南壁は調査区域外で不明。東壁にカマドをもつ。東壁は残りが悪く、かすかに掘り込みが見られる程度である。カマドは燃焼部が大きく壁外へ張り出しており、左右両端には石が置かれていたと思われる凹みがある。住居廃棄時に抜いたものであろうか。又、それよりやや小さな凹みが、残存部先端付近にある。

柱穴、貯蔵穴と見られるピット類は全く検出されていない。カマド右手の壁を切っているピットは後世のものである。

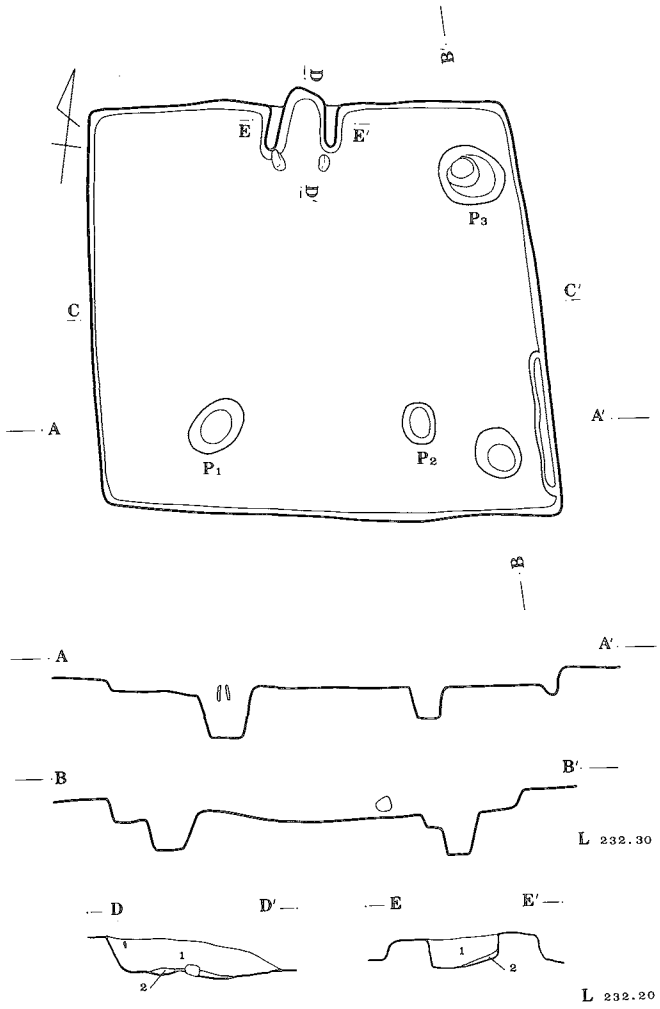
遺物は覆土より須恵坏、長頸壺、土師甕の小片が出土している。






1層：軽石微粒子及びロームブロックをまばらに含む黒色土層でよくしまっている。
2層：基本的には1層と同じでロームブロックが多い。
3層：基本的には1層と同じで粘性のあるロームブロックがまばら状に含まれる。
4層：攪乱層でローム主体層。
5層：ローム及び焼土の混在層。
6層：軽石粒子を多量に含む黒色層でしまりよし。
7層：ローム主体層で湿気を帯び、しまりはない。

B－14号住居跡床面




1層：ローム及び焼土の混在層。
2層：灰層。

B－14号住居跡掘り方

## B－14号住居跡

4.3m×4.5m平均で、やや東西に長いが正方形に近く、南東コーナーは張り出し気味。南壁は4.9mを測る。各コーナーは直角に近く、隅丸ではない。

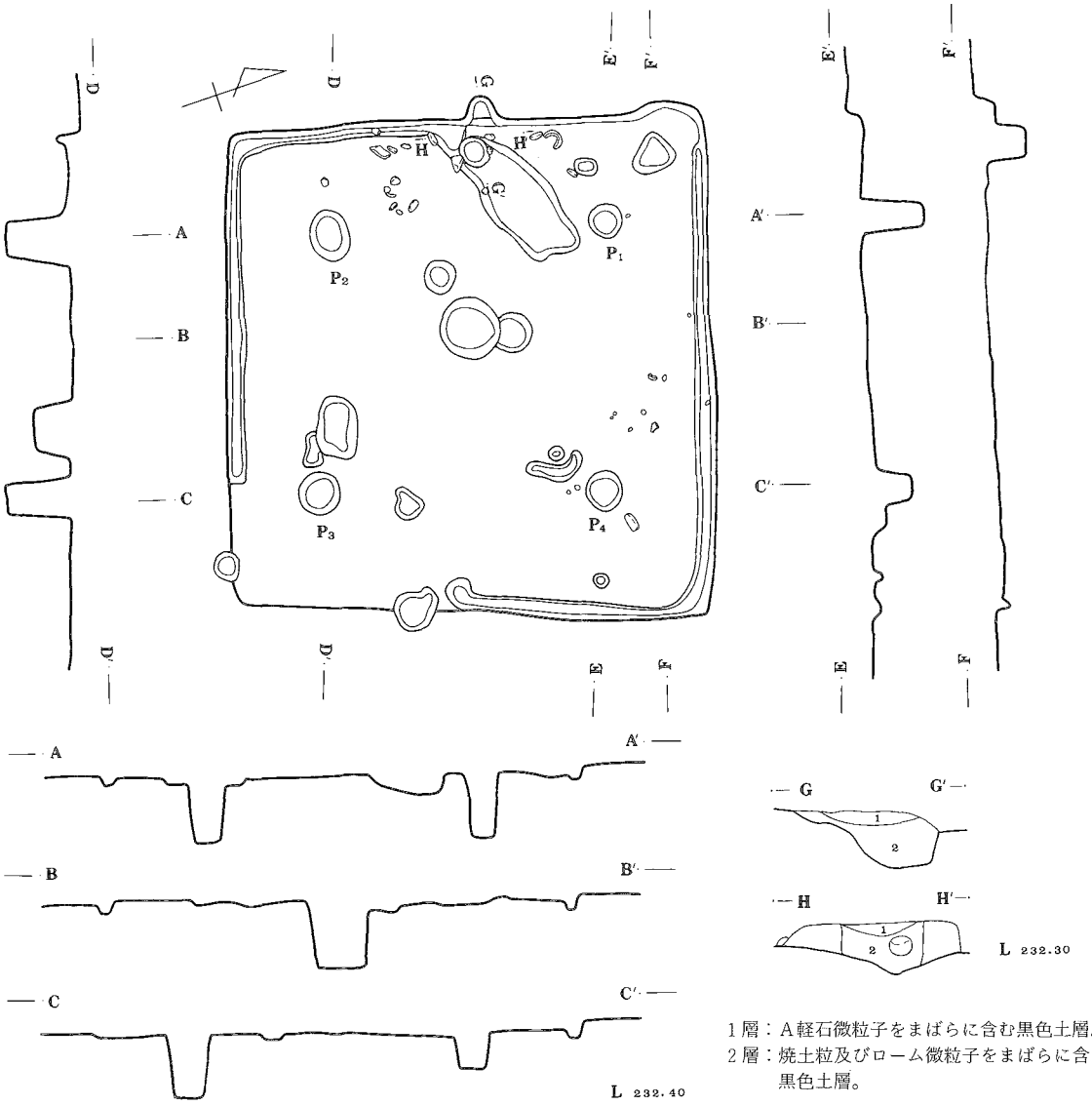
カマドは北壁中央に造られている。燃焼部は壁内にあり、袖部の芯は地山を掘り残し、焚口には左右に自然石を据えてある。壁より焚口までは約60cmを測る。中央から右手にかけて黒色混じりの灰層が、火床直上に薄く積もり、覆土のほとんどは焼けたロームであった。

柱穴と断定し得るピットは無いが、$P_1$と$P_2$がその可能性がある。$P_1$は径65cm、50cmの楕円形で深さ50cm、$P_2$は径45cm、30cmで深さは35cmである。双方共コーナー対角線上よりやや南側に寄り、位置的に対応しているが、本住居が4本主柱だとすると、この2個のピットに対応するものが無く、4本主柱とは考えにくい。

貯蔵穴は北東コーナーやや内側で、南側には中位に段差をもつ。深さ45cm、径70cmを測る。

遺物は大量に出土した。床面出土のものは、カマド袖左手より蓋がつくタイプの須恵坏が60cm離れて2個、北東コーナー際より土師坏、甕、南壁際中央より土師甕が、つぶれた状態で出土、又、南西コーナーより、こも石状の礫が14個、南壁に貼り付く形で1個、西壁際に1個計16個が出土した。覆土遺物は土師甕、坏、須恵甕、坏等多い。

重複する143号住居は14号住居を掘っている段階で検出された。伴出土器は143と14のものが入り混じっている。住居形態より14→143の可能性が高い。




## B－15号住居跡

5.3m×5.3mの正方形を呈す。南東コーナーは推定ラインである。残存するコーナーは直角に近く、北西コーナーのみ西へ少々張り出している。

本住居は例外的に西壁カマドである。燃焼部は壁内にあり、壁外にはわずかに細く張り出す程度である。燃焼部はピット状に20cm程なだらかに掘り凹められており、覆土のほとんどは焼土粒及び、ローム粒子を多く含む黒色土であった。袖部は確認出来ないが、左側端部にあたる位置に自然石が立った状態で置かれ、痕跡を残す。

柱穴は$P_1$～$P_4$が検出された。径は40cm～50cmで、$P_1$は36cmとやや小さい。深さは$P_1$が68cm、$P_2$が65cm、$P_3$が70cm、$P_4$が30cmであり、全てコーナーの対角線上に位置している。

貯蔵穴はカマドの右手、北西コーナー際にある。落ち込みの周りはわずかに床面よりも低く、肩口より急に落ちる。少々不整形であり西側が突出する楕円形を呈す。深さは35cmを測る。

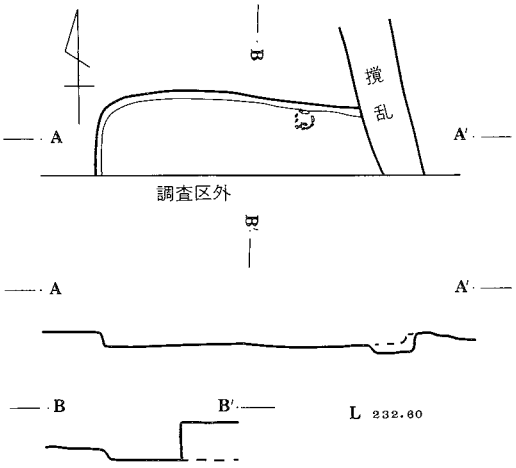
周溝は南東コーナーと北西コーナーの西壁を除いて検出された。幅は15cm～20cm、深さは10cm弱で、南壁は周溝の外側を壁のラインとしてとらえた。

他に、ピットが数個検出されたが、いずれも明確な性格づけは出来ない。中央付近の大きなピット（径65cm、深さ70cm）は所謂床下土坑にあたるかと思われる。

遺物は床面出土のものが比較的多い。カマド右、西壁際より土師甕口縁、住居南西部より土師坏が北部付近より土師甕、須恵坏片等が出土している。又、カマド左手床面を中心にこも石状の石が出土しており、計12個であった。

## B－17号住居跡

南は区域外、東は後世の溝状遺構に切り込まれ全形は不明だが、北壁は３ｍ内外の小型方形と思われる。残存する壁高も10cm弱と浅い。北壁際床面よりＳ字状口縁の土師甕口縁片、覆土より外面ミガキの土師甕片が出土している。ピット、カマド（炉）等の遺構は検出されない。



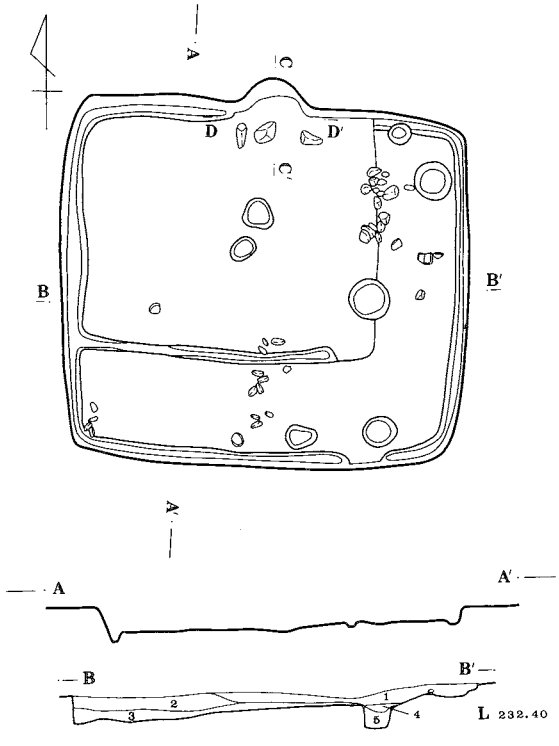

## B－18号住居跡

4.4m×3.8mで、東西が長い長方形を呈する。カマドは北壁に造られている。掘り込みは住居床面よりわずかに低く、その上に焼土混じりのロームを貼り、床面とほぼ同じレベルを火床としている。燃焼部は壁ライン上か、やや内側にある。袖部は残っていないが両側の石がその端部に据えられたものであろう。左側は板状、右側はカマド及び住居の面が欠損する自然石である。中央の石は板状で、火を受けてボロボロになっている。

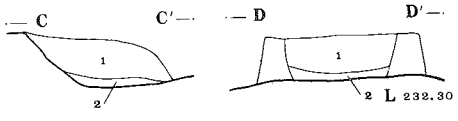
壁際は全体に周溝が確認された。幅は10cm～20cm、深さは床面より６cm～７cm程である。又、同一床面上に掘られた周溝は、北西コーナーを基準として、外側のプランと相似形を示しており、拡張住居と思われる。

ピットは住居内に数個検出されているが、性格は明確ではない。北西コーナー付近一帯は他の床面に比べてやや低く焚口はこのレベルである。欠損した板状の石の他は遺物がなく、貼床面を掘ってしまったのかもしれない。性格は不明である。

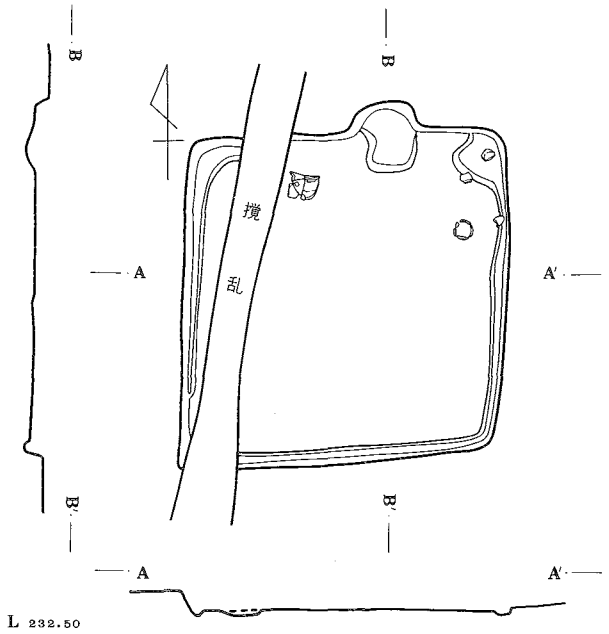
遺物は東壁、南壁中央付近の床面より土師坏が出土した。覆土からは土師甕片がわずかに出土したが、土器類は少量である。こも石状の石が多く、南西コーナー、南壁中央付近床面より、まとまって出土した。又、拳大の礫及び、ひと周り大きな欠損した自然石が、北東コーナーやや内側より床面やや上のレベルで出土した。




1層：A軽石粒子を多量に含む暗褐色土層。
2層：A軽石粒子をまばらに含む暗褐色土層。
3層：ロームブロックをまばらに含む暗褐色土層。
4層：ロームブロックをまばらに含む黒色土層。
5層：ローム主体の暗灰色土層。




1層：よくしまった黒灰色土層で天部にローム粒及び焼土粒が存在する。
2層：貼床層。焼土及びロームからなる。



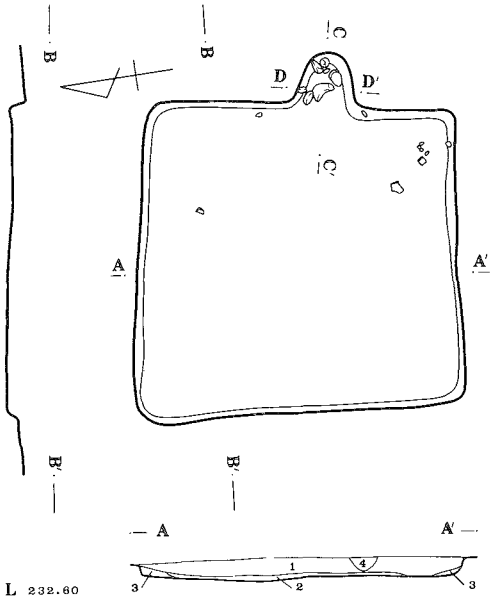

## B－19号住居跡

3.5m×3.5mで正方形に近いが、わずかに歪んだ平面形である。各コーナーは角ばっており、西壁と並行して後世の溝状遺構が掘り込まれ、床面を浅く切っている。

カマドは北壁東寄りで、壁外への掘り込みは幅70cm、長さ30cmと半球状に残る。燃焼部は壁内にその中心をもつと思われ、床面より10cm程低く、浅い擂鉢状を呈す。中央の浅く小さいピットは支脚痕であろうか。

明確なピットは検出されないが、北東コーナー際にはピット状の浅い落ち込みがあり、遺物が付近に集中していることから、貯蔵穴的な性格をもつものであろう。又、壁内には周溝が全体に掘られており、平均して幅15cm、深さ5～6cmを測る。

遺物はカマド左手前床面より、つぶれた状態の土師甕、東壁北寄り床面より、逆さになった土師甕口縁片、北東コーナー際覆土より、土師坏、須恵坏が出土している。




## B－20号住居跡

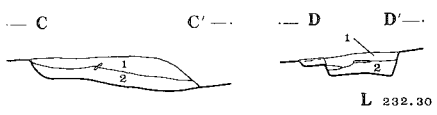
3.3m×3.3m、北西コーナーが少々張り出すが、ほぼ正方形を呈し、コーナーは直角に近い。東壁中央やや東にカマドが造られる。燃焼部は壁外にあり、楕円状に60cm張り出している。火床は床面より、なだらかに浅く掘り込まれた地山で、赤灰色によく焼け、同じくよく焼けた板状石が崩れた状態で数片出土している。

住居内にピットは検出されず、柱穴、貯蔵穴はない。貯蔵穴にあたる南東コーナー際に遺物片が集中しているのは興味深い。

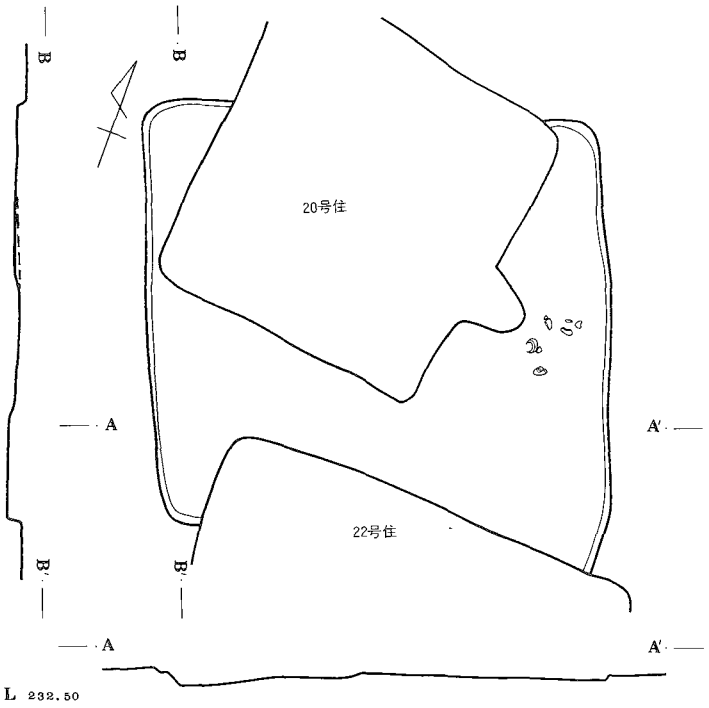
遺物は南東コーナー際覆土より、土師甕片、カマド内及び、左手床面にも土師甕片が出土している。

なお、本住居と重複する21号住居との関係は、21→20であることは明らかである。

1層：軽石微粒子をまばらに含む黒色土層でしまりよし。
2層：1層にローム粒子が含まれる。
3層：壁崩落層でローム層である。
4層：攪乱層。軽石主体の黒色土層。




1層：天井崩落層。粘性ローム及び黒色土の混在。
2層：焼土、灰を含む黒色土層でしまりなくパラつく。



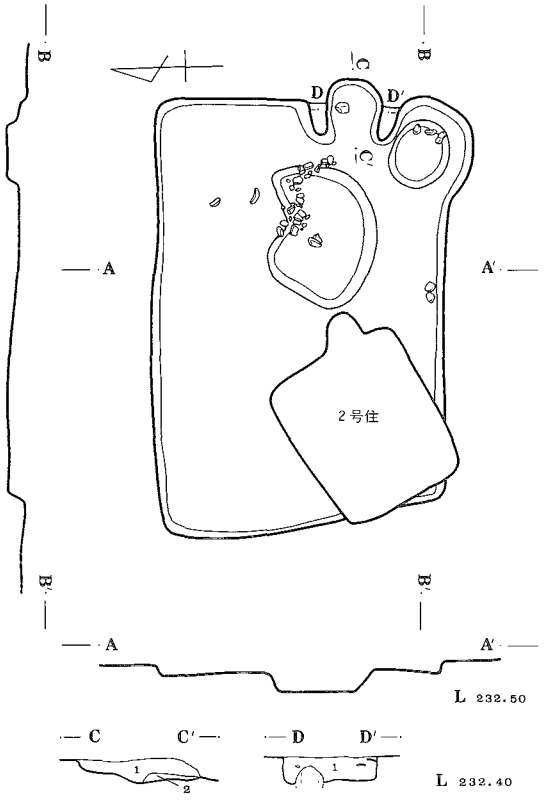

## B－21号住居跡

東西5.0m、南北は中心で4.6m内外と思われる。南東コーナーは外に張り出し、全体に不整形な方形の住居。北壁と南壁はそれぞれ20号住居と22号住居が重複するが、両住居共21号住居床面まで掘り込みが達しており、残存状態は悪い。

カマドの痕跡は全く無い。残存する東側床面上の遺物より炉の存在が想定出来るが、重複のせいか確認出来ない。

柱穴、貯蔵穴等、住居に伴うピットは検出されない。写真にはそれらしき痕跡があるが、これは柱穴と誤認したものであることを記しておく。

遺物は東側床面上に集中し、土師台付甕片、高坏片等が出土した。




1層：黒色及び焼土の混在層。
2層：焼土層。

## B－22号住居跡

南北3.1m、東西は北壁4.5m、南壁で4.0mを測る、不整形な長方形の住居。南東コーナーは貯蔵穴のプランに沿って円形に張り出している。

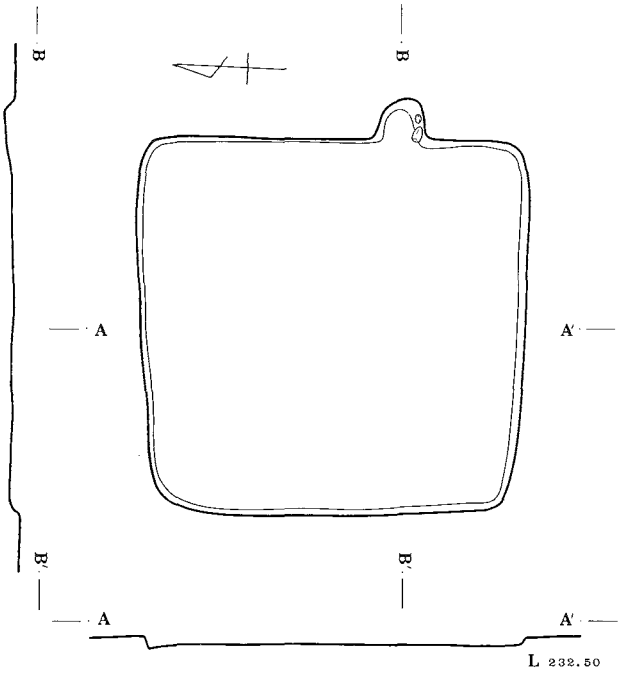
カマドは東壁南寄りに造られる。燃焼部は壁延長線上にその中心をもち、火床の地山は赤灰色によく焼けている。袖部は地山を掘り残しており、残存状態は良い。火床面には角ばった自然石があり、支脚の可能性が考えられる。

貯蔵穴がカマド右手の南東コーナーより検出された。径60cmで深さは中心で10cmを測る。住居の壁は掘り込みより15cm外側から立ち上がっている。

カマド手前からは床面であるロームの地山を掘り込む形で床下土坑を確認した。東西径1.5mで、不整な楕円形を呈し、深さは中心で20cmを測る。

遺物はカマド手前と貯蔵穴付近に集中する。カマド手前からは床面より10cm上覆土中より土師甕片がまとまっており、貯蔵穴上の覆土から、やはり土師甕及び焼けた板状石片が、南壁際より床面上10cmの位置で底部回転ヘラ切りの須恵坏が出土した。

なお、南西コーナーに重複する2号住居跡は22号調査中に確認されたものだが、カマドの残存状態より22号→2号の新旧関係と判断した。

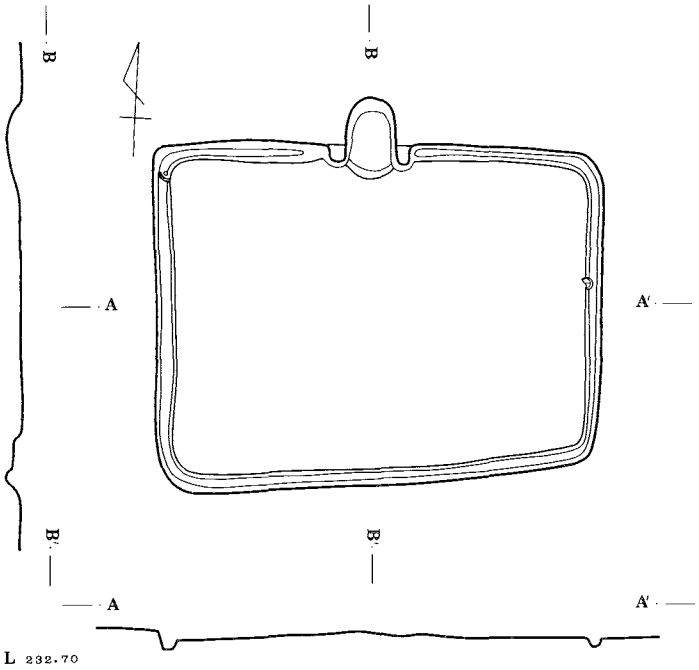



### B－23号住居跡

4.0m×4.0mの正方形で、西壁は3.6mとやや狭くなっている。カマドは東壁南寄りに造られ、半楕円状に壁外へ掘り込まれている。火床は地山で、壁外部分はよく焼けて赤褐色を呈し、内側は焼土粒が散っている。右壁に沿って板状石がよく焼けた状態で検出された。ピット類は全く検出されていない。

遺物は全て覆土中からである。体部下位回転ヘラケズリの灰釉椀、須恵坏、土師質土器坏、土釜など全て小片で、円筒埴輪片も出土している。

本住居跡と重複する24号住居跡との関係であるが、平面精査時の所見である24→23としておく。ただ、両住居跡の床面は同一レベルにあり、23号が24号のカマドを切っていたとしてもその痕跡くらいは残る可能性があると思われるが確認出来なかったこと、又、23号住居跡と重複しない部分からの出土遺物（24号に伴うもの）は覆土中わずか3片と乏しいこと等から、24→23としながらもやや不安の残るところである。

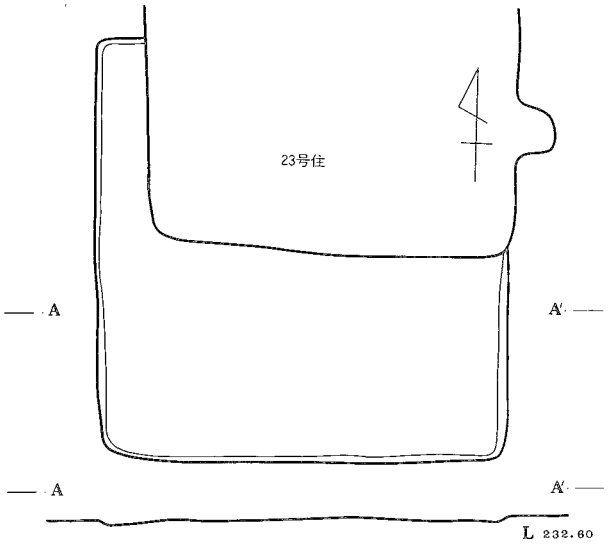



### B－25号住居跡

東西4.8m、南北は西壁3.6m、東壁で3.2mを測る、台形状の長方形住居でカマドを北壁中央にもつ。袖部は地山であるロームを掘り残し、壁内外の中央に燃焼部の中心がある。

壁に沿って全体に周溝が検出された。幅は15cmから20cm、深さは平均10cmを測る。柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

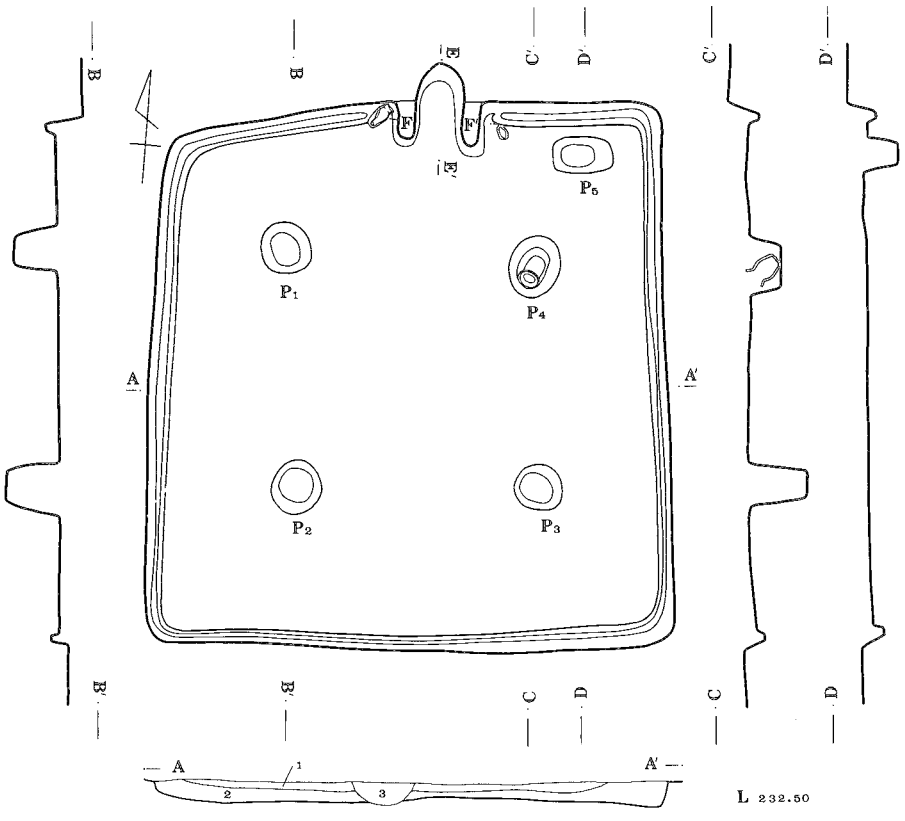
遺物は北西コーナー周溝上より土師甕片、東壁際の周溝やや内側より土師坏片がそれぞれ床面のレベルで出土した。又、覆土からは土師甕、須恵坏等の破片が出土した。



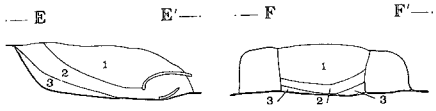

B－24号住居跡

4.4m×4.4mの正方形を呈す。北東コーナーから北壁の大半は23号住居跡との重複部分であり、新旧関係については23号住居跡の項で述べた通り。ピットは全く検出されず、カマドも確認出来なかった。

遺物は覆土からのもので、土師甕片、灰釉皿小片の合わせて3片を検出した。




1層：黒色土層。
2層：ロームブロックを含む黒褐色土層。
3層：攪乱層。




B－26号カマドセクション
1層：黒褐色土層。
2層：天井崩落層で白色の粘質土層である。
3層：黒色土層。

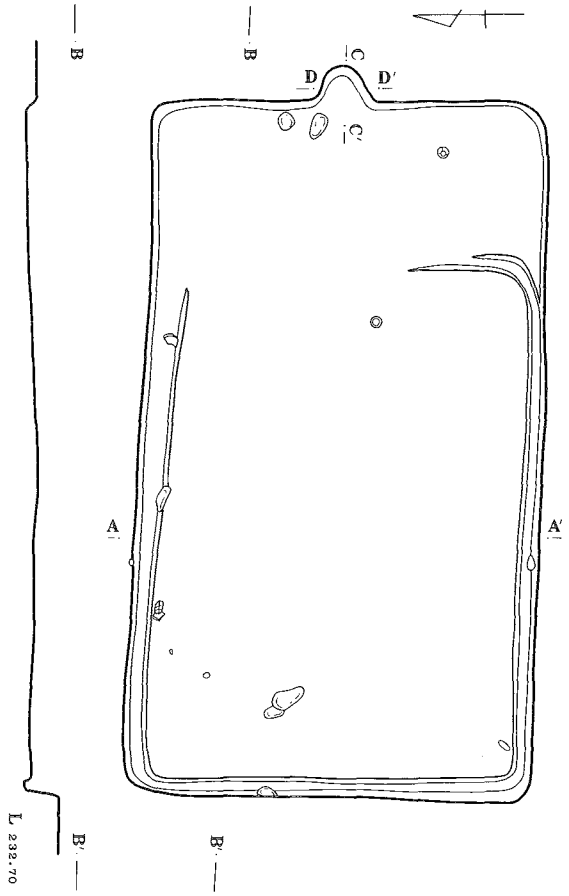
B－26号住居跡

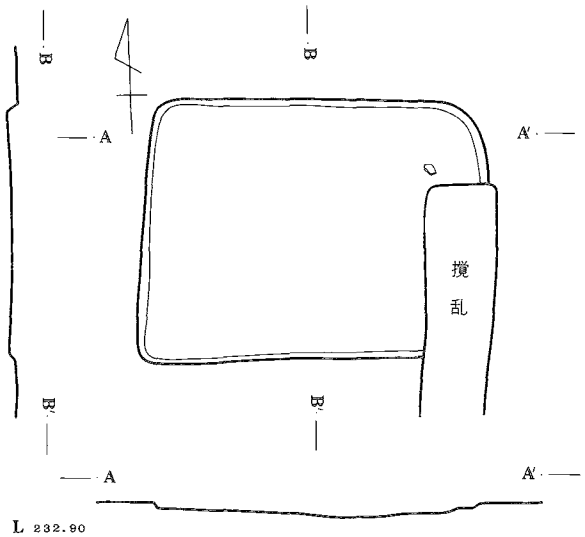
南北5.8m、東西5.5mを測り、南側が少々広くなっている。四隅は比較的直角に近く、カマドは北壁中央に造られる。壁外に40cm張り出し、内側は粘質土で構成された袖部が40cm程残存する。燃焼部の中心は壁内にあり、壁外は地山であるロームがカマド壁をなし、壁内はカマド付近に貼られた黒色土が火床面となっている。

柱穴が各コーナーの対角線上に確認された。上場の径は$P_1$～$P_4$共50cm内外で、深さは$P_1$46cm、$P_2$55cm、$P_3$60cm、$P_4$が35cmと浅く、$P_4$からは土師甕が完形で壁に倒れかかるような形で検出された。又、貯蔵穴は北東コーナーに掘られており、上場で60cm×38cmを測る隅丸長方形、深さは36cmである。壁内全周には周溝が巡り、幅は平均15cm、深さ10cm弱を測る。南西コーナー付近はやや狭くなっている。

遺物は土師器が9割を占める。カマド左袖部外側の壁際より土師甕、右袖部脇床面より土師坏が、又、カマド焚口

床面には倒れた土師甕、カマド内からは他に土師大型鉢、甕片が出土し、柱穴$P_3$からもやはり土師甕がほぼ完形で出土している。覆土遺物は主に土師坏、甕片で、回転ヘラ切り底の須恵坏片と須恵蓋片の2個が須恵器である。



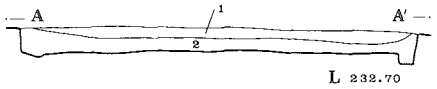




## B－27号住居跡

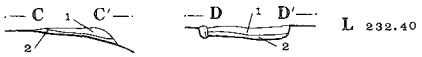
7.3m×4.3mを測る。東西に長い大型長方形住居。カマドは東壁中央で、両壁には壁に沿って据えた状態で焼けた板状石がわずかに残っていた。袖部の痕跡は無いが、左袖にあたる位置の自然石がそれに関する遺物かもしれない。火を受けた形跡は無い。

柱穴、貯蔵穴は検出されなかったが北壁及び南壁から西壁にかけて周溝が掘られている。幅15cm、深さ10cmで、東壁より1.6m辺りで内側へ巡り込む。このプランが拡張前、外側が拡張後のプランとも思われるが、「拡張前」の住居に伴うと思われるカマドの痕跡は全く検出されていない。

遺物はカマド内より須恵埦、住居床面南東部及び中央より須恵坏、埦が、又覆土中から土師甕、須恵坏片が大量に出土した。石類は南西コーナー床面にこも石状の石、西壁際からそれより大きなこも石状の石が、又、カマド左手と住居西側床面より、扁平な自然石が検出された。




1層：軽石粒子を含む黒褐色土層。
2層：黒褐色土層。

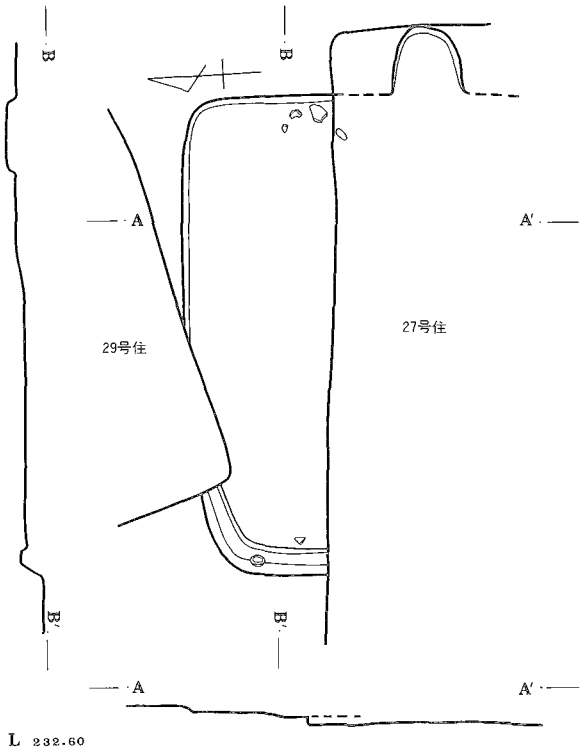



1層：焼土ブロックを含む褐色土層。
2層：灰層。

## B－31号住居跡

2.7m×3.6mと東西に長い小型長方形。東壁は3分の2程攪乱を受けている。カマドが検出されないのはこの攪乱に壊されたためとも思われるが、その痕跡は全くなく、明確ではない。住居の掘り込みは10cm弱平均と浅い残りで貼床はなされていない。住居に伴うピットは検出されなかった。

遺物は覆土より出土し、土師坏、鉢、甕の破片等である。




### B－28号住居跡

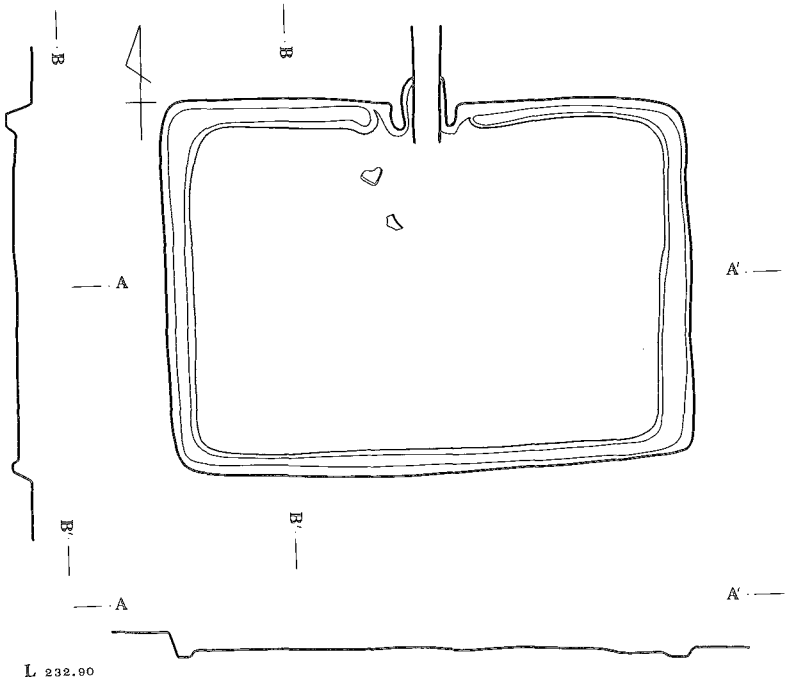
住居北側で東西5.0mを測る。南半は27号との重複で不明。27号住居跡カマドの左手前に半円状の浅い掘り込みが確認され、これを28号に伴うカマドとした。これは、28号東壁ライン上にあること、また、東壁カマドが中央より南寄りに造られる本遺跡の傾向から、もし27号の内側プランが拡張前の住居だとしても、このピットがそれに伴うとは位置的にみて考えにくいとの考えからである。尚、焼土等、火の痕跡は確認出来なかった。

柱穴、貯蔵穴に相当するピットは検出されていない。北西コーナーに一部周溝がみられた。

床面に関しては明確とは言い難い。北西コーナー部分は周溝脇の内側が床面と思われるが、住居東側のレベルは一段低く、ここよりカマドに伴うと思われる板状石が出土している。これを床面とすると両端で16cmの高低差が出来てしまうが、東側が低くなっていたのだろうか。なお、大部分は黒色土にローム粒混じりの貼床であり、東側との境は掘り方の誤りで段がついてしまった事を記しておく。

29号との新旧関係であるが、主柱穴の存在やカマド燃焼部がさほど壁外に出ない事など、29号の方が古い要素をもっており、29→28と考えてよいだろう。

遺物は、北西コーナー周溝上より黒色の土師坏、やや内側に土師甑片、東壁際覆土より土師甕片が出土している。

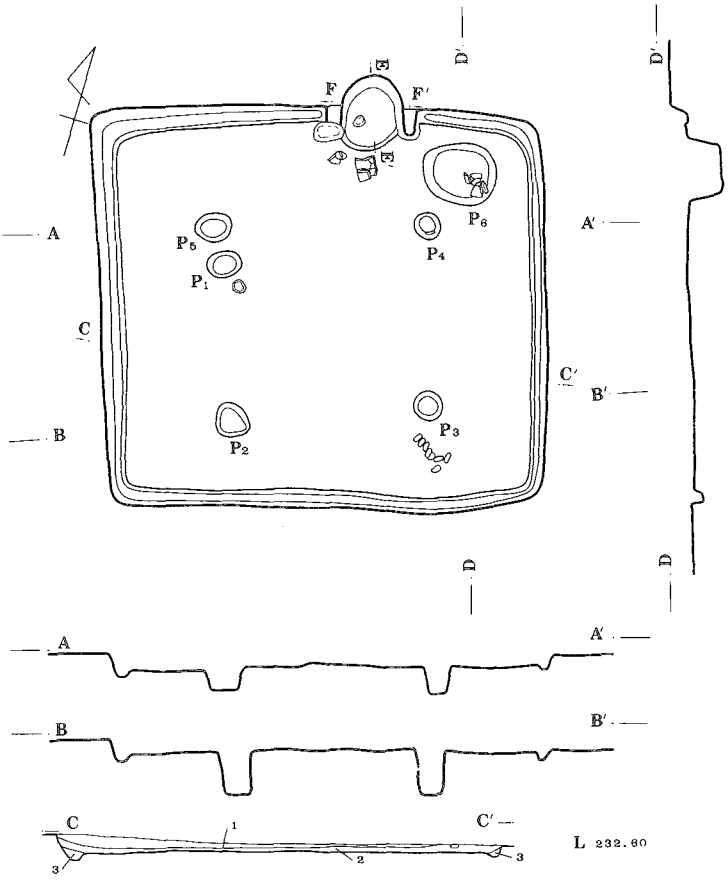



### B－30号住居跡

5.6m×3.9mで長方形を呈する。北壁中央に造られたカマドは短い袖部があったと思われ、両側に黄灰色の粘質土がその痕跡を留める。燃焼部分は上半が攪乱を受けるが火床は残っており、中央に径20cm弱の円形ピットが存在する。支脚痕だろうか。

壁全体には周溝が巡っている。幅20～30cm、深さは10cm弱を測る。柱穴、貯蔵穴等のピットは検出されなかった。

遺物はカマド手前床面やや上で土師甕、覆土より土師甕片が多く出土し、他に土師坏片、須恵坏等が出土している。



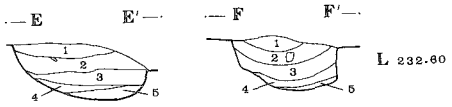

1層：軽石及びローム微粒子を多量に含む黒色土層。
2層：ローム粒をまばらに含む黒色土層。
3層：ローム及び褐色土の混在でしまりなし。

## B—29号住居跡

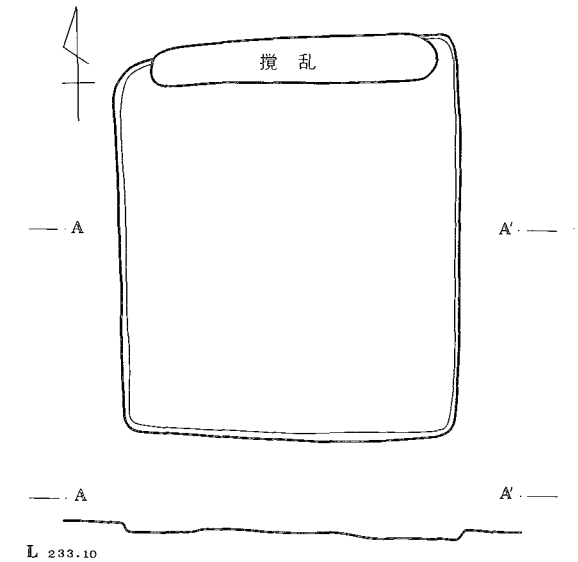
4.7m×4.2mでわずかに東西が長い。北壁東寄りにカマドをもつ。右袖部は壁より30cm程ロームを掘り残した部分が検出されたが左袖部はその痕跡がなく、手前の自然石がそれに類するものだろうか。火床は床面より10cm低く、灰混じりのロームを貼って構成される。中央やや左より支脚用の自然石が出土した。

柱穴と思われるピットは$P_1$～$P_5$である。深さは$P_1$40cm、$P_2$45cm、$P_3$45cm、$P_4$30cm、$P_5$20cmを測る。配置的には$P_2$から$P_5$が4本主柱の柱穴としての位置であるが、掘り込みの深さから$P_5$ではなくて$P_1$を4本主柱の柱穴の1つと考えたい。貯蔵穴は東西80cmの楕円形でカマド右の北東コーナーにあり、また周溝が全周にわたって検出された。

遺物はカマド手前床面、貯蔵穴覆土上位より土師甕、$P_1$脇床面より土師坏、覆土中より土師甕片、須恵塊片等が出土し、又、南側床面にはこも石状の礫が並ぶように8個まとまって出土しており、興味深い。



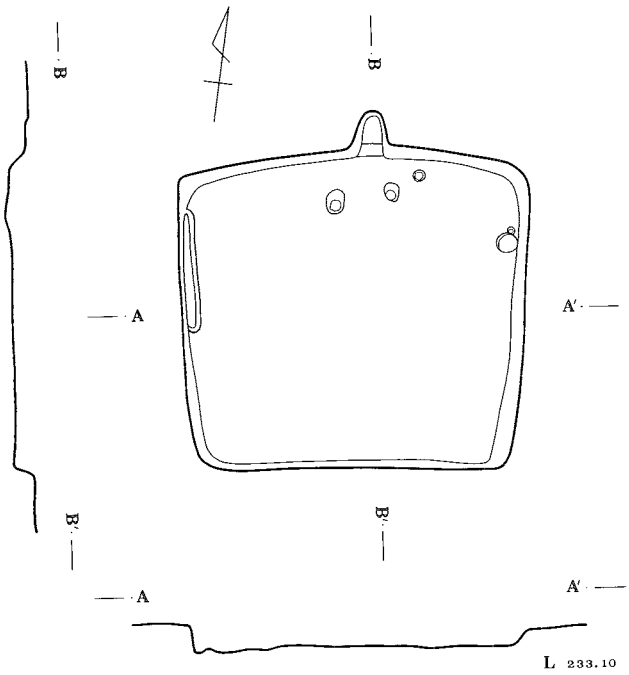

1層：粘性ロームを含む黒色土層。
2層：天井崩落層で焼土及び粘性ロームよりなる。
3層：焼土層。
4層：灰層。
5層：貼床層。ローム主体で灰が混じる。




## B—33号住居跡

3.7m×4.2mでやや南北に長い。北壁に沿って内側は攪乱を受けている。カマドの痕跡は全くなく、北壁の可能性が考えられる。柱穴、貯蔵穴は検出されない。床面は地山のロームを平坦に掘って使用している。

遺物は少ない。覆土より土師甕片、須恵塊片、甕片等が出土している。




B－32号住居跡

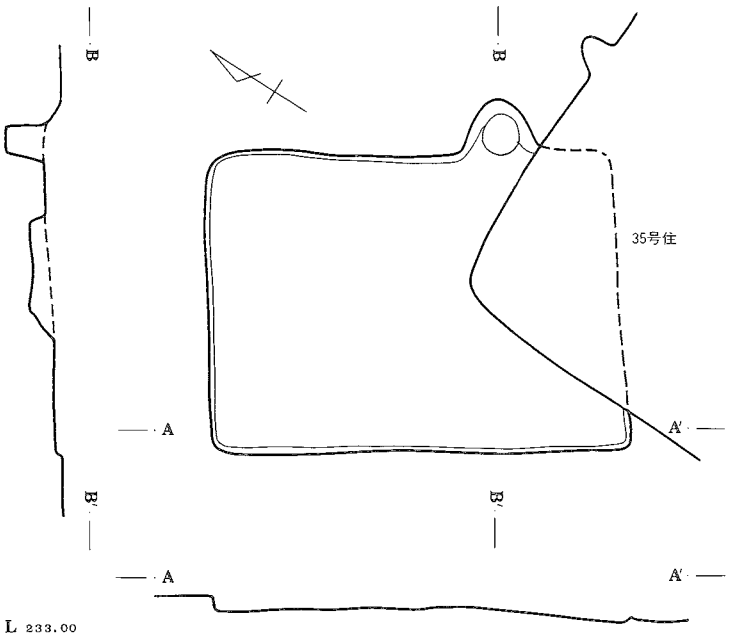
中心で3.4m×3.6mを測る。南側やや狭く、北壁中央は張り気味だが、全体に正方形に近い形状を呈す。

カマドは北壁中央にあり、燃焼部は壁内。僅かな細い突出部は煙道で、袖部は検出されなかった。カマド手前に並ぶピットは左側13cm、右側８cmの深さで底が楕円状を呈している。位置的に見て袖部端にあたり、焚口両脇に据えた石の痕ではないだろうか。

柱穴は検出されず、貯蔵穴については北東コーナーに浅い凹みがあるが、立ち上がりもはっきりせず、類するとのと思われる。

本住居は全体的にみて壁際が僅かに低く、又、床面北半が少々凸凹である。一つには掘り方のせいもあろうが床面は地山であり、明確な貼床は検出されなかった。西壁際は周溝が掘られるが、他にはない。

遺物はカマド右覆土より土師坏、東壁際床面やや上より須恵坏、土師甕、盤等が出土した。



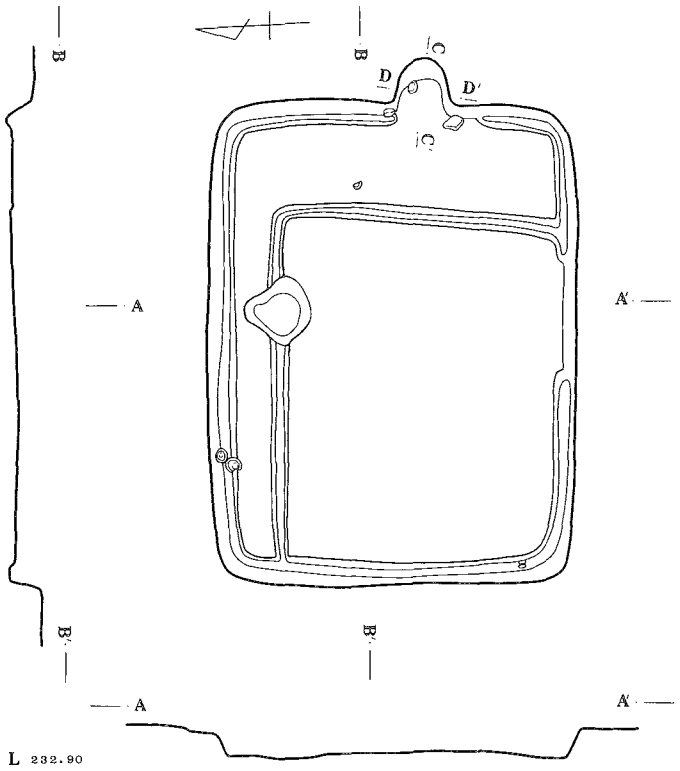

B－34号住居跡

4.5m×3.2mで長方形を呈し、東壁南寄りにカマドをもつ。袖部の痕跡はない。燃焼部は壁外にあり、中央のピットにより円形に壊されている。住居に伴うピットは検出されなかった。

床面は南側の一部が地山のロームで、他はローム粒混じりの黒色土を貼っている。

35号との新旧関係は伴出遺物から35→34と判断出来る。平面精査では34→35としたため、掘り込みの深い35号を先に調査し、結果的に34号の床面を掘ってしまった。

遺物は覆土より出ている。土師質塊、甕、坏等と須恵坏片、土師甕片、全体に少量である。

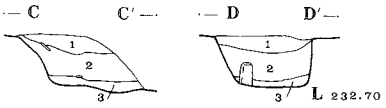



## B－35号住居跡

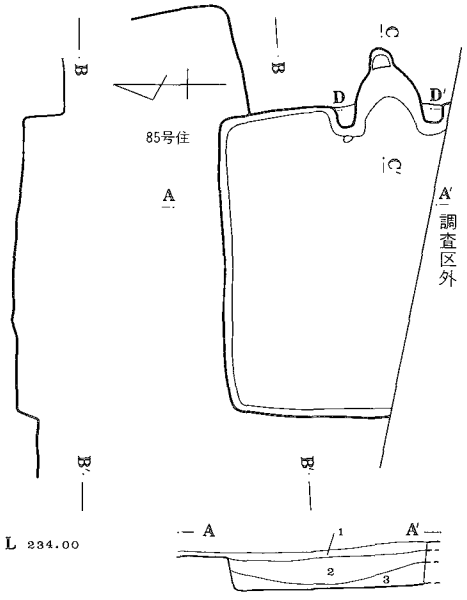
3.9m×5.1mの長方形住居で東壁中央にカマドをもつ。燃焼部は壁外にあり、火床である地山は赤灰色によく焼けている。焚口の両脇に板状の石が置かれ、左側は原位置を保っている。火床中位左側には石製支脚が立ったまま検出された。

壁際には周溝が掘られている。又、北壁より60cm、東壁より１m内側に外壁とほぼ相似形のプランで周溝が確認され、35号の拡張前のプランと判断した。北壁東寄りには燃焼部が壁内外の中心にあるカマドの痕跡があり、火床はよく焼けていた。内側、外側プラン共、床面は地山であるロームを平坦に掘った面を使用している。

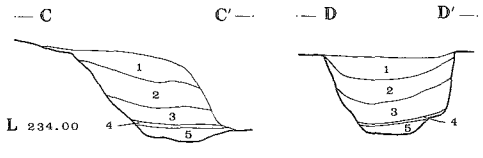
遺物は北壁際周溝上より土師質埦、坏、須恵埦、南西コーナー際より須恵高坏脚片、カマド内より土師甕、住居覆土より土師坏が出土した。




1層：黒褐色土層。
2層：天井崩落層。黄褐色粘質土で下面が焼けている。
3層：灰層。




1層：A軽石粒子を含む黒色土層。
2層：ローム微粒子をまばらに含む黒色土層。
3層：径２～５cmのロームブロックを含む黒色層。




## B－36号住居跡

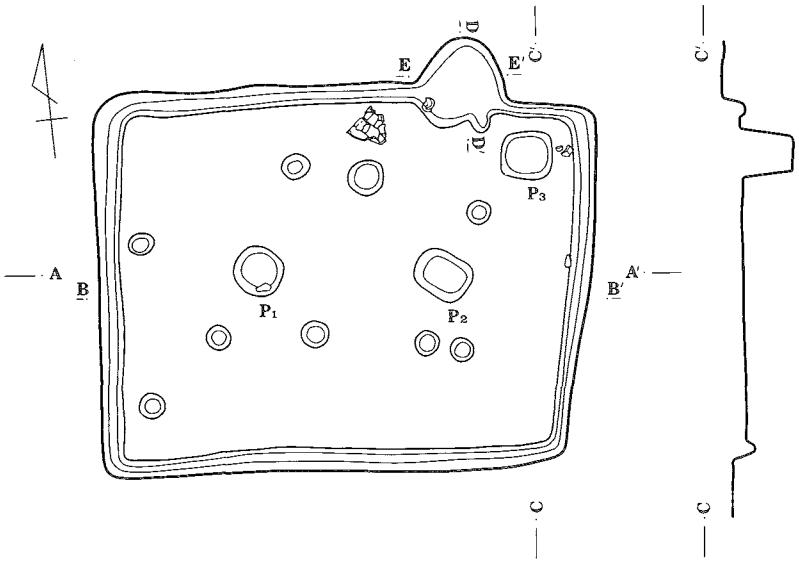
北壁3.0mで南側にかけて広がり気味だが、南半は区域外のため不明。重複する85号の南壁を切って掘り込んでおり、残存する深さは30cm～40cmと比較的良好。

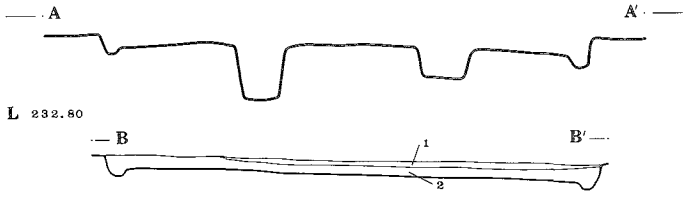
カマドは東壁で、住居の規模に比して大きなものと言える。住居床面より６cm程掘り下げた地山に粘質土と焼土の混土を貼り、床面同レベルに火床を形成している。火床直上には厚さ１cmの灰層が確認された。袖部は地山のロームを掘り残し、左袖内側には据えられた板状石の破片が検出された。

住居に伴うピットは検出されなかった。

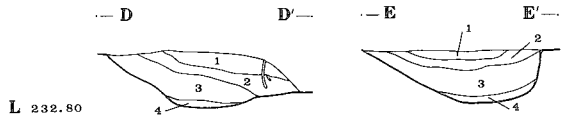
遺物は全て覆土からで、土師坏、甕片及び回転ヘラ切りの須恵坏片等が出土している。

1層：黒褐色土層。
2層：天井崩落主体層で褐色粘質土である。
3層：焼土ブロックを含む褐色粘質土。
4層：灰層。
5層：貼床層。焼土と黄褐色粘質土の混在。




1層：軽石微粒子を多量に含む茶褐色砂層。
2層：ローム粒子を多量に含む暗褐色砂層。




1層：軽石微粒子を含む褐色砂層。
2層：天井崩落層。暗赤褐色を呈し、焼土、黒色土及び粘質土の混在。
3層：黒色及び焼土の混在で僅かに灰も含む
4層：灰層でロームブロックが僅かに含まれる。

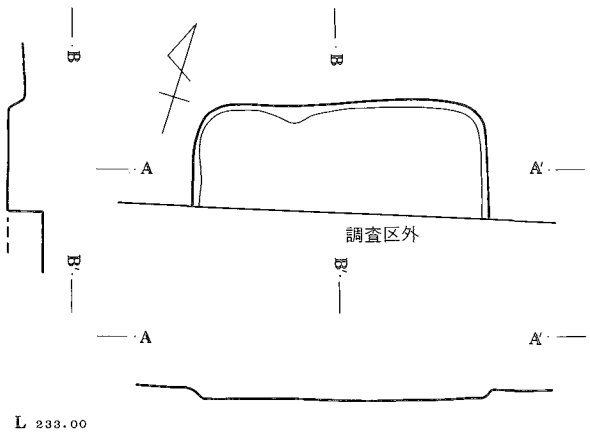
### B－37号住居跡

東西に長い長方形を呈し5.3m×4.0mを測る。カマドは北壁東寄りで燃焼部の中心は壁延長ライン上にある。火床は地山で住居床面よりなだらかに8cm程掘り下げ、直上5cmの厚さで灰層が確認された。壁外はやはりなだらかな斜面の壁で煙道へと続く。袖部の痕跡は検出されない。

住居内のピットは、$P_1$と$P_2$が主柱穴、$P_3$が貯蔵穴である。$P_1$は径50cm、深さ55cm、$P_2$は不整形な楕円形で東西径60cm、深さは30cmとやや浅い。$P_3$の貯蔵穴は四角状の楕円形で東西55cm、深さ50cmを測る。他の小ピットは性格不明である。

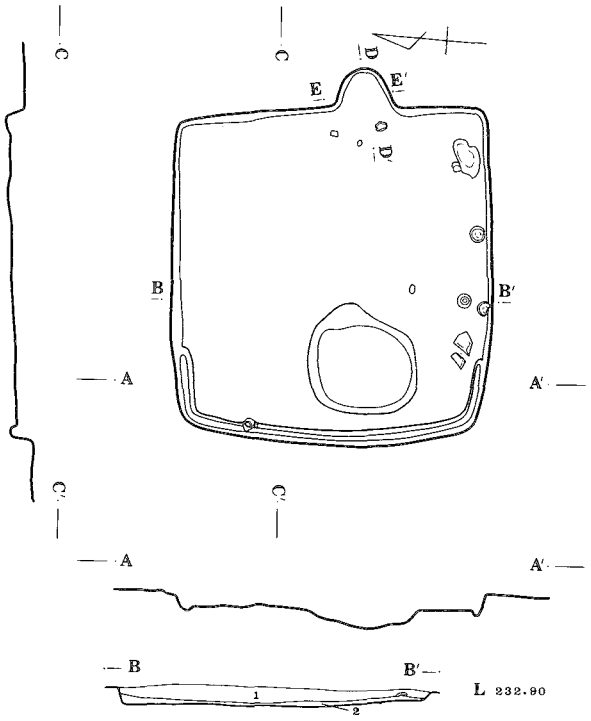
壁際全周には周溝が検出された。平均幅15cm、深さは10cm弱である。

遺物はカマド焚口左より土師坏、カマド内覆土より須恵坏、カマド手前床面より土師甕、覆土より須恵坏片、蓋片が、また剣形の石製模造品が出土した。

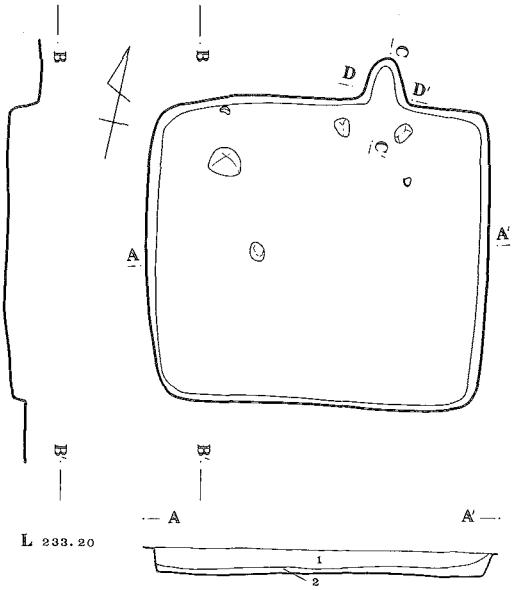



### B－38号住居跡

B区南端に位置し、大半は区域外のため形状不明。残存部は東西3.1mでロームへの掘り込みは壁際で10cmを残す。ピット類、カマド不明。遺物は覆土中より須恵坏、土師甕小片でごく僅かである。




1層：ロームブロックを多量に含むよくしまった暗褐色砂層で軽石微粒子も僅かに含まれる。
2層：しまりのない暗褐色砂層。




1層：ロームブロックをまばらに含む黒色土層。
2層：ローム粒を多量に含む黒色土層で1層よりもしまりがない。

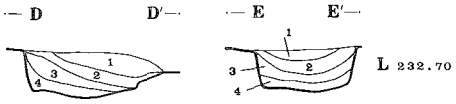
1層：天井崩落層と住居内覆土が混在し、暗褐色を呈す。
2層：1層に焼土を含む。

## B—39号住居跡

3.5m×3.4mのほぼ正方形を呈し、西壁は僅かに張り気味。カマドは東壁南寄りで先端の丸い三角状に壁外へ掘り込まれている。袖部の痕跡はなく、左壁には板状石が貼り付く。火床は壁やや外で、床面より12cm低くなだらかに掘られた地山上にロームと灰の混土を5cm貼って火床としている。この貼層は急に立ち上がる壁外部(残存する先端部)の上位にまで及ぶが先端は壁が崩れたものかもしれない。明確な層理は確認出来なかった。

床面は地山であるロームで、西壁には周溝が残る。柱穴貯蔵穴はなく、住居西側から径1mを測る床下土坑が検出された。深さは中心で約20cmであった。

遺物はカマド手前床面より須恵埦、南壁やや内側床面より須恵埦、又、南壁際床面やや上より須恵埦が、西壁際覆土より灰釉皿が出土している。他に南東コーナー、南壁際床面に板状石が確認された。



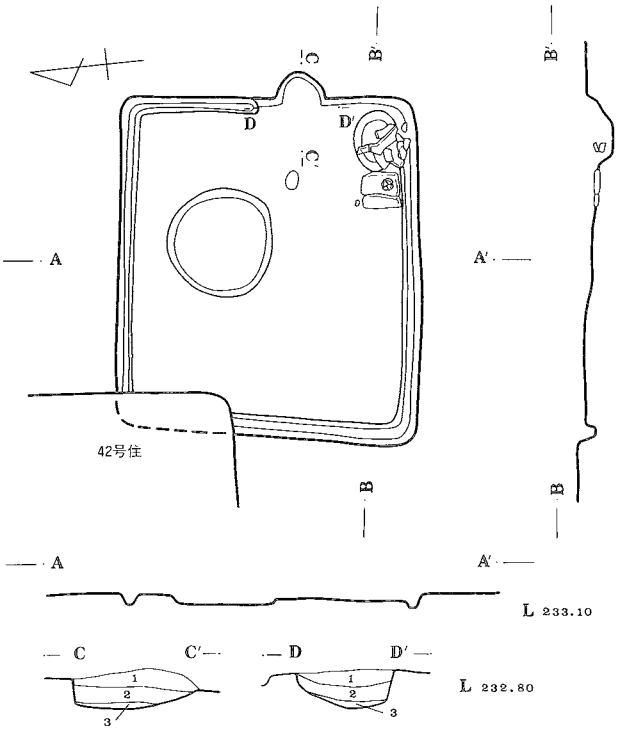

1層：しまりのない暗褐色砂層。
2層：天井崩落層。粘性ロームが主体をなし、黒色土及び僅かな焼土を含む。
3層：焼土層。
4層：貼床層。ローム及び灰が混じり黒灰色を呈す。

## B—41号住居跡

3.2m×3.7mとやや東西に長い長方形の住居。残りは西側で深さ30cmと良好である、カマドは北壁東寄りにあり、燃焼部は壁内。焚口から掘り込み部（煙道にあたると思われる）にかけてのレベルは一定で、壁外部は幅狭。袖部の痕跡は検出されない。カマド手前には壁より15cm内側両脇に自然石が立った状態で床に埋め込まれている。やや左にずれているが、位置的にみて焚口の範囲を示すと思われる。

床面はローム粒混じりの黒色土を全面に貼った貼床で、南西部一部地山面である。柱穴、貯蔵穴等は検出されていない。図版でカマド左手の掘り込みは攪乱であり、住居に伴うものではない。

遺物は少ない。北壁際床面やや上より土師坏片、覆土中より土師甕、須恵埦、坏等の小片が出土している。




1層：軽石粒子をまばらに含む黒色土層でしまりよし。
2層：ローム及び黒色の混在層でパラつく。
3層：焼土層。

### B－40号住居跡

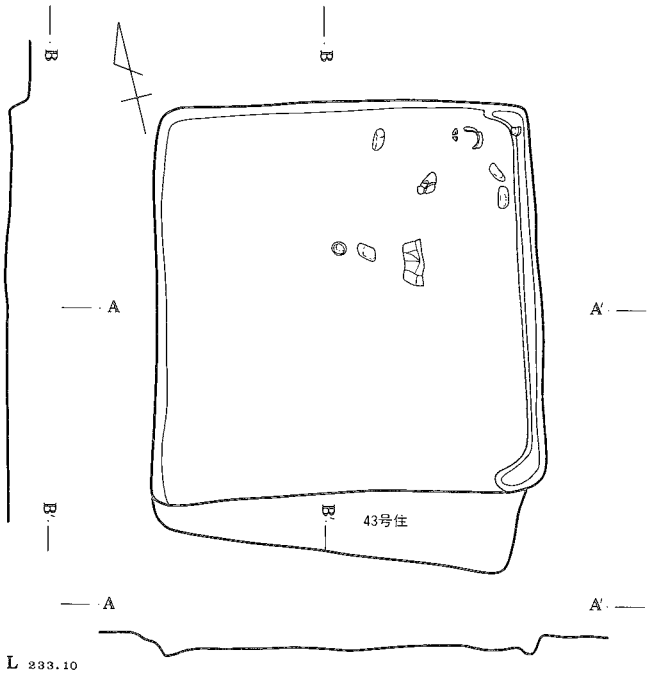
3.2m×3.6mで僅かに東西が長い。カマドは東壁やや南寄りに造られ、袖部の痕跡はない。図版では調査時に袖部として残した部分があるが、後に訂正した。火床は地山を使用し、比較的平坦であり、先端部際で直気味に立ち上がる。内壁は全面よく焼け赤灰色を呈する。

住居床面は地山のロームが大半を占め、南東コーナー付近は僅かに低い斜面上に黒色土を貼っていた。ここからは貯蔵穴が検出されている。上場で65cm×50cmの楕円形を呈し深さは10cm強を測る。これを覆うように直上には板状石が雑に置かれ、その西隣には整った方形の板状石が床面より出土しており、興味深い。

住居内北側より床下土坑と思われるピットが検出されたが、これは径1.1mを測り、下場は凹凸著しく、所謂床下土坑と言えるか疑問の残るところである。又、壁全体に周溝が検出された。

遺物はカマド内にコの字状口縁の甕片が多く、貯蔵穴西の板状石直上より須恵坏、他に覆土より須恵甕片、坏片が出土した。また、カマド手前床面には板状の自然石が立った状態で検出された。

北西コーナーは42号との重複である。住居確認段階では一応40→42として42号を先に調査したが、伴出する土器及び住居形態からみて42→40の関係になろう。

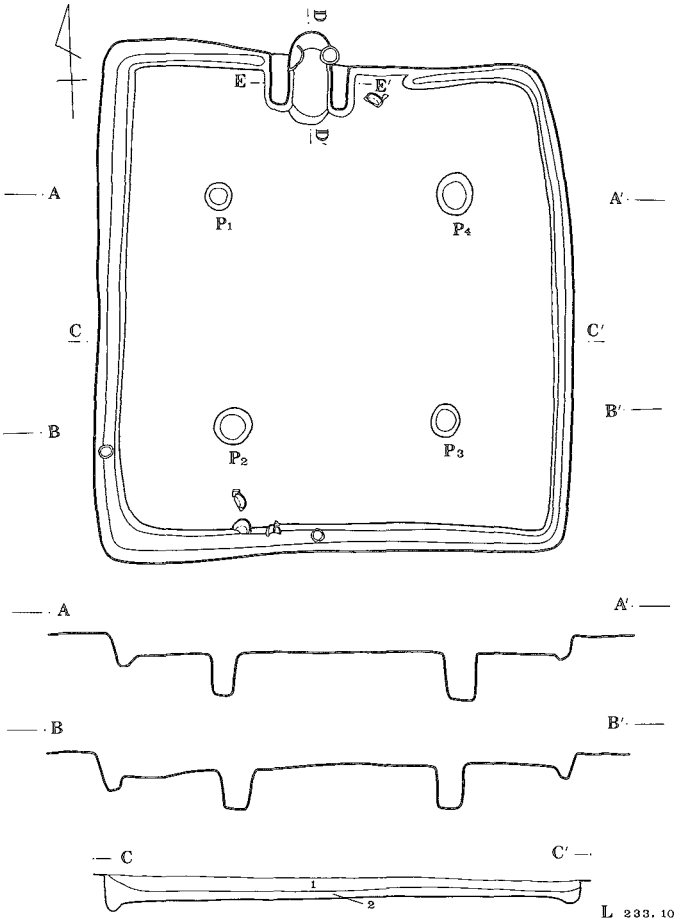



### B－44号住居跡

4.1m×4.1mの方形を呈す。南壁は当初43号の存在が不明確だったため掘ってしまった。カマドの痕跡はない。

柱穴、貯蔵穴等もなく、東壁に周溝が確認された。両端はわずかに回り込んで立ち上がりを見せる。

遺物は住居北東部に集中していた。北東コーナー床面には土師長胴甕と球胴甕及び長さ20cmのこも石状礫2個、覆土より土師内黒坏が、中央付近より立った状態の自然石、板状石、覆土より土師坏が出土した。



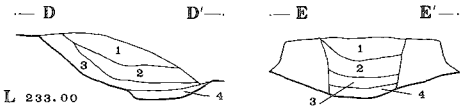

1層：軽石粒子を含む黒褐色土層。
2層：黒褐色土層。

## B—42号住居跡

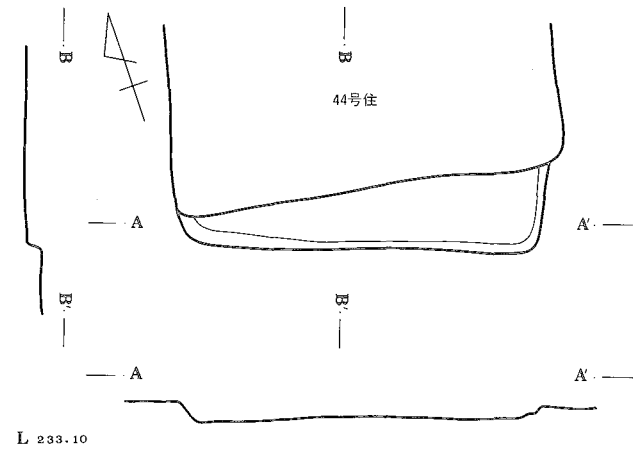
5.1m×5.1mの正方形を呈し、西壁は5.5mとやや不整形。カマドは赤褐色の粘質土の長い袖部をもつ燃焼部壁内型で北壁中央西寄りに造られる。袖部つけ根の両側には土師甕が倒置されている。下半が欠損しているのは表土除去の際にとばしてしまったのかもしれないが不明である。焚口からなだらかに掘り込まれた地山は袖部中央で立ち上がり、そこに5cmの厚さの褐色土を貼り火床としている。直上には明確な焼土層が確認された。

主柱穴が$P_1$から$P_4$の4個検出した。径は$P_1$28cm、$P_2$40cm、$P_3$長径35cmのやや楕円、$P_4$も長径42cmとやや楕円状である。深さは$P_1$40cm、$P_2$40cm、$P_3$45cm、$P_4$48cmで大差はない。貯蔵穴は不明。壁全周に周溝が確認された。

遺物はカマド内より大量の土師甕片、床面やや上より須恵台付坏、土師皿、覆土より土師坏等、多い。

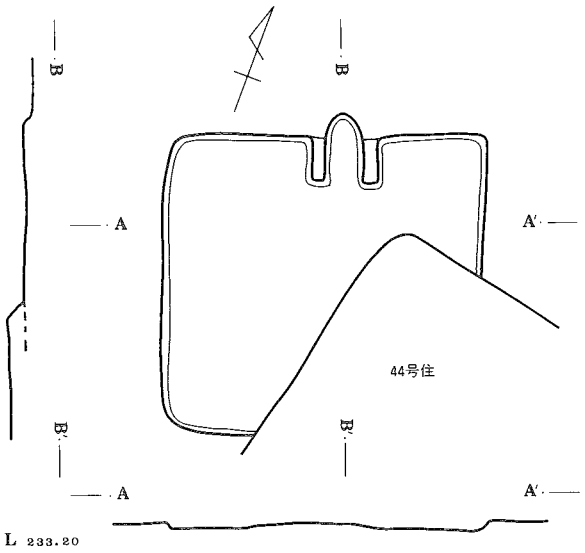



1層：赤褐色土層。
2層：赤褐色粘質土からなる天井崩落層。
3層：焼土層。
4層：貼床層。褐色土からなる。




## B—43号住居跡

南壁は4m弱を測る。ほとんどの部分は44号に切られているため、形状、規模等の詳細は不明。カマドの痕跡も検出されない。

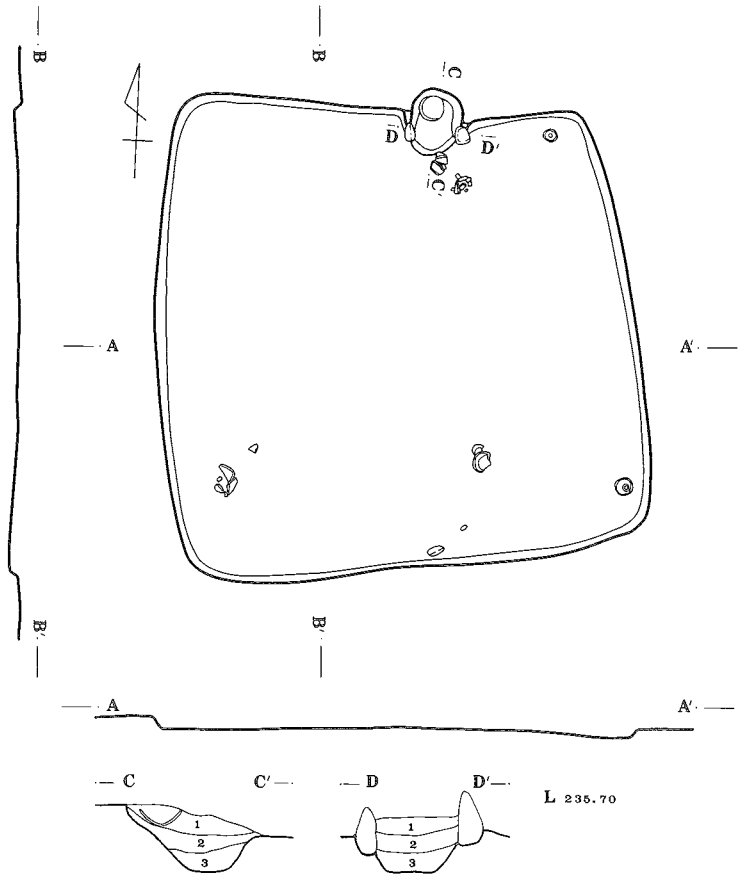



B－45号住居跡

南北3.1m、東西4.4mを測る正方形に近い住居。カマドは袖部をもち、燃焼部は壁内側にくるタイプ。床面は地山のロームを平坦に掘って使用しており貼床の形跡はない。柱穴、貯蔵穴等ピットは全く存在しない。

住居南東部は44号の掘り込みに壊されている。

遺物は少ないが、覆土から土師甑、土師高坏が比較的良好な状態で出土した。




1層：黒褐色土層。
2層：焼土ブロックを含む黒褐色土層。
3層：貼床層。黒色土からなる。

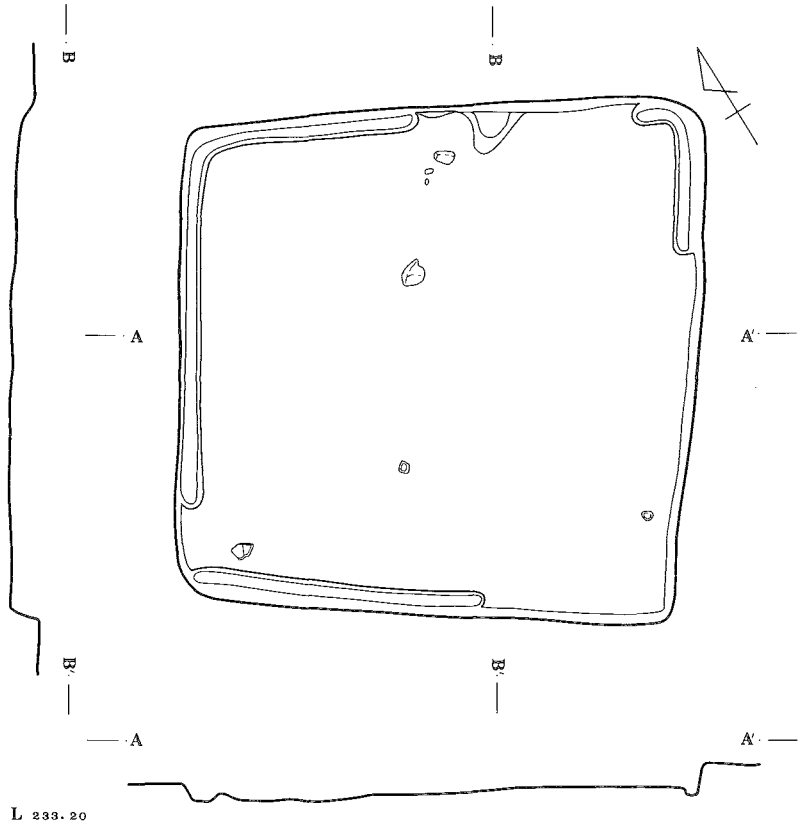
B－47号住居跡

区域の西端に位置する。中央で5.1m×4.7mとやや東西に長く、北西コーナーは大きく外へ張り出すために全体的に不整形となっている。

カマドは北壁やや東に造られている。壁外へは30cm程半円状に掘り込まれ、短い両袖部の端は自然石が置かれ焚口をなす。燃焼部の中心は壁内外の中間といえよう。焚口よりピット状に20cm程地山を掘り、10cmの厚さで黒色土を埋め戻し、これを火床としている。火床面上に堆積する焼土混じりの層に乗る形で土師鉢が出土しており、カマドで使用されたことを示している。

住居内に柱穴、貯蔵穴等の掘り込みは全く検出されなかった。

遺物はカマド内に土師鉢、手前に土師甕、北東コーナー及び南東コーナー床面には土師坏が出土し、南東コーナーのものは底が抜けていた。覆土中には土師坏、甕片、底部ヘラ切りの須恵坏等が出土している。

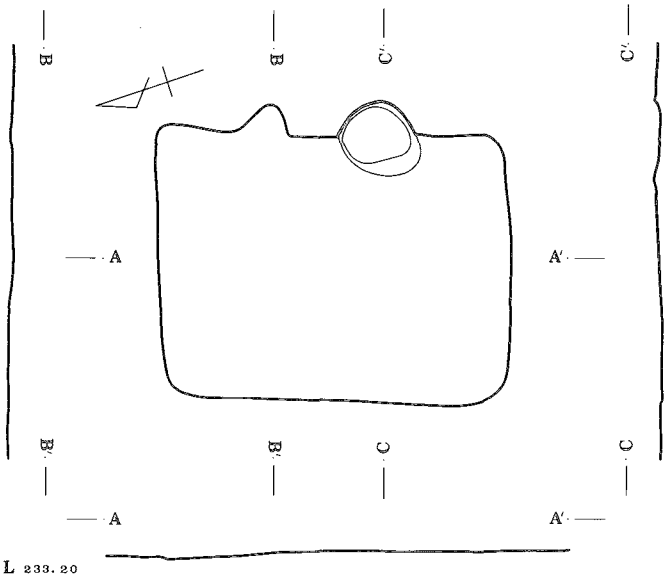



### B—46号住居跡

壁中央で5.6m×5.3mを測る。東側コーナーが少々張り気味だが正方形に近い形状といえる。明確なカマドは不明だが、北壁中央に1箇所突出した部分があり、脇床面に焼土が存在するので北壁カマドの可能性が強い。

各壁には部分的に周溝が検出された。全体的に小ピット状の凹みが連なるような形で掘られている。柱穴等のピットは検出されなかった。

遺物は多く、ほとんどは覆土中のものである。須恵埦、坏、甕片、土師甕片も多く、羽釜も見られる。北壁中央及び住居中央床面からは自然の礫が出土した。

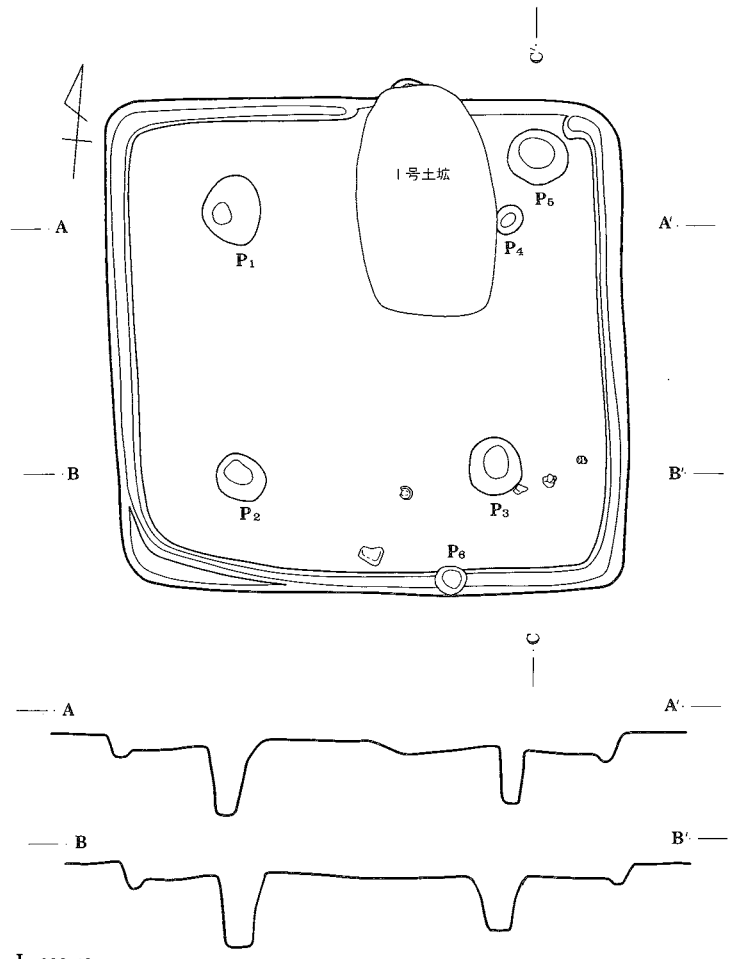



### B—49号住居跡

かすかに形跡を残すのみで壁の立ち上がりはほとんどない。2.8m×3.7mの長方形で東壁にカマドをもつ。カマドは2か所検出されたが、北側は外への張り出しとわずかに焼土の痕跡を留めるのみで、南側は住居床面よりわずかに凹んだ火床面がよく焼けて、明らかな焼土層が存在した。このことから、北側のカマドから南側のそれへ造り替えたと判断した。

住居に伴うピットは全く検出されていない。

遺物はほぼ床面の出土で羽釜片、須恵甕片等が少量であった。



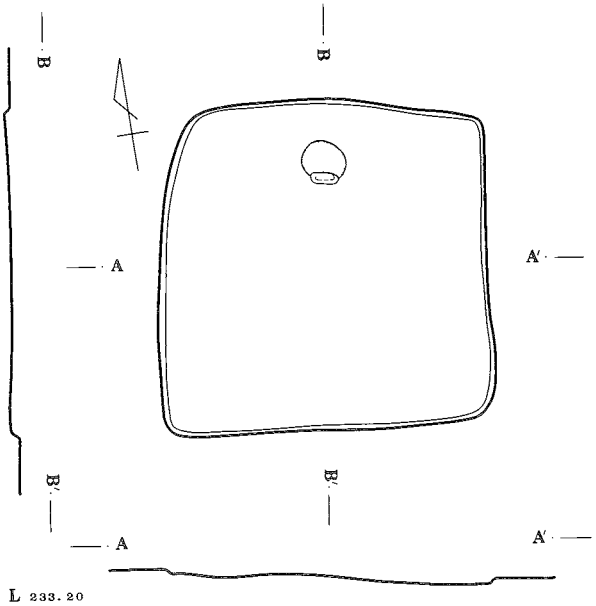

### B—48号住居跡

5.5m×5.3mの正方形状で整っているといえる。カマドは明確ではないが、北壁から内側にかけて土坑墓の掘り込みがあり、先端に残る張り出し部分及び左手の焼土痕よりこの張り出しをカマドとみてよいだろう。燃焼部は重複のため全く残っていない。

柱穴は4個、及び貯蔵穴と思われるピットが北東コーナーに検出された。$P_1$から$P_3$は上位に斜めをもち、下半が直に落ちるという断面形である。東西径は次のとおり。$P_1$60cm、$P_2$50cm、$P_3$56cm、$P_4$30cm($P_4$は一部が土坑墓に切られている)。深さは$P_1$70cm、$P_2$70cm、$P_3$54cm、$P_4$50cmを測る。$P_5$を貯蔵穴とした。径は東西で64cmの楕円形、深さは80cmだが底部はやや掘り過ぎたことを記しておく。なお、$P_6$も本住居に伴うものと思われるが、性格は不明である。

壁全体にかけては周溝を検出した。貯蔵穴北壁では一部途切れており、又、南西コーナーでは壁下場よりひとまわり内側を巡っている。

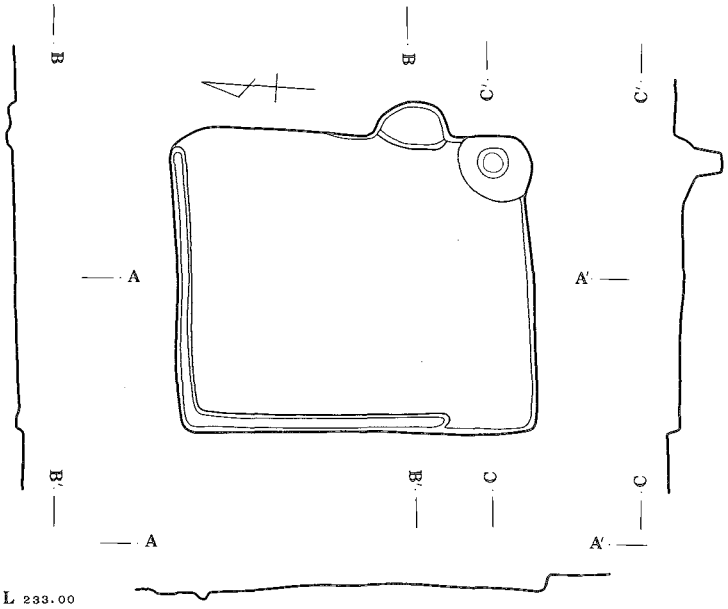
遺物で床面出土のものは土師坏1点、覆土からは須恵埦、甕片、ロクロ使用の土師質甕片等が出土した。




### B—51号住居跡

住居中央で3.5m×3.5mを測る不整正方形である。柱穴等のピットは全く存在しない。床面は地山のロームで、残存状態は深さ10cm弱と良好とは言えない。カマドの痕跡は見当らないが、床面に置かれた自然石の北側に径40cmの範囲で僅かに焼土が散っており、地床炉と思われる。

遺物は僅かであるが、覆土よりS字状口縁台付甕と思われる土師甕片が出土しており、地床炉の存在と共に本住居跡の時期を示すと言えよう。



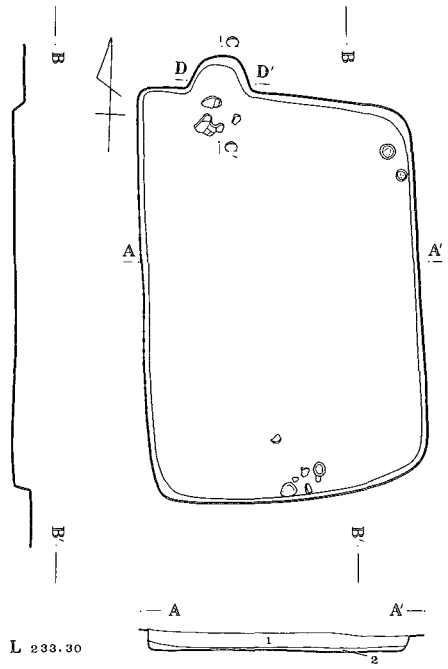

### B—50号住居跡

3.2m×3.8mでやや南北に長い長方形を呈す。カマドは東壁南寄りで燃焼部は壁外にある。火床面は地山で、焚口でわずかに低く徐々に壁外へと立ち上がる。よく焼けて赤灰色を呈す。中央に楕円状の凹みがあるが、これは支脚痕の可能性が考えられる。

柱穴は不明、貯蔵穴がカマド右手の南東コーナーに存在する。上場径70cmを測り、コーナー外へ少々張り出す。上部は擂鉢状に浅く、途中から径30cmのピットがさらに落ち込んでおり、深さは床面より40cmを測る。

西壁と北壁には周溝が検出された。

明確な床面出土遺物はない。覆土より須恵埦、須恵壺片、土師甕片等、全体的に少量である，



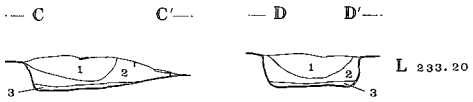

1層：軽石微粒子を多量に含む暗褐色砂層で、僅かにロームブロックも含みしまりはない。
2層：軽石微粒子を僅かに含む暗褐色砂層。

### B—52号住居跡

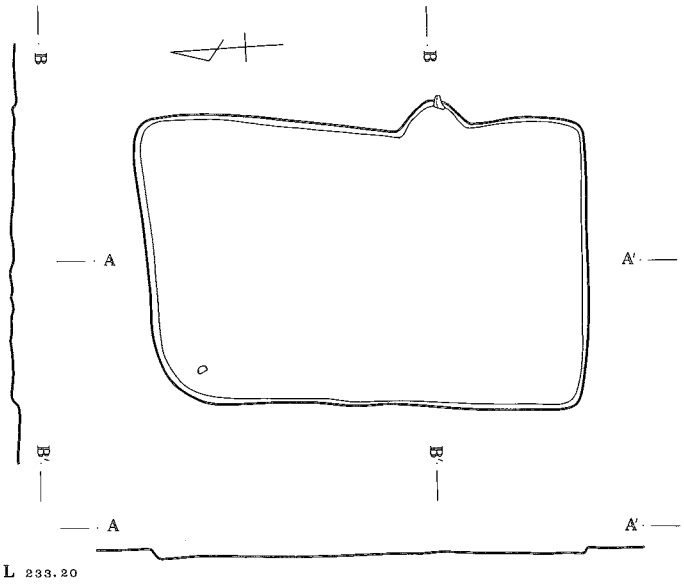
東西2.9m、南北は西壁4.3m、東壁3.5mと台形状である。カマドは北壁西寄りに造られ、半円状に壁外へ掘り込まれている。火床は地山で焚口より8cm程低くなだらかに掘られ、壁外への立ち上がりは急である。直上には黒灰色の灰層が全面を覆っていた。袖部の痕跡はない。

柱穴等、住居に伴うピットは検出されない。

遺物はカマド焚口より土師甕、北東コーナー床面近くより土師坏2個、南壁際覆土に土師坏、床面より土師坏、他に覆土より須恵埦、甕片、土師甕片が多く出土した。




1層：天井崩落層。ローム・黒色土に少々焼土が混在す。
2層：1層に少々灰が混在す。
3層：灰層。

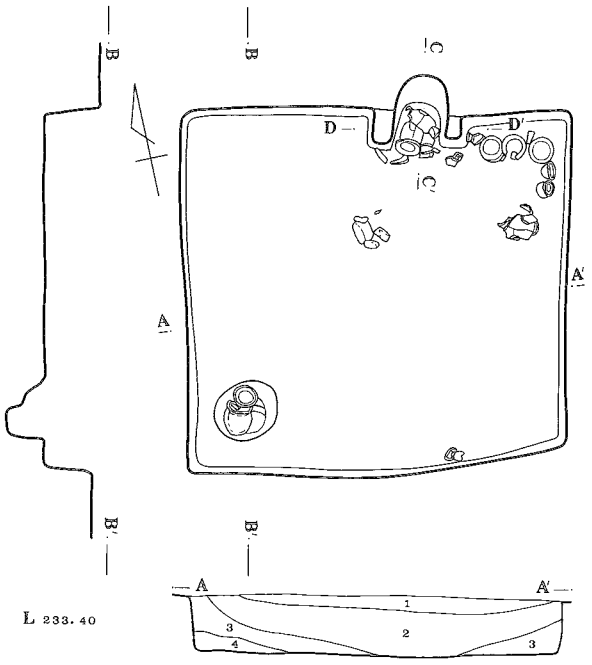



B－53号住居跡

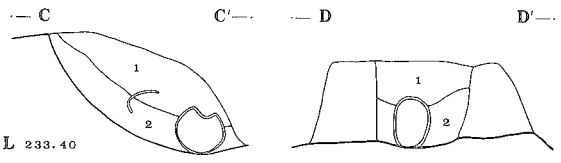
住居中央で4.6m×2.9mを測る。北東コーナーが張る不整形な長方形で残存する掘り込みは10cm弱と浅い。

カマドは東壁南寄りに造られている。幅の割には壁外へ出ておらず、残りはやはり悪い。先端の板状石の小片が壁の補強を示し、袖部や焚口の痕跡は全くない。又、火床面としての掘り込みもなく、住居内部のレベルとほぼ同一である。ピット等も全く検出されなかった。

遺物は覆土より須恵坏、土師甕が小片で少量出土した。




1層：黒褐色土層。
2層：ロームブロックを含む褐色土層。
3層：黒色土層。
4層：褐色土層。




1層：褐色土層。
2層：焼土ブロックを多量に含む褐色土層。

B－55号住居跡

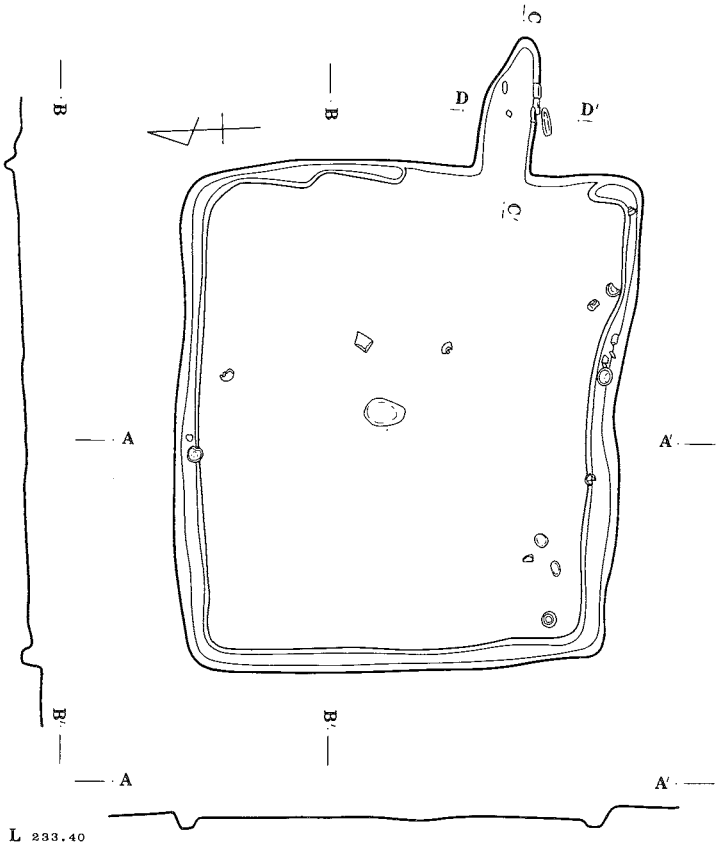
B区南端部に位置する。中央で4.1m×3.9m、各コーナーはしっかりと角をもつ正方形に近い平面形である。壁高は60cmと残存状態は良好である。

カマドは北壁やや東にある。黄褐色の粘質土からなる袖部は焚口付近の芯に自然石と倒置した土師甕を使用していた。間に横たわる2個の土師甕は左右の袖に渡されたものと思われ、焚口が鳥居状になっていたことが窺える。内部には2個の掛けられた甕が出土し、向かって左側の甕は底部が石製支脚を貫いて手前に倒れ、右側の甕は左側に倒れて出土。2個が並列して掛かっていたと考えられ、左側のものが支脚に載っていたのであろう。土器と支脚の位置より燃焼部は壁の中間であることが分かる。

本住居跡では貯蔵穴が南西コーナーより検出されたが、これは本遺跡においても特異な例である。通常ならばカマド右手、ここでは北東コーナーに位置するのであるが一。北東コーナー床面に置かれた遺物と関連があるのかもしれない。貯蔵穴は径60～70cm、深さは40cmであり、床面からは壁に寄り掛かるように土師甕（片方は口縁のみ）が出土した。なお、柱穴は検出されなかった。

遺物は大量で9割以上が土師器である。カマド内に土師甕2、袖部に2、鳥居状に渡された甕2、北東コーナーに沿って並べられたものは左から甕、甕、甕、甑、甕で全て

正置の状態、左３個は長胴甕の上半のみであった。手前には大型球胴甕、貯蔵穴内よりやはり球胴甕、南壁際床面より土師坏２個が出土した。覆土からも土師の甕及び坏がほとんどで、１個のみ須恵甕が出土した。



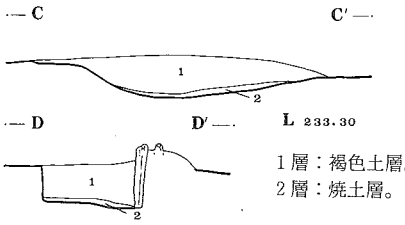

B—54号住居跡

4.8m×5.4mの長方形を呈し、南壁東半分がやや張り出している。

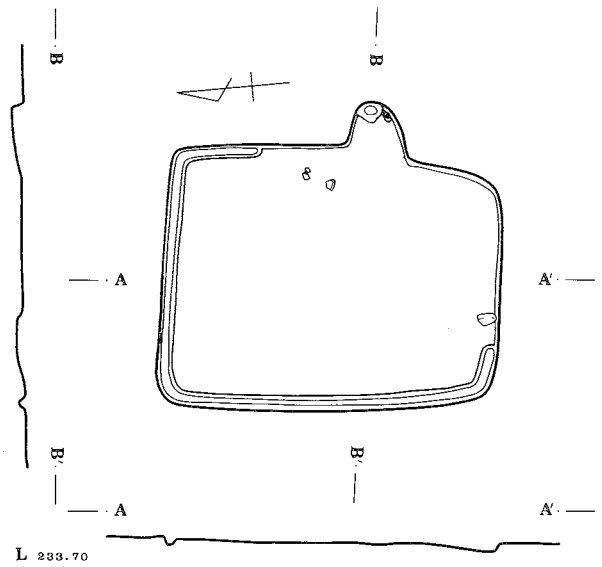
カマドは東壁南寄りに長くのびる。壁から残存する端部までは１m40cmを測り、幅は中心で60cm、右壁には板状石が残存している。焚口から火床中央まではなだらかに浅い斜面をなし、端部付近で立ち上がった後、さらに浅く煙道へと続く。

壁全周には周溝が巡る。柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は床面より須恵埦、覆土より須恵埦、皿、土師甕片等比較的多い。又、中央床面に扁平な自然石、南西コーナー覆土から拳大の扁平な石が出土している。




1層：褐色土層。
2層：焼土層。



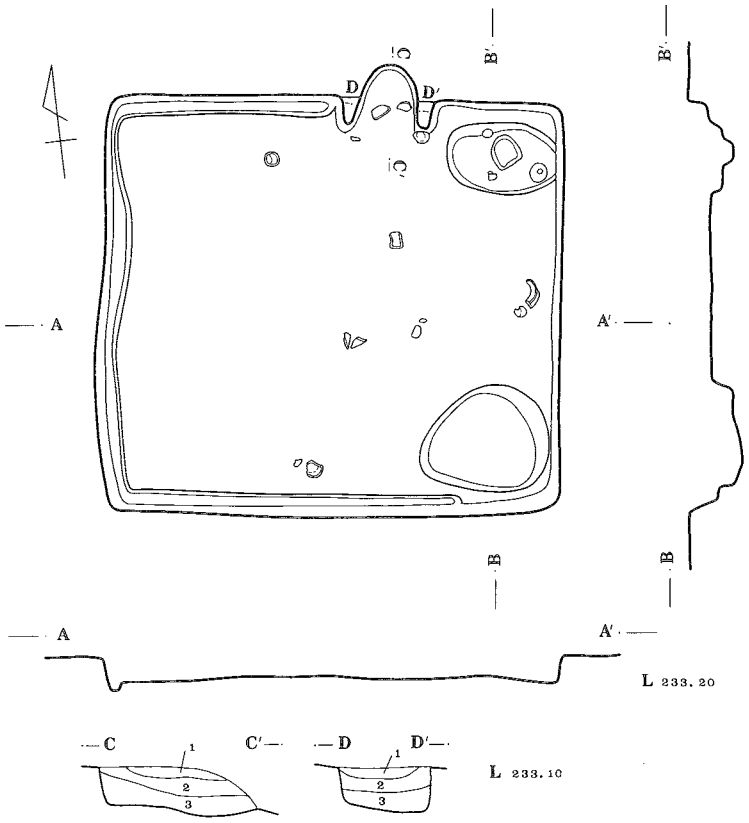

B—56号住居跡

2.8m×3.5mを測る小型の長方形住居である。残存する掘り込みは10cm足らずで、半周程巡る周溝がプランを明確なものにしている。柱穴、貯蔵穴は検出されない。

カマドは東壁南寄りで燃焼部は壁外。火床は浅く掘った地山の面で、先端部から右側にかけて不整形なピット状の凹みがある。カマドに伴う石の抜き痕であろうか。

住居床面は地山のローム面であり、全体にやや凸凹があるが、これは調査時に地面が凍結していたために剝がれ易かったことも影響しているであろう。

遺物は床面より須恵坏片、覆土より土師甕片等が少量出土している。




1層：やや焼土を含む黒色砂層。
2層：焼土及び黒色土の混在層。
3層：ローム粒子をまばらに含む黒色土層。

### B－57号住居跡

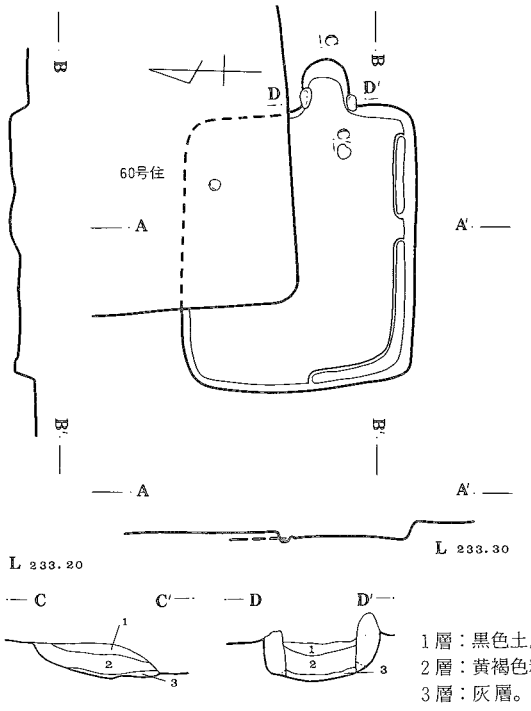
5.0m×4.5mで僅かに東西が長い長方形。各コーナーは角ばり、全体的に整った平面形といえる。

カマドは北壁やや東にある。右袖部の端には自然石を置き焚口の一端をなす。火床面は地山を浅く掘りそのまま使用しており、先端部で急に立ち上がる。

カマド右手の北東コーナーに貯蔵穴がある。東西径1.1mの楕円形で中心はさらに径30cmのピットが掘られ2段の落み込みとなっている。覆土より土師坏、甕片が出土している。又、南東コーナーにも三角状のピットが存在する。

壁際に周溝が検出されているが、東壁と貯蔵穴北側にはみられなかった。

遺物はカマド内より土師甕片、住居床面より土師甕、坏、覆土より土師甕、坏片等が多く、北東コーナー覆土上位からは須恵蓋が出土した。




1層：黒色土層。
2層：黄褐色粘質土層。
3層：灰層。

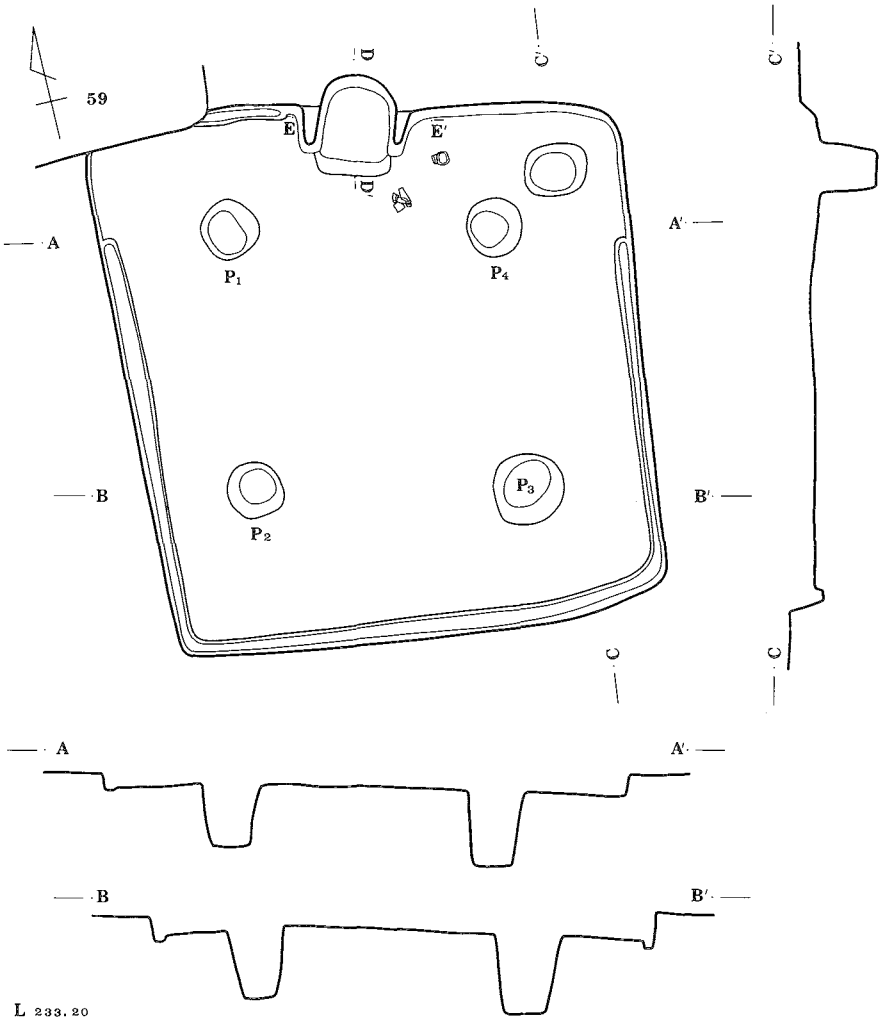
### B－59号住居跡

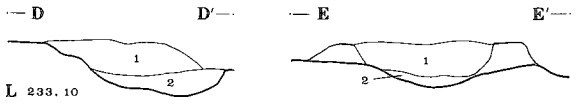
2.9m×2.5mを測る東西に長い小型長方形を呈す。カマドは東壁南寄りにあり、壁外に張り出す燃焼部の焚口両脇に自然石を据えている。火床は地山のローム面で、掘り込みの深さは浅く住居床面とさほど変わらない。

柱穴、貯蔵穴等のピットは検出されず、南壁から西壁にかけて部分的に周溝状の落ち込みがあった。

重複する60号との関係であるが、平面精査の段階では59→60とし、先に60号の調査を行なった。しかし、59号との重複部分は他の床面部と比してしっかりしたものではなかった。そして59号調査の際に重複部分に59号と同じ貼床面が検出されたことから、60号住居跡の上から59号が掘り込まれたと考えてよかろう。従って60号に伴うものとした須恵坏は59号のものとして扱い、60→59としたい。

遺物はカマド手前覆土より土師坏、60号との重複部覆土より須恵坏が出土しており、他に土師甕片が少々であった。




1層：焼土ブロックを含む黒褐色土層。
2層：貼床層。ロームブロックと黒褐色土の混在。

## B—58号住居跡

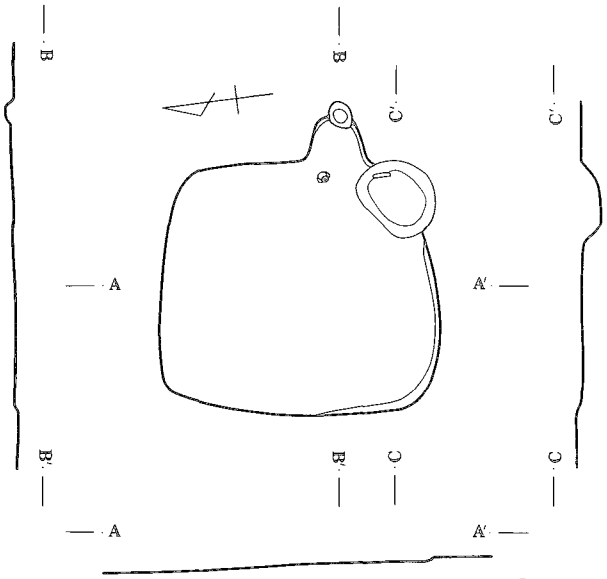
5.5m×5.5mの正方形だが、北西部が外へ張り出すためやや不整形となっている。カマドは北壁中央にやや曲がって幅広く掘り込まれ、壁外部に段をもって煙道へと続く。焚口からカマド内にかけては15cm弱の深さで地山を掘り、黒色とロームブロックの混土の貼床で火床面をつくっている。

柱穴は4個確認され、大体同じ規模のものであった。径は60～70cm、深さは$P_1$65cm、$P_2$65cm、$P_3$85cm、$P_4$80cmで東側の2個が深目。また貯蔵穴は北東コーナーで、東西径65cmの楕円形、深さ60cmを測った。

北壁と東壁、西壁の北寄り部分を除いて周溝が確認された。北壁カマド左手には一部周溝がみられるが、さほど明確なものではない。

遺物は覆土より土師坏、甕片、甑片等がほとんどで、1片のみ須恵坏の小片が出土した。

重複する59号によって北西コーナーが切り込まれており58→59の新旧関係が示されている。




L 233.40

### B－61号住居跡

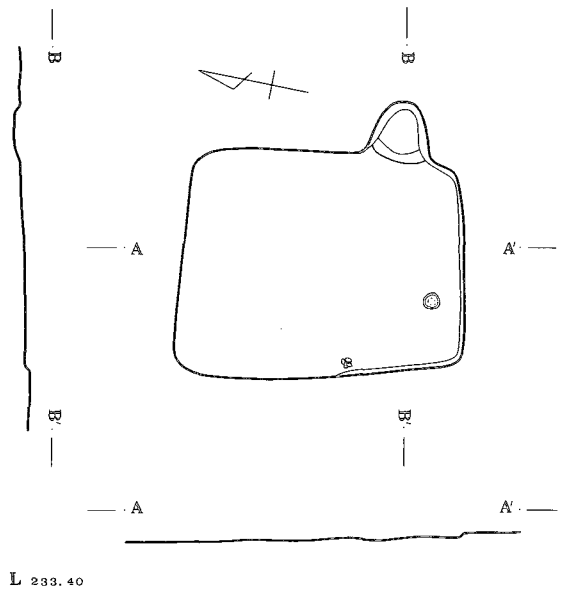
中央で3.0m×2.7mを測る、不整形な方形の住居。残存状態は悪く、壁としての立ち上がりはほとんど見られない。カマドは東壁南寄りで燃焼部の中心は壁外に張り出すタイプである。火床は住居床面レベルとほぼ同じ。先端部は一部、住居には伴わないピットに切られている。

本住居に伴うピットとしては貯蔵穴が検出された。東西径80cm強で深さは18cm、南壁外へ大きく張り出している。カマド寄りの覆土上位にカマドに使用したと思われる焼けた板状石を検出した。他に遺物はカマド手前床面より須恵埦が出土した。

### B－62号住居跡

中央で2.4m×3.0mを測る不整形な長方形。残存状態は悪く、南壁から西壁にかけては黒色の貼床面が残っており、壁の立ち上がりも少々ある。カマドは東壁南端近くに造られており、赤灰色に焼けた火床（地山）は大きく壁外に張り出す。焚口よりなだらかに５～６cmの深さである。住居内ピット類は検出されなかった。

遺物は床面より土師質土器埦、坏が出土した。



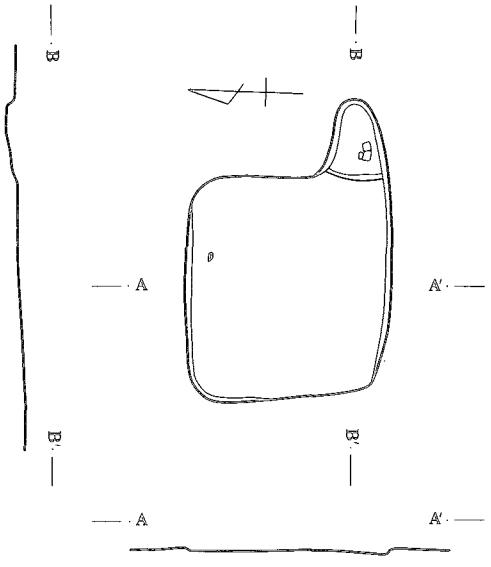

L 233.40

### B－63号住居跡

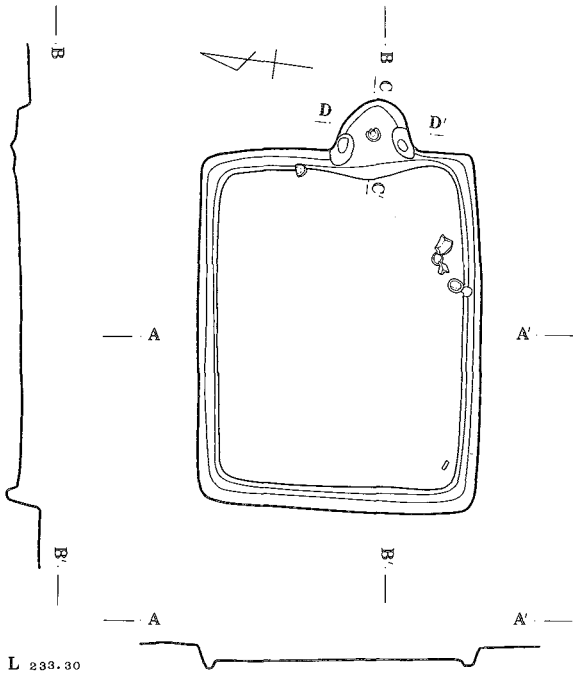
2.4m×2.2mの小型長方形で、残存状態は悪い。カマドは東壁南端にあり、これは本遺跡では類例が極めて少ないと言える。住居の規模に比してカマドは大きく、壁外へ90cm近く掘られ、火床面は地山である。中央やや右より焼けた板状石と自然石の破片が出土している。

床面は全体に黒色土で貼床をしている。ピット類は検出されなかった。

遺物は床面より須恵埦片が出土する他はごく僅かである。




L 233.70

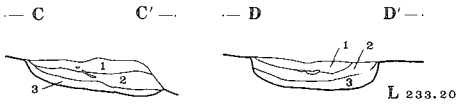



## B－60号住居跡

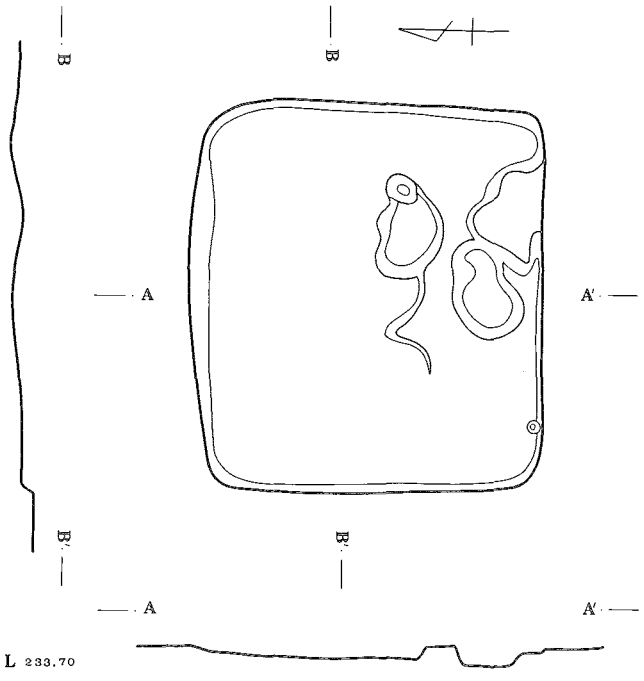
3.8m×3.0mの長方形を呈す。カマドは東壁南寄りにあり、火床は地山を使用したためによく焼けている。掘り込みの両脇壁際の凹みは左側がピットとも言えるものであるが、これはカマドに伴う石の抜けた痕であろう。

柱穴、貯蔵穴等は検出されないが、周溝が壁全体に掘られている。西南コーナー部分については59号の欄でふれたように重複しており推定ラインとして図で表した。

遺物はカマド内及びカマド左手壁際床面より土師坏、南壁際床面より土師坏、須恵台付坏、やや浮いて土師甕片等がまとまって出土した。



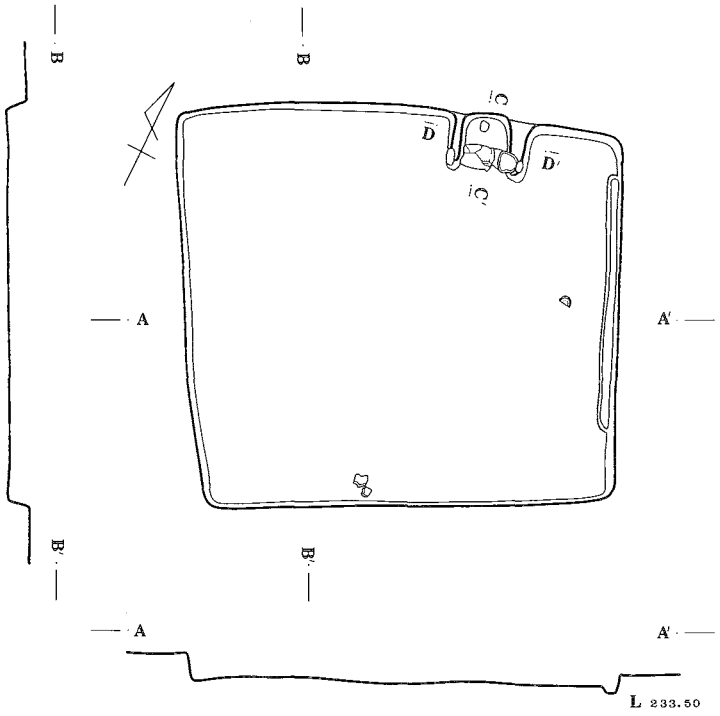

1層：しまりのないロームと焼土の混在。天井崩落層か。
2層：ローム粒子を含む黒色土層。
3層：焼土層。よくしまっており、下位に少々灰を含む。



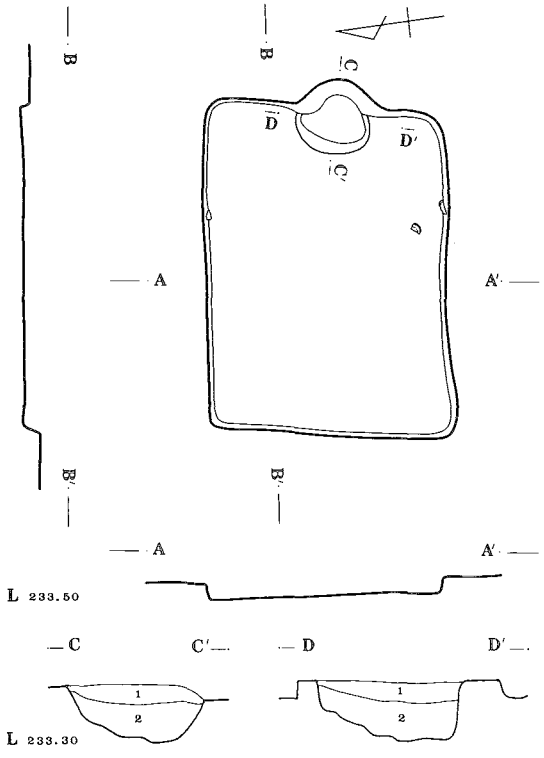

## B－64号住居跡

4.2m×3.8mの長方形を呈す。カマド、柱穴等の住居内遺構は不明であり、南側は不整形な掘り込みや盛り上がりがある。住居中央東寄りのピットには焼土が多量に入り、覆土よりスラグが出土した。土器は南壁際より須恵坏、覆土中より土師甕片、坏片等が出土している。

以上のことにより本住居跡は一般の竪穴住居であるのか疑問の残るところである。何らかの工房等の可能性も考えられるが、土器はごく一般的な日常のものであり、ここでは普通の住居跡としておく。




1層：焼土ブロックを含む褐色土層。




### B－65号住居跡

4.6m×4.2mを測る。北壁の西側は張り気味で、各コーナーはくっきりとした角をもつように掘られている長方形のプランである。残存する壁高は東側で約15cm、西側で30cm弱と、比較的良好と言える。

カマドは北壁東寄りに造られている。しっかりした袖部をもつ形態で、壁外への掘り込みは無く、火床は壁の内側である。先端部には石製の支脚が置かれていた。袖部の両端部は自然石が直立状態に据えられ、その間に土師器長胴甕が2個出土した。左側のものは右向きに横倒しになり、その口縁に右側の甕の底部が入るように右に傾き、上部は右袖部にかかっていた。これは袖部と甕によって鳥居状の焚口を形成していたことを表しており、先の55号住居跡にも見られたものである。

住居に伴うピットは検出されていない。南東コーナーの落ち込みと南壁の突出する部分は、本住居上部を切り込んでいる66号住居跡の一部である。

遺物は焚口に土師甕、東壁付近覆土より土師坏、南壁際覆土より土師甕片が出土しており、カマド以外の部分には遺物は少ない。

### B－66号住居跡

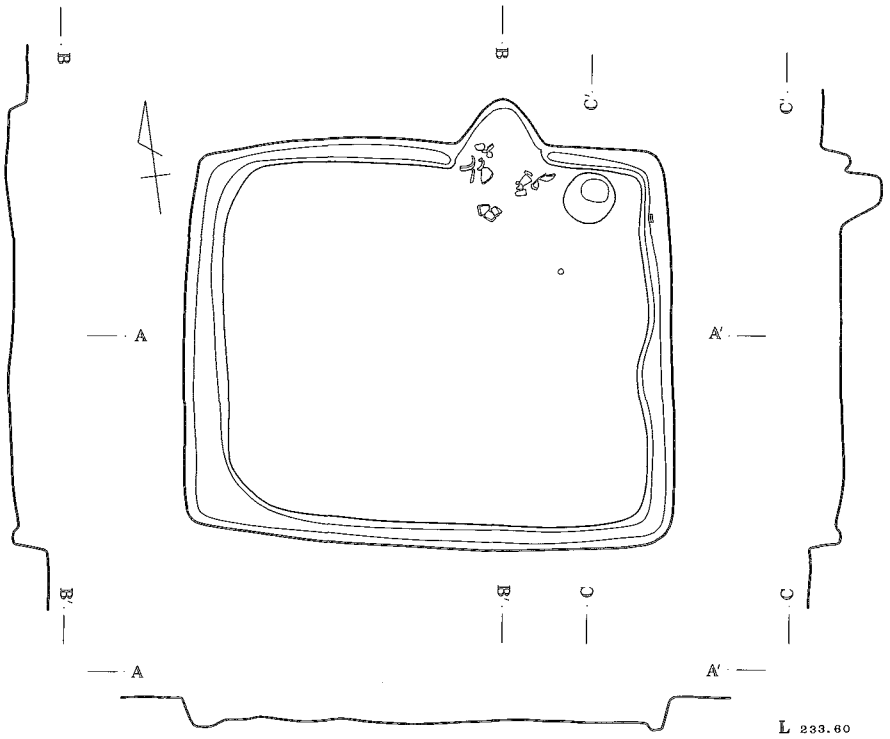
3.5m×2.5mの東西に長い長方形を呈し、各コーナーは比較的角をもっている。65号を切り込んで構築しており、南東コーナー以外は重複部分で、65号よりも掘り込みが浅いために床面は黒色土、つまり65号の覆土の面となっている。

カマドは東壁中央で、幅90cmの割に壁外への張り出しは30cm弱と少ない。明確な袖部痕は無かったが、燃焼部の中央は壁の中間かやや内側で袖部があったのではないか。カマド内の覆土ははっきりせず、全体に焼土粒を含む黒色土で明確な火床面は検出できなかった。

ピット類は全く検出されなかった。

遺物は南壁際床面より土師坏がまとまって出土し、他に覆土中に土師甕片が多かった。

1層：焼土及び黒色土の混在。
2層：焼土粒をまばらに含む黒色土層でしまりなし。

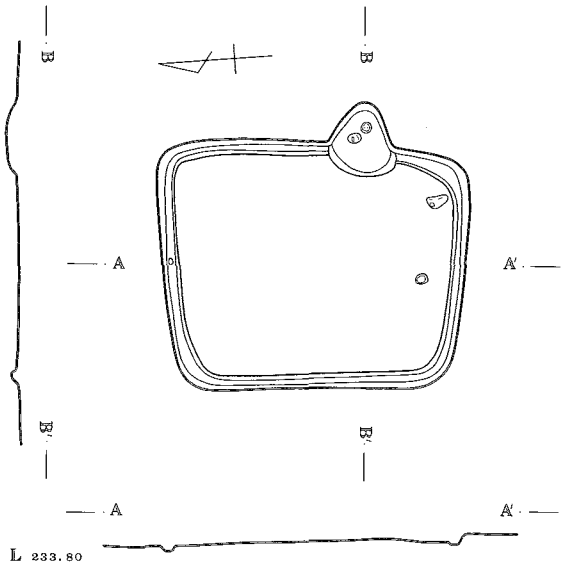



B－67号住居跡

4.3m×5.2mと東西に長い長方形である。カマドは北壁東寄りで、三角状に幅広く壁外へ掘られている。明確な袖部の痕跡は無いが、カマド手前両脇より土師器長胴甕がつぶれて出土しており、これが焚口に据えられ、短い袖部が存在していたと思われる。火床は地山のローム面で、壁中間付近が特によく焼けているので燃焼部の中心であろう。壁全周にわたって周溝が検出されたが、西壁部分では壁より50cm内側から徐々に落ち込みがはじまっており、周溝というよりは傾斜というべきかもしれない。また、小ピット状の浅い凹みがその斜面に幾つか存在する。西壁周溝のさらに内側には、ひとまわり小さな浅い周溝状の凹みが途切れながら巡っていた。

貯蔵穴は北東コーナーでほぼ正円形を呈し、径55cm、深さ45cmの掘り込みであった。

遺物はカマド内及び焚口付近より土師甕が数個体、床面より土師坏、覆土より須恵坏、皿等が出土した。



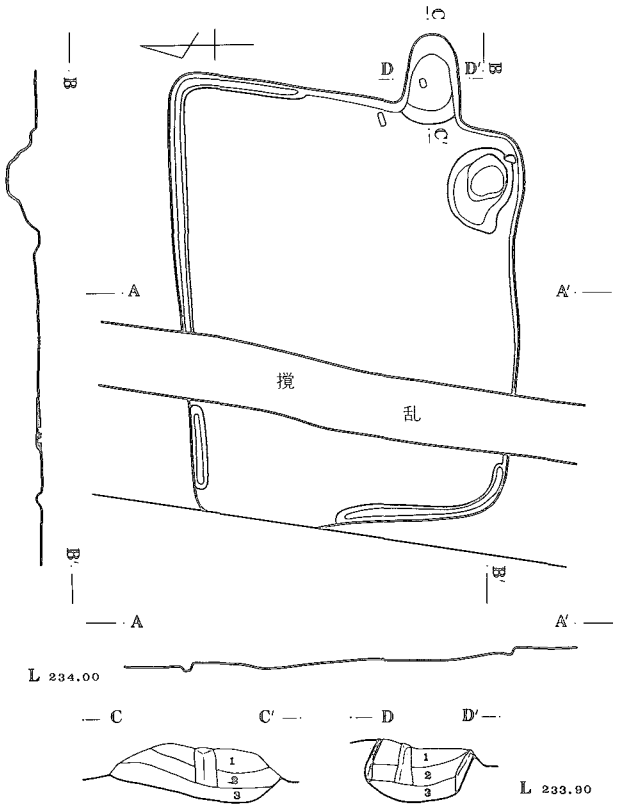

B－69号住居跡

中央で3.3m×4.4mを測る。東側が幅広の不整小型長方形を呈し、東壁南寄りにカマドをもつ。三角形に張り出した燃焼部は皿状に掘られた地山が火床面である。

住居内にピットは存在しない。壁際全周には周溝が確認された。

遺物はカマド内より土師坏、及び扁平な自然石が床面近くより、南側床面より須恵台付坏、南東コーナーからはカマドに使用したと思われる焼けた板状石が出土した。

68号と同様、残存状態は悪い。



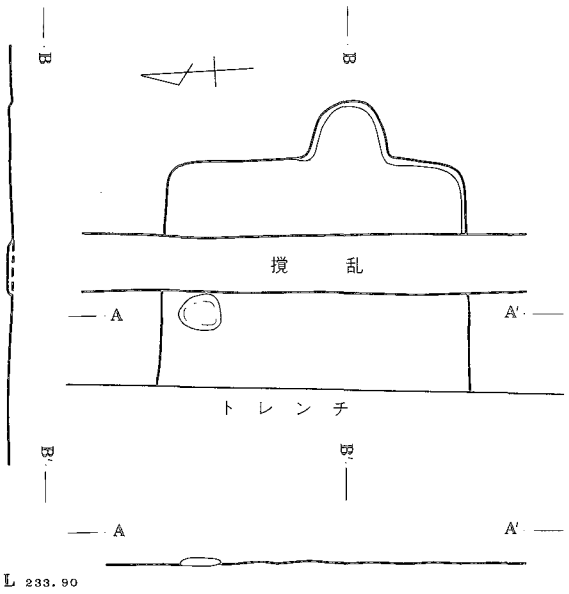

1層：黒褐色土層。
2層：粘質土及び焼土の混在。
3層：貼床層。黒褐色土とロームブロックの混在。

### B－68号住居跡

中央で6.4m×3.6mを測る。北側半分が台形状に張り出す不整形な長方形で、カマドは東壁南寄りに造られる。燃焼部は壁外にその中心をもち、細長く１m程延びる壁の中央付近には板状石を貼ってある。火床は焚口より12cm程皿状に掘り下げた地山上に黒色とロームブロックの混土を貼床し、中央やや左側には加工した角柱状の石製支脚が置かれていた。

住居の壁の残りはほとんど無く、南壁が僅かに検出されたのみで他は周溝の掘り込みによってプランが確認された。

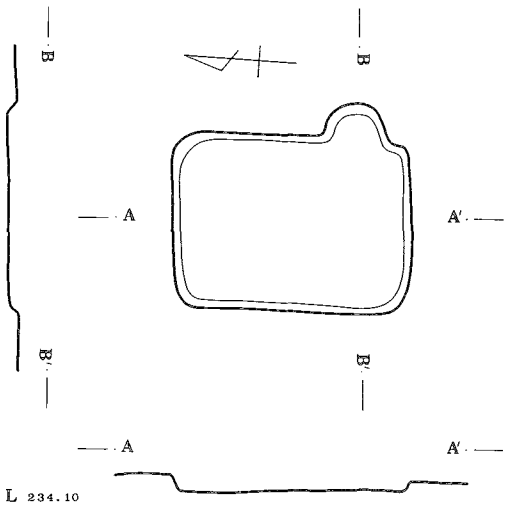
柱穴は検出されなかった。住居南東コーナーに貯蔵穴があり、東西径90cm、さらに内側にもう一段ピットが掘り込まれ、中央部は床面より約20cmの深さである。肩口より須恵埦が出土した。他、カマド内より土師甕、覆土中より須恵坏、埦等が出土している。




### B－70号住居跡

西側はトレンチに切られ、残存部中央は南北に走る後世の溝状遺構が重複する。形状不明で、壁の残存もほとんど無く、僅かに残る覆土からプランを確認した。カマドは東壁南寄りで、赤灰色に焼けた地山の火床まで僅かな掘り込みが残り、壁外部は半円状を呈す。

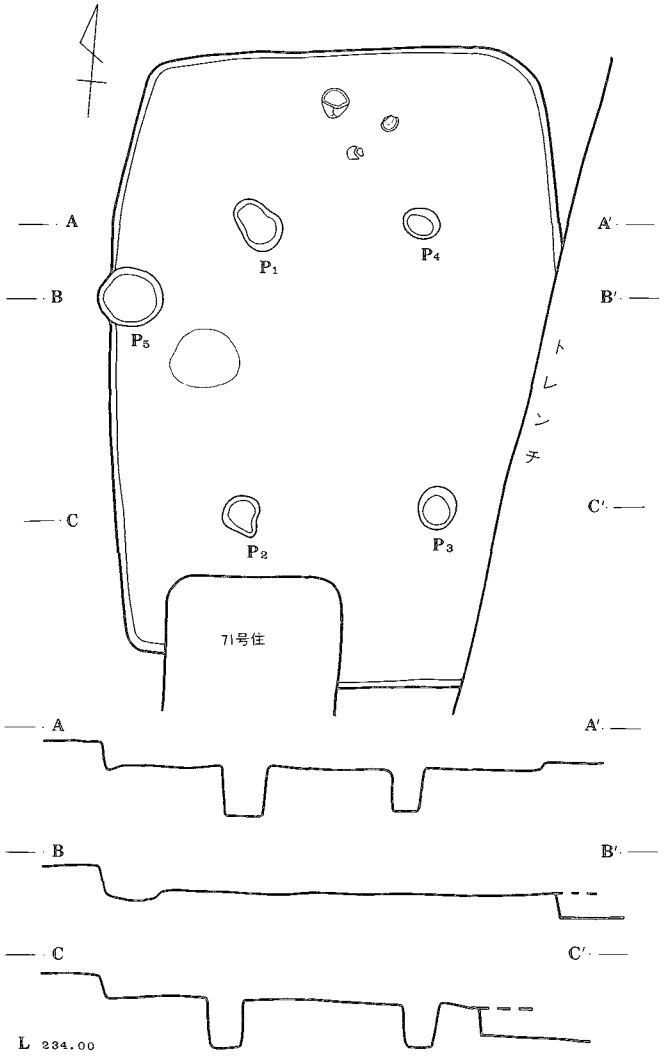
ピット類は全く検出されない。遺物は床面より土師甕小片１個と、住居北側床面より扁平な自然石が検出された。




### B－71号住居跡

1.9m×2.5mの、南北に長い小型長方形住居。カマドは半円状に東壁南端に造られている。カマド石や袖部等の痕跡は全く検出されなかった。火床面は床面レベルとほぼ同一である。

住居床面は地山のローム面であり、貼床の痕跡は無い。柱穴、貯蔵穴等のピット類は伴わず、遺物も検出されなかった。尚、住居北側は72号との重複であり、72号の南壁を切り込んで71号が構築されている。



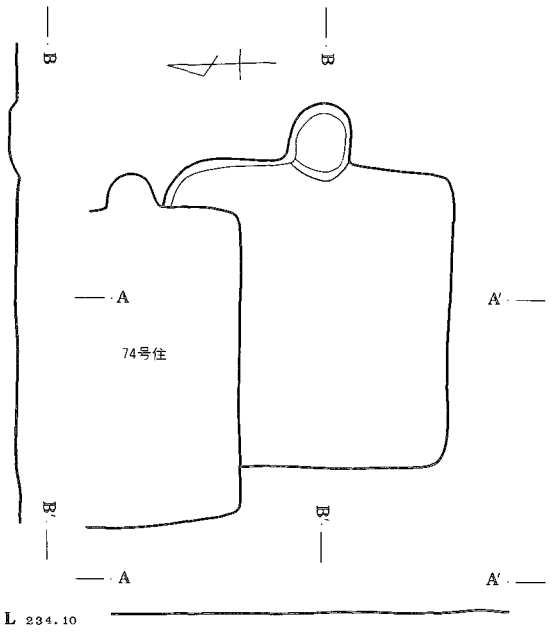

### B－72号住居跡

南北6.7mが長軸である。東壁の大半から南壁の一部はトレンチに切られており、北側の残存する部分で東西4.8mを測る。西壁の北側は内側へ弧状に廻り込み、少々不整形な長方形になると思われる。

本住居は地床炉を伴う。住居中央西側の床面上で、掘り込みは無く、径60～70cmの円形状に僅かな焼土が認められた。

柱穴は4個である。西側2個は不整形で、径は4個共30～40cm程を測り、$P_4$はやや小さい。深さも40～50cmの範囲であり、ほぼ同じと言える。西壁に張り出す$P_5$は皿状の浅い掘り込みで性格は不明である。

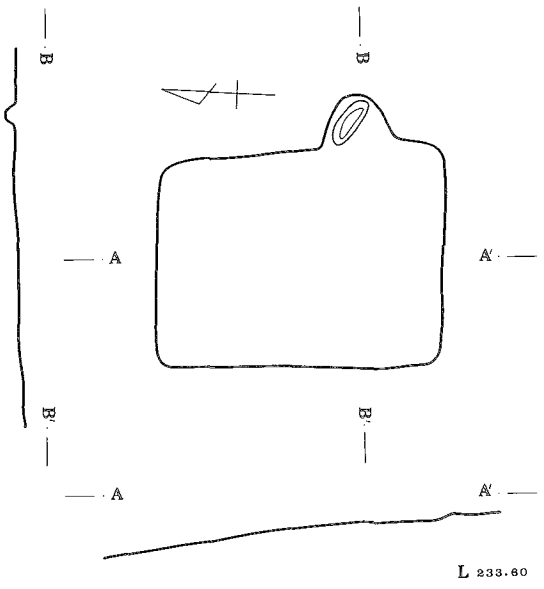
遺物は北壁付近床面より弥生時代の甕2個と甑、覆土より甕片、高坏片等が出土しており、本遺跡では数少ない弥生時代の住居跡である。




### B－76号住居跡

B区中央北端部に位置する。残存状態は悪く、壁の立ち上がりはほとんど無い。僅かに確認出来た黒色の覆土よりプランを判断した。

カマドは東壁南寄りで燃焼部が半円状に大きく壁外に出るタイプ。明確な火床は不明で不整形な細長い凹みが存在するが、性格は不明である。住居内の柱穴、貯蔵穴等のピットは無く、遺物も皆無であった。




### B－73号住居跡

残存状態がきわめて悪く、カマド部分以外はほとんど掘り込みは無い。僅かに残る覆土より東西3.3m、南北は3m強になろう。

カマドは東壁中央にあり、燃焼部は楕円状に大きく壁外へ張り出している。皿状に12cm程掘り凹められた地山の中央が僅かに焼け、火床の可能性が高いと思われる。袖部、カマド石等の痕跡は全く無い。又、カマド以外の住居内の掘り込みも検出されなかった。

遺物は非常に少なく、カマド内より土師小型甕の破片数個が出土したのみであった。

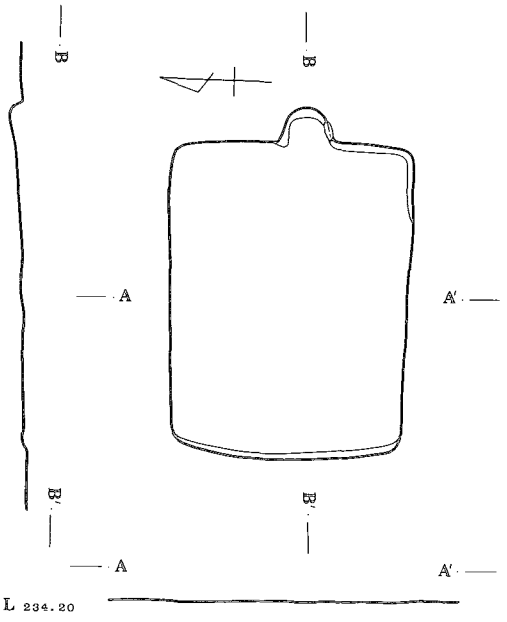
北壁及び西壁の一部は74号との重複であり、両住居共に残存状態が悪いが、平面精査で73→74との所見を得ている。

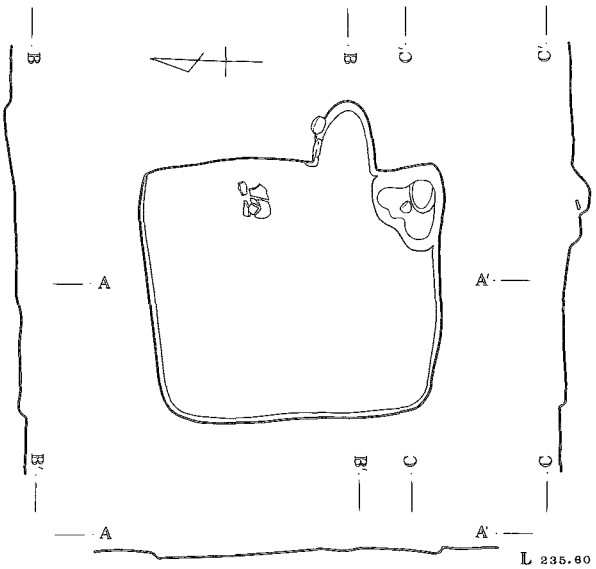
### B－74号住居跡

東西3.4m、南北は推定で2.5m程である。北壁と南壁は僅かに残る覆土よりそのプランを判断した。

カマドは東壁中央付近にある。先端部から左側にかけて上部は攪乱を受け、焚口右側には扁平な自然石を据える。火床面は焚口よりなだらかに浅く下がり、残存する先端部付近は僅かに赤灰色を呈す。住居内にピットは検出されなかった。

遺物はカマド内より土師甕片、東南コーナーより土師甕片、須恵埦片が出土するが、少量である。






B－75号住居跡

B区西端部に位置する。中央で3.1m×2.7mを測る、僅かに南北が長い不整長方形。カマドは東壁南寄りに造られる。東壁として拡げた部分は攪乱のための確認ミスで、カマドは燃焼部が壁外へ張り出す形態である。焚口左手には赤灰色によく焼けた石が残っており、その奥の自然石はカマドに伴うものかどうか不明である。

南東コーナーに貯蔵穴が検出された。径80cm程の不整形な円形で、中央はやや深く椀状に凹み、床面からの深さは20cm弱を測る。住居床面に近いレベルで須恵坏片が出土している。

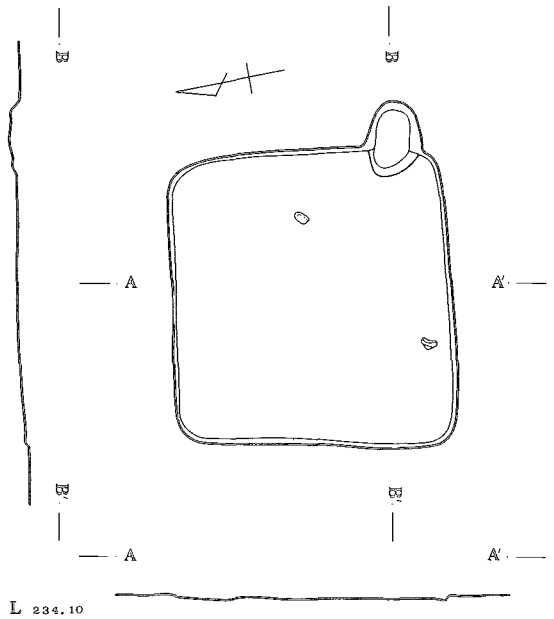
遺物は他に覆土より須恵甕片、土師甕片等がある。

B－78号住居跡

3.0m×3.1mの正方形に近い形状で、南西コーナーでやや張り出している。残存状態は悪く、壁の立ち上がりはごく僅かに認められる程度である。

カマドは東壁南端に楕円状に張り出している。焚口より皿状に掘り凹めてあり、明確な火床は検出出来なかった。ピット、周溝等も同様である。

遺物は南壁際床面より羽釜片、覆土より土師質小型坏が出土したのみである。

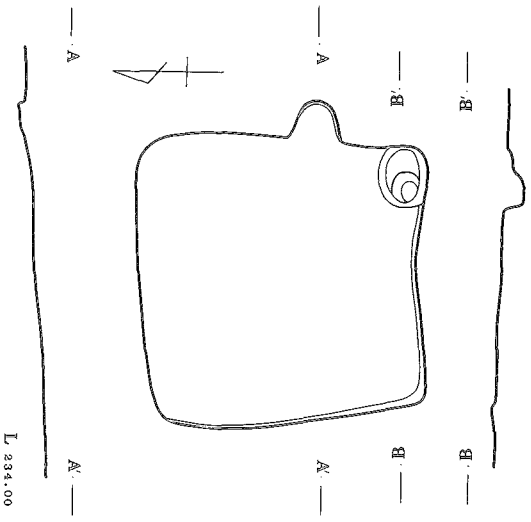


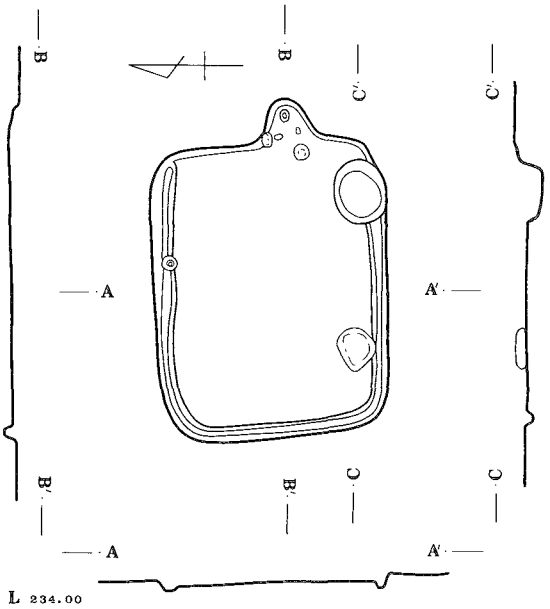

B－77号住居跡

中央で3.0m×3.0mを測る、北側が広い台形状を呈す。残存状態は南壁と西壁が僅かに存在する程度で、壁高はほとんど無い。カマドは東壁やや南寄りに造られる。中央に細長い凹みがあり、火を受けた形跡も無いことからこの面が火床とは言えない。貼床した火床が存在していたのだろうが明確なものは検出出来なかった。

南東コーナーの楕円形ピットは貯蔵穴と思われる。深さ約20cmを測り、東壁側が中程で段状を呈す。遺物は全く出土しなかった。

その他、柱穴、周溝等は伴わない。遺物は土師質の椀片と須恵と思われる鉢片の２片のみが検出された。



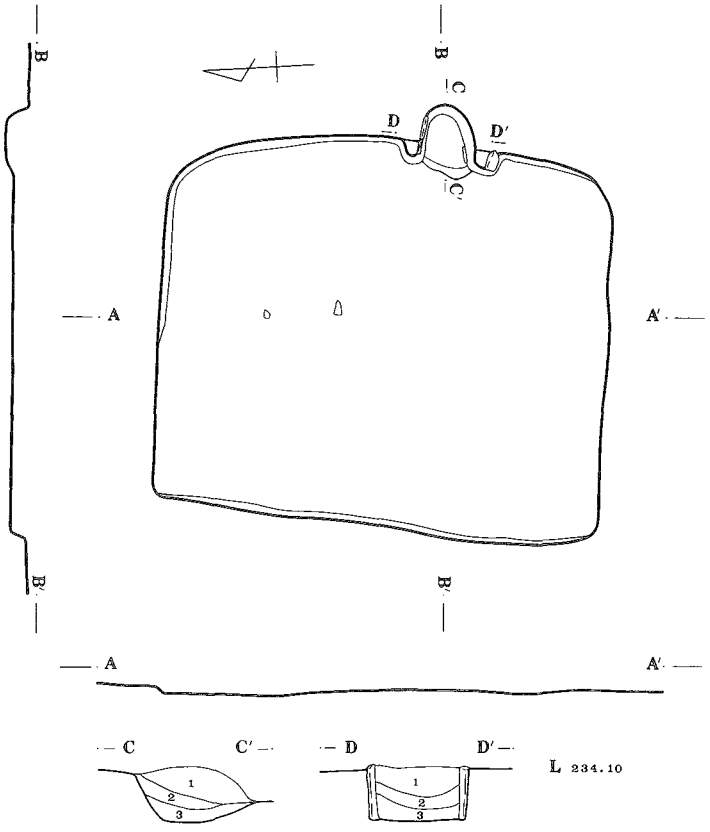



## B－79号住居跡

2.5m×3.1m、東西に長い長方形の住居。カマドは東壁南寄りに造られており、燃焼部の中心を壁外にもつ形態である。焚口左側に自然石を据え、カマド内には壁を構成していたと思われる板状石の破片が検出された。中心部の小ピットは支脚痕の可能性も考えられるが、支脚と断定し得る遺物は出土しておらず、不明である。

南東コーナーには貯蔵穴が確認された。径60cm内外の楕円形で深さは20cm弱、底は比較的平坦に掘られている。又、東壁を除いては周溝が確認された。柱穴は検出されない。

遺物は焚口付近覆土より須恵埦、カマド内より須恵坏、土師甕が出土した。又、住居南壁際床面に径30～40cmの扁平な自然石が密着して出土したが、性格は不明。




1層：褐色土層。
2層：焼土ブロックを含む褐色土層。
3層：貼床層。黄褐色粘質土で上面が焼けている。

## B－82号住居跡

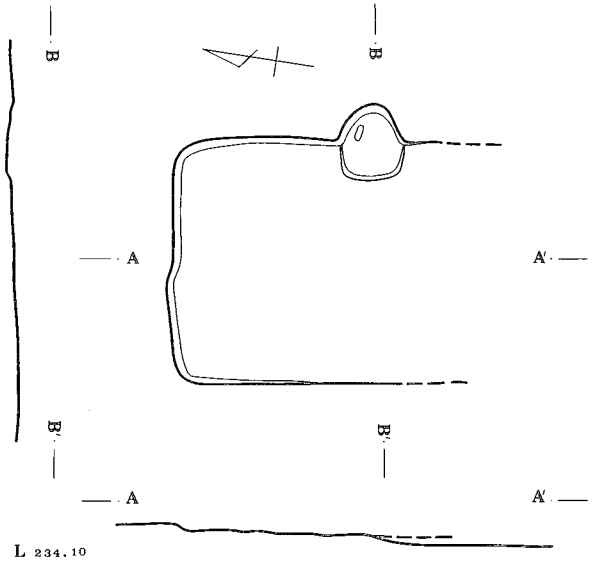
東西4.1m、南壁は81号の覆土内に明確なプランを見出せなかったので推定ラインとして掘ったものである。

カマドは東壁で焚口から先端部近くまで両壁に板状石を貼っている。内壁は赤灰色によく焼け、焚口から住居内側に50cm程の範囲で焼土が散る。焚口より10cm掘り下げた地山上に黄褐色の粘質土を貼った火床面もよく焼けていた。

住居に伴うピットは不明である。

遺物は覆土より須恵坏、高坏片、蓋片、土師甕片が多い。

重複する81号との関係は、81号のカマドが残っていることから81→82である。



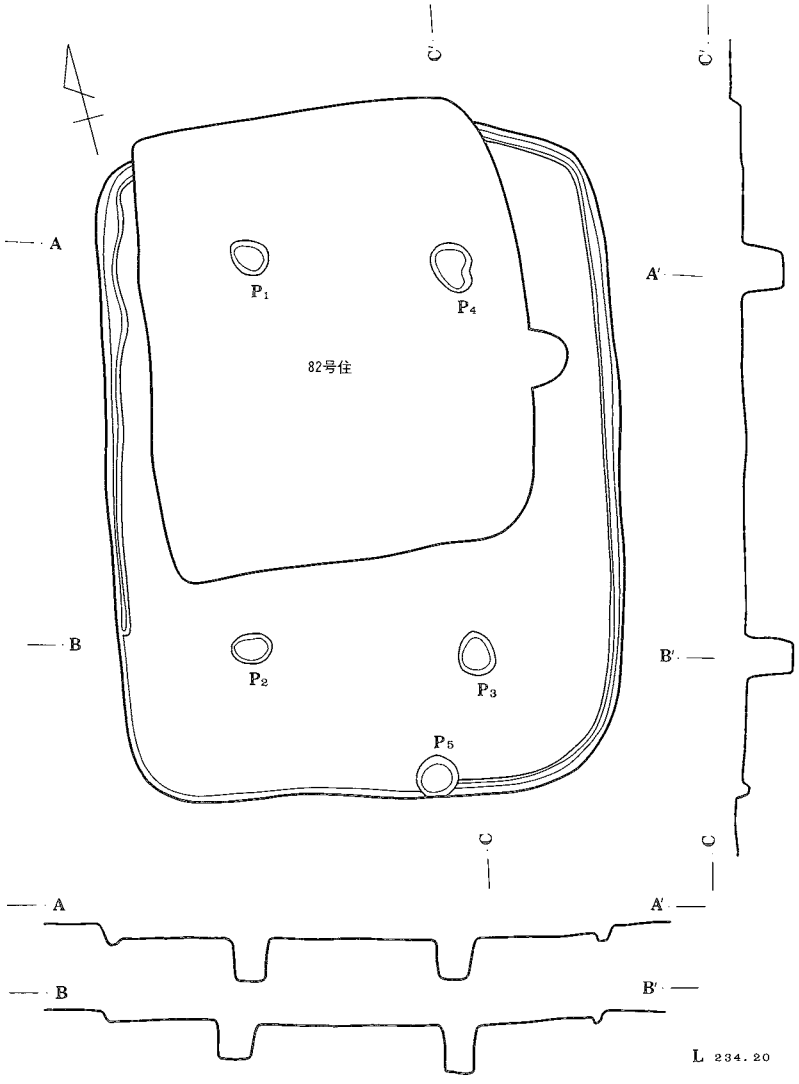

### B－80号住居跡

B区中央部南端にあり、南壁は確認出来ない。東西2.6mを測り、残存する壁は北壁で6～7cmと非常に浅い。

カマドは東壁にあり、壁外に張り出した燃焼部はローム粒混じりの黒色土で火床を構成する。左壁やや内側に板状石が据えられ、火床面には焼土粒が全体にわたって確認された。

柱穴等のピット類、周溝も全く検出されなかった。

遺物は土師甕、須恵坏いずれも小片で数もごく僅かであった。



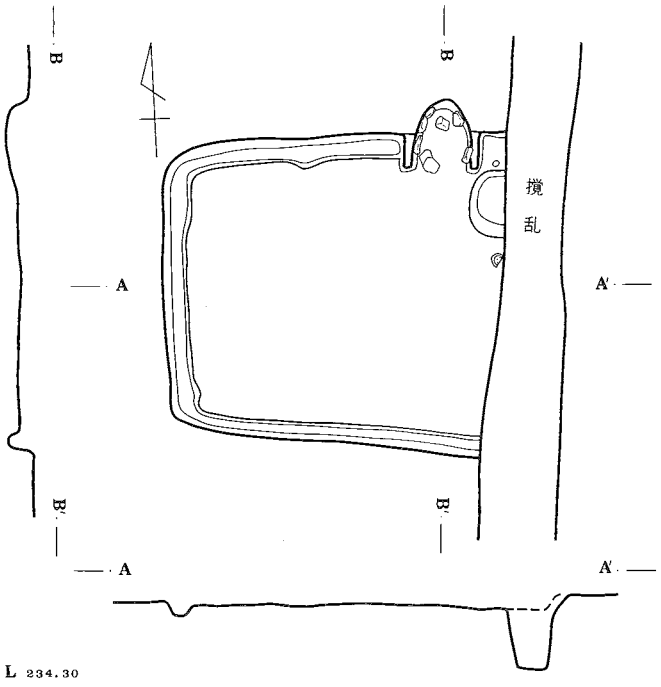

### B－81号住居跡

5.5m×7.0m、南北に長い大型長方形で、特に南側のコーナーは弧状に丸味をおびている。柱穴が4個確認され、$P_4$は不整形だが、各ピットの径は30～40cm、深さは40～50cmで$P_2$が38cmとやや浅い。南壁際のピットは深さ36cmを測る。性格は不明である。

南西コーナー付近を除いては周溝が巡っている。東壁に比べ西壁では幅に乱れが見える。

本住居はカマドの痕跡は全く無い。住居形態及び後に述べる遺物は弥生時代を示しているので、地床炉をもつ住居と考えられるが、その痕跡は検出出来なかった。重複する82号は本住居を切り込んで構築されており、床面は本住居とほぼ同じであるので、炉跡は82号に壊されたのであろう。

遺物は床面より弥生時代の甕、鉢が出土した。




L 234.30

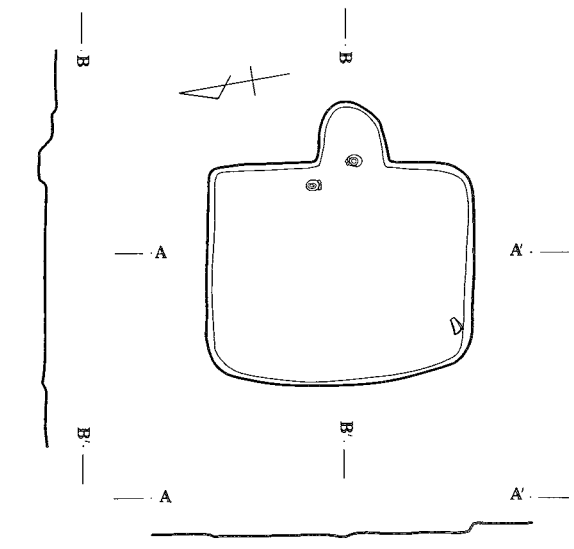
### B－83号住居跡

南北3.2m、東西は東壁が後世の溝状遺構に切られているために不明だが、4m強と推定される。

カマドは北壁東寄りに造られている。両袖部は壁内に40cm程の長さをもち、黄褐色粘質土で構成されるものである。壁外への掘り込みは約30cm、焚口及び両壁には板状の石が所々に残り、燃焼部の様子を窺わせる。位置的には壁中間あたりが燃焼部の中心と言えよう。

壁際は周溝が掘られており、カマド右手ではその痕跡が見られない。北東コーナー付近の浅いピットは貯蔵穴と思われるが、東半分は溝状遺構に切られるため形状等ははっきりしない。

遺物は焚口付近及びカマド内より土師球胴甕片、須恵鉢片が、住居東側床面より須恵坏片が出土した。




L 234.20

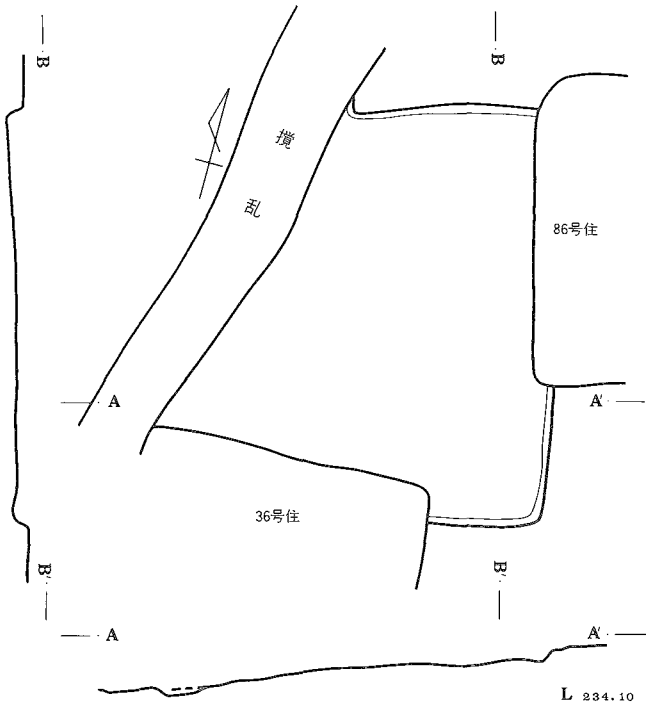
### B－84号住居跡

中央で2,3m×2.8mを測る小型長方形住居。南北がやや長く、西壁は弧状に大きく張り出す形状である。

カマドは東壁中央に造られる。壁際幅70cm、壁外へは60cm程楕円状に張り出し、住居が小型である割には大きなものと言える。焚口からカマド中程付近は狭い落ち込みになっているが、先半分の掘り込みは非常に浅く、明確な火床面は確認出来なかった。

柱穴、貯蔵穴等のピットは検出されない。北西コーナーに一部、周溝状の凹みがあるがはっきりとしたものではない。

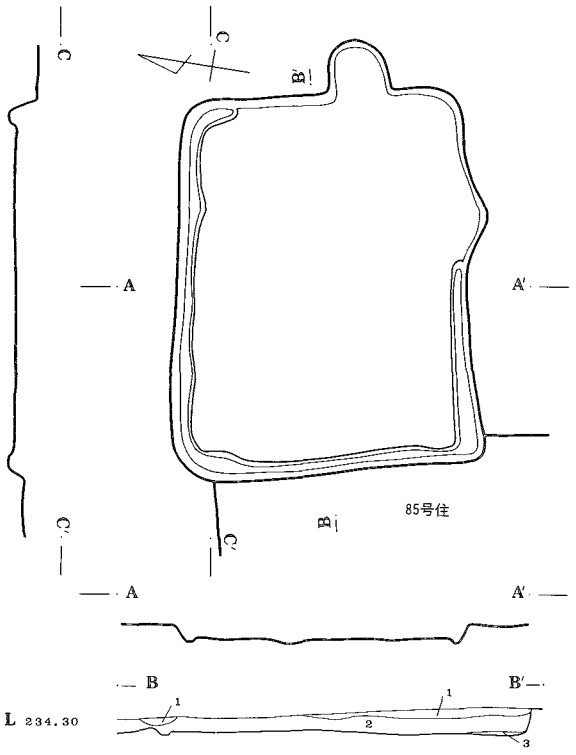
遺物はカマド内より須恵坏、埦、カマド手前左床面より灰釉坏が出土した。




B－85号住居跡

残存する部分では南北4.5mである。36号、86号、溝状遺構と重複し、全てに切り込まれているために形状は不明。北壁にカマドの一端が残るが、そのほとんどは溝状遺構に切られている。住居に伴うピット類は無い。

遺物は須恵坏片、土師甕片、坏片があり、非常に少ない。




1層：撹乱層。A軽石を含む褐色土層。
2層：軽6cm程のロームブロック及び微粒子を多量に含む黒色土層。しまりはない。
3層：地山部分。掘り過ぎ。

B－86号住居跡

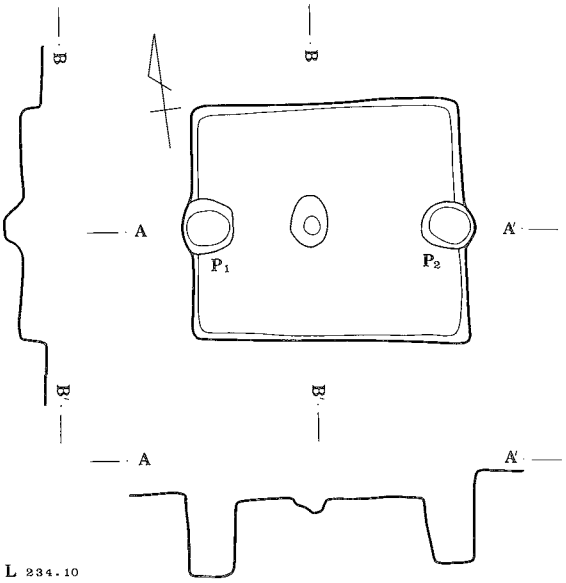
3.2m×4.0m、東西に長い長方形住居。南壁の張り出し部は性格不明である。残存する壁高は平均20cm程度と、比較的良好と言える。

カマドは東壁南寄りに造られている。楕円状に大きく張り出しており、壁の立ち上がりは急だが、これはカマド確認段階でいまひとつカマドと断定し得なかったため、少々掘り過ぎたかもしれない。袖部等の痕跡は全く無く、燃焼部が壁外であることはまちがいない。

ピット類は全く無かった。周溝は南東コーナーを除いて検出された。特に北壁においては比較的幅広ではっきりとしている。

本住居の床面は、地山のローム面を平坦に掘り凹め、凸凹は少なく、検出し易いものであった。

遺物は覆土より土師甕片及び須恵坏片1個が出土した。



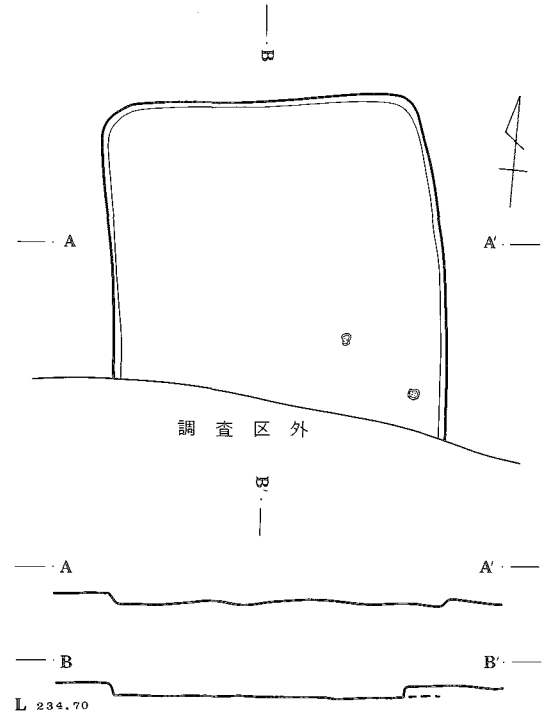

B－87号住居跡

2.9m×2.5m、東西の長い長方形を呈す。各コーナーは角をもち、西、東壁の中央は柱穴が張り出している。

壁柱穴$P_1$は西壁際に掘り込まれ、径55cm、深さ76cmを測る。$P_2$は径55cm、深さ68cmで、$P_1$、$P_2$共壁外へ10cm程張り出す柱穴である。中間西寄りにも浅いピットが確認されたが性格は不明。

本住居跡は、カマドの掘り込み、焼土等、全く検出されていない。柱穴の規模やその位置、２本主柱であること、又、壁高20～30cmと残存良好にもかかわらず遺物が非常に少ないこと、等は一般の竪穴住居ではないことを示しており、性格は不明と言わざるを得ない。

遺物は３個のみで、須恵甕、坏、土師甕いずれも小片が覆土より出土した。



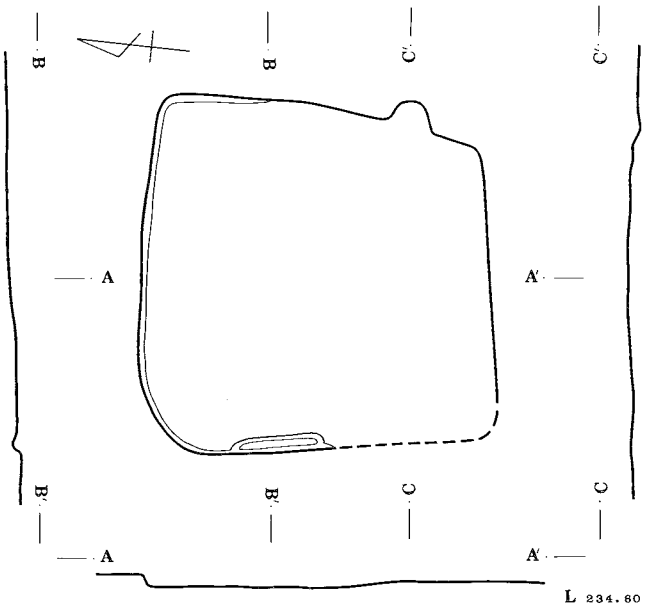

B－88号住居跡

南端部に位置し、住居南側は区域外のために不明。東西は3.5mを測る。

カマドの痕跡は全く無い。東壁北側の89号との重複部は平面精査では89→88の関係を示した。もし、これが逆であれば重複部のカマドが89号に切られた可能性も出てくるが、89号においては床面レベルが88号とほぼ同じ所見を得ており、カマドの痕跡は全く無かった。又、東壁カマドはそのほとんどが南寄りに造られており、北寄りのものは皆無という傾向もこれを裏付ける要素である。これらのことから、カマドは東壁区域外との可能性が考えられる。そうだとすれば南北がかなり長いものになろうが、ここでは東壁カマドと推定しておく。

ピット類は検出されなかった。

遺物は南東部床面より土師質土器坏、覆土より土師甕片が少量出土した。




B－89号住居跡

中央で3.7m×3.7mを測る、北側が広い不整台形状と言える。カマドは東壁南寄りに非常に小さいものが確認された。住居南側は残存状態が悪く、南壁の立ち上がりはほとんど無いくらいなので、カマド上部も随分と削られて小さくなっているのかもしれない。

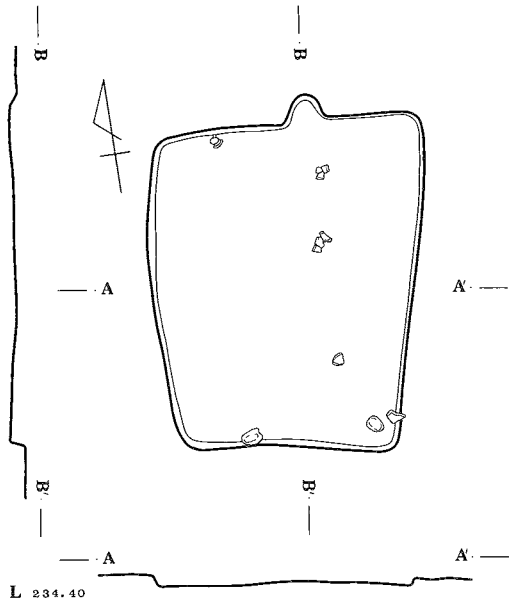
柱穴、貯蔵穴等は検出されない。遺物も少なく、須恵坏、埦、土師甕全て小片が数点のみであった。

B－90号住居跡

中央で3.4m×2.8mを測る不整長方形で北側は幅広。カマドは北壁中央に造られ、上部が削られているために残存部分は小さい。

住居床面は平坦で、地山のローム面を使用している。柱穴等のピット類は検出されない。

遺物は北壁際床面より土師坏、覆土より土師甕、須恵甕いずれも破片で少量出土した。又、南東コーナー覆土に楕円形の自然石、南壁中央には壁にはまる形で自然石が出土した。



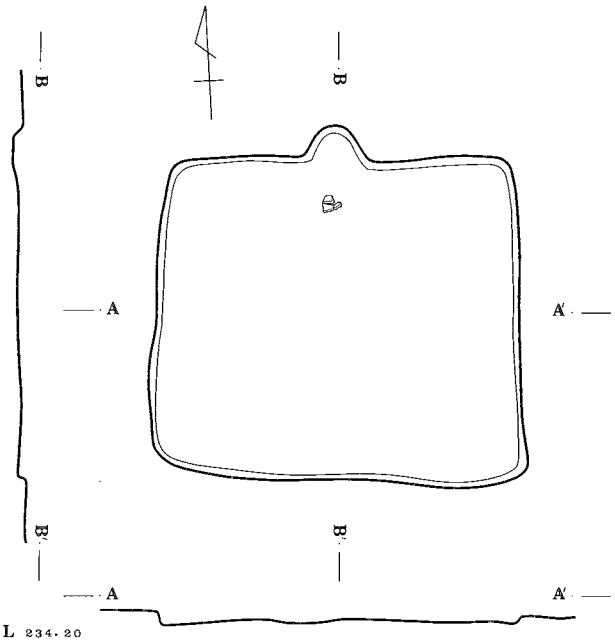

B－91号住居跡

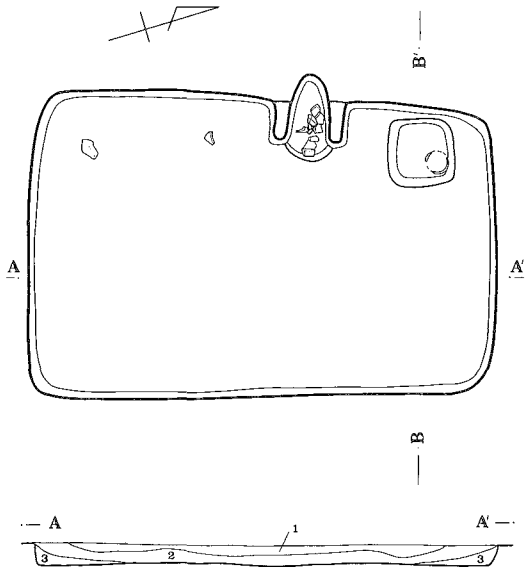
B区北側の半島状に突出した台地上に単独で占地している。3.9m×3.4mの、やや東西に長い長方形を呈す。

カマドは北壁やや西寄りに造られ、皿状の火床面は壁中間にその中心をもつ。袖部の痕跡は無い。手前床面に長胴甕片が出土した。

床面は、地山のロームを平坦に掘り凹めたもので、貼床の痕跡は無い。柱穴、貯蔵穴等のピット、周溝等も検出されなかった。

遺物は焚口付近の甕片の他に、覆土より土師甕片、坏片が少量出土した。






1層：黒褐色土層。
2層：1層にロームブロックを含む。
3層：1層と同じだがしまりがない。

## B－92号住居跡

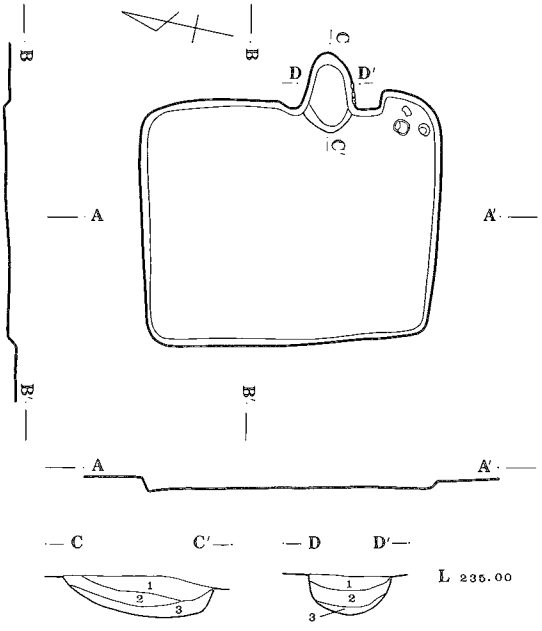
92号及び93号はB区北端にあり、他の住居跡が存在する台地との間に低地をはさみ、その北側の台地に占地している。

規模は3.2m×5.0mの長方形を呈し、南北が長い。壁高は20cmを測り、しっかりとした壁で残存状態は良好と言えよう。

カマドは西壁の南寄りに確認された。西壁カマドの類例は極めて少なく、B区では他に15号住居跡のみである。袖部は粘質土で造られ、壁内へ40cm程のび、その間の燃焼部は幅40cmと比較的狭い。壁外への突出は30cm弱で幅もさほど広くない。燃焼部の中心は壁の内側にあるようである。

柱穴は検出されない。貯蔵穴が長胴甕を伴って検出され、カマド右手の北西コーナーに存在する。形状は隅丸方形、70cm×70cmで深さは中心で約20cmを測り、平坦な底面に土師長胴甕が正置の状態で出土した。甕の底部は欠損していた。

遺物は他に、カマド内に土師長胴甕2個体分で、いずれも破片である。覆土中からは須恵埦、坏、甕いずれも小片で少量の出土であった。




1層：褐色土層。
2層：天井崩落層。
3層：貼床層。黒色土からなる。

## B－96号住居跡

2.6m×3.2mを測る、南北に長い小型長方形を呈す。カマドは東壁南寄りにあり、燃焼部の中心は楕円状に大きく壁外へ張り出す。右壁には板状石が残存している。カマド構築面は焚口より15cm程丸く掘り下げているが、その上に5cm程の貼床を施し、火床面はなだらかな斜面になっている。袖部の痕跡は無い。

南東コーナーの東側は突出しているが、これは調査時の地面の状態が悪く、はっきりした壁の立ち上がりとは言い難い。坏類が集中していた。

柱穴、貯蔵穴等、ピット類は全く検出されていない。

遺物は東南コーナー床面より土師坏2、須恵坏1、また覆土より土師甕片、坏片が出土した。

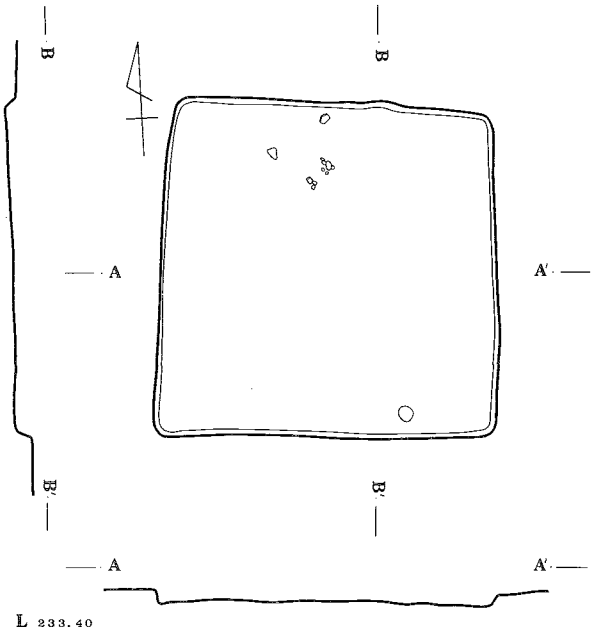
### B－93号住居跡

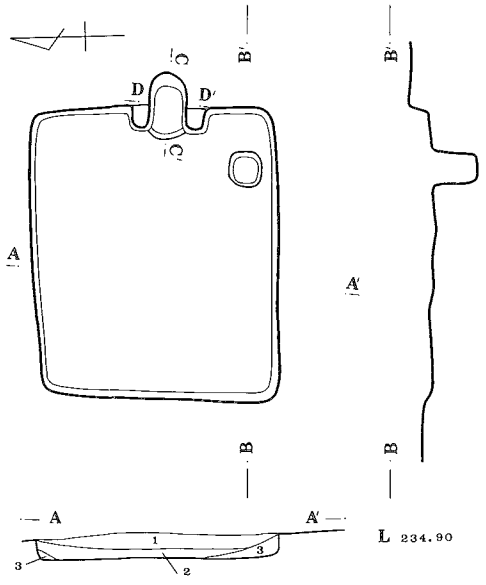
92号に隣接したB区北端の台地上にある。3.5m×3.6m、ほぼ正方形で各コーナーは比較的角ばっている。

カマドの痕跡は北壁東寄りに検出された。僅かに突出した壁の内側に焼土痕があり、これをカマド跡とした。袖部は全く検出されていない。

柱穴、貯蔵穴等のピットはやはり検出されない。

遺物は覆土より土師甕片少々と土師坏が出土した。




1層：黄褐色軽石粒子を含む黒褐色土層。
2層：ロームブロックを含む黒色土層。
3層：黒褐色土層。

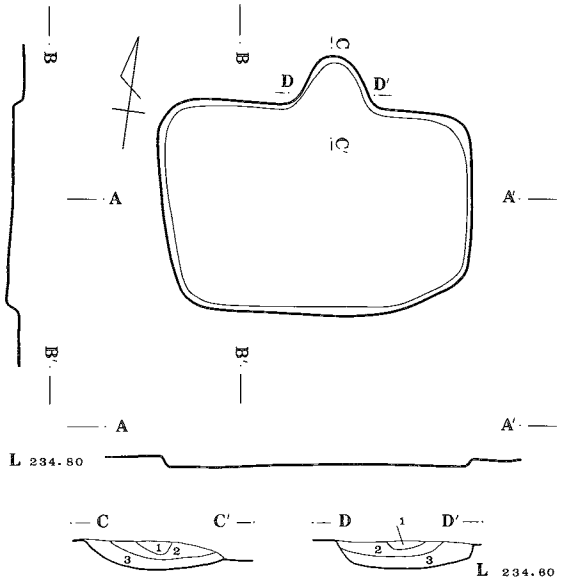
### B－95号住居跡

中央で3.3m×2.2mを測る、東西に長い小型長方形。南東コーナーはやや斜めに掘られ、平面形は不整形。

カマドは燃焼部が大きく外側へ張り出しており、袖部をもたない。北壁中央に位置し、地山の火床面は焚口より5～6cm程浅くなだらかに掘られている。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されなかった。

遺物は少なく、覆土より土師坏小片が4～5片出土したのみ。



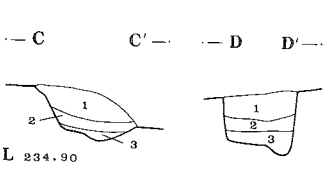

1層：天井崩落層。灰褐色粘質土がよく焼けている。
2層：焼土及び黒色土の混在。
3層：灰及び黒色土の混在。

### B－94号住居跡

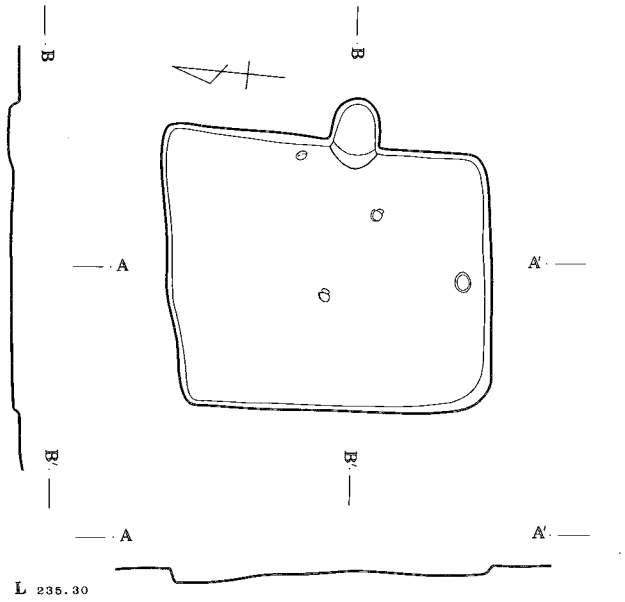
3.1m×2.6mで、東西に長い長方形である。カマドは東壁中央に造られ、壁外への掘り込みは楕円状に35cm程を測り、両側には短い袖部が存在する。火床は黒色土による貼床で、地山は手前から右にかけて凹んでいた。

南東コーナーやや西側に貯蔵穴をもつ。上端は不整隅丸方形で一辺36cm程、深さは45cmを測る、柱穴は検出されなかった。

遺物は少なく、覆土より土師坏、彫恵坏それぞれ小片が1点ずつ、他に土師甕片が数点出土した。




1層：焼土ブロックを多量に含む褐色土層。
2層：天井崩落層。灰白色粘質土。
3層：貼床層。黒色土。



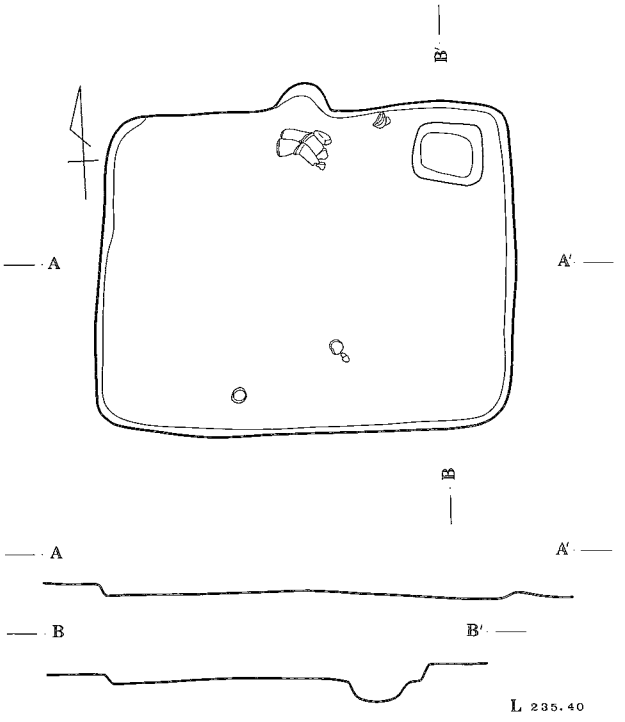

B－97号住居跡

中央で3.5m×2.9mを測る不整長方形。南北が長く、北東コーナーは尖り気味に張り出している。

カマドは東壁中央に造られている。楕円状に大きく壁外に張り出し、焚口より僅かに低い火床面は、地山がよく焼けて赤灰色を呈す。カマド内の壁は火床からくっきりと上方に立ち上がっており、やはりよく焼けている。

柱穴、貯蔵穴等のピットは検出されなかった。

遺物は、住居中央付近床面やや上より土師坏、須恵塊、南壁際覆土より須恵蓋、他、覆土中より須恵坏、土師甕片等が出土した。



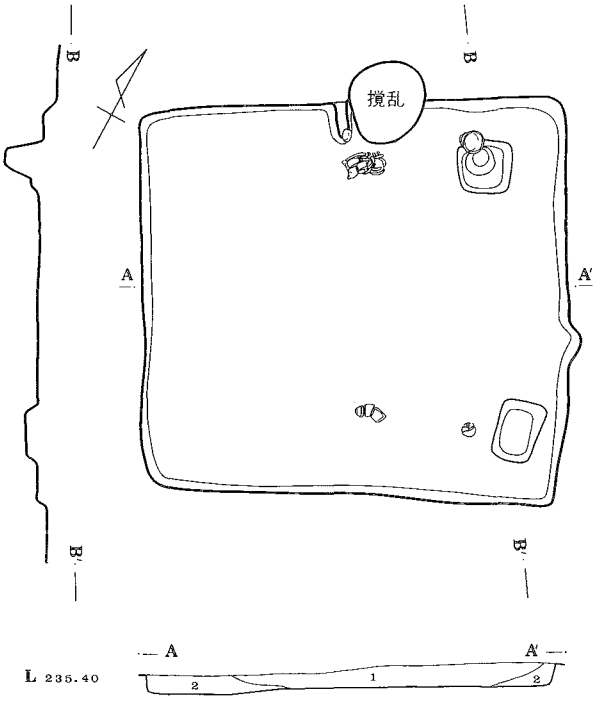

B－98号住居跡

4.4m×3.4mの、東西に長い長方形を呈す。カマドは北壁中央で、カマド左手の北壁部分は黒いしみ状の攪乱が入っていたために壁が明瞭ではなく、掘り過ぎた。

カマドの、壁外への張り出しは30cm弱を測る。手前床面には、土師甕が左向きに組まれた形で２個と、その奥に約20cm程の細長い自然石が検出された。甕の出土状態より、鳥居状の焚口をなしていたことが窺える。ただ、左側は攪乱が入っているが、右側は壁の残りも悪くはないので、袖部が確認出来てもよいと思われるが不明である。壁外への張り出しが小さいこと、甕の出土状態、位置等は、袖部をもつ燃焼部壁内型のカマドである可能性が高いと思われるだけに、袖部の痕跡が不明なのは疑問の残るところである。

北東コーナーに貯蔵穴を検出した。不整長方形で、75cm×60cmを測り、深さは中央で20cm、底部は皿状を呈している。柱穴は検出されなかった。

遺物はカマド内より土師甕片、焚口付近より土師甕２個体、右手床面より土師甕片、住居南側覆土より土師坏３個、又、覆土より土錘片が出土した。




1層：黒色土層。
2層：ロームブロックを含む黒色土層。

横倒しの状態であった。明確な2個の状態は不明だが、出土位置、個体数、倒れ方等は、甕を組んだ鳥居状の焚口であったことを窺わせる。カマド右手に貯蔵穴があり、一辺60cm弱の隅丸方形の上端は南側で1段を有し、北側に沿って径30cmの落ち込みがある。深さは床面より40cmである。

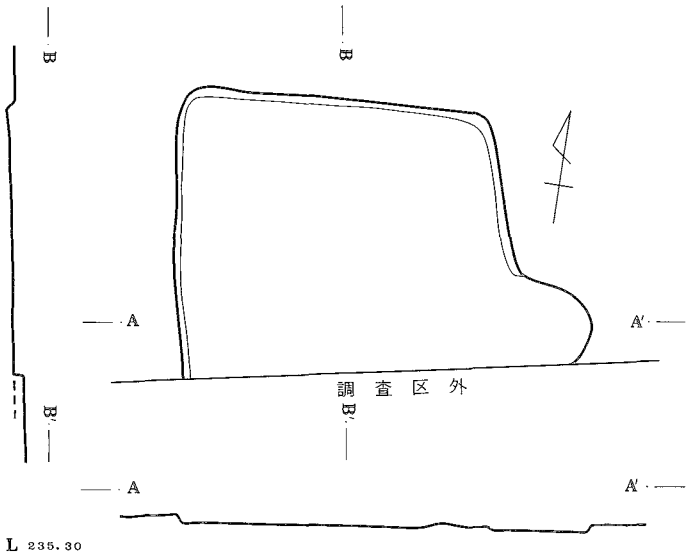
### B－99号住居跡

4.2m×4.5mを測り、僅かに東西が長く、住居東半が広めの正方形に近い形状である。

カマドは北壁中央及び東壁やや南寄りに確認した。東壁カマドは壁外へ10cm弱の小さな張り出し部と、火床の焼土痕が検出された。袖部の痕跡は不明で、火床は床面とほぼ同一レベルを保つ。この東カマドは、後述する北カマドに比べ、使用していたと思われる痕跡が少ない。袖部の残存状況、焼土の量、遺物の出土状況からみて、北壁にカマドに造り替える以前のカマドであろう。カマド右手の南東コーナーには、東カマドに伴う隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。65cm×45cmで深さは約10cm、カマドを正面にみて横長の貯蔵穴で、底部は平坦であった。

北壁カマドは右袖部から上半部にかけて攪乱を受けている。残存する左袖部は粘質土で構築され、端部の焚口には自然石を据える。壁外への据り込みは全く無い。完全な燃焼部壁内型と言える。焚口床面に出土した土師甕は2個体分で、右側のものは複雑に破損していたが、左側の甕は左北側上端に土師長胴甕が胴下半がそっくり欠損した状態で出土している。

遺物は他に覆土より土師坏、鉢、甕片、須恵蓋片等が出土した。柱穴は検出されなかった。

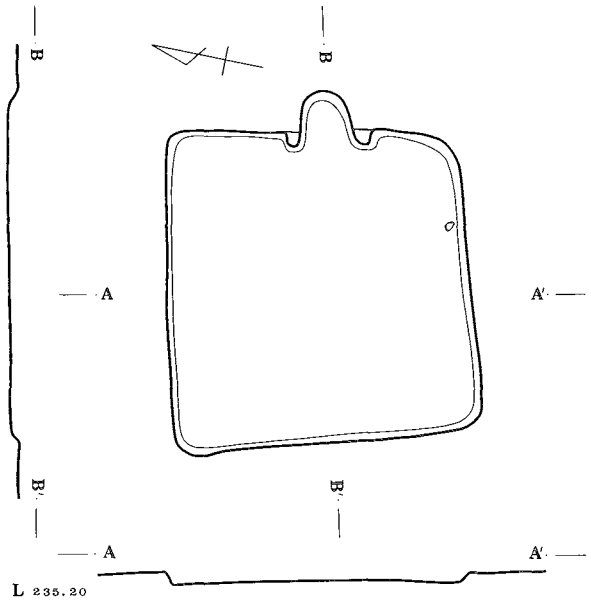



### B－100号住居跡

中央で東西3.6mを測る、南側は区城外で、道路の側壁に沿って攪乱が入っているために形状は不明。

カマドは東壁に造られる。残存状態が悪く、明確なプランは不明。焼土の範囲、火床面と思われる地山の形状等より、壁外への掘り込みは70cm強、幅は1m程の大型のカマドになろう。袖部痕は検出されない。柱穴、貯蔵穴等のピット類も全く検出されなかった。

遺物は少なく、土師坏片1点と土師甕小片が少々の出土であった。

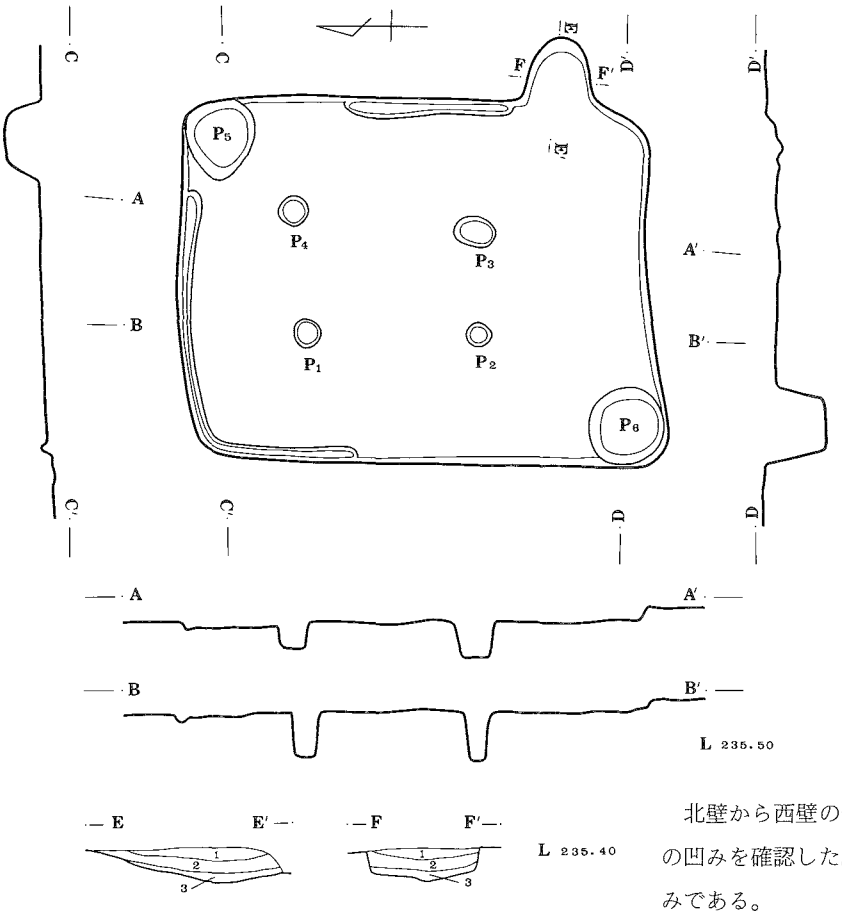



## B－101号住居跡

中央で3.3m×3.3mを測る不整正方形。南東コーナーのみ他より張りが小さい。

カマドは東壁中央に造られており、楕円形に張り出す燃焼部と壁両内側に粘質土で構成される短い袖部を確認した。火床は住居床面と同一レベルであり、立ち上がりはゆるやかである。地山のローム面がカマドの火床、住居の床面である。住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド内よりコの字状口縁の土師甕片が出土している。




1層：焼土を含む黒色土層。
2層：天井崩落層。黒色土と焼けたロームの混在。
3層：焼土層。

## B－104号住居跡

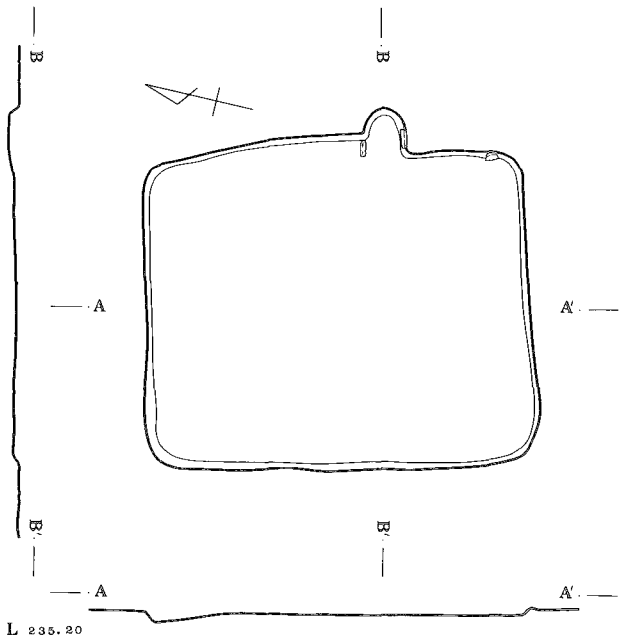
中央で3.9m×5.0mを測る、南北に長い長方形。カマドは東壁南端近くで、燃焼部は70cm程楕円形に大きく張り出す。火床面は地山を僅かに皿状に掘り下げ、壁外まで徐々に立ち上がる。袖部の痕跡は全く無い。

$P_1$から$P_4$の柱穴が検出された。北側の$P_1$と$P_4$は壁より1.3m内外だが、南側の$P_2$と$P_3$は1.8mを測り、内側に寄っている。径は平均して30cm弱、$P_3$はやや大きめで長径15cmを測る。深さは$P_1$48cm、$P_2$50cm、$P_3$40cm、$P_4$25cmで浅い。

住居北東及び南西コーナーの壁際に検出されたピットは性格不明であるが、本住居に伴うものと思われる。$P_5$は東西径80cm、深さは中心で40cmである。$P_6$はやはり径80cmで比較的整った円形、深さは50cm強で底部は平坦であった。

北壁から西壁の一部と、東壁の中央付近の一部に周溝状の凹みを確認した。幅10cm強、深さは5cm程の小さめの凹みである。

遺物は土師質の小型坏、土釜片、灰釉皿片等が覆土より出土した。

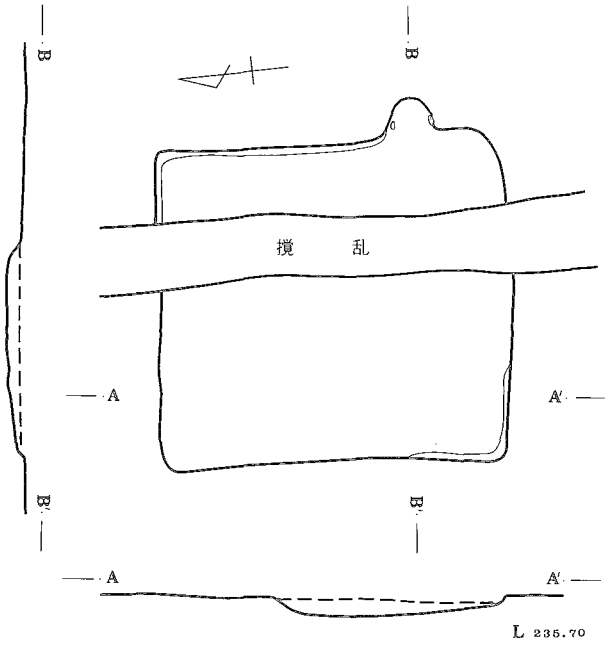



B－102号住居跡

中央で3.5m×4.1mを測る、南北に長い長方形を呈す。カマドは東壁南寄りにあり、幅40cm強で半円形に張り出す。住居の規模に比して小さめのカマドと言える。火床は地山で、焚口より5cm程わずかに低く、立ち上がりは比較的急である。壁、火床共に赤灰色によく焼けた痕跡を留める。焚口の両壁は板状石が据えられていた。左側は当初袖部として見誤った部分の掘り残しである。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されなかった。

遺物は覆土より須恵甕片、坏片、土師甕片等が少量出土している。



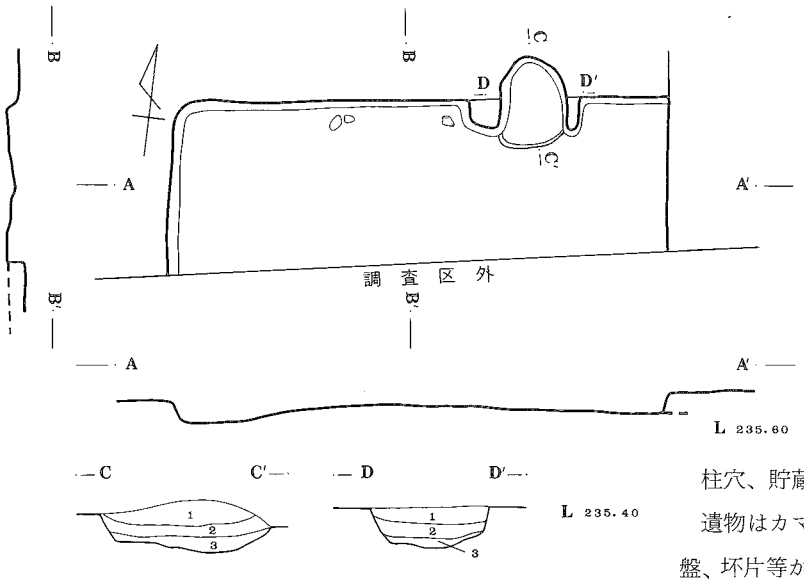

B－105号住居跡

残存状態が悪く、東壁及び南西コーナーで少々壁の立ち上がりが分かる程度である。僅かな覆土より、3.8m×3.3mの長方形プランが確認出来た。住居中央東側は南北に走る後世の溝状遺構に切られている。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅50cm、壁外へ30cm程半円状に張り出す燃焼部は、焚口やや奥の両壁に小さな板状石を据えてあり、火床は床面とほぼ同一レベルである。

床面の検出は霜のため思うようにゆかなかった。南西部は凍った地面が剝がれたりして、床面がもち上がってしまった。東側はローム粒混じりの黒色土による貼床であり、ほとんど壁の残りが無い北西部はロームの床面が確認出来た。住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物は須恵甕、土師甕いずれも小片で数点出土したのみである。




1層：天井崩落層。焼けたローム及び焼土が混在し、明赤灰色を呈す。
2層：焼土層。
3層：貼床層。ロームブロックが主体で若干焼土を含む。

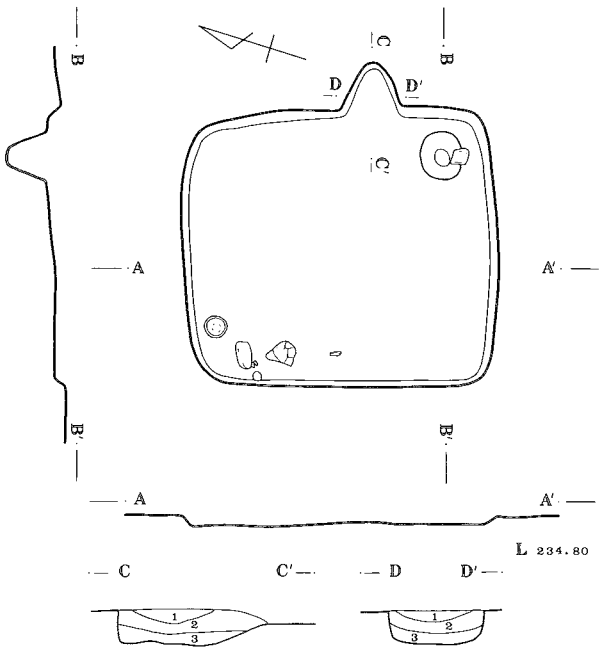
### B－103号住居跡

北壁と西壁の一部を確認したのみで、南側は区域外、東側も攪乱のため不明である。

カマドは北壁に造られる。焚口より10cm程皿状に掘られた地山に、焼土混じりのロームを貼床して火床面とする。左右に短い袖部をもち、燃焼部は壁の中間にその中心をもつ。焚口付近は焼土粒が散り、赤褐色である。

柱穴、貯蔵穴等のピットは検出されなかった。

遺物はカマド内及び覆土より土師甕片、覆土より須恵盤、坏片等が、又、北壁側床面近くより自然石が2個まとまって出土した。




1層：天井崩落層。黒色土及び焼けたロームの混在。
2層：焼土層で中央部に少々黒色土が混じる。
3層：貼床層。ローム及び黒色土の混在。

### B－106号住居跡

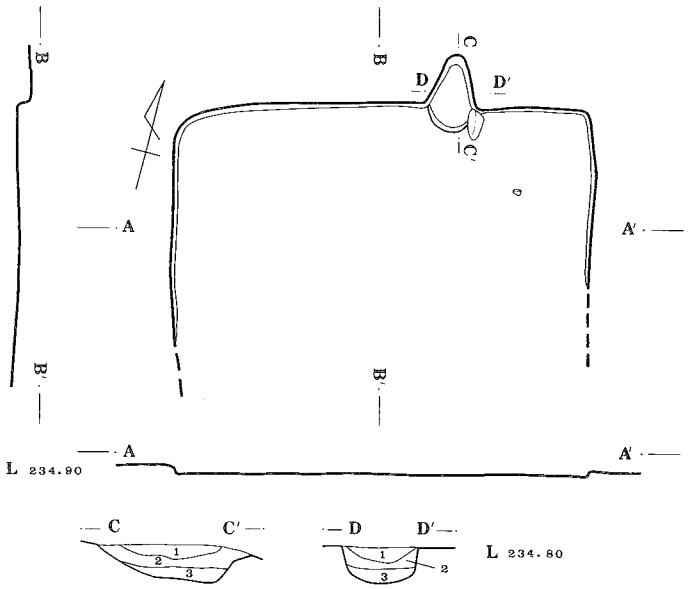
B区北西部の半島状微高地上にある。3.3m×2.9mを測り、やや南北が長い、張り気味の長方形を呈す。

カマドは東壁中央やや南寄りに造られ、隅丸三角形状に壁外へ張り出す。焚口から燃焼部はゆるやかな斜面で、煙道への立ち上がりは直角に近く、急である。地山にローム粒と黒色土で約5cmの貼床をし、焚口より約5cm低い平坦な火床を形成していた。袖部や石の痕跡は無く、燃焼部の中心は壁中間から壁外にあると思われる。

カマド右手の南東コーナーに貯蔵穴を持つ。径50cm内外の楕円形で底部は狭くなっている。南肩口に焼けた板状の自然石が検出された。

柱穴は検出されていない。

遺物は北西コーナー床面より須恵脚付盤、土師球胴甕片、又、25～30cm程の自然石が据えられる。覆土より土師坏片、甕片等が少々出土した。



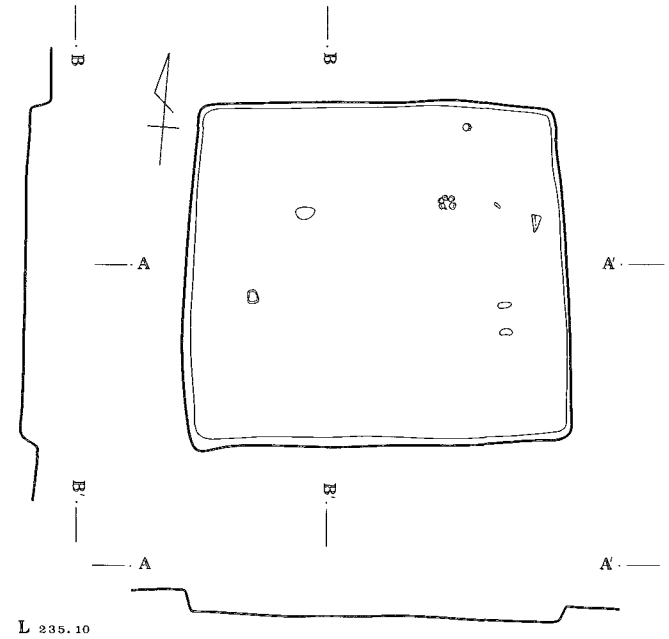

1層：天井崩落層。黒色土及び焼けたロームの混在で、暗赤褐色を呈す。
2層：焼土ブロック主体の焼土層で少々黒色土が混じる。
3層：貼床層。ローム及び黒色土と少々焼土粒を含む。

### B－107号住居跡

住居北半分のみ残存し、斜面にかかる南半分は不明。東西で4.5mを測る。壁高は平均10cmである。カマドは北壁東寄り。細長い三角形状の張り出しは根元で55cmを測り、焚口右に自然石が据えてあるのを確認した。焚口より約45度の掘り込みは約15cmで、徐々に立ち上がり煙道へ続く。直上にローム粒と黒色土で貼床をし、火床は焚口より5cm程の位置に造られる。

柱穴、貯蔵穴等、ピット類は全く検出されない。

遺物は覆土より土師坏、土師球胴甕片が出土した。

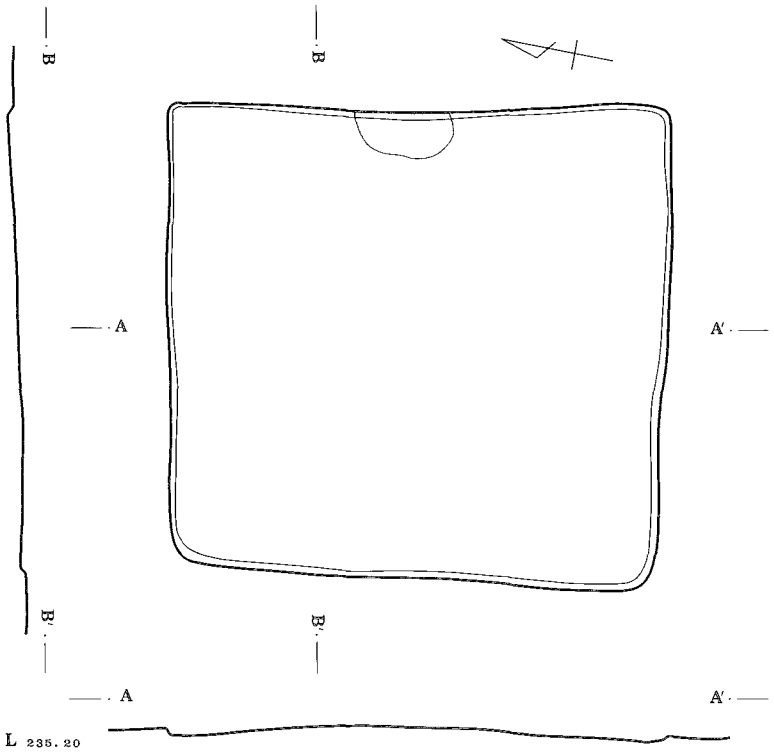



### B－108号住居跡

4.1m×3.6mの、東西に長い長方形を呈し、各コーナーは直角に近い。残存する壁高は平均して20cm弱程である。北壁全体をしみ状の攪乱が覆い、北壁は明確なものとは言い難い。中央やや東寄り壁際に焼土の痕跡を確認し、これをカマドの位置と判断した。掘り込みは全く検出されない。

柱穴、貯蔵穴等のピット類も全く検出されなかった。

遺物は床面より土師坏、覆土より土師坏片、甕片が出土した。又、床面東側よりこも石状の自然石が2個出土した。

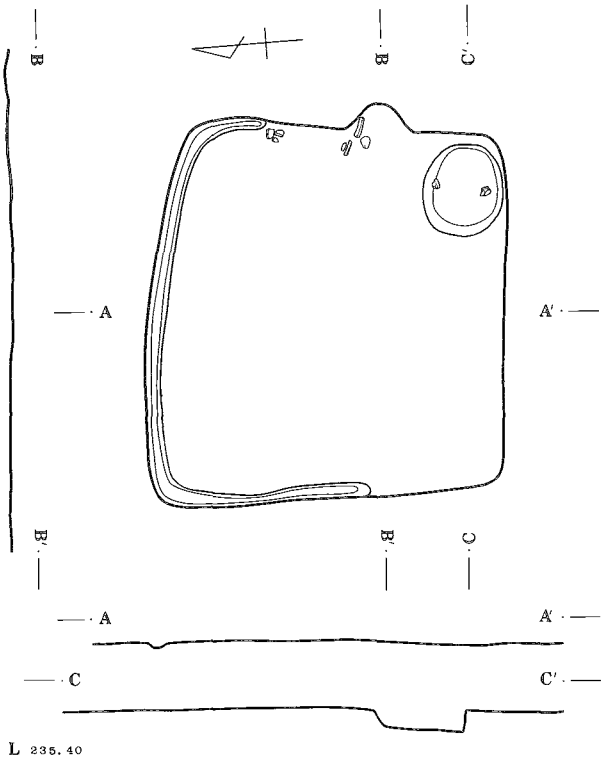



B－109号住居跡

中央で4.9m×5.3mを測る。僅かに南北が長く、住居東側が広めである。残存する壁高は５～10cm弱と悪い。

カマドの掘り込みは無いが、東壁中央に焼土が検出され、カマドの痕跡と判断した。柱穴、貯蔵穴等、ピット類は全く検出されていない。

遺物は少量で、土師坏片、甕片が出土した。




B－113号住居跡

南側半分は壁が残らず、貯蔵穴及び覆土よりプランを推定した。残存する北側で東西4.1m、南北は推定3.8m。

東壁にカマドを検出した。残存状態が悪いため、壁外への明確な掘り込みは不明である。左壁から右袖部（推定）付近にかけて板状石が据えられ、焚口から下への掘り込みはほとんど無い。

カマド右手に貯蔵穴を持つ。径90cm内外の楕円形で深さは20cm、底面は広く平坦である。土師質埦、土師甕片が出土している。

西壁中央から北壁にかけて、周溝が検出された。この周溝によってプランが判明している。

柱穴は検出されなかった。

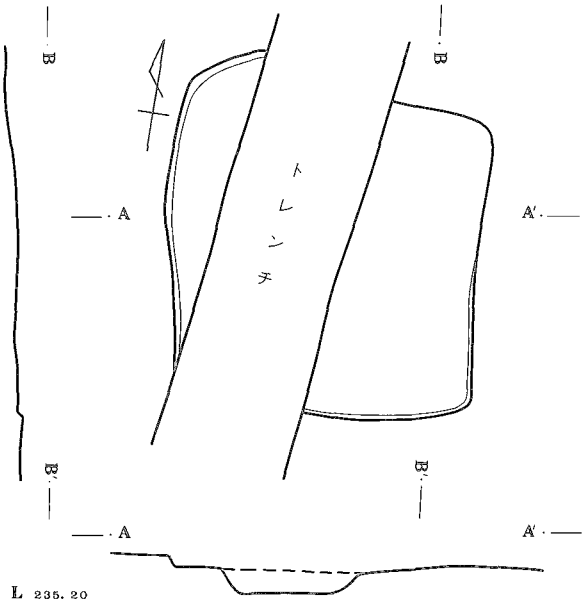
遺物は貯蔵穴内以外に、カマド左手東壁際より土師質

### Ｂ－110号住居跡

中央付近を南北にトレンチが入っており、住居の半分近くは不明である。中央で東西3.3mを測る、南北に長い不整長方形と言えよう。壁高は西壁で15cm、東壁から北壁にかけてはほとんど残らない。

カマドの痕跡は全く無い。トレンチに切られていると思われ、南壁カマドの類例が本遺跡では見られないことから、北壁カマドであったと推定する。

住居に伴うピット、遺物等、全く検出されていない。



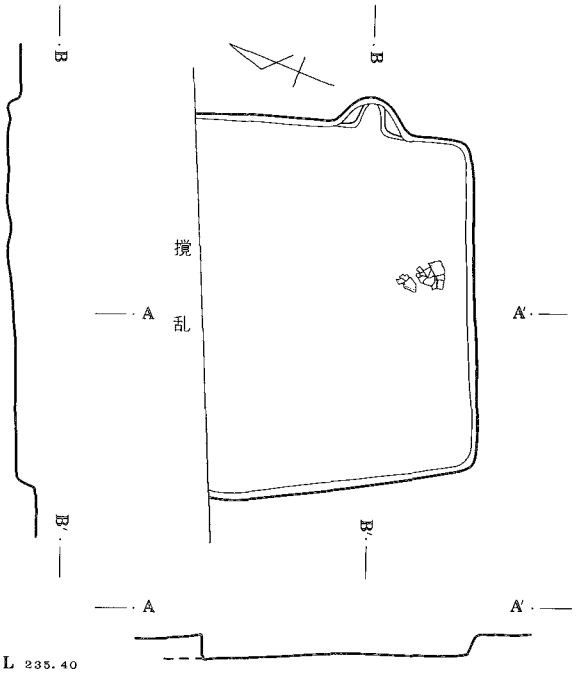

### Ｂ－111号住居跡

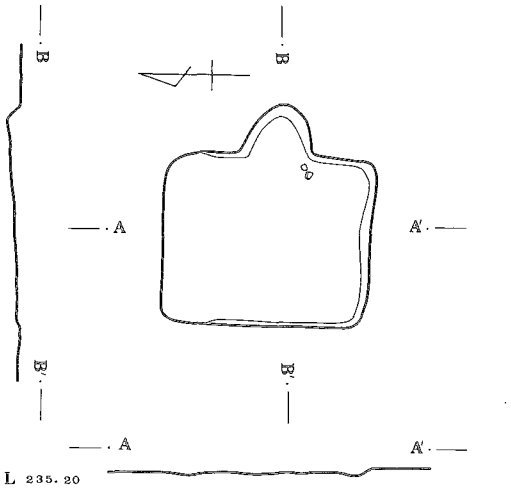
微高地北端の斜面に構築される。北壁は耕作用水路の攪乱のため確認出来ない。北側が開き気味の台形状で、残存する部分の中央で東西3.9m、壁高20cm弱を測る。

カマドは東壁南寄りで、幅70cm、壁外へ30cmの弧状の浅い掘り込みの内側に、一段下がって幅30cmの細い掘り込みがある。袖部の痕跡は全く無い。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されない。

遺物は、住居南側覆土より土師球胴甕、他に土師甕片、坏片が出ている。



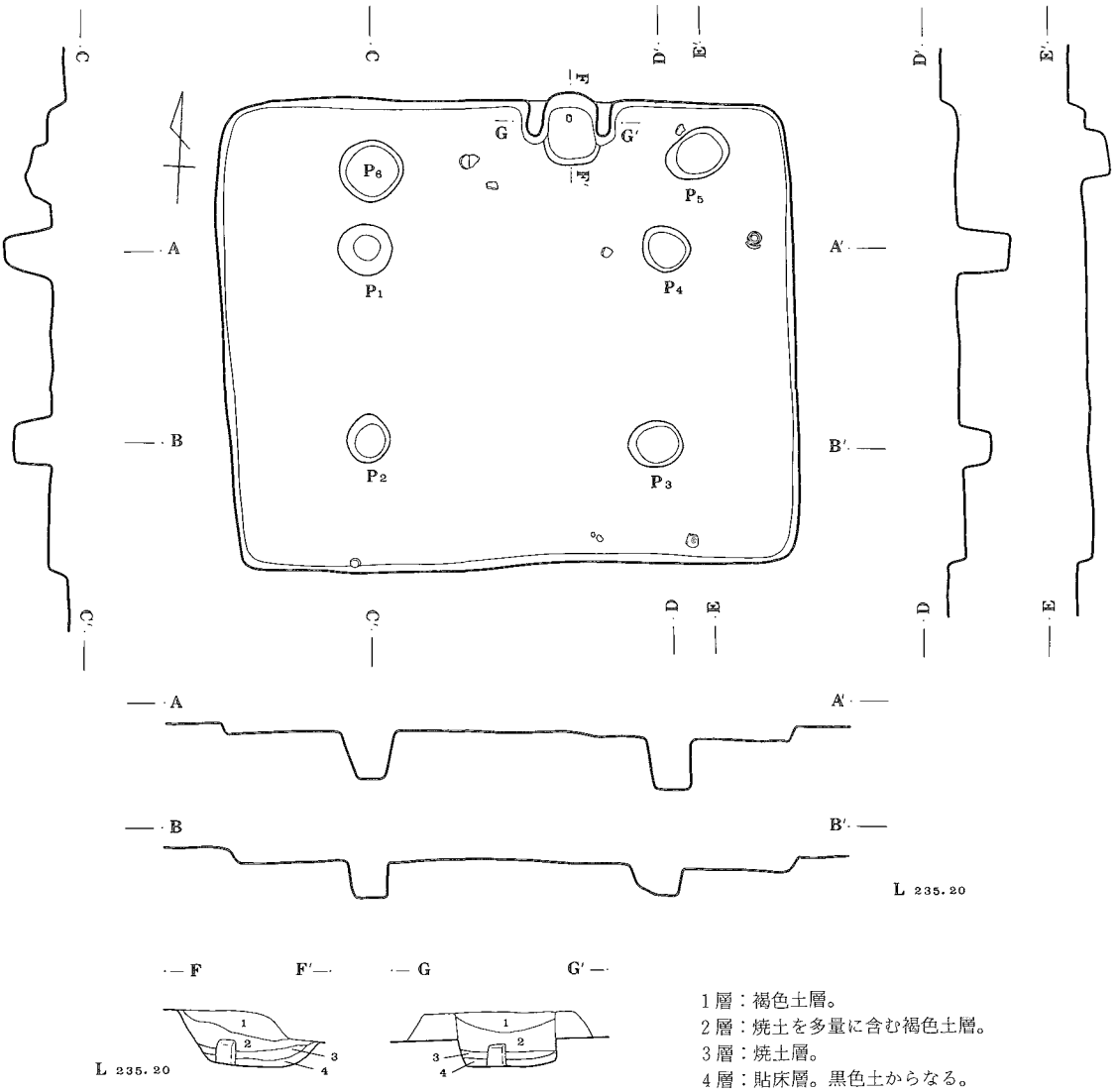




### Ｂ－112号住居跡

比壁はほとんど残存せず、覆土の範囲からプランを判断した。東西1.8m、南北2.2m内外の超小型長方形と言える。カマドは東壁中央にあり、壁外へ楕円状に大きく張り出す。幅70cm、長さ55cmを測る。火床は住居床面と同一レベルで、貼床の形跡は無い。ピットも全く検半されなかった。

遺物はカマド焚口右手覆土に須恵坏片、覆土よりコの字状口縁の土師甕片が少々出土した。

大型坏、覆土より彫恵坏片、コの字状口縁土師甕片等が出土した。




B－114号住居跡

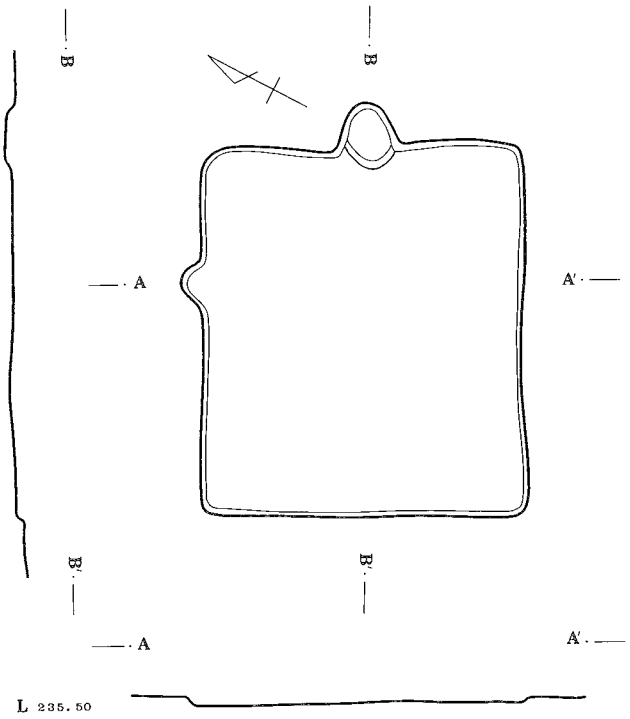
6.1m×4.9mを測る、東西に長い大型の長方形である。壁高は15～20cm程が明確に確認出来た。

カマドは北壁東寄りに造られる。壁外への張り出しはほとんど無く、粘質土でつくった袖部が45cm程壁内に残る。内部は焚口より浅いピット状に掘られた地山に黒色土で5cm程貼床を施し、火床とする。中央やや左に四角柱状の石製支脚を検出した。

柱穴は4個検出され、$P_1$～$P_4$がそれにあたる。東西径はそれぞれ$P_1$58cm、$P_2$46cm、$P_3$58cm、$P_4$50cmで、深さは$P_1$50cm、$P_2$40cm、$P_3$32cm、$P_4$55cmと、南側2個がやや浅い。

$P_5$と$P_6$は柱穴よりひとまわり大きく、浅いピットである。$P_5$は長径68cmの楕円形、$P_6$は径68cmの円形で、深さはそれぞれ26cm程を測る。カマド右手にあたる$P_5$は、その位置より貯蔵穴としての可能性が高い。$P_6$は、この位置にピットを持つ住居の類例が無く、性格は不明だが一応貯蔵穴状ピットとしておく。

遺物は、カマド左手床面に土師球胴甕、手前床面より土師坏、貯蔵穴$P_5$肩口に須恵坏、東壁付近床面より土師坏にかぶさるように須恵蓋？状の土器が出土する。覆土からは土師甕片、坏片、須恵蓋が出土した。



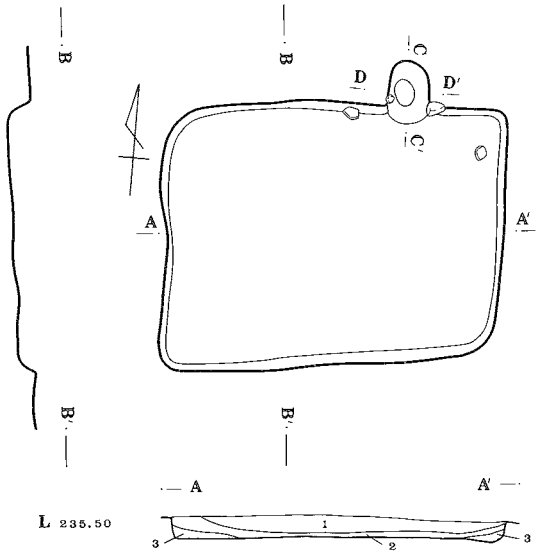

### B－115号住居跡

3.9m×3.4mを測り、東西に長い整った長方形を呈する。残存する壁高は5cm強。

カマドは東壁中央及び北壁東寄りにその痕跡を検出した。東壁カマドは幅65cm、張り出しは45cmを測り、焚口より8cm程皿状に浅く凹む。北壁カマドは幅50cm、張り出しは20cmで燃焼部の凹みは無い。東壁、北壁共に袖部の痕跡は無く、残りが良いとは言えないが、東壁の火床は北壁よりも明確で焼土も多く、最終的に使用されていたものと思われる。北壁カマドからの造り替えであろう。

住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物は覆土より土師甕片及び坏片が少々出土した。




1層：軽石微粒子をまばらに含む黒色土層。しまりなし。
2層：ローム微粒子をまばらに含む黒色土層。しまりなし。
3層：径5～10cmのロームブロック主体層。

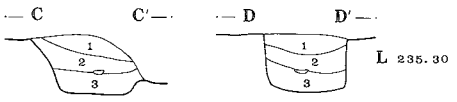
### B－116号住居跡

中央で3.6m×2.8mを測る小型長方形住居。壁高は約20cmと比較的良好である。

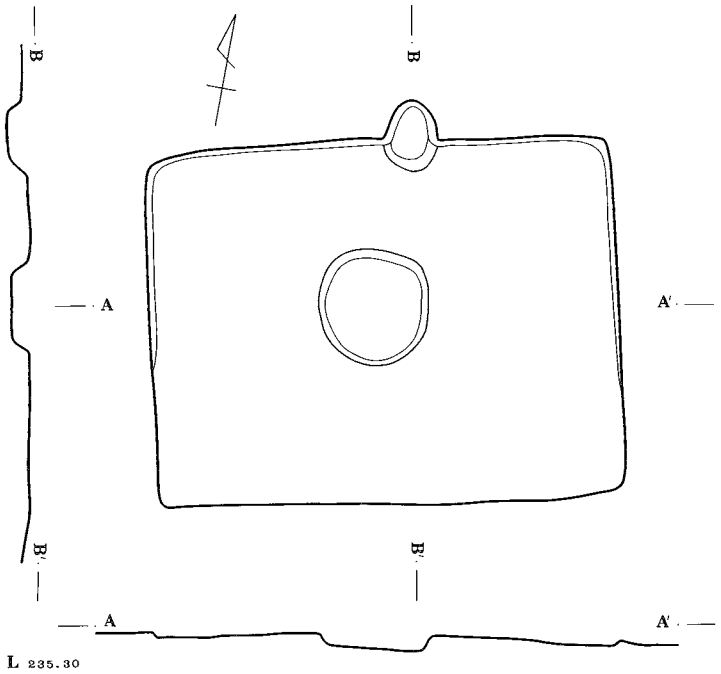
カマドは北壁東寄りで、楕円状に張り出す燃焼部は40cm、幅45cmを測る。焚口より約5cm掘り下げた地山のローム面は平坦で、立ち上がりは比較的急と言える。直上に約10cmのロームと黒色土の層が検出されているが、この上面は焚口よりも5cm以上高く、貼床による火床面とは言い難い。疑問の残るところである。焚口両側には自然石が据えられていた。又、カマドの壁から焚口付近はよく焼け、赤褐色を呈していた。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド左手床面に須恵甕片、カマド内に土師甕片、北東コーナー覆土より土師坏、他、覆土より土師甕片が出土した。




1層：黄褐色粘質土層。
2層：黄褐色粘質土層で焼土を含む。1層と共に天井崩落層をなすと思われる。
3層：ローム及び黒色土の混在。



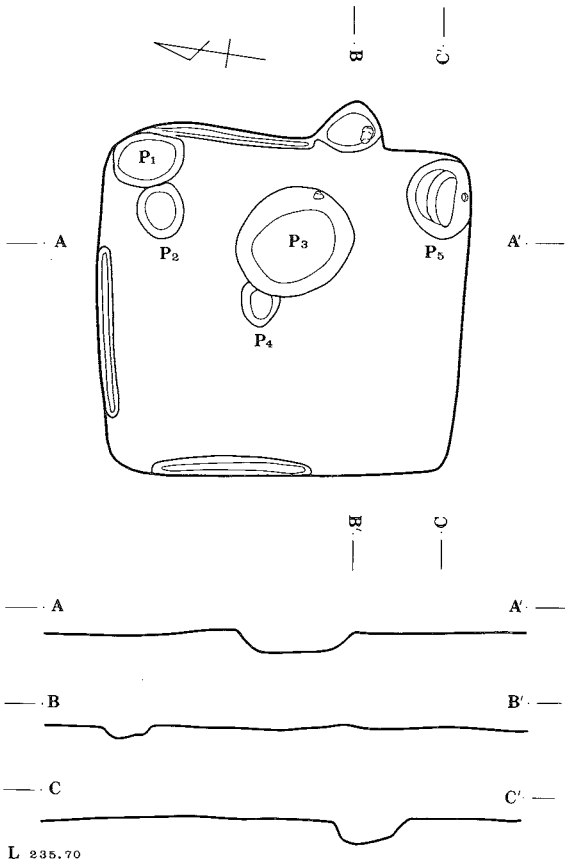

B－117号住居跡

東西5.0mを測る。住居南側は壁が残存せず、覆土からの推定ラインで約3.8mである。

カマドは北壁中央やや東に検出された。焚口からピット状に18cm程地山が掘り込まれるが、明確な火床は不明であった。壁外への張り出しは幅55cm、長さ40cmを測る。

住居床面中央に土坑を検出した。径1.2m程の比較的整った円形で深さは18cm、底部は平坦であり、黒色土及び焼土に覆われていた。

柱穴、貯蔵穴は検出されない。遺物も皆無であった。



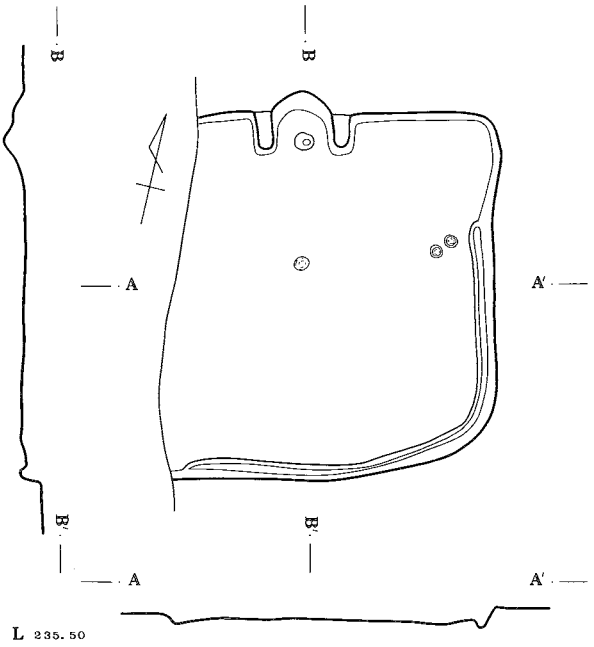

B－119号住居跡

南壁以外、部分的に周溝が確認出来、壁の立ち上がりはほとんど残らない。プランは周溝及び貯蔵穴の位置と僅かに残る覆土より判断した。南壁大部分は攪乱が入り込む。

東西3.6m、南北は推定4m弱でやや南北に長い長方形であろう。カマドは東壁南寄りで、幅70cm、壁外へは50cm弱で隅丸三角形状に張り出す。火床は地山のローム面を掘り込んでおり、中心で深さ14cmを測る。住居床面もローム面を平坦に掘り込んだものである。カマド部に袖部や石は検出されなかった。

住居に伴うと思われるピットは東側に集中する。$P_1$、$P_2$は北東コーナーにあり、$P_1$は長径90cm、短径55cmの楕円形、$P_2$は長径60cm、短径50cmの楕円形でボウル状の底部は深さ約15cmを測る。$P_3$は住居中央東側で、西側に$P_4$が掘り込まれる。$P_3$は1.2m×1.1m、深さ約20cmを測るボウル状底部のピット、$P_4$は径40cm弱の小ピットである。$P_5$は84cm×68cmの楕円形で南側はさらに一段低く、深さ20cmを測る。南壁より須恵坏片が出土した。位置的に見て、$P_5$を貯蔵穴と考え、$P_3$は所謂床下土坑、他は不明である。

遺物は他に須恵坏片、土師甕片が覆土より出土した。



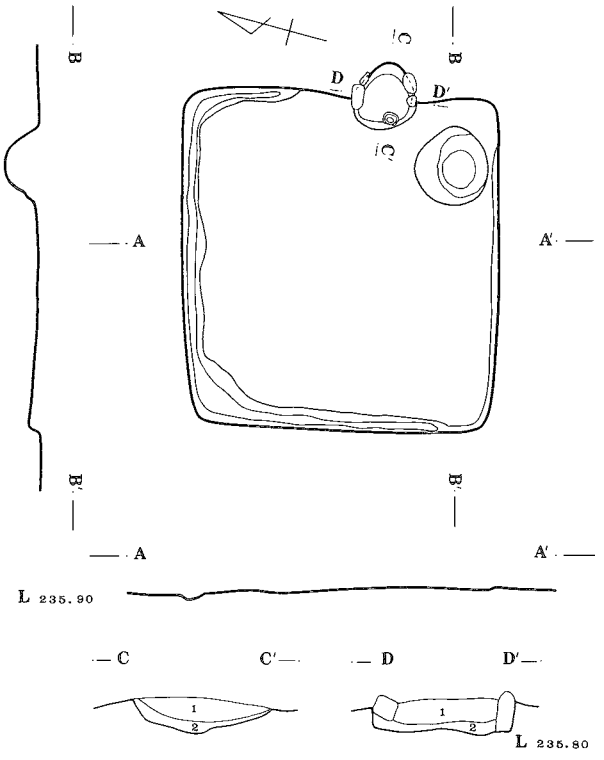

## B－118号住居跡

住居西側は攪乱に切られており不明。南北は3.8mを測る。南壁東側はホームベース状に斜めに掘り込まれ、東壁から南壁にかけて周溝が巡る。壁高は床面より約15cm残存する。

カマドは北壁である。幅60cmで張り出しは20cmと小さく、壁内に粘質土で造った袖部を持つ。火床は地山のローム面で焚口より斜めに浅く落ち、徐々に立ち上がる。凹凸が多く、壁より30cm内側の小ピット状の落ち込みは支脚痕であろうか。

住居床面も比較的凹凸が目立つ。地山であるローム面と黒色土がまだらになって床面を形成しているが、明確な貼床面は検出されなかった。周溝の他、柱穴、貯蔵穴等は検出されない。

遺物は東壁付近床面より土師坏、須恵蓋、覆土よりやはり土師坏、須恵蓋、土師甕片等が出土した。




1層：焼土及び褐色土の混在。
2層：貼床層。黒色土からなる。

## B－120号住居跡

3.6m×3.4mでやや東西が長い長方形を呈す。壁高は西側で15cm弱、東側ではほとんど残っていない。

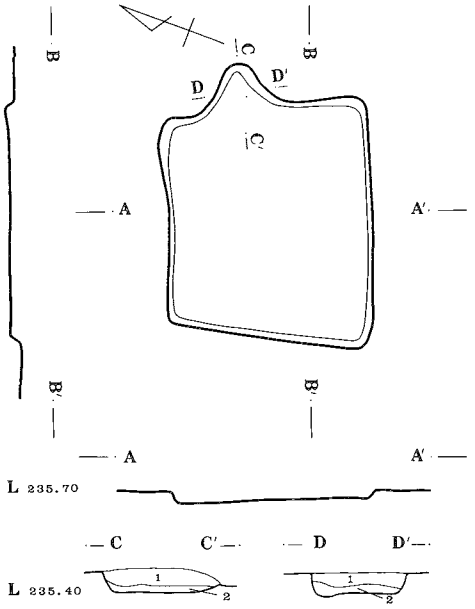
カマドは東壁南寄りにある。幅70cm、壁外へ40cm半円状に張り出し、焚口両脇に自然石を据え、側壁に沿って板状の石を並べる。焚口の自然石は左側が外に向かって倒れ、右側の石は原状を留めて立った状態である。火床は貼床で中央で10cmの深さで皿状に掘られた地山上に黒色土を貼っている。

カマド右手の南東コーナーに貯蔵穴を持つ。径は80cm、深さは中心で35cmを測り、北側中程に段を持つ。

周溝が南、北壁と東壁の一部に検出された。北壁から東壁にかけては凹凸が多く、明確な溝という程ではない。又、北西コーナーは角ばった壁の掘り込みの内側を丸みを持って広く掘られている。

柱穴は検出されなかった。

遺物はカマド焚口覆土より須恵坏1点のみであった。




1層：天井崩落層。焼けたロームと焼土からなる。
2層：貼床層。ロームと黒色土の混在。

## B－122号住居跡

124号のプラン内に重複して存在する。平面精査及び土層断面共に新旧関係の判定が出来ず、不明である。

中央で2.5m×2.2mを測り、南半分が広がっている小型長方形で東西が長い。残存する壁高は10cmである。カマドは東壁北寄りで、幅１m弱で掘り込まれ、壁外へは45cmの突出である。隅丸三角形を呈し、外側半分程はややくびれ気味。幅広い焚口より皿状に５cm掘り込んだ地山に、黒色土及びローム粒で３～４cmの貼床を施し、火床をなす。袖部、石の痕跡は全く無く、燃焼部の中心は壁中間から壁外にかけての位置である。

柱穴、貯蔵穴等ピット類は検出されない。

遺物は少量で、土師大型坏片、甕片、須恵坏片等が出土した。

## B－121号住居跡

2.5m×2.4mの正方形に近い小型の住居。住居中央で壁高10cm強が残る。カマドは東壁中央に造られており、幅60cm、壁外へ45cmの掘り込みを持つ。袖部や石の痕跡は全く無い。火床は住居床面と同一レベルで、壁の立ち上がりは急である。

柱穴・貯蔵穴は検出されない。住居南西部は台状の高まりがあり、約1.0m×70cmを測る。地山のロームを掘り残された部分であり、上面は平坦である。

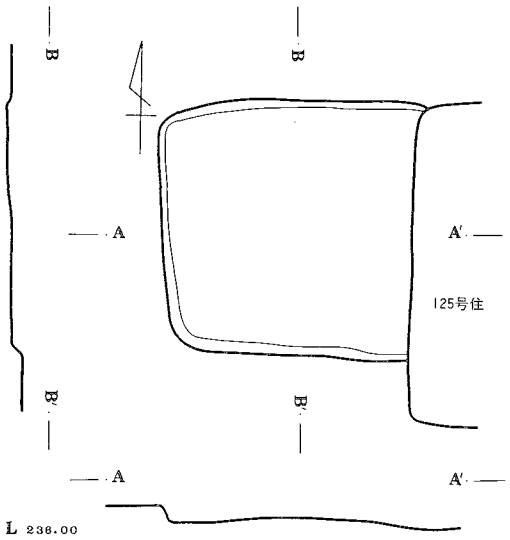
遺物は覆土より土師甕片少々と須恵坏１点が出土した。

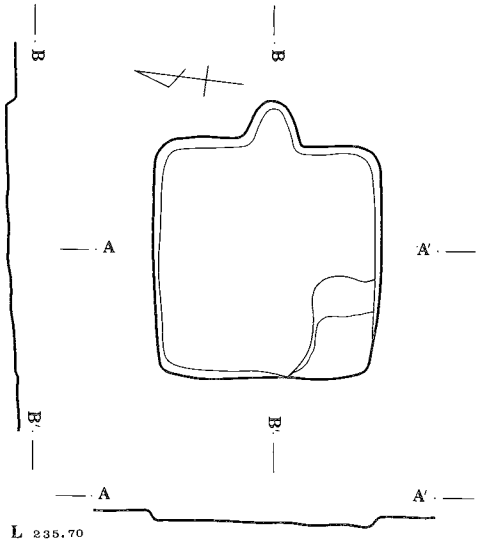
## B－126号住居跡

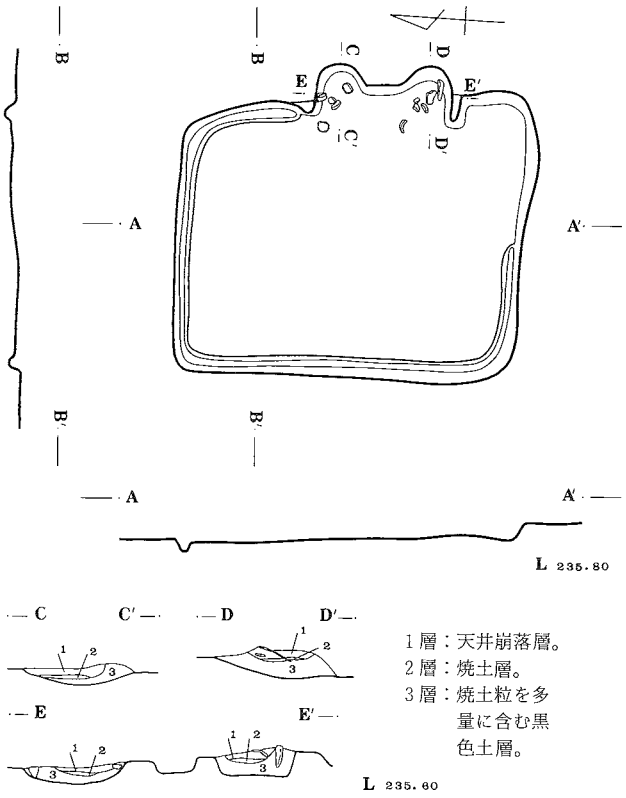
東壁は125号に切られており不明。南北2.7m、東西は2.8mが残存している。壁高は西壁で16cmを測る。カマドは全く痕跡を留めていないが東壁の可能性が考えられる。

床面は地山のローム面である。柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されない。

遺物は少量であるが、覆土より土師坏、他に土師甕小片が僅かに出土した。





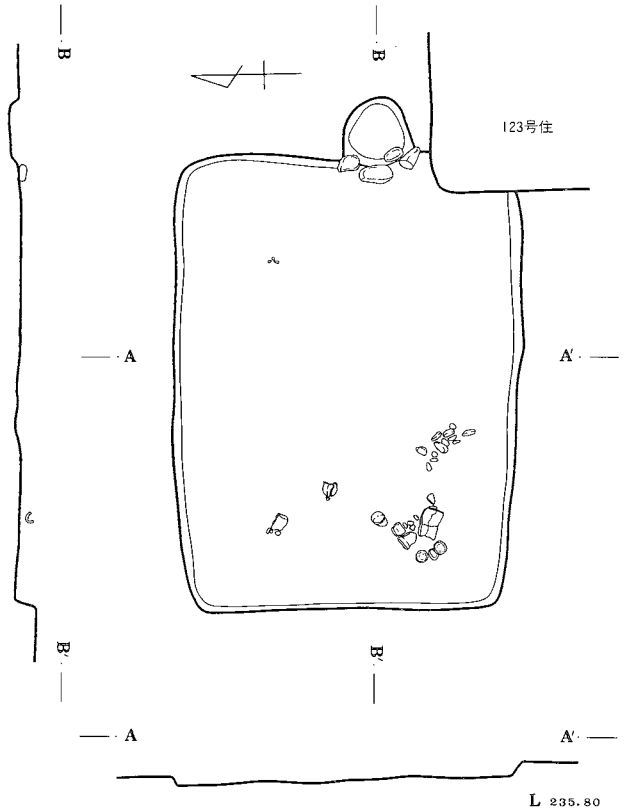

## Ｂ－123号住居跡

中央で3.1m×3.7mを測り、南北が長く南側が広い不整長方形を呈す。残存する壁高は南壁で20cm、北壁床面よりは５cm程で南側が良好と言える。

本住居跡にはカマド跡２基が東壁に並んで検出された。両方共に幅約50cm、半円状の壁外への掘り込みは約20cmで北側カマドは左袖部、南側カマドは右袖部がそれぞれ短く残存する。双方より板状石片が出土しており、壁の補強用のものと考えられる。焼土量はほぼ同じで、つくりや規模の共通性から、造り替えと言うよりは併存していた可能性が高いと言えよう。

柱穴、貯蔵穴等ピット類は全く検出されない。北側のカマドから北壁・西壁及び南壁西壁にかけて周溝が巡る。カマドの間と南東コーナーには見られない。

遺物は北カマド内より須恵坏、埦、土師甕片、南カマド内に須恵埦、甕片、土師甕片等が出土した。




## Ｂ－124号住居跡

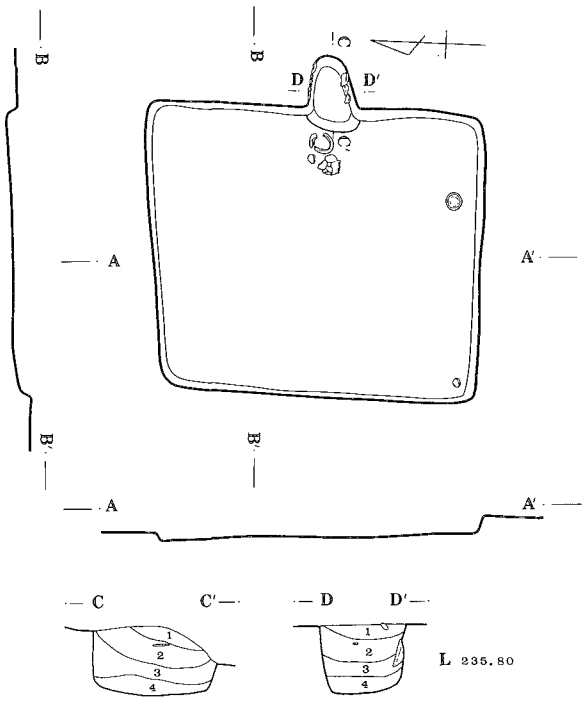
中央で4.8m×3.2mを測る、東西に長い長方形住居。残存する壁高は北壁で８cm、南壁で15cm。南東コーナーは123号との重複で123号に切り込まれて残存しない。

カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。幅75cm、壁外へは60cm掘り込まれ、内部は球状に広い。焚口部床面に自然石４個が倒れた状態で検出された。火床は皿状に掘り凹めた地山面で中央で焚口より10cmの深さである。壁の立ち上がりは比較的急。

床面は地山のローム面に平坦に掘ったもので、重複する122号部分は黒色土のプランが確認出来る。

柱穴、貯蔵穴等のピットは全く検出されない。

遺物は住居西側に集中する。土師器がほとんどで、床面やや上より長胴甕１、小型甕２、長胴甑１、小型甑１、坏３、鉢１と覆土より土師甕片及び須恵坏片、蓋片少々、また、遺物集中部東側からこも石状礫群を検出した。




1層：焼土及び黒色土の混在。
2層：天井崩落層。ローム及び黒色土が焼け、赤褐色。
3層：灰層で少々焼土粒を含む。
4層：貼床層。黒色及びロームの混在。

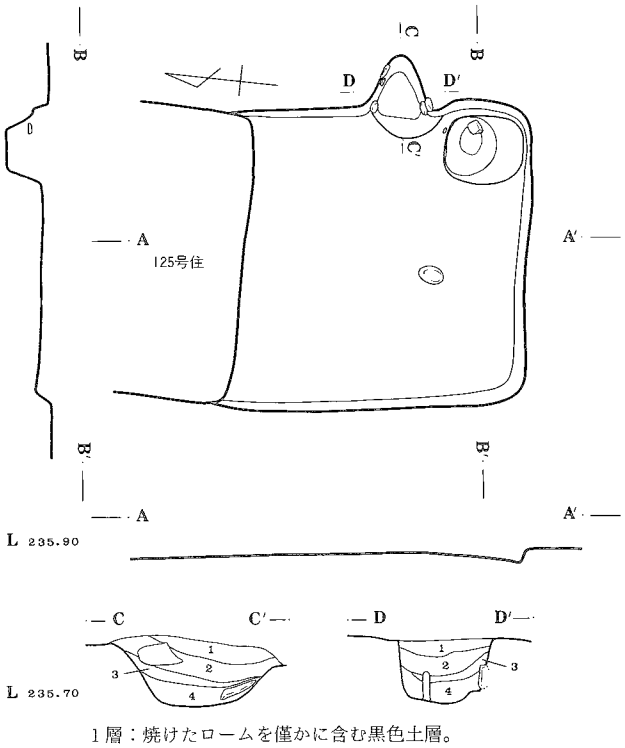
## B－125号住居跡

126号、127号、128号と重複しており、125号が最終的に構築されたものと平面精査で判明している。

中央で3.1m×3.5mを測る、南北に長いやや歪んだ長方形を呈し、各壁共に直線的に掘り込まれている。カマドは東壁中央で、幅50cm、壁外へやはり50cmの長さで楕円形に張り出す。焚口からカマド中央の地山面までは約15cmを測り、ピット状をなし、壁外への立ち上がりは真上へと向かう。黒色土及びローム粒で5～10cmの貼床を施し、火床面は焚口より中心で7～8cm低い。両側壁には板状石を据え補強している。袖部の痕跡は全く無かった。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されない。

遺物はカマド焚口手前床面より、コの字状口縁の土師甕2個体と南壁際床面に須恵坏、他に覆土より須恵坏片、埦片、土師甕片等が出土した。




1層：焼けたロームを僅かに含む黒色土層。
2層：天井崩落層。焼けたロームに焼土が混じり、赤褐色を呈す。
3層：焼土層。
4層：貼床層。黒色土中に焼土粒を含む。

## B－127号住居跡

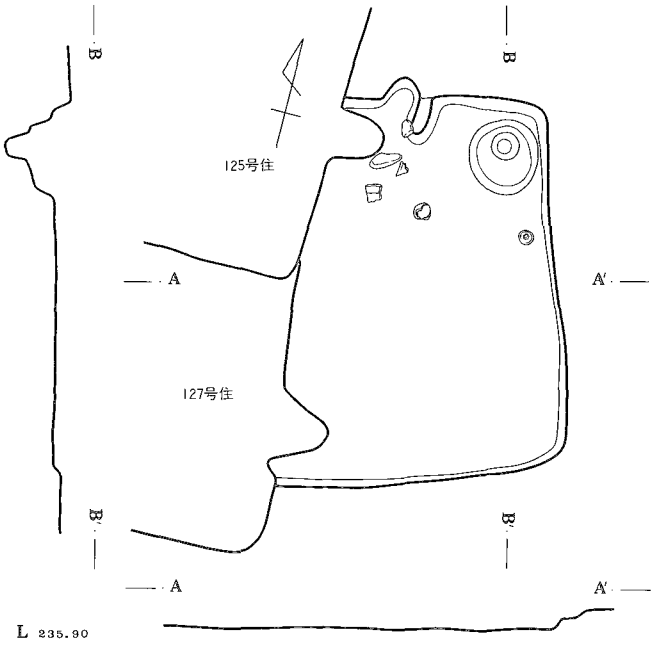
北壁は125号に切り込まれ残存しない。東壁は128号上に構築され、カマドの残存状態も良好である。中央で東西3.2m、南北は西壁で3.3mを測り、壁高は18cmである。

カマドは東壁南寄りにある。焚口より斜めに20cmの深さで掘られた地山上に、黒色土、ローム及び少量の焼土粒で貼床が施され火床面を形成する。壁外への掘り込みは中央で58cm、幅は60cmの三角形を呈す。壁ライン上の位置両側に自然石を据え、カマド両壁も板状石で補強を行っている。袖部の痕跡は全く見られなかった。

カマド右手の南東コーナーに貯蔵穴を持つ。上端は70cm×80cmでやや方形状の楕円形、南側と西側は徐々に落ち込み、途中から急に落ちる。深さは30cm強である。東側肩口に焼けた板状石片が出土している。

床面は地山よロームを平坦に掘り凹めて使用しており、貼床の痕跡は全く無い。柱穴も検出されなかった。

遺物はカマド内よりコの字状口縁の土師甕、覆土より須恵坏、他に土師長胴甑片、甕片が出土している。



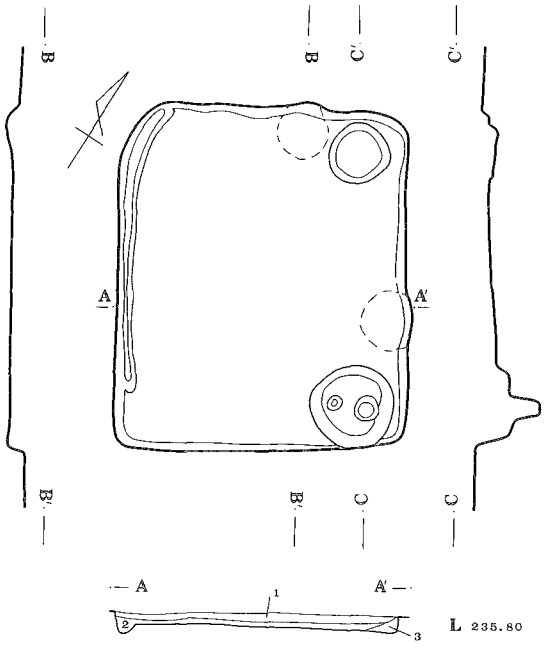

### B－128号住居跡

住居西側は125号と127号に切られるため不明である。南北4.0m、残存する東西長は南壁で3.1m、壁高は東壁中央で10cm強を測り、各壁は張り気味に丸みを持つ。

カマドは北壁に検出された。幅38cmで壁外へは半円状に僅か20cm掘られるのみ。壁内右側に袖部を確認出来、芯に自然石を立てた状態で使用し、他は粘質土で構成される。壁ラインより約60cm内側には長さ35cm程の自然石が横向きに出土しており、鳥居状の焚口を構成していたものと思われる。なお、左袖部は全く検出されなかった。

北東コーナーには貯蔵穴を持つ。径75cm前後、中位で段を持ち、さらに内側には20cm強のピットを有する。深さは中心で50cmである。柱穴は検出されない。図版の柱穴痕らしきものは誤認の為埋め戻したものである。

遺物はカマドより土師甕、甑、東壁付近床面より須恵壺、覆土より須恵甕、土師甕片等が出土した。




1層：ローム微粒子をまばらに含む黒色土層でしまりは悪い。
2層：ローム微粒子及び径3cm程のロームブロックを含む黒色土層。
3層：ローム・黒色及び焼土の混在。

### B－132号住居跡

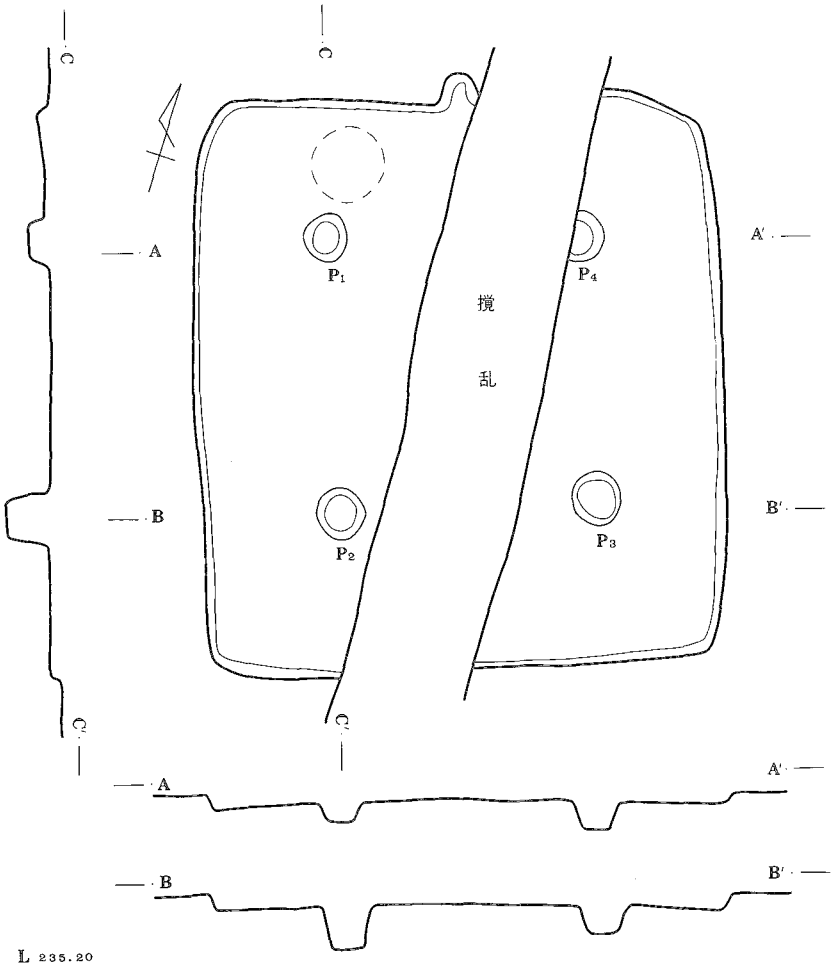
中央で3.6m×3.1m、壁高は床面より10cm強を測る。北西コーナーは張りを持たず、やや直線的に内傾している。

カマド痕は北壁東寄りと東壁南寄りに確認された。両方共に壁外への掘り込みはほとんど無く、袖部や石も検出されないが、焼土が明確に残存していた。前後関係及び併存していたかどうか、等は全く不明である。東カマドに伴う貯蔵穴が南東コーナーに存在する。北東コーナーのそれは貯蔵穴と言うには浅すぎると思われ(5cm程)、性格は明確でない。南東コーナー貯蔵穴は径90cm、深さ15cmで、中央付近と西側にさらに小ピットを持つ。中央のピットは径25cmで深さは外側のピット底面より約30cmである。

住居西壁に周溝が検出された。全体に凹凸が多く、小ピット状の凹みが目立つ。他の壁には全く見られなかった。

柱穴は全く検出されない。

遺物は覆土よりの出土で、土師坏片、鉢片、甕片、須恵坏片いずれも小片が数点のみである。



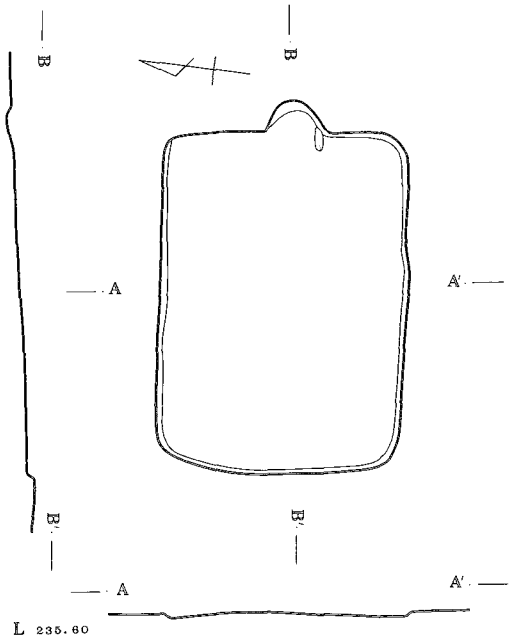

B－129号住居跡

6.1m×5.6mでやや南北に長い、整った形状の大型住居。残存する壁高は平均14cm程で、床面は地山のローム面である。南北に後世の溝状の攪乱が入り、この部分の壁及び床面はとんでいる。

カマドは北壁中央に検出された。幅40cm、壁外へは30cmの半円状の小さな掘り込みが残存するのみで、右側は攪乱がかすめ、又、袖部や焼土等は痕跡が残っていない。カマド手前左側の床面に（$P_1$の北）径75cm程の範囲で焼土粒が確認された。

柱穴が4個確認された。南北径はそれぞれ$P_1$50cm、$P_2$54cm、$P_3$56cm、$P_4$52cm、深さは$P_1$18cm、$P_2$45cm、$P_3$30cm、$P_4$30cmであった。貯蔵穴は不明だが、カマド右手の攪乱に切られた可能性もある。

遺物は覆土中より土師甕片、坏片が大半を占め、他に須恵坏片、蓋片が僅かに出土した。



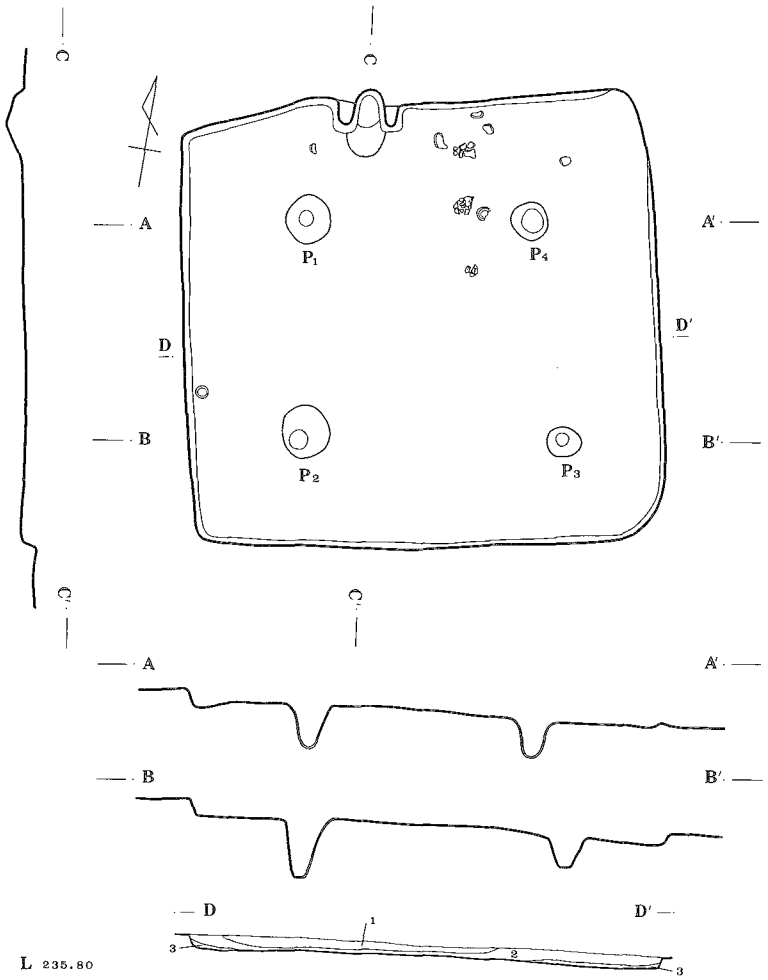

B－131号住居跡

中央で3.5m×2.6mを測る、東西に長い長方形。北東コーナーは壁を掘り過ぎた。壁高は5cm内外と浅く、床面は地山のロームが平坦に掘られている。

カマドは東壁中央にある。幅60cmで半円状の突出は32cm程と短い。壁内右側には板状石が据えられ、焚口から袖部の存在を示す。燃焼部の中心は壁中間にあり、火床は地山のローム面が焚口より僅かに低くなっている。

柱穴、貯蔵穴等のピットは全く検出されない。

遺物はやはり全く出土していない。




1層：ローム微粒子をまばらに含む黒色土層。
2層：ローム微粒子を多量に含む黒色土層。
3層：径2～4cmのロームブロック主体層。

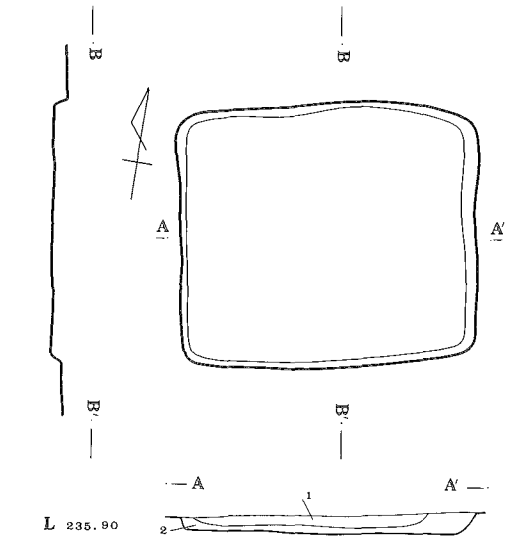
## B－130号住居跡

中央で5.1m×4.7mを測る、やや東西が長い長方形。壁高は西壁で20cm、東壁は10cmに満たない。

カマドは北壁西寄りに造られる。幅25cmで半円状の突出は小さく、壁内には袖部が検出された。内部はやはり幅25cm程と狭く、焚口から壁外までは皿状に15cmの深さで掘り込まれる。明確な貼床層は検出出来なかった。

柱穴は$P_1$～$P_4$の4個である。東西径は$P_1$45cm、$P_2$48cm、$P_3$35cm、$P_4$38cmを測り、$P_1$、$P_2$は肩口から斜めに落ち、徐々に垂直近くに掘り込まれている。深さは$P_1$48cm、$P_2$64cm、$P_3$30cm、$P_4$36cmを測る。

遺物はカマド右手床面やや上より土師球胴甕片、坏片、南壁際床面より須恵坏が出土する他、覆土からも土師甕片、坏片が検出された。




1層：ロームブロックを多量に含む黒色土層。
2層：ローム微粒子をまばらに含む黒色土層。

## B－134号住居跡

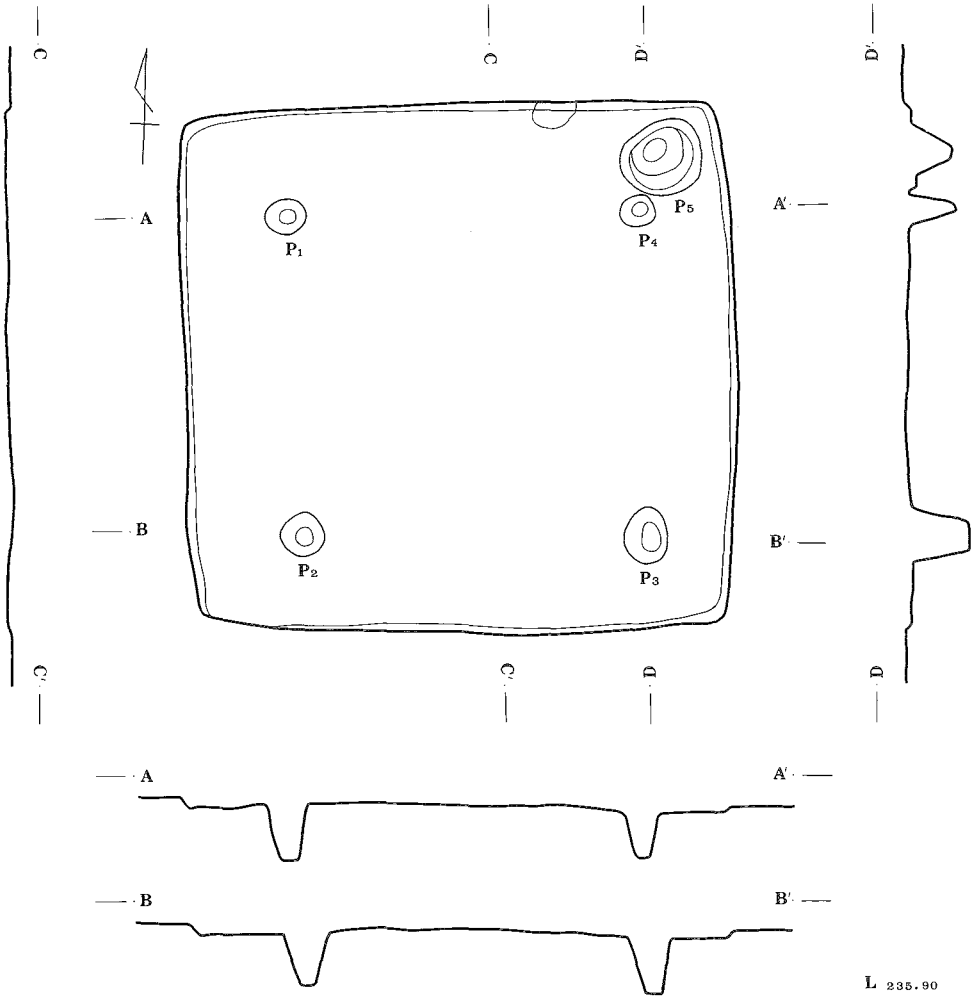
3.2m×2.8mを測る、東西に長い小型長方形を呈す。壁高は15cm～20cmで比較的良好である。

カマドは明確ではないが、北壁東寄りに焼土の痕跡があることからカマドの位置と思われる。壁外、床面の掘り込みや袖部は全く検出されなかった。

床面は地山のローム面のみで貼床は無い。柱穴等ピット類は検出されない。

遺物は少なく、覆土より土師甕片及び坏片が数点出土したのみである。

北壁は135号との重複で平面精査では135→134の判断を下したが、135号の項で触れるように逆転の可能性も考えられる。




B－133号住居跡

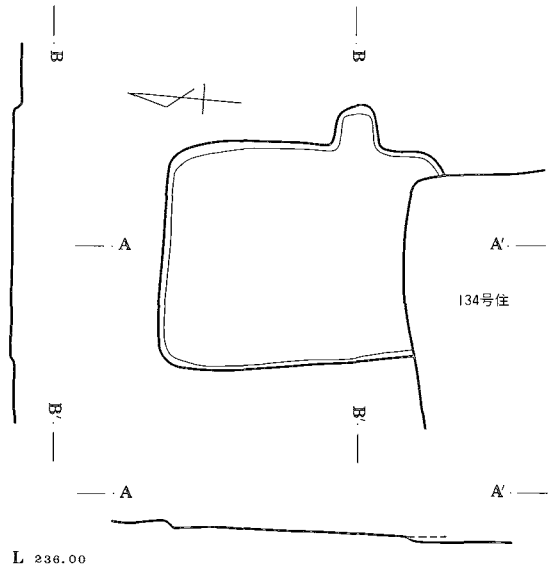
東西5.9m、南北5.6mを測る。正方形に近い形状で、各コーナーは比較的きっちりとした角を持つ。残存する壁高は平均8cm程度である。

カマドの明確な痕跡は無い。北壁東寄りの壁際に焼土痕が検出されており、貯蔵穴としたP5がすぐ右側に存在する事と考え合わせ、カマド痕と推定する。袖部や掘り込みは全く検出されてはいない。

柱穴はP1～P4である。径はP140cm、P245cm、P3は大きめの楕円形で45cm×60cm、P435cm、深さはP158cm、P258cm、P358cm、P445cmを測る。各コーナーから柱穴中心までは均一で1.3m内外を測り、住居中央は広い。

貯蔵穴P5は北東コーナーに検出された。径約80cm、深さ8cmの浅い掘り込み内に径50cm弱、深さ38cmのピットが北側につくように存在する。

遺物は覆土より土師甕片、坏片が少量出土している。




134号との重複部は、134号の掘り込みが深く、また平面精査段階で135→134としたために135号の壁は切られた扱いとした。しかし、カマドの形態、また双方の覆土中遺物が住居に伴うとすれば、逆に134→135の新旧関係を推定することも出来る。平面精査でもさほど明確なラインが引けた訳ではないので、この2住居の新旧関係はいまひとつ不明確である。

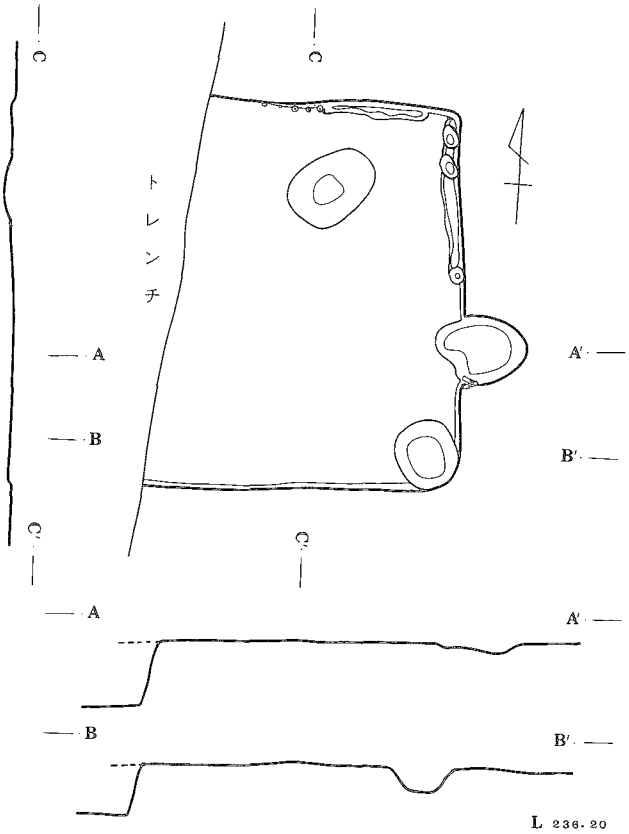
### B－135号住居跡

東西2.3m、南北は134号との重複の為不明だが、東壁では2.8mを測る。残存する壁高は平均6cm程と浅い。小型の長方形住居。

カマドは東壁南寄りに検出された。幅は60cm、壁外への楕円状の突出は中央で45cmを測る。袖部の痕跡は無く、燃焼部は壁外の突出部にあると思われる。火床は地山のローム面にあり、レベルは床面と同一、掘り下げてはいない。カマド壁の立ち上がりは急である。

床面に貼床は無く、ローム面を使用している。柱穴等のピット類は検出されない。

遺物はコの字状口縁の土師甕片と灰釉陶器埦片がいずれも覆土中より出土している。




### B－138号住居跡

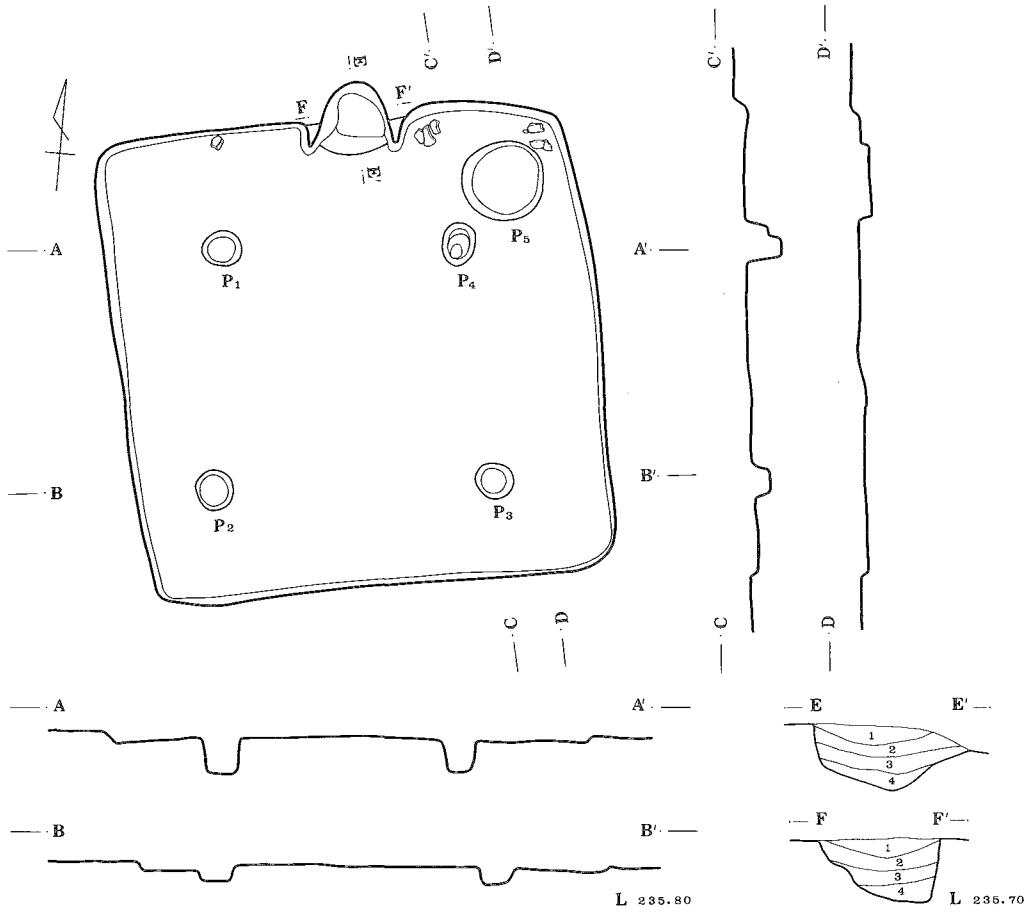
B区西端にあり、住居西側はトレンチのため確認出来ない。南北4.0mを測り、壁高は約5cmである。

カマドは東壁南寄りに検出された。幅70cm、壁外へも70cmの掘り込みが楕円状を呈し、焚口からやや凹凸のある皿状に凹んだ火床を経てゆるやかに立ち上がる。右壁手前には板状の石が据えられ、内側にはその崩れた破片が出土している。袖部の痕跡は無く、燃焼部は壁外にある形態と言える。

カマド右手の南東コーナー際に貯蔵穴を持つ。径70cm、深さ26cmを測った。また、住居北側に掘り込まれるピットは92cm×70cmの楕円形で深さは約10cmと皿状に浅い。なお、柱穴は検出されなかった。

北壁と東壁北半には浅い周溝が確認された。周溝と言っても凹凸が激しく、所々にピットとも言える凹みが連なる状態である。北東コーナーでは一部途切れている。

遺物は須恵埦片、坏片、土師甕片、坏片が出土しており、覆土遺物として取り上げたが、実際は限りなく床面に近い位置であったと言えよう。




1層：焼けたロームと黒色土の混在。
2層：天井崩落層。焼けた粘性ローム主体で黒色土が混じる。
3層：焼土層。中央付近は集結している。
4層：貼床層。ローム及び黒色土の混在で上部には少々灰が存在する。

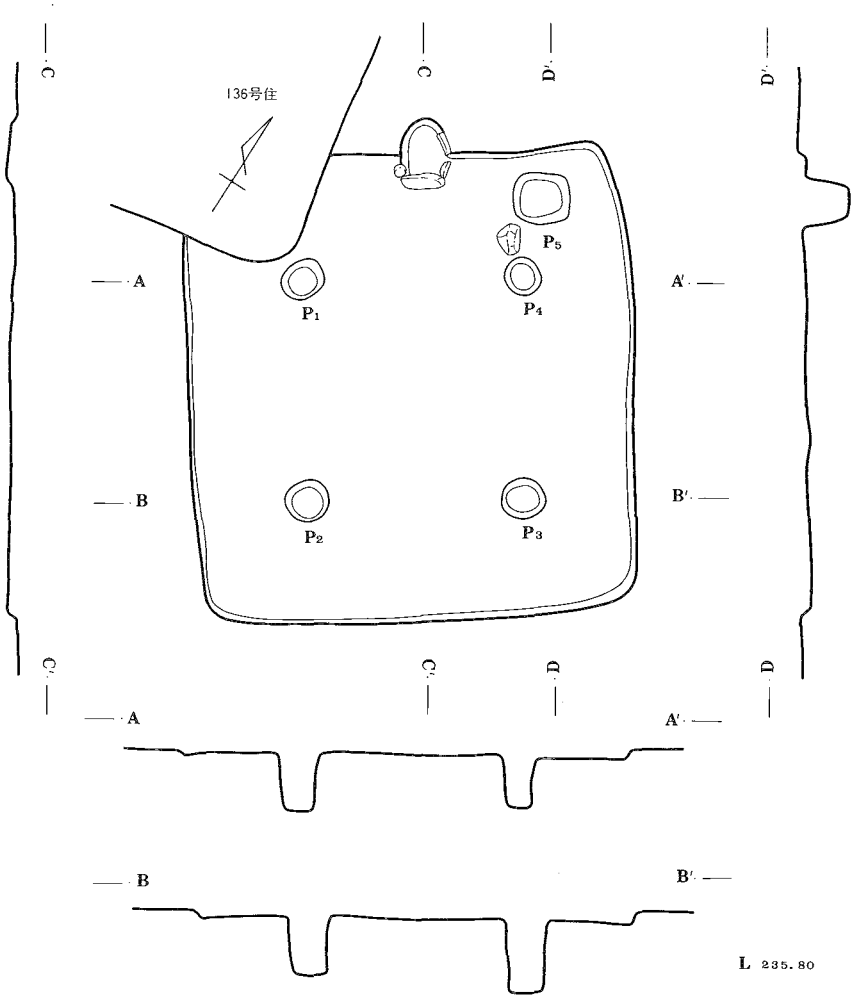
### B－136号住居跡

東西5.2m、南北5.0mの整った正方形に近い形状である。壁高は10cm～15cm程が残る。

カマドは北壁中央に検出された。幅70cmで半円状に幅広く張り出す内部は中央で40cmである。壁内両脇には粘質土による袖部が残存しており、右袖部芯と左袖部内側に黄白色の板状石を据えているのを確認出来た。焚口付近と住居床面の部分的なところでは貼床が見られた。燃焼部は焚口よりボウル状に凹み、壁は垂直近くに立ち上がる。火床は黒色土とロームから成る貼床が確認された。

柱穴は$P_1$～$P_4$が検出された。径は$P_1$40cm、$P_2$38cm、$P_3$36cm、$P_4$は楕円形で33cm×44cm、北側に段をもち、南側はそのまま底へ続く。深さは$P_1$35cm、$P_2$15cm、$P_3$20cm、$P_4$34cmを測る。南側2個は浅く、柱穴としてはやや疑問が残るが、深さは揃っており、位置的に見ても他のピットと対応していることから柱穴とした。北東コーナーに貯蔵穴が検出され、$P_5$とした。径80cm、深さは約10cmを測り、底面は平坦であった。

遺物はカマド右手及び貯蔵穴脇床面より土師甕片、カマド左北壁際からも土師甕片、覆土中より土師坏、甕片が大量に出土した。




B－137号住居跡

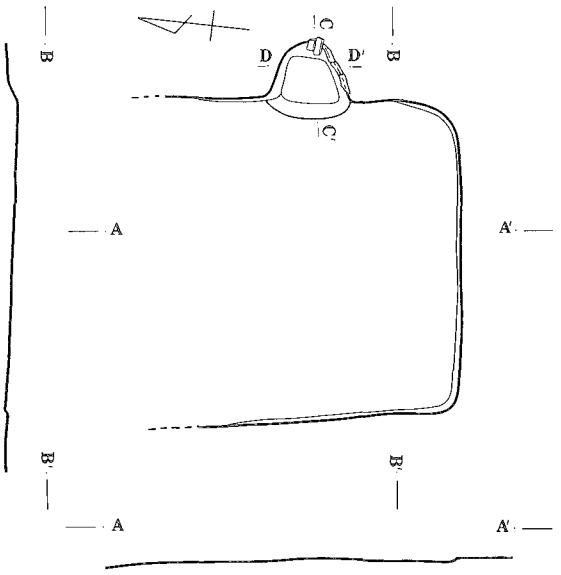
東西4.7m、南北5.0mを測る。正方形に近い整った形状と言える。壁高は平均10cm弱、北西コーナーのカマド左手と136号との重複部では壁は残らない。

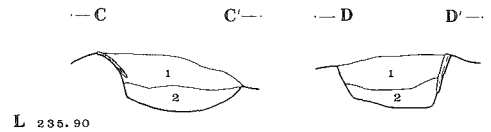
カマドは北壁中央である。幅50cmで半円状の幅広の突出があり、中央で35cmを測る。右壁は板状石が残り、焚口両脇は自然石上部が割れた状態で立っており、手前に横たわる様に長さ50cm程の自然石が出土した。これは鳥居状の焚口を形成していた上部の石と思われ、赤褐色によく火を受けた様子が確認出来た。

柱穴は$P_1$～$P_4$である。径は$P_1$45cm、$P_2$48cm、$P_3$45cm、$P_4$38cm、深さは$P_1$60cm、$P_2$60cm、$P_3$76cm、$P_4$55cmを測り、$P_4$が少々小さめながら規模は揃っている。位置もほぼ対角線上に並ぶ。

北東コーナーには貯蔵穴が検出された。60cm×50cmの隅丸方形で深さは50cmであった。

遺物は厚手の土師甕片及び坏片が少量出土したのみであり、覆土中である。




L 235.90

1層：焼土ブロックを含む褐色土層。
2層：貼床層。褐色土と黒色土の混在。

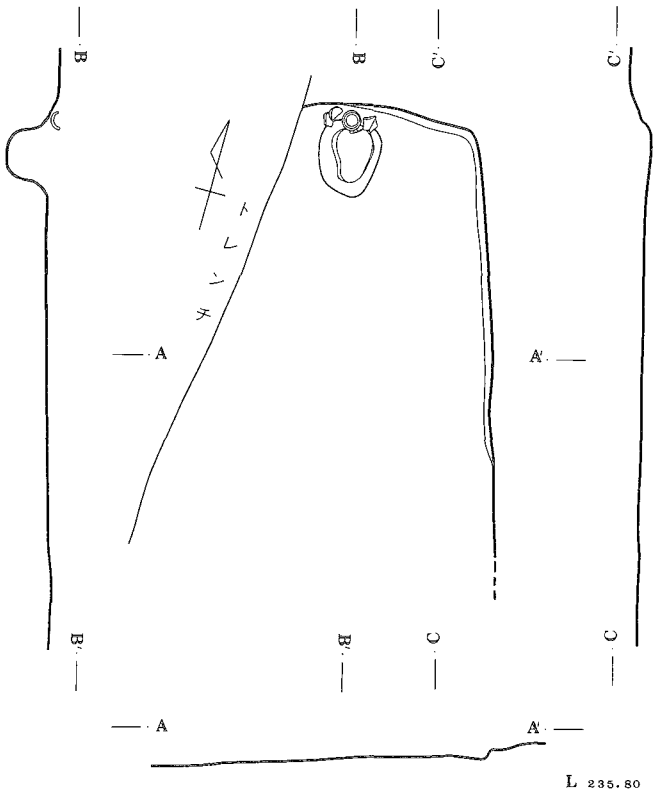
### B－139号住居跡

B区西端に位置しており、住居北側は140号との重複をなす。平面精査の段階での新旧関係は不明であったが、調査後のカマド形態や伴出土器は140→139を思わせる。重複部の壁の残存状況は明確ではなかった。東西3.4m、壁の立ち上がりはほとんど残らない。

カマドは東壁である。幅80cm、壁外へは65cm掘り込まれ右壁及び煙道へ続く先端部壁には板状石が貼りつき、よく焼けて赤灰色を呈していた。焚口から燃焼部は15cmの深さのボウル状で、上面に褐色土と黒色土の混土で10cm弱の貼床を施して火床としている。

住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマドよりコの字状口縁の土師甕片１点のみであった。




L 235.80

### B－140号住居跡

B区西端部にあり、西側半分程はトレンチのため不明。また南側は139号との重複のためにやはり不明である。

カマドは北壁に検出された。カマドとしての壁外への掘り込みはほとんど無く、北壁のカマド付近が全体的に少々張り出す。燃焼部は65cm×80cmの台形状ピットが上部でなだらかに落ち、途中から垂直近く急に掘り込まれている。深さは45cmを測る。覆土は焼土及びローム粒が混在し、埋戻して火床をなしていたのであろうが明確な面は検出出来なかった。ピット北側の斜面には土師鉢、坏、甕がまとまって出土した。

柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は他にカマド部ピット内より土師甕片、坏片が、また住居覆土より須恵坏片が出土した。

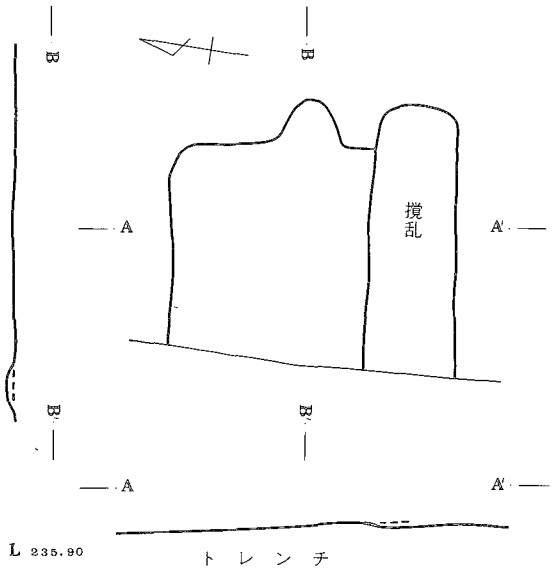
### B－141号住居跡

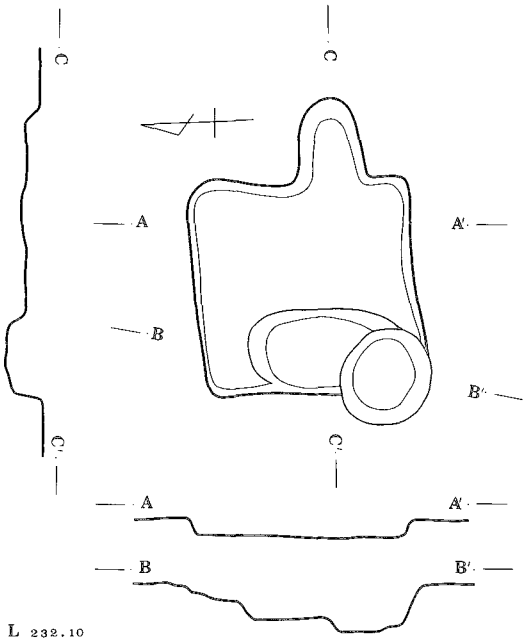
B区西端に位置する。住居西側はトレンチの為、不明。南壁は攪乱に切られ、残存しない。壁高もほとんど残らず、僅かな覆土よりプランが判明した。

カマドは東壁に検出された。幅65cm、壁外へ48cmを測り、内部は赤灰色を呈す。焚口から燃焼部はフラットである。

住居に伴うピットは全く検出されなかった。

遺物は土師甕小片が数片出土した。



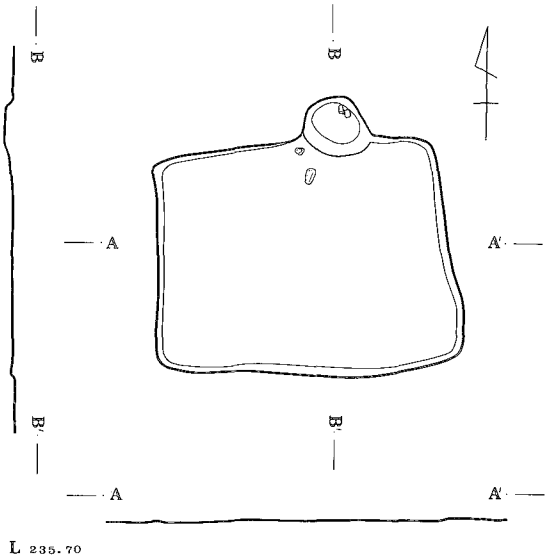




### B－145号住居跡

中央で3.1m×2.4mを測る、南側がやや広い不整長方形住居。残存する壁高は5cm弱と浅い。

カマドは北壁東寄りで、幅70cm、壁外へ半円状に40cmの掘り込みを持つ。燃焼部の中心は壁外にあり、焚口から皿状に掘られた火床は8cm程の深さである。住居床面、火床面は地山のロームで、住居に伴うピットは全く検出されない。

遺物はカマド内より土師質甕片少々、カマド左手前床面に須恵坏片が出土した。



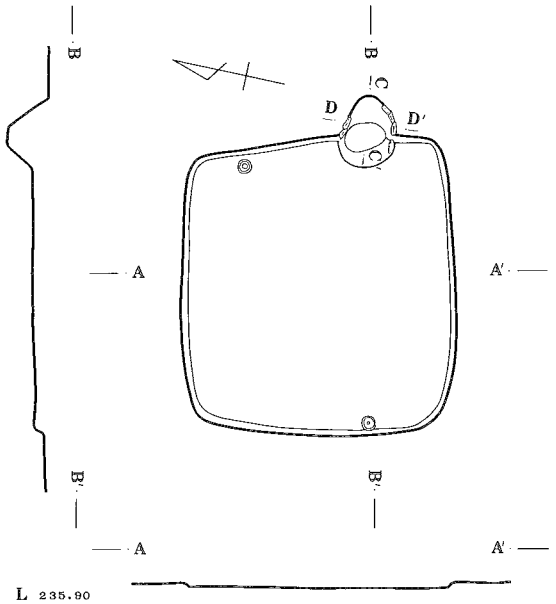

### B－143号住居跡

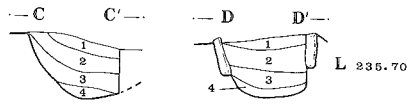
14号の調査段階で確認された。2.2m×2.3mの小型方形プランで、14号床面からの壁高は20cm弱が残存する。

カマドは東壁南寄りにあり、幅70cm、壁外へ80cmと楕円形に長く延び、住居に比してその規模は大きい。火床は住居床面と同一レベルで袖部や石の痕跡は無い。

柱穴、貯蔵穴となるピットは無い。住居西側の壁に沿う形で90cm×16cm(推定)、深さ20cm強の楕円形のピットが掘り込まれている。さらに南西コーナーより大きく張り出す径1m弱のピットが床面より深さ30cmで掘り込まれる。この2つのピットが住居に伴うものかどうかは不明だが、南西コーナーでは壁を切って後に掘られたものと考えた方が妥当であろう。

遺物は覆土より土師甕小片が1点のみの出土であった。



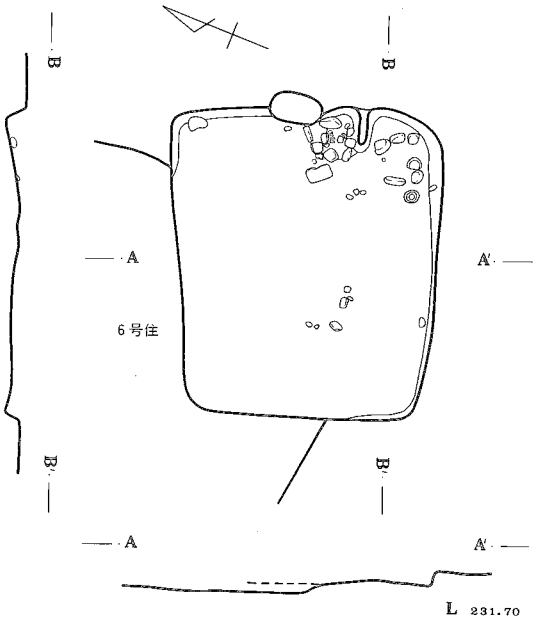

1層：天井崩落層。焼けたロームからなる。
2層：僅かにローム粒子を含む焼土層。
3層：焼土・ローム・黒色土が均等に混在する。4層と共に貼床層をなす。
4層：黒色土層。

### B－142号住居跡

中央で3.2m×2.9mとやや東西が長く、各壁は少々張り気味の長方形。残存する壁高は5cm～8cm程である。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅58cm、壁外への掘り込みは40cm、両壁に板状の石で補強を施している。焚口から燃焼部中心までの深さは約14cmで地山の直上に約5cmの黒色土層、その上に10cm弱の厚さで焼土、黒色土及びロームが混在する層が奥壁に沿って端部まで検出された。貼床層と思われる。住居床面はロームで、貼床部は検出されなかった。柱穴、貯蔵穴等のピットも検出されない。

遺物は東壁際覆土より須恵坏、西壁際覆土より須恵蓋が出土した。

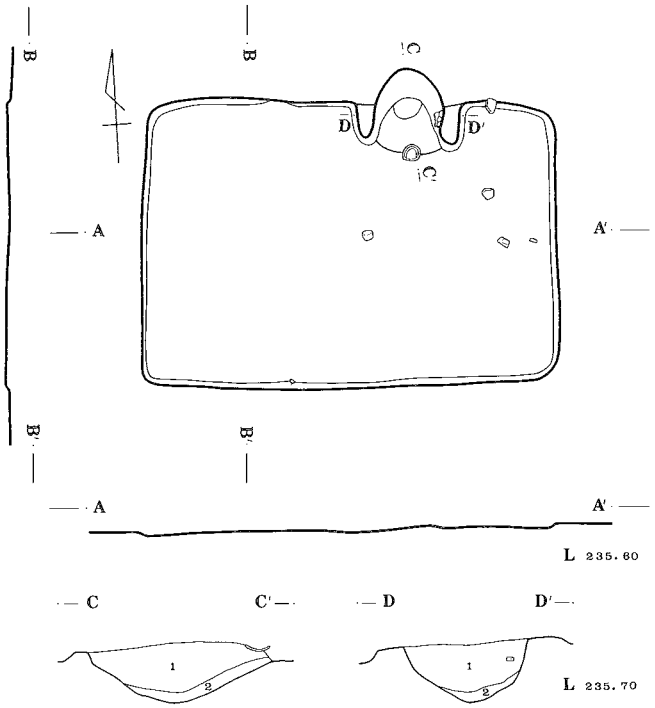



### B－144号住居跡

B区東側に位置し、6号住居跡と重複している。6号のカマド上半を144号が切っており、6→144の関係を示す。重複部の北壁大半と西壁3分の2は明確な壁は検出出来なかった。また南壁大半と西壁の一部にかけては攪乱が入り込み、推定ラインとして壁を掘った。残存する部分で東西3.3m、東壁付近で南北2.9m、壁高は東壁で20cmが残存する。

カマドは東壁南寄りにあり、壁外への掘り込みはほとんど無い。残存する右袖部は50cm弱で地山のロームを掘り残したものである。左袖部から右側にかけてはピット状の攪乱が入り込む。カマド内部は板状石、自然石、土師甕片が崩れた状態で雑に出土した。天井部、側壁をなしていたと思われる板状石は火を受けて脆化し、原位置を推定出来るものは無い。右袖部内側の立った自然石は焚口に掘えられたものであろう。

カマド右手の南東コーナーには径10～20cmの自然石が西と東に列状に並んで検出された。その内側と西外側床面より須恵坏、埦が出土している。遺物は、他に北東コーナー際に人頭大の不整形な自然石、推定の南壁際に須恵甕片、6号との重複部である住居中央付近床面レベルで須恵坏片、土師甕片、灰釉坏片、またカマド付近より羽釜片、土師質甕片等が出土している。




1層：焼土層。上部には天井部のものと思われる脆化した石材を伴う。
2層：貼床層。僅かにローム粒子を含む黒色土層。

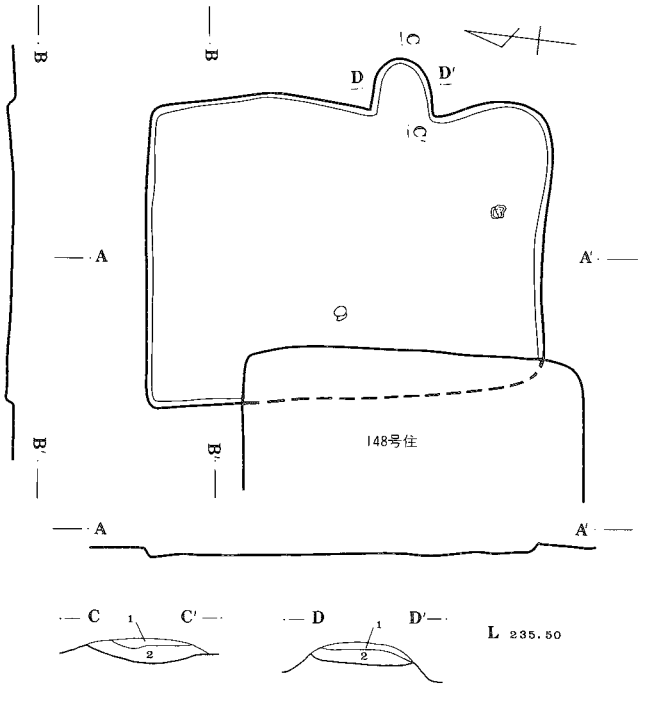
## B－146号住居跡

4.4m×3.0mを測り、東西が長く整った長方形を呈する。残存する壁高は平均約5cmである。

カマドは北壁東寄りに検出された。壁内両脇に粘質土による袖部が長さ40cm～50cmで残存し、壁外への掘り込みは幅70cm、長さ40cmであった。焚口から残存する壁外立ち上がりまでは約80cm、中央で深さ20cm弱で、焚口から立ち上がりやや内側まで5cmの貼床を施して火床としている。カマド覆土上位には天井石と思われる脆化した板状石が出土した。

住居に伴うピット類は全く検出されない。

遺物はカマド内及び住居覆土全体より土師甕片、焚口覆土より須恵坏、カマド右手北壁際覆土より須恵坏、等が出土した。




1層：褐色土層。
2層：焼土層。

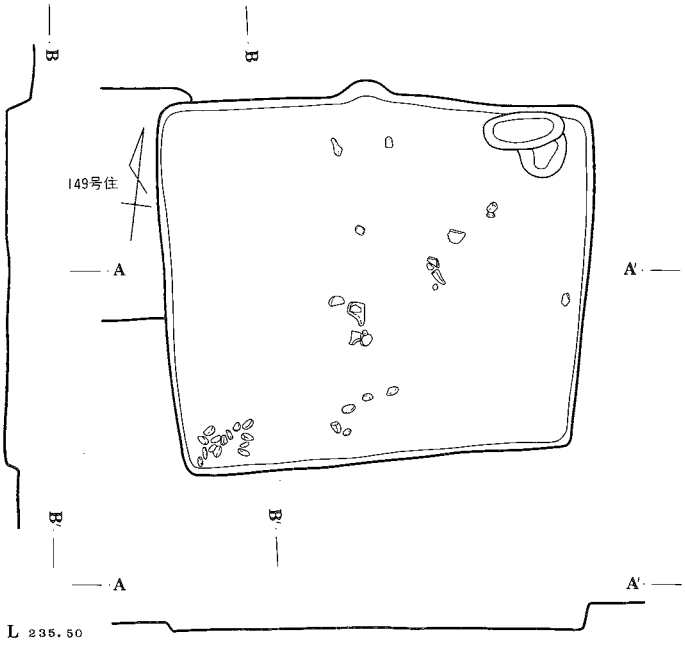
## B－147号住居跡

南北4.2m、東西は残存する北側で3.2mを測る。西壁の大半は重複する148号の為、不明。平面確認段階では新旧関係を147→148としたが、伴出土器は逆の傾向を示しており、単に148号の掘り込みが深いだけであって147号の床を切り込んでいるとは言えず、148→147の方が妥当ではないだろうか。

残存する壁高は約10cmを測るが、この面は掘り方であり生活面は土器の出土するレベルである。これはカマドの使用面と一致しており、貼床面を剝いでしまったレベルである。カマドは幅60cm、壁外へ60cm楕円状に張り出し、燃焼部の中心を壁外に持つタイプである。

柱穴、貯蔵穴等のピットは全く検出されない。

遺物は床面と思われるレベルより須恵坏片、埦片、カマド内より土師甕片が出土した。



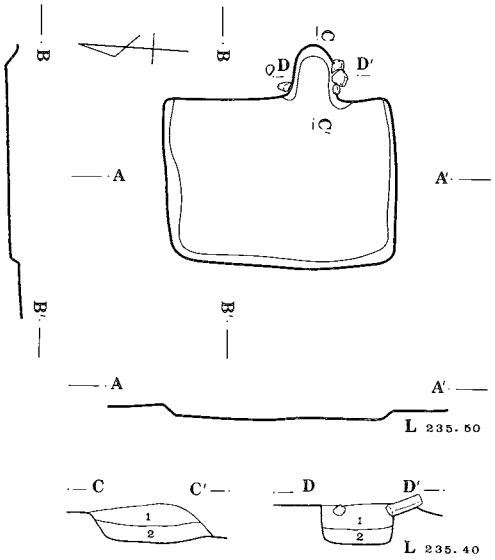

B－148号住居跡

中央で4.5m×3.8mを測る、東西に長い不整長方形。残存する壁高は約25cmである。西壁北側は149号との重複であるが、149号のカマドが148号の床面より上位で残存することから、148→149であることは明らかである。148号の掘り込みがより深かったためにプランはしっかりと残っていた。

カマドは北壁中央やや西寄りに検出された。幅50cm強で壁外へは20cmに満たない僅かな掘り込みである。カマド手前40cm～50cm両脇の位置に板状石の破片が検出されたが、明確な袖部は残存しなかった。石の位置を焚口と考えてよいと思われる。燃焼部の中心は壁内側であり、床面とフラットな火床は地山のロームがよく焼けて赤灰色を呈す。壁外への立ち上がりは比較的急と言える。

カマド右手の北東コーナーに貯蔵穴が検出された。北壁に沿って東西に長い楕円形を呈し85cm×40cm、深さは48cmである。南側に半円形の浅い掘り込みを伴っている。柱穴は全く検出されない。

遺物は、住居中央付近床面やや上より土師坏、甕片、須恵甕片が、また住居全体の覆土より、土師甕、鉢、坏、須恵甕、坏、埦、皿等、全て破片で出土し、バラエティーに富む。特徴的なものとして、南東コーナー床面に長さ10cm前後のこも石状礫が14個まとまっており、その東側の床面にも同じような礫が間隔を置いて５個弧状に並んで出土している。




1層：焼土ブロックを多量に含む黒色土層。
2層：貼床層。黒色土からなる。

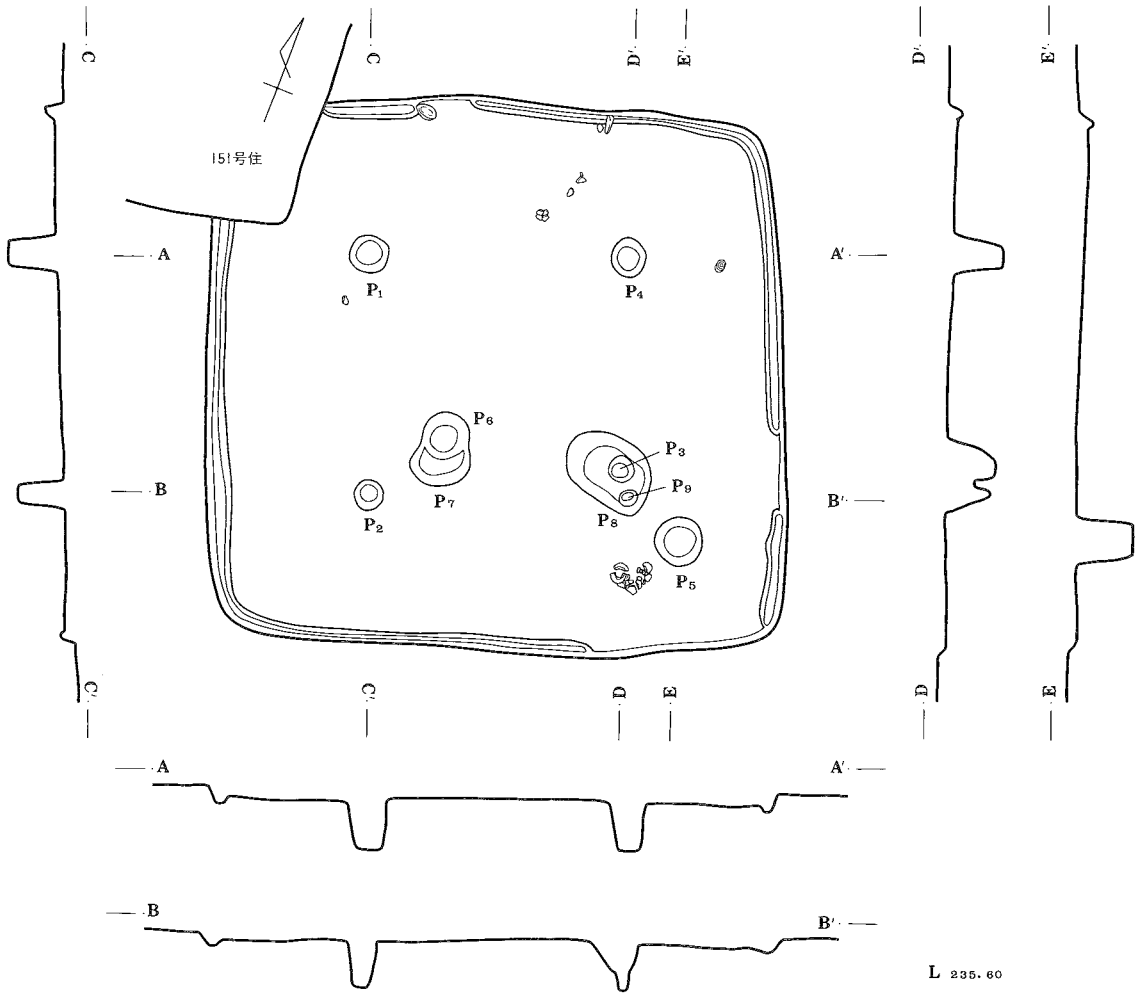
B－149号住居跡

南北2.5m、東西は東壁が黒色土中のため不明確で掘り過ぎたが推定で1.8m程である。南北が長い小型長方形の住居である。東壁全体は148号と重複するが、カマドの残り具合より148→149の関係となるのは前に述べた通りである。

カマドは東壁南寄りである。幅48cmで壁外へU字状に50cm程張り出す。側壁は右に板状石、左に自然石の補強を施している。燃焼部の中心は壁外にあり、火床は約10cmの厚さで貼床した直上にある。なお、本住居は全面的に厚さ約５cmの貼床をするが、生活面は凍結のため不明で掘り方まで掘り下げた。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されない。

遺物はカマドよりコの字状口縁の土師甕片数片と、覆土より土師甕片、須恵甕片が少々出土した。




B－150号住居跡

中央で東西6.2m、南北5.9mのほぼ正方形を呈する。残存する壁高は平均約10cmを測り、ほぼ四壁に周溝を持つ。

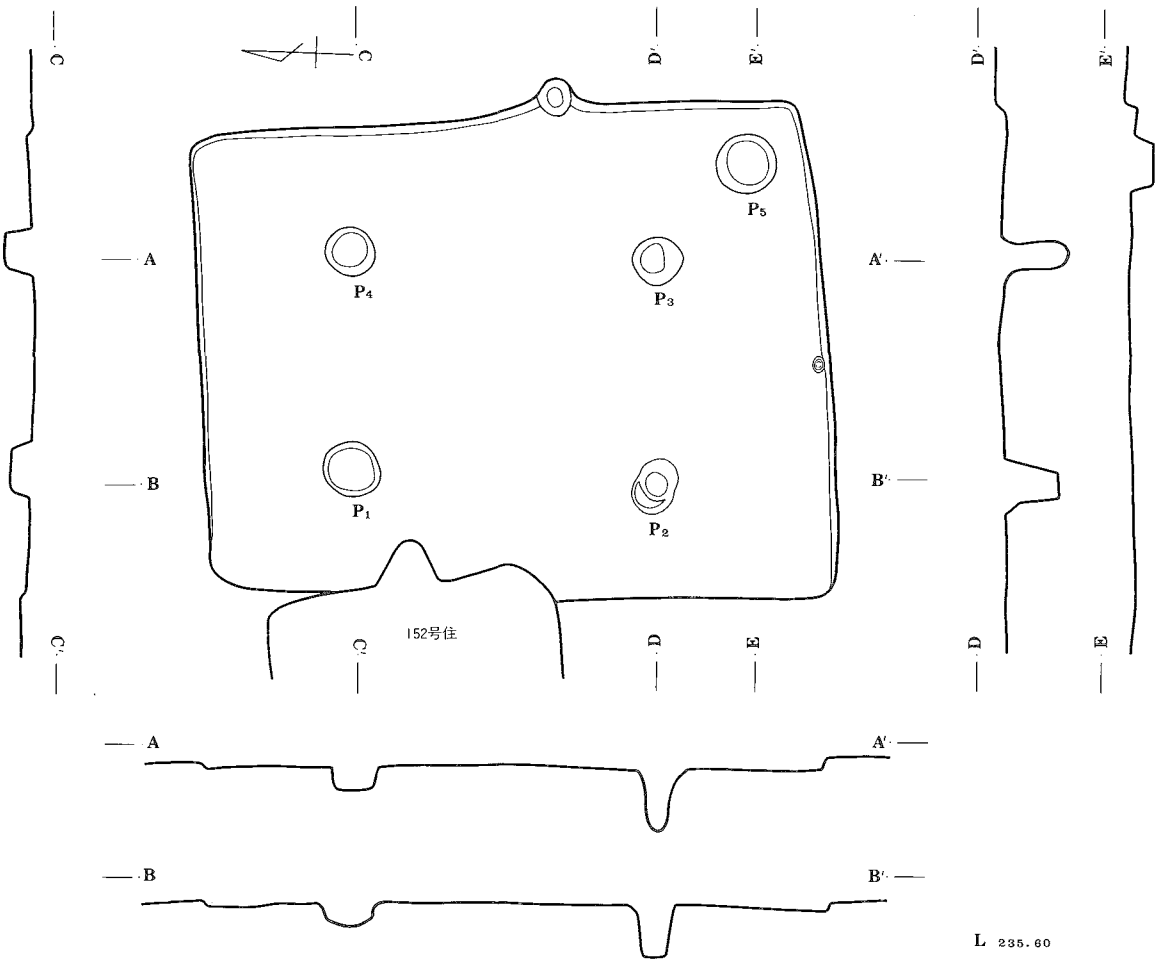
カマド、炉の痕跡は全く無い為、不明。

柱穴は$P_1$～$P_4$である。$P_1$は位置的にやや内側だが、南側の小ピットは規模が他の柱穴と合わず、$P_3$を柱穴とした。径は$P_1$40cm、$P_2$32cm、$P_3$28cm、$P_4$38cm、深さは$P_1$52cm、$P_2$48cm、$P_3$52cm、$P_4$52cmである。その他、大きめのピットが住居南側に存在する。$P_2$の内側に$P_6$が$P_7$を切り込むようにあり、$P_6$は深さ70cm、$P_3$の周りには楕円形の浅いピット$P_8$があり、1m×68cm、また南側の小ピット$P_9$は径18cm、深さ48cmを測る。$P_8$の東側にある$P_5$は整った円形ピットで径48cm、深さは60cmである。$P_1$～$P_4$以外は明確な性格づけが出来ないが、$P_6$～$P_8$はその規模や位置から柱穴に関連するものかもしれない。

周溝はほぼ全周にわたっている。壁に沿って検出され、幅15cm～20cm、深さは5cm～8cm程度である。

遺物は覆土より土師甕片、高坏片、小型坩、床面付近より土師甕が出土している。

北西コーナーは151住居跡に切り込まれ壁は残存していなかった。




B－151号住居跡

中央で南北6.6m、東西は西壁が明確ではなく、結果的に少々掘り過ぎてしまったようだが推定で５ｍ内外であろう。壁高は南東コーナー付近で14～15cm、西～北側は５cm程度である。南半が少々広がってはいるが整った長方形と言えよう。

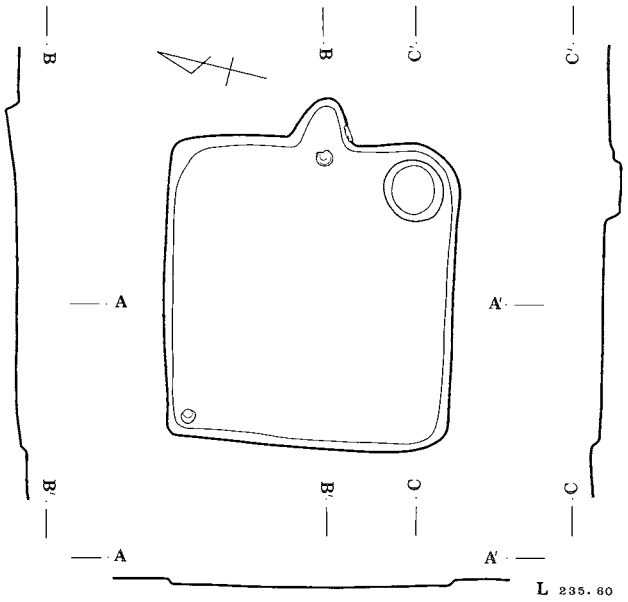
カマドは東壁南寄りに検出された。壁外への突出は約25cmで中心より裾広がりに徐々に広がっている。中心部には小ピット状の凹みがあり、煙道の一部と思われる。袖部は確認出来ないがおそらく存在していたと思われ、壁内に散った焼土が燃焼部を示す。

柱穴は４個検出された。径は$P_1$58cm、$P_3$50cm、$P_4$50cm、$P_2$はやや段状に２個のピットが重なるような形であるが、東側のものを$P_2$とし、径は42cmである。深さは$P_1$24cm、$P_2$55cm、$P_3$65cm、$P_4$26cmを測り、北側の$P_1$と$P_4$は南側の２個の半分に満たない。

南東コーナーに貯蔵穴を持つ。径64cmの正円形で深さは20cmである。

住居西側は一部152号との重複である。152号のカマドから東壁が151号を切り込んでおり、151→152である。また南東コーナーは150号の一部を切り込んでいる。

遺物は南壁際中央床面に須恵蓋、覆土より土師甕片、坏片が少々出土した。




B－152号住居跡

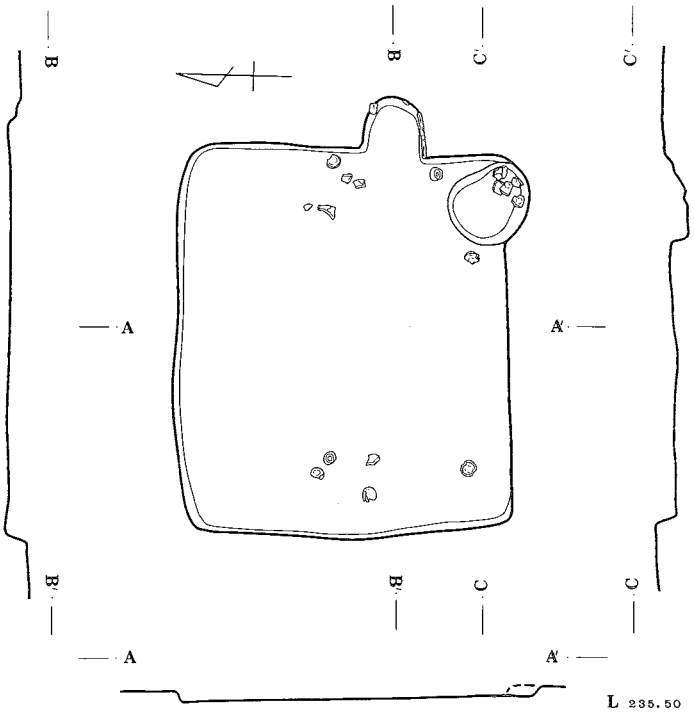
3.3m×3.1mとやや東西が長いが正方形に近い形状である。壁高は8cm内外を残すのみ。

カマドは東壁中央にあり、幅70cmから徐々に丸くすぼまり、中央で壁より50cm壁外へ掘り込まれている。燃焼部は壁外で、焚口より徐々に下がる火床面は中心やや外側で床面より10cm弱である。右壁上部手前によく焼けた自然石が検出されている。袖部の痕跡は全く無い。

貯蔵穴がカマド右手の南東コーナーに存在する。径62cm、深さは中央で約10cmを測る。

柱穴やその他、住居に伴うピットは検出されなかった。

遺物はカマド焚口覆土及び住居全体の覆土より須恵坏、埦片、甕片、カマド内よりコの字状口縁土師甕片、北西コーナー床面より須恵埦が出土した。




B－153号住居跡

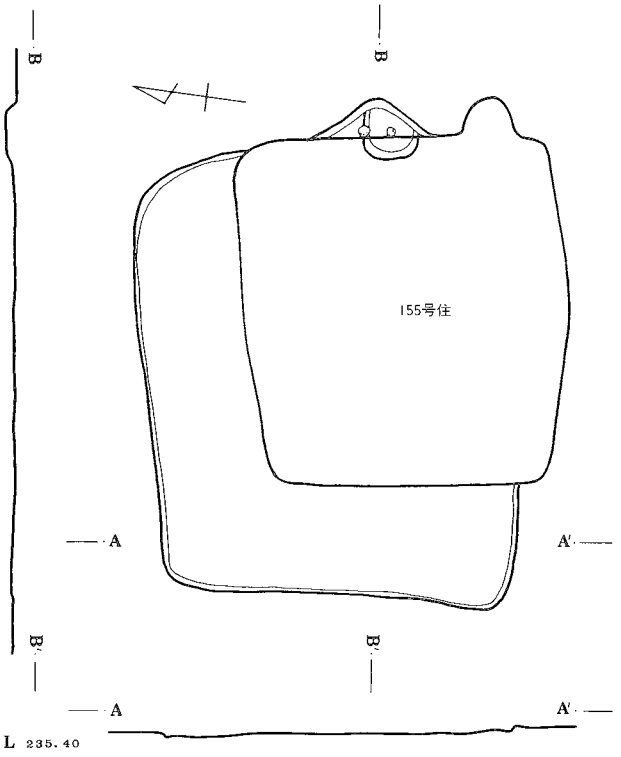
東西4.1m、南北は南壁が僅かに残る西側で3.5mを測る。南壁は掘り過ぎで西側に残るプランの延長で東側を推定した。

カマドは東壁南寄りに検出された。幅65cmでU字状に60cm突出する。右壁に据えた板状石と端部にその小片が残っている。火床は焚口面とフラットで先端部半分は徐々に立ち上がる。

南東コーナーに貯蔵穴を持つ。径85cm、深さは中心で22cmを測り、南側3分の1は推定南壁ライン外に張り出している。張り出し部分は浅く、落ち込む様に遺物が集中する。

柱穴は検出されなかった。

遺物は多く、須恵坏が大半を占める。貯蔵穴内より須恵皿、坏、土師甕片、カマドの周り床面よりコの字状口縁土師甕片、須恵皿、坏、他に住居床面及び覆土より須恵皿、埦、坏、須恵甕片等が出土している。



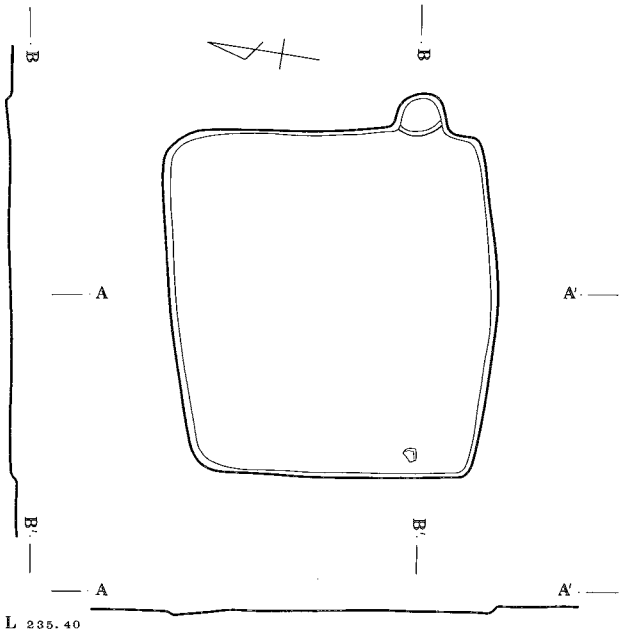

B－154号住居跡

155号に切り込まれるために住居中央から南東部分は不明。壁は東壁の一部と南壁が不明。3.8m×4.5mで東西に長い不整長方形と思われる。残存する壁高は5cm強である。

カマドは東壁南寄りに検出された。幅広の三角形状に突出しており、幅1.3m、壁外へ40cmを測る。155号の掘り込みが154号とほぼ同じ深さのため、カマドの火床面が確認された。突出部中心ラインより右側が焚口レベルより10cm掘り凹められ、中央に自然石の破片が出土した。その左側にも同じ大きさの破片が検出されたが、これらは据えてあるという状態ではなく、対応しているとは考えにくい。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されない。床面は地山のローム面で全面を構成している。

遺物は須恵大型蓋片、土師甕片、坏片の計3点のみであった。



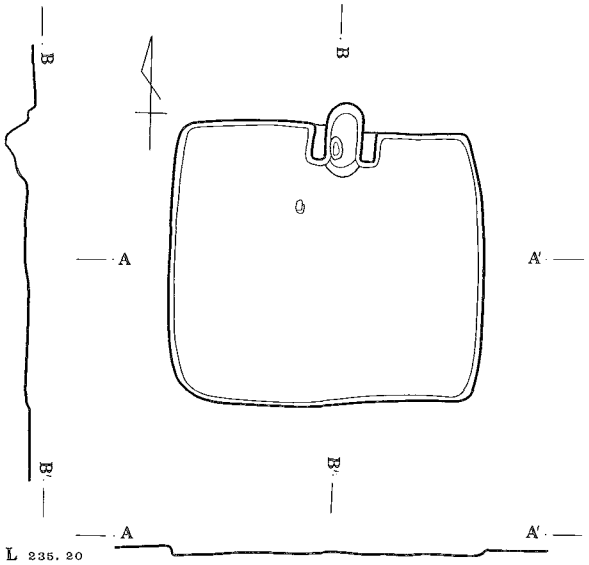

B－155号住居跡

中央で3.7m×3.5mで西側半分がやや狭くなっている。壁高は南壁で10cm弱、他は5cm程度である。

カマドは東壁南寄り、南東コーナーに近い位置にある。幅56cm、壁外へ36cmの半円状の掘り込み部を残す。壁外の燃焼部は焚口より約5cm低く、地山面を使用している。袖部、石等は全く痕跡が無い。

柱穴、貯蔵穴等、ピット類は全く検出されない。

遺物は西壁付近床面に須恵甕片、他に覆土より土師甕片が少々出土している。



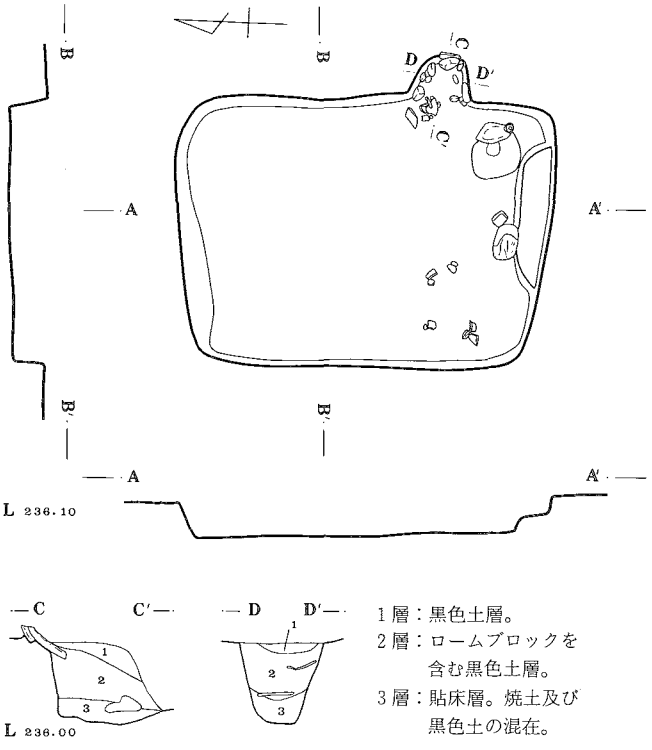

B－156号住居跡

3.4m×3.0mとやや東西に長い長方形を呈し、南半のコーナーは北半に比べ丸味を帯びている。残存する壁高は5cm～8cm程である。

カマドは北壁中央に位置する。幅32cm、壁外へは半円状に26cm張り出し、壁内両側に粘質土の袖部を持つ。長さ30cmを測り、残存する燃焼部全体でU字状をなす。焚口より皿状に凹む火床は中央で約10cm、火床左側には小ピットが存在する。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されない。

遺物はカマド左手前床面に土師坏、他に覆土より土師坏片が数片出土している。




B－157号住居跡

B区最西端部に単独で位置する。中央で3.9m×2.8mを測り、西壁3.4m、東壁3.9mと東側が広い台形を呈す。壁高は35cm～40cmと良好な残存状況と言える。

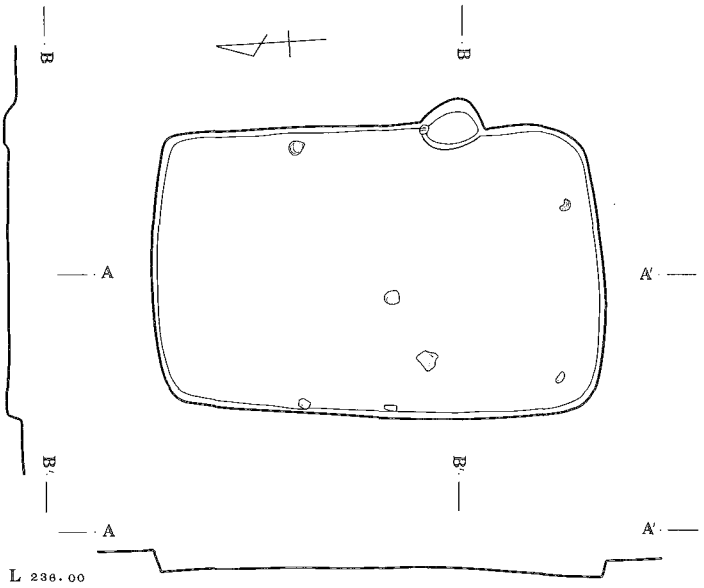
カマドは東壁南寄りに検出された。幅68cm、壁外へ45cm半円状に突出する。両壁は板状石と自然石が組まれ、奥壁共に垂直近くに立ち上がっている。奥壁立ち上がりには板状石が崩れた状態で検出された。火床は焼土混じりの黒色土を埋め戻し焚口とフラットかやや高い位置にある。

南壁において、壁内側にテラス状の高まりが見られた。地山を掘り残したもので、中央で壁より30cm、高さは床面より20cmと、残存する壁高の中位程である。

カマド右手の南東コーナーは他の床面より少々低く、貯蔵穴と言える程ではないが、類するピット状の凹みが不明確な円形で存在する。深さは中央で5cm弱を測り、40cm×25cm程の板状石が東側肩口に凹みを覆うように検出された。

柱穴は検出されなかった。

遺物はカマド内よりコの字状口縁土師甕及び別個体の破片、須恵坏、須恵甕片、南西部床面よりやはりコの字状口縁土師甕片、南東部板状石直上より須恵埦片(墨書)、覆土全体より土師甕片、須恵坏片、皿片が出土した。また先述したテラス状部分すぐ北側に40cm×25cmの不整形な自然石が床面より出土している。




B－158号住居跡

中央で4.8m×3.1mを測り、南北に長い長方形を呈する。南半は張り気味でコーナーも丸味を帯びている。残存する壁高は15cm～20cm程を測る。

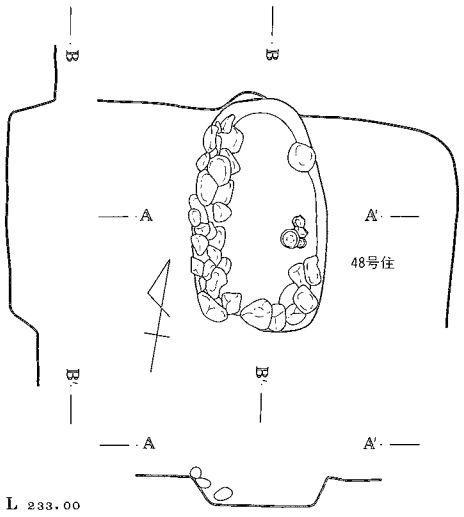
カマドは東壁南寄りに検出された。幅68cm、壁外へ25cm突出するが内部は不整形で、中央の高まりは地山のロームを掘り残している。焚口左側には黄褐色の焼けた石が検出された。燃焼部は壁外であろうが内部の形状はそれに適しているとは思えず、疑問が残る。袖部は検出されない。

柱穴、貯蔵穴等、住居に伴うピットはやはり検出されない。

遺物は南東コーナー床面より須恵坏、東壁際覆土より土師小型甕、西壁際床面より砥石、他に覆土より須恵坏片、土師甕片等が出土した。

B－1号土坑

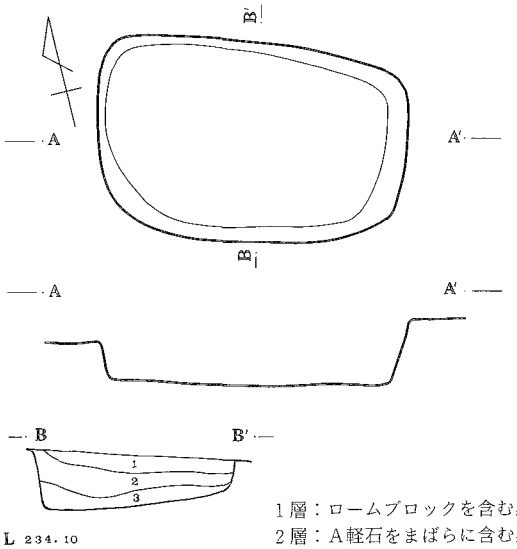
48号住居跡調査中に確認されたものである。南北に長い楕円形で2.5m×1.4m、住居跡確認面からの深さは約50cmを測る。48号住居跡を切り込んでおり、ローム面の底部は平坦で壁面は西、南側に乱積風に自然石を積む。底面より15cm程上部に遺物が検出され、中央東寄りに集中していた。灰釉大型埦、緑釉耳皿、土師賓埦、坏の良好なセットである。




B－2号土坑

B区中央付近のなだらかな北向斜面に単独で位置する。東西3.3m×南北2.1mの不整長方形を呈し、深さは南壁で65cm、北壁で38cmを測る。床面は平坦で壁はしっかりと直線的に立ち上がる。

覆土上位から鉄製紡錘車、他に覆土より須恵甕片、土師甕片等、遺物は少量であった。



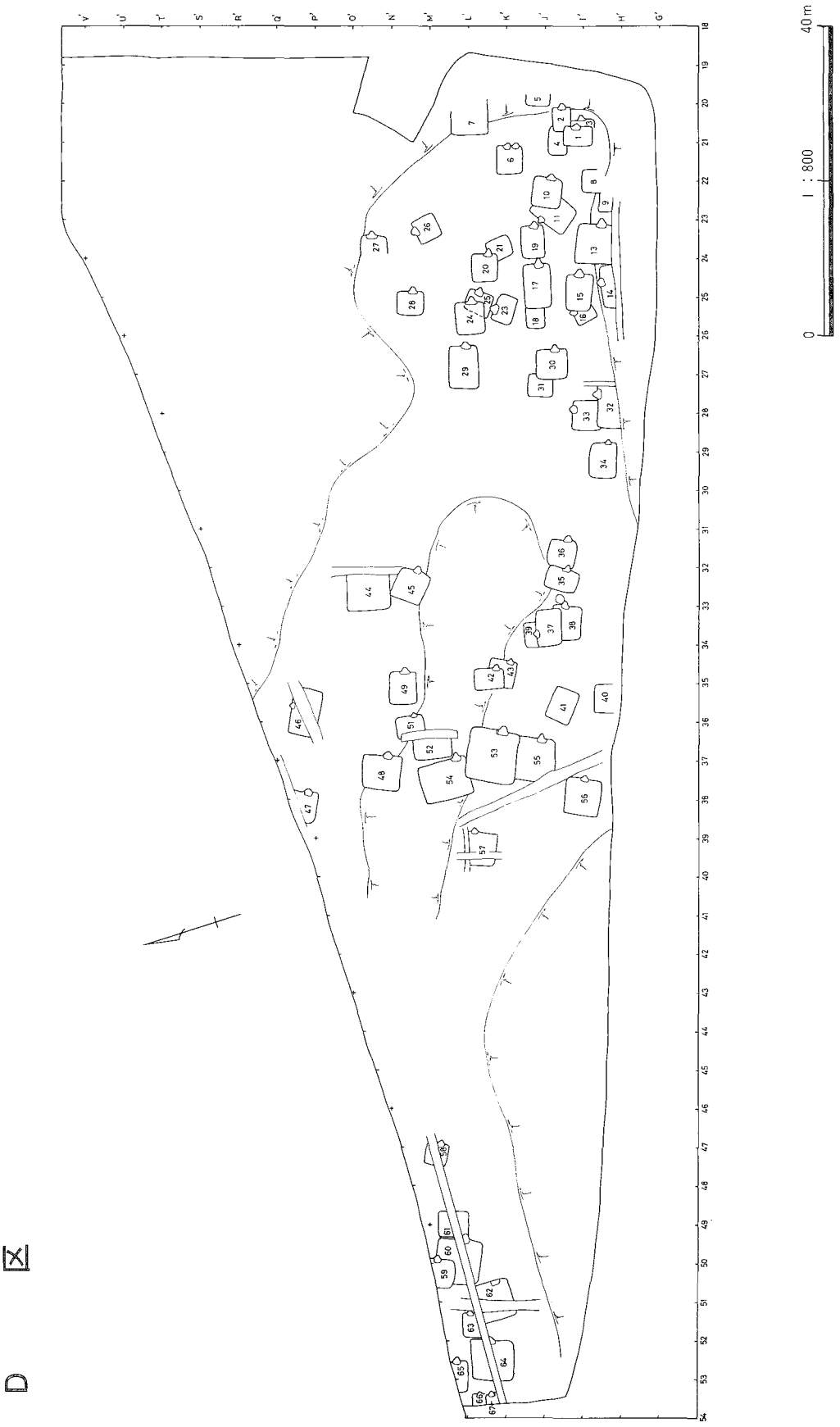

1層：ロームブロックを含む黒褐色土。
2層：A軽石をまばらに含む黒褐色土。
3層：黒色土層。

### Ｂ－１号古墳

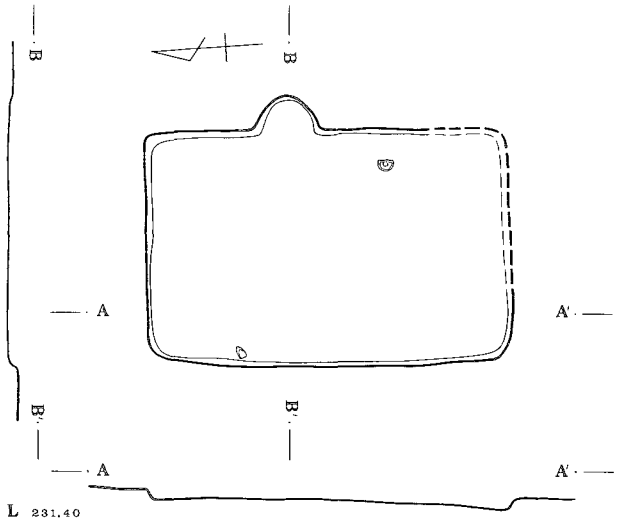
Ｂ区南東部に検出された。小型の円墳で、周掘が僅かに確認された他は全くその痕跡は残らない。墳丘も耕作により削平されていた。

残存する周堀は外径約12ｍ、内径９～10ｍを測る。深さは確認面より15～20㎝で底面は全体に平坦である。

遺物は周堀内外部共に伴うものは出土していない。




挿図5　D区全体図



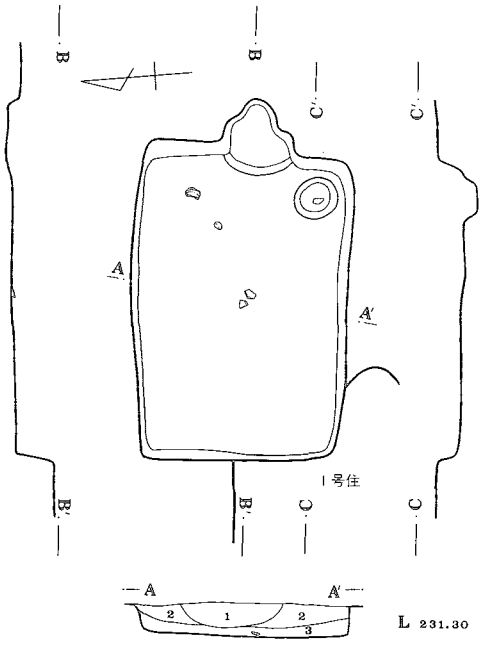

## D－1号住居跡

D区台地の東端に占地し、これより東側は沖積低地となる。1～4号が重複しており、平面精査は1号住居跡が最も新しいものである所見を示す。東西2.5m、南北は住居西側で3.9mを測る。南東コーナーは攪乱に切られており不明。残存する壁高は10cm内外である。

カマドは東壁北寄りにある。少々不整形な半円形で幅70cm、壁外へ40cm突出している。火床は住居床面と同レベルで平坦であり、ローム面である。石、袖部は伴わない。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されない。北東コーナーの凹みは重複する2号住居跡の掘り込みであり、本住居跡に伴うものではない。

遺物はカマド手前覆土より須恵坏、他に覆土全体より羽釜片、須恵坏片、緑釉埦片、灰釉長頸壺片が出土した。




1層：攪乱層。A軽石を多量に含む暗褐色砂層。
2層：細かなローム粒をまばらに含む黒色土層。
3層：径1～5cmのロームブロックを多量に含む黒色土層。

## D－2号住居跡

3.4m×2.3mで東西に長い整った長方形を呈す。残存する壁高は遺構確認面より約40cmを測る。南西コーナーは1号に切り込まれ壁上部は存在しない。

カマドは東壁中央に造られる。幅80cmで壁外に張り出し中程で段をもって内傾し、中央で再び丸く突出する。壁から先端部までは50cmを測る。火床面は焚口よりやや低く、左側は小さな凸凹があり、カマド内部は比較的広いと言える。側壁、煙道部共に立ち上がりは急である。

東南コーナーに貯蔵穴があり、これは径45cm程の整った円形で深さは12cm、底面は平坦で立ち上がりは急である。底面中央に12cm×6cm程の自然石が検出されている。住居内の掘り込みは他には無く、柱穴も不明である。

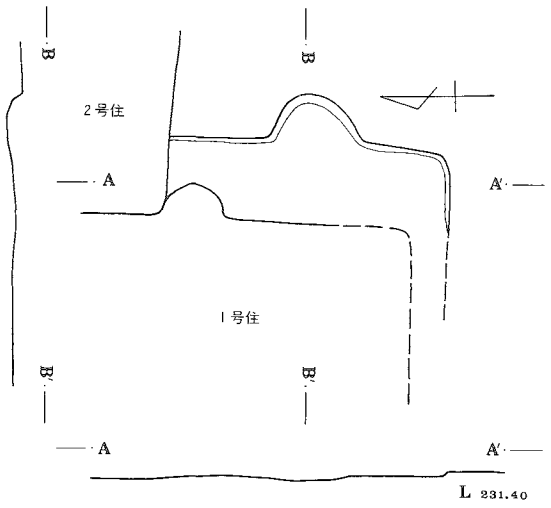
遺物はカマド内より須恵甕片、貯蔵穴覆土より土師鉢片、また住居北東床面より須恵坏片、蓋片が、全体の覆土より土師甕片が出土している。

### D－3号住居跡

東壁と南壁を残すのみで明確な形状は不明。壁高は5cmで残存状態は悪い。

カマドは東壁に検出された。幅1mで約50cm半円状に壁外へ張り出す。床面及び焚口より徐々に低くなり中心部で約10cmの深さだが、この部分は縦長に僅かな凹みがあり、支脚設置部であったかもしれない。カマド内、住居床面共地山面を使用している。又、住居に伴うピット類は全く検出されない。

遺物は覆土より土師甕片、須恵埦片、坏片が少量出土している。

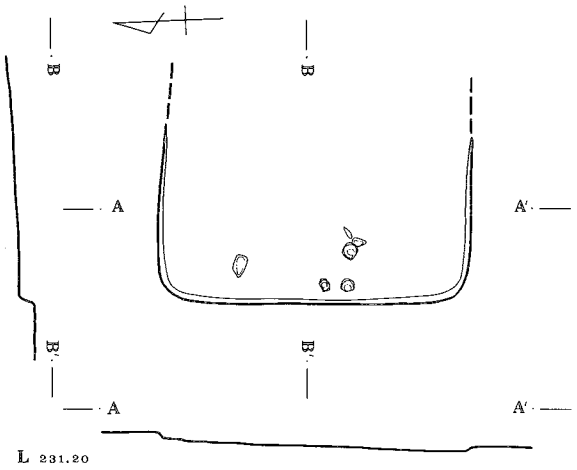


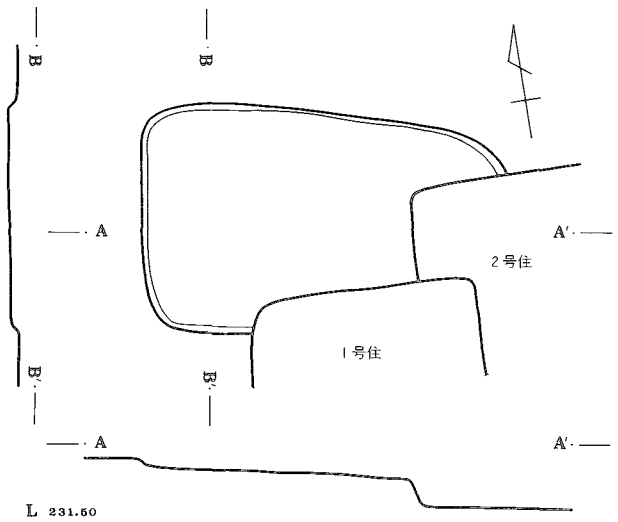

### D－5号住居跡

D区東端の斜面上に存在する。住居西側が残存するのみである。南北3.3m、壁高は西壁で16cmを測る。形状、カマド、貯蔵穴等は残存状況より確認できない。

一応床面とした地山面は、礫層（碓氷川の河岸段丘面と思われる）が見えはじめているが、直上に遺物が出土していること、また明確な貼床層が確認できなかったことより本住居の床面と見てよいであろう。ピット類は全く検出されなかった。

遺物は西壁際床面より須恵坏、覆土より須恵埦及び土師甕片が出土している。また、床面より瑪瑙製の勾玉が完形で出土しており、半透明の褐色を呈す。



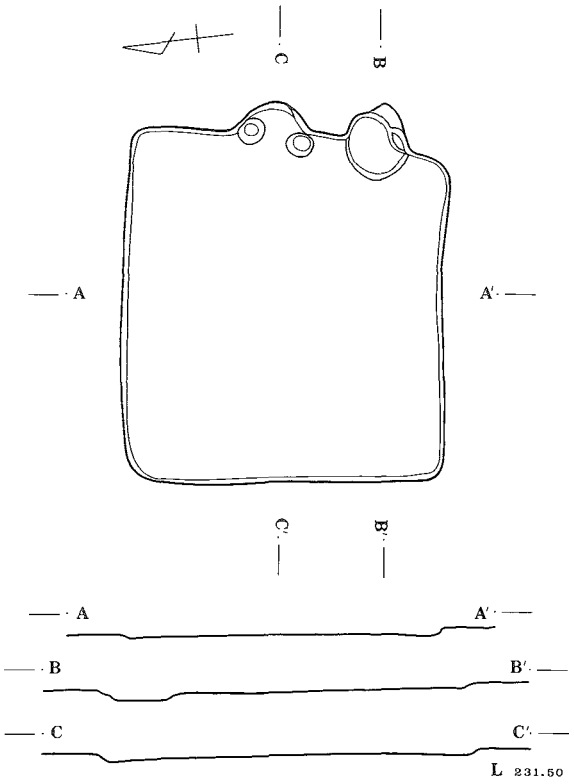




### D－4号住居跡

東壁と南壁の大半を1号と2号に切り込まれ、カマド部は不明である。残存部で南北2.4m、東西は推定4m弱と思われる。残存する壁高は10cm、床面は地山のローム面である。2号住居跡の掘り込みが深く、カマドの痕跡は全く無いが、本遺跡で圧倒的に東壁カマドが多いことから、東壁にあったものが2号に切られたものと見てよいであろう。また、南壁中央から西側にかけては1号住居跡との重複であるが、掘り込みの深さが本住居跡とほぼ同じで、なおかつカマドの痕跡が全く検出されないことも、東壁カマドの可能性が強いことを示す。

住居に伴うピット類は全く検出されない。

遺物は覆土より須恵埦片、土師甕片及び土師小型台付甕の台部片と思われるものが出土している。



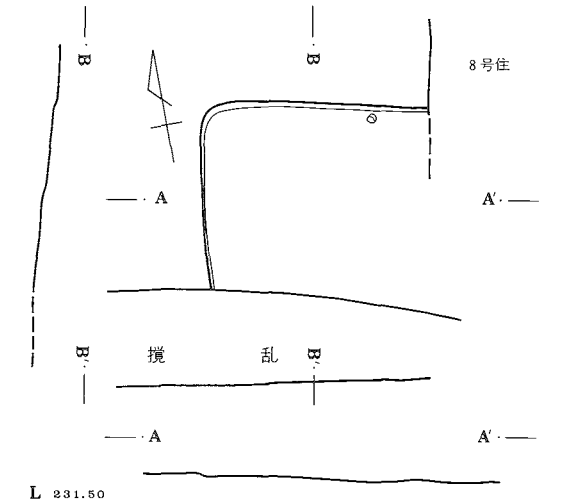

## D－6号住居跡

中央で3.7m×3.4mを測る。やや東西に長い方形を呈す。壁高は平均10cm弱である。

カマドは東壁に2基検出された。北側カマドは幅85cm、壁外への掘り込みは30cmと小さく、底面は住居床面とほぼ同レベル、壁付近両脇に径25cm～30cmのピットがあり、左側の方がやや深い。カマド焚口に関する遺構と思われるがこれといった遺物の出土はない。南カマドは幅70cm、掘り込みは中心より右側で40cmを測る。底面は凸凹があり、火床面といった感じではない。レベルは床面より5cm程低く徐々に煙道へと立ち上がる。

2基のカマドは、両方共明確な火床面がつかめず、残存状況もさほど良好とは言えない。よって造り替えか、併設かの判断は出来ない。ピットは北側カマド部以外は全く検出されなかった。

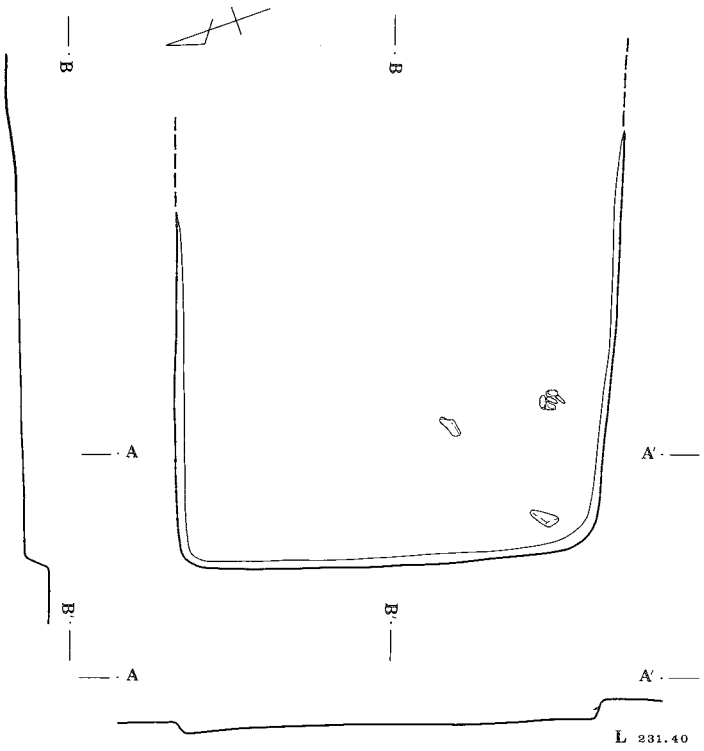
遺物は覆土より4点出土した。須恵坏片3、羽釜片？1で全て小片であった。




## D－9号住居跡

D区南東部の南面斜面に存在し、住居東側は8号との重複をなす。南側は後世の溝状遺構に切り込まれる。よって残存状態は悪く、形状やカマド等は不明である。壁高は北、西壁共に約5cmを測る。床面は地山のローム面で、平坦に掘り凹められる。ピット類は検出されない。

遺物は北壁際床面より須恵坏、他に覆土より土師甕片が僅かに出土した。

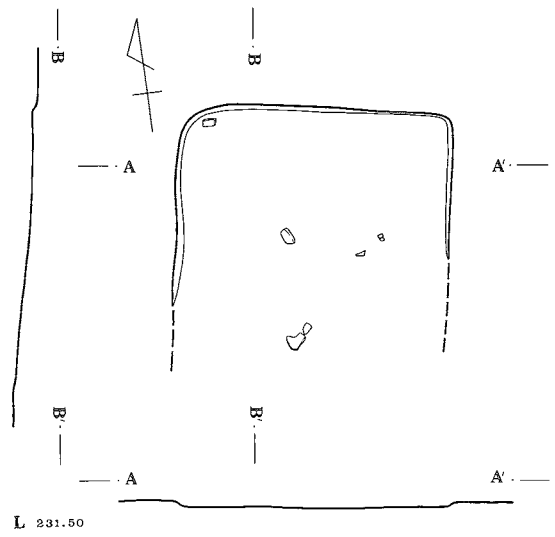



D－7号住居跡

D区東端の斜面上に位置する。住居東壁は残存せず、カマドも確認出来ない。住居西側で南北4.6mを測り、南壁の状況より東西はそれより長くなると思われる。壁高は西壁で26cmである。

床面は全体的に黒色土とロームブロックの混土による貼床であるが、北壁際及び南壁際の一部に地山の河岸段丘礫が顔を出している。ピット類は全く検出されなかった。

遺物は土師甕1の他に破片が10数点、坏片少々、須恵坏片、甕片が数点、灰釉埦片、全て覆土からの出土である。また、住居床面南西の位置から、こも石状の礫が5個まとまって出土した。他に鉄製品の小片がある。

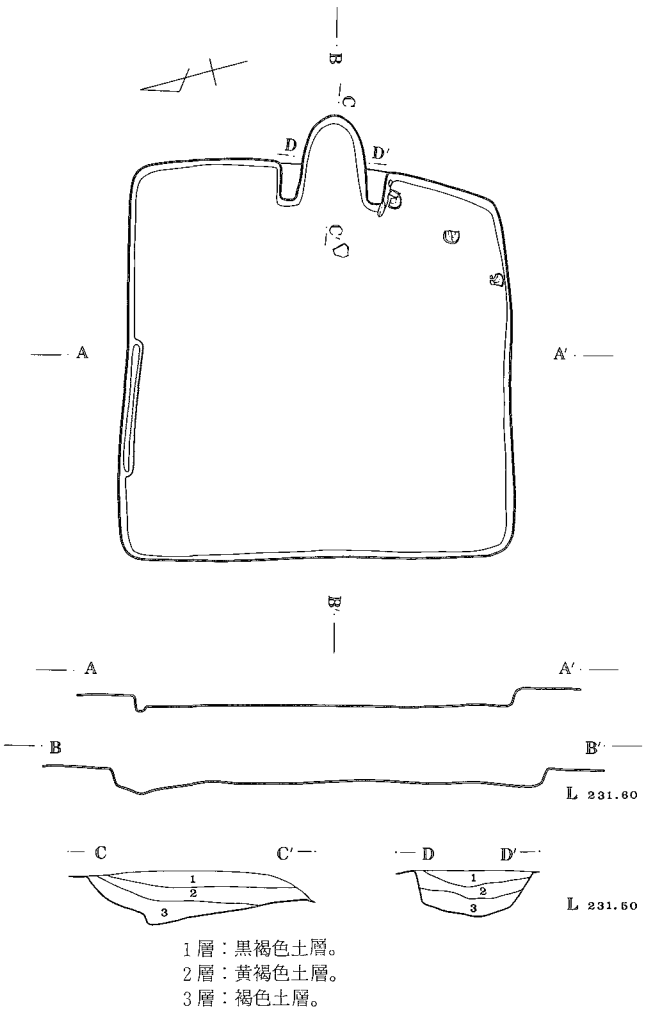



D－8号住居跡

D区南東部にあり、9号と共に南側の斜面上にかかっている。残存状態は悪く、南側は不明で明確な形状は把握できない。北壁付近で東西2.9m、壁高は6cm程を残すのみ。床面は地山のローム面でやや軟弱な地盤と言える。ピット類及びカマドは全く痕跡を残さない。

重複する9号との関係は、平面精査では9→8との所見を得、また発掘段階においては明確な新旧関係は得られなかったので、一応9→8としておきたい。

遺物は床面より須恵蓋片、坏片、甕片が、また覆土より他に土師甕片が少量出土した。蓋片はつまみ部に墨書があるが判読不明である。



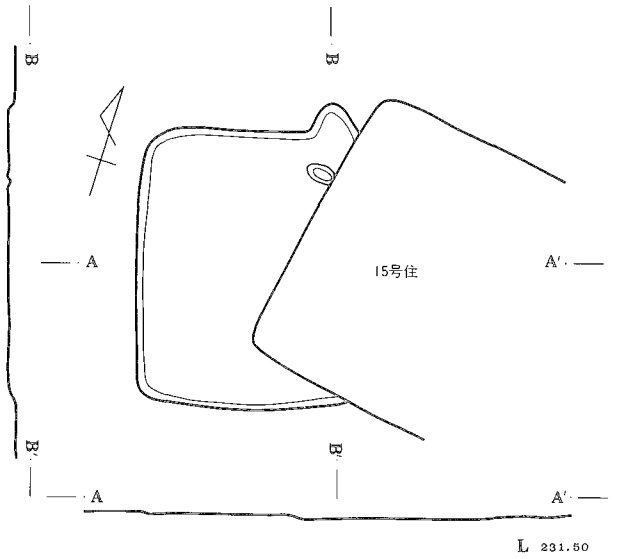

D－10号住居跡

中央付近で4.2m×4.1m、南東コーナーの張りが弱いがほぼ正方形をなす。壁高は約18cmを測る。

カマドは東壁中央にしっかりしたものが検出された。壁より約40cmの長さの袖部が残っており、右袖部は芯に自然石を数個使用している。左袖部は明確なものではなく、右袖部を参考にして残したものである。内部に焼土はさほど多くはなく、天井部の崩落と思われる黄褐色の土層が中位より検出された。壁外への突出は約55cm、幅は68cmで大きく楕円状に掘り込まれる。壁外部中央やや左寄りに径15cm程の浅い小ピットが存在する。これは地山のローム面に掘り込まれているが、この直上に褐色土層があり、火床面が明確ではない。本ピット自体は支脚痕の可能性が考えられるが、もしそうだとすると地山に立っていたのか、あるいは褐色土による貼床（？）面に埋められていたのか、判断は出来ない。

住居内部にピットは検出されない。北壁中央付近に周溝と思われる凹みが検出されたが他の部分にその痕跡は無い。

遺物は住居南東部床面に須恵埦が３個集中しており、またカマド焚口付近から須恵甕片が出土した。埦のうち、南壁際のものは口縁外面に墨書が見られるが、判読はできない。他、覆土より土師甕片、坏片、須恵埦片、坏片、甕片が出土した。



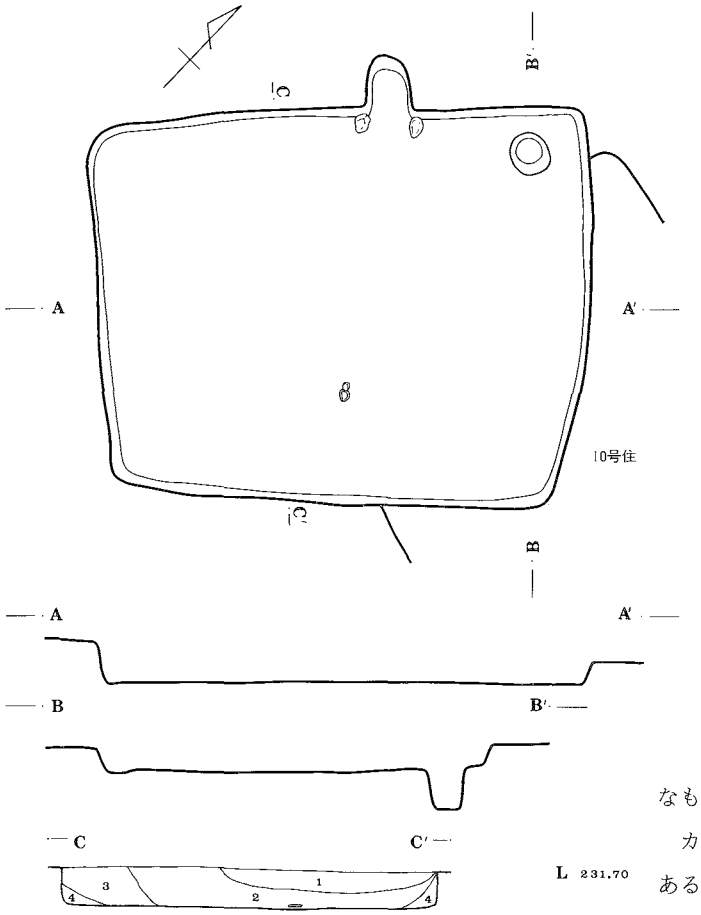

D－16号住居跡

住居東側は15号との重複である。残存する西側で南北に2.9m、壁高８cmを測る。

カマドは北壁に検出された。東端は15号と重複するが、幅約50cm、壁外へは30cm、丸みのある三角形に掘り込まれており、床面より一旦下がって地山となる。明確な貼床は検出されなかった。

ピット類は全く伴わない。南西コーナーを切り込むピットは覆土の差や対応するピットが他に存在しないことより本住居跡のものではない。

遺物はカマド内より羽釜片、覆土より須恵埦片、坏片が出土した。




1層：黄褐色土層。
2層：黄褐色土と褐色土の混在。
3層：黒褐色土層。
4層：黄褐色のロームブロック層。

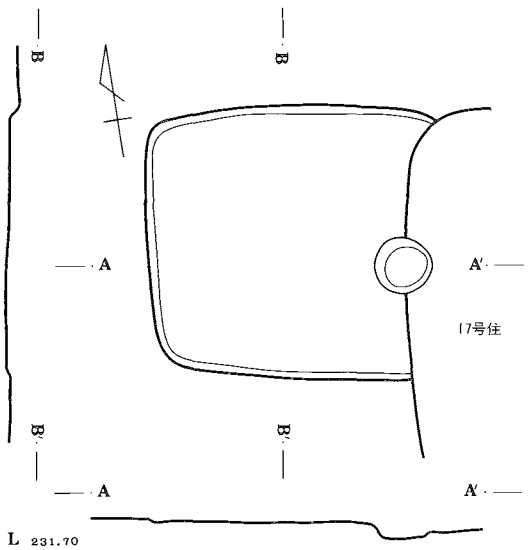
### D－11号住居跡

中央で5.3m×4.2mを測る。東西に長く、南側がややすぼまる台形状を呈す。壁高は西壁で46cmを残し、ロームへの掘り込みは深いほうである。東壁及び南壁は10号との重複である。平面精査の所見は11→10を示しており、これは出土遺物にもその傾向が窺われ、11号の掘り込みが深いために重複部のプランが残存していたものである。

カマドは北壁中央やや東寄りに検出された。幅50cm弱、壁外へは56cm延び、細長い楕円状に掘り込まれる。カマド正面両脇に粘質土が僅かに残っており、その手前には楕円形の自然石が立てられていた。粘質土は袖部痕かもしれないが石をその芯としていた形痕はなく、焚口としていたと思われる。内部は住居床面とほぼ同レベルで火床面は地山である。左右両壁は直に立ち上がり、煙道はゆるやかな傾斜をなす。カマド火床面及び住居東側床面に露出する礫は地山の河岸段丘礫で人為的なものではない。

カマド右手の北東コーナーに貯蔵穴を検出した。床面である地山の混礫層に掘られ、45cm×40cmの楕円形、深さは46cmを測る。その他、住居に伴うピットは検出されなかった。

遺物はカマド内より口縁部に稜をもつ土師坏、須恵蓋片、また覆土より土師甕片、須恵坏片が出土している。

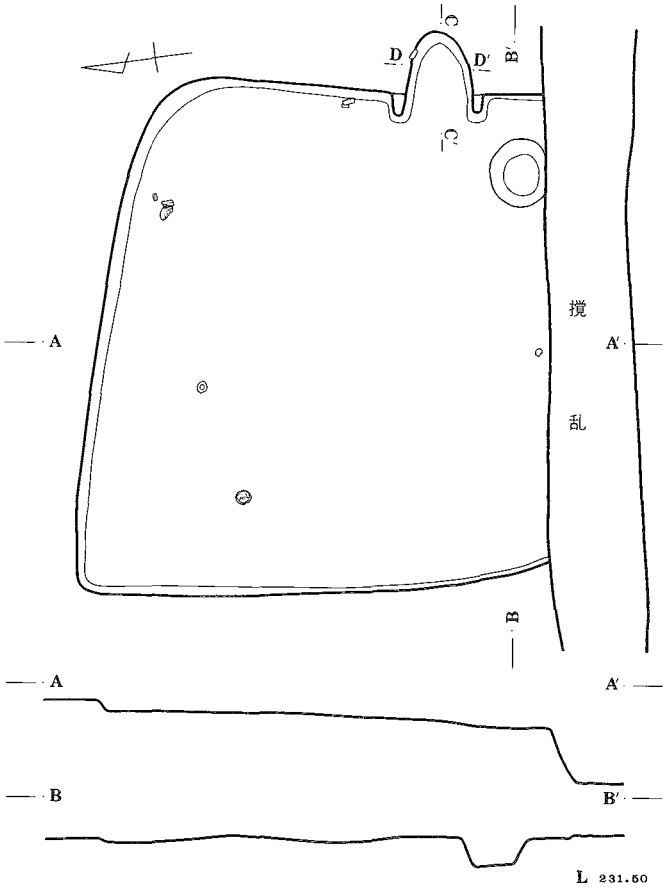



### D－18号住居跡

南北2.9m、東西は17号との重複のため不明。壁高は約8cmが残存する。

カマドは不明だが、切り込まれた東壁にあったと思われる。床面に存在するピットは覆土に少々焼土粒が含まれていたが、性格は不明。

遺物は覆土より須恵坏片、甕片、土師甕片、土釜片、坏等、また灰釉埦小片1が出土し、量的には僅かであった。



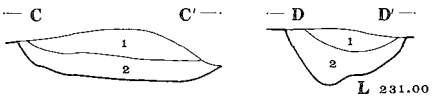

## D－13号住居跡

D区南東部の南側傾斜部に位置する。住居南側は後世の溝状遺構が東西に入り込むためにプラン不明。残存するプラン中央で東西5.3m、南北は4.8m＋α、壁高は北壁で10cmを測る。

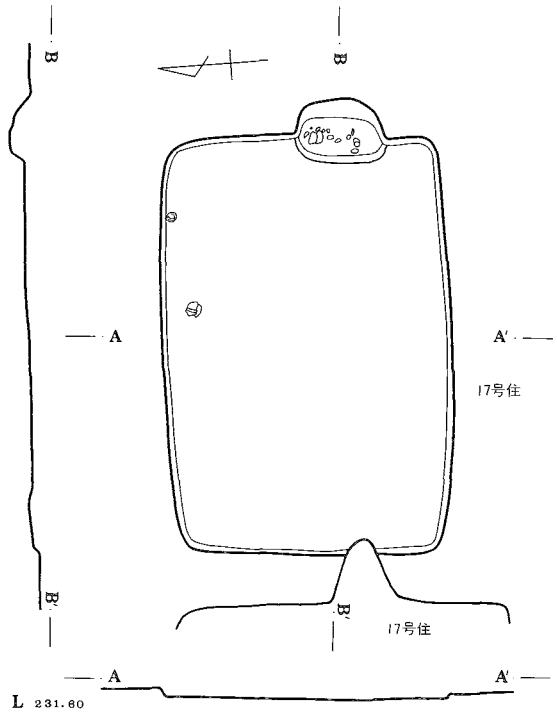
カマドは東壁に検出された。幅65cm弱で楕円状に74cm程突出する。両壁中程の上部は板状石が残存しており、短い袖部が粘質土で構成されているようである。両壁及び煙道は比較的急に立ち上がり、カマド底面は焚口より６～７cm下がって平坦面をなしている。明確な貼床層は検出されず、一応、火床面はこのレベルとしておく。

カマド右手の南東コーナー側に貯蔵穴を持つ。南側上端は僅かに重複するが、径65～70cmの円形ピットで深さは26cm、底面は平坦である。住居に伴うピットは他には検出されなかった。

遺物はカマド内より土師甕片、床面やや上部より須恵坏、灰釉皿、土師甕片、覆土より須恵坏、埦、土師内黒坏、他に須恵器の破片が多数出土した。




1層：天井崩落層。焼土粒を含む粘質土で全体に黄褐色を呈す。
2層：焼土層。僅かに灰褐色の焼ロームを含む。

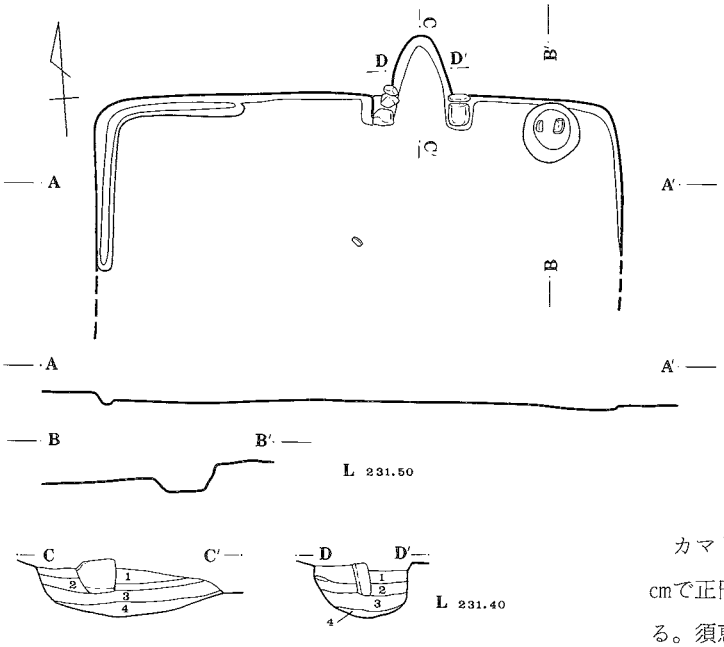



## D－19号住居跡

中央で4.1m×3.1m、残存する壁高は約８cmを測る。形状は北壁、南壁中央が少々張り、東西に長い整った長方形を呈す。

カマドは東壁南寄りに造られる。壁部幅約１m、壁外へは台形状に40cm程幅広く張り出す。壁延長ラインに沿って内部に横長のピット状の凹みがあり、両端にはやや軟質の自然石が据えられていた。その他の礫は地山礫が露出したものである。他にピット類は全く検出されない。

遺物は北壁際床面に須恵埦片、やや内側床面に内面放射状暗文の土師坏片、カマド内より土師甕片と坏片、覆土より須恵甕片、土師甕片、坏片が少量出土した。




1層：焼土を含む黒色土層。
2層：天井崩落層。焼土及び粘質土から成る。
3層：焼土層。黒色土・炭化物・焼土粒も含まれる。
4層：貼床層。黒色土とローム の混在。

### D－14号住居跡

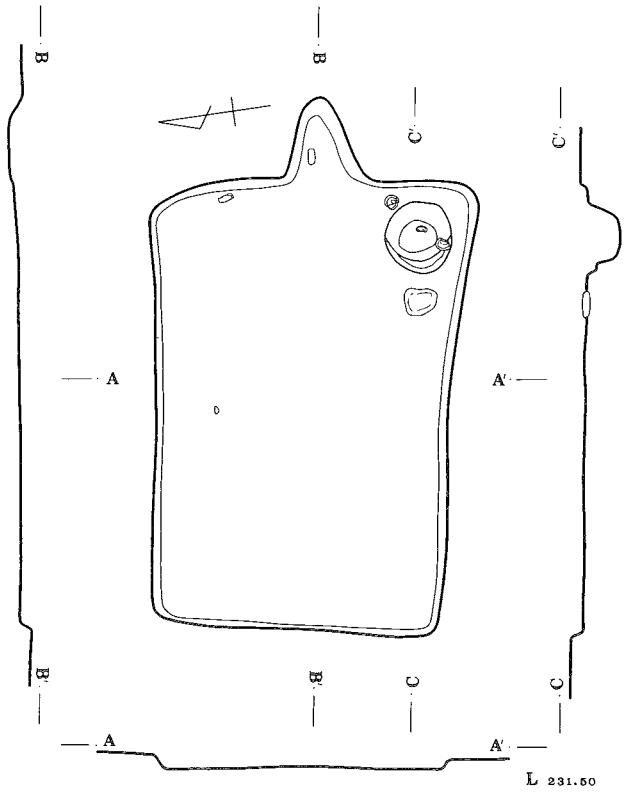
D区南東部の南側傾斜部、13号住居跡の西隣に位置し、北壁とそれより南側へ2mの部分が残存するのみである。東西は5.6mを測る。壁高は僅かで平均5cm弱。

カマドは北壁東寄りに造られる。住居壁部幅66cm、壁外への掘り込み64cm程で三角形に近い楕円状といえる。焚口付近両脇には板状石が検出された。火床は焚口より地山のローム を皿状に13cm程掘り下げ、その上に黒色土とローム 粒の混土を10cm弱貼床している。覆土中～上位には崩れた板状石が含まれていた。

カマド右手の北東コーナーに貯蔵穴が検出された。径60cmで正円に近い形状、深さは15cmで底面は比較的平坦である。須恵器の坏が2つに割れた状態で出土した。

住居に伴う他のピットは検出されない。北西コーナー部のみに周溝と思われる凹みが確認された。

遺物は貯蔵穴内の他、床面より須恵埦片、カマド内及び覆土より土師甕片が出土した。



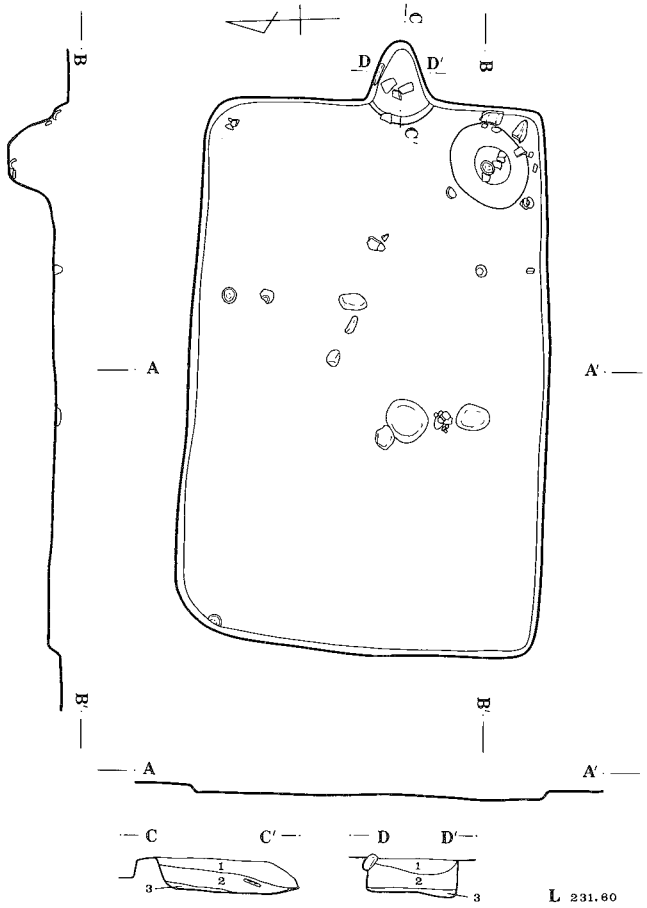

### D－15号住居跡

中央で東西4.8m、南北3.1mの長方形を呈し、東側の両コーナーは張り出し気味である。壁高は平均10cm強を測る。

カマドは東壁中央に検出された。幅は壁付近で90cmを測り、壁外へは長い三角形状に直線的に延び、80cmを測る。中心よりやや左側へ主軸がずれている。内部は両壁、下面共によく焼けており、火床は地山のローム と思われる。中央手前やや左には支脚に使用したと思われる板状石が検出された。

南東コーナーに貯蔵穴を持つ。径75cm、深さは中央で34cmを測り、南側は上位に段を持つ。南側肩口、北側中程より須恵坏が出土した。貯蔵穴以外、ピット類は検出されなかった。

遺物はカマド内及び覆土より土師甕片、須恵坏片、床面より須恵坏、蓋が出土している。また、鉄製の鎌と思われる破片、大型の管状土錘2個、緑釉埦片が覆土より出土した。




1層：天井崩落層。焼土粒を多く含む黄色粘質土。
2層：焼土層。黒色土が混じり、暗赤褐色でバラつく。
3層：貼床層。黒色土とローム の混在。

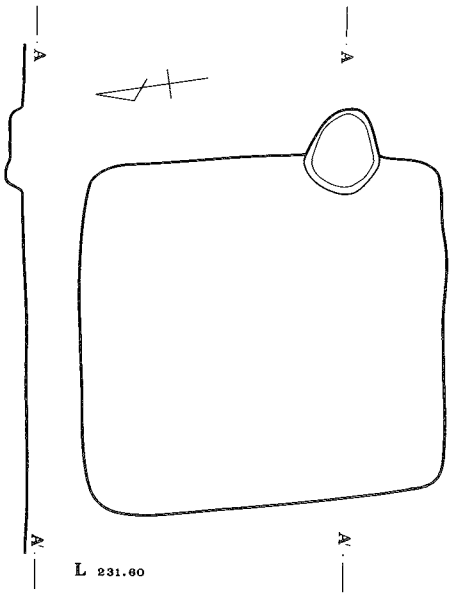
### D－17号住居跡

中央で5.8m×3.8mの東西に長い長方形を呈す。壁高は約10cmを残す。

カマドは東壁のほぼ中央で僅かに南寄りの位置にある。壁部分での幅約70cm、三角形状に掘り込まれており、長さ約70cmを測る。右壁中央及び左壁中央から手前までは板状石が残存し、壁を構成していたことを窺わせる。覆土には崩れた状態で板状石片が出土している。下面は地山か焚口より10cm程段をもって下がり、貼床層と思われる黒色土とローム ブロックの層が3cm程検出された。

南東コーナーに貯蔵穴を持つ。径92cm×75cmで東側以外ではなだらかに肩口が落ち、深さは中央で床面より45cmを測る。底面、東側肩口付近に遺物が集中していた。ピット類は他には検出されなかった。

遺物は須恵器、土師器共に多い。カマド内及びその周辺には土師甕片が多く、3～4個体と思われる。貯蔵穴底面と北、南両肩口より須恵坏、住居床面より須恵坏3、埦1、甕片、覆土より土師甕片、須恵坏片、蓋片等と灰釉長頸壺片1が出土した。また、住居中央付近床面に扁平な自然石が大小3と他に自然石2がある。

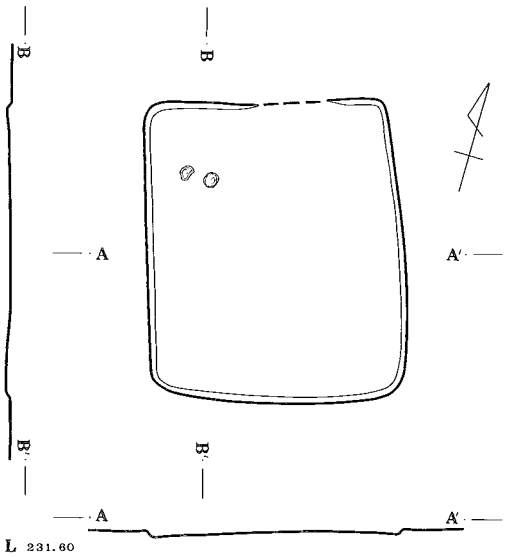



### D－20号住居跡

残存状態が悪く、壁はほとんど確認出来ない。僅かに残る黒色土の範囲をプランとした。南北3.9m、東西3.7mで正方形に近い。

カマドは東壁南寄りに検出された。幅75cm、壁外へ半円状に50cm掘り込みを残す。底面は地山礫が露出しており、火床面はこれより上部である。住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物は羽釜片、須恵坏片が数片出土している。

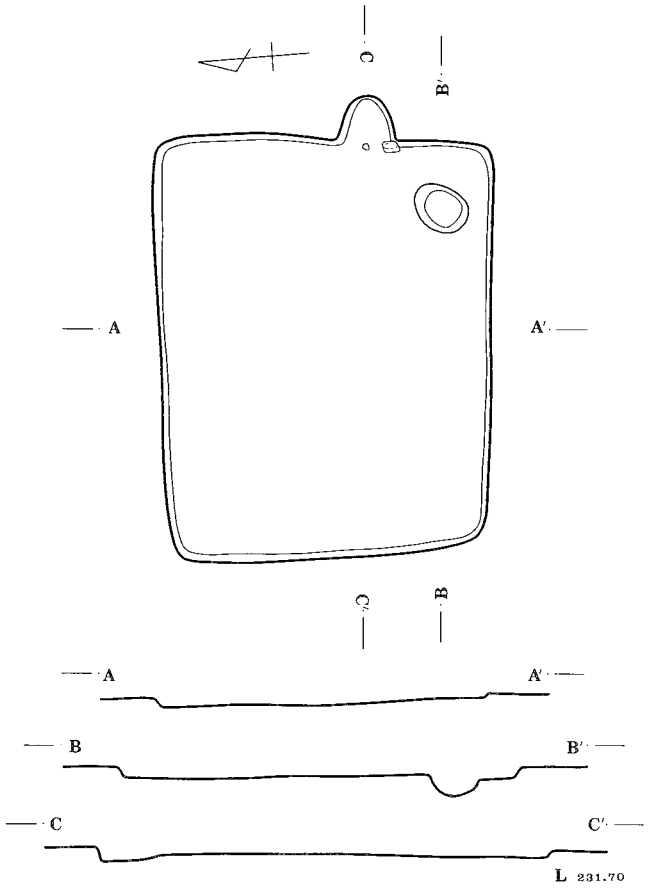



D－21号住居跡

住居北西部は20号との重複部分である。平面精査では21→20との所見を得ており、21号の掘り込みの深さからプランが残っていたと言えよう。規模は中央で3.2m×2.7m、壁高は5cm強で、南北に長い小型の長方形を呈す。

本住居に伴うカマドは検出されていない。他住居跡の傾向から北壁か東壁の可能性が高いと考えられるが、東壁にその痕跡は無く、他壁も同様である。北壁中央やや東に20号住居跡カマドの掘り込みがかかっていることから、本住居のカマドはこれに切られたのではないかと推定する。また、住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物は、住居床面北西部に須恵坏1と埦片が検出され、他に覆土より須恵埦片、坏片が数点出土した。



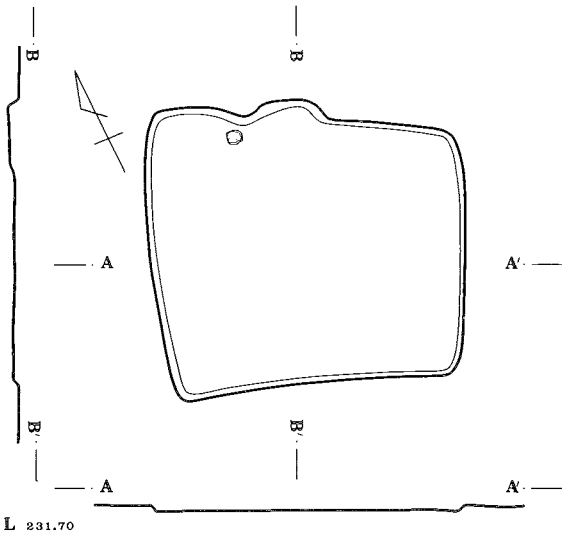

D－24号住居跡

4.5m×3.5mの比較的整った隅丸長方形を呈す。長軸は東西にとられ、東壁南寄りにカマドをもつ。残存する壁高は平均10cmである。

カマドは壁より約50cm突出し、壁部での幅は約60cm、焚口より5～6cmなだらかに下がっており、壁外部は比較的急に立ち上がる。全体に焼土が散っていたが、明確な層は見られない。また、25号との重複のためカマドの壁の立ち上がりも明確ではない。下面に礫が数個露出するのは段丘礫層でありこれは床面や貯蔵穴内にも頭を出しているものである。

カマド右手の南東コーナーに貯蔵穴を検出した。径約50cmで深さはボウル状の中心で20cmである。他にピット類は検出されなかった。

遺物は覆土より暗文のある土師坏片、底部ヘラケズリの須恵坏片、蓋片等が出土した。

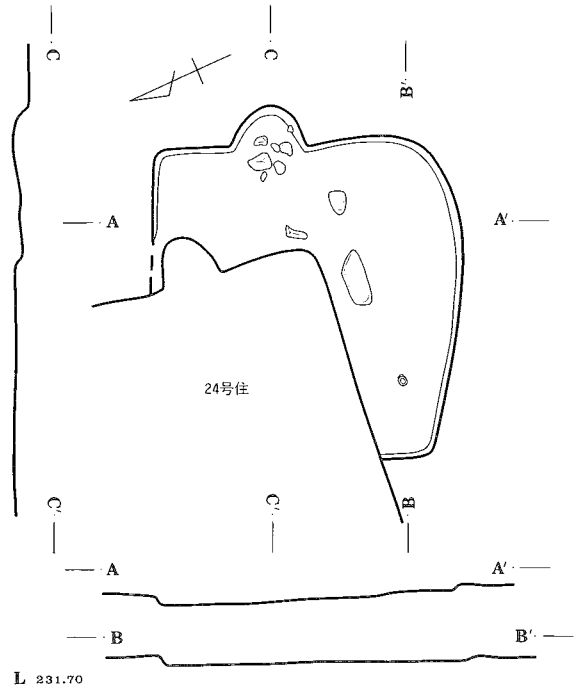



D－23号住居跡

中央で3.3m×2.7mを測る。東西に長く、西側は南北幅が広めの不整長方形で、壁高は5～6cmである。

カマドは北壁西寄りに検出された。壁部幅約90cmで壁外へは弧状に20cm程掘られているのみ。カマド左側は壁が内側へ回り込み、袖部とは言えないがそれを思わせるような掘り残し部分がある。左右共明確な袖部は検出されてはいない。燃焼部の中心は壁内にあると思われ、火床面は周りよりも5cm程円形に凹み、地山のローム面がよく焼けた状態を示した。住居に伴うピットは検出されなかった。

遺物はカマド左手床面より須恵大型埦が、またこれに伴うと思われる蓋が出土し、他に遺物は見られなかった。



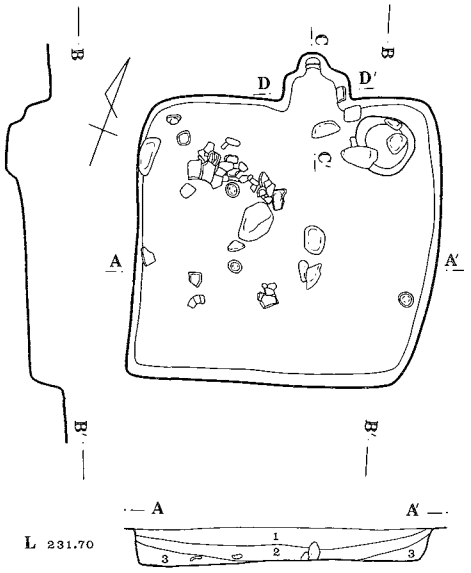

D－25号住居跡

残存部で東西3.4m、南北3.3mである。南東コーナーは弧状に大きく曲線を描き、他のコーナーとは大分違っている。

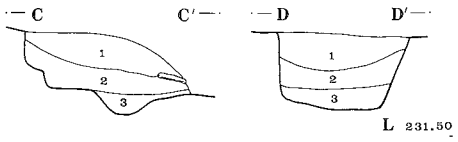
カマドは東壁北寄りに位置し、隅丸三角状に張り出す。幅80cm、長さは壁より40cmを測る。内部には自然礫が数個あるが、これは段丘礫で、カマド部の掘り方の面で出てきたものである。火床面は明確でなく、掘り方の面まで下げたためである。床面の中央付近に検出された台形状の大きな自然石は他の礫よりレベルも高く、本住居床面密着として伴うものであろう。ピット類は検出されなかった。

遺物は床面より羽釜片、土師質の埦片が出土した。

さて、重複する24号との関係であるが、平面精査の段階で25→24としたが、伴出遺物を比較すると24→25となる。24号の重複部のカマド及び壁が不明確であったことと、24号のカマド付近の礫のレベルと大きさが25号カマド手前の礫（段丘礫と思われる）とで同じくらいということを考えると、24号の礫もカマドに関係するものではない可能性が考えられる。25号が24号を切り込み、それが達しなかったカマドの下部にその痕跡が残っていた、と考えると、土器の新旧関係も矛盾しない。不明確乍ら、このように考えておくことにする。




1層：軽石微粒子をまばらに含む黒色砂層でよくしまっている。
2層：ローム微粒子をまばらに含む褐色土層。
3層：しまりのない暗褐色層で径4～5㎜のロームブロックを多量に含む。




## D－26号住居跡

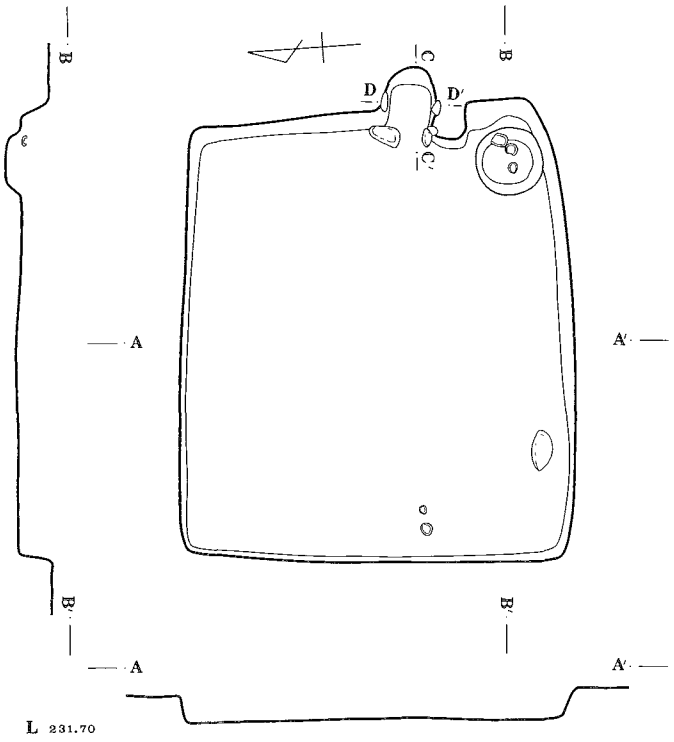
3.2m×3.0mでやや東西に長いが、正方形に近い形状である。残存する壁高は30cm強で良好と言える。

カマドは北壁中央に検出された。粘質土による短い袖部の痕跡があり、内側幅40cm、壁外へは中央で50cm張り出す。壁外立ち上がり中央部は側部よりさらに一段奥へ掘り込まれている。火床面は住居床面とほぼ同じで、手前にピット状の凹み（掘り方）を貼床で埋めていた。焚口右側の板状石はよく焼けており、カマド内側には同様の石が検出されないことから、焚口（の天井）に使用したものと考えられる。

カマド右手の北東コーナーに貯蔵穴をもつ。径約60cmの円形ピットで深さは中央で18cm程。カマド側から倒れ込むように土師甕が肩口より検出され、また内部には15～20cm程の大きさの自然石があった。

遺物は多量である。床面からが多く、土師甕、甑、鉢、坏等が出土し、また大型の自然石も数個見られた。

1層：褐色土層。
2層：焼土ブロックを含む褐色土層。
3層：貼床層。ロームと褐色土の混在。



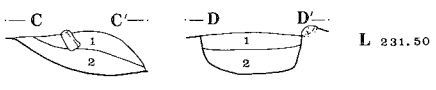

## D－29号住居跡

4.8m×4.2mで東西に長軸をもつ長方形。各コーナーはしっかりと角がとられている。残存は壁高20～30cmと良好である。

カマドは東壁南寄りで、壁外に半円状に40cm張り出し、幅は50cmを測る。焚口付近と側壁に自然石を据え、カマド内部右側には、やはり自然石の支脚を立ててある。

右手の南東コーナーには貯蔵穴が検出された。径70cmの円形で深さは約15cm、ピット類は他には検出されなかった。

遺物は貯蔵穴より須恵埦片、土師質坏片、肩口より硯状の土製品他、覆土より灰釉皿、土師質坏、土錘等が出土している。



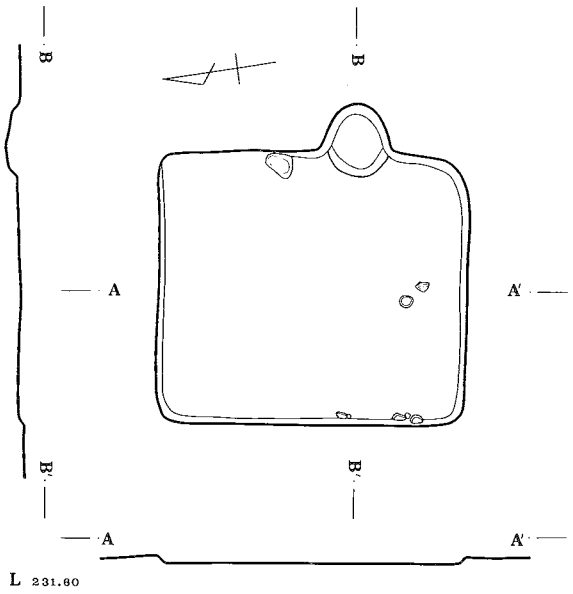

1層：住居内覆土と同じ暗褐色層で少量の焼土粒を含む。
2層：焼土とロームブロックの混在層。赤褐色土中に黄色ロームが混じる。

### D－28号住居跡

3.3m×2.9mで南北に長軸をもつ長方形である。残存する壁高は10cm足らずで東壁北側はほとんど残らない。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅60cmで壁外へ半円状に40cm程張り出している。内部は中心で焚口より約10cm低く、浅いボウル状。袖部や石類は全く検出されなかった。住居に伴うピット類も全く検出されていない。

遺物は、西壁際及び住居南側床面より羽釜、土師質坏、埦等が出土した。



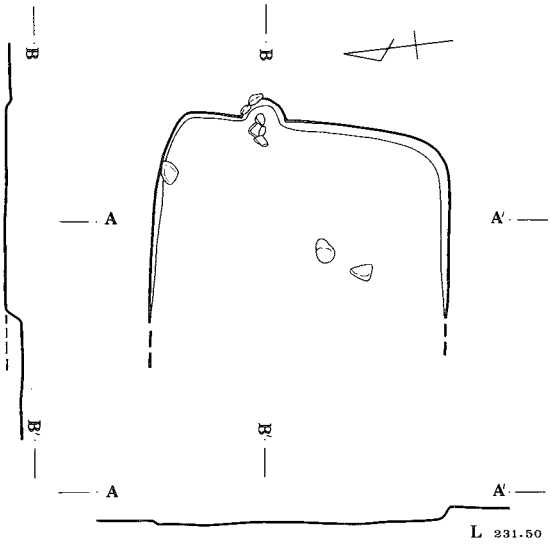

### D－27号住居跡

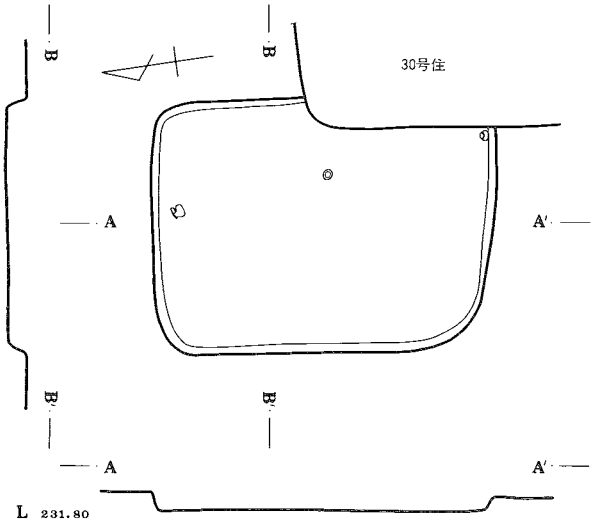
南北3.1mで東西は西壁が攪乱のためにはっきりせず不明。本住居より北側は下り傾斜がゆるやかに下りてゆく。

カマドは東壁北寄りに造られる。半円状の突出は壁より20cmに満たない小さなもので左側に板石を添える。壁より50cm程内側までがよく焼けており、燃焼部の中心は壁付近の位置と思われる。

住居床面は残存状態も悪く、明確でなかったため掘り方面まで掘り進めた。所々に段丘礫が顔を出している。伴うピットは全く検出されなかった。

遺物は、カマド内出土の羽釜片のみであった。

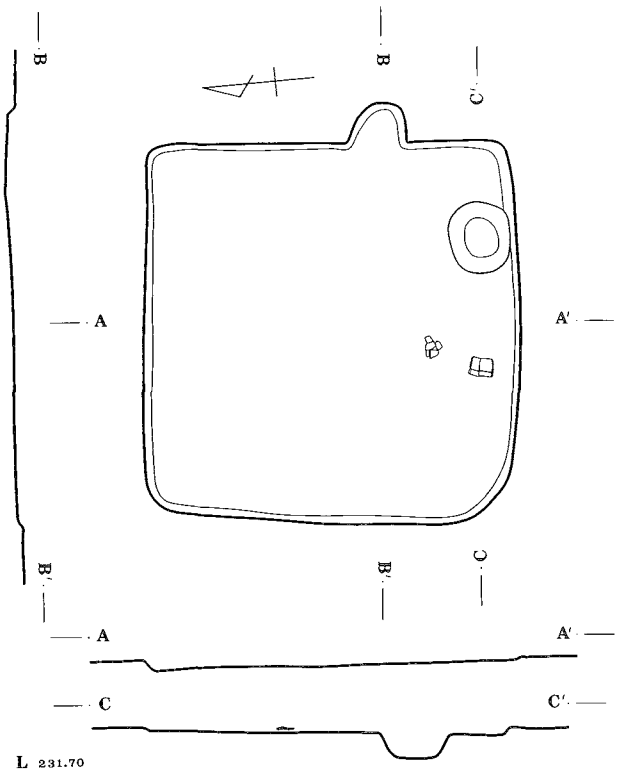



### D－31号住居跡

中心で2.7m×3.6mを測り、南北に長軸をもつ隅丸長方形。東寄南半分は30号に切り込まれている。カマドの痕跡を示すものは全く検出されなかった。また、柱穴、貯蔵穴等のピットも検出されない。

遺物は南壁際床面より須恵埦、覆土より須恵埦の他、須恵坏片、甕片、土師甕片、灰釉埦片が出土した。

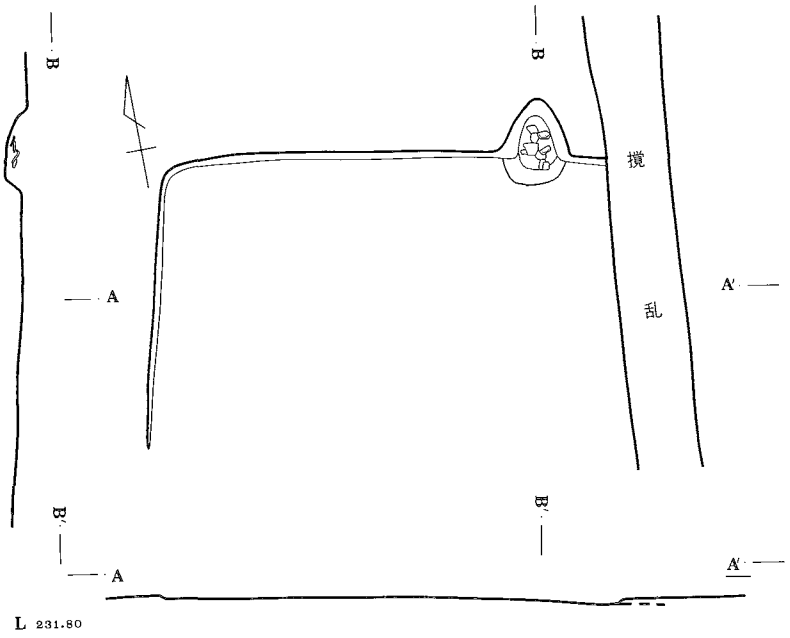



D－30号住居跡

中央で4.0m×4.0mの正方形を呈し、残存状況は壁高10cm弱と悪い。

カマドは東壁南寄りに造られる。少々右に傾き、幅60cm、中央で55cm張り出す。火床は床面と同レベルかやや低く、右手の南東コーナーと共によく焼けている。また、コーナーよりやや西にずれて、貯蔵穴と思われるピットが存在する。径65cm、深さ25cmでやや角ばったボウル状の断面を呈す。柱穴等、他のピットは全く検出されない。

遺物は住居南側床面の羽釜片の他、覆土より須恵坏、甕の小片が少々出土している。



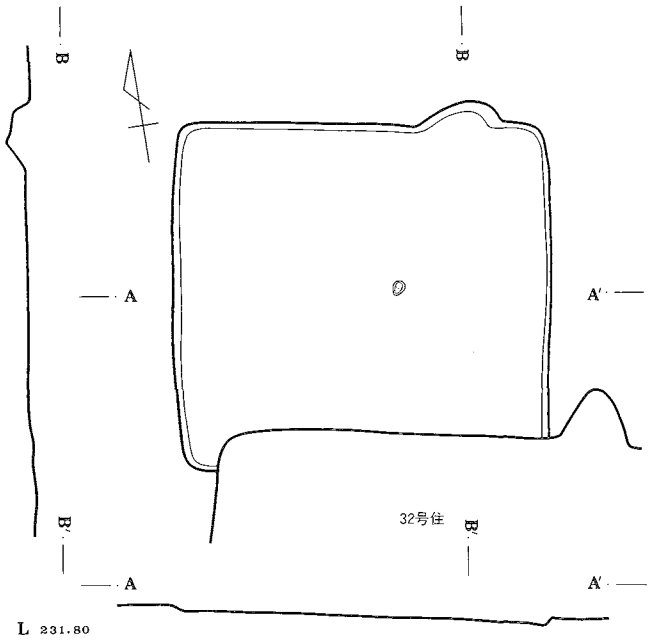

D－32号住居跡

D区南端の緩斜面上に造られる。残存状態が悪く、南壁は不明。東壁も後世の溝に切られるが、溝の東にプランが検出されないので、東西は5.0m～5.5m程と推察される。

カマドは北壁東寄りにピット状に検出された。幅60cmで壁外へ60cm隅丸三角状に掘り込まれており、壁はよく焼けていた。明確な火床面が検出されず、掘り方面まで下げたが、これは住居床面の焚口よりピット状に落ちていた。中位より土師甕片が出土しているので、この直下付近まで貼床し火床としていたものと思われる。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されなかった。

遺物はカマド内よりコの字状及びそれに近い口縁の土師甕片、覆土より須恵坏片、土師甕片、坏片いずれも小片が出土している。



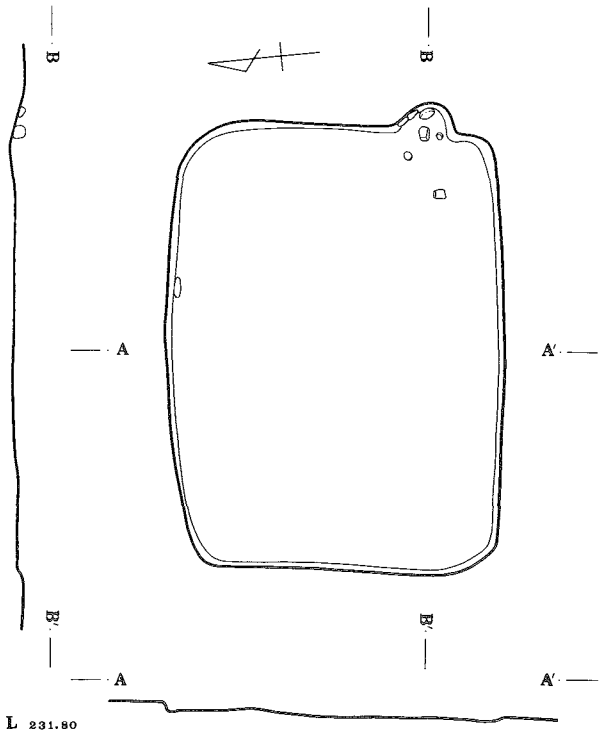

D－33号住居跡

東西4.0m、南壁は32号に切られているが、僅かに残る南西コーナー付近で南北3.7mを測る。残存状態は悪く、壁高は平均８cmに満たない。

カマドは北壁東寄りである。壁外へは中央で20cmの弧状の掘り込みにとどまり、幅は90cm弱を測る。壁及び内側が燃焼部の中心になる形態である。火床面ははっきりしなかったが掘り方は円形ピット状に凹み、中心は住居壁付近となる。

カマドの掘り込み以外に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物は中央付近床面より須恵埦、覆土より土師甕片、須恵埦片、灰釉埦片が出土している。



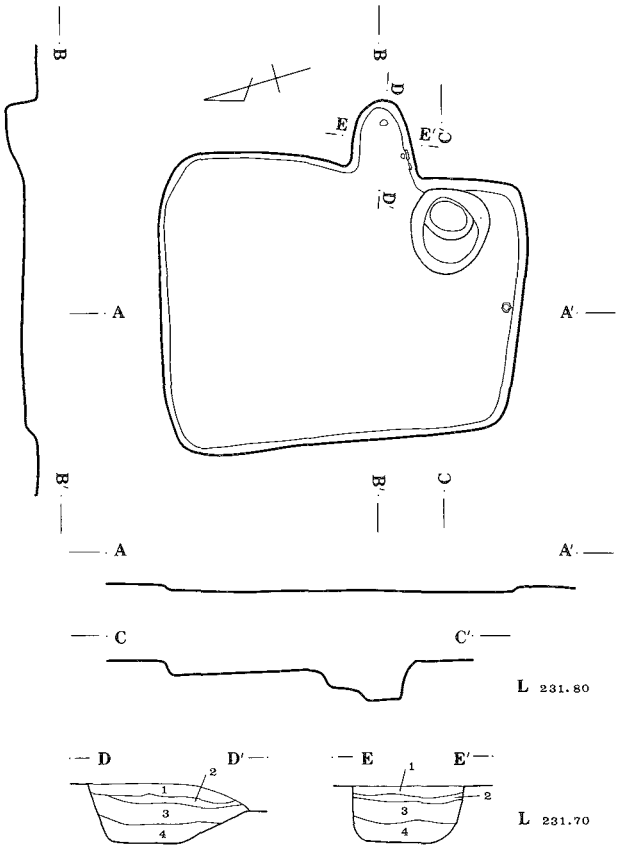

D－34号住居跡

中央で4.7m×3.6mの東西に長軸をもつ住居跡。北壁西側は少々内側に回り込んでいる。壁高は北壁で10cmを測る他は５cm内外と僅か。

カマドは東壁南寄りである。幅約50cmで壁外へは30cm弱の掘り込みは、住居の規模に比べると小さめと言える。壁は数個の自然石を据えて補強されており、火床と思われる壁から内側にかけての部分は赤褐色によく焼けていた。袖部の痕跡は検出出来なかった。また、中央に四角柱状の石製支脚が検出された。

ピット類は全く検出されていない。

遺物はカマド内より土師質の埦片、土釜片、羽釜片、覆土より須恵埦片等が出土した。




### D－35号住居跡

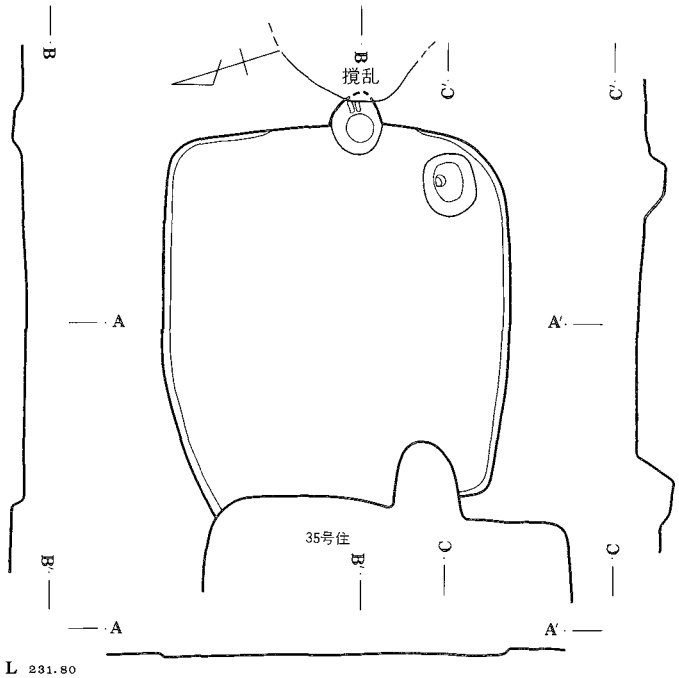
北側が広い台形状を呈し、中央では3.0m×3.8mと南北に長軸をもつ。

カマドは東壁南寄りで、幅70cm、中央での張り出しは80cmを測る大きなものである。焚口付近よりなだらかに20cm程掘り込まれ、壁外の立ち上がりは急である。内部には20cm以上の貼床を施し、火床は焚口レベルかそれ以上との所見が得られた。焚口両側には自然石を据えている。

カマド右手の南東コーナーには貯蔵穴が検出された。これは径80cmの浅いピット内に、さらに径40cmのピットが掘られており、深さは床面より30cmを測る。その他、柱穴等は検出されなかった。

遺物はカマド内より須恵坏、コの字状口縁土師甕片、貯蔵穴内より土師台付甕片、須恵坏片、南壁際床面より須恵坏片等、又、覆土よりコの字状口縁土師甕片が多量に出土している。

1層：焼土ブロックを含む褐色土層。
2層：灰層。
3層：焼土と褐色土の混在。
4層：ローム と褐色土の混在。3層と4層で貼床を構成する。




### D－36号住居跡

中央で南北3.7m、東西は西壁が35号に切られる為に残らないが南西コーナーの位置からすると4m程であろうか。全体にやや不整形と言える。

カマドは東壁中央やや南寄りである。先端は攪乱に切られているが、壁での幅は50cmで浅いピット状の小さなものと思われる。

右手の南東コーナーには貯蔵穴が検出された。径65cm×55cmの楕円形で深さは20cmを測る。覆土下位より土師坏、土師甕片が、また、住居床面レベルで須恵坏が出土した。またピット類は他は検出されない。

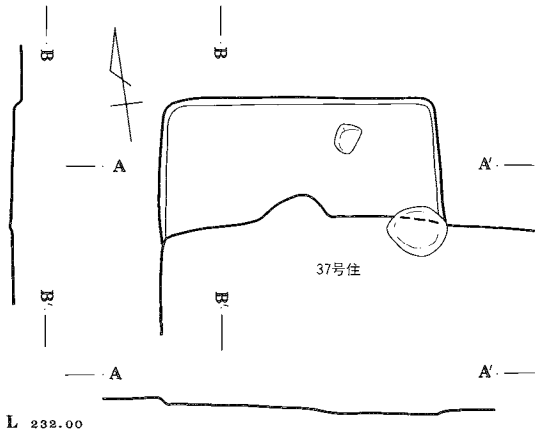
遺物は他に住居覆土より土師台付甕片、土師坏片、須恵坏片等が出土した。

### D－39号住居跡

東西3.0mで住居北側が少々残るのみ。大半は37号住居との重複で不明である。

カマドは住居の残存状況より、東か南であるが、東壁カマドの類例が大半を占めることから、東壁と思われる。唯、痕跡は全く検出出来なかった。貯蔵穴、柱穴等も同じである。

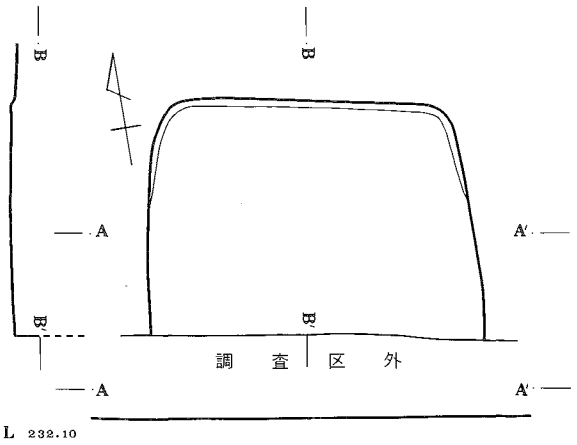
遺物は須恵蓋片、土師甕片が少量出土した。

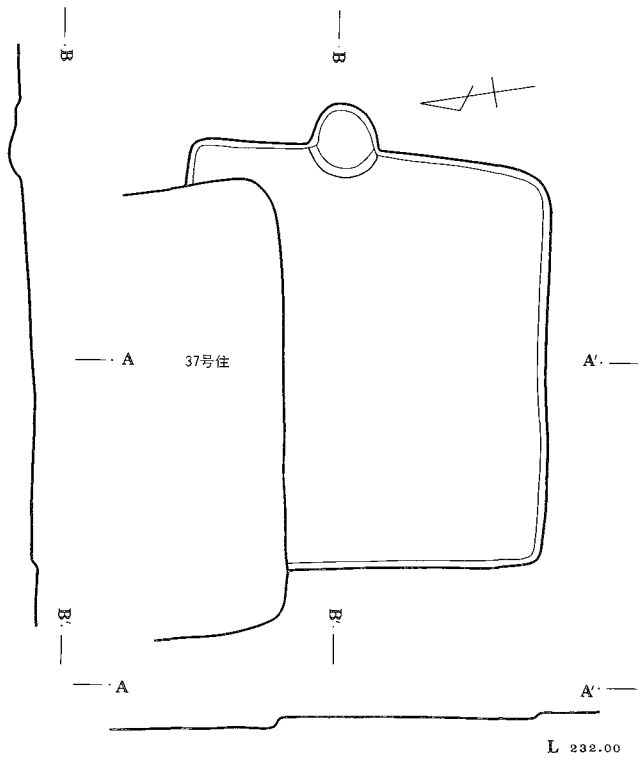



### D－40号住居跡

残存状況が悪く、プランは僅かに残る覆土より判断した。南側は区域外の為、不明。東西は3.5mを測る。カマドの痕跡は無く、区域外部分の東壁の可能性が高いと思われる。ピット類は全く検出されなかった。

遺物はごく少量であり、土師甕、坏、須恵坏、蓋いずれも小片であった。




### D－38号住居跡

住居北側がやや広くなっているようで、南壁は4.1mだが北側では4.5mを測る。北壁は37号に切られているが、残存する北東コーナーからの推定で3.8m程と思われる。

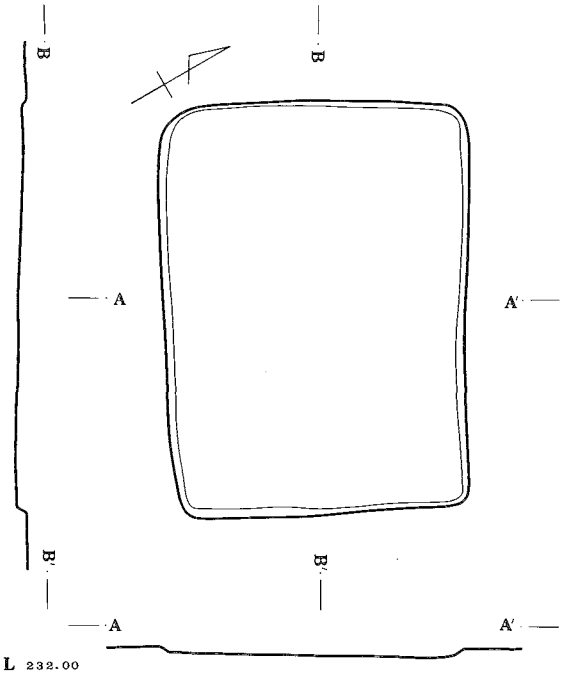
カマドは東壁北寄りにあり、直径75cmの半円状を呈す。焚口は黒褐色の灰が多く、中心部が約10cm小さく凹み、壁外への立ち上がりはなだらかである。覆土より須恵甕片、土師質坏片が出土している。住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

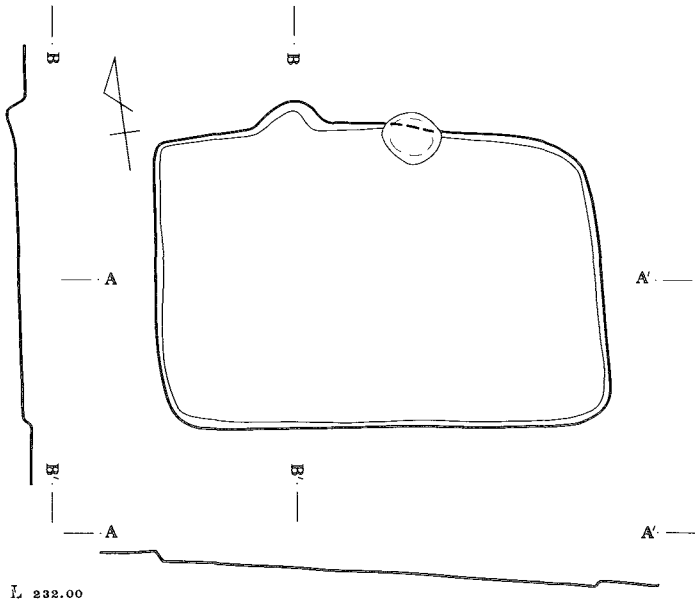
遺物は他に覆土より須恵坏片、高坏片、灰釉埦片、土師甕片が出ているが、須恵高坏は他の遺物からみて住居に伴うものではないと思われる。

D－41号住居跡

東西4.4m、南北3.2mの長方形を呈す。カマドは特定出来る場所が無く、東壁北側に僅かな焼土が認められるがカマドの態をなさず、不明と言わざるを得ない。ピット類も皆無である。

遺物は須恵埦片、坏片、土師甕片が覆土より少量出土している。



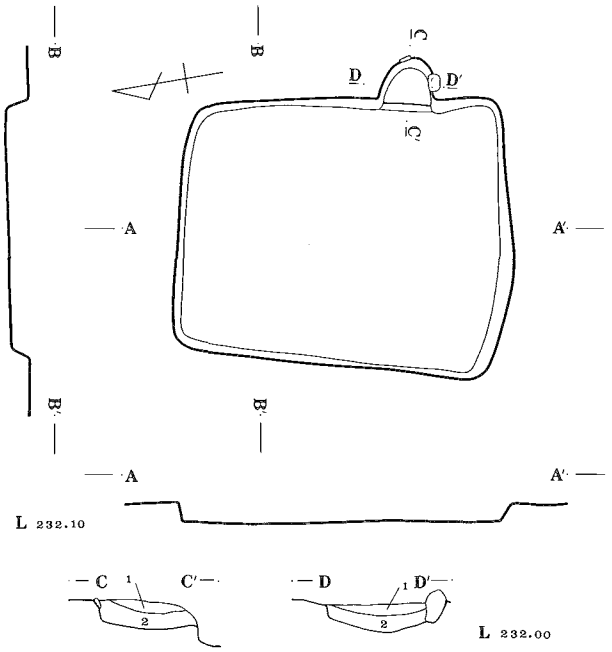

D－42号住居跡

中央で2.8m×3.6mを測る不整形な長方形住居。残存する壁高は約20cmである。

カマドは東壁南寄りに造られる。40cm程壁外へ半円状に張り出し、壁を構成する板状石と自然石が検出された。

住居床面は一様に５cm程掘り過ぎである。生活面はカマド使用面に残るのみで、掘り方面が図面に表されていることを記しておく。ピット類は全く検出されない。

遺物はカマドより羽釜片、土師甕片、覆土より土師質埦、坏等、甕片、灰釉皿、埦片が出土している。




1層：黒褐色土層。
2層：焼土層。よくしまっており、焚口レベルより、この直上面が使用面(火床)か。

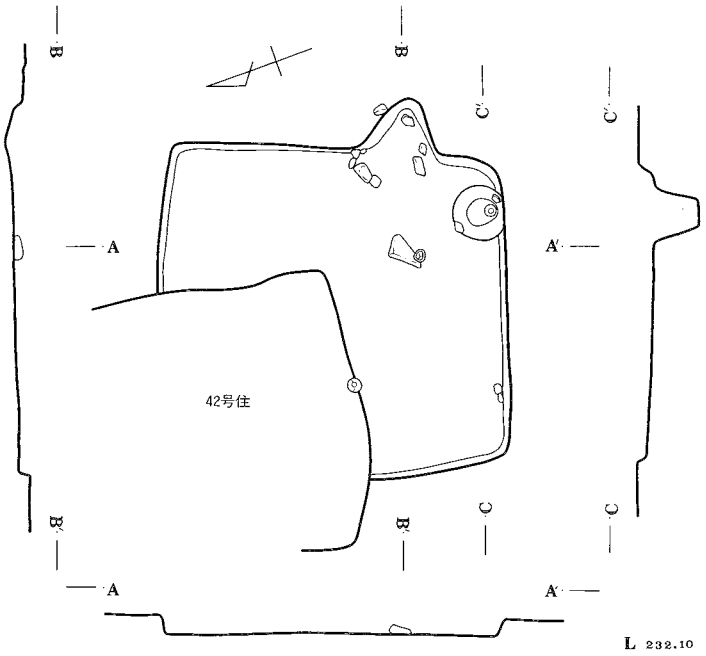
D－37号住居跡

中央で東西4.7m、南北3.2mを測る。北東コーナーが他に比べやや内傾気味で少々不整形である。

カマドは北壁西寄りで、壁外への掘り込みは30cm弱と小さい。袖部や石の痕跡は無いが、壁外へさほど突出しないことから燃焼部の中心は壁かやや内側にくるであろう。

住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物は覆土より須恵坏、灰釉埦片、羽釜片等少量であった。北壁際の石はプランからはみ出す。



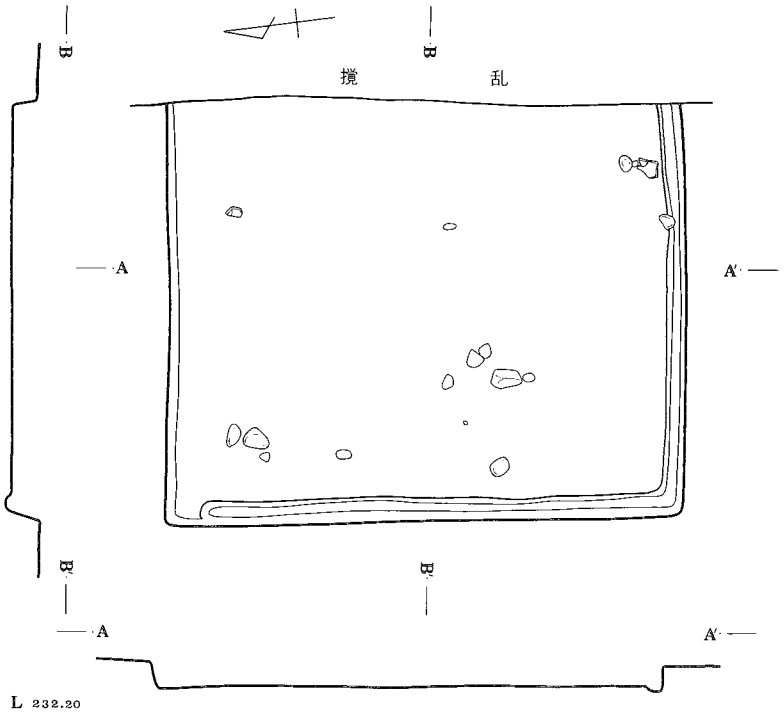

D－43号住居跡

南壁際で東西3.2m、南北は3.7mを測る。住居北西部は42号に切られており不明。残存するコーナーは比較的角がきっちりと掘られている。

カマドは東壁南寄りで、三角状に50cm程張り出し、側壁補強用と思われる板状石の残がいが数片見られる。また焚口を構成していたと思われる石がカマド手前にやはり数点見られた。

カマド右手の南東コーナーからは貯蔵穴が検出された。径60cm弱の円形ピットで深さ45cmと深い。柱穴は検出されなかった。

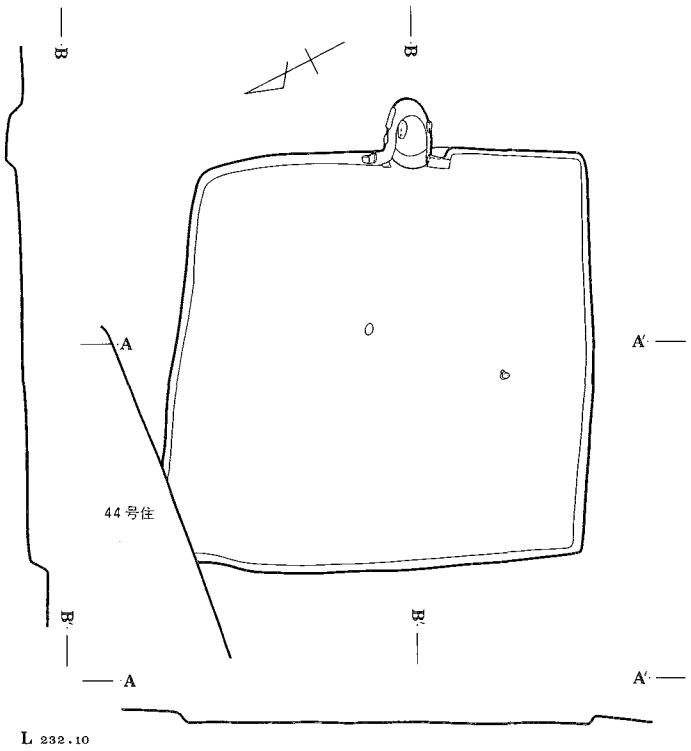
遺物は貯蔵穴底面より土師質埦、カマドより須恵坏片、埦片、住居床面より須恵埦、覆土より須恵埦、土師甕片、羽釜片等が出土した。




D－44号住居跡

南北5.5m、東西は東壁が後世の溝に切られているために不明だが、残存する部分は4.5mを測る。各コーナーはきっちりと角がとられ、壁も直線的である。壁高は25～30cmと比較的よく残っている。カマドの痕跡は全く無く、切られた東壁にあったと思われる。柱穴等、ピット類も検出されない。周溝が検出されたが、これは西壁と南壁にあり、北壁では見られなかった。きちんと壁に沿って明確に掘られている。

遺物は南壁際他の床面より須恵甕片、覆土より土師質坏、須恵埦片、羽釜片、土師甕片、灰釉埦片等が、又、管状の鉄製品が数点出土した。

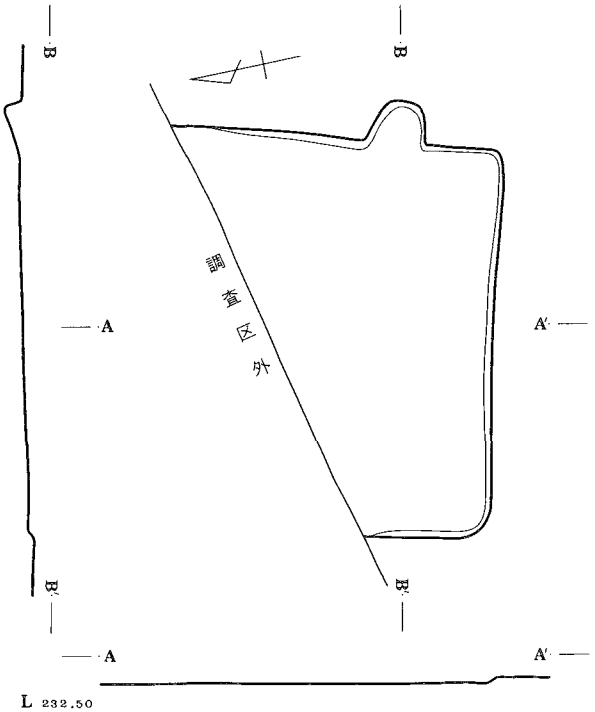



D－45号住居跡

4.4m×4.4mの正方形を呈す。北西コーナーは44号に切り込まれ、残存しない。

カマドは東壁中央に造られる。幅50cm、中央での突出50cmを測る楕円形の掘り込みで、側壁は板状石で補強する。焚口からピット状に10cm程下がった掘り方面で、明確な火床面は検出出来なかった。5cm程上位に自然石の支脚が検出されたので、火床面まで5cm程の貼床を行ったと思われる。柱穴、貯蔵穴等のピットは検出されなかった。

遺物は、カマド内及びその周辺よりコの字状口縁の土師甕が多量に見られ、他、覆土より須恵坏片、蓋片、灰釉小型長頸壺が出土した。

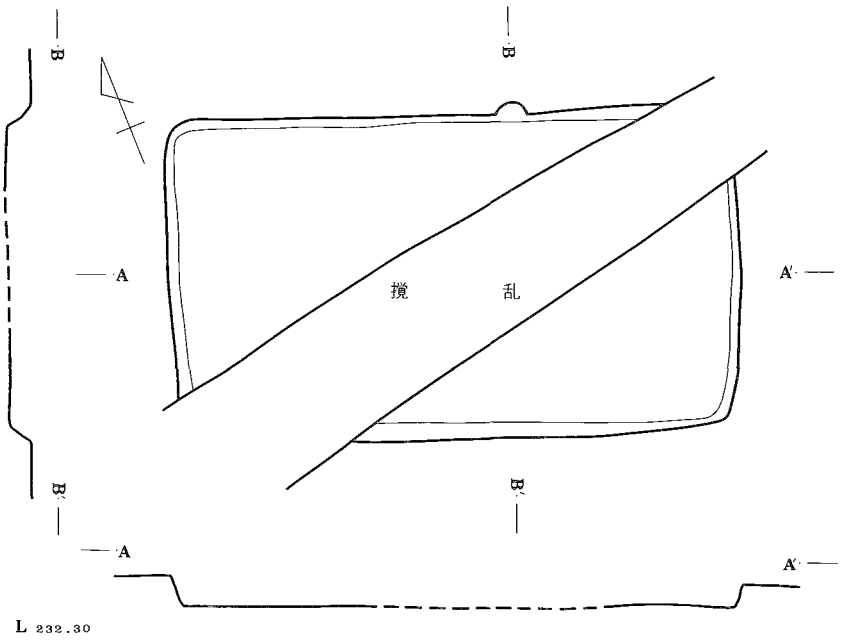



D－47号住居跡

D区中央北端で、住居北側は区域外のため不明。南側で東西4.1mを測る。壁高は僅か5cm程で、表面に段丘礫が大分露出しているので掘り方面と思われる。

カマドは東壁南寄りに検出された。幅60cmで壁外へ50cm程半円状に張り出す。袖部、石の痕跡は無い。また、住居に伴うピット類も全く検出されない。

遺物は須恵坏片、土釜片、灰釉皿片と僅かであった。

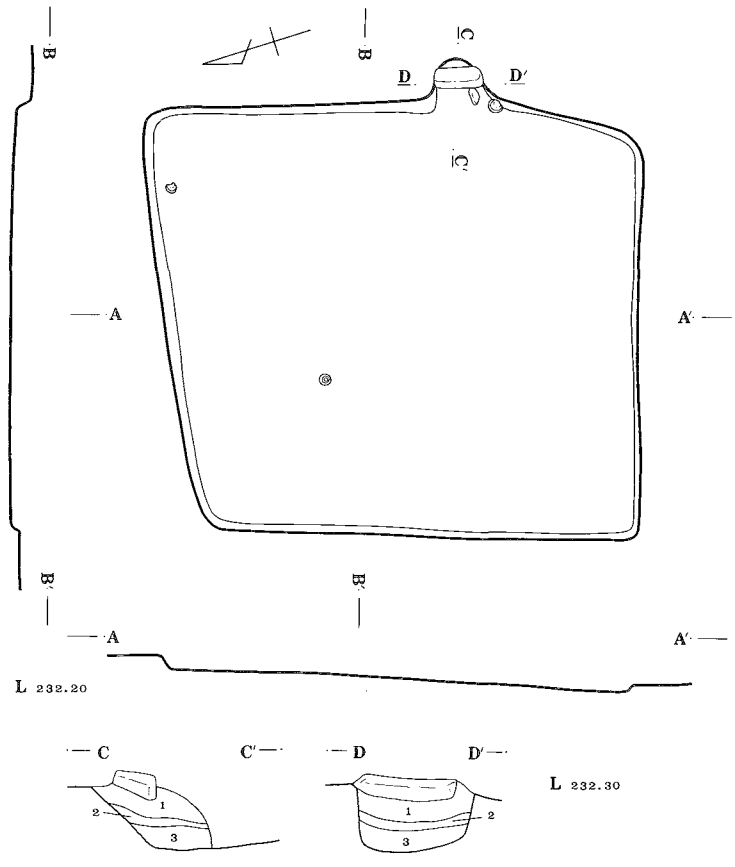



D－46号住居跡

D区中央北部に位置する。北東コーナーから南西コーナーまで斜めに後世の溝が入り込んでいる。東西6.1m、南北3.4mの整った長方形で残存するコーナーはきっちりとした角をもつ。

カマドは北壁東寄りに検出された。平面精査段階で確認出来なかったために掘り過ぎてしまったが、壁外への掘り込みが僅か20cmを残すのみであり、主体部は壁内であったろう。柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されていない。

遺物は覆土より土師坏片、須恵甕片等が出土した。




1層：焼土ブロックを含む褐色土層。
2層：灰層。
3層：貼床層。ロームと褐色土の混在。

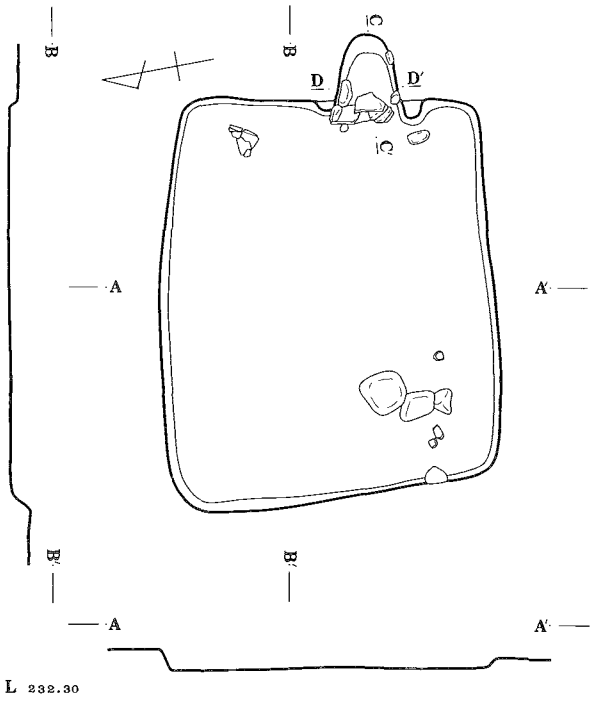
D－48号住居跡

中央で5.0m×4.6mを測り、北東部が大きく外側に張り出し不整形になっている。各コーナーは比較的きっちりと掘られる。残存する壁高は各々15cm程である。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅は約70cmで壁外へは40cmを測る。確認面より、燃焼部に横架されていたと思われる厚い板状の石材が検出された。火床は焚口よりなだらかに掘られた地山面にロームと褐色土による貼床を10cm程施して構成され、直上には灰層がはっきり検出された。

柱穴、貯蔵穴等、ピット類は検出されなかった。

遺物はカマド内より土師質足高高台埦、須恵皿、埦片、住居覆土より灰釉皿、土師質坏、羽釜片、土師甕片等が出土した。又、やはり覆土より刀子状の鉄製品も出土している。

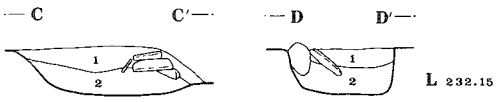



## D－49号住居跡

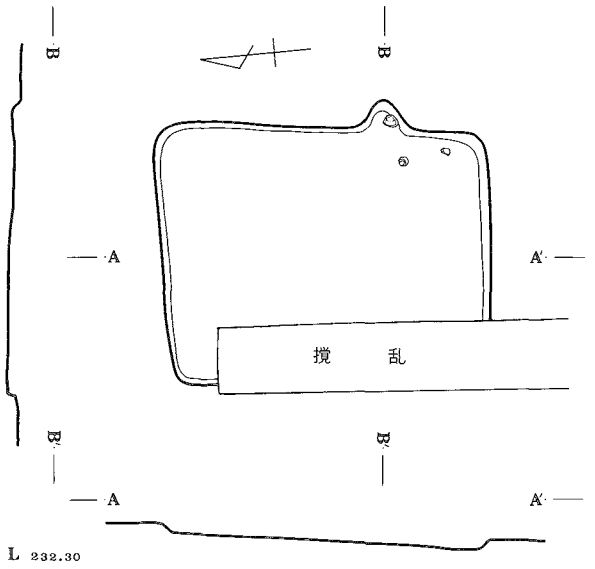
中央で4.2m×3.6mを測り、東西に長軸をもつ。僅かな南傾部のため、北壁20cmに対し南壁は10cmの残存である。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅、長さ共に70cm弱を測り、側壁を構成していた自然石が数個残存する。焚口には横架されていたと思われる板状石が数枚に剝離して検出された。また、焚口右側は地山が少々掘り残され突出しており、袖部的な痕跡と言えよう。内部には明確な貼床層は無く、覆土の半分程は焼土がぎっしりと詰まっていた。住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物は北東コーナー付近床面に羽釜、覆土より土師質埦、坏、須恵埦片、坏片が出土している。又、南西部より床面やや上で大きめの自然石が4個出土したが、性格は不明。




1層：天井崩落層。粘質土層で半分以上は攪乱が入る。
2層：焼土層。明赤色焼土粒が少量含まれる。

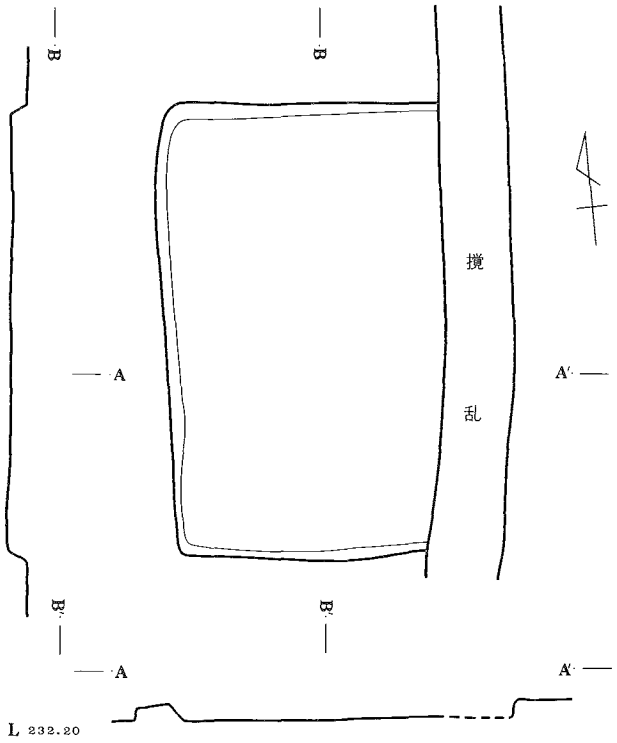



## D－51号住居跡

南北3.5m、西壁は後世の溝状遺構に切り込まれ残存しないが、北西コーナーの回り具合から2.8m程と思われる。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅45cm、長さは中央で25cmで隅丸三角形状に小さく張り出している。伴う石類や袖部の痕跡は無く、赤く焼けた火床は焚口より僅かに低くなっている。柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されなかった。北東部には地山の段丘礫が露出している。

遺物はカマド右手床面及びカマド覆土より須恵埦、他、住居内覆土より須恵埦、甕片、土師甕片、緑釉皿片が出土している。

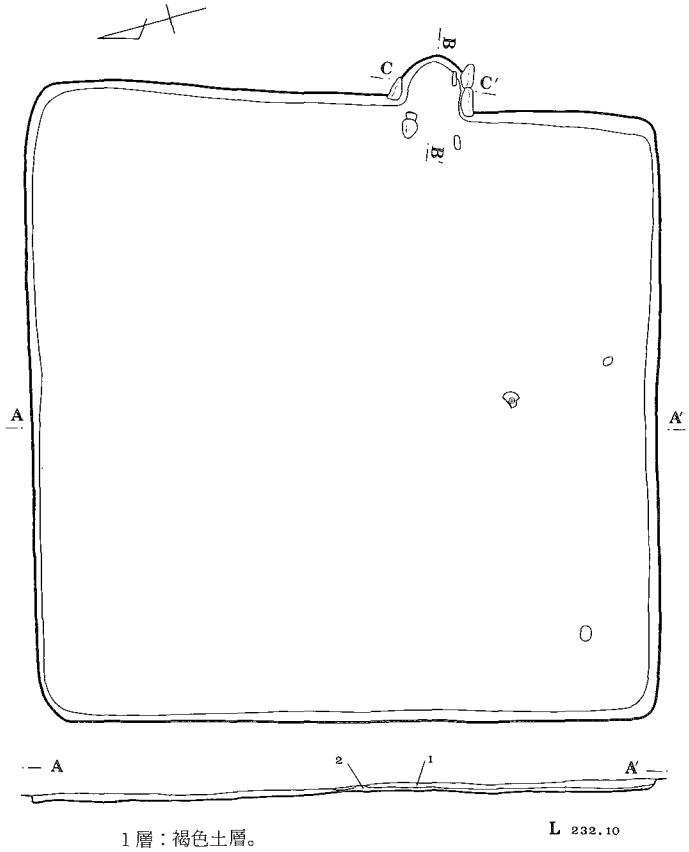



## D－52号住居跡

南北4.8mを測る。東壁は後世の溝状遺構に切られ、検出出来ないが、溝の東側までは延びていないので、住居の長軸は南北にあることが分かる。

確認した壁にカマドの痕跡は無く、切られた東壁に存在していたものと思われる。ピット類は全く検出されない。

遺物は覆土より土師甕片、坏片、須恵高台付の浅い坏片が出土した。



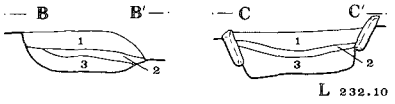

1層：褐色土層。
2層：貼床層。ローム と褐色土の混在。

## D－53号住居跡

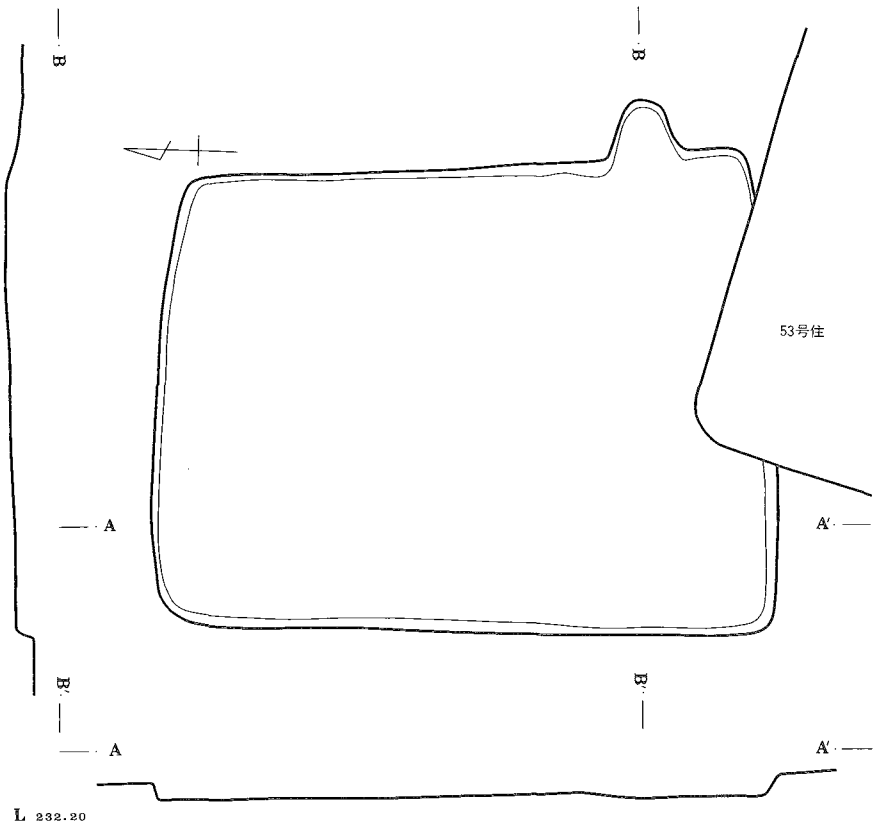
6.6m×6.7mで、各辺コーナー共に整った大型の正方形を呈す。壁高は5㎝程で残存状態は悪い。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約80㎝で壁外へ50㎝程半円状に掘り込まれ、側壁は板状石によって構築されている。床面は平面精査の段階で北半が露出しており、ロームと褐色土による貼床が全面的に5㎝弱の厚さで検出されている。ピット類は全く検出されなかった。

遺物は床面に近い覆土より土師甕が多量に、又、土師坏片や須恵埦、蓋、坏、土師質足高高台埦等、入り混じっており、別の住居が内部に重複していた可能性が考えられる。



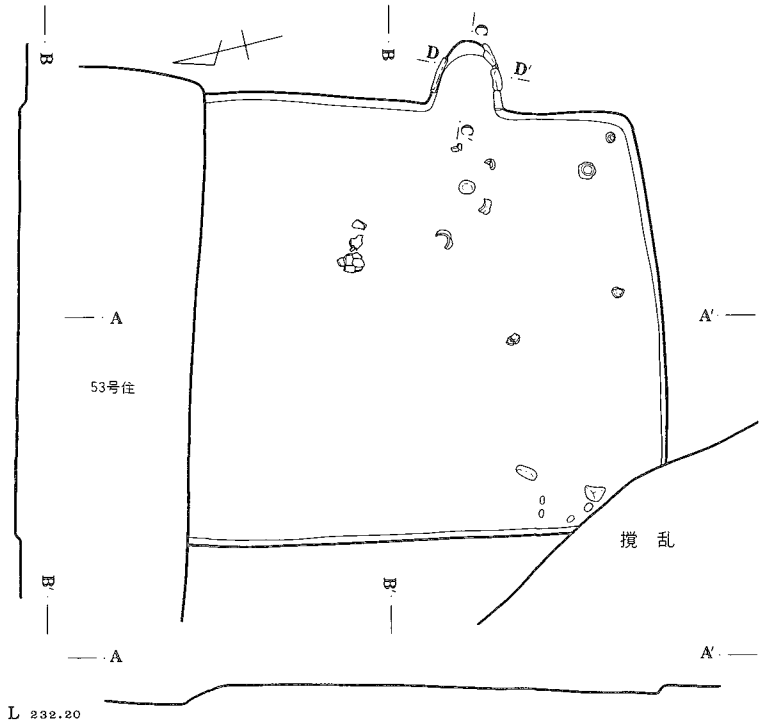

1層：焼土ブロックを含む褐色土層。
2層：灰層。
3層：貼床層。ローム と褐色土の混在。




### D－54号住居跡

東西4.9m、南北6.7mを測る長方形の住居。カマドは東壁南際に造られる。幅80cmで壁外へは50cm掘り込まれている。住居床面部は掘り過ぎの為、エレベーションは掘り方面であり、カマド内の火床付近が床面（生活面）レベルと考えておきたい。ピット類は全く検出されなかった。

遺物は須恵埦、土師質埦、須恵坏等が覆土より検出されている。また、重複する53号とは、平面精査の段階で54→53との所見を得たが、両住居共遺物が住居に伴うものとそうでない物とが判然とせず、いまひとつ不明確である。

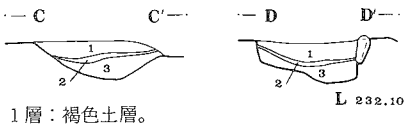



### D－55号住居跡

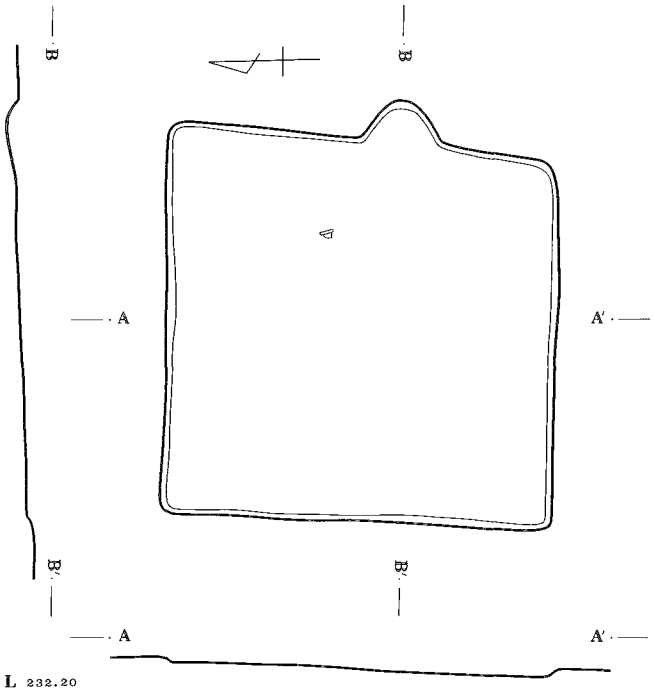
北壁は53号に切られ不明。南西コーナーも後世の溝状遺構に切られているが、残存部より東西4.7m、南北は5.0m以上になり、南北に長軸をもつ。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅80cm、長さ70cmで、側壁に板状石を据えて補強する。火床は焚口より15cm程で左右不均等に掘った地山に貼床を施し、焚口と同レベルで使用している。柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されなかった。

遺物は床面より須恵埦、坏、弱いコの字状口縁土師甕、覆土より土師甕、須恵大型皿、埦、蓋等が出土している。




1層：褐色土層。
2層：灰層。
3層：貼床層。焼土と褐色土の混在。

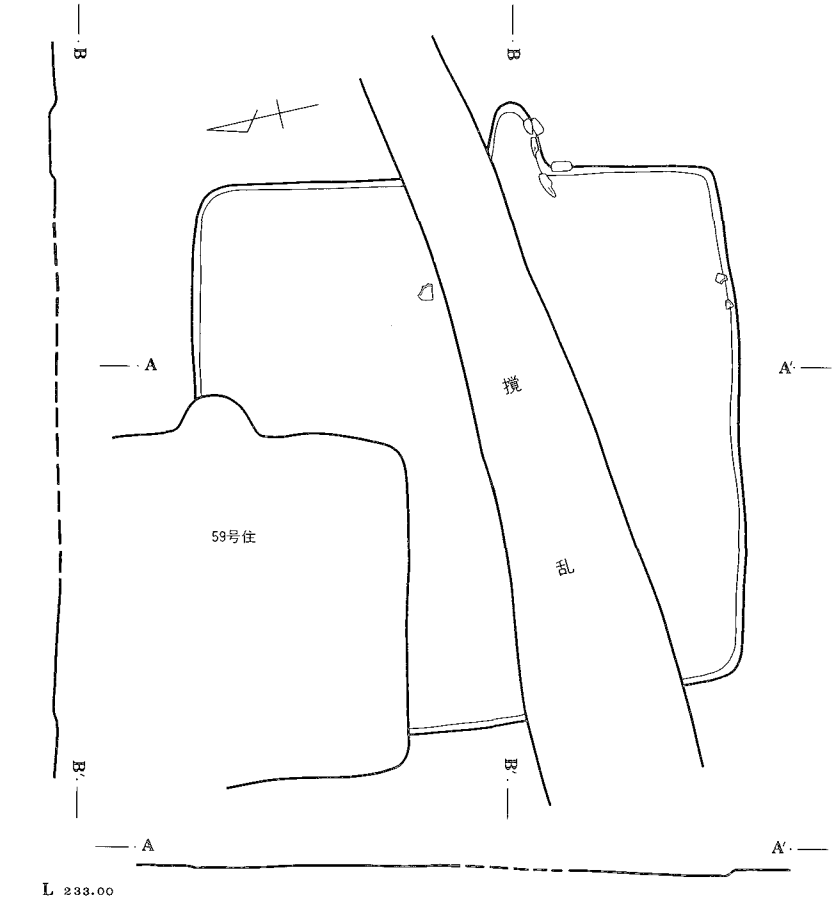



D－56号住居跡

4.1m×4.1mの正方形を呈す。残存する壁高は10cm弱と大分削られている。

カマドは東壁中央やや南に造られる。幅80cmで壁外へ40cm半円状に掘り込まれ、火床は浅く皿状に凹む。石、袖部の痕跡は無い。柱穴、貯蔵穴等のピットも検出されない。

遺物はカマド内より土師甕片、覆土より須恵坏片、皿片、土師甕片、坏片が出土している。




D－60号住居跡

中央付近で東西5.9m、南北5.8mを測り、西壁はやや不整形を呈す。住居北西部は59号に切り込まれ、又、中央を東西に後世の溝が入り込んでいる。

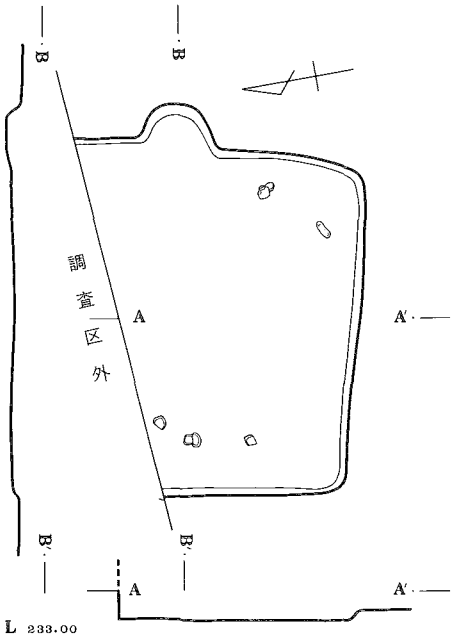
カマドは東壁南寄りに造られる。幅は中央で55cm、壁外へ70cm程掘り込んであり、右側壁には板状石が据えられた状態で残存する。火を受け、大分脆化していた。住居に伴うピット類は全く検出されない。

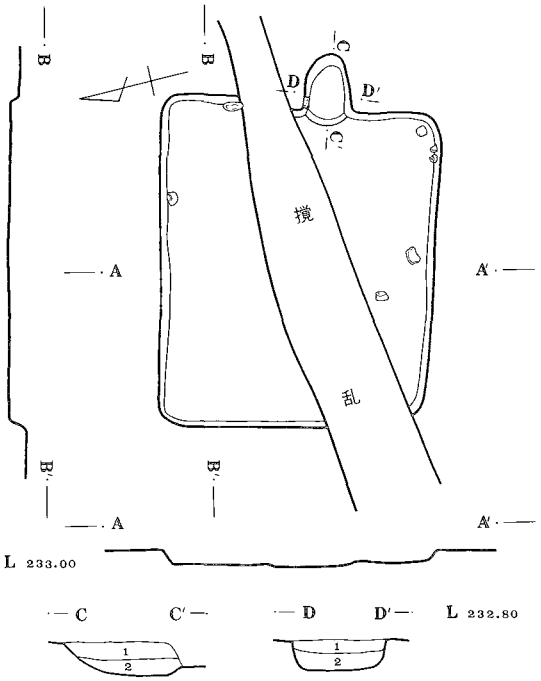
遺物は、南壁際床面より須恵埦、覆土より土師甕片、坏片、須恵蓋片等が出土した。

D－59号住居跡

東西3.6m、住居南側は区域外の為不明である。カマドは東壁に検出された。幅80cmで壁外へ40cm半円状に掘り込まれる。明確な火床は検出出来なかった。石、袖部等もやはり検出されない。柱穴、貯蔵穴等のピット類も不在。

遺物は、床面より土師甕、須恵皿、坏片、埦片、覆土より羽釜片、須恵坏片、土師甕片が出土した。



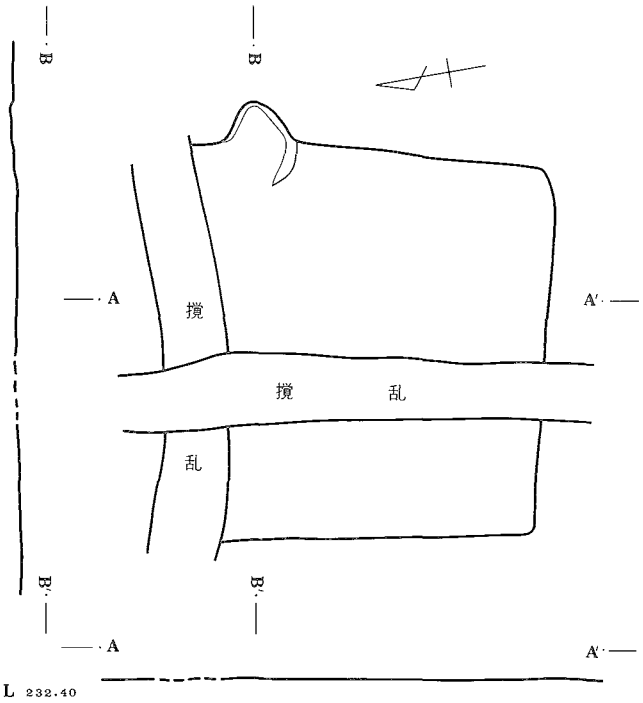




D－57号住居跡

壁の立ち上がりはほとんど無く、僅かに残る黒色土の範囲でプランを確認した。北壁及び南北に入り込む溝状遺構が住居を十字に切っている。東西は4.1m程であろう。

カマドは東壁北寄りに造られる。やはり僅かな残存状態であるが、幅70cm、長さは40cmを測る。カマド、住居内共に段丘礫が表面に露出し、床面は残存しない。

遺物は土師甕片、坏片が僅かに出土した。



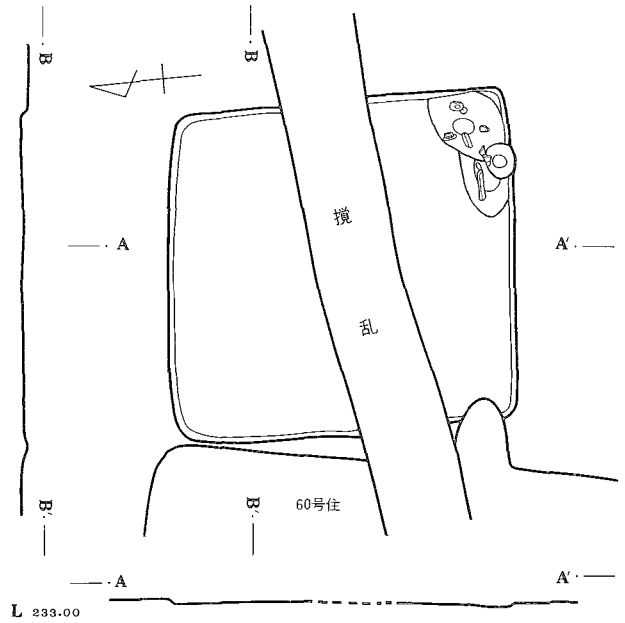

D－58号住居跡

2.5m×2.2mを測り、東西に長軸をもつ小型長方形。東西斜めに後世の溝状遺構が住居を切り込んでいる。

カマドは東壁中央やや南に造られる。幅約40cmで壁外へ60cm程楕円形に延び、左焚口は袖状に短く掘り残した地山が確認出来た。火床は地山を皿状に浅く凹めた上にロームと黒色土の混土を10cm程埋め戻している。柱穴、貯蔵穴等、ピット類は全く検出されなかった。

遺物は北壁際床面他、覆土より須恵埦、南東コーナー際床面より土師台付甕片、覆土中より須恵坏片、埦片、土師甕片が出土した。

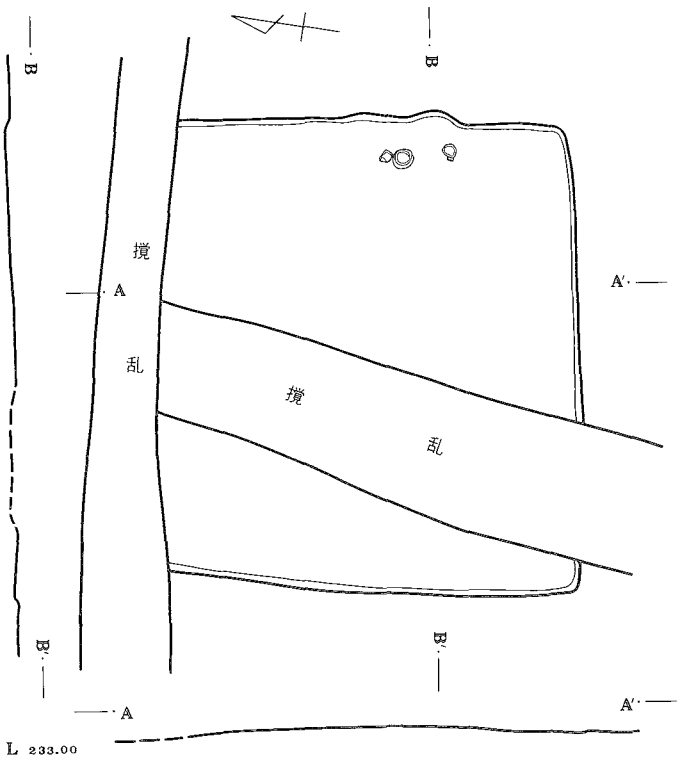
1層：焼土ブロックを含む褐色土層。
2層：貼床層。黒色土とロームの混在。




D－61号住居跡

3.5m×3.7mで僅かに南北が長い。残存は壁高5㎝強と悪く、西壁南際は60号のカマドが切り込むが、伴出遺物は逆の関係を示しており、西壁ラインはやや内側にくるかもしれない。住居中央を東西に後世の溝状遺構が入り込む。カマドの痕跡は検出されず、東壁中央の溝に切られたものと考えられる。

南東コーナーに不整形な貯蔵穴的ピットが検出された。3個の浅いピットが重なるような形状で、南壁に張り出す部分の中心で深さ20cm弱、他はそれよりやや浅くボウル状を呈す。遺物が集中しており、須恵皿、坏、土師甕片等が出土した。ピット類は他には検出されなかった。

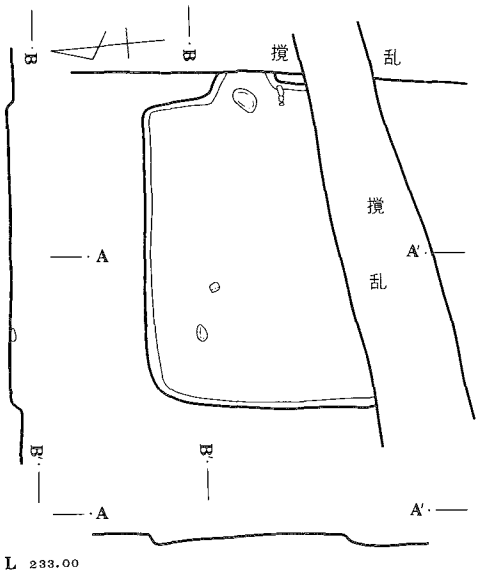



D－62号住居跡

後世の溝状遺構が入り込み、また壁高もごく僅かを残すのをで残存状態は悪い。北壁は溝内にあったと思われる。東西で5.0m、南北は4.5mを残し、正方形に近い形状であったろう。

カマドは東壁南寄りに造られる。壁の掘り込みは僅かで焼土が少々検出された。袖部や石類は検出されないが、掘り込み具合や焼土が壁内に多く散っていることは燃焼部が壁内であったことを示す。ピット類は全く検出されなかった。

遺物は、カマド焚口付近床面より土師甕が出土した。

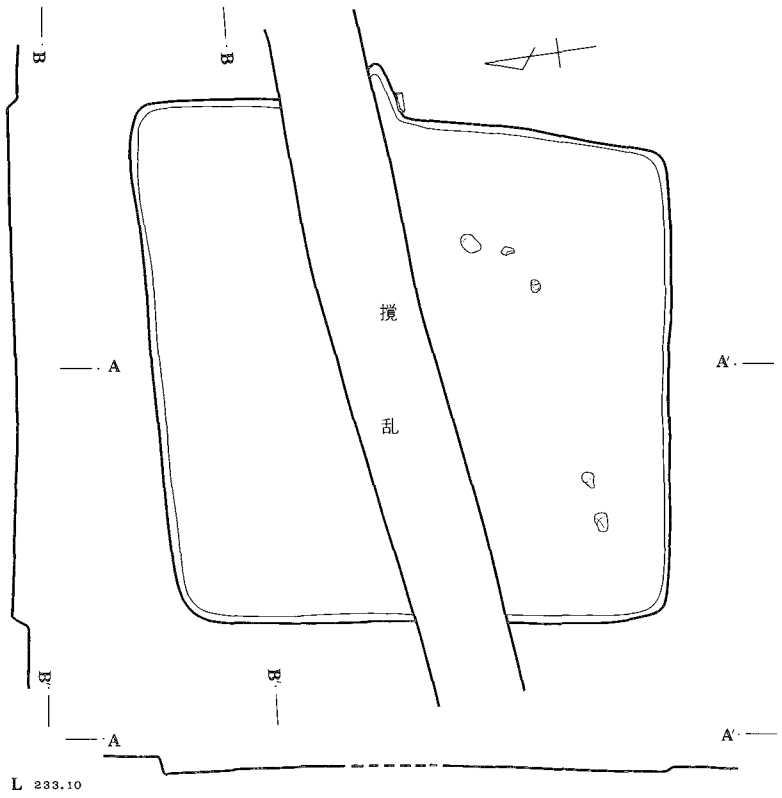



D－63号住居跡

カマド先端部と南壁は溝状遺構に切られ、不明である。東西では3.4mを測り、残存する壁高は約10cm。

カマドは東壁に造られる。幅75cmで先端は不明。右袖部を構成していた板状石が検出された。焚口部分覆土の自然石は性格不明。住居に伴うピット類は検出されなかった。

遺物は覆土より須恵坏片、埦片、土師甕片、坏片が出土し、土師坏片底部には墨書がなされていた。




D－64号住居跡

中央を東西に溝状遺構が入り込み、カマド左側を切っている。中央で南北5.5m、東西5.4mとほぼ正方形を呈し、北東コーナーが斜位に張り出している。

カマドは東壁北寄りに造られる。残存する右側壁は板状石が据えてあり、尖り気味の端部までは約50cm突出する。ピット類は全く検出されない。

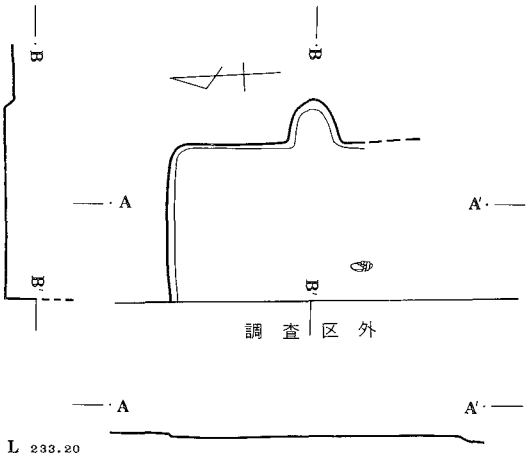
遺物は床面より須恵坏、覆土より多量の土師甕片と須恵坏片が出土した。

### D－66号住居跡

D区西端に検出された。西側は区域外のため不明で、南側は浅すぎ、又、67号が入り込むためにやはり不明。

カマドは東壁に造られる。幅は55cm程で壁外への掘り込み約40cm、柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されない。

遺物は覆土より須恵皿、埦片、坏片、土師甕片が出土した。

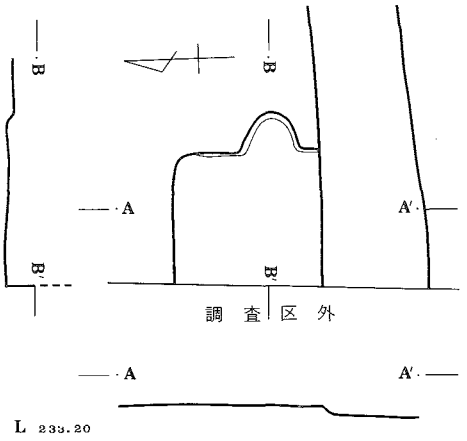


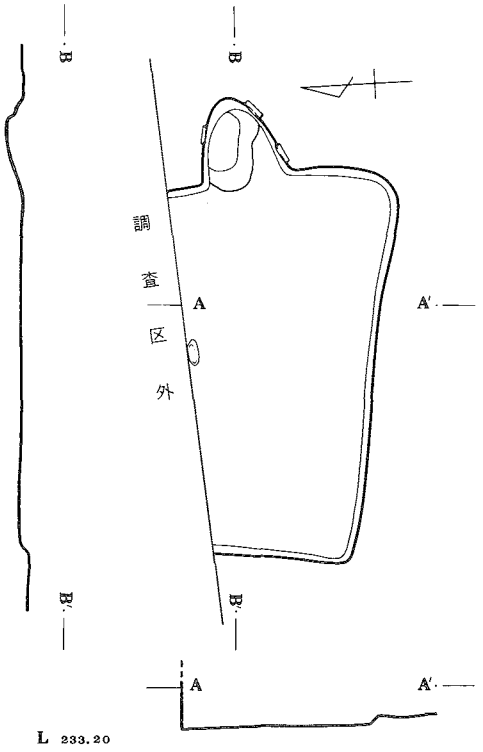

### D－67号住居跡

D区西端部に位置する。西側は区域外、南側は後世の溝状遺構に切り込まれて不明。北壁は66号との重複で、平面精査で66→67の所見を得た。残存する掘り込みはほとんど無く、僅かに残る覆土よりプランを判断した。

カマドは東壁で、幅55cm、壁外へ半円状に35cmの掘り込みが浅く検出された。ピット類は全く検出されない。

遺物は土師甕片が少量出土した。




### D－65号住居跡

東西4.1mを測り、壁高は10cm弱である。住居北側は区域外のために不明。

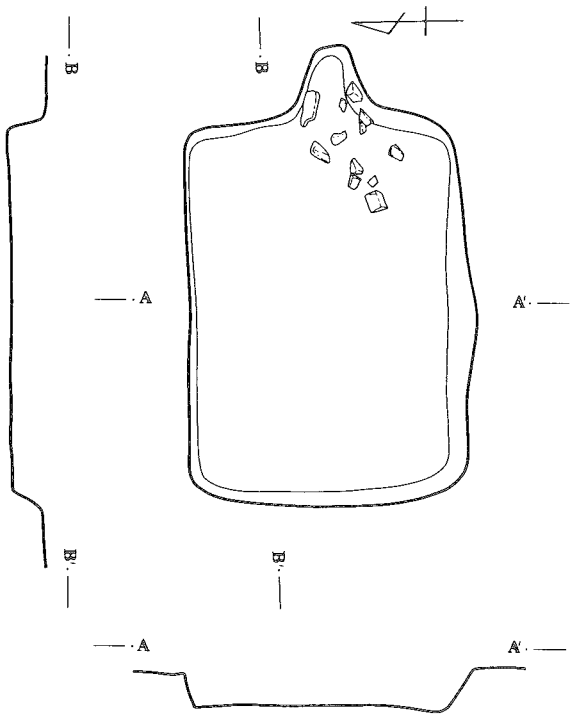
カマドは東壁に造られる。幅90cmで壁外へ85cm張り出し側壁は板状石を据え、その残骸が検出された。内部中央から左側は浅いピット状を呈し、焚口より15cm程低い。火床面は不明確であった。住居内にはピット類は全く検出されない。

遺物は覆土より土師甕片、須恵坏、蓋片が出土した。

E　　区

1号井戸
2号井戸
3号井戸
4号井戸
竪穴
96掘立
127掘立
128掘立
125掘立
126掘立
0
1：800
40m

挿図6　E区全体図

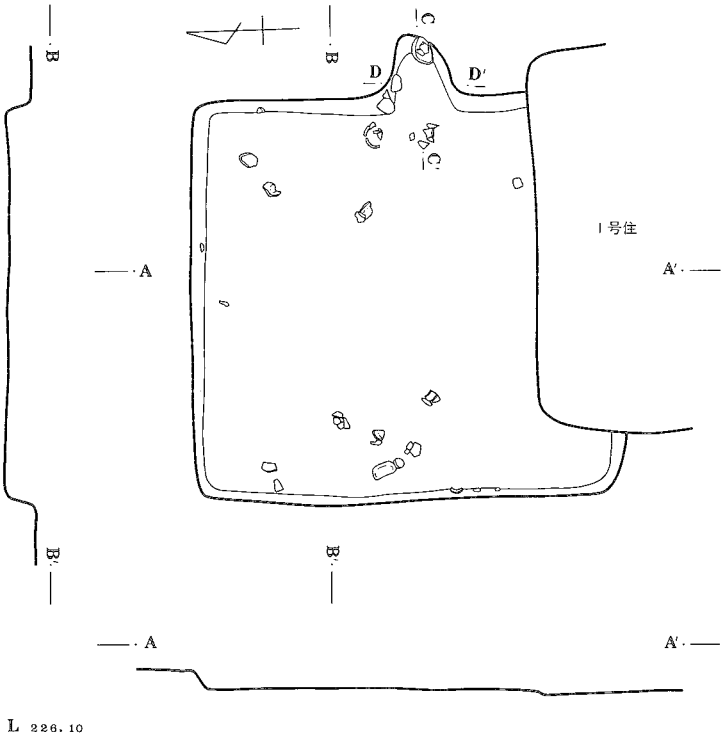



## E－1号住居跡

中央で4.2m×3.0mを測る、東西に長い長方形を呈する。壁高は南壁で40cmを越え、残存状況は良好である。

カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。幅80cm強で徐々に狭まりながら壁外へ60cm張り出す。側壁手前及び焚口手前床面には板状石の残骸が出土し、カマドを構成していることを思わせる。柱穴等のピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド内より土師甕、覆土より須恵坏片等が出土した。

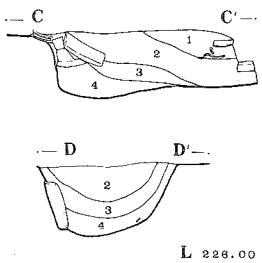



## E－2号住居跡

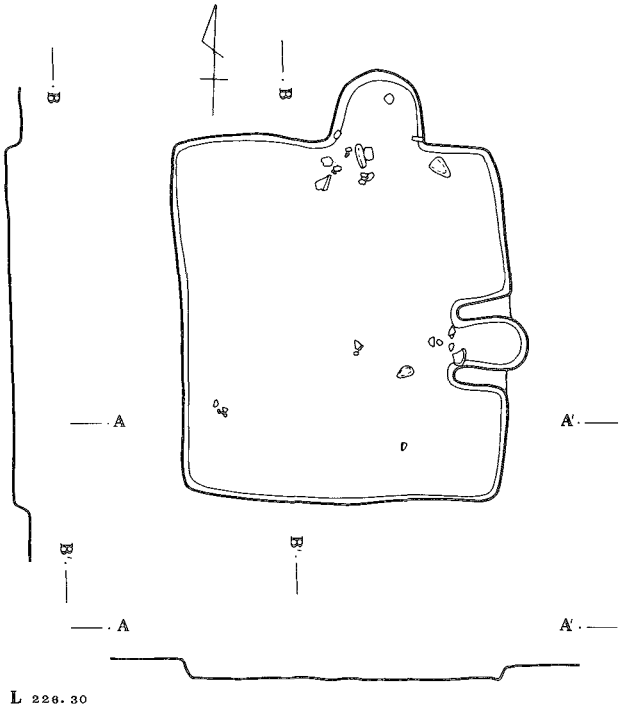
東西4.2m、南北は西壁付近で4.5mを測り、南壁のほとんどは1号に切り込まれているために不明。壁高は30cm弱と比較的良好に残っている。

カマドは東壁に造られる。南西コーナーの位置より、東壁中央と思われる。幅80cmで壁外へは60cm突出し、立ち上がりは急である。左側壁及びカマド覆土より板状石が出土し、カマドを構成していたことが分かる。また壁外立ち上がり上部に土師甕が逆さの状態で検出され、煙道の一部とされていたと思われる。袖部痕は検出されない。また、住居に伴うピットも検出されなかった。

遺物はカマド内より土師甕、床面付近より須恵皿、坏片、覆土より須恵甕片、壺片、坏、埦片等、多量である。




1層：住居内覆土。
2層：天井崩落層。粘質土に焼土が混じる。
3層：炭化物を含む黒色土層。
4層：焼土及び炭化物の混在層。



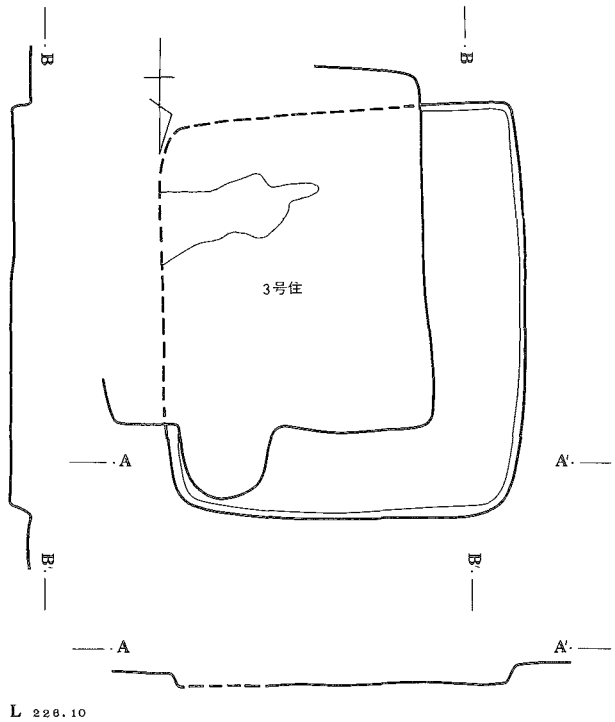

## E－3号住居跡

3.5m×3.8mでやや南北に長い。壁高は西壁で15cmを測る。

カマドは北壁東寄りと東壁中央やや南に2基検出された。北壁カマドは幅約1mで壁外へ70cm程半円状に掘り込まれ焚口両脇より板状石、自然石が崩れた状態で検出されている。内部は焼土、灰が多く、明確な火床は確認出来なかった。東壁カマドの燃焼部は壁の内側にくると思われ、壁外への突出は20cm足らずで、袖部と思われる粘質土の痕跡があった。図面上ではそれをもとにした推定ラインである。内部は床面レベルと同じで僅かに焼土の痕跡があった。カマド内部の焼土、灰は北カマドに多く、東カマドは非常に少ないことから、住居廃棄時に使用されていたのは北カマドで、東カマドからの造り替えと思われる。

住居内には、貯蔵穴や柱穴等のピット類は全く検出されなかった。

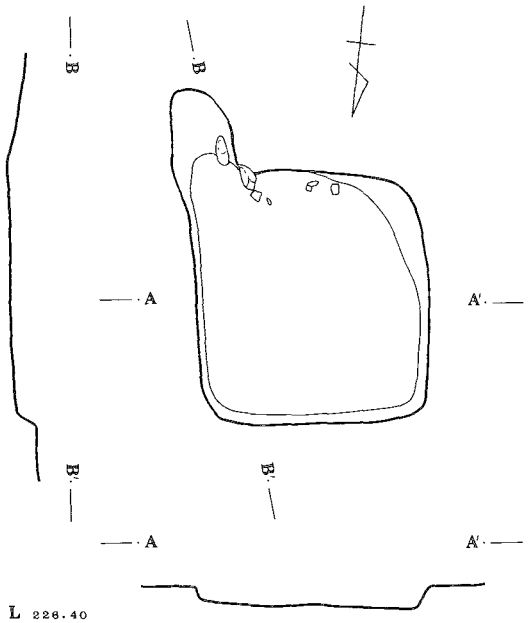
遺物は北カマド内及び床面、覆土より土師甕片、覆土より須恵埦片、皿片、坏片等出土している。




## E－4号住居跡

大半を3号に切り込まれる。残存部分で南北4.3m、東西3.7mを測り、南北に長軸をもつ長方形と思われる。カマドは残存部には検出されないが、東壁推定ラインの内側に焼土が確認されており、カマド位置としてよいであろう。柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されなかった。

遺物は覆土より須恵埦片、甕片、坏片、土師甕片が僅かに出土した。

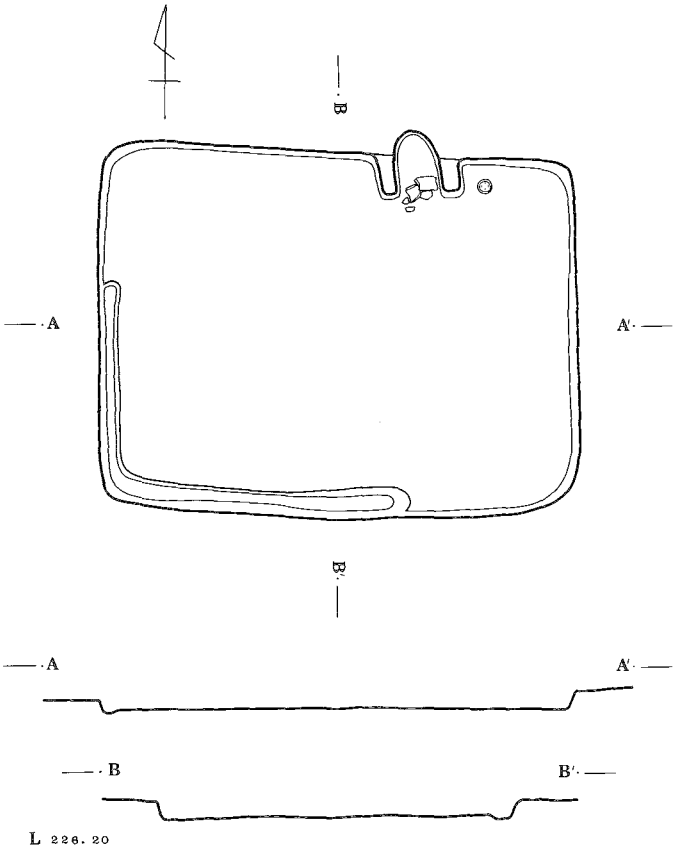



E－5号住居跡

東西2.5m、南北2.7mを測り、各コーナーは大まかな丸みを呈す小型正方形と言える。残存する壁高は約20cm。

カマドは南壁で南東コーナー部分に造られる。やや東方寄りに延び、中心で1m近くを測る。立ち上がりはなだらか。幅は約70cmである。焚口右側はよく焼けた板状石片が残り、カマド内部右側の自然石も少々火を受けている。火床は住居床面と同レベルで貼床層は無い。カマド右手は攪乱部に少々焼土が混ざっていたためにカマドと誤認した。左手の僅かな突出部も本住居に伴うものではない。ピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド内より土師甕片、土師質埦、焚口付近床面より須恵坏が出土し、埦は内黒、墨書であった。



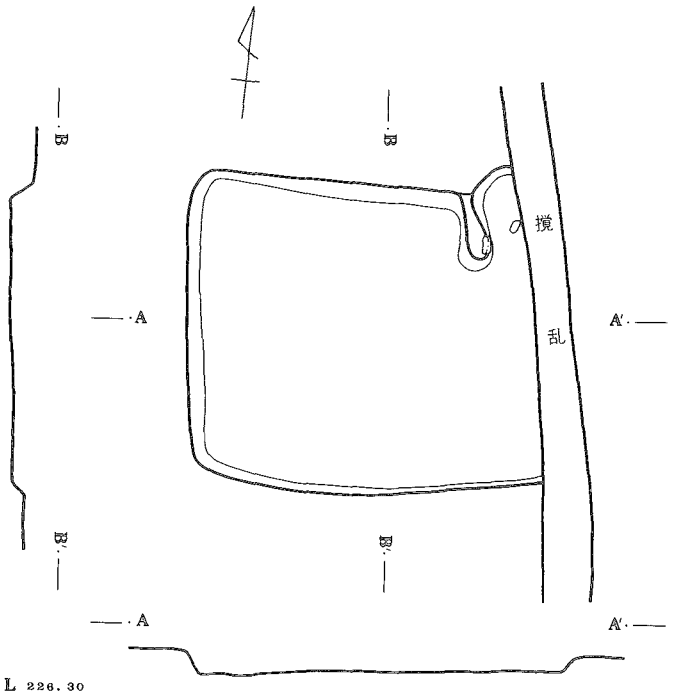

E－6号住居跡

5.1m×3.9mで東西に長軸をもつ長方形、壁高は平均20cm弱である。

カマドは北壁東寄りに造られる。幅50cm弱で壁外へ30cm弱の半円状掘り込みが確認された。掘り残した袖部は粘質土残存部からの推定で、定かではない。内部は壁延長ラインより壁外へ除々に立ち上がり、上端付近で急に上方へ立ち上がる。

住居内部にピットは全く検出されない。南西コーナーより西壁2m、南壁3m程の範囲で周溝が確認された。しかし、他壁にその痕跡は無い。

遺物はカマド内より土師甕、カマド右手床面より須恵甕口縁片、覆土より土師坏片、台付甕片が出土した。

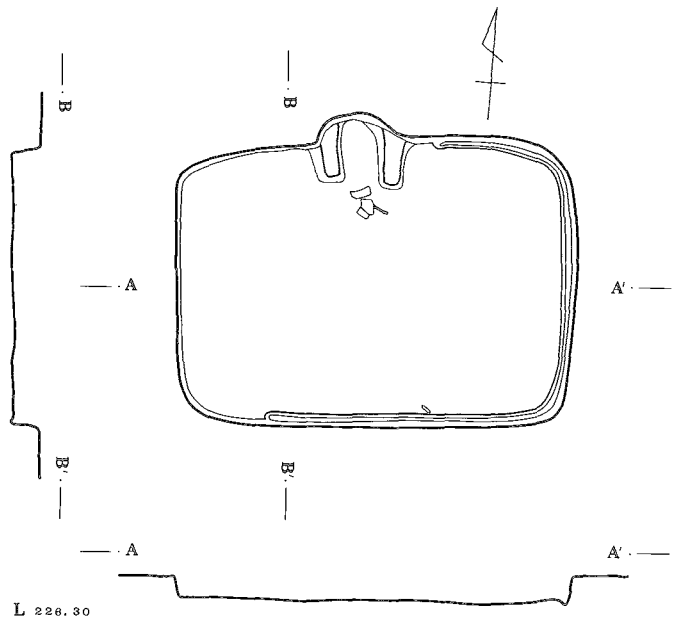



E－7号住居跡

中央で南北3.2m、東西は東壁が確認出来ないために不明だが、切り込む溝の内側であることは確実で、推定4m程であろう。壁高は北西部で約20cmを測る。

カマドは北壁で、北東コーナーぎりぎりの位置になる。東半分は溝に切られるが、左袖部と思われる粘質土部分が残っており、焚口付近には芯に板状石を使用している。壁外へは半円状に30cmの掘り込みがあるが、燃焼部の中心は壁内と言える。火床は床面同レベルより徐々に立ち上がり、上端直下で急に立ち上がる。住居に伴うピットは検出されなかった。

遺物は覆土より土師甕片、坏片、須恵坏が出土している。



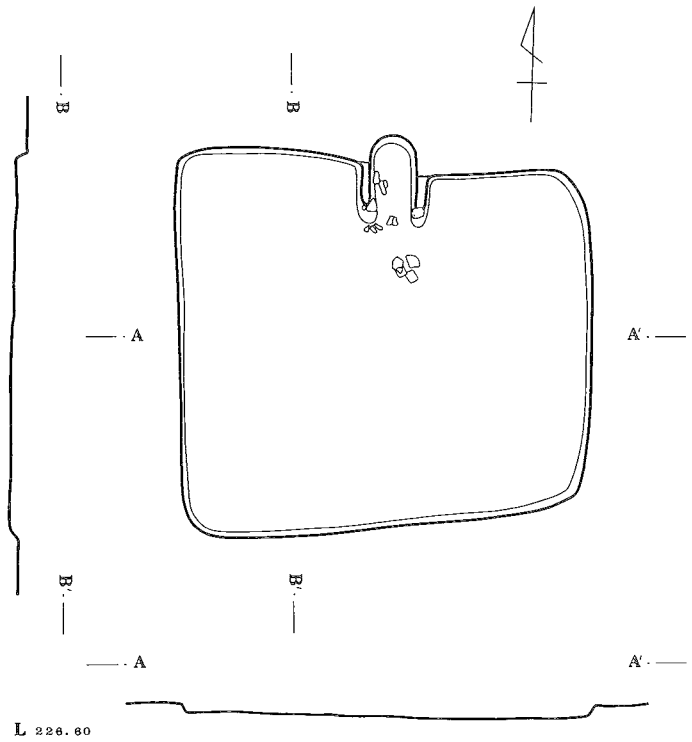

E－8号住居跡

中央で東西4.3m、南北3.0mを測り、東西に長軸をもつ長方形。壁高は30cm弱で比較的良好な残りである。

カマドは北壁中央やや西に造られる。壁外は約30cmの半円状で内側は推定位置に袖部を残した。内部での幅は40cmだが明確なものではない。火床はローム面で赤褐色によく焼け、住居の壁外まではほとんどフラットで上端直下で急に立ち上がる。

北壁東半分から東壁、南壁コーナー付近まで周溝が確認された。これは壁下端からの幅が5～8cm程で非常に狭いものである。住居に伴うピット類は検出されなかった。

遺物はカマド内より土師甕片、須恵坏片、焚口床面より土師甕片が出土した。



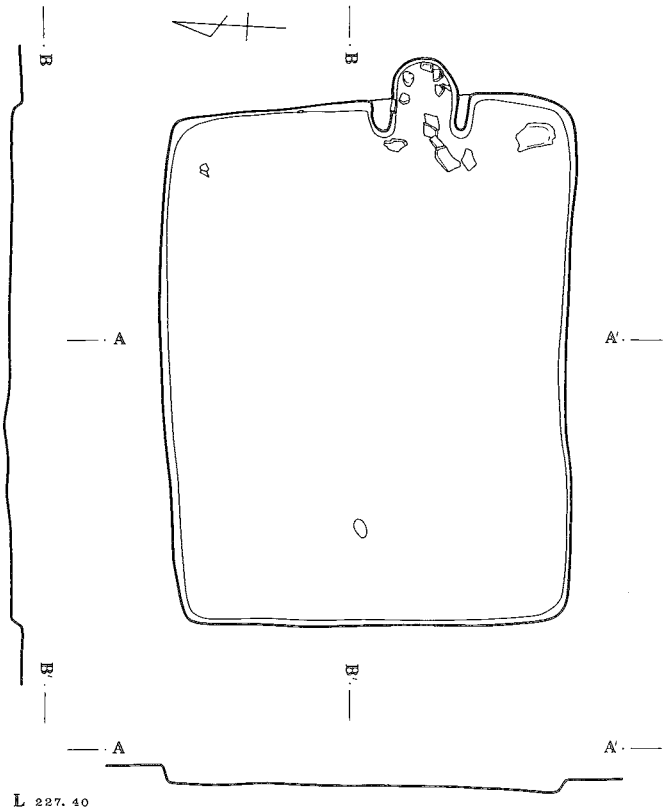

E－9号住居跡

東西4.4m、南北は西壁際で4.0m、東壁際で3.4mを測り、台形状を呈する。壁高は約10cm。

カマドは北壁中央に造られる。幅50cm、壁外へ35cm程半円状に掘り込まれ、内側は粘質土で袖部を構成している。袖部端には焼けた板状石が存在するが、これは両方共崩れかかるように斜めの状態で、原位置とは考えにくい。焚口中央の板状石も同様である。又、焚口手前床面からも板状石が割れて数片出土した。住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド及び焚口左床面より土師甕片、カマドより須恵埦片、覆土より少量の土師甕片、須恵甕片が出土した。

尚、重複する10号との関係は、平面精査で10号内部に9号を掘り込んでいる所見を得た。



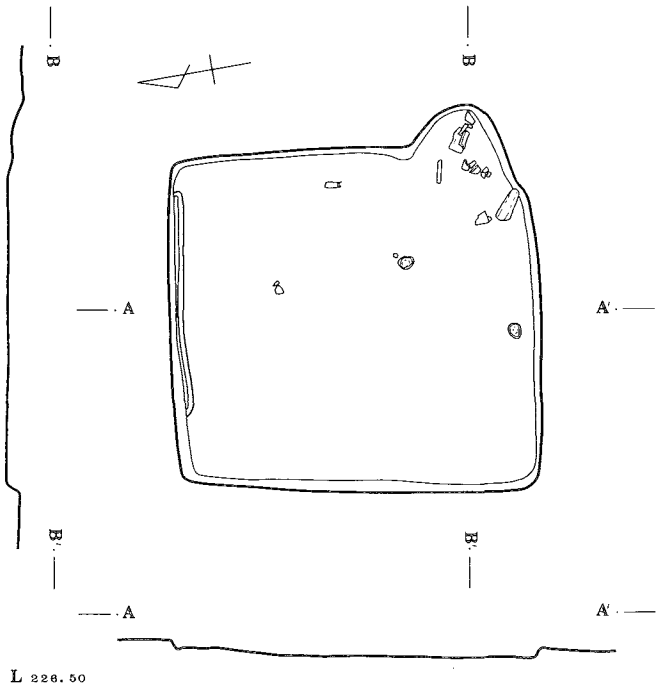

E－10号住居跡

5.5m×4.3m、壁高約15cmを測る東西に長軸をもつ長方形住居。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約65cmで壁外へ半円状に45cm程掘り込まれている。壁内両側には粘質土が細長く残存しており、袖部として残した。左側壁に一部板状石が残り、カマド内部及び焚口からは残骸が出土した。壁外部左側には立った状態の自然石が存在するが、支脚としては位置がずれていることに疑問が残る。上端部の立ち上がりは急である。

住居床面は、内部に存在した9号床面とほぼ同レベルであり、ピット類は検出されなかった。

遺物はカマド内より須恵埦片2個、覆土より判読不明の墨書の須恵坏片が出土した。




E－11号住居跡

3.9m×3.6mで僅かに南北に長い方形を呈す。壁高は10cm程が残存する。

カマドは南東コーナーの東壁側に造られる。東壁ライン延長上での幅は１m弱、壁外へ40cmの掘り込みがなされ、中心ラインより右にずれた壁内に板状石が左右に立った状態で検出された。焚口を構成したものと思われるのは左側で、石を境に右側（カマド内部）は火床がよく焼け、明褐色な状態であった。右側の大きな板状石は左ほどしっかり立っておらず、位置も大分端にあることから、カマド内部に残る板状石と同様、カマド構成石の一部としておく。

住居に伴うピット類は検出されなかった。北壁のみには周溝状の細い溝があるが、掘り込みはいまひとつ明確ではない。

遺物はカマド内より須恵壺片、土師甕片、住居床面より土師甕片、須恵坏、覆土より土師質埦等が出土した。

E－12号住居跡

南北3.2m、壁高30cmを測り、東側は区域外のため不明。西、南壁は膨らみ気味のカーブを描く。カマドは区域外と思われ、残存部にその痕跡は全く認められない。ピット類も検出されなかった。

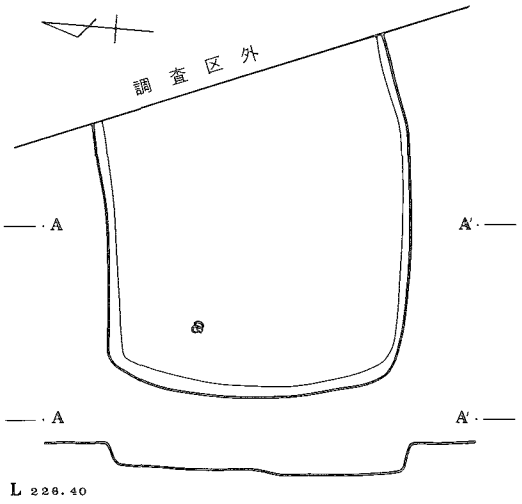
遺物は床面やや上より須恵埦片、覆土よりコの字口縁土師甕片、須恵甕片が出土した。

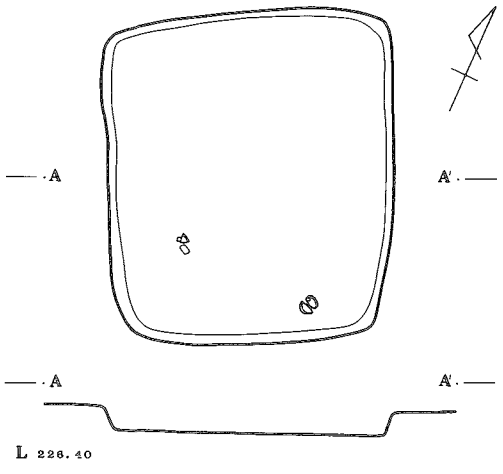
E－13号住居跡

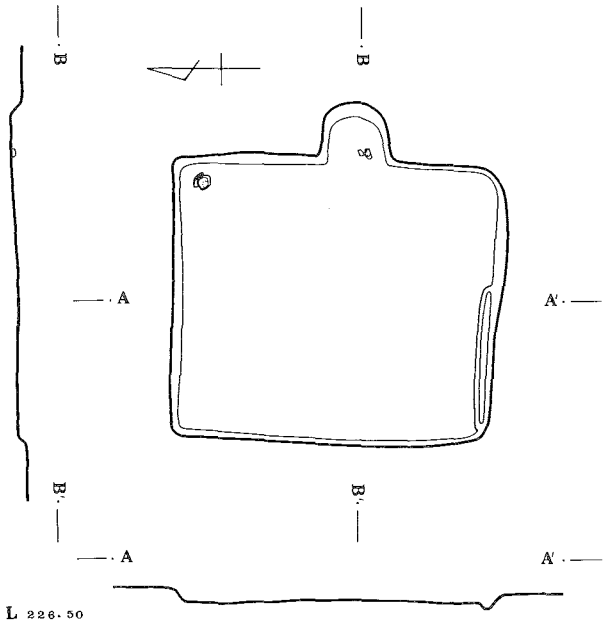
3.1m×3.5m、壁高30cmを測り南北に長軸をもつ。本住居は東側が90号との重複をなし、平面精査段階では90→13とした。しかし、13号にカマドの痕跡が認められず、又双方の伴出土器は13→90を示しており、90号が13号のカマド部を含めて切り込んだと判断すべきかもしれない。

本住居に伴うピット類は全く検出されない。

遺物は床面及び覆土より土師坏、甕片が出土している。






E－14号住居跡

3.5m×3.0m、壁高15cm弱を測る。南北に長軸をもち、整った長方形を呈す。

カマドは東壁中央僅かに南寄りの位置にある。幅70cmで壁外へは丸みのある方形に60cm掘り込まれ、内部奥３分の１程の位置から徐々に上端へ立ち上がっている。内部に板状石小片１片以外は石材は無く、袖部の痕跡も無い。柱穴貯蔵穴等ピット類も全く検出されなかった。

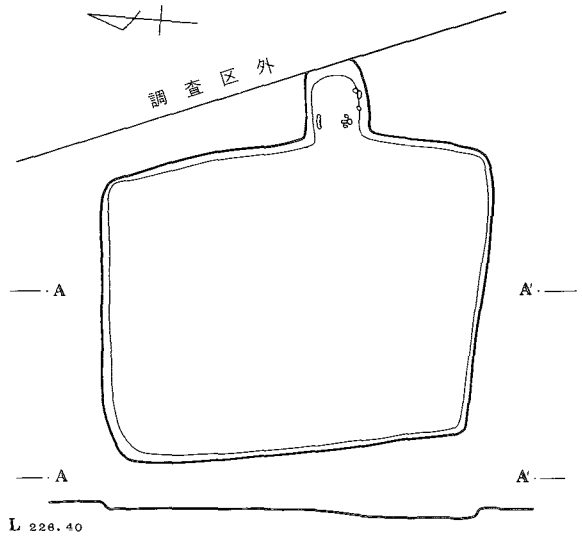
遺物は北東コーナー床面より須恵坏、大型埦片、覆土より須恵埦片が少々出土した。

E－15号住居跡

中央で4.0m×3.3m、壁高10cm弱を測る。長軸は南北にあり、不整形な平行四辺形を呈す。

カマドは東壁東寄りに造られる。幅65cmで壁外へ楕円状に70cm以上延びている。先端部は区域外のために不明。壁外部すぐの左手には板状石が立っており、火床中心部と共によく焼けていた。火床は床面とほとんどフラットで、先端部に向かって徐々に立ち上がるようである。住居に伴うピット類は検出されていない。

遺物はカマド内より土師甕片が僅かに出土している。

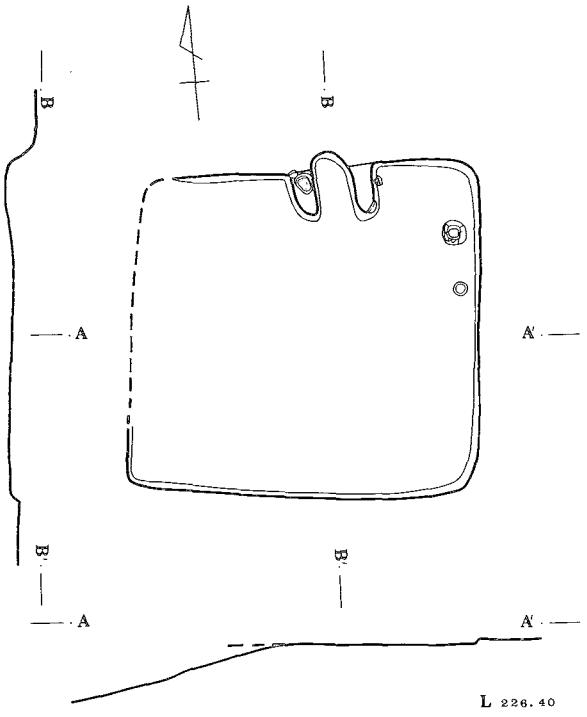


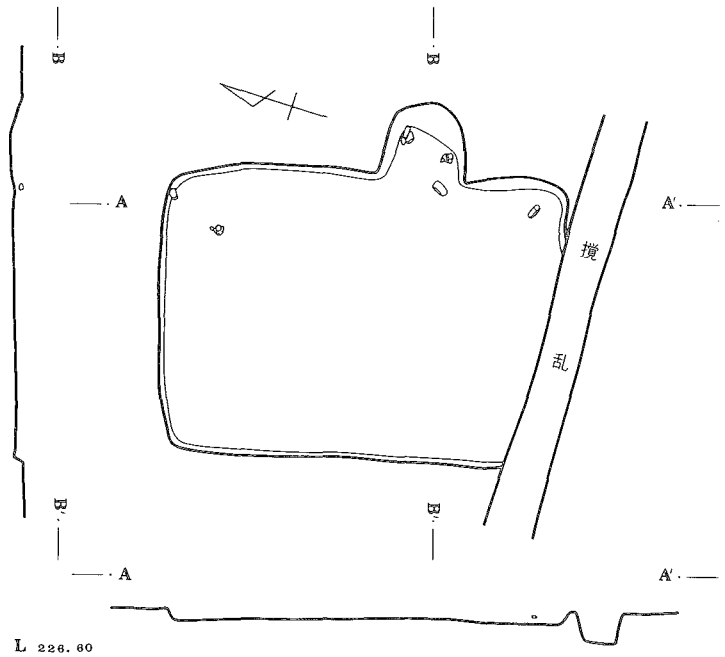

E－17号住居跡

北西部は削平され、不明。残存部では南北3.5m、東西3.7mと正方形に近く、壁高は東側で10cm弱である。

カマドは北壁に造られる。粘質土による袖部痕が残り、ある程度の推定で袖部を掘り残した。内部幅は約40cm、壁外へは20cm足らずの掘り込みで燃焼部の中心は壁内にある。火床は焚口より僅かに低いローム面で丸みをもち、上端まで急に立ち上がる。柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されなかった。

遺物は東壁付近床面に土師小型甕、須恵甕、カマド右手床面より須恵小型埦、左袖部上より土師甕等が出土した。



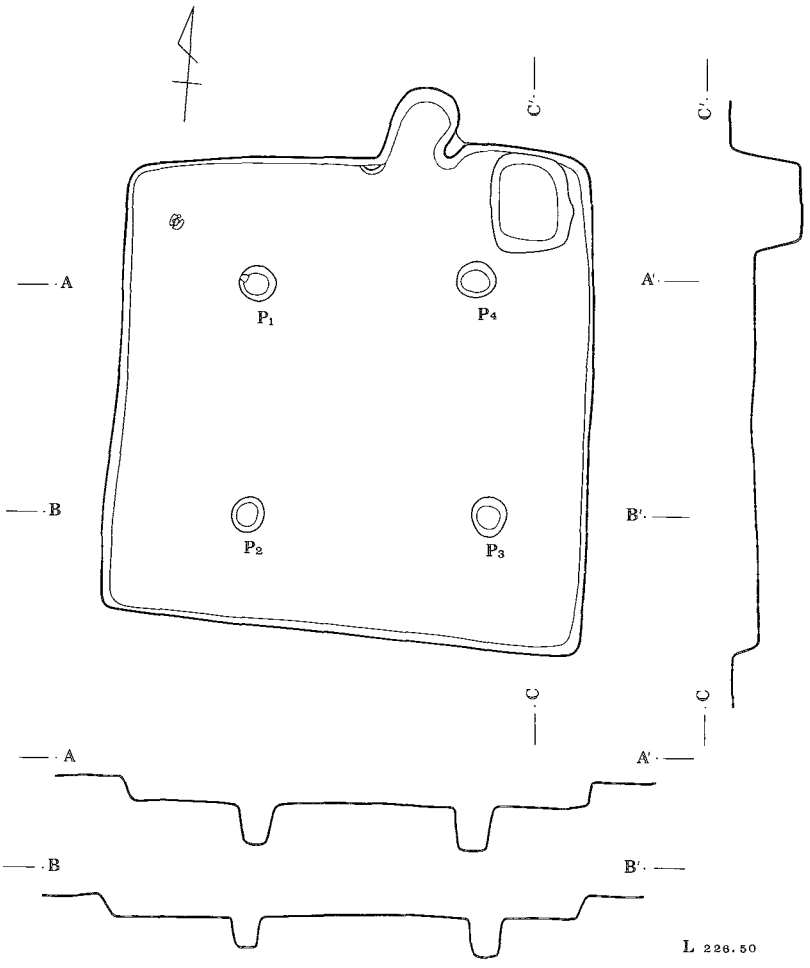



### E－16号住居跡

東西3.0m、南北は南壁に耕作の溝が入り込み不明だが南東コーナーの巡る位置から4.3m程になろう。壁高は約10cmを測る。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅は掘り込みの中心でも80cmと大型で壁より立ち上がりまではやはり80cm。火床は床面とほぼフラットで中程より立ち上がりまでゆるやかな傾斜面。外側半分程は非常によく焼けた明赤褐色であった。袖部痕、カマド構成石と思われるものは検出されず、ピット類も全く検出されなかった。

遺物はカマド内より羽釜片、土師質甕片、床面より内黒で花文の暗文をもつ土師質椀等が出土した。




### E－19号住居跡

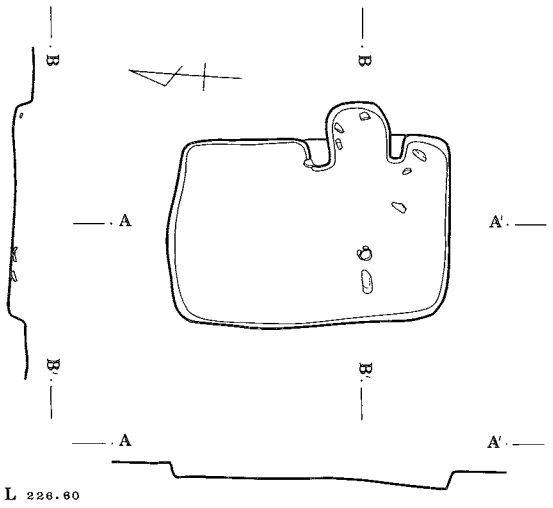
中央で5.0m×5.0mを測り、住居東側がやや広めになっている。各コーナーは直角に近く、壁も直線的である。壁高は25cmを測る。

カマドは北壁東寄りに造られる。壁部での幅約60cmで左側の住居壁より壁外立ち上がりまでは70cmである。やや右向きに半円状に掘られており、壁内には袖部芯となるローム掘り残し部分が検出された。

本住居には柱穴と貯蔵穴が伴う。柱穴は4基で規模は直径40cm程と統一しており、$P_2$はやや小さめである。深さは$P_1$と$P_3$が40cm、$P_2$32cm、$P_4$46cmであった。

貯蔵穴は北東コーナーに検出された。形状は隅丸方形で105cm×88cmと南北が長い。深さは48cmで底面は平坦であった。覆土より土師坏が出土した。

遺物は他に$P_1$肩口より土師甕片、覆土より土師坏、甕片が出土した。

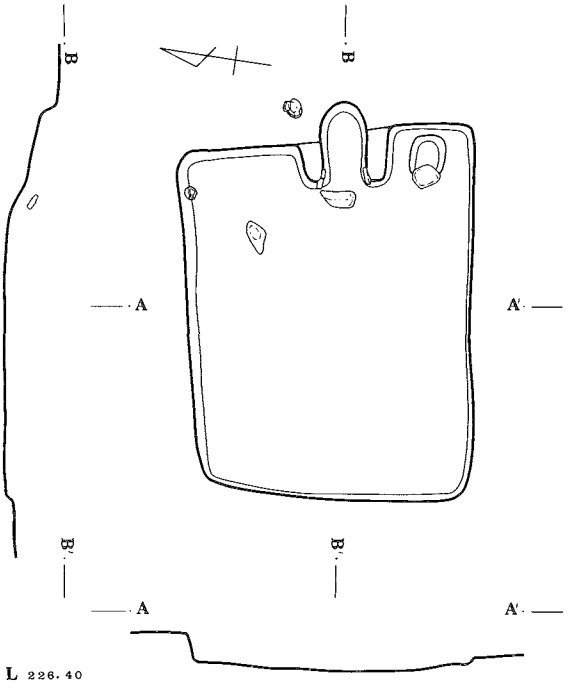



E－18号住居跡

東西2.0m×南北3.0mの小型長方形住居。壁高は南壁で約20cmである。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約65cmで壁外へ半円状の掘り込みは40cm弱を測る。袖部を掘り残したがこれは推定であり、明確な痕跡は見られなかった。火床面は焚口付近とほぼフラットであり、地山面がよく焼けていた。柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されない。

遺物はカマド内より土師質甕片、埦片、羽釜片、住居床面より須恵埦が、又、カマド内及び右手にはカマドに関すると思われる焼けた板状石片、床面より自然石１が出土している。



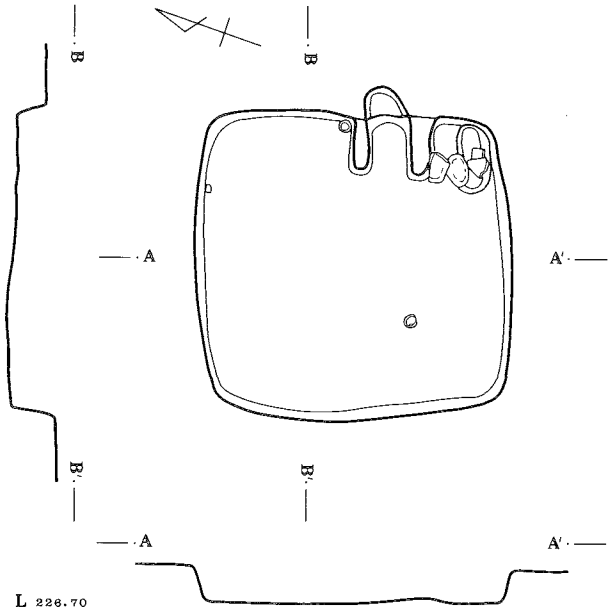

E－20号住居跡

西向きの傾斜部に位置する為、住居西側は残りが悪い、中央で3.8m×3.0mのやや不整な長方形で、東西に長軸をもつ。

カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。幅は約45cmで壁外へ半円状に30cmの掘り込みがある。壁の内側には、約30cmの所に50cmの間隔を置いて左右に板状石が検出された。これを焚口のものとして両袖部を推定位置に掘り残した。手前覆土の大きな板状石もよく焼けており、焚口を構成していたものと思われる。

カマド右手の南東コーナーに貯蔵穴を検出した。南北径38cmで東西はやや長め。西肩口にかかるように板状石が検出された。

遺物は北壁際覆土より土師小型甕、覆土より土師坏、甕片が少量出土した。




E－21号住居跡

2.5m×2.5mの隅丸正方形で、壁高は残りの良い西壁で50cm弱である。

カマドは東壁南寄りに造られる。壁外への掘り込みは幅40cmで長さ30cmの半円状をしている。これは確認面より10cm程低い位置で段をもち、壁内側の燃焼部へと続く煙道の一部であろう。床面と同レベルの火床面はよく焼けており、両袖部は推定で掘り残した。

カマド右手の南東コーナーに貯蔵穴をもつ。東西径70cm強の楕円形で深さは8cm程。カマド側の肩口とその西に自然石が、又、直上床面レベルに須恵甕片が出土した。

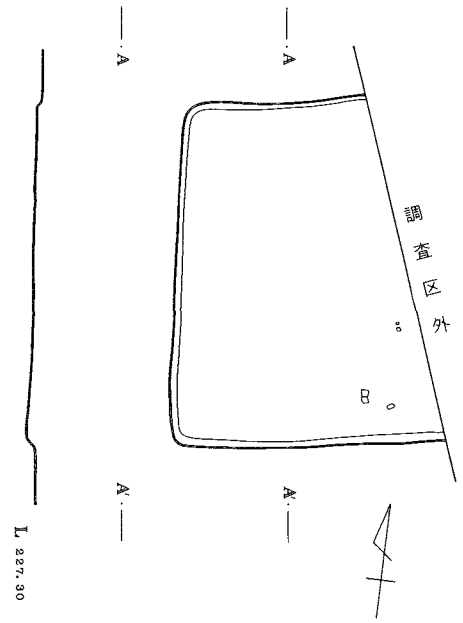
柱穴は本住居からは検出されなかった。

遺物は貯蔵穴部分の他、カマド左手床面に須恵蓋、床面やや西に土師坏、覆土より須恵坏片、土師坏片が出土した。

E－23号住居跡

南北2.7m、住居東側は区域外の為不明。壁高は西壁で16cm程だが他はもっと浅い。カマドの痕跡が全く無く、東壁の可能性が考えられよう。ピット類は全く伴っていなかった。

遺物は床面より羽釜片、土師質甕片、覆土より須恵塊片、坏片、土師甕片が少量の出土であった。



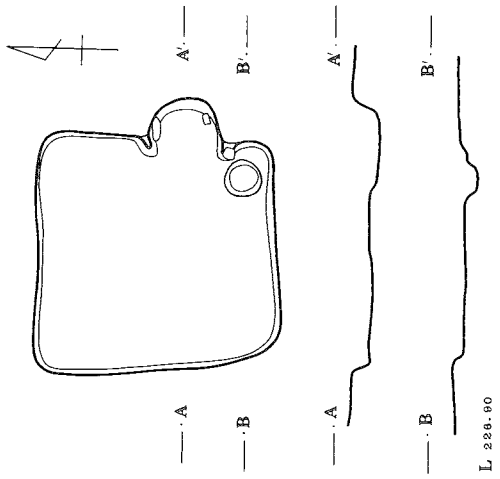

E－22号住居跡

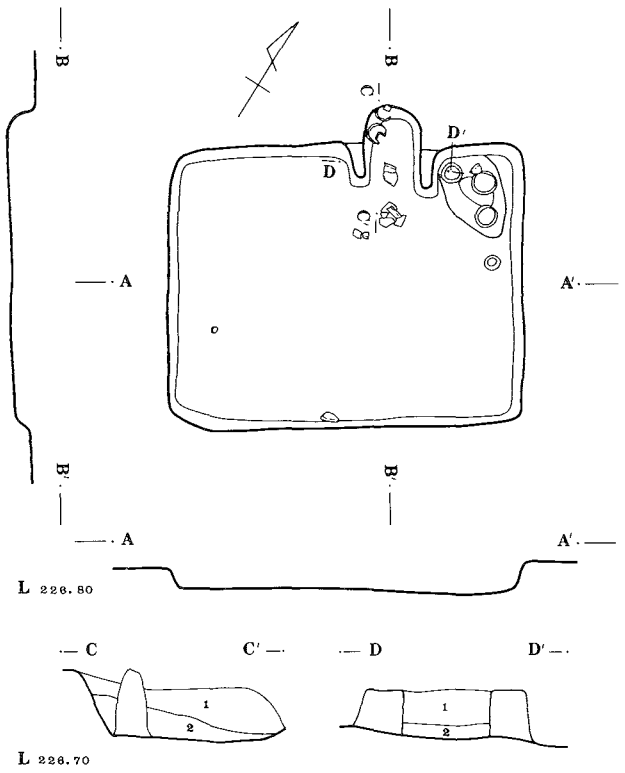
2.5m×2.5mの小型隅丸方形で南側ラインは少々内側に回り込む。壁高は約10cmである。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約70cmで壁外へ40cm強の半円状掘り込みがなされている。壁内左側は袖部痕と思われるローム掘り残し部分があり、右側のそれは推定位置に残した。ロームの掘り残しは無い。カマド内部には焼けた板状石が検出された。

カマド右手の南東コーナーに貯蔵穴が検出された。径38cm、深さ10cmで底面は平坦。遺物は伴っていなかった。柱穴は検出されていない。

遺物は覆土より土師甕片2と須恵坏片1の3小片のみ。





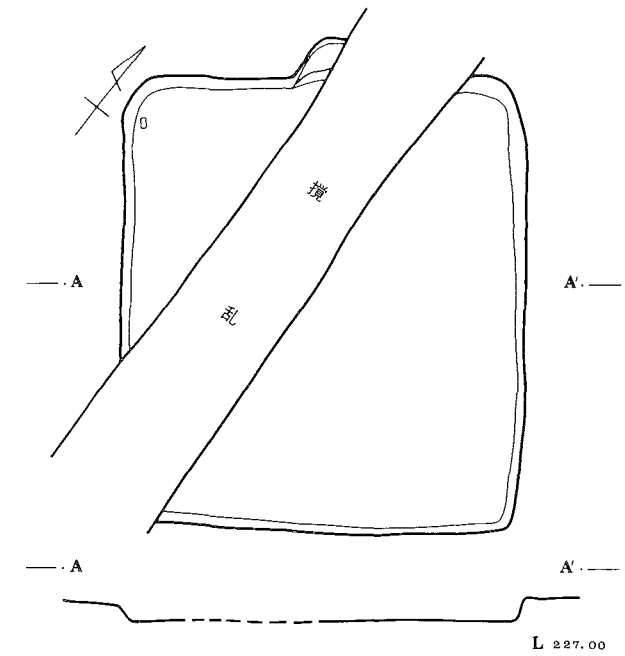

## E－24号住居跡

3.8m×3.0mで東西に長軸をもつ整った長方形を呈す。壁高は東壁で25cmを測る。

カマドは北壁東寄りに造られる。壁部での幅は約50cmで確認面では左側を少々掘り過ぎたが、すぐ下に明確な壁が検出された。壁外への掘り込みは約40cmで半円状を呈す。壁内側の袖部は推定で掘り残したもので明確なものではない。壁先端部とその内側より土師甕と甑が逆さの状態で出土した。煙道とされていた可能性も考えられるが明確ではない。カマド手前覆土には甕片が集中していた。

北東コーナーは全体的に少々低く、浅い不整形ピットと言えるかもしれない。コーナーに沿って北から土師甕、大型坏、小型甕、土師甕2個、須恵甕が並ぶように出土した。土師長胴甕3個と須恵甕は口縁片がそっくり上向きになっており興味深い。覆土遺物は土師甕片が大量であり、須恵甕片が少々混じっていた。又、柱穴は検出されなかった。

1層：天井崩落層。黄灰色粘質土層。
2層：焼土層。

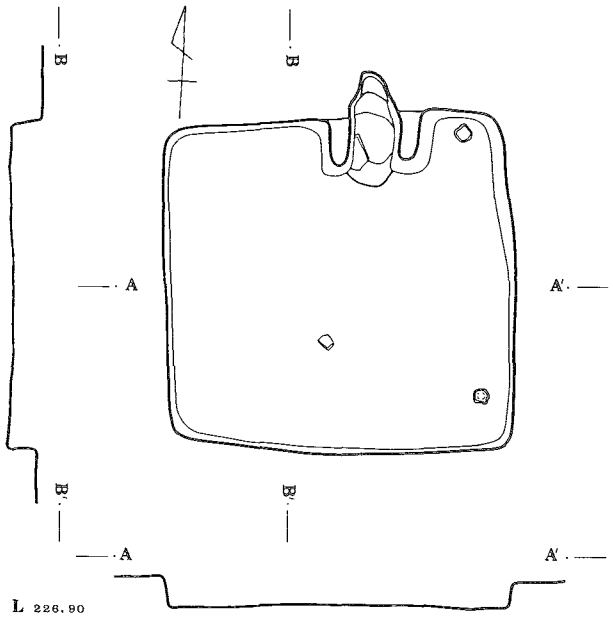



## E－25号住居跡

住居中央やや西を南北に後世の溝が切り込む。残存部は東西4.3m、南北4.7mで壁高20cm強を測る。

カマドは北壁中央付近に造られ、東側半分は溝に切られており不明。壁外への掘り込みは約50cmが残るが、内部は住居床面より高く、焼土も検出されず、火床とは考えにくい。煙道の一部であり、壁内部が燃焼部の中心と思われる。唯、袖部の痕跡は検出されなかった。杭穴、貯蔵穴等のピット類も全く検出されない。

遺物は覆土より須恵脚付盤、長頸壺片、土師甕片が出土した。



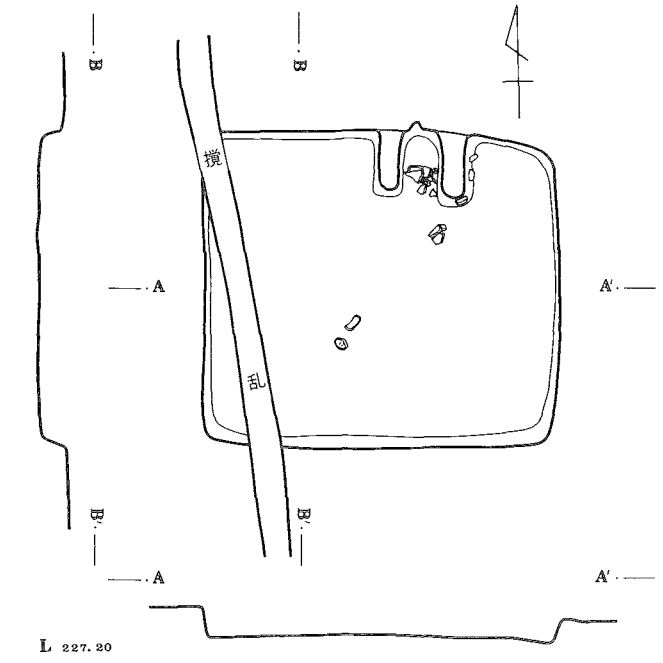

E－26号住居跡

中央で3.7m×3.5mを測る正方形に近い形状で、壁高は25～30cm。各コーナーは整っている。

カマドは北壁東寄りに造られる。壁部での幅は50cmで、壁外へ約40cmの不整な楕円形の掘り込みがあり、この部分は焚口付近より一段高く、煙道部と思われる。中程から僅かな傾斜をもち、壁ライン上で床面と同レベルになる。壁内にはピットがあり、ロームと黒色土からなる覆土の上に火床と思われる焼土が検出された。両袖部は粘質土の残存からの推定で掘り残した。左袖推定部内から検出された板状石は焚口のものと思われ、よく焼けていた。

住居に伴う柱穴、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物は北東コーナー床面に土師小型甕片、南東コーナーに土師坏があり、覆土からは土師甕片が少量出土した。




E－27号住居跡

3.8m×3.3mで東西に長軸をもち、壁高は西壁で30cmを測る。西壁内側を溝状遺構が切り込み、北西コーナーは残らないが、他コーナーは各々整った形状と言える。

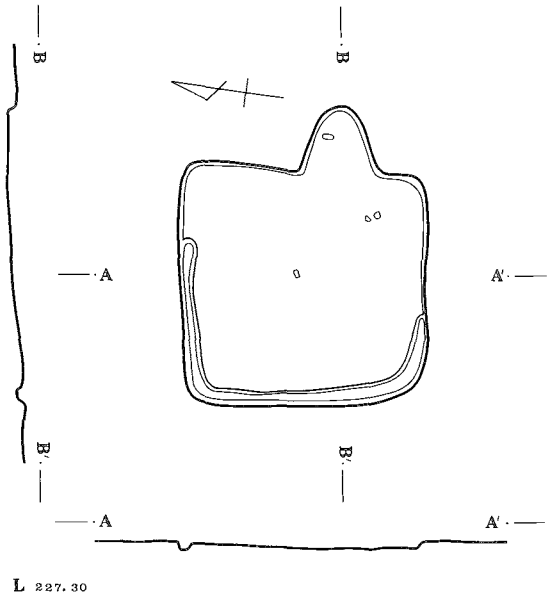
カマドは北壁東寄りに造られる。壁外部の掘り込みは幅12cmで長さ10cm弱と小さく、壁高下位より徐々に壁外へ向かって立ち上がっている。袖部は明確な痕跡がなく、推定位置で残した。遺物とり上げ後、この部分を切断してみたが、上位には天井崩落層と思われる粘質土と焼土の混土、中～下位はローム粒混じりの黒色土となっており、袖部を構築したと思われる痕跡は検出出来なかった。柱穴、貯蔵穴等のピットも全く検出されない。

遺物はカマド部より横位に潰れた土師甕、甑片、床面中央付近より土師甕片、覆土より土師甕片、坏片が出土した。

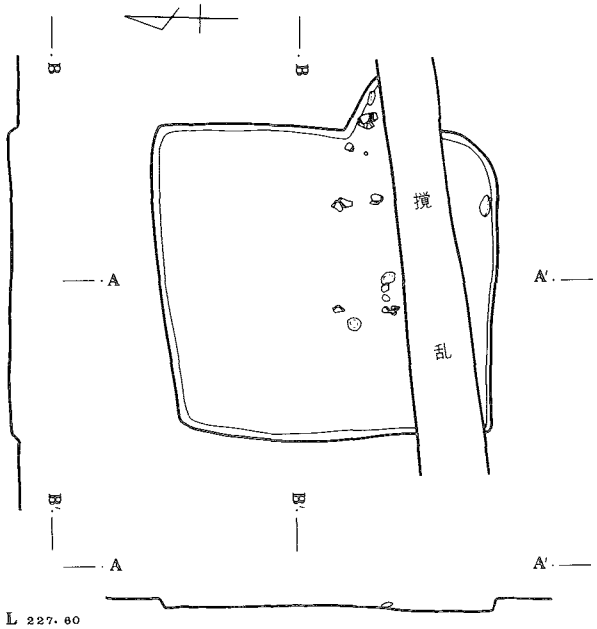
### E－28号住居跡

中央で2.5m×2.6m、壁高は東壁で10cm弱を測る小型住居である。カマドは東壁南寄りにあり、幅約80cm、壁外へ70cm弱と大きいものである。火床面は住居床面と同レベルでよく焼けており、検出された板状石の破片はカマドを構成していたものであろう。住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物は床面の須恵埦片のみであった。




L 227.30



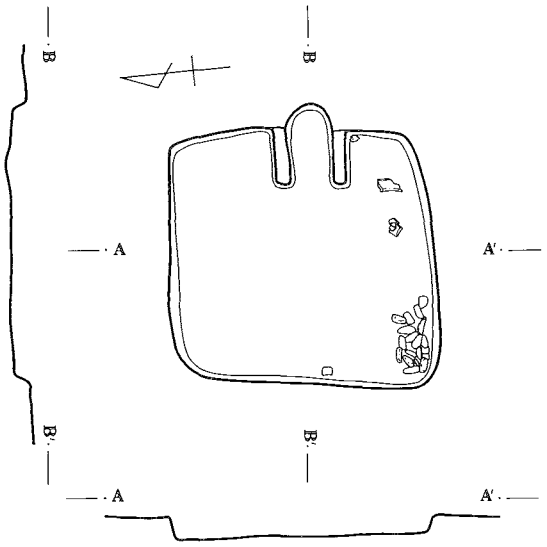

L 227.60

### E－29号住居跡

中央で2.7m×2.8m、壁高約20cmを測る小型の住居。カマドは東壁南寄りに造られる。幅50cm弱で壁外には30cm弱の半円状の掘り込みが見られる。壁内の両脇には袖部痕と思われる黄灰色の粘質土が床面まで残っており、推定で袖部を掘り残した。内部はよく焼け、燃焼部は壁内側であったことが分かる。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されなかった。

遺物は南東コーナー付近覆土より土師小型球胴甕、大型球胴甕それぞれの破片が出土した。また、南東コーナー床面にはこも石状の自然石が19個集中しており、興味深い。




L 227.40

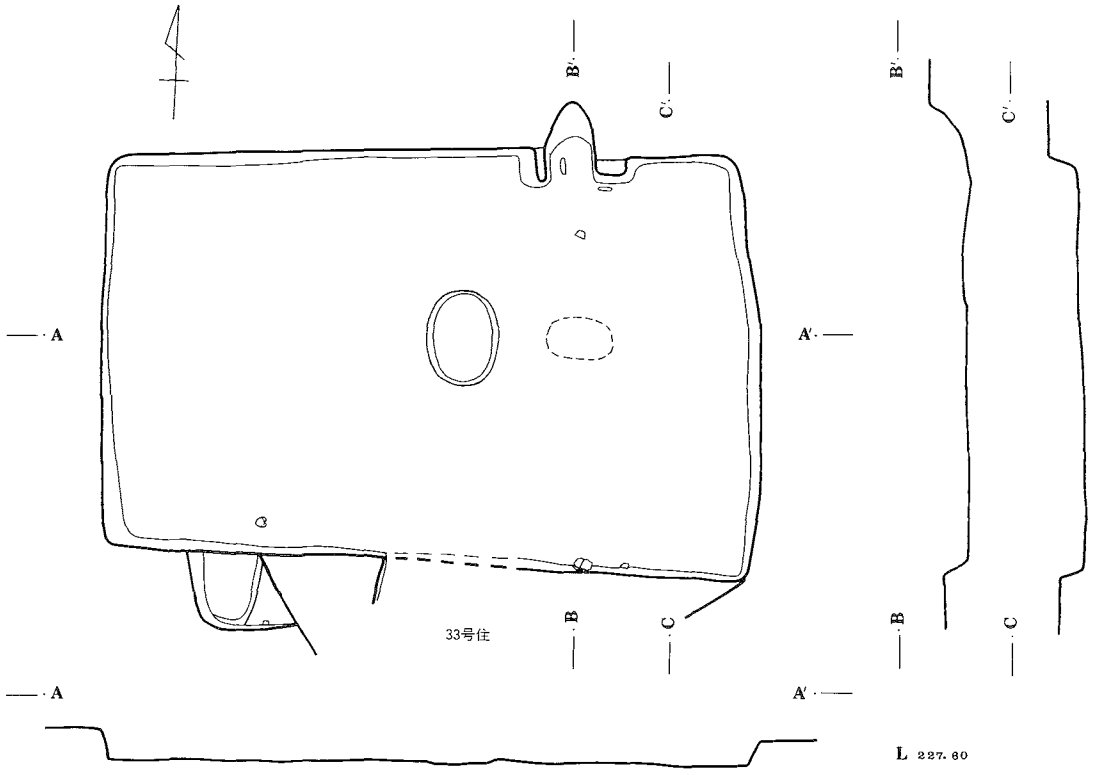
### E－30号住居跡

中央で3.6m×3.3mとやや南北が長い。壁高は約10cmを測る。北壁中央から東側にかけて大きく張り出し、平面形は少々不整形になっている。

カマドは東壁南寄りに造られる。南壁内側を後世の溝状遺構が切り込むため、カマド南半分は不明である。北側残存部で壁外50cmの掘り込みを測り、焼けた板状石片が残る。覆土からも細かくなった破片が検出されており、カマド内部を構成していたことを窺わせる。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されなかった。

遺物は、カマド内に土師甕片、覆土より須恵坏、埦片等が、又、南壁際及び中央付近床面より焼けた板状石片が出土している。




E－32号住居跡

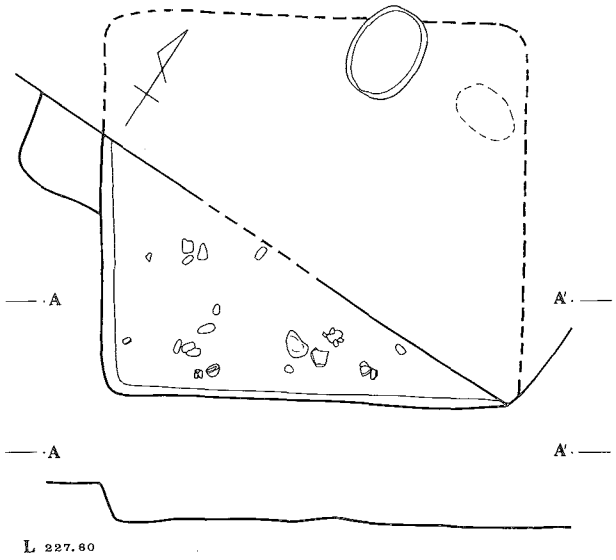
東西7.0m、南北はやや広めの東側で4.4mを測る。各コーナーは角ばっており、少々不整な大型長方形の住居。壁高は20～30cm程である。

平面精査段階では本住居南壁を切り込む住居跡として31号をナンバリングした。しかし、31号を掘ったところ、壁、床面、カマド共に明確でなく、住居とは考えにくいことから、当初プランの南西コーナーの重複しない部分は性格不明の掘り込みとしておきたい。又、32号の南壁中央を切る形の掘り込みも同様、性格不明である。

さて、32号のカマドは北壁東寄りに検出された。幅約50cm、壁外中央部で左壁より約50cmを測る。左右袖部分を推定で掘り残し、切断してみたが、明確な痕跡は見られず、カマド内部からも検出された粘質土の断面のみであった。内部中央やや左には板状石による石製支脚がしっかりと立つ。火床は地山のローム面で、焚口より僅かに低く掘られた面は明赤褐色によく焼けていた。壁外の煙道へは徐々に立ち上がる。

住居中央に1か所、非常に浅いピットが検出された。長軸約1mの楕円形を呈し、深さは3～4cmと浅い。遺物の出土はなく、覆土は焼土と黒色土からなる。性格は不明。また、その右手にやはり焼土と黒色混じりの円形部分があるが、これはピットにはならない。その他、柱穴、貯蔵穴等のピットは検出されない。

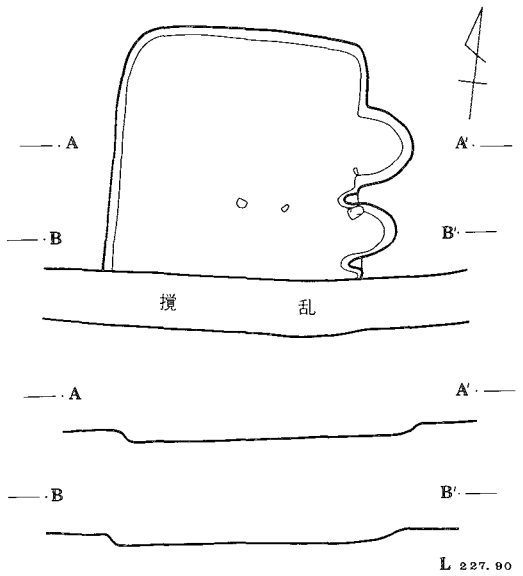
遺物は南壁際床面に土師甕、覆土より土師坏及び土師甕片、坏片が出土した。




E－33号住居跡

平面精査時に31号及び32号が33号を切り込む所見を得たが、31号は先述のとおり住居とは見なさない。よって32号が33号の北側大半を切る所見に基づき、残存部を掘った。壁高は30～40cm弱とよく残っているが、規模や形状は明確でない。しかし、32号の南東コーナー部分で本住居の南壁も途切れることから、ちょうどここをコーナーとして東壁がはじまる可能性が強く、東西は4.5m内外とみることが出来る。また、残存部にカマドの痕跡が全く検出されないが、32号中央の浅いピットが本住居に伴う北カマドの跡ではないかと思われる。そうすると、東側の焼土と黒色土部分は貯蔵穴の位置にあたる。ピットではないが、本住居に伴う可能性が強いであろう。また、柱穴は検出されなかった。

遺物は床面よりこも石状の自然石９個、土師甕、埦、覆土より土師坏片、甕片が出土した。



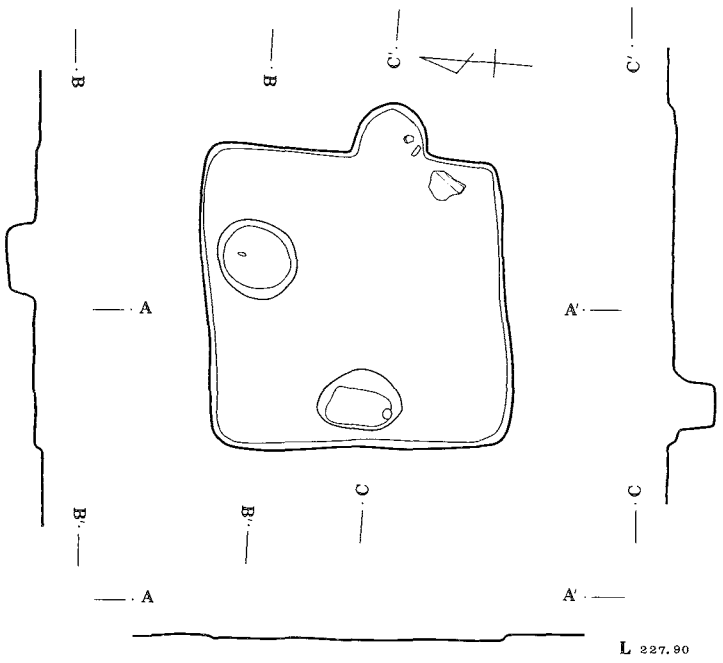

E－34号住居跡

東西2.7m、南北は南壁が溝状遺構に切られるために不明だが、溝の南側にプランが無いので3.1m以内である。

カマドは東壁に２か所検出された。北側カマドは幅80cm長さ55cmの半円状で焚口レベルの火床面から側壁及び煙道方向にボウル状に丸く立ち上がる。内部はよく焼けて暗赤褐色を呈す。一方、南側カマドは同じような半円状をしており、幅55cm、長さ40cm弱と北側のものより掘り込みが小さい。壁内左右の掘り残しは袖部推定位置としたものだが明確ではなく、右側は溝が切り込む肩口に近いため、東壁ラインを少々掘りすぎたようだ。おそらく、掘り残し部の先端付近が東壁の位置であろう。

柱穴、貯蔵穴等のピット類は検出されなかった。

遺物は酸化羽釜片、土師質坏片が覆土より出土した。



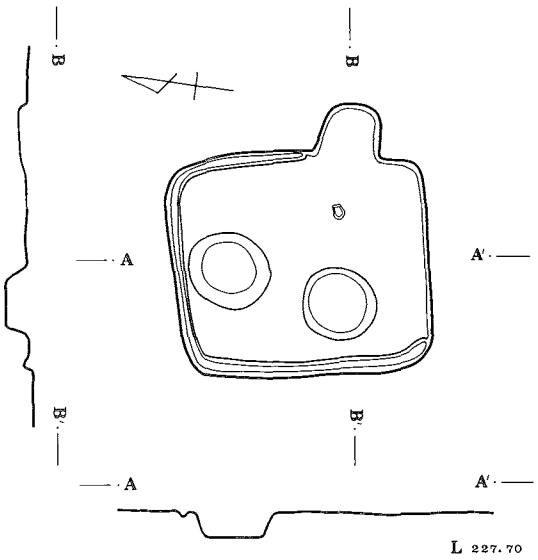

E－35号住居跡

中央で3.1m×3.1mを測る少々歪んだ正方形で、壁高は平均3～4cm程と思われる。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅80cm弱で50cm程半円状に掘り込みが残る。カマド内部、焚口右側付近には板状石の残骸があり、石組の一部をなしていたことを窺わせる。火床は赤褐色によく焼けていた。

住居内にはピットが2か所存在した。北側のピットは径80cm、深さ30cmで底部付近に刀子と思われる鉄製品が出土した。西壁際のピットは南北に長い不整形で、長径90cm、深さ40cmである。底部南際に須恵塊が出土した。覆土は両方共に全体に焼土粒を含む黒色土であった。

遺物は、貯蔵穴内の他、カマドより土師質甕片、覆土より羽釜、須恵塊片、灰釉塊片が出土した。



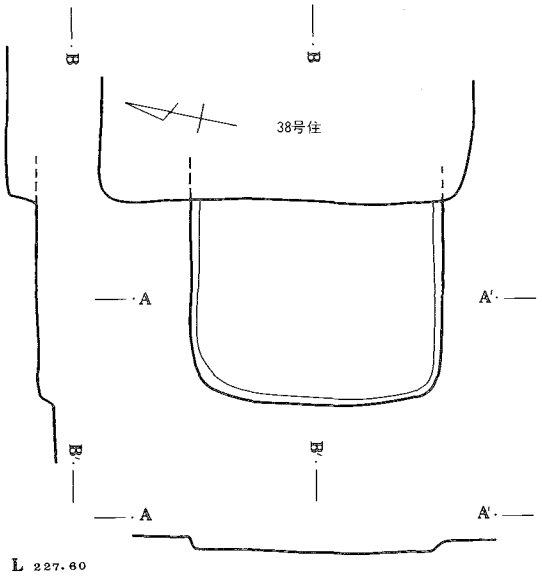

E－36号住居跡

2.7m×2.4mの小型住居で、南北に長軸をもつ。残存状態は悪く、僅かに残る覆土の範囲と周溝でプランを確認した。

カマドは東壁南寄りに造られる。壁部での幅は約70cm、壁外への掘り込みは少々方形状に南寄りに曲がり、50cmを測る。明確な火床面は不明であり、掘り方は床面より10cm弱程低い凹凸面である。石材、袖部等の痕跡は無い。

カマド北側の東壁から北壁、西壁と周溝を検出した。幅10～15cm、深さは床面より5～10cmであった。また、住居内にはピット2基があり、北側ピットは径80cm強、深さ約30cm、南側ピットはひと回り小さく径75cm程度で深さは約25cmである。両方共、床面は広く、断面は浅い台形状を呈す。

遺物はカマド手前床面より須恵坏片、他に土師甕片と須恵坏片と少量である。ピット内に遺物は存在しなかった。

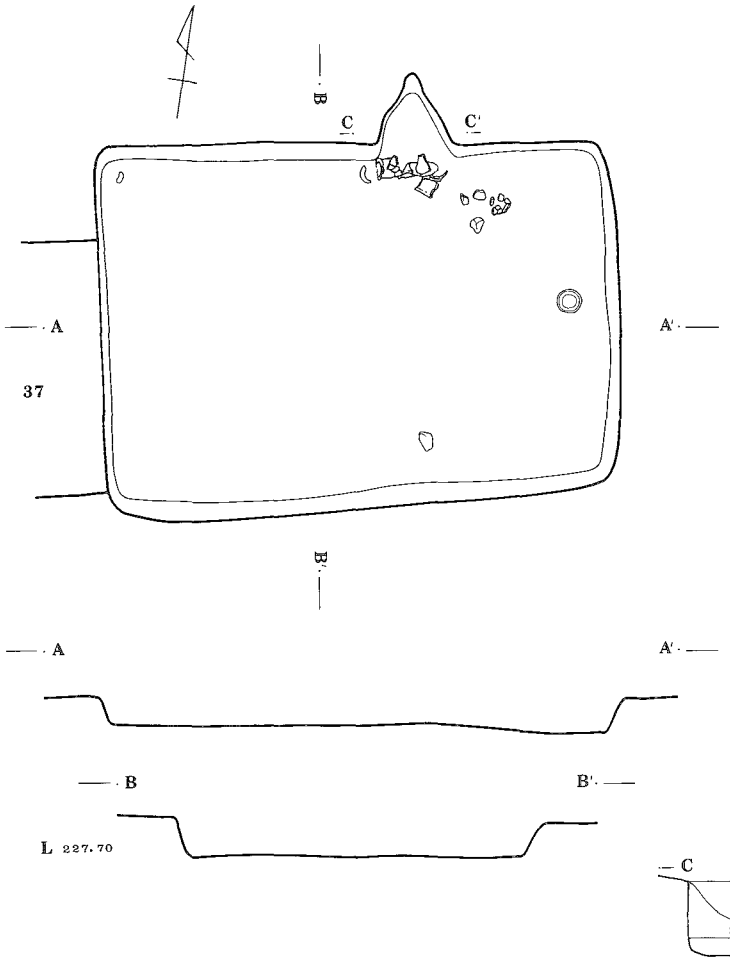



E－37号住居跡

本住居は東側が38号との重複で、38号の西側を本住居が切り込む状況であった。しかし、写真測量（撮影）のトラブルのため、重複部分の図化が不可能になってしまった。南北は2.7m、東西は不明だがこちらに長軸をもつことは確かである。壁高は10～15cmである。

カマドは東壁南寄りにあり、壁外部は半円状の掘り込みが残っていた。内部には焼けた自然石が３個あり、石組みカマドであったことが窺われ、カマドから南東コーナーにかけて焼土が検出された。柱穴、貯蔵穴等のピット類は全く検出されていない。

遺物はカマド内より須恵坏、土師コの字状口縁甕、覆土より土師甕片、須恵埦片が少量出土した。

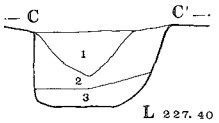



E－38号住居跡

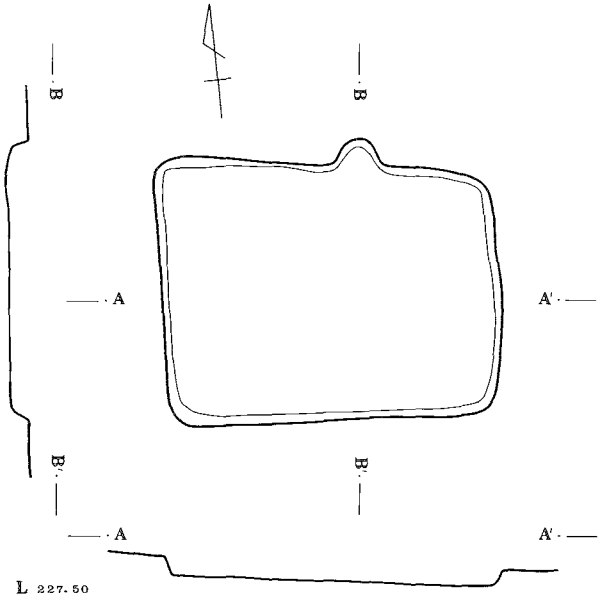
5.5m×3.9mで東西に長軸をもつ整った長方形である。壁高は確認面より40cmと比較的良好。西側は37号に切られる重複だが本住居の掘り込みが深いために壁上部が少々切られただけであった。

カマドは北壁東寄りに造られる。幅約85cmで壁外部は少々膨らむ三角形状の先端が細長く突き出ており、壁より約80cmを測る。焚口付近に土師長胴甕が集中し、両脇に１個ずつ据えられた甕の間を２個の甕が鳥居状に渡されていた。その上の破片がカマドにかけられたものであろう。カマド部分からは長胴甕が６個体分出土している。石材や袖部は検出されなかった。ピット類も全く検出されない。

遺物はカマド部以外に右手前床面に土師小型球胴甕片、東壁付近床面に土師球胴甕口縁片一周、覆土には土師甕片が多く、又、床面より自然石が２個出土している。




1層：住居内覆土。
2層：天井崩落層。
3層：天井崩落層と思われる粘質土を含む焼土層。



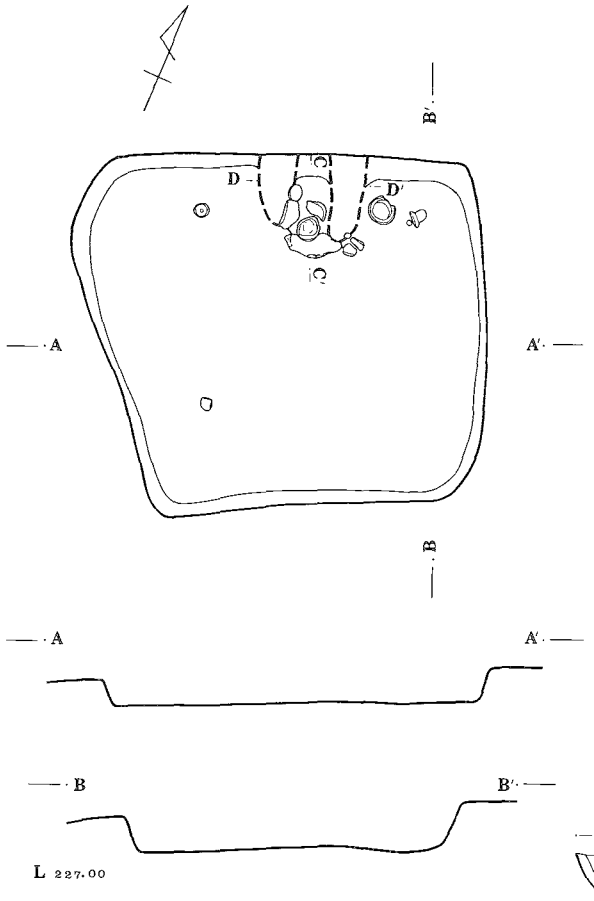

E－39号住居跡

中央で3.6m×2.7mを測り、北西コーナー部が大きく張り出すために全体に少々不整形な長方形となっている。東西に長軸をもち、壁高は20cm弱である。

カマドは北壁中央やや東寄りに造られる。幅50cm、壁外部30cm弱の小さな丸い掘り込みで、袖部や石材等は検出されない。床面同レベルで火床となり、ローム面を使用していると思われよく焼けていた。

柱穴、貯蔵穴等のピットは全く検出されない。

遺物は覆土より土師甕片と坏片が数片出土したのみ。



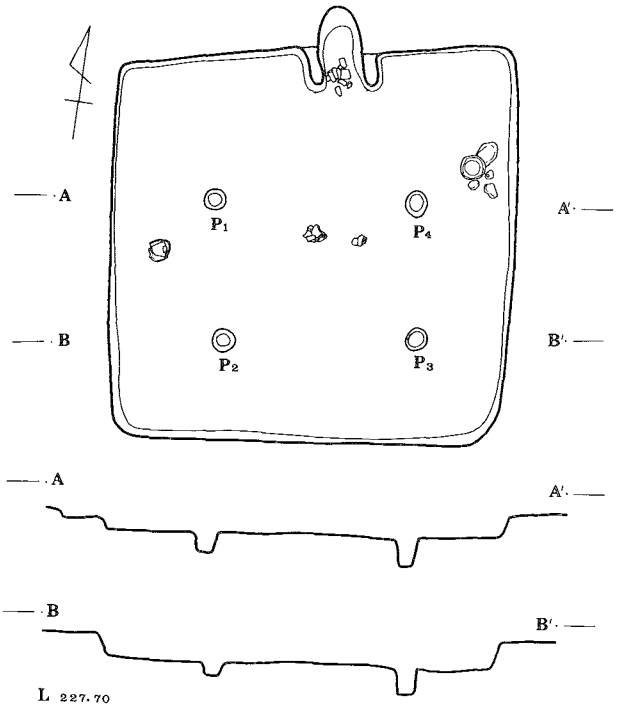

E－40号住居跡

中央で4.1m×3.7mを測り、東西に長軸をもつ。北西コーナー部は丸く大きく張り出しており、逆台形状と言える。壁高は北東部で45cmを測り、南西側は確認面が傾斜のために徐々に浅くなる。

カマドは北壁中央やや東寄りに造られる。北壁から東壁にかけて後世の溝が入り込み、壁及びカマドの上半分は削られているが、残存状態は良好と言えよう。燃焼部は完全に壁内側となっており、袖部が明確に検出した。左右共、壁際下半分程は地山のロームを掘り残し、他部分は粘質土によって構成されている。内側は楕円状で焚口の板状石はよく焼けてボロボロになっていた。側壁を構成した石材の痕跡は無かった。また、本住居に伴うピットは全く検出されない。

遺物はカマド内に土師球胴甕、長胴甕片、須恵甕片、その右手床面に長胴甕、右手前床面に須恵埦、他、土師坏、台付甕台部片等、大量に出土している。

1層：天井崩落層。粘質土に焼土が少々含まれる。
2層：焼土層。



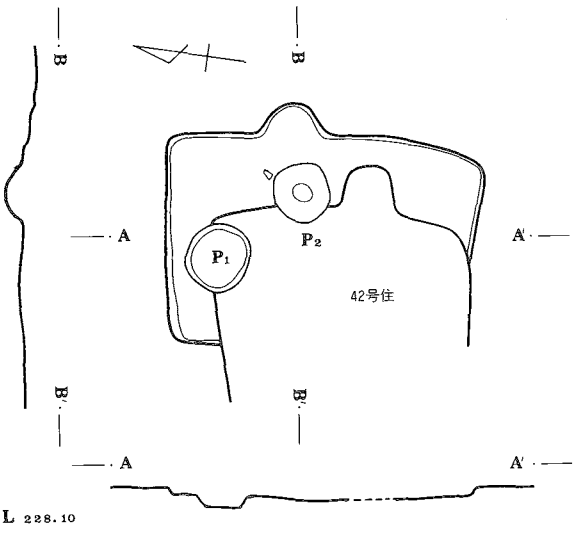

E－41号住居跡

東西4.3m×南北4.2m、壁高20～30cmを測る正方形の住居。

カマドは北壁中央やや東寄りに造られる。幅約45cmで壁外部は長さ40cmの楕円形に掘り込みがあり、住居壁ラインから壁外へと傾斜面が立ち上がる。内側両脇の袖部は粘質土の痕跡からみた推定ラインで、特に右袖部は明確でない。石材の残骸等は無く、覆土には土師甕片がまとまって出土している。

床面には柱穴が4基検出された。径は20～25cm程で揃っており、深さは$P_1$20cm、$P_2$12cm、$P_3$26cm、$P_4$28cmであった。全体的にやや南に寄る傾向があり、$P_3$以外は対角線より南側にくる。

遺物はカマド内の土師甕片の他、東壁際北半床面より土師球胴甕口縁片、土師坏、焼けた板状石、覆土より土師坏、甕片が出土している。



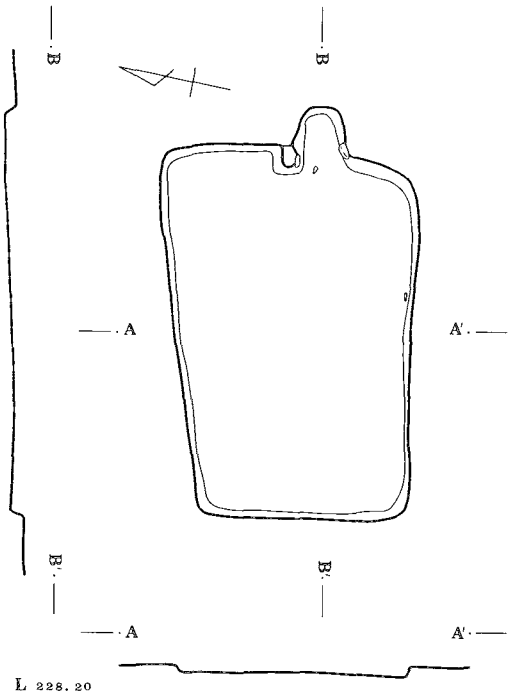

E－43号住居跡

南北3.3m、東西は残存する北壁際で2.2mを測り、南北に長軸をもつ住居。壁高は7～8cm程度で浅い。西側は42号が切り込んでおり、西壁の大半と南壁西半分は存在しない。

カマドは東壁北寄りに造られる。幅70cmで半円状の掘り込みが壁外に30cm程残る。カマド内部の面は住居の面より高く斜位に落ちており、焼土も検出されていることから火床面（生活面）としてよいであろう。また、住居の面は土坑も存在し、カマド面よりやや低く、掘り方としてとらえることが出来よう。

住居内部にピットが4基検出された。これらは平面精査段階では確認出来なかったもので、本住居又は重複する42号に伴うものと考えられる。そのうち、42号のプラン外にある$P_1$と$P_2$を本住居に伴うものとした。共に形状は正円に近く、$P_1$は径70cm、深さ12cmで底面は平坦。$P_2$は径60cmで深さは中心で20cmの断面ボウル状である。覆土は黒色土とローム粒からなり、$P_2$には焼土が混じっていた。残り2基のピットについては42号のプラン内に検出され、特に南側のものは位置的にみて42号の貯蔵穴の可能性もあり、一応42号に伴うものと考える。しかし、この2基は測量の都合により図化されておらず、その位置及び規模、形状等については遺憾乍ら写真を参考にして頂きたい。

遺物はカマド手前掘り方面に土師甕片、覆土より土師甕片、須恵皿片が出土している。

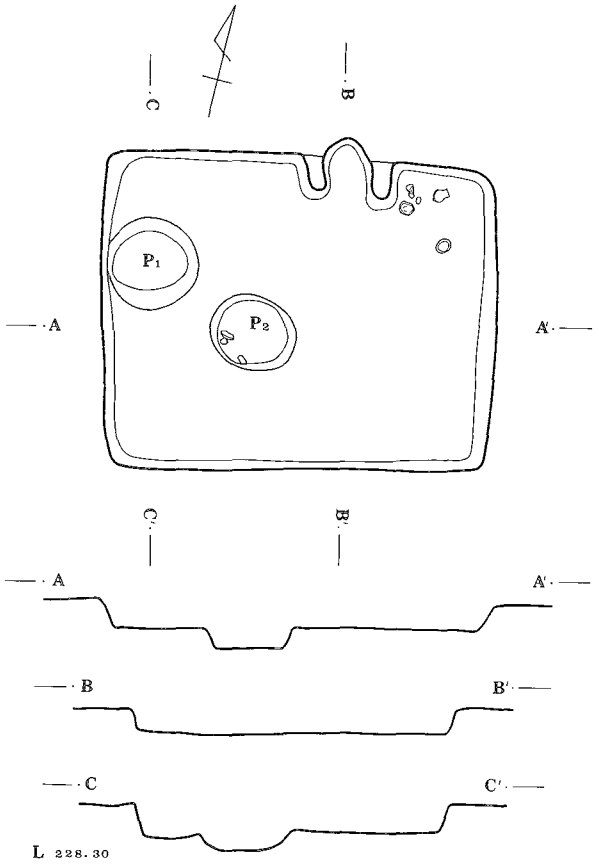



### E－42号住居跡

中央で3.9m×2.5mと東西に細長く、北東部は西壁から直線的に張り出して不整形になっている。壁高は5～10cm程度である。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約55cmで少々角張った楕円形掘り込み部は壁より約45cm。掘り込みの内側両脇は赤褐色によく焼けた板状石が据えてあり、焚口を構成する。左側は袖部と思われる掘り残しの突出で、地山のローム面である。脇にピットが存在するが、住居に伴うものではないと思われる。柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は覆土より土師甕片、須恵坏片が出土している。



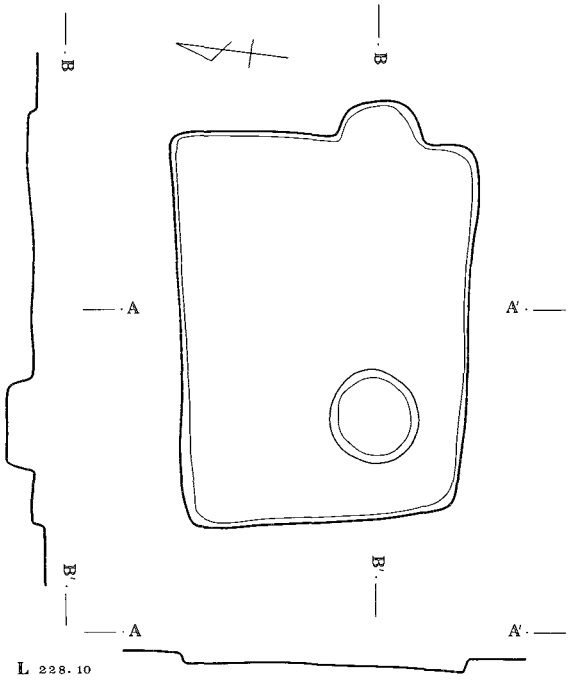

### E－44号住居跡

4.2m×3.3m、壁高25～30cmを測り、東西に長軸をもつ整った長方形を呈す。

カマドは北壁東寄りに造られる。幅約45cm、壁外の掘り込みは丸い三角形状で中央で20cmと短い。壁内両脇は粘質土で造られた袖部を長さ約40cm確認した。壁外部の内壁に比べ、袖部内壁と火床はよく焼け赤褐色を呈す。火床は住居の床として掘った面より僅かに高く、またカマド右手の遺物も少々浮き気味であり、住居床面としては少々掘り過ぎたと思われる。

本住居に伴うピットは2基検出された。西壁際の$P_1$は径1m弱で正円に近く、深さ20cm、覆土はローム粒を含む黒色土であった。$P_2$は94cm×76cmの楕円形で深さはやはり20cmを測る。底面は少々丸みを帯び、覆土は焼土と粘質土が主であった。底面より土師甕片と坏片が出土している。

遺物は他にカマド右手覆土下位に須恵坏、やや上より須恵坏、土師坏、甕片、覆土全体に土師甕片、坏片、須恵甕片、砥石1が出土した。



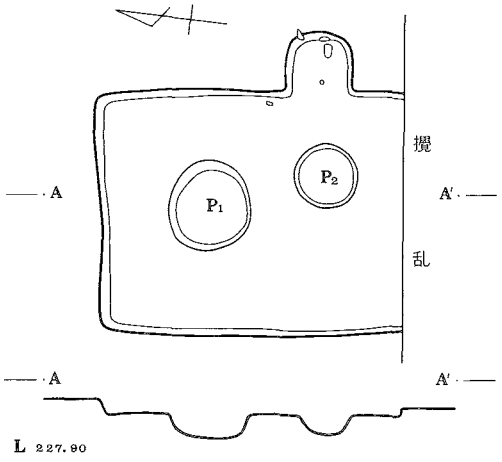

## E－45号住居跡

中央で3.1m×4.1mで東西に長軸をもつ不整長方形。壁高は約10cmを測る。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約90cm、長さ約40cmで半円状の掘り込みがあり、石材、袖部等の痕跡は無い。火床と思われる面はよく焼けており、住居床面とした面より僅かに低くなっている。

ピットは住居西側に１基存在する。ほぼ正円で径95cm、深さ28cmを測り、底面は広く平坦である。柱穴、貯蔵穴は検出されない。

遺物は覆土より土師甕片が１片出土したのみ。



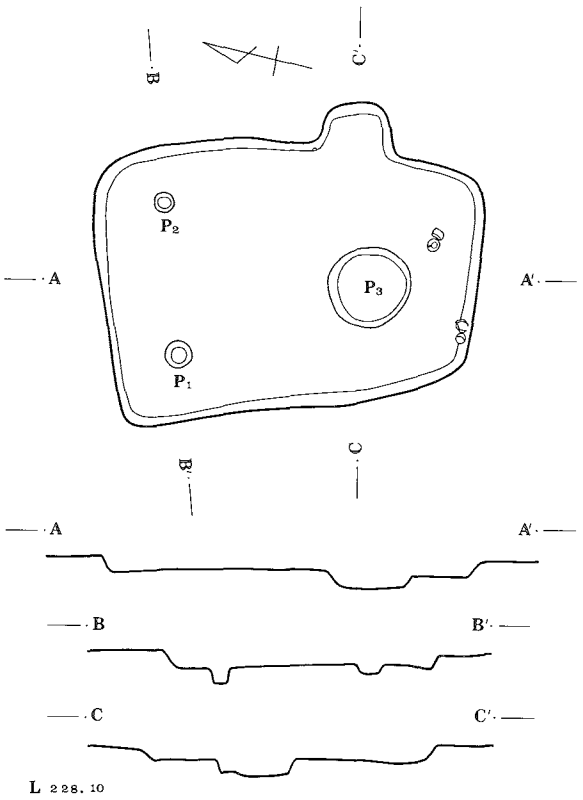

## E－46号住居跡

東西2.6m、南北は南壁を耕作の攪乱が切っているために不明だが、残存部では3.2mあり、南北に長軸をもつ、各辺は真っすぐで北側のコーナーも直角に近い整った長方形になると思われる。壁高は12～18cm程が残っている。

カマドは東壁に造られる。幅70cm、壁外部は楕円状で長さ60cmを測る。立ち上がり部分と覆土に焼け痕のある自然石があり、石組み部の残骸と考えられる。袖部痕は全く検出されない。

住居内に２基のピットが検出された。２基共に正円に近い形状で、断面も底面が広く丸みを帯びておりよく似ている。$P_1$は径90cm、深さ25cm、$P_2$は径65cm、深さ20cmであった。覆土は焼土混じりの黒色土であった。他にピットは検出されない。

遺物はカマド立ち上がり部分より酸化した羽釜片、覆土より同じ羽釜片、土師質埦片、灰釉埦片が出土している。



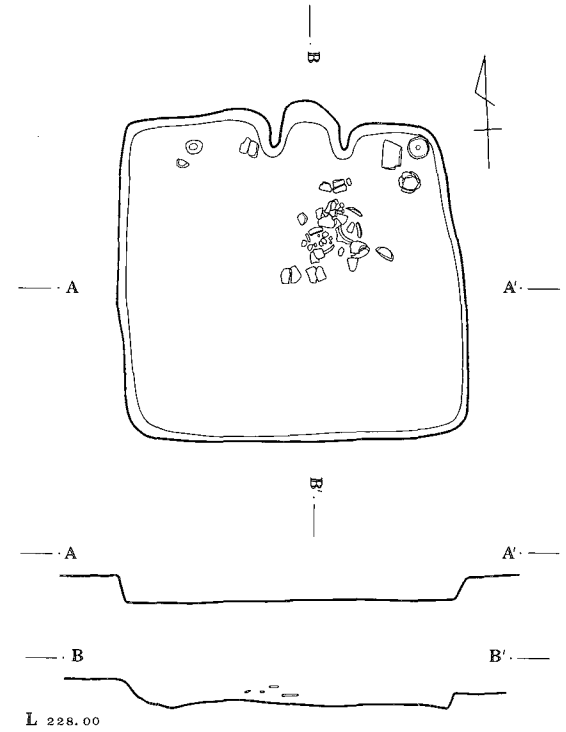

E－47号住居跡

北壁2.7m、南壁2.1m、南北は中央で4.0mを測る。全体に不整形な台形状と言え、壁高は住居北東コーナー付近で約20cmあり、他は少々浅い。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約80cmで壁外掘り込み部は台形状に50cm程残る。右側壁中程には石組みの一部と思われる自然石があり、火床は炭化物混じりの焼土が少々残っていた。カマド右手の南東コーナーやや内側にも同じような焼土痕が確認された。袖部痕は無い。

住居内にはピットが3基検出された。$P_1$と$P_2$は位置からみて柱穴の可能性が考えられるが、南側に対応するピットは存在せず規模にも差があるので断定は出来ない。$P_1$は径25cm、深さは12cm、$P_2$は径20cm弱で深さは16cmである。$P_3$は径85cmの大きな円形で深さは17cm、底面は比較的平坦であった。

遺物は南壁際床面に土師坏と同じく覆土より土師坏が出土し、床面のものは底部外面に墨書がある。他、覆土より土師甕片、坏、須恵甕片、坏が出土しており、土師坏はもう1個体も底部外面に墨書をもつ。



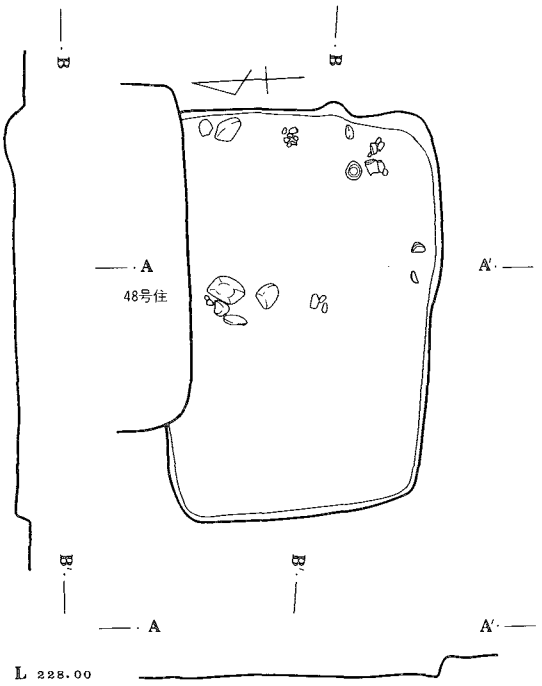

E－48号住居跡

中央付近で3.7m×3.4mと僅かに東西が長い。壁高は20～30cm程あり、残存状態は比較的良好と言える。

カマドは北壁中央のやや東寄りに造られる。両脇は徐々に内側へまわり込み袖部として掘り残してある。袖部つけ根付近で幅60cm弱、壁外へは20cm程と小さな掘り込みである。袖の内壁と内部の火床面はよく焼け、中程から徐々に立ち上がって煙道へと続くようである。石組みの痕跡は無いがカマド右手の床面に焼け痕のある板状石が出土しており、これがカマドに伴うものかは不明。

住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド手前に集中して出土する。土師長胴甕2個、甑1個、球胴甕2個、須恵長頸壺が潰れた状態であった。カマド右手床面には土師甕上位一周、頸部欠損の須恵長頸壺一周、板状石1枚が、カマド左手には床面に土師甕片、須恵坏片、やや上の覆土より須恵台付坏が出土した。

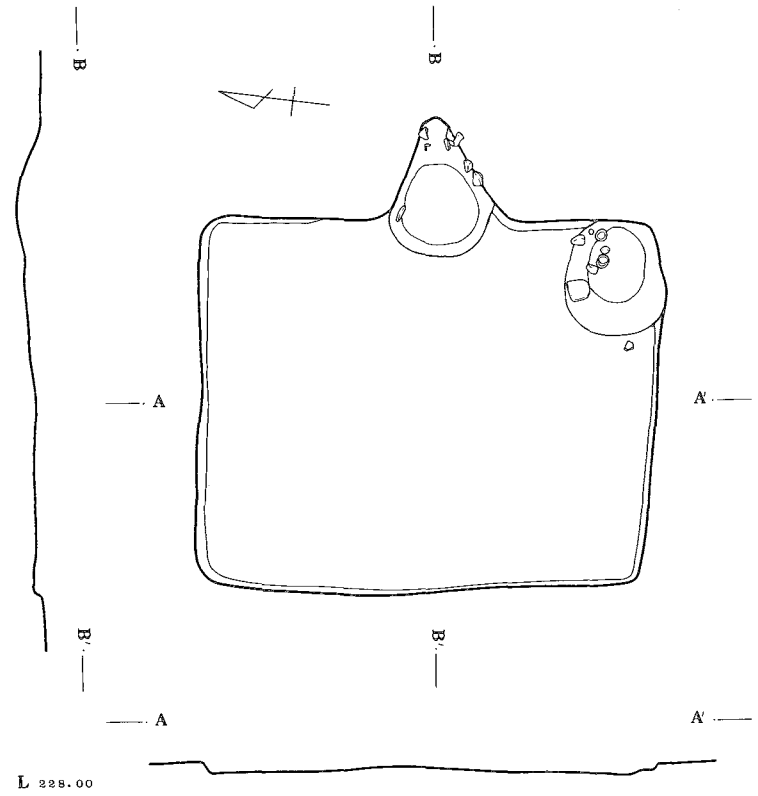



E－49号住居跡

東西4.3m、南北は北壁大半が48号に切られるが残存する西側で2.2mを測り、東西に長軸をもつ長方形の住居。壁高は20cm弱である。

カマドは東壁南寄りに造られる。壁外部への掘り込みは小さく、幅30cmで長さ10cm程であった。内側は径１m程の範囲で焼土が散り、火床もよく焼けていた。袖部の痕跡は検出されなかった。柱穴、貯蔵穴等のピット類も検出されていない。

遺物はカマド周辺床面に土師甕片、須恵坏、南壁付近床面には２つに割れた須恵坏が30cm離れて出土し、やはり床面北側には大小の自然石が４個まとまっていた。覆土からも須恵坏、土師甕片、土師坏片が出土している。

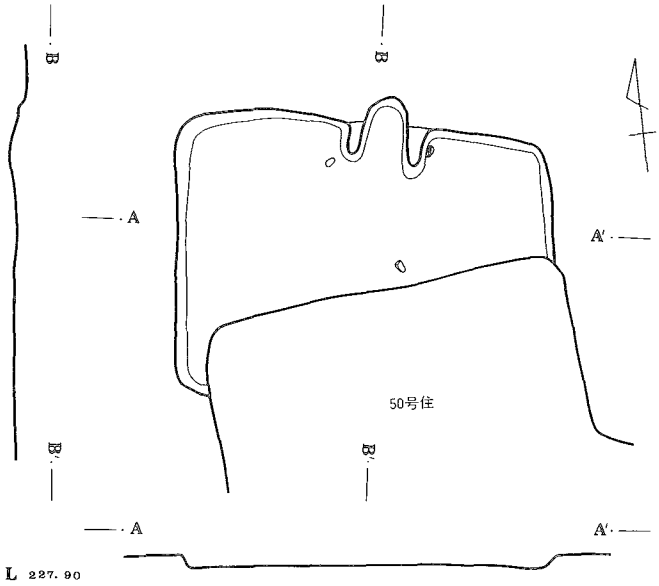



E－50号住居跡

3.9m×4.8mで南北に長軸をもつ長方形。壁高は約10cmを測り、カマド左手は一部掘り込みが途切れている。

カマドは東壁中央に造られる。幅1.3m程より壁外部が徐々に狭くなり、残存する煙道部先端で約90cmを測る。煙道部両側は板状石で構成され、壁外部中程、手前からも板状石の残骸が検出されている。火床は床面より10cm弱程低くなっており、面はよく焼けている。袖部痕は検出されなかった。

南東コーナーは浅いピット状の凹みで遺物が集中する。壁際に位置し、立ち上がりでの径は１m少々で不整円形を呈す。東壁際付近が低く、床面の掘り込み部から約15cmの深さを測り、遺物はカマド寄りの位置から出土した。須恵坏、土師質埦、土師甕片、他に自然石と板状石片等で床面からであった。覆土には土師甕片、須恵埦片、甕片、灰釉埦片等が出土している。

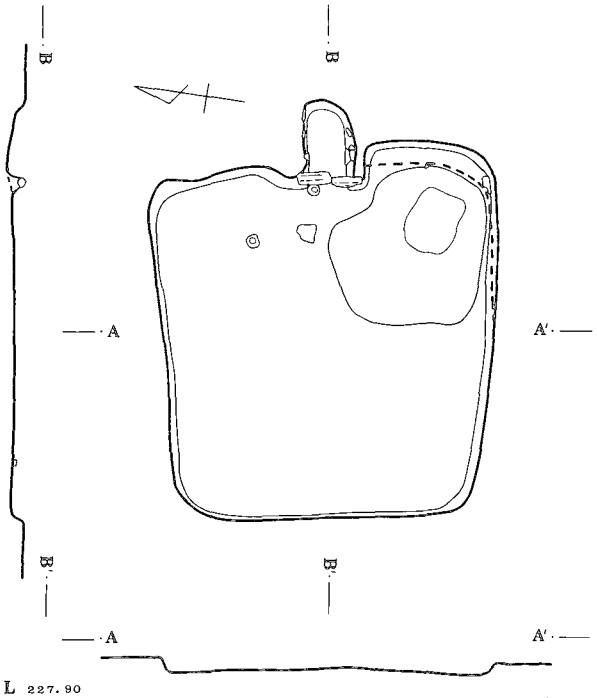



E－51号住居跡

住居南側は50号が切り込むために不明。南北は西壁際で2.9m、東西は4.0mで長軸をこちらにもつ。壁高は約10cm。

カマドは北壁中央に造られる。幅約45cmで壁外部は楕円状に30cm程掘り込みが見られる。石材、袖部の痕跡は無く、袖部の位置は推定による掘り残しである。右手床面に土師甕片が出土した。ピット類は全く検出されない。

遺物は土師甕片の他に覆土より須恵坏片、土師坏片、甕片が少々出土している。



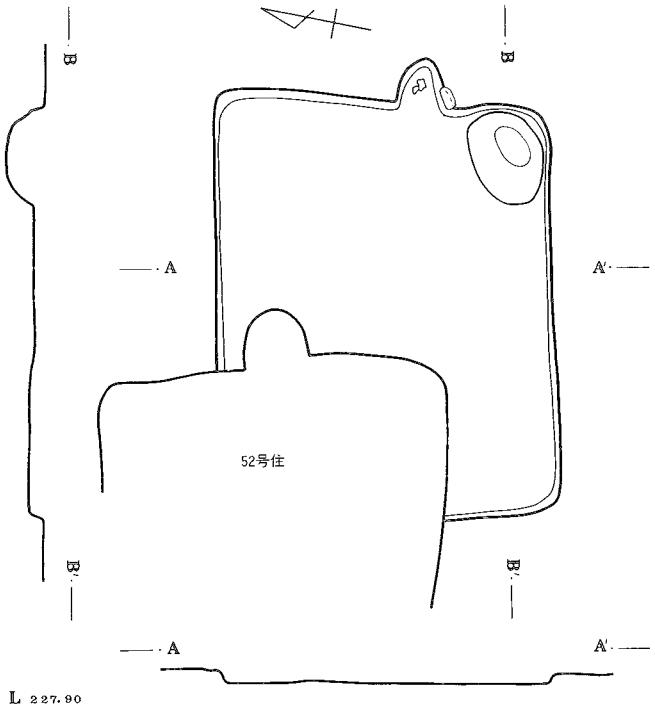

E－52号住居跡

3.7m×3.5mと僅かに東西が長い、南東コーナー部分は53号との重複で壁プランが不明瞭だったために掘りすぎたようである。壁高は10～15cmを測る。

カマドは東壁中央に造られる。幅50cm強、長さ60cmの楕円形掘り込みが残り、側壁には板状石の残骸が検出されている。焚口付近には角柱状の焼けた石が横たわっており、鳥居状に架けられた焚口部の石が崩落したものと思われる。両脇に残した袖状部分は推定としたものでその痕跡があったわけではない。

住居南東部は全体的に凹み、大きく浅いピット状を呈している。径はおよそ1.7m、深さは東側部分が低く約20cmである。カマド寄りの部分では上部に焼土が混じっていた。柱穴、又、明確な貯蔵穴と言えるものは検出されない。

遺物はカマド焚口床面より須恵坏、その左手前床面及び南東凹み部床面より須恵坏片、西側床面に土師坏片、カマドより土師甕片が出土し、覆土からも甕片が少々出土している。



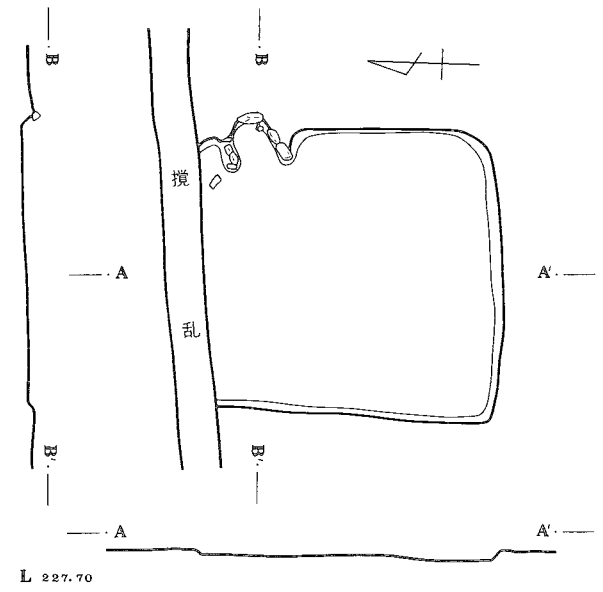

E－53号住居跡

4.3m×3.6mで東西に長軸をもつ。住居北西部分は52号が切り込んでいるため不明。壁高は10～15cmが残る。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅60cm弱で壁外部の中心で長さ50cmを測る。右側壁は自然石が据えられ、壁、火床共に赤褐色によく焼けている。袖部の痕跡は無い。

カマド右手の南東コーナー際に貯蔵穴が検出された。1m×75cmの楕円形で深さは中心で28cmを測る。断面はボウル状を呈している。覆土より須恵大甕片、坏片、土師甕片が出土した。他にピットは存在しなかった。

遺物は貯蔵穴内以外ではカマドよりコの字状口縁土師甕片及び坏片、須恵坏片が、覆土からは土師甕片、須恵坏片、埦片等が出土した。須恵坏片のうち1点には底部外面に墨書が認められた。

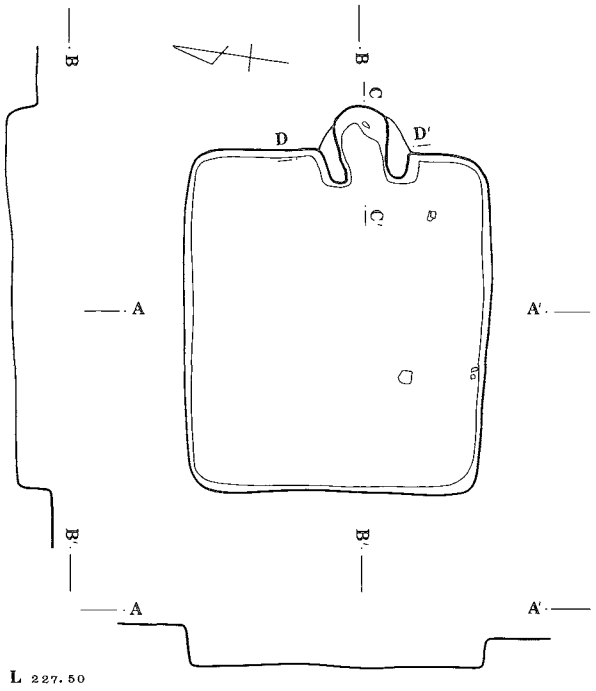



E－54号住居跡

北壁は後世の溝に切られ、確認出来ない。東西3.0m、南北は3.2mが残存し、3.6m以内であることは確か。壁高は南側で10cm強だが北側は5cmにも満たない程度である。

カマドは東壁北寄りに造られる。石組みの痕跡が残り、手前両側の袖にあたる部分は板状及び角柱状の石を、さらに右側壁は丸い自然石を据え、奥壁には崩落したものと思われる板状石が検出された。全体にカマドが北寄り気味だが、これは袖部の石が動いた可能性もあり、壁外の掘り込み自体は曲がってはいない。幅40cm強、長さは約30cmであった。住居に伴うピット類は全く検出されない。

遺物はカマド内とその周辺より少なくとも6個の別個体の羽釜片が出土し、他に土師質埦片が覆土より出土した。




L 227.50

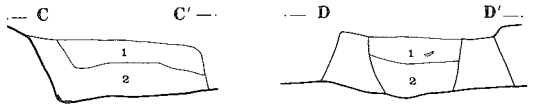
## E－55号住居跡

3.6m×3.2mで東西に長軸をもつ、整った長方形。壁高は30～40cmと良好である。

カマドは東壁中央に造られる。両袖部を掘り残したが、これは推定位置としたもので、実際に残存する掘り込みは幅90cm弱、長さ45cm程の半円状である。壁外部下端は不整形で立ち上がりは急である。火床から焚口にかけては焼土が多く、地山のローム面もよく焼けていた。

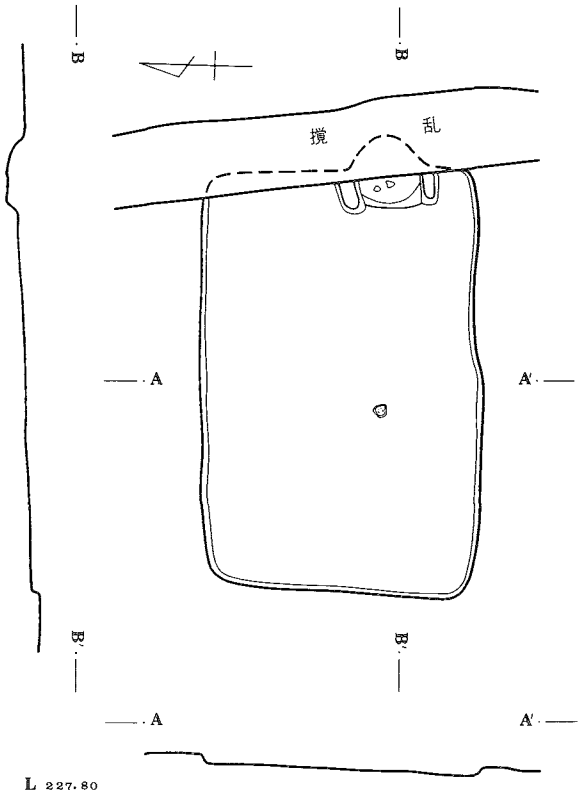
柱穴、貯蔵穴等、ピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド内より土師甕片、カマド手前床面より土師坏片、南壁際覆土より石製紡錘車が出土し、その他覆土からも須恵坏、土師坏、甕片等が出土している。




L 227.30

1層：天井崩落層。粘質土
2層：焼土層。



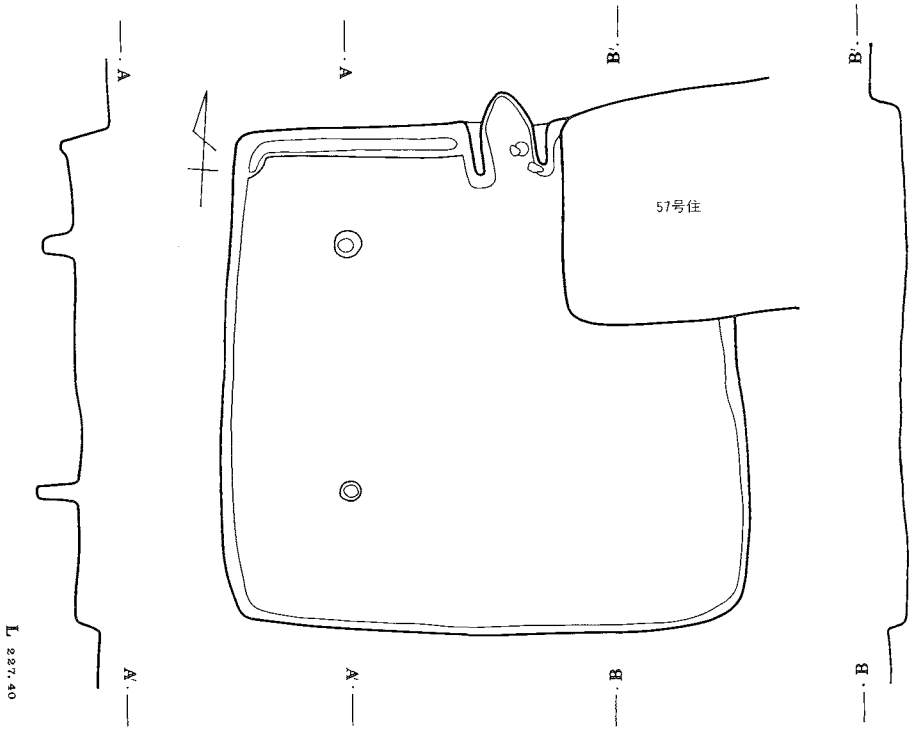

L 227.80

## E－56号住居跡

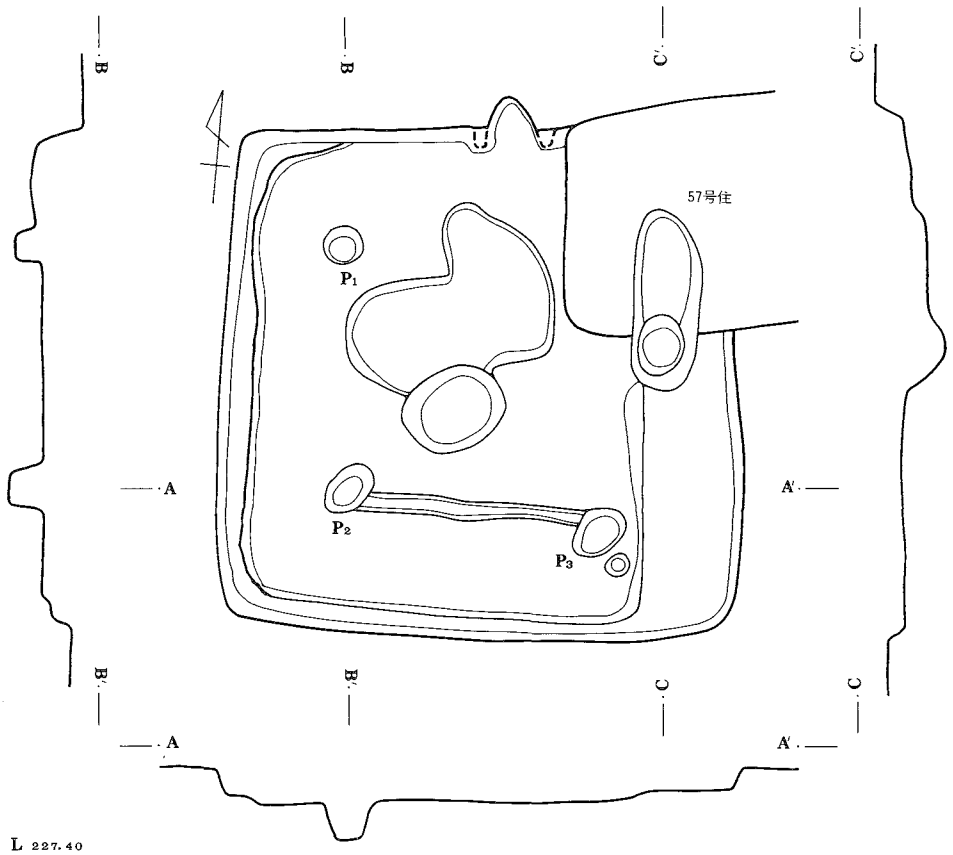
東壁はそっくり後世の溝に切られるために不明であるが、僅かに残る南東コーナーとカマド部より、東西は4.5m前後になると思われる。南北は3.0m、壁高は5～6cmが残るのみである。

カマドは東壁南寄りに造られる。東側が切り込まれているために形状は不明であり、焚口から浅いピット状に掘り込みが少々残っている。袖部は推定位置で明確なものではない。他のピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド内より灰釉壺片、住居床面及び覆土より須恵坏、蓋、コの字状口縁土師甕片等が出土している。




E－58号住居跡床面




E－58号住居跡掘り方

### E－58号住居跡

東西5.5m×南北5.4mとほぼ正方形を呈す。北東コーナーは57号に切り込まれ壁は残らない。壁高は北西部分で約40cm、南東部では約20cmである。

カマドは北壁中央部である。壁部幅50cmで突出長は35cmを測る。袖部の残り具合は明確でなく、少々の焼土と粘質土よりの推定。柱穴は$P_1$と$P_2$の西側2個の確実と思われるが$P_3$は位置のずれと深さが違うことから断定はし難い。各柱穴の径は$P_1$42cm、$P_2$40×58cm、$P_3$48×60cmである。尚、これは掘り方面での数字である。深さは$P_1$25cm、$P_2$38cm、$P_3$18cmを測る。

掘り方はカマドの存在する北壁以外で、プランより20～30cm、東壁では1m内側に、相似形状に一段低い掘り込みがなされている。床面より10cm弱低く、東側の落ち込みはゆるやかである。住居中央には不整形な掘り込みが存在し東側には内側の段を切る状況で長楕円形の掘り込みとさらに内側に円形ピットが検出された。また、$P_2$と$P_3$の間には間仕切り状の溝が幅15cm、深さ10cm弱の断面半円状に掘られている状況であった。尚、柱穴もしくはその可能性のある$P_1$～$P_3$以外の掘り込みについては、伴出遺物はなく、覆土も特徴的なものではなかった。

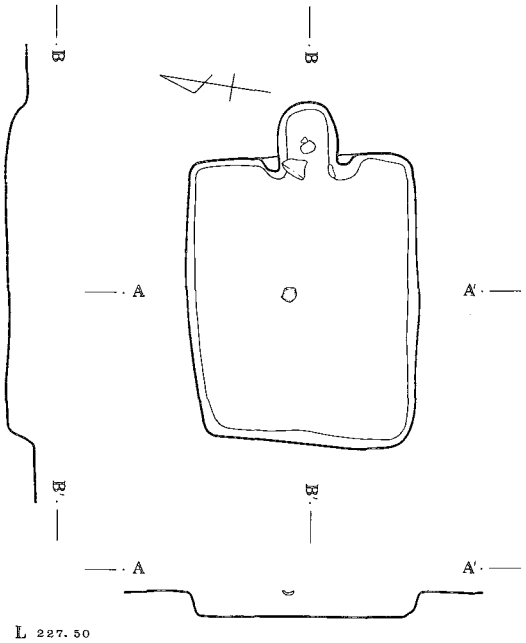
遺物はカマド内より土師坏、甕、覆土より須恵蓋が出土している。

### E－57号住居跡

3.0m×2.4m、壁高25～30cmを残す小型長方形で東西に長軸をもつ。

カマドは東壁中央に造られる。幅60cm強、長さ60cm弱の楕円形掘り込みが残り、住居壁ラインのやや外側に石製支脚が、又、焚口右側に自然石が据えられる。両脇の袖部は推定位置での掘り残しである。内部左側の板状石はよく焼けて脆く、石組みの一部が崩れたものであろう。住居に伴うピット類は全く検出されない。

遺物はカマド内及び覆土より土師甕片、覆土より須恵坏、甕片、蓋片が出土した。

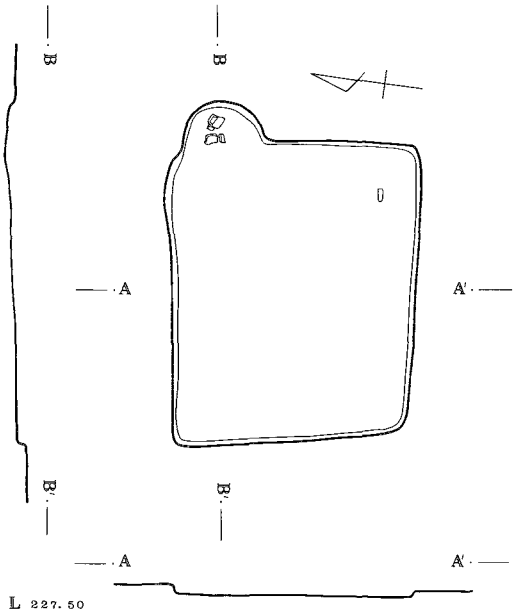


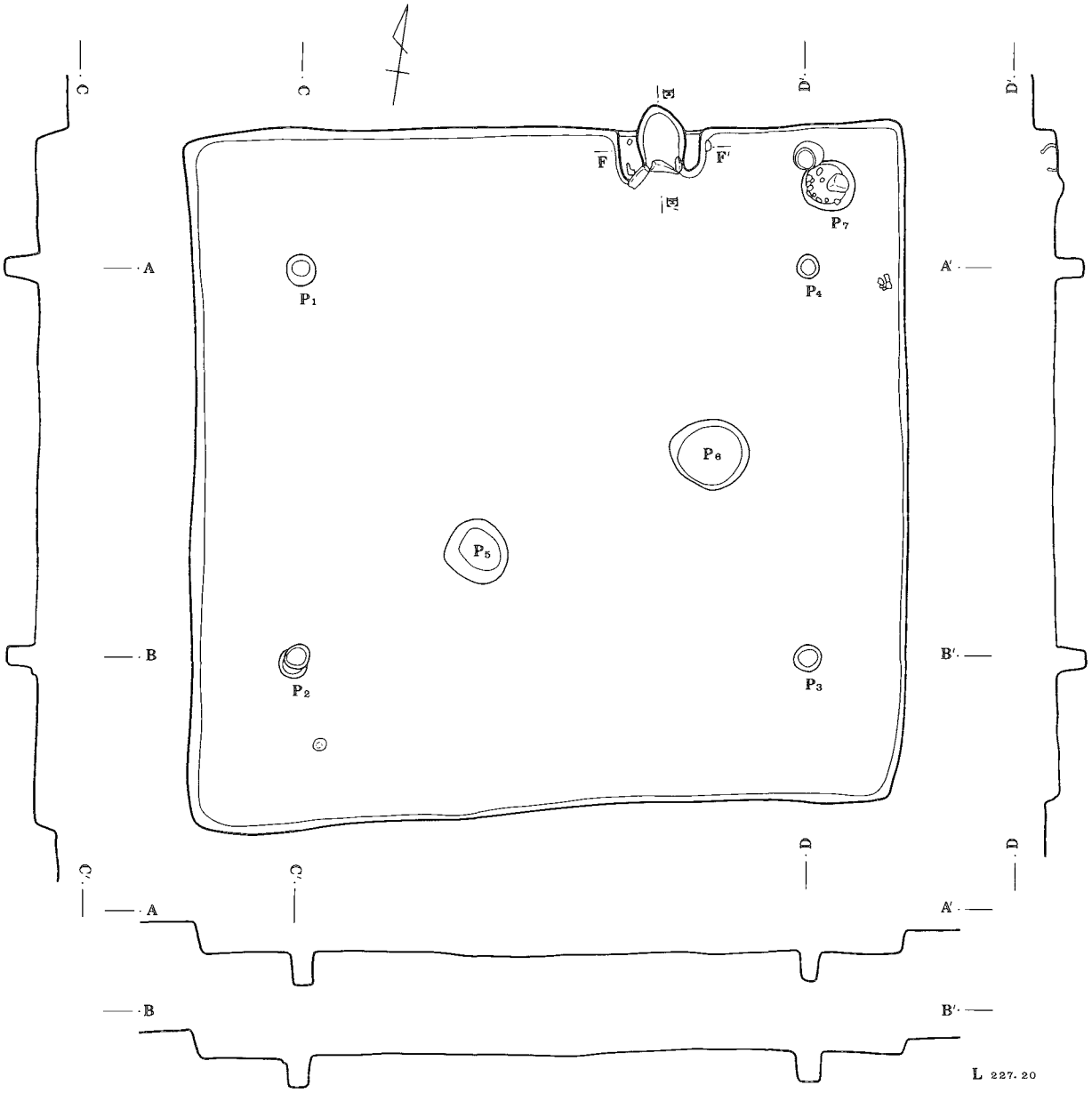

### E－60号住居跡

3.2m×2.6mを測る東西に長軸をもつ長方形住居。残存する壁高は10cmにも満たず、浅い。

カマドは東壁の北際である。幅は約85cmと広く、壁外部は壁より40cm張り出す半円状を呈す。住居内にピット類は全く存在しなかった。

遺物はカマド内及び覆土より羽釜片が数点出土したのみであった。






E－59号住居跡

中央で東西8.6m、南北8.0mを測る大型住居。西側は8.2mと僅かに広がり、各コーナーは角張る。壁高は20～40cmで南東部がやや浅めである。

カマドは北壁東寄りに造られる。幅55cmで壁外へは30cmの掘り込みが残る。両袖部はロームと粘質土からなり、焚口付近には石組みの板状石が、又、鳥居状に架けられていたと思われる板状石が落ちた状態で検出された。

住居内部の掘り込みは、柱穴×4、土坑2、貯蔵穴1が存在した。柱穴の規模は$P_1$径35cm、深さ40cm、$P_2$径30～40cm、深さ32cm、$P_3$径32cm、深さ36cm、$P_4$径27cm、深さ30cm。住居の大きさに比し、全体に小さく、又、位置はコーナーの対角線よりも$P_1$と$P_2$は西、$P_3$と$P_4$は東にある。

貯蔵穴は北東コーナーやや内側に存在する。径約60cmのほぼ正円で深さは40cm。内部には自然礫が検出されたのみで、北肩口の住居床面には、大型の球胴甕上半部が正置された状態で出土した。

住居中央付近の浅い2つのピットについては、その性格は不明である。規模は、$P_5$が径70～80cm弱で深さ16cm、$P_6$が径80～95cmで深さ20cm、底部は共に浅いボウル状である。

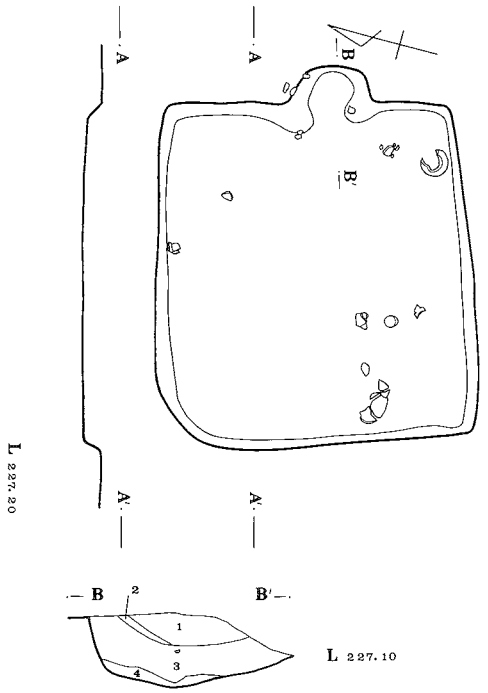
遺物は南西コーナー床面より土師坏、貯蔵穴脇と東壁際床面より土師甕が、又、他に覆土より土師鉢、甕、把手付片口土器、土師坏、須恵甕、台付坏、蓋、長頸壺等、多量の出土であった。そして、これらとは全く時期を異にする羽釜や土師質の坏、埦等が、覆土の上～中位にまとまって出土した。これらの日常什器は59号内部に存在していた別住居に伴うものと考えられよう。

### E－61号住居跡

中央で東西3.6m、南北3.4m、壁高20cmを測る。北西コーナーが弧状を呈す他は比較的しっかりした角をもつ。

カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。幅80cmで壁外部は35cm程幅広で短く残っている。燃焼部を囲むように袖部が弧状に巡り込み、焚口内側には立石をもつ。火床は焚口より徐々に低く、中央で約18cmを測る。貼床層は見られなかった。他、住居に伴うピット類は検出されない。

遺物はカマド内及び南東コーナー床面より土師甕、床面より土師坏、須恵坏、覆土より土師甕片、坏片、須恵坏、蓋片等が出土している。




1層：天井崩落層と住居覆土の混在。
2層：粘質土のみの天井崩落層純層。
3層：焼土層。まばらにロームブロックを含む。
4層：黒灰色の灰層。

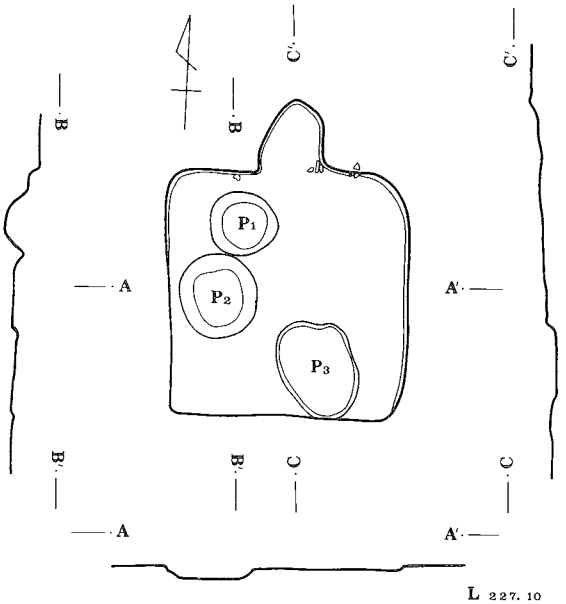
### E－62号住居跡

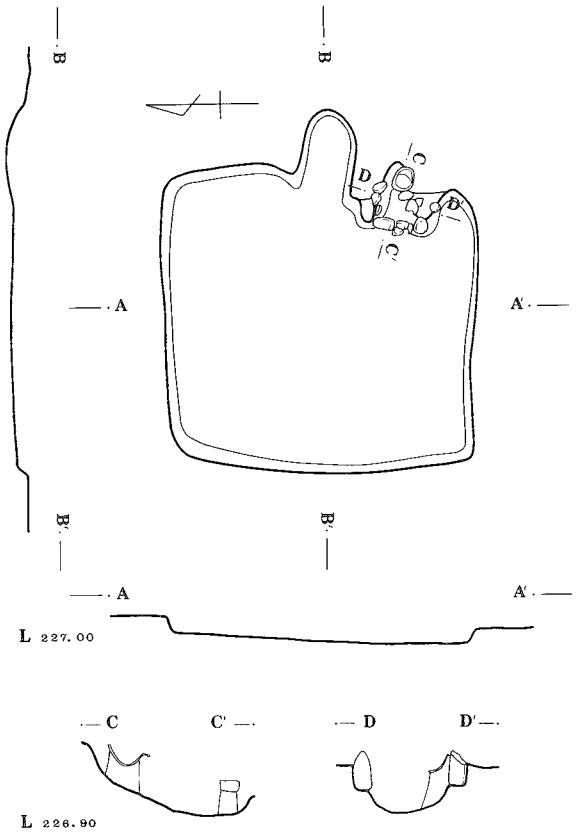
東西2.5m×南北2.6mの、小型正方形を呈す。残存状況は悪く、南、西共壁は僅かに残る覆土でプランを確認した。

カマドは北壁中央に造られる。幅70cm、壁外部は不整楕円形に75cm程掘り込みが残り、右脇には石組み石と思われる焼けた板状石の残骸が検出された。カマド部も残りが悪いため、立ち上がりや側壁の状況は不明である。

住居内はピットが3基検出された。$P_1$は径70cm、深さ22cmで3基中一番深く、断面はボウル状。$P_2$は径88×80cmの僅かな楕円形で深さ10cm、$P_3$は径110×88cmで不整な楕円形を呈し、深さは10cm弱。$P_2$、$P_3$は共に浅く広いピットで$P_1$と形状を異にしている。

遺物は南壁際及びカマド付近より羽釜片、土師質埦片、土師甕片が出土した。






## E－63号住居跡

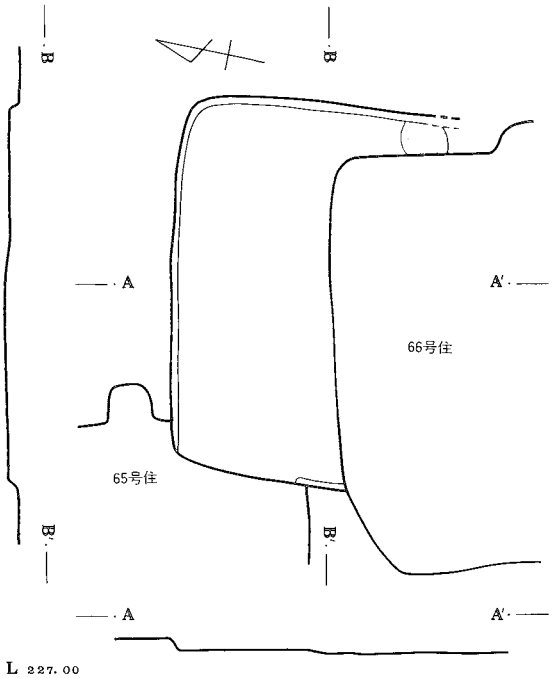
南北3.3m、東西は北側で3.1m、南側で2.9mで北カマドの両側でややくい違っている。壁高は約15cmが残る。

カマドは東壁に2か所検出された。北カマドは幅55cmで楕円状に壁外へ70～80cm掘り込まれ、左袖部分は地山を掘り残したものが少々残る。左側壁中程に板状石の残骸を残している。掘り方は浅い弧状で、貼床層、焼土層がよく確認出来た。一方、南側のカマドは東壁の南寄りに造られ、中心部は北カマドの中心より40cm程住居の内側に引っ込んでいる。胎化した石が横たわる位置が焚口と思われ、煙道に転用した倒置する土師甕端部までは約40cm、幅は35～40cmを測る。左側壁には自然石を3個並べて立て、右側壁は板状石1個と自然石2個を用い、石組みカマドを構成する。焼土がぎっしりと詰まっていたが、明確な貼床層等は確認出来なかった。

北カマド、南カマド共に遺物が伴い、コの字状口縁の土師甕と、南側には須恵坏、皿が右肩口より出土している。煙道とした南カマドの甕以外は原位置としては不自然である。2基のカマド使用の前後関係（または同時？）は断定出来ないが、どちらかが住居廃棄時のものだとすれば、残存状態のよい南カマドと言えるであろう。

住居内にはピット類は検出されていない。

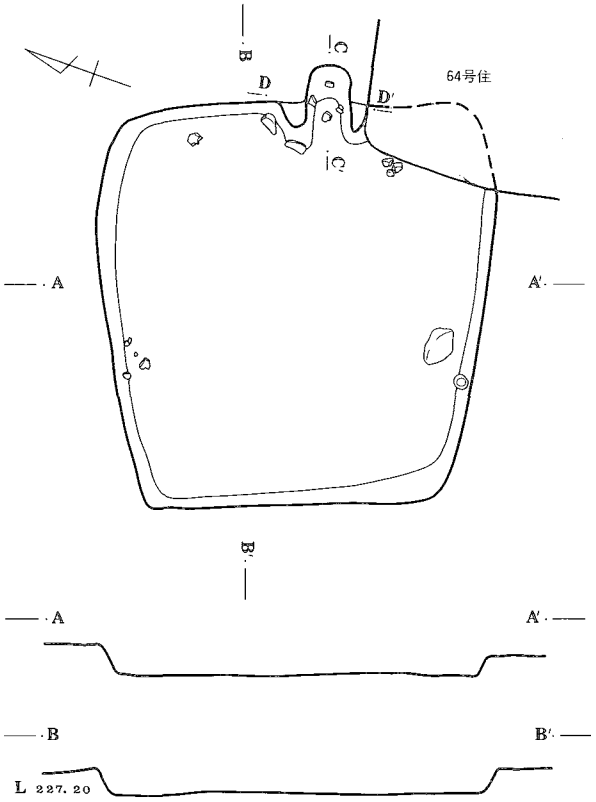
遺物は土師器は甕が4個体のみで、他、須恵坏、皿、埦と、使用痕をもつ自然石が1個出土した。




## E－64号住居跡

65号と66号との重複関係にあり、平面精査によって65→64→66の所見を得ている。住居南側半分は66号に切り込まれ、残存する部分で東西4.1m、南北は東壁際で2.7mだが、66号のカマド部北側で明確なプランが途切れている。

カマドは検出されないが、南東部に焼土痕が認められることから、南東コーナー付近であったと考えられる。住居内にピット類は検出されない。又、遺物も全く出土しなかった。



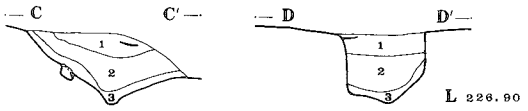

## E－65号住居跡

東西4.2m、南北は西壁際で3.3m、東壁の内側で4.2mと西側が狭い台形状を呈し、壁高は20～30cmを測る。南東コーナーは64号に切られているので存在しない。

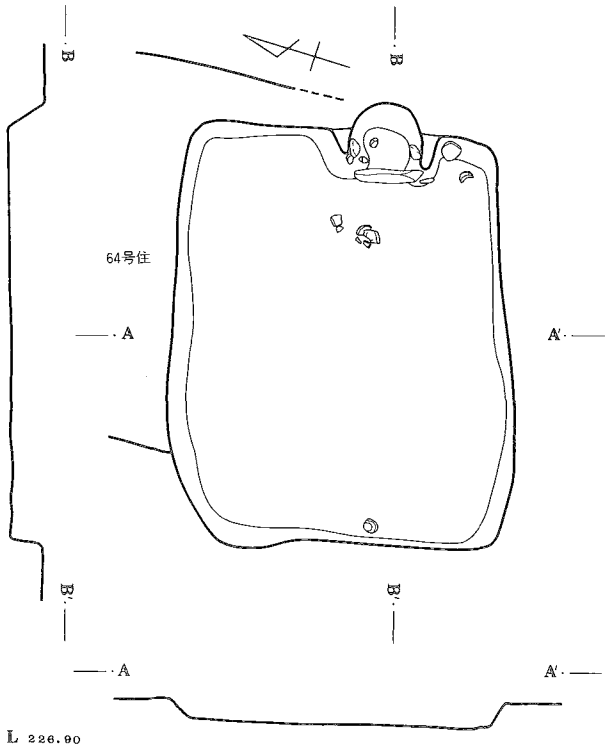
カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。幅40cm強で側壁は直線的に壁外へ40cm程延びる。燃焼部の中心は壁内にあり、推定位置で残した袖部の左側付近には内壁にあったと思われる板状石の破片が数片検出された。

住居内にピット類は全く存在しない。

遺物はカマド内より土師甕片、北壁際床面より須恵蓋及び鉄鏃、南壁際に長径40cmの自然石が、覆土より土師坏、須恵坏、蓋片が出土している。




1層：天井崩落層。黄褐色粘質土。
2層：焼土及び炭化物の混在層。
3層：焼土及び黒色土の混在層。

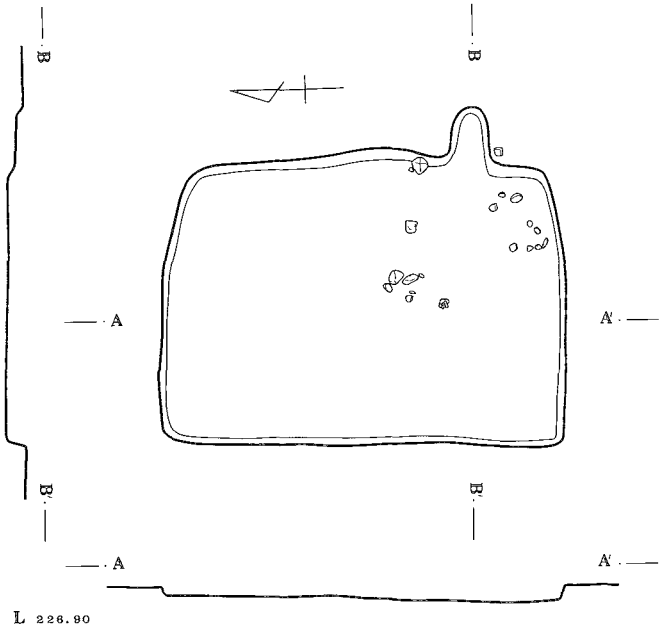



## E－66号住居跡

中央で4.4m×3.6m、壁高30cmを測る東西に長軸をもつ長方形の住居。住居北側は64号との重複で、64号を切り込んでいる。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅70cmで壁外には30cm弱の長さで半円状の掘り込みが残る。壁内は袖部が両側に残り、側壁には板状石の残骸が少々、焚口位置には鳥居状に架けられていたと思われる焚口の長い板状石が横立ち状態で検出された。柱穴等のピット類は全く検出されなかった。

遺物は、カマド右手の南東コーナー床面より土師鉢、甕口縁片、カマド内より土師甕片、覆土より土師坏、須恵坏、蓋等が出土した。

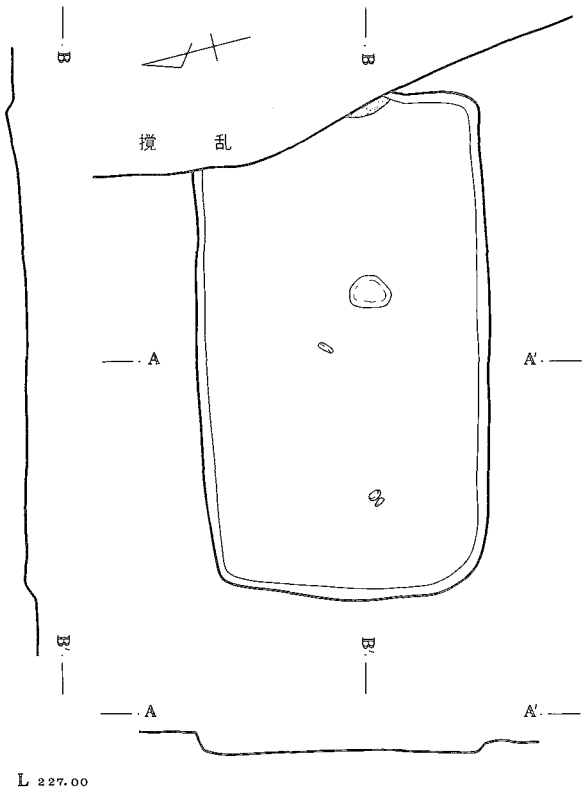



E－67号住居跡

東西3.1m、南北は西壁際で4.2mで東半分は少々すぼまって東壁では3.8mとなる。壁高は10～18cm程。

カマドは東壁南寄りにつく。壁部幅45cmで細長い壁外部は55cmを測る。全体に住居床面をやや下げ過ぎたが、火床面レベルとフラットであったと思われる。火床面は比較的平坦であり、袖部や組石の痕跡は全く無い。

カマド右手の南東コーナーには土器がまとまり、中央付近には大きめの角ばった自然石が4個程検出された。土器は床面レベルのものと思われ、土師片及び羽釜片、須恵坏等が出土した。住居内部のピット類は全く検出されなかった。

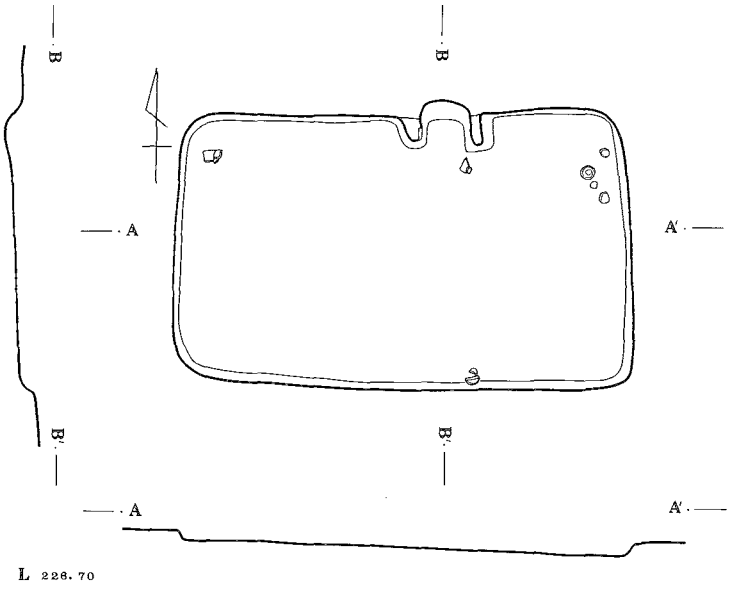



E－68号住居跡

東壁中程から北側は攪乱を受けており、残存する部分で東西5.3m、南北3.1mを測る。東西に長軸をもち、壁高は10～20cmの残り。所々に地山礫が顔を出している中で、中央やや東寄りには長径40cm強の大きな扁平石が所々剝離した状態で検出された。これは他の地山礫とは区別されよう。

カマドは東壁にその痕跡を残す。大半は攪乱を受けており、規模や形状は不明。焼土の検出があったのみである。

遺物はカマド付近の覆土より、羽釜口縁片1片のみ。

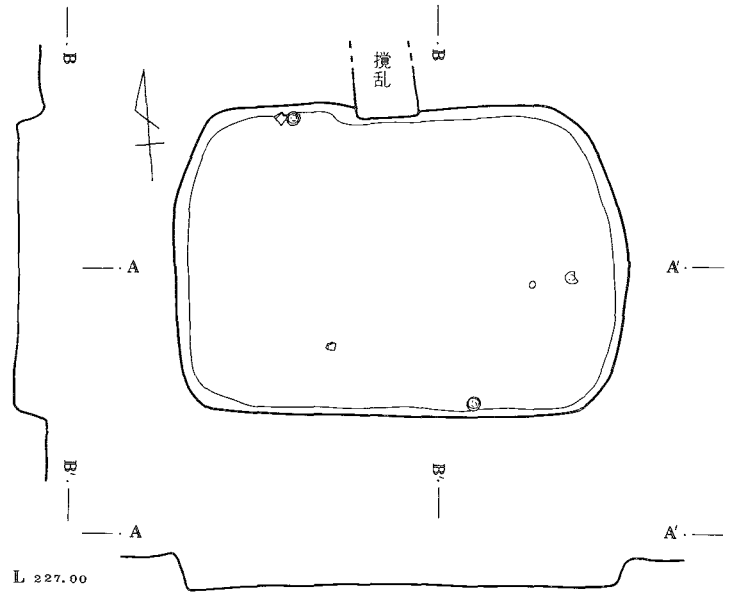



E－69号住居跡

4.9m×2.9m、壁高10～15cmを残す長方形を呈し、東西に長軸をもつ。形状は整っている。

カマドは北壁中央やや東寄りに造られ、幅50cm、壁外部は半円状に16cm張り出している。明確な袖部は検出されないが、焼土及び粘質土は壁内側を主に堆積しており、これを燃焼部の中心として推定位置に袖部を残した。左袖推定部に胎化した板状石が検出された他は石材の痕跡はない。ピット類も住居内には存在しなかった。

遺物はカマド手前床面より土師甕片、覆土より土師甕片坏、須恵坏が出土した。



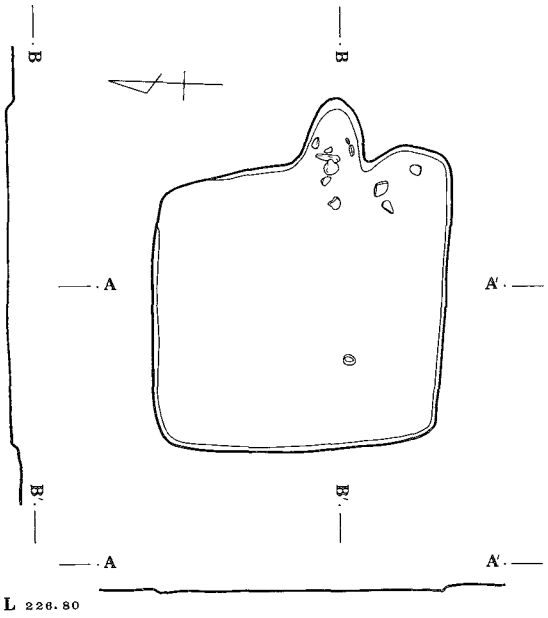

E－71号住居跡

東西両壁中央が張る形状で、コーナーは弧状に丸みをもつ。中央で東西4.8m、南北3.2m、壁高30～35cmを測り、長軸を東西にもつ。

カマドは北壁中央にその痕跡を残す。溝状の攪乱のために掘り込み部分は全く残らないが、攪乱が床面まで達していないので、火床部の焼土が確認された。また、左袖部にあたる所は僅かに壁内に突出し、掘り残してある。右袖部は明確ではない。火床は住居内部床面とほぼフラットであり、掘り込み部は煙道へと徐々に立ち上がると思われる。

住居内部にはピット類は全く検出されなかった。

遺物は北壁際、東側内側床面より須恵坏、南壁際より土師坏、他、覆土より土師甕片、鉢片、坏片等が出土した。



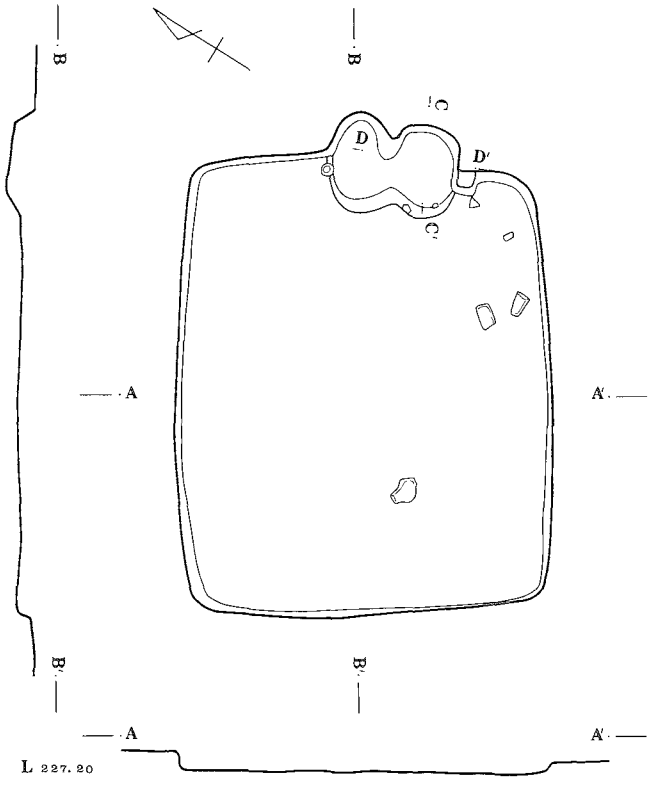

### E－70号住居跡

中央で3.1m×3.0mを測り、南東コーナー部が東に大きく張り出し、やや平行四辺形状を呈す。残存状態は悪く、壁高は5cm内外。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅60cm、壁外へ60cmの掘り込みを残す。両側壁の内側中程に板状石の残骸があり、壁に貼られていた石材の崩れたものか。焚口付近にも同様の石が検出された。

住居内にはピット類は全く検出されない。

遺物はカマド手前、南東コーナー及び中央西側の床面より土師質埦、須恵埦、他に土師甕小片が少々出土した。



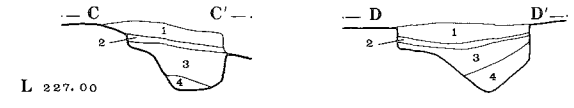

### E－72号住居跡

中央で4.9m×4.0m、壁高15～20cmを測る整った長方形住居で、東西に長軸をもつ。

カマドは東壁中央に2か所検出された。南側、北側の順で調査を進めたところ、南側には壁内両側に粘質土による短い袖部が確認され、北側カマドは右側壁が南側のカマドに切り込まれていることが分かった。よってこのカマドは北→南への造り替えと思われる。両カマド共、貼床とその上部の火床面、焼土層が確認出来た。特に南側カマドは焚口よりも中央右側が20cm程も深く掘られ、ロームと褐色土を埋め戻して焚口とフラットな火床面としている。

住居内にピット類は全く検出されなかった。

遺物は北カマド左脇床面に土師坏、南カマド手前床面に土師甕片数片と、覆土より土師坏、須恵坏が数点出土している。



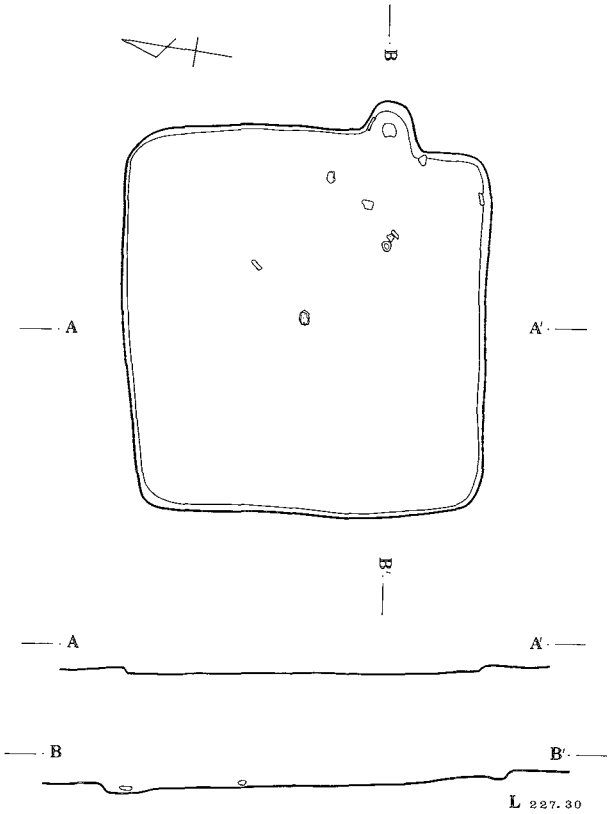

1層：焼土及び褐色土の混在層。
2層：灰層。
3層：ロームと褐色土の混在層。
4層：ロームブロック主体層。3層と共に貼床を形成。

### E－73号住居跡

中央で4.1m×3.8m、壁高10cm弱を測り、僅かに東西が長い。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅50cmで壁外部は約30cmの長さだが、カマドの両側の壁に若干のずれがある。左側壁手前には板状石の残骸があり、中央には焼痕のない自然石があるが、支脚とも考え難い。袖部痕は全く認められなかった。柱穴等ピット類も全く検出されない。

遺物はカマド手前から住居中央にかけて数片であり、床面より土師甕片、須恵埦片等が出土した。



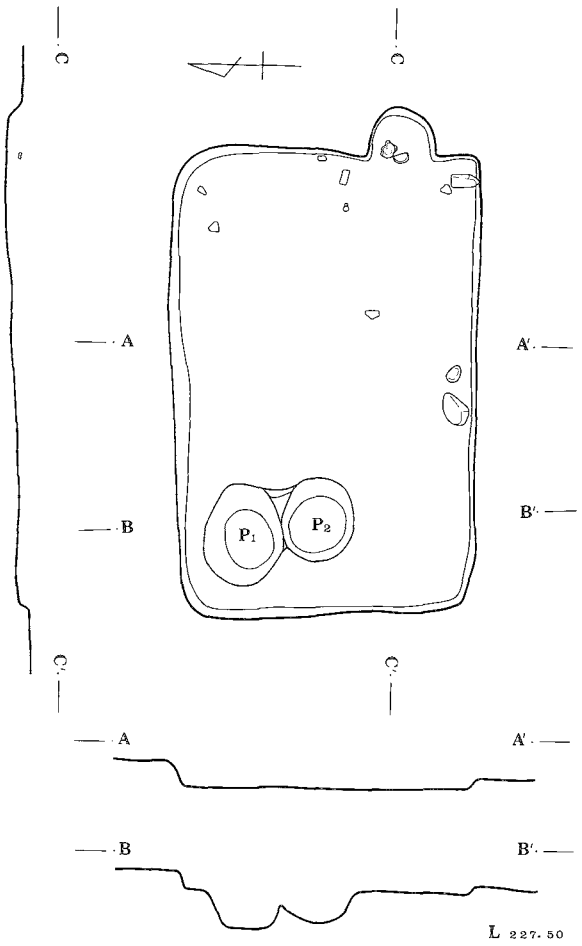

### E－74号住居跡

4.9m×3.2m、壁高10～25cmの東西に長軸をもつ長方形住居。北東コーナーは大きく弧状に張り、南東コーナーはきちんと角がとられる。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅70cmで壁外部は長さ50cmの半円状を呈している。カマド左手前床面の板状石と南東コーナーの大き目の板状石は共によく焼けており、カマド石組材であろうか。袖部痕は無い。

住居北西部には2基のピットが並んで存在する。$P_1$は径105×85cmの楕円形で深さは40cm、底面は少々平坦である。$P_2$は径85cm、深さ30cmで断面はボウル状。遺物の出土はない。

遺物はカマド内に土師甕片、覆土より須恵坏片、埦片、広口壺蓋片、須恵超小型壺が、また、南壁際中央床面からは長径40cm弱の扁平な自然石と20cm程の自然石が出土した。

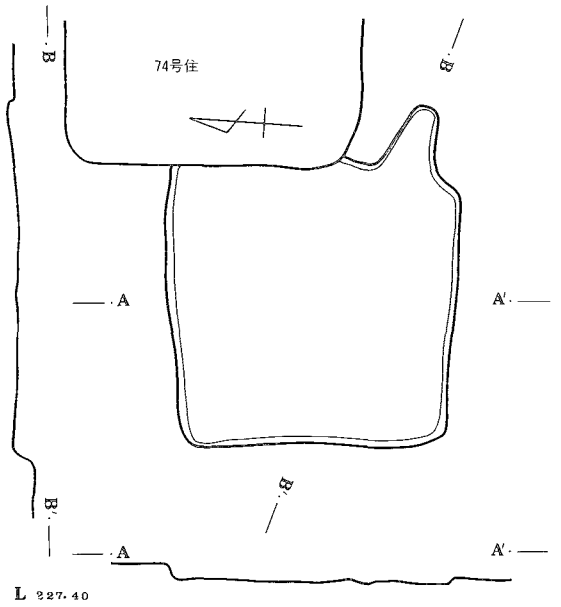


### E－75号住居跡

中央で東西3.0m、南北3.0mで、東側がやや広がる。東壁北側は74号に切り込まれるため、壁は確認出来ない。

カマドは東壁南寄りに造られる。東壁自体が南側に傾いているのでカマドも同様に少々南を向く。幅70cmで壁外へ細長く70cm突出する。石材、袖部痕は検出出来ない。ピット類も全く存在しない。

遺物は覆土より土師甕片、須恵埦片、坏片が出土した。

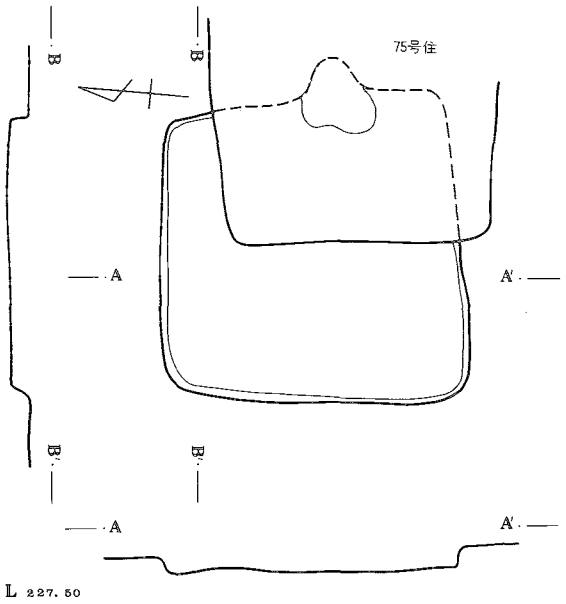


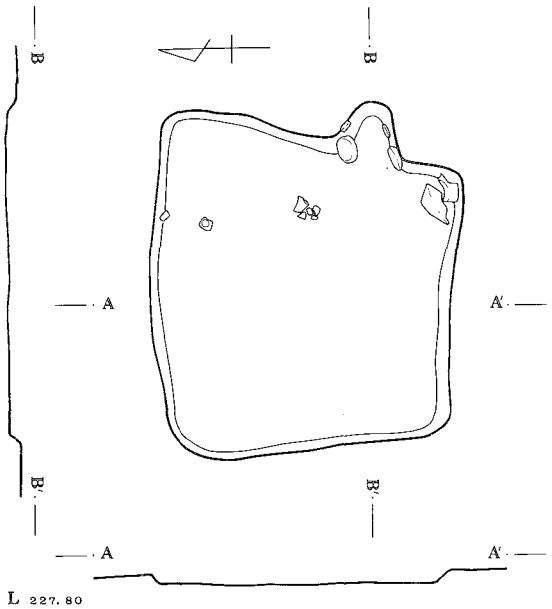

### E－76号住居跡

住居東部は75号に切られており、残存する北壁側で東西2.9m、南北は中央で3.2m、壁高20cmを測る。少々不整な正方形。

カマドは東壁中央付近と思われる。焼土痕が認められ、東壁推定ラインより外側に散らばっていた。石材等の痕跡は全く残っていない。ピット類も検出されなかった。

遺物は覆土よりロクロナデの須恵甕片、埦片、坏片、土師甕小片が僅かである。



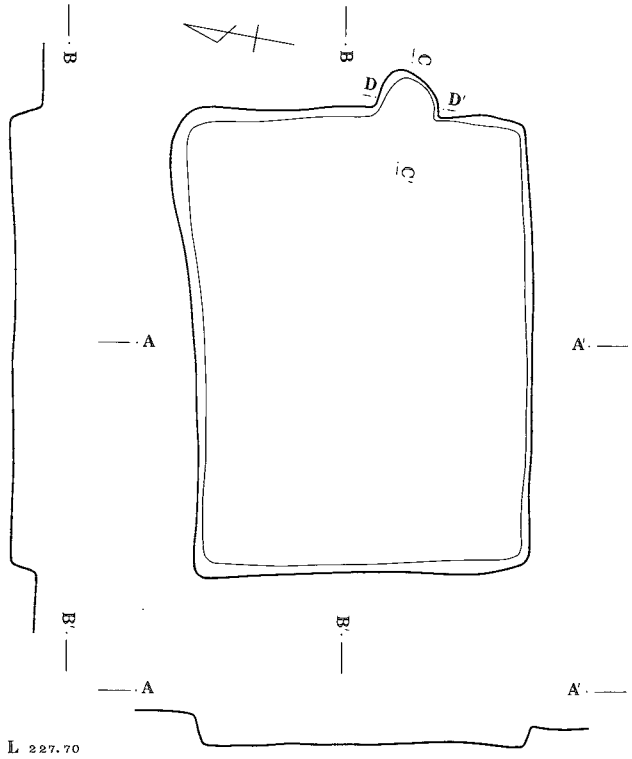

### E－78号住居跡

住居北側が広い台形状を呈し、北東部は重複する79号を切り込む。中央で3.3m×3.2m、壁高は10cm強である。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅70cmで壁外への掘り込みは長さ50cm。焚口両脇に丸みのある自然石、そしてその奥の両側壁は板状石が逆ハの字状に据えられ、原位置を保っていた。側壁石はよく焼けて大分脆化した状態である。

住居南東コーナーには大きな板状石片が２枚検出された。貯蔵穴の蓋石かと思われたが、下部にピットは確認されなかった。

遺物はカマド手前床面より須恵甕片、覆土より土師甕片、須恵坏等が出土した。

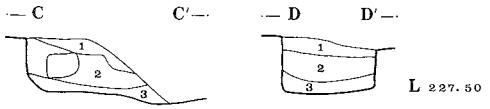



## E－77号住居跡

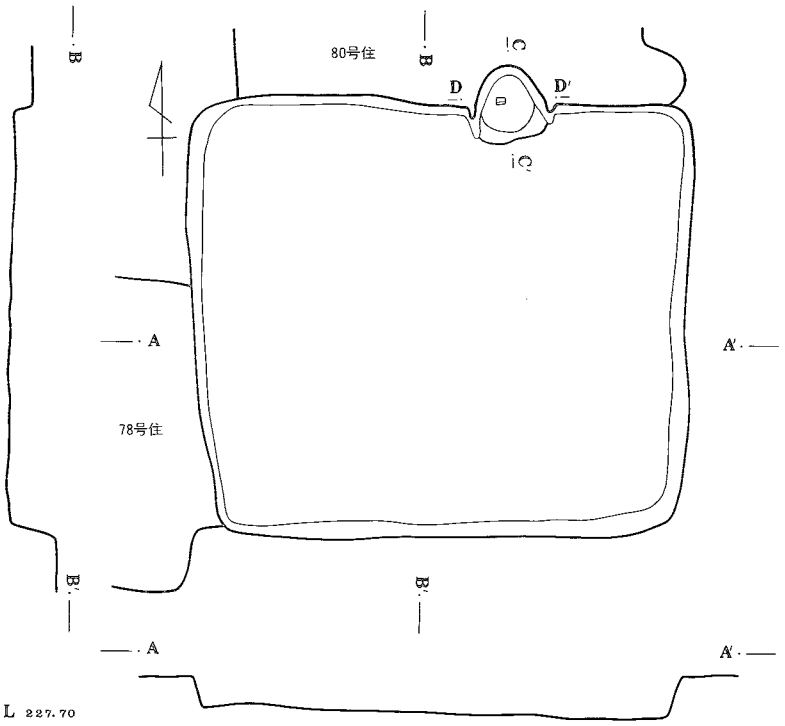
中央で東西4.9m×南北3.6mを測る長方形住居。北東コーナーはやや張り出し気味である。壁高は北壁で30cm、南壁で20cm。

カマドは東壁南寄りの位置である。幅65cm、長さ45cmを残す半円状の掘り込み、火床面は平坦で両側壁は急角度で立ち上がる。厚さ5cmの黒色土の貼床層が火床面をつくる。住居内にピット類は全く検出されなかった。

遺物は覆土より土師甕片、須恵甕片、坏片が少量と、鉄製の刀子片が出土した。



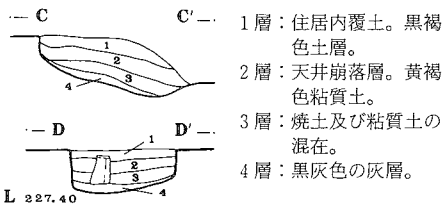

1層：住居内覆土。黒色土層。
2層：天井崩落層。黄褐色粘質土。
3層：貼床層。黒色土で埋め戻す。




## E－79号住居跡

中央で5.3m×4.5m、壁高50cmを測る、やや東西に長い長方形住居。各壁は直線的でコーナーもきっちりしており、形状は整っている。北壁及び西壁はそれぞれ80号、78号に切られるが、本住居の掘り込みが深いためにプランははっきりと確認出来た。

カマドは北壁中央やや東寄りである。幅75cmで半円状に40cm程壁外へ掘り込みが残る。両脇には地山のロームを掘り残した袖部痕が認められた。カマドの地山は焚口より低いピット状である。向かって左側は一段と低くなっており、他は平坦。地山直上は黒色の灰層が積もり、中央やや左手には角柱状の石製支脚を置い

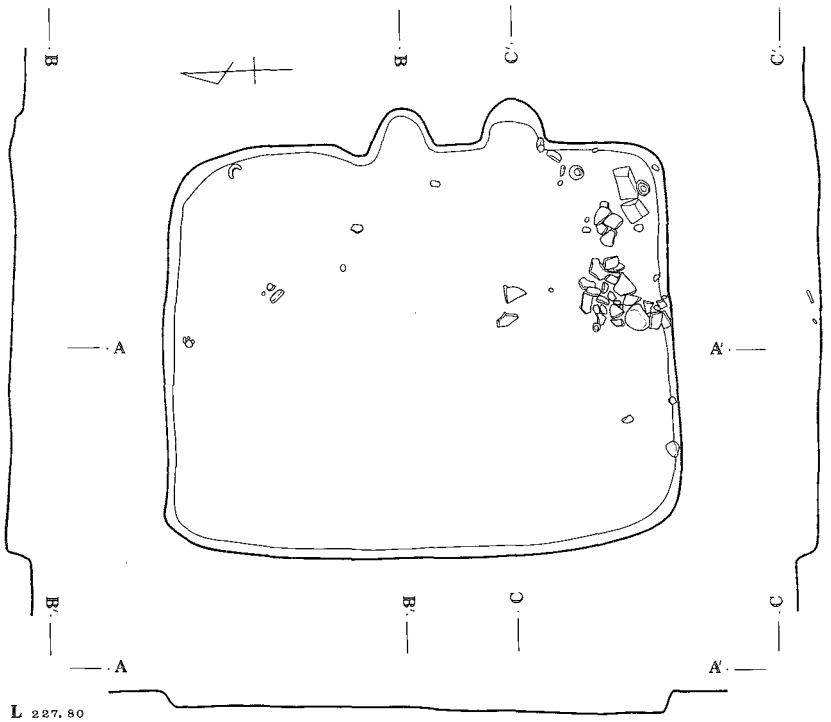



1層：住居内覆土。黒褐色土層。
2層：天井崩落層。黄褐色粘質土。
3層：焼土及び粘質土の混在。
4層：黒灰色の灰層。

ている。

住居内にはピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマドより土師甕片、覆土より土師甕片、坏片、須恵坏片、蓋片等が出土した。



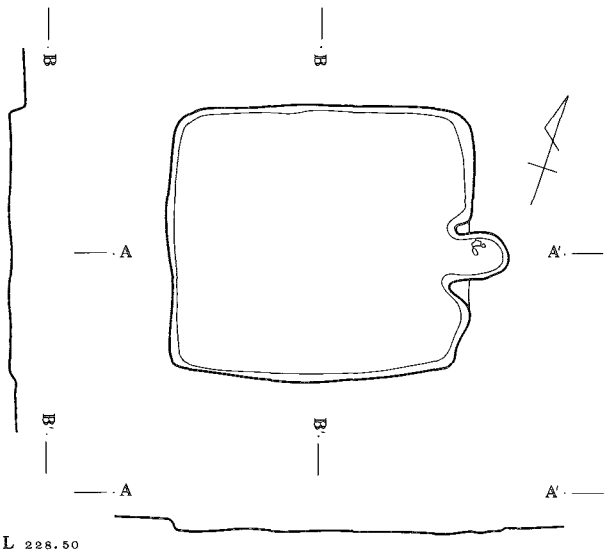

### E－80号住居跡

中央で5.3m×4.3m、壁高20cmを測る、南北に長い長方形の住居。住居南側は重複する79号の北壁を切り込み、79→80の関係を示す。

カマドは東壁に2基検出された。北カマドは幅66cm、長さ40cmの半円状で、地山は僅かなピット状を呈す。石材、袖部の痕跡は無い。南カマドは幅70cm、長さ40cm強、形状は北カマドとよく似た半円状であり、燃焼部は焚口より下がらずに徐々に焼道へと立ち上がる。右脇に脆化した板状石片が数片残り、石組みの石材を示す。袖部痕は無いが、北、南カマド共、壁外部は既に立ち上がりの斜面となっており、壁内70～80cm程まで焼土痕もあることから、袖部をもち、燃焼部の中心は壁～内部にあったと考えられる。なお、残存状況や形態がほとんど同じなので2基の新旧関係は不明、もしくは並列して機能していた可能性もある。

ピット類は全く検出されなかった。

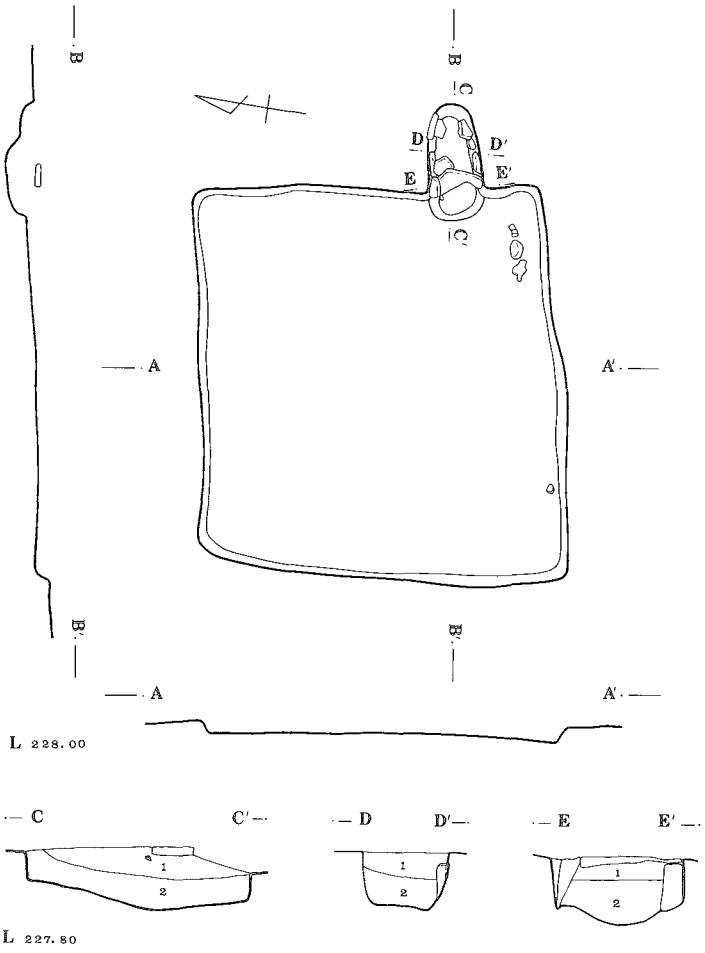
遺物は床面より須恵壺、埦、覆土よりバラバラになった須恵大甕、須恵埦、坏、灰釉皿片等多数、又、南東コーナー床面には長さ60cm近くのよく焼けた角柱石が検出され、これはカマド焚口を構成していたものと思われる。




### E－83号住居跡

東西3.2m×南北2.9m、壁高10～15cmを測る小型の住居。カマドは東壁中央に造られ、幅45cm、壁外部は長さ40cm程の半円状を呈す。地山を掘り残した袖部痕が両脇に残存し、火床は焚口とほぼフラットで徐々に煙道へと立ち上がる。

遺物はカマド内に土師甕片が数片のみであった。



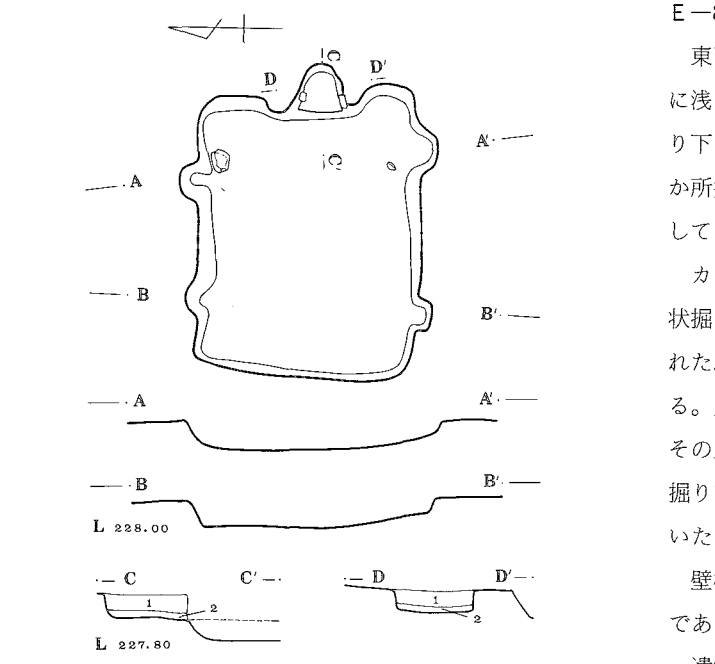

## E－81号住居跡

中央で東西4.1m×南北3.9m、壁高10～15cmを測り、床面は壁際よりやや弧状に高まりを見せる。また、北東コーナーと南西コーナーが張り出し気味で、全体に少々ひし形状と言える。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅60cm弱、壁外部は楕円状に長く90cmを測る。両側壁は板状石を並べ、焚口には同質の石材を横架し、鳥居状の焚口を構成している。焚口から壁外部までは細長いピット状の掘り込みで、側壁の石材を並べた後に厚さ15cm程の貼床で埋め戻し、火床として使用している。火床面と焚口石との距離は短く、この石は直下に落下したと思われる。同質の石片は南東コーナー床面にも検出され、自然石の破片も同じ所に見られた。住居内にピット類は全く検出されなかった。

遺物は南東コーナーより土師坏片、須恵坏片、覆土より完成期のコの字状口縁土師甕片、須恵壺片等が出土した。

1層：天井崩落層が主体で粘質土中に少々焼土を含む。
2層：貼床層。ロームと黒色土の混在。




## E－82号住居跡

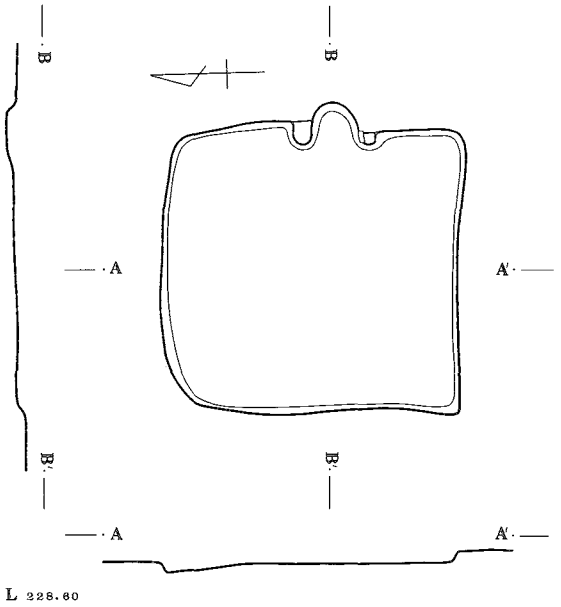
東西2.9m、南北2.4m、壁高は10～30cmで住居西部が徐々に浅い。明確な床面（貼床）が見当らず、掘り方面まで掘り下げた。南北西壁にかかる壁柱穴をもち、柱穴半分が4か所突出する。また南東コーナーも東壁側が半円状に突出している。

カマドは東壁中央に造られる。幅50cm、長さ45cmの半円状掘り込みが残り、焚口付近両脇に板状石の残骸が検出された。その外側は地山を掘り残し、袖部状の突出が見られる。火床面は地山のローム面と思われ、直上より灰層が、その上に焼土層が検出された。カマド火床面と焚口部分の掘り方面とのギャップ10cmは貼床をして生活面をつくっていたと思われる。

壁柱穴は掘り方面より深くはならない。径は35～50cm程である。ピットは他には検出されない。

遺物はカマドより土師甕片、須恵坏片の他、覆土より須恵大甕片が出土した。

1層：粘質土と焼土の混在層。
2層：灰層。黒灰色でパラつく。



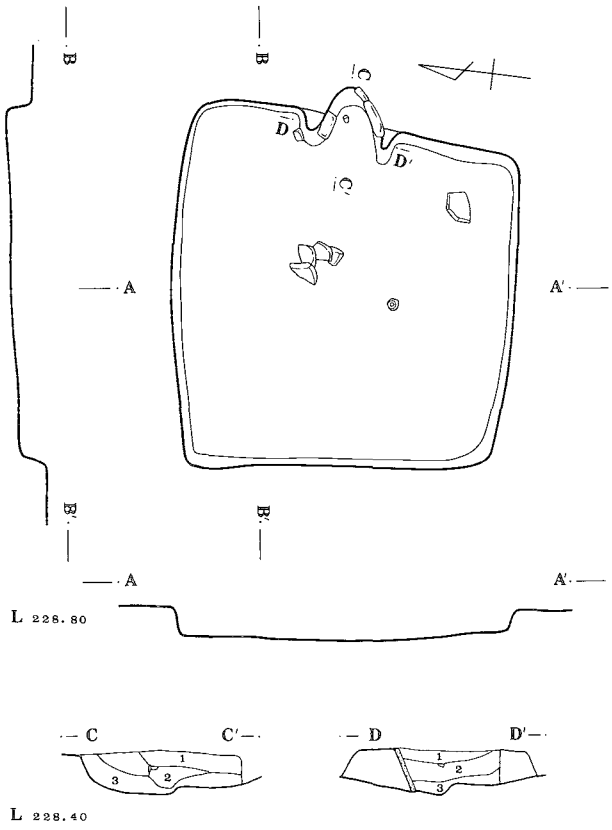

## E－84号住居跡

3.1m×3.1m、壁高10cmを測る。北壁は弧状に張り出し、南壁は内反り気味になっている。

カマドは東壁中央に造られる。幅50cm、長さ35cmの半円状で、地山のロームを掘り残した両袖部痕と右袖部には板状石の残骸が残っている。火床は焚口より7～8cm徐々に低く掘られる。住居内部にピットは存在しない。

遺物は覆土より須恵坏片1点のみであった。

住居の規模、形状等、83号と酷似する。




## E－85号住居跡

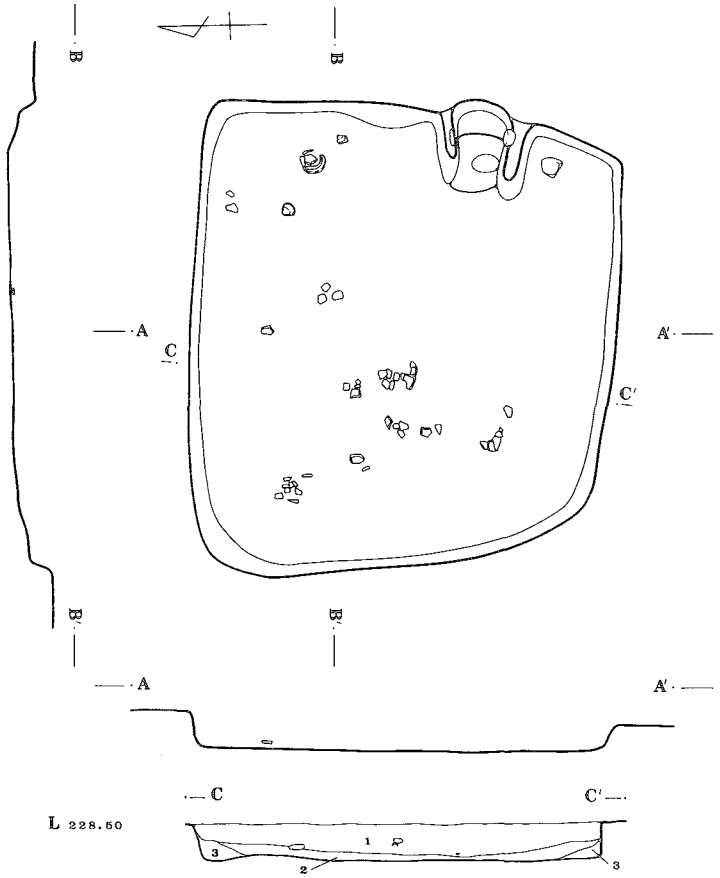
平面形台形で、南壁3.2m、北壁3.9m、南北で3.6mを測る。壁高25～30cmで残存は比較的良好と言える。

カマドは東壁中央やや北寄りである。幅60cmで三角状の壁外部は壁より35cmを測る。両側壁には各1枚ずつの板状石を据えており、左側壁奥は残存しない。焚口両脇は地山掘り残しの袖部が短く存在している。火床は焚口よりゆるやかに10cm程掘り凹めた地山上に褐色土を奥壁まで埋め戻して使用している。

住居内にピット類は存在しなかった。

住居床面中央及び南東コーナー辺りからは、カマド側壁に使用したものと同様の板状石が出土した。中央には4個が連なって折り重なり、うち1個は自然石、南東コーナーは板状石1個である。遺物は、これら石の他、中央床面より須恵埦、カマドより羽釜片、覆土より羽釜片、須恵埦片、坏片、灰釉埦片が出土した。

1層：天井崩落層。黄褐色でパラつく土層。
2層：焼土層。
3層：貼床層。褐色土で埋め戻す。



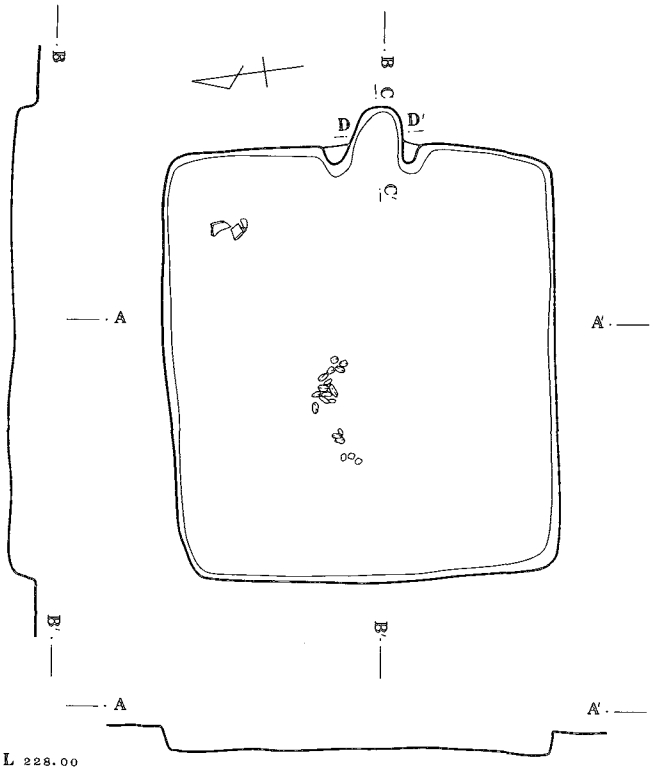

## E－86号住居跡

中央で東西4.9m×南北4.5m、南西コーナーは角をもたずに内傾に回り込み不整形。壁高は30cm強を測る。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅60cm、壁外へは15cm程出るのみで、燃焼部を壁内側にもつカマドである。地山掘り残しの袖部を両脇にもち、袖部中央側壁には両側に板状石が残存していた。地山は焚口より５～６cm低くなだらかに掘り、その上に黒色土を埋め戻して火床とする。煙道への立ち上がりは急である。住居内部にはピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマドより土師甕片、床面及び覆土より主に球胴甕の破片が多数と、他に須恵甕片、壺片、坏片等が出土した。

1層：軽石微粒子をまばらに含む暗褐色砂層。
2層：ローム微粒子を少々含む明褐色土層。
3層：住居壁崩落層。ローム主体で黒色土が混じる。

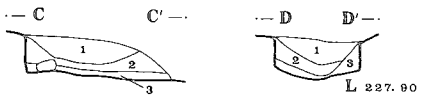



## E－87号住居跡

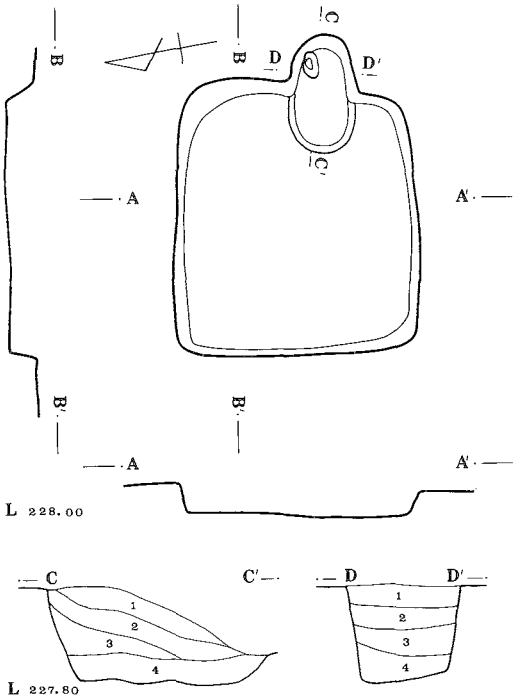
東西4.6m、南北4.1m、壁高25～30cm弱の整った長方形の住居。

カマドは東壁中央に造られる。幅45cm、長さ35cmの半円状掘り込みで、カマド両脇にローム掘り残しの袖部が検出された。火床は貼床で、地山に２～３cmのロームを埋め戻す。内部は平坦で、煙道への立ち上がりは急な掘り方であった。住居内部にピット類は存在しない。

遺物は覆土より土師甕片、坏が数点と、住居床面中央より「こも石」状礫が14個まとまって出土した。




1層：天井崩落層。暗灰色粘質土で少々焼土を含む。
2層：焼土及びロームの混在層。
3層：貼床層。焼土を含むロームを埋め戻る。




1層：黒色土層。
2層：天井崩落層。黄褐色粘質土からなる。
3層：焼土及び粘質土の混在層。
4層：貼床層。黒色土とローム混在。

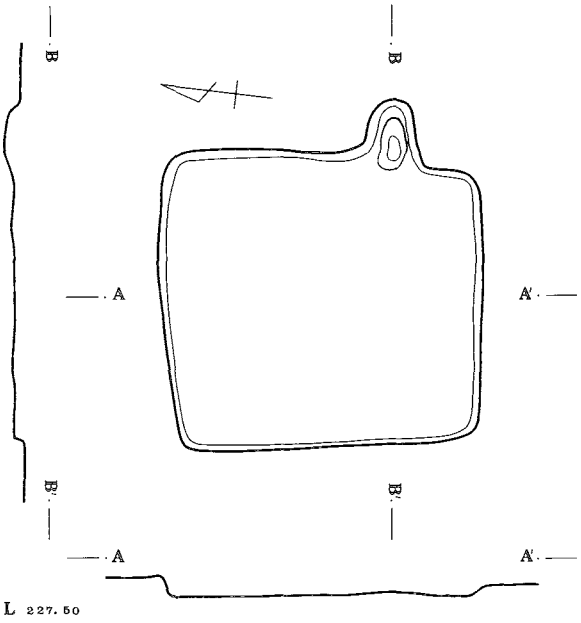
## E－88号住居跡

中央で東西2.9m×南北2.5mを測る小型の住居。壁高は30cmで比較的良好な残り具合である。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅75cmで壁外への掘り込みは半円状で55cmを測る。カマド全体の掘り方は楕円形のピット状で長径120cm、深さは床面より17～18cmあり、ここに黒色土とロームの混土を埋め戻し、ほぼフラットにして使用する。カマド両脇には地山を掘り残した袖部痕と思われる部分がある。また、壁外部左手に小ピット状の凹みがあるが、その意味は不明である。

遺物は南東コーナー床面に須恵蓋と土師坏が出土した。この部分は他より少々低くなっているが、ピットという程ではない。また、南壁際床面やや上より須恵蓋が出土している。住居中央部では自然石、土師甕片、須恵甕片等が大量に出土している。これは土師の吹上パターンで、この住居の埋没過程で一括廃棄されたものであろう。

本住居に関しては、遺物出土状況を示す図化用写真がトラブルの為不在となってしまい、図として提示出来ません。写真を参考にして頂くようお願いします。

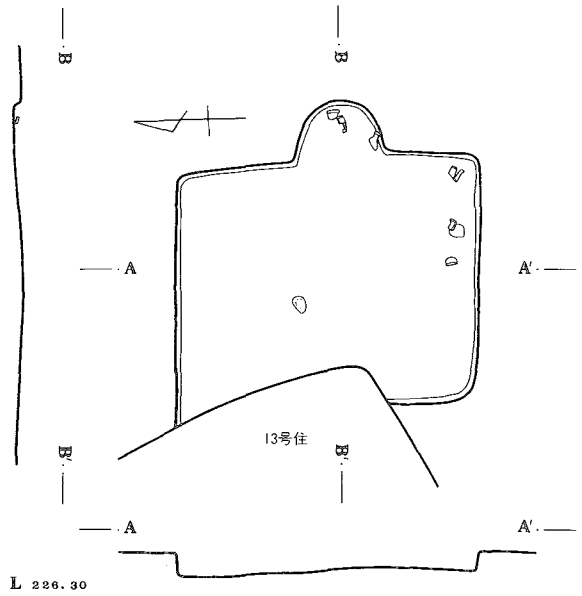



## E－89号住居跡

中央で東西3.1m×南北3.4mを測る小型住居。壁高は10～20cm弱。住居南側が少々狭くなっている。

カマドは東壁南寄りである。幅70cm、長さはカマド左右で若干ずれがあり、中心で55cmを測る楕円形の掘り込み。内部は僅かな焼土が検出されたのみで、火床の構造は不明だが、中央に楕円形の小ピットが存在していた。石材、袖部痕は全く検出されない。カマド部以外のピット類も存在しなかった。

遺物は覆土より土師甕片が数片出土したのみ。

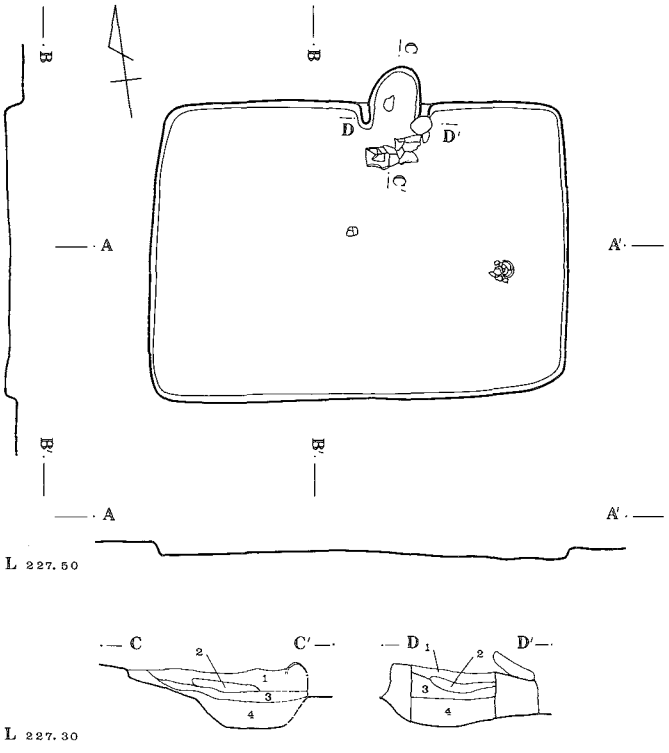



E一90号住居跡

E区調査区東端に検出された。プランがはっきりせず、東側を掘り進める過程でカマドの痕跡が確認出来たために東壁が浅くなってしまった。また、重複する13号との関係は、本住居が灰釉陶器を伴っており、13→90と考えた方がよいと思われる。

南北3.2m、東西は残存部で2.7mだが住居北西部ではこの距離でコーナーが巡らず、不整形なのであろうか。

カマドは東壁中央である。幅90cm、長さ50cmの半円状であるが、プランは不明確なので断定は出来ない。袖部痕は無く、内部より灰釉埦片、石片が検出された。遺物は他に住居南側床面及び覆土より須恵坏片、土師甕片が出土している。




1層：天井崩落層。粘質土である。
2層：焼土層。
3層：黒色土層。
4層：貼床層。黒褐色土層。

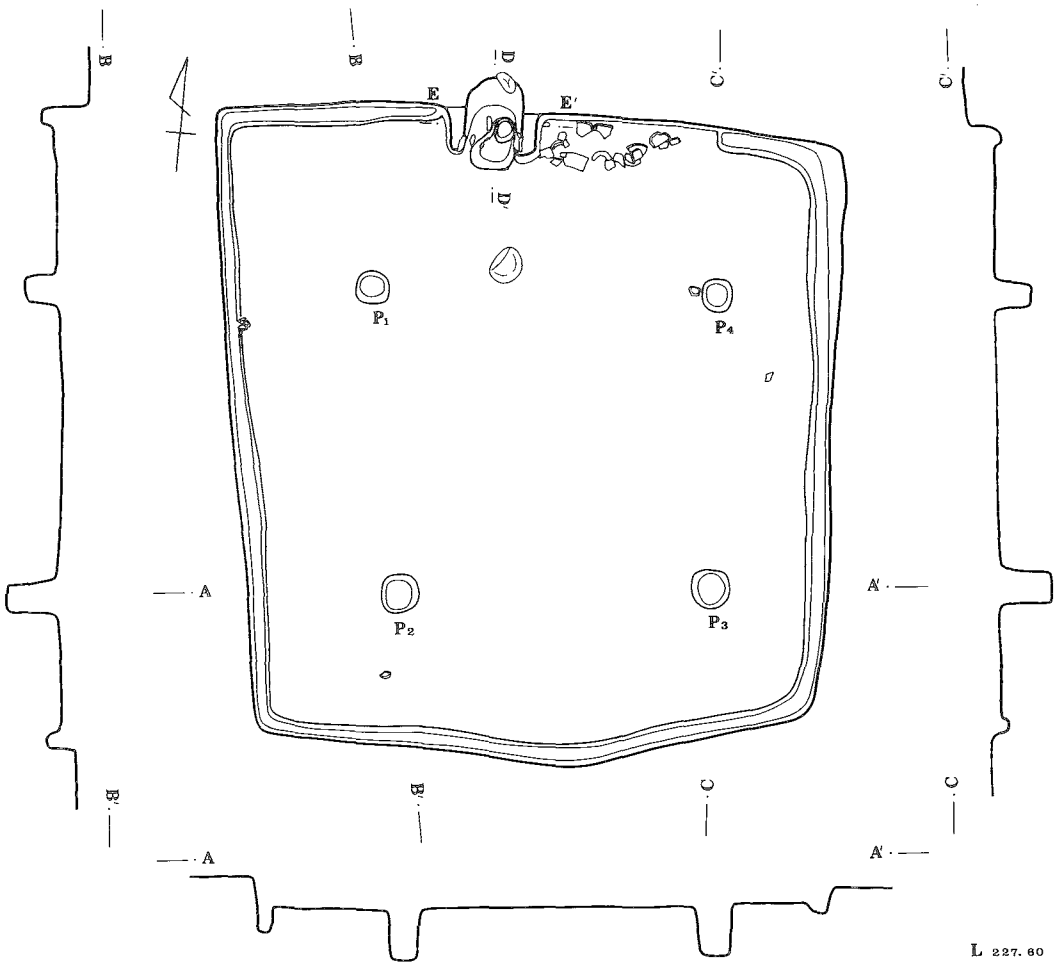
E一93号住居跡

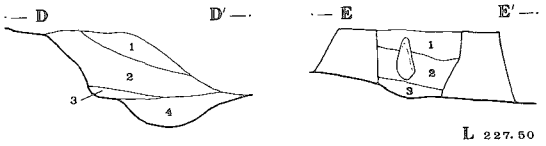
東西4.5m×南北3.1m、壁高10～18cmの東西に長軸をもつ長方形住居。南西コーナーが僅かに張り気味ではあるが全体に整った長方形を呈している。

カマドは北壁東寄りに造られる。幅50cmで壁外部は長さ38cmの半円状を呈し、壁内両脇に袖部痕と思われる粘質土部分が少々盛り上がっていた。残した袖部はこれを基にしたものである。焚口面直上には口縁部を左に向けて長胴甕2個が連結された状態で検出された。焚口を鳥居状に構成していたものと思われるが、鳥居の支えとなる石材もしくは袖端部は確認出来ない。右手の石材はカマドのものであろうが原位置ではない。カマド中央には細長い自然石の支脚を置く。火床は焚口面より15cm掘り凹めた地山に褐色土を埋め戻して使用している状況を確認した。

ピット類は全く検出されない。

遺物は焚口部の甕の他、床面東側より土師小型甕片、覆土より土師坏、須恵蓋片が出土した。




1層：住居内覆土の褐色土。
2層：天井崩落粘質土層と焼土の混在層。
3層：灰層。黒色を呈す。
4層：貼床層。褐色土と焼土からなる。

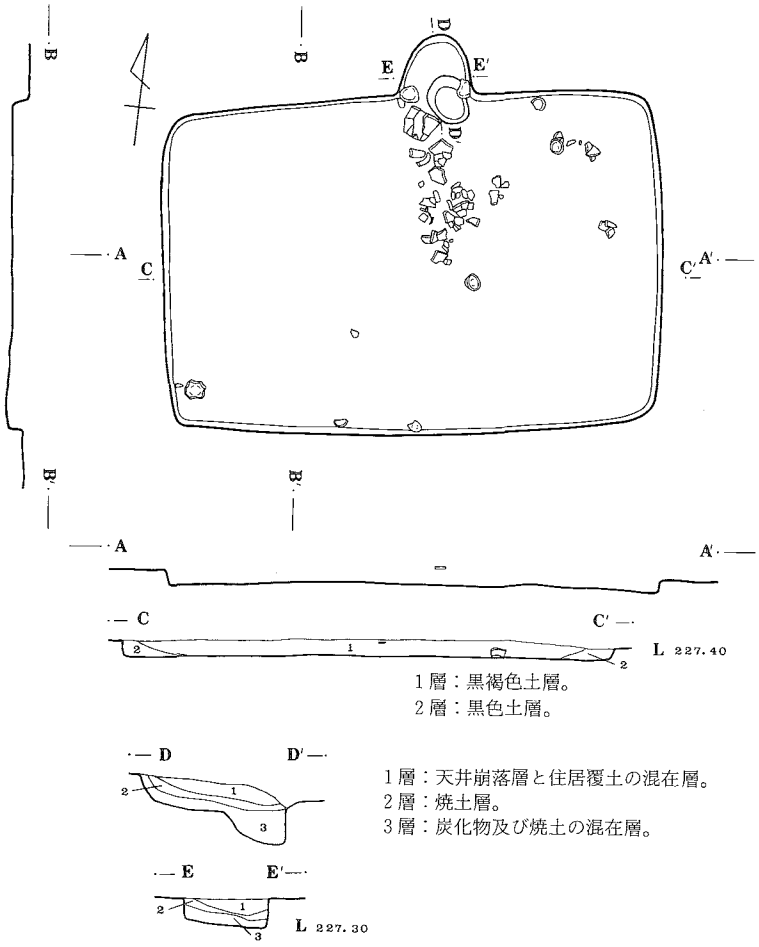
### E－92号住居跡

中央で東西6.4m、南北6.8mを測る。南壁は中央がやや突出しており、西側で6.6m、東側で6.2mと寸法からは正方形に近い形状と言える。壁高は住居北壁で30cm強あり、この床面より10～15cmの深さで各壁に周溝が巡る。

カマドは北壁西寄りに造られる。幅55cm、長さは壁外に30cm半円状に掘り込まれ、壁内には焚口に板状石を伴って粘質土主体の袖部が両側に検出された。壁外部は急斜面の立ち上がりを見せ、燃焼部は確実に壁内にある。焚口より20cm程掘り凹めた地山上に褐色土と焼土からなる混土を埋め戻して火床が造られており、直上に黒灰色の灰層が検出された。中央左側には細長い自然石の支脚があり、また、右側の深さ10cm程の小ピットに関してはその性格はつかめない。

柱穴は4箇所検出された。位置的には$P_2$が対角線上にあるのを除き、他は西壁、東壁と対角線がつくる三角形の内側にある。$P_1$は径35cm、深さ30cm、$P_2$径40cm、深さ50cm、$P_3$径40cm、深さ52cm、$P_4$径35cm、深さ38cmであり、南側の2基が規模がやや大きい。

遺物はカマド右手床面に集中する。ここは全て土師甕片で4～5個体分であった。他によく焼けた板状石も検出された。西壁際床面からは須恵蓋、南東コーナー床面に土師坏、また覆土からも同様の破片が多数出土している。



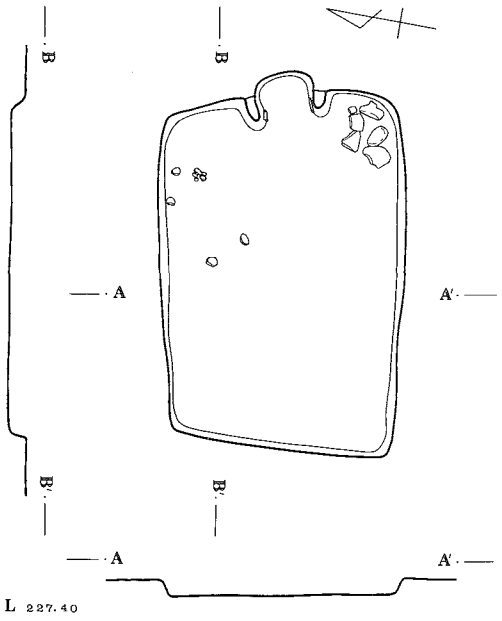

E－94号住居跡

東西5.3m、南北は中央で3.5mを測り、壁高は15cm。住居西側がやや狭く、各壁は少々弧状に張っているが比較的整った長方形で、カマドの位置等からも93号によく似たひとまわり大きな住居と言える。

カマドは北壁中央やや東寄りに造られる。幅70cm、壁外部は60cm強で半円状に掘り込まれており、壁内に袖部痕は無く、両脇に残る板状石が側壁を構成していたと思われる。尚、原位置は保っていない。右側には小ピットが検出された。壁外部の段差は左側をやや掘り過ぎた。火床はピット及び他部の掘り方面を炭化物と焼土で埋め戻したのか、直上が焼土の純層になっている。

住居内にピット類は検出されなかった。

遺物はカマド手前床面及び覆土に土師甕、甑片が集中し、他、床面より土師坏、覆土より須恵埦、蓋、甕片等が出土した。



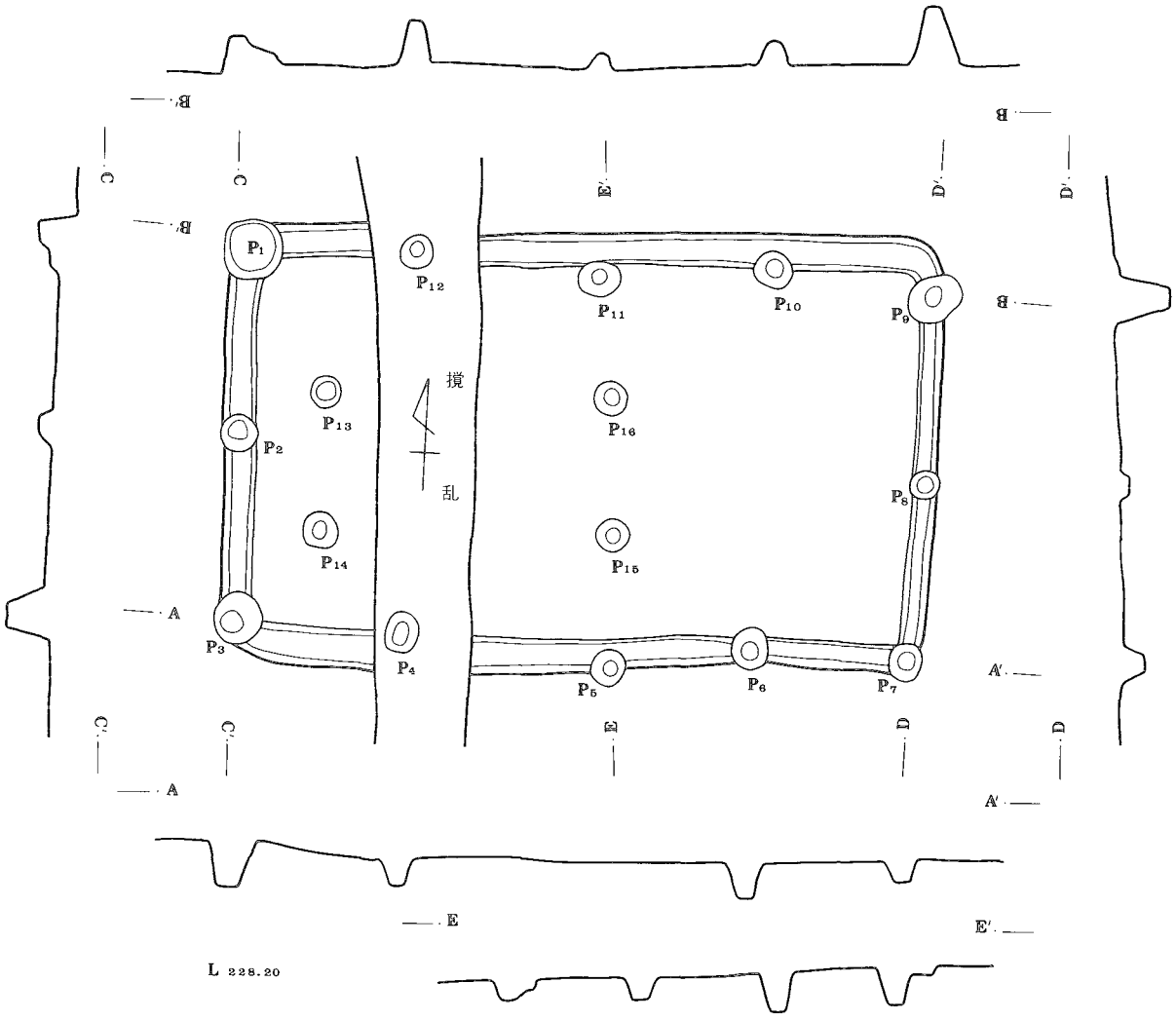

E－95号住居跡

中央で東西3.8m、南北2.6m、壁高16cmを測る。西、東壁は南壁に向かってやや広がり、全体に少々台形状を呈している。

カマドは東壁中央に造られる。幅60cm、壁外部は幅広に20cm程掘り込まれ、燃焼部の中心は壁内から壁付近にかけてと思われる。両脇の袖部は粘質土の痕跡より推定で掘り残したもので、内部は焚口より約5cm掘り凹めた地山に焼土と炭化物の混在層が埋め戻されたようで、ゆるやかな斜面で壁外部へと立ち上がる。その直上に黒色土層が乗り、次に焼土層が覆土上半全体を覆っていた。火床面ははっきりしないが、黒色土層の直上であろうか。焼土中からはカマドを構築していたと思われる板状石が検出されている。

住居内部にはピット類は検出されなかった。

遺物は住居床面北側より土師甕片、坏片、南東コーナーより土師鉢片及び板状石と自然石片がまとまっていた。

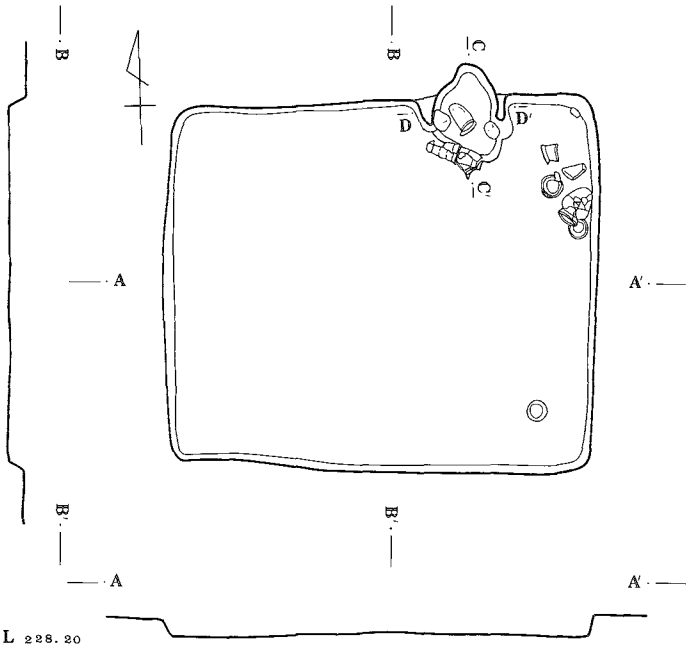



E—96号掘立柱建物跡

主軸は東西にある。梁行２間、桁行４間で柱間は梁行が2.0m、桁行は平均1.8mを測る。柱穴の規模は南東コーナーの$P_7$以外、各コーナーにある柱穴が径50～65cmと大きく、$P_1$は内部に小ピットを伴う。$P_9$は位置が東壁側にずれている。深さは$P_1$が小ピット部で38cm、$P_3$45cm、$P_7$25cm、$P_9$60cmである。他のピットは径30～40cm内外と小さめで、深さは15～45cm程のバラつきがある。また、$P_1$から$P_{12}$までをつなぐ溝が長方形に巡っており、規模は幅25～45cm、深さ10cm程で断面は長方形に近いものである。$P_{11}$が溝の内側になる他は中央又は内外に半分程かかっている。$P_{13}$～$P_{16}$は溝もち柱穴列の内部に存在しており、主軸は外側の柱穴列と一致し、3.2m×1.5mの柱間距離。東側の$P_{15}$、$P_{16}$は外側の$P_5$と$P_{11}$を結ぶライン上にあり、柱間は1.4～1.5mとこのラインを等分している。規模や軸のとられ方からみて96号建物跡の一部とみてよいであろう。

なお、柱穴掘り方は写真測量の都合上、明確に図化出来なかったことを記しておく。

遺物は$P_1$より須恵壺片、$P_7$より土師坏片、$P_{14}$より土師甕が出土した。




1層：天井崩落層で全体によく焼けている。
2層：焼土層。
3層：貼床層。焼土及びローム の混在。
4層：焼土層だが上部に灰層があり2層と区分される。

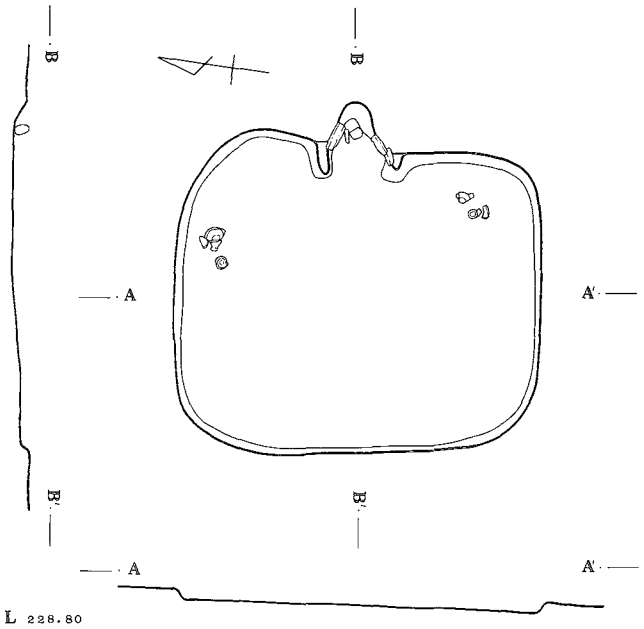
## E－97号住居跡

中央で東西4.6m×南北3.9m、壁高20cmを測る、東西に長軸をもつ長方形住居。各壁は直線的でコーナーもきっちりと掘られている。

カマドは北壁東寄りに造られる。幅60cmで三角形の壁外部は中央で35cmを測る。粘質土による袖部をもち、焚口には両側に平たい自然石がハの字状に内傾する状態で検出された。焚口面には長胴甕と甑が口縁を右に向けて連結され、横倒しに潰れており、焚口に横架されたものが崩れ落ちた状態と言えよう。これは先の93号のカマドと同形態であり、(93号は左向きだが)遺物もほぼ同時期である。

火床は焚口部から住居北壁辺りまでを深さ15cm程掘り凹め、ロームと焼土の混土でフラットまで埋め戻して使用したと思われる。直上は手前に灰層が少々と焼土及び灰の混在層が覆っていた。カマド中央の完形土師甕は焼土層直上から出土した。住居内にピット類は検出されない。

遺物はカマド部の甕の他、カマド右手の東壁際床面より土師甕口縁片及び大型球胴甕、須恵台付坏、覆土より土師甕片、坏、皿、鉢等、全体に大型品が出土している。

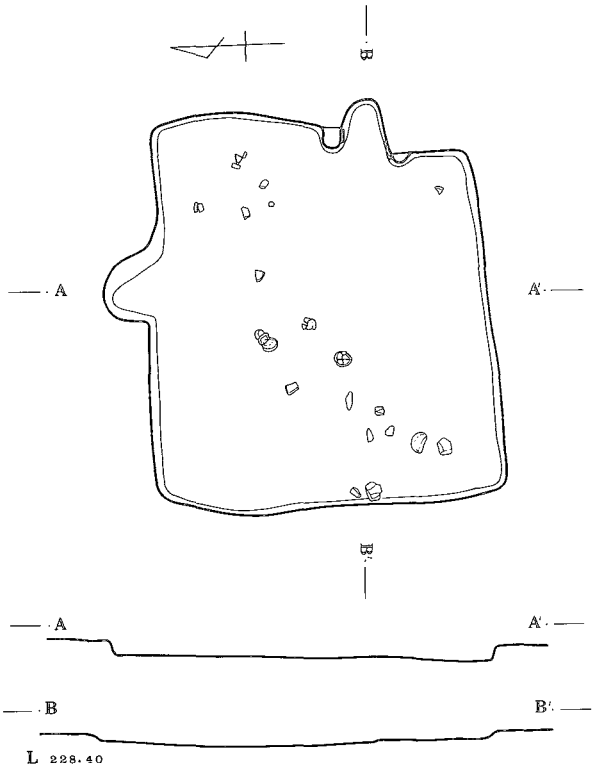



## E－99号住居跡

中央で東西3.2m、南北3.9mを測る。各コーナーは非常に丸みを帯び、特に北東コーナーは東側に張り出す。壁高は10cmである。

カマドは東壁中央やや北寄りに造られる。幅60cm、壁外部は三角形で長さ45cmを測り、壁内両脇に地山のロームを袖部として掘り残す。側壁中程には板状石が原位置を保っており、崩れたものがカマド内部に数点検出された。火床は地山面を使用し、貼床は検出されない。住居内にピット類は存在しない。

遺物は南東コーナー床面やや上より土師質埦、坏片、須恵埦片、北壁付近床面やや上より土師甕片、土師質小型甕が出土した。



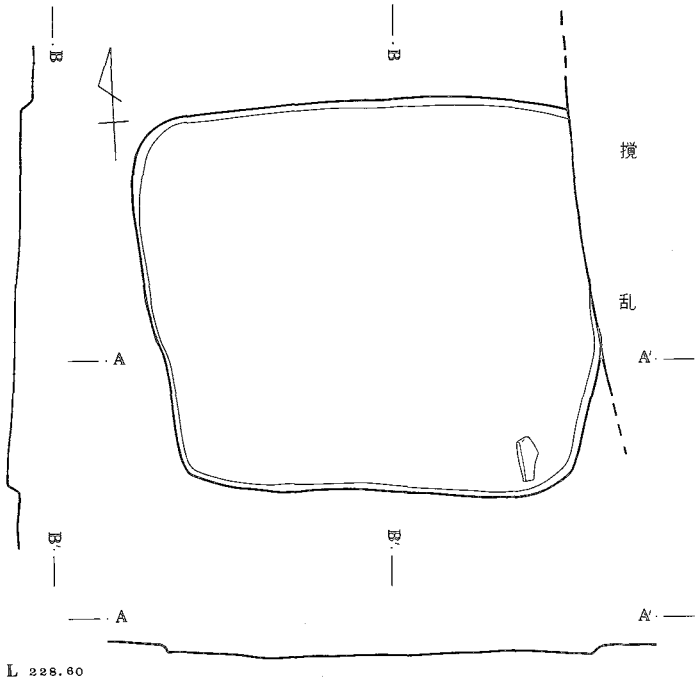

E－98号住居跡

中央で東西4.1m×南北3.6mを測り、東カマドを境に東壁は50cm程内側にずれ込んでいる。壁高は平均10cm強である。

カマドは北、東壁に2基検出された。北カマドは幅約80cmで右側壁は西へ傾く。壁外部の長さは50cm弱で袖部痕や石材は検出されない。貼床の形跡は無く、床面焚口付近と同レベルの平坦な地山が火床である。東カマドも同様の火床面であり、規模は両側壁のずれの中心で幅50cm、長さ45cm。北カマドは半円状であるが東カマドはそれよりも細長い形状と言える。壁内両脇に粘質土による袖部痕が残り、内側には板状石が焚口を構成する。北、東両カマドの覆土は共に粘質土と焼土の混在であり差異は無い。焚口がしっかり残る東カマドが「壊されなかった」状態であろうが、北カマドが「壊された」と判断する資料が無く、新旧関係については東カマドが造り替えられたものの可能性が強いと言うに留めたい。

ピット類は全く検出されなかった。

遺物は住居床面中央より須恵坏、埦、甕片、覆土より羽釜片、須恵甕片、皿片等が出土した。

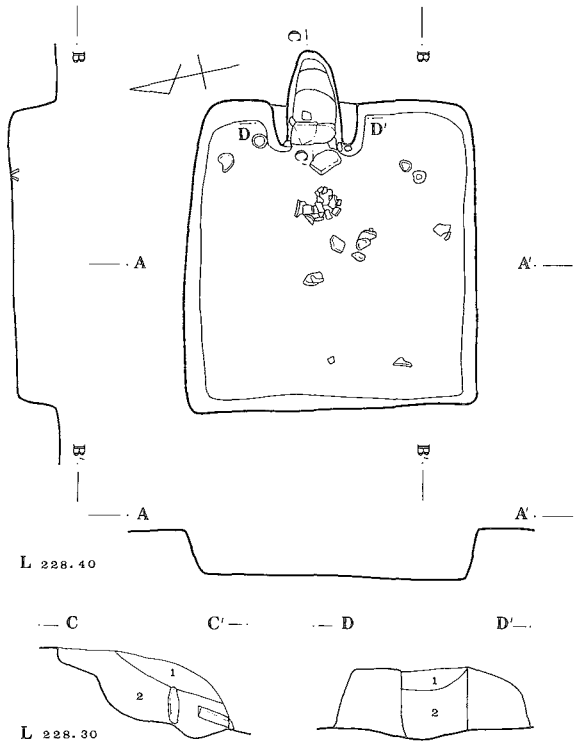



E－100号住居跡

南北4.1m、東西は東壁中央から北壁にかけて溝状遺構に切られ、不明だが、推定で5m程と思われる。全体に北側が広い台形状を呈す。残存は悪く、壁は10cmに満たない。

カマドの痕跡は無く、東壁の撹乱部であったと思われる。南東コーナーには長さ45cm程の焼けた板状石が検出され、カマド構成石であるかもしれない。住居内にピット類は全く検出されない。

遺物は覆土内より羽釜片、土師質甕片、須恵埦片、坏片が出土した。



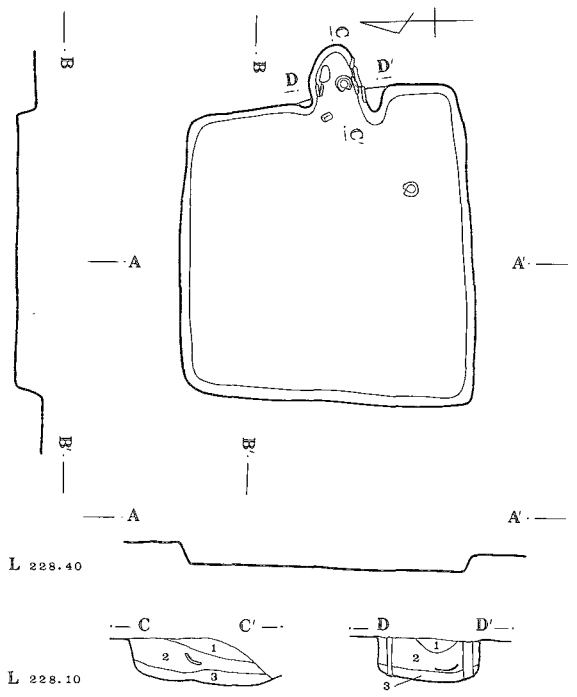

## E－101号住居跡

中央で東西3.2m、南北3.1mの小型正方形を呈す。北東コーナー以外はきちんと角がとられ、壁も直線的である。壁高は40～50cmとよく残っている。

カマドは東壁北寄りに造られる。幅50cm弱、長さ53cm程で壁内には粘質土による袖部が残る。焚口両端に板状石が検出され、左袖端部のものは原位置、右側のものは崩れた破片と思われる。焚口面右側の板状石も同様に崩れ落ちたものであろう。袖部内側の中央に横たわる板状石は焚口上部に横架されたものか、左端は袖部にかかった状態で崩れ落ちている。火床に貼床は無く、地山面は焚口より僅かに掘り凹められ、壁外部中程で一段高くなって煙道へと向かう。住居内にピット類は検出されなかった。

遺物はカマド付近床面より土師坏、須恵坏、脚付盤脚部、覆土より土師甕、台付甕、鉢片等が出土した。

1層：住居内覆土。黒色土層。
2層：焼土・炭化物を含む黒褐色土層。




## E－102号住居跡

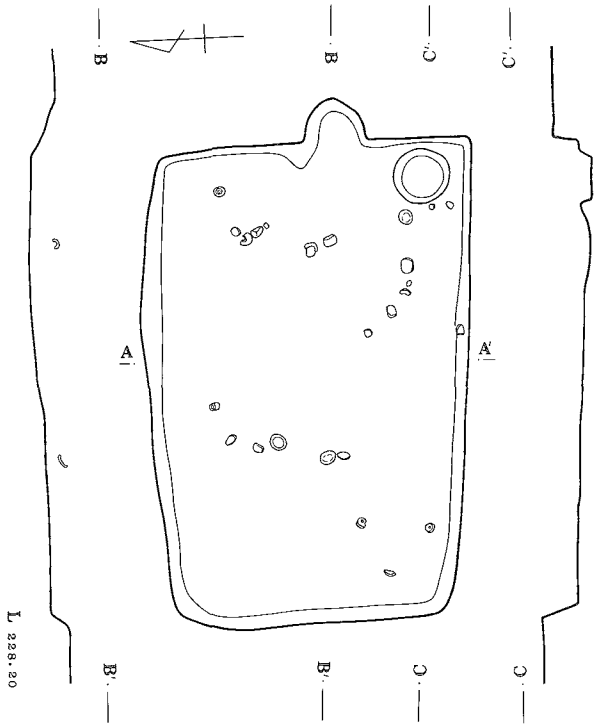
中央で東西3.2m、南北3.1mを測り、北壁2.9m、南壁3.4mと台形状を呈す。壁高は20～25cmで残存状態は比較的良好。

カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。幅55cm、壁外部は50cm弱を測り、両側壁には板状石を据えている。焚口面より5cm程凹めた地山上にロームと黒色土の混土を埋め戻し、直上を火床面として使用している。カマド内部中央やや左側の自然石は側壁に据えられたものか。

住居内部にピット類は全く検出されない。

遺物はカマドより須恵埦、覆土からも須恵埦片及び壺片が出土した。

1層：住居内覆土。
2層：天井崩落層。黄灰色粘質土で焼土粒を含む。
3層：貼床層。



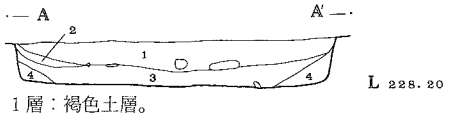

## E－103号住居跡

東西5.1m、南北は西壁2.8m、東壁3.3mと50cmの差をもつ東西が長い長方形住居。壁高は30～50cmとよく残っている。

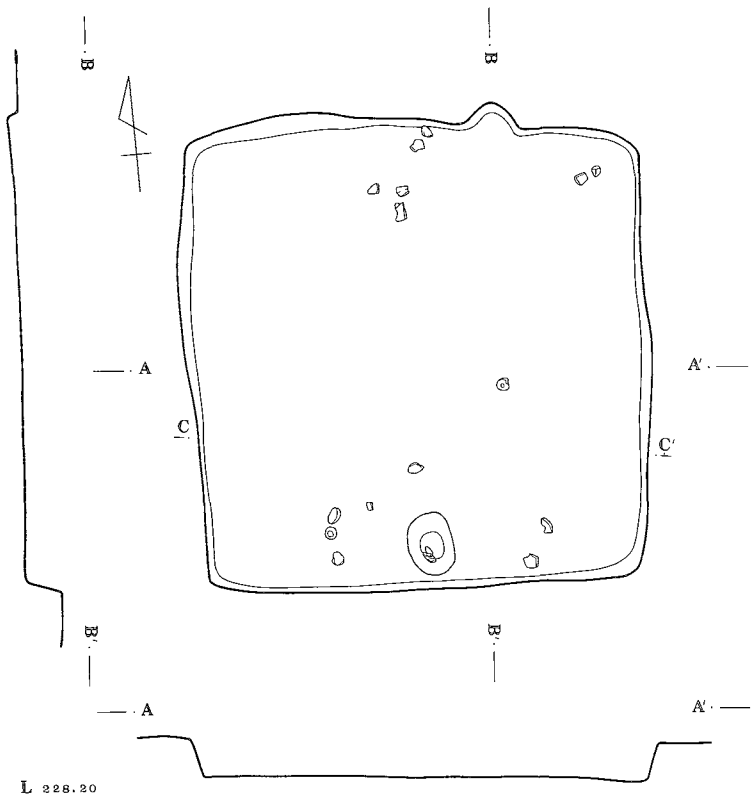
カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。幅60cm、長さは半円状に45cmを測り、袖部痕、石材は検出されない。住居壁ラインやや内側より壁外に向かって斜めに立ち上がっており、燃焼部の中心は壁内側と思われる。

南東コーナーに貯蔵穴をもち、径58cm、深さ10cmの円形ピット内には焼土及び灰が検出されている。

遺物は南東コーナー床面より須恵坏、覆土より須恵坏、埦、皿が多数と、他に土師甕片、土師質の内部赤彩小型埦、二彩小型壺、墨書坏等が出土した。




1層：褐色土層。
2層：軽石微粒子を含む褐色土層。
3層：黄褐色土層。
4層：壁崩落ローム層。



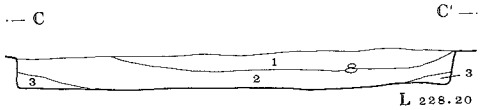

## E－106号住居跡

中央で東西5.0m×南北4.9m、壁高35～40cmを測る正方形の住居。北東部は105号が切り込むために壁の大半は残存していない。

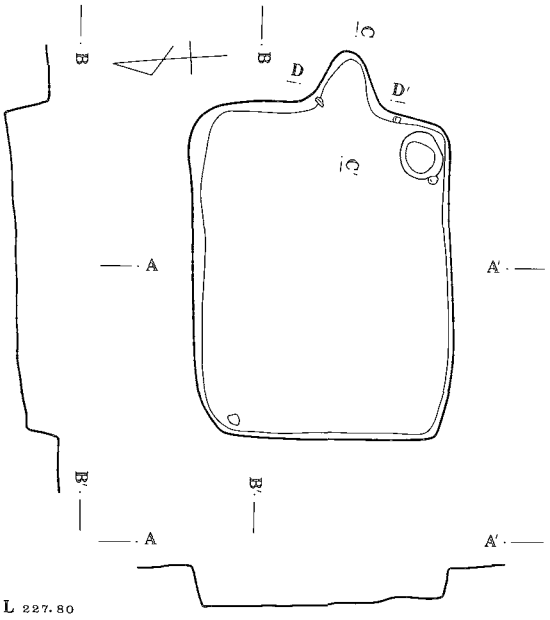
カマドは北壁東寄りに造られる。幅55cmで壁外部は長さ25cmの三角形を呈す。石材、袖部の痕跡は無く、焼土痕のみである。ほとんどの部分は105の重複に切られ、残りは悪い。

住居内に明確なピットは無いが、南壁際中央にピット状の浅い凹みがあり、径50×65cmの楕円形を呈している。面はなだらかな弧状で、直上より土師小型甕が出土している。

遺物は他に床面より土師甕、坏、須恵坏、蓋片、覆土より須恵盤、脚部片等が出土した。




1層：明褐色砂層。ローム粒・軽石粒をまばらに含み、よくしまっている。
2層：暗褐色砂層。軽石微粒子よりもロームブロックを多く含む。しまりは悪い。
3層：1～2cmのロームブロックが主体の壁崩落層。



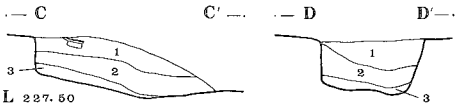

## E－104号住居跡

東西3.5m×南北2.7の小型長方形住居。壁高30～40cmと残存良好である。

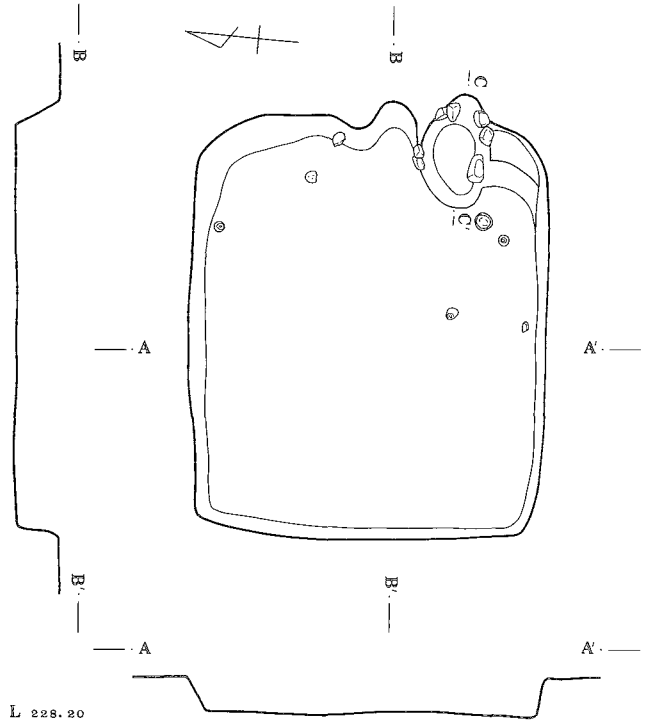
カマドは東壁中央やや南寄りである。幅70cmで三角形の壁外部は長さ約50cm。左側壁に崩れた板状石があり、他は石材、袖部痕等は無い。火床は地山面であり、直上より灰層が検出されている。

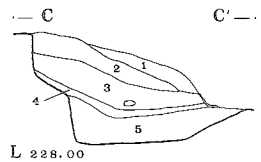
住居内ピットは、南東コーナーに貯蔵穴を検出した。径約45cmの円形で深さは10cmであった。

遺物は覆土より土師甕片、坏片、須恵坏等が出土した。




1層：褐色土層。
2層：焼土及び褐色土の混在層。
3層：灰層。




1層：住居内覆土。褐色土層。
2層：天井崩落層。黄褐色の粘質土層。
3層：焼土層。
4層：灰層。
5層：貼床層。焼土と褐色土の混在。

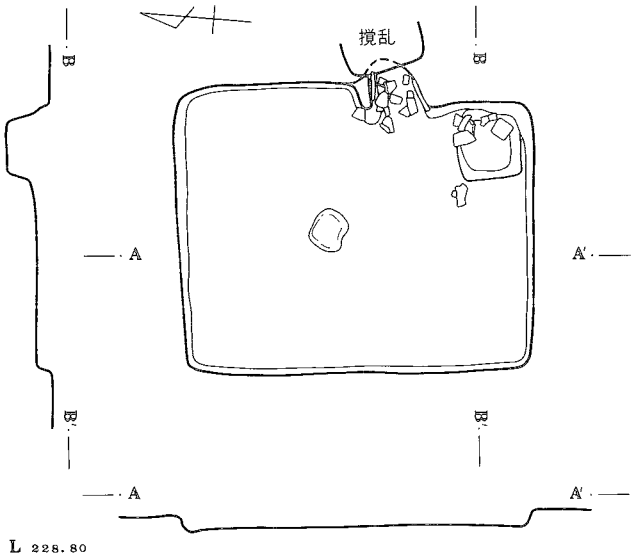
## E－105号住居跡

東西4.4m×南北3.8m、壁高45cmの長方形住居で住居東側は全体に丸みを帯びている。住居北側の上段プランは誤認であり、内側が北壁のプランである。また、住居南西部は106号との重複をなし、106→105という平面精査の所見を得た。

カマドは東壁中央と南隣りの2基が検出された。残存状態は南カマドの方が良好で、側壁に自然石を数個立て並べ地山を20cm程ピット状に掘り凹めた面を埋め戻して火床としている状況が明確に検出された。規模は幅約70cmで、南東コーナーがやや段状となる内側を壁とすれば、壁外部長65cmである。一方、北カマドは焼土や褐色土が入り混じった覆土状況で、壊されたものと思われる。ピット状にはなっておらず、石材は伴わない。

住居内にはピット類は検出されなかった。

遺物は南カマド手前床面より須恵塊、坏、他、覆土よりコの字状口縁土師甕片、土師坏、須恵小型壺、坏、蓋、砥石等が出土した。



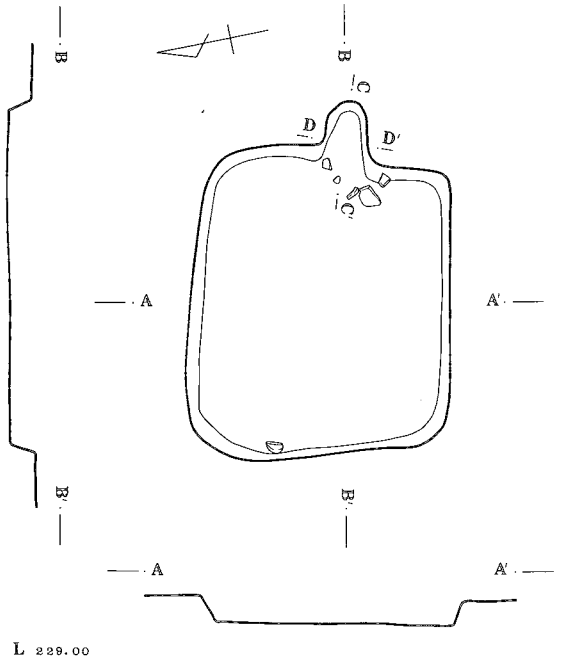

E－107号住居跡

東西3.1m×南北3.8mで東壁南側はカマドを境に20cm程内側に入りくい違う。壁高は15cm。

カマドは東壁南寄りに造られ、壁外端部は撹乱に切られて存在しない。幅50cm弱で両側壁は板状で構成される。カマド内部からは土師甕片２個分が検出された。

住居南東コーナーに方形の貯蔵穴が存在する。約70×70cm、深さは床面より25cmであり、住居床面レベルで須恵大甕片が検出されたが内部からは何も検出されなかった。ピットは他には存在しない。

遺物はカマドの土師甕、ピット上の須恵大甕の他、覆土より土師甕片が数片のみであった。又、住居床面中央に40×35cm程の扁平な自然石が置かれていた。



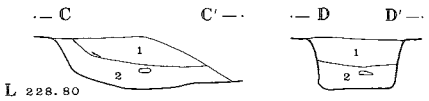

E－108号住居跡

東西3.3m×南北2.8mの小型隅丸長方形を呈す。東壁のカマド南側は15cm程内側にずれ込んでおり、壁高は25cmを測る。

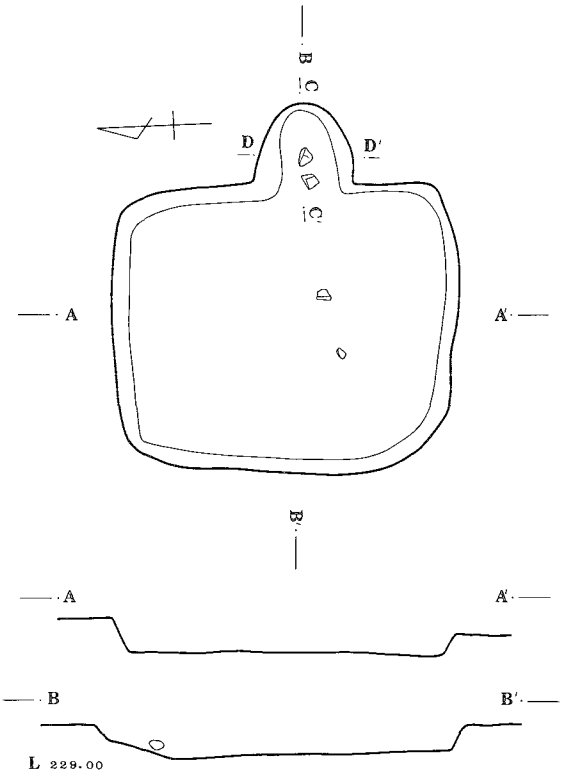
カマドは東壁中央に造られる。幅50cm弱で壁外部は楕円形にカマド左側の東壁より45cm突出する。焚口付近には脆化した板状石が散存するが原位置を保つものは無い。火床は地山面を使用し貼床は検出されなかった。焚口レベルとほぼ同じでゆるやかな皿状を呈し、奥壁で煙道へと急に立ち上がる。

住居内にピット類は全く検出されない。

遺物は覆土より須恵甕片、埦片が少量であった。




1層：住居内覆土。黒色砂質土層。
2層：天井崩落層が主で赤褐色でしまりなし。焼土粒子をまばらに含む。



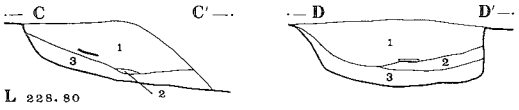

## E－109号住居跡

東西3.1m×南北3.6m、壁高25～35cmを測る隅丸長方形住居。

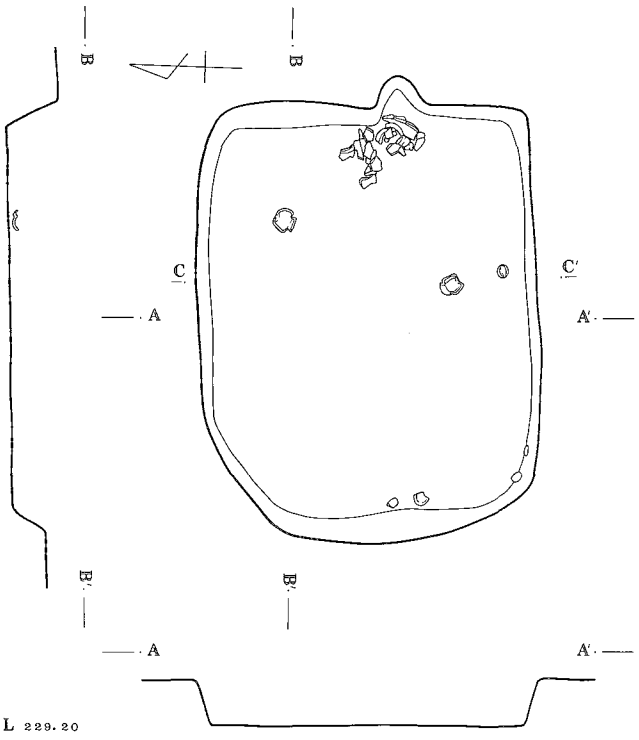
カマドは東壁中央に造られる。住居の割にカマドの規模の大きさが特徴的である。幅１m、壁外部の長さ85cmで楕円状に掘り込まれ、火床はなだらかな斜面で立ち上がって煙道へと続く。ロームによる貼床が確認された。内部から出土する板状石片はカマド内壁から崩れたものであり、原位置で残るものは無い。袖部痕は検出されない。

住居内にピット類は検出されなかった。

遺物はカマド及び覆土より羽釜片、須恵鉢片、土師甕片灰釉埦片、皿片等である。




1層：天井崩落層。粘性ローム主体で下部は少々焼土が認められる。
2層：焼土層。橙赤灰色を呈す。
3層：貼床層。上部には黒灰色の灰が僅かにあり、主としてしまりのないロームからなる。




## E－110号住居跡

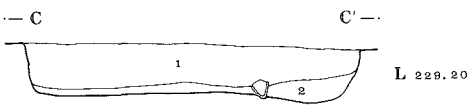
中央で東西4.6m×南北3.6m、壁高50cm強を測る。住居西側両コーナーは大きな丸みを帯び、西壁全体が弧状を呈している。

カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。幅45cm、長さ30cmで壁外部は三角形に掘り込まれる。焚口は鳥居状であったようで、自然石を両脇に立て、横架されたと思われる板状石が崩れた状態で検出された。

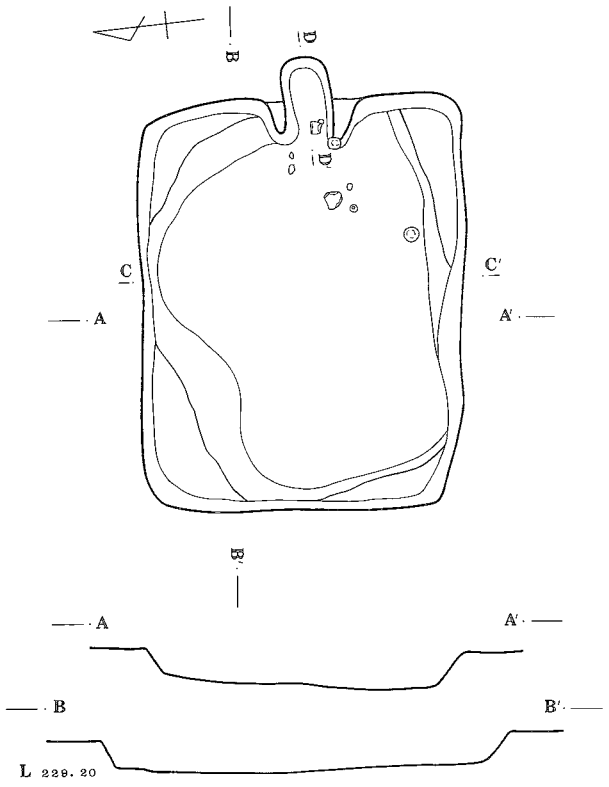
本住居は貼床状況がよく確認されている。ローム粒を含む黒色土を地山面に10～20cm埋め戻し、これを床面とする。

住居内にピット類は検出されなかった。

遺物はカマド内及び手前床面レベルより土師甕、甑が潰れた状態で数個体分、掘り方レベルで須恵坏、又、きれいに半割状態を示す須恵広口壺が1.8m離れて出土している。




1層：住居覆土。黒褐色層。
2層：貼床層。ロームブロックを含む黒色土層。



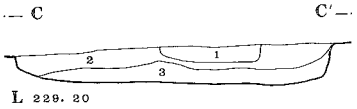

## E－111号住居跡

中央で東西4.3m×南北3.4m、壁高30～40cmを測る。各コーナー内側に高まりがあり、特に南東部はテラス状を呈している。北側は斜面である。住居床面はテラス面レベルであり、ロームブロック混じりの黒色土で貼床が形成され、遺物出土レベルはこれと一致する。

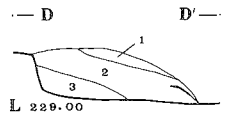
カマドは東壁中央に造られる。幅50cmで楕円形の壁外部は長さ45cmを測り、袖部は推定位置に残したものである。右焚口は自然石が立てられる。焚口手前床面レベルの板状石片はカマド材の残骸であろう。火床は貼床と思われ、明褐色土直上に天井崩落層と焼土層が入り混じって検出された。

住居内にピットは存在しない。

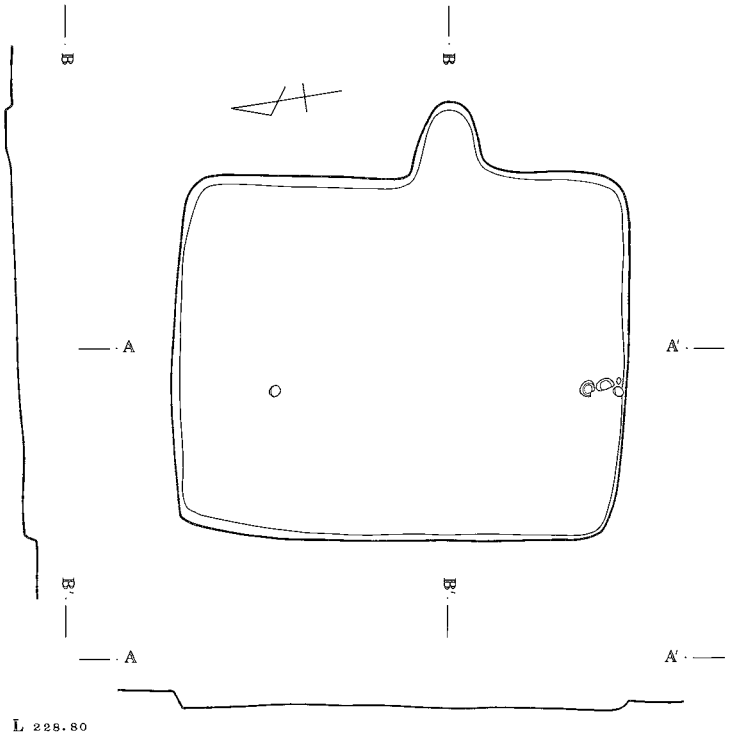
遺物は掘り方面より10cm上の床面レベルで須恵埦、カマド部より土師甕片等が出土した。




1層：攪乱層。A軽石を含む黒色土。
2層：住居覆土。黒褐色層。
3層：住居貼床層。ロームブロック混じりの黒色土層。




1層：住居内覆土。しまりのない褐色土層。
2層：焼土層でまばらに炭化物を含む。
3層：貼床層。明褐色のローム層。



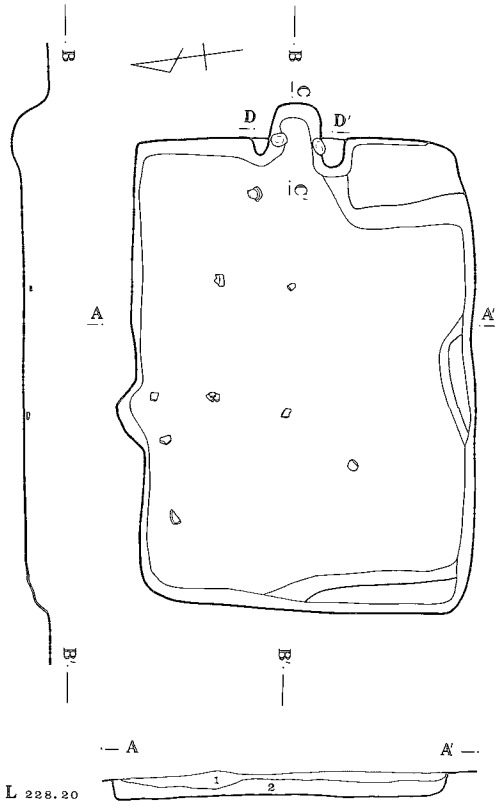

## E－112号住居跡

中央で東西3.8m×南北4.8m、壁高15cmを測る長方形住居。東壁南側はカマドを境に10cm程外側にくい違う。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅75cm、長さ70cmで楕円形の掘り込みが残る。石材、袖部痕は無く、カマド部分の残存状態も悪い。

住居内にピット類は検出されなかった。

遺物は覆土より土師甕片、坏片、須恵甕片、坏、埦片等が出土した。




1層：軽石微粒子を含む暗褐色層。
2層：ローム粒と軽石微粒子を多量に含む暗褐色層で灰褐色を呈す。端部は壁崩落のロームが目立つ。

## E－113号住居跡

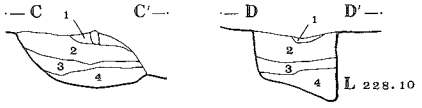
東西5.0m×南北3.6m、壁高20cmを測る長方形住居。テラス状部分が南壁中央と西、東壁南側にあり、遺構確認面やや下から段状に内側へ張り出す。

カマドは北壁西寄りと東壁中央の2か所に検出された。北カマドは幅60cm、壁外部20cmの掘り込みと焼土痕が残るのみで火床面は住居床面とフラットである。遺物は伴わない。東カマドは幅50cm、長さ35cmの楕円形掘り込みで、粘質土による短い袖部の右袖部内側には自然石を立てている。左側の自然石は小さく、原位置ではない。火床は貼床で中心で10cm程を埋め戻す。

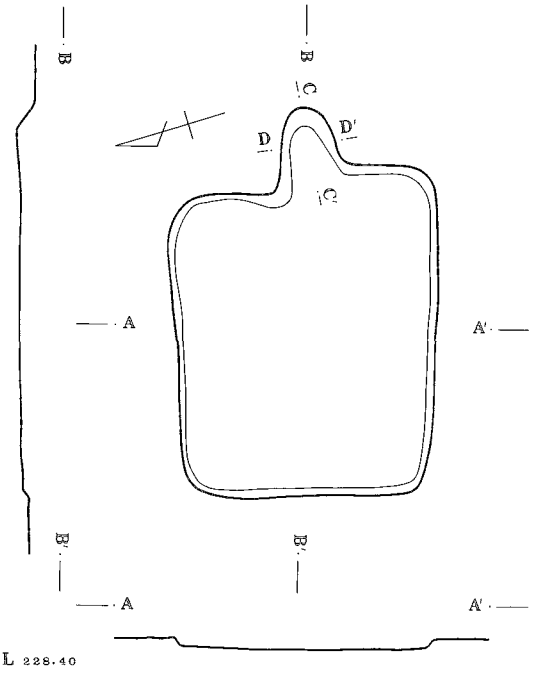
カマドの残存状態及び覆土より、北カマドから東カマドへの造り替えであったと思われる。

住居内にピットは存在しない。

遺物は覆土より土師甕片、須恵甕片、埦片等が出土した。




1層：住居内覆土。暗褐色層である。
2層：焼土層。
3層：炭化物主体の層で焼土も全体に含まれる。
4層：貼床層。

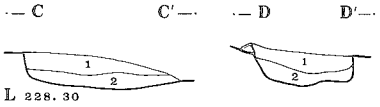



## E－114号住居跡

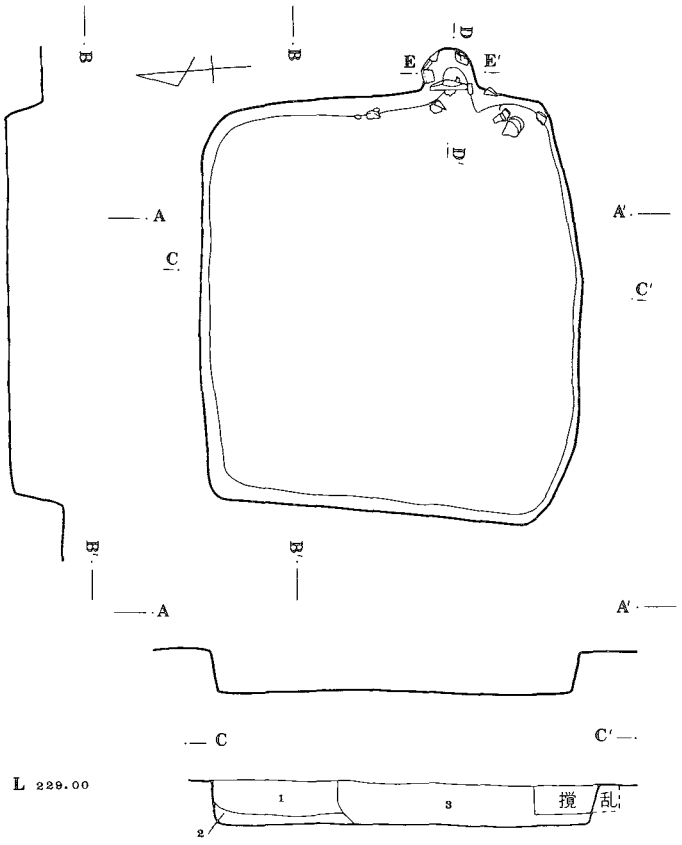
南北2.7m、東西は北側で3.2m、南側で3.5mとカマドの左右でくい違っている。壁高は10cm弱と浅い。

カマドは東壁中央に造られる。幅65cmで長さ70cmの楕円形を呈し、掘り込みはやや北に傾く。袖部痕、石材は無く、火床は焚口より僅かに掘り凹めた地山上に褐色土と黒色土を埋め戻して貼床としている。カマド内は浅いピット状であり、住居内部には他にピット類は全く検出されない。

遺物は土師甕片が覆土より出土したのみ。




1層：焼土と褐色土の混在。
2層：貼床層。黄褐色土と黒色土の混在。




1層：暗褐色砂層で軽石粒子をまばらに含む。
2層：暗褐色砂層。ローム ブロックを多量に含み、やや黄色がかる。
3層：軽石粒及びローム ブロックを含む暗褐色土層。

## E－115号住居跡

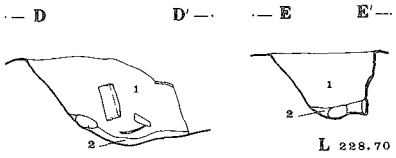
住居南側に細長い長方形の張り出しがあるが、その内側に南壁プランがしっかりと巡っており、これが本住居の壁である。張り出し部は後世の溝で、本住居の壁を切り込んでいる。

規模は中央で東西4.4m、南北4.0m、南壁東側が内傾する不整長方形の住居、壁高は40～45cmと深い。

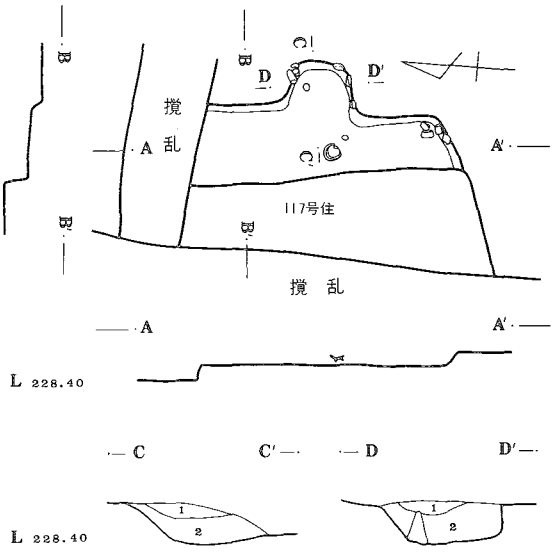
カマドは東壁南寄りに造られる。幅55cm、長さは45cmで半円状の壁外部側壁は板状石で組まれる。中央に落下する石材は天井部のものであろうか。袖部は無い。火床は貼床層が無く地山に直接焼土層が乗ることから地山の面を使用したと考えられる。焚口より少々ピット状に凹む。火床、側壁共によく焼けた状況が分かった。

住居内にはピット類は検出されなかった。

遺物はカマド内よりコの字状口縁土師甕片、カマド右床面からも同様の甕、覆土より須恵鉢片、棒状の鉄製品が出土した。




1層：天井崩落層。ローム及び黒色土でやや粘性あり。
2層：焼土層。赤灰色でしまりなし。



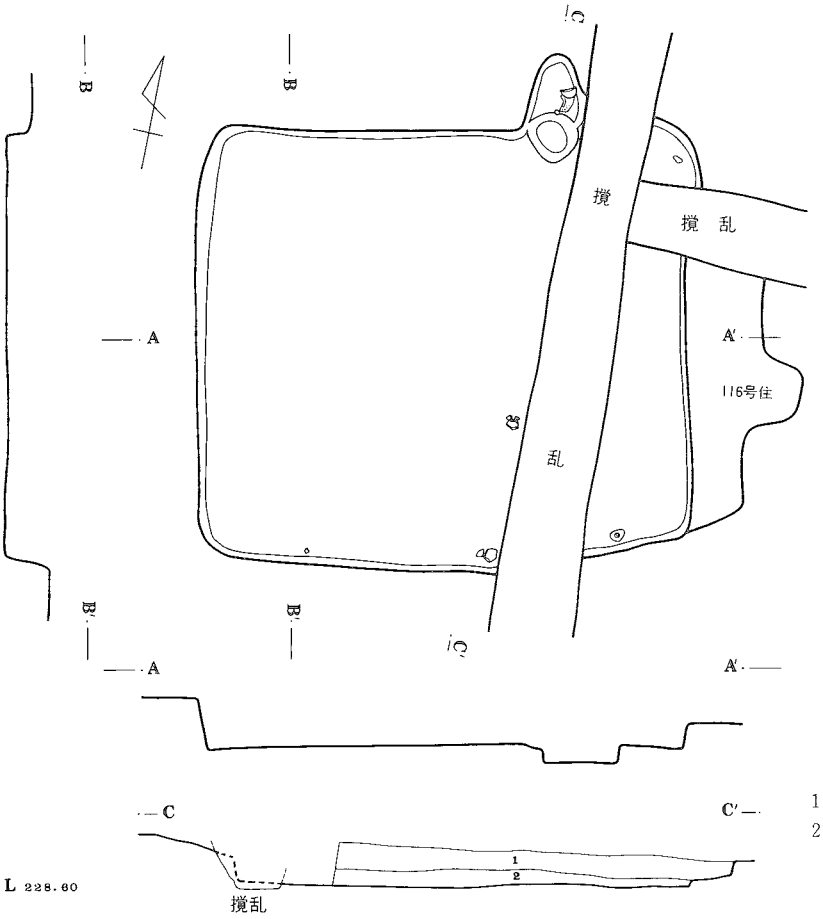

## E－116号住居跡

平面精査では116→117の判断で調査したが、117号調査段階で、117号床面上に116号の貼床層が検出され、また遺物の新旧関係からも117→116であることが分かった。

本住居残存部は東壁と南壁の一部で北壁は後世の溝に切られているようだ。東壁カマドは幅70cmで壁外部は半円状に50cmの長さがある。石組みカマドで側壁に数片板状石が残る。貼床は無い。ピット類も検出されなかった。

遺物は覆土より灰釉埦、須恵坏、埦片等が出土した。

1層：住居内覆土と同じでしまりのない黒色土層。
2層：天井崩落層。赤色の焼土が混在する。



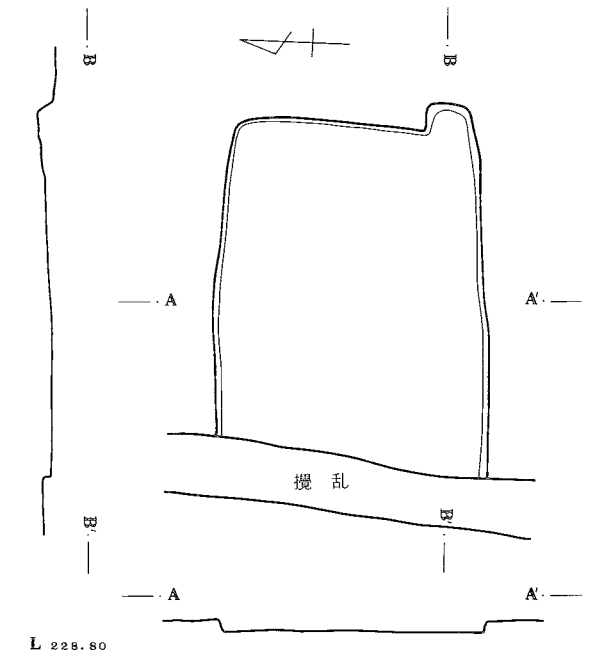

### E－117号住居跡

縦横に攪乱が入り、西壁以外は壁がきちんと残らない。中央で東西5.2m、南北4.6mで、壁高は確認面より50cm強である。

カマドは北壁東寄りに造られる。幅50cm、長さは約80cmを測り、内部には板状石が崩れ落ちて検出された。焚口には径50cmの円形ピットがあり、この部分は溝状の攪乱に上部を壊されていることからはっきりした深さは伺えない。覆土は焼土が多い。おそらく住居の貼床がこの上面を覆い、火床面へと続いていたと思われる。住居内に他のピットは存在しない。

遺物はカマドより土師甕片、床面より土師坏、須恵埦、蓋等が出土している。

1層：軽石及びローム粒を含む明褐色層。
2層：ロームブロック及び灰色粘性ローム・黒色土の混在層。貼床層と思われる。



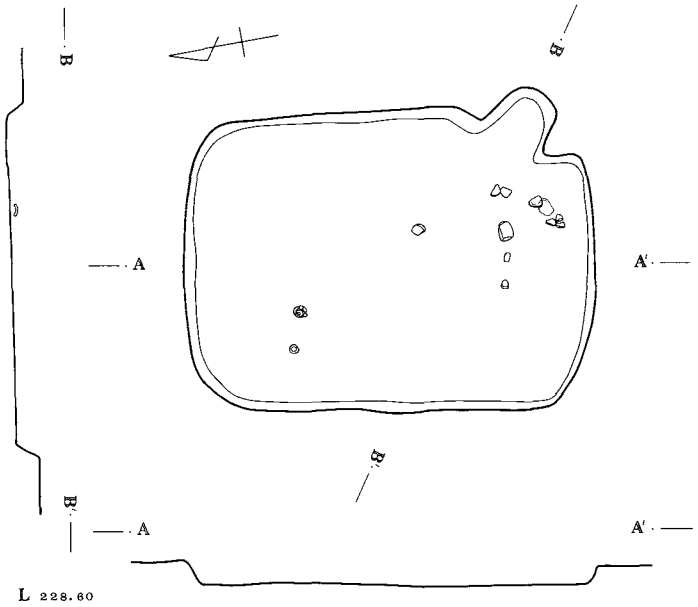

### E－118号住居跡

西壁は後世の溝に切られ確認出来ない。南北は2.9m、東西は3.6mが残存し、東西に長軸をもつことが分かる。壁高は10cm強である。

カマドは東壁南端にあり、右側壁は南壁の延長上にある。幅50cm、長さ35cmの半円状掘り込みは焼土以外は何も検出されなかった。火床は焚口より僅かに低く、奥壁は立ち上がりが急である。

ピット類は全く検出されなかった。

遺物は土師質甕及び須恵甕の小片のみである。



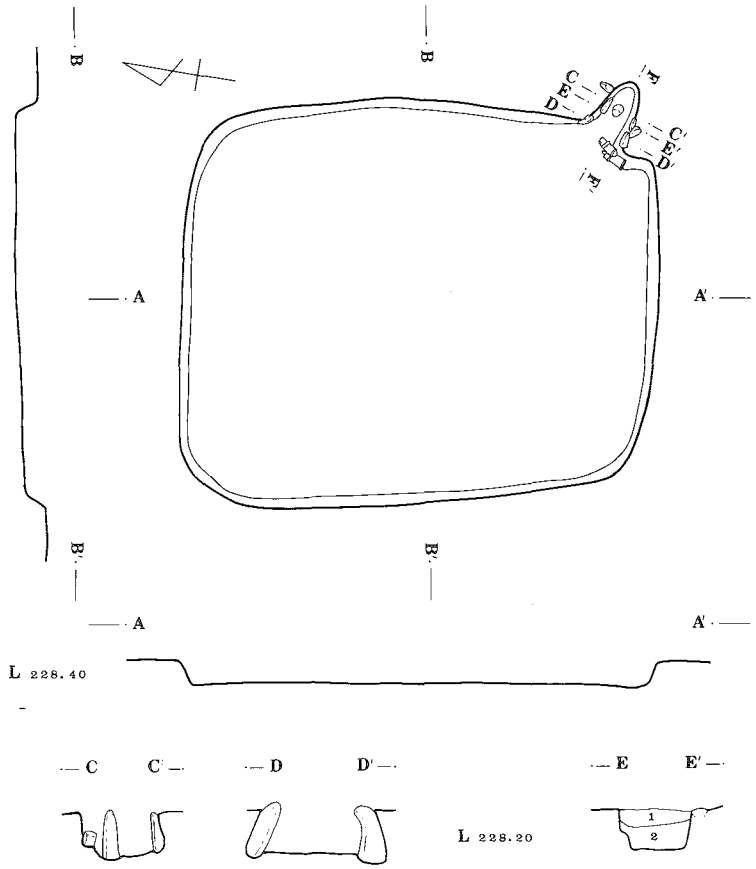

E－119号住居跡

中央で東西3.2m×南北4.3m、壁高20cm強を測る。カマド南側は東壁が内側にくい違い2.6mである。

カマドは東壁南寄りに造られる。南に大きく傾いた掘り込みは幅70cm、長さ55cmで両脇の地山は袖部状に内側にくい込むように掘り残してある。石材は伴わないが焚口手前と右手の板状石片がカマド部のものであったと思われる。

住居内にピット類は全く検出されない。

遺物は焚口右手床面より土師甕片、北西部床面より灰釉皿、須恵埦片等が出土した。




E－120号住居跡

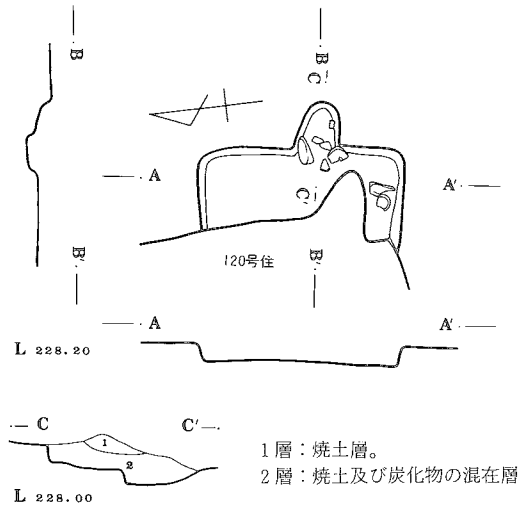
中央で東西4.3m×南北5.1m、壁高25cmを測る。コーナーは丸みを帯び、全体に張りをもつ南北に長い長方形住居。

カマドは東壁南端に造られる。119号と同様、主軸は住居壁とは直交せず、南側に傾く。幅50cm、長さ60cmで細長く壁外に延び、側壁に沿って自然石が据えられている。火床中央やや左側には細長い自然石を立てて支脚とする。焚口には円筒埴輪が横たわり、両脇の石の間に横架されていたものと考えられる。焚口から火床にかけてはフラットで地山面を火床とし、奥壁は急に立ち上がる。

ピット類は全く存在しない。

遺物はカマド部の埴輪以外は出土しなかった。

1層：褐色土層。
2層：褐色土・黄褐色粘質土・焼土の混在層。




### E－121号住居跡

住居西側大半を120号に切り込まれている。残存する東側で南北2.2m、壁高20cmを測り小型の住居になろう。

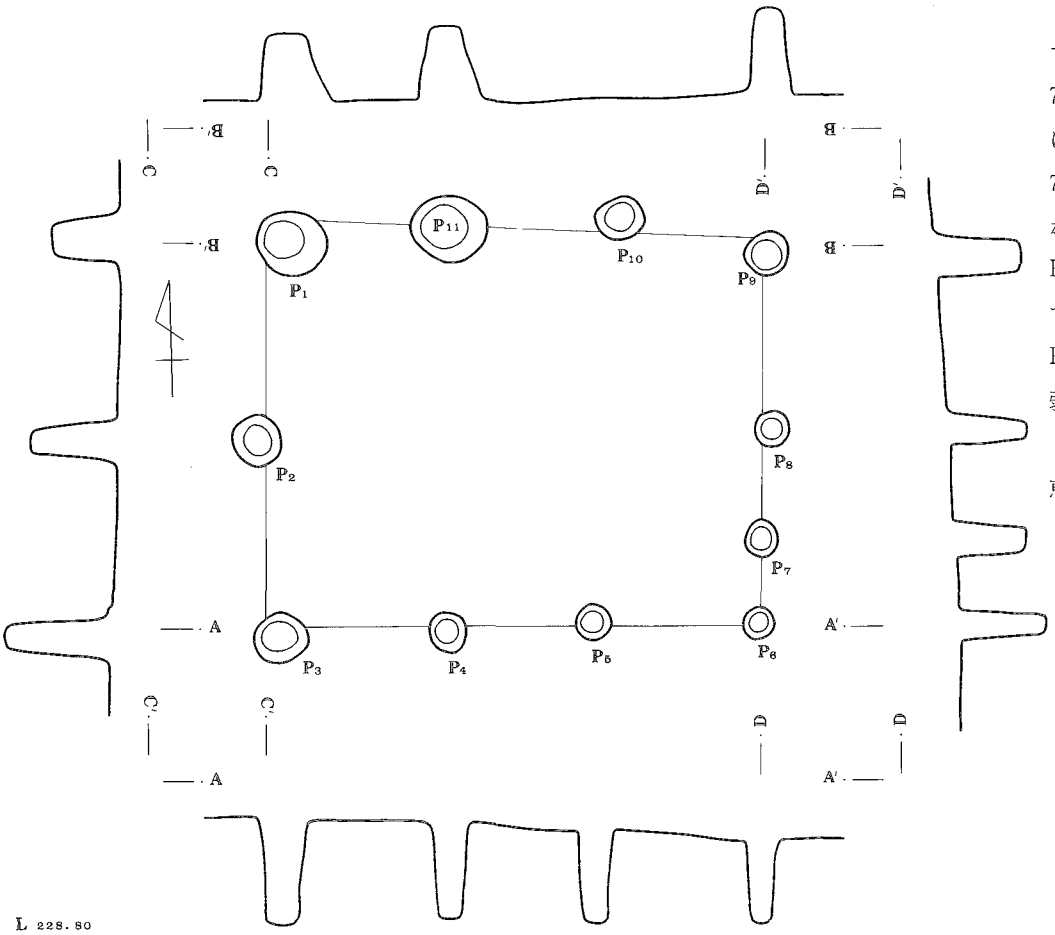
カマドは東壁中央やや南である。幅45cm、長さ45cmで楕円形の掘り込みをもち焚口左側に楕円形の細長い自然石が転がる。同様でもう少し扁平なものがカマド右手の南東コーナーに存在しており、2つがカマドに関わっていた可能性も考えられる。カマド内は貼床せずに地山をそのまま火床面として使用する。

住居内にピット類は全く存在しなかった。

遺物はカマド内及び南東コーナー床面より土師甕片、覆土より須恵坏、埦片、甕片が出土した。

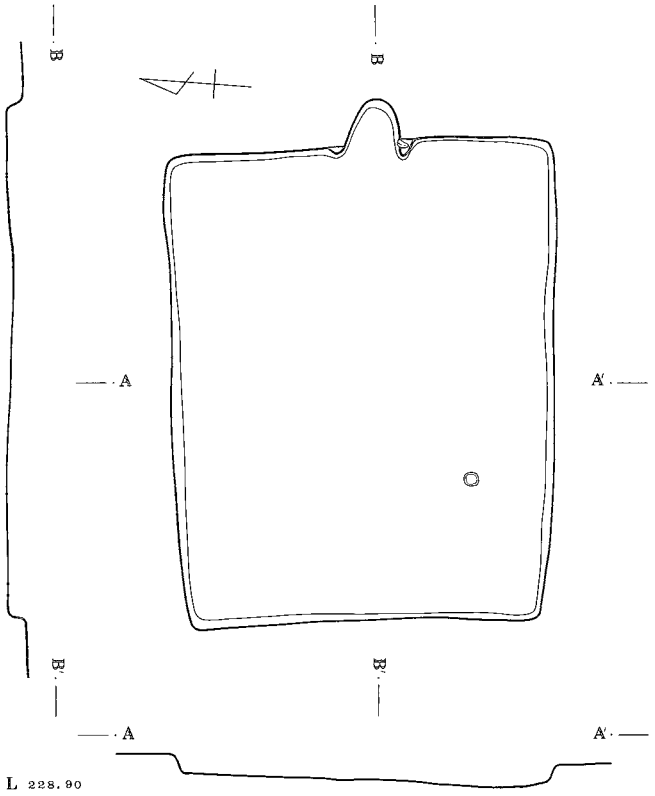
### E－126号掘立柱建物跡

東西に主軸をもつ建物と思われる。桁行3間、柱間は平均1.7mにほぼ統一している。梁行は西側で2間、東側で3間と対応していない。$P_8$が東側のほぼ中央にあり、西側の$P_2$と対応すると考えれば基本的に2間と言えよう。柱間は西側で2.0m、東側は$P_6$～$P_8$間2.0m、$P_8$～$P_9$間1.8m、$P_6$～$P_7$、$P_7$～$P_8$はそれぞれ90cm、1.2mとバラつく。




柱穴の規模もバラつきが多い。深さは70～110cmで全体的に深めだが径は$P_1$ 70cm、$P_{11}$ 75cmがとりわけ大きく、$P_2$、$P_3$、$P_9$、$P_{10}$が50cm内外で揃っている。また$P_4$～$P_8$は30～40cm弱と小さめである。

遺物は$P_{11}$より須恵坏片が出土した。

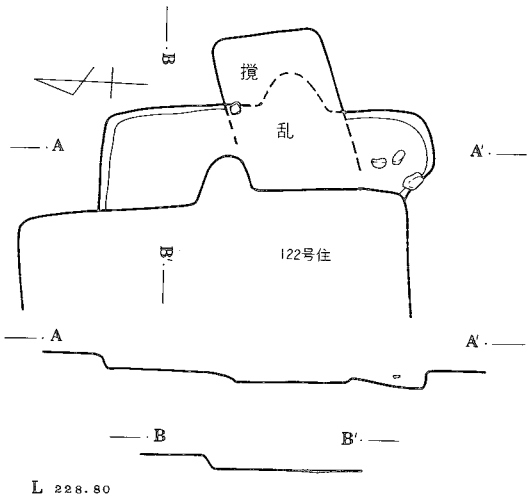



E－122号住居跡

東西5.0m×南北4.1mで住居西側がややすぼまるが、コーナー、壁共整った長方形を呈している。壁高は15～20cmである。

カマドは東壁中央に造られる。幅55cm、壁外部の長さは40cmで粘質土による袖部痕が左右両側に短く残り、右側は板状石を伴う。火床は地山面である。ピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド内より土師甕片、土師質甕片、須恵埦片、蓋片、覆土より土師質皿等でカマド部に集中する傾向が伺えた。




E－123号住居跡

住居東側が少々残存するのみである。大半は西側に重複する122号と東壁中央の攪乱が本住居を壊し、規模、形状はほとんど不明である。

住居南東コーナーは南壁側に張り出している。この部分は周りより僅かに低くなっており、焼土の散在と石材の出土がある。カマドの可能性としては東壁の攪乱部とこの張り出し部が考えられる。東壁攪乱部は床面より深く切り込むためにカマドがあったとしても痕跡は残らないであろうし、又、北壁ならば122号の床面レベルからその痕跡は残ると思われる。南壁カマドの例はほとんど無く、119号と120号のカマドは位置が南東コーナーに近いがあくまでも東壁側に存在していた。よって本住居のカマドは東壁の攪乱に切られた可能性が高く、南東張り出しをカマドとは考えにくいと言える。

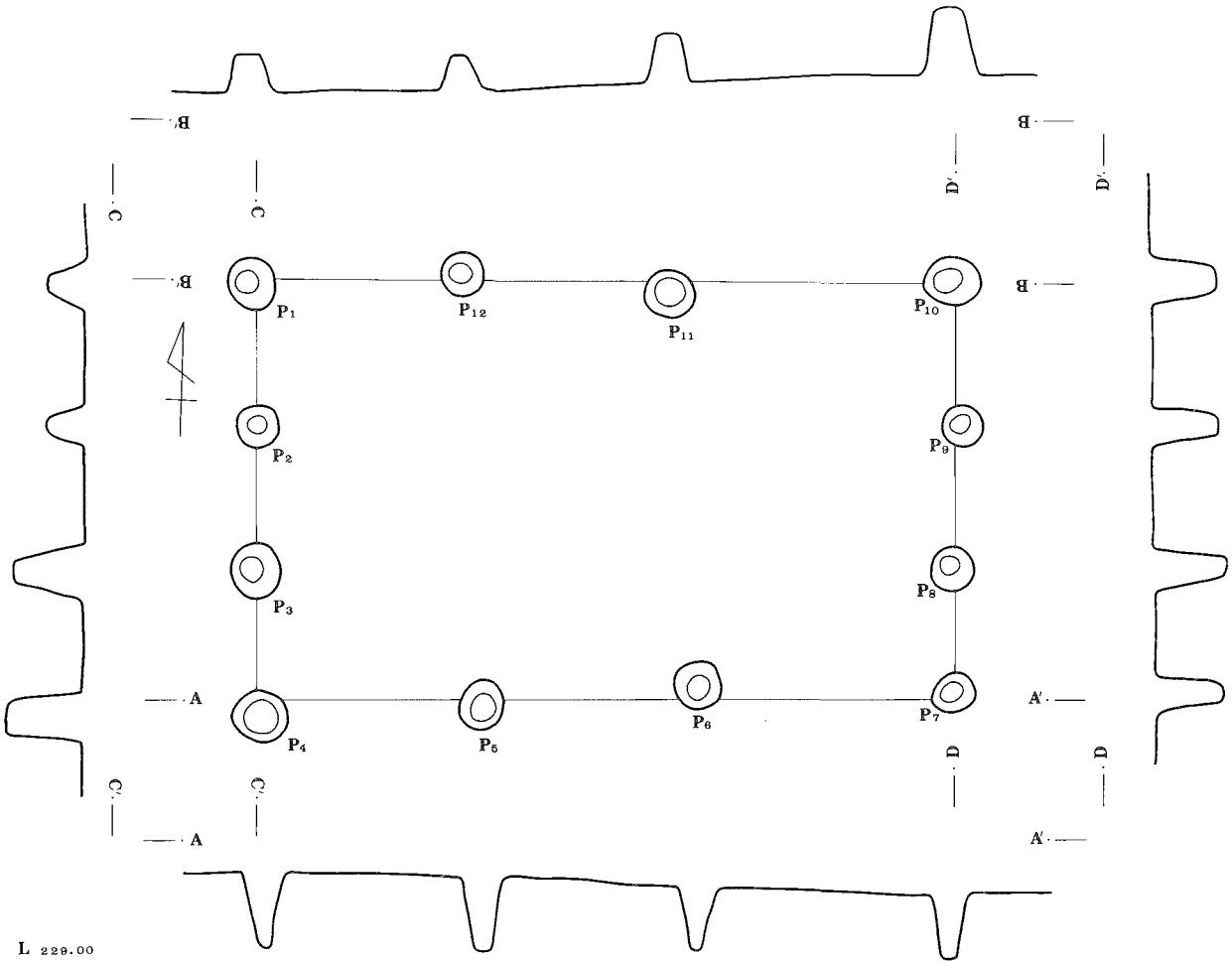
遺物は東壁際攪乱内より須恵埦が出土したが、これが原位置でない事は明らかである。他、須恵埦片少々が出土した。

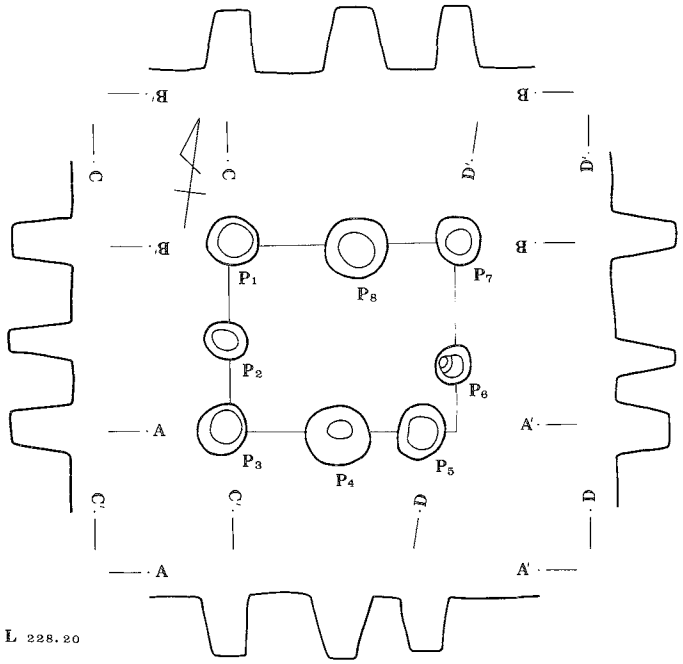
### E－125号掘立柱建物跡

125、126は掘立柱建物跡である。125と126は東西に隣接し、双方で一軒分とも思われたが軸が僅かにずれているので別建物として考える。

主軸は東西にあり、梁行３間、桁行３間で柱間は梁行が1.5m、桁行２、３ｍを測り、$P_6$～$P_7$間2.7m、$P_{10}$～$P_{11}$間3.0mが長い。柱穴の規模はバラつきが多く、径40～60cm、深さ35～80cmである。

遺物は全く検出されなかった。



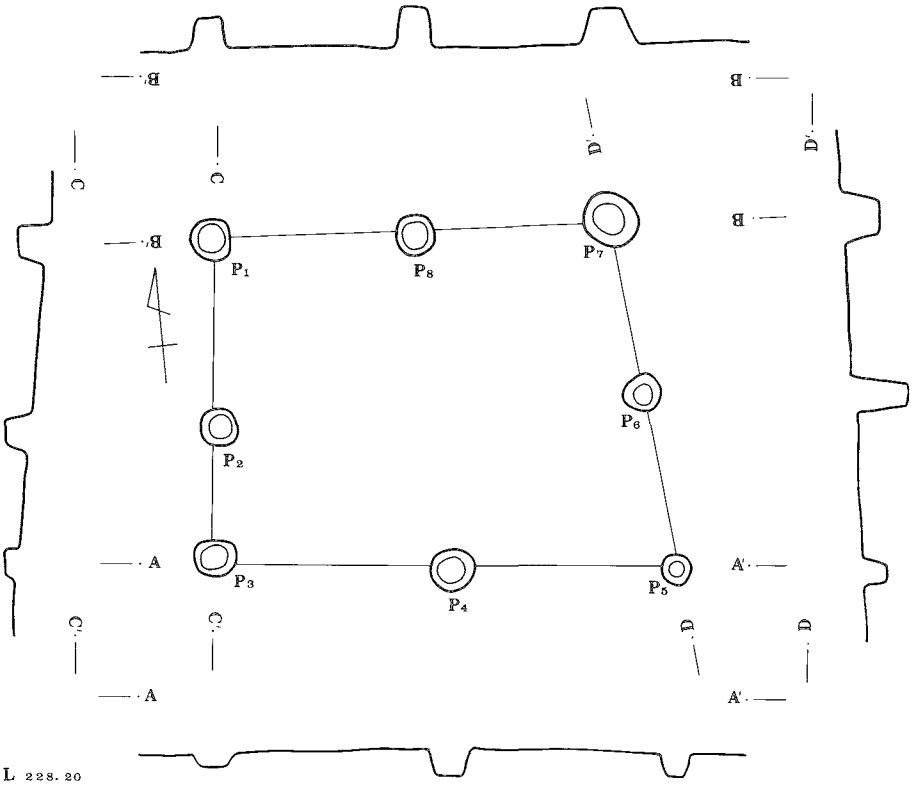



L 228.20

E－127号掘立柱建物跡

桁行、梁行が２間×２間の建物である。$P_5$が西側へ大きくずれているために東軸は揃わない。柱間は１～1.3mで$P_4$～$P_5$間が80cm、$P_5$～$P_6$間も80cmと接近する。規模は深さが55～68cmで比較的揃っており、径は$P_4$、$P_8$は65cmと大きく、他は35～50cm内外である。主軸は$P_4$と$P_8$を結ぶ南北ラインであろうか。

遺物は出土しなかった。

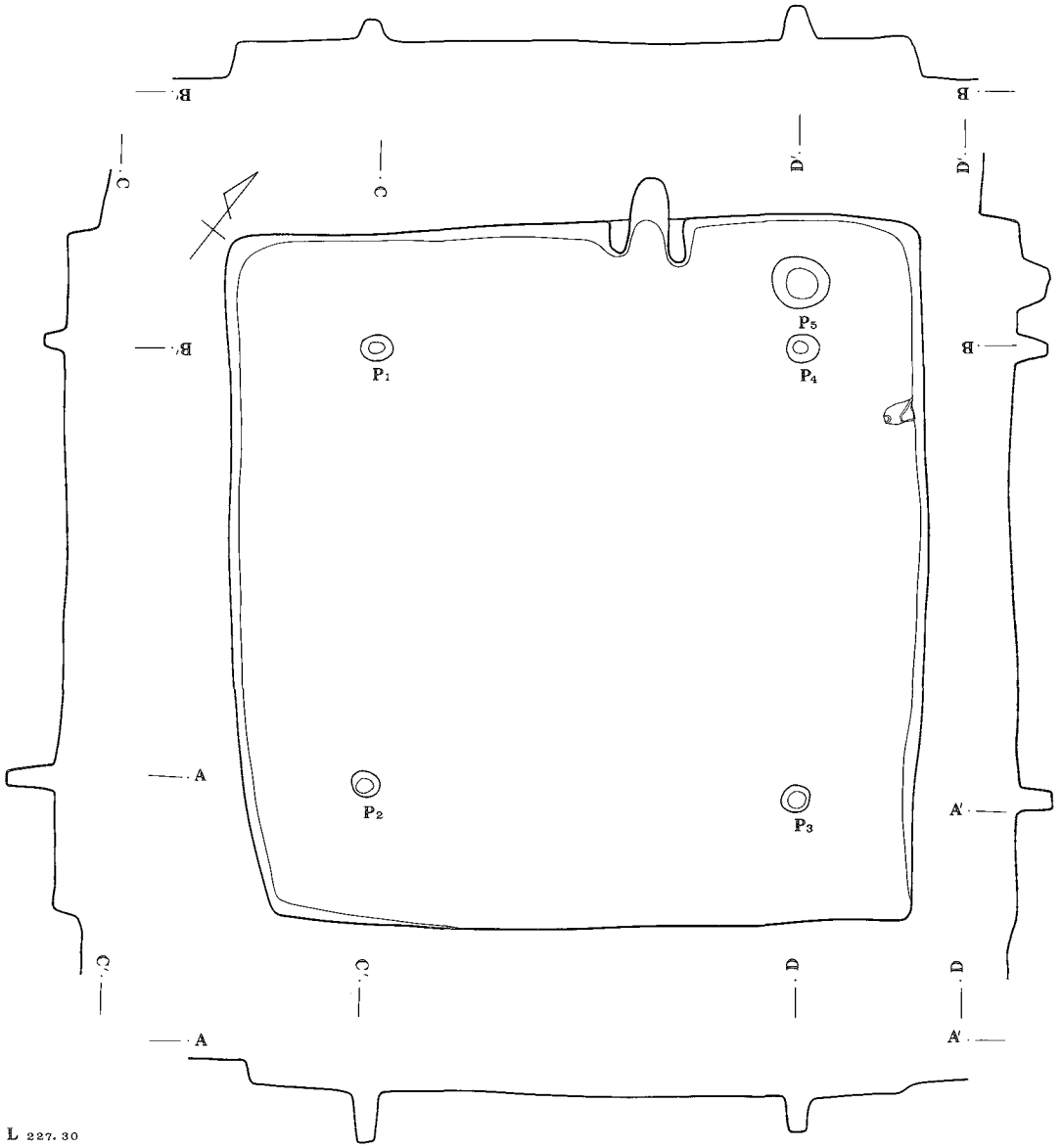



L 228.20

E－128号掘立柱建物跡

桁行、梁行は２間×２間である。東西に長軸をとり、こちらを桁行として考える。各辺の柱穴の並びは直線で結べるが東辺は西辺と並行せず大きく傾く。柱間は北側2.1m、南側で2.4m及び2.5m、東側は1.8mを測り、西壁が$P_1$～$P_2$1.9m、$P_2$～$P_3$1.4mと$P_2$が南へずれている。柱穴の規模は$P_7$径55cmが大きく、他多少のバラつきがあるが径30～40cm程である。深さは15～50cmと統一性が無い。

遺物は全く出土しなかった。




E－129号住居跡

主軸が大きく西へ傾く大型正方形の住居。東西7.6m、南北7.5m、壁高35～40cmで南壁は地山が傾斜するために西側の一部しか残存しない。

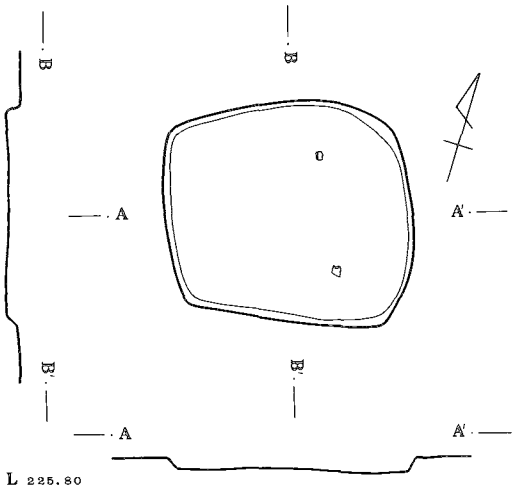
カマドは北壁東寄りに造られる。幅40cmで壁外部は長さ45cmの楕円状を呈し、壁内は粘質土の残存より推定して袖部を残した。火床は地山面であり、壁外へ向かって徐々に立ち上がる。石材は検出されない。

本住居には柱穴及び貯蔵穴が存在する。

杭穴は各コーナーから1.8m内外の距離にあり、径は30cm内外と小さいながら統一される。深さは$P_1$20cm、$P_2$50cm、$P_3$35cm、$P_4$35cmである。

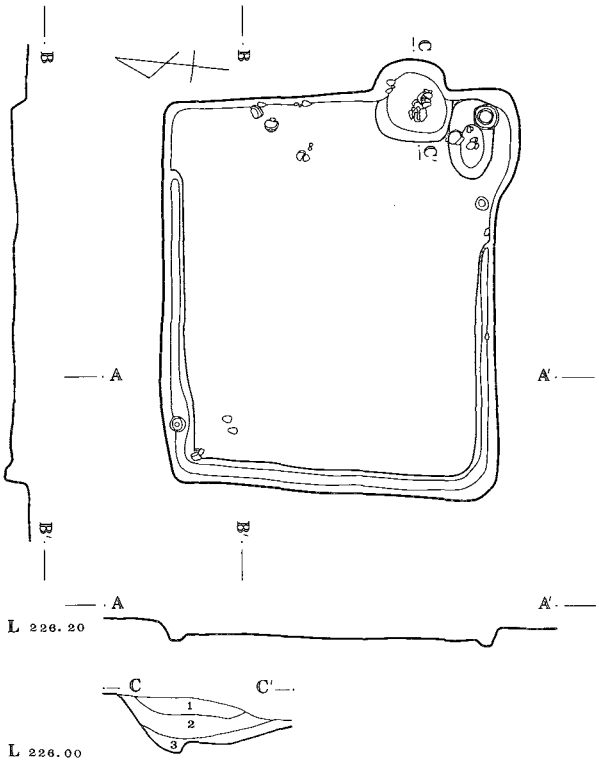
貯蔵穴$P_5$は北東コーナーややカマド寄りにある。径は60cm、深さ30cmを測る。遺物は伴わなかった。

遺物は東壁際より土師甕とカマド内及び覆土より土師甕片が少量出土した。




E－130号住居跡（？）

東西2.6m×南北2.3m、壁高10cmの隅丸方形。内部にピットは存在せず、壁の掘り込みや焼土も無くカマドは不明。下面は平坦で床面的ではあるが、カマドの不在や掘り込みが極端に小さいことなどから「住居」とは断定し難く、住居状の小型竪穴遺構としておく。遺物は覆土より須恵坏片、甕片等が数片出土した。




1層：天井崩落層と焼土の混在層。粘性のある暗黄灰色で赤灰色の焼土が少々混じる。
2層：焼土層。明赤灰色で黒灰色の灰が少々混じる。
3層：灰層。黒灰色でしまりはなく、湿気を帯びる。

E－134号住居跡

東西4.2m×南北3.5m、壁高10～15cmの長方形住居。南東コーナー南壁側は20cm程弧状に張り出しをもつ。また住居中央は石組み井戸に切り込まれる。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約70cm、壁外部は長さ30cmの半円状掘り込みで全体に浅いピットとなっている。貼床の形跡は無く、地山直上には灰層が乗っていた。袖部痕も無い。

東壁以外では壁周溝が検出された。幅は10～20cmで深さは7～8cm。北壁では東壁より60cm手前まで、南壁では張り出し部やや手前までで途切れている。

住居に伴うピット類は検出されなかった。

遺物はカマドより土師甕片、カマド右手から南東張り出し部付近の床面より土師坏、甕、東壁付近床面より須恵坏、北西コーナー際床面より須恵坏等、多量に出土した。また南東コーナーには遺物除去後に径80×48cm、深さ16cmの楕円形貯蔵穴が検出された。

## E－132号住居跡

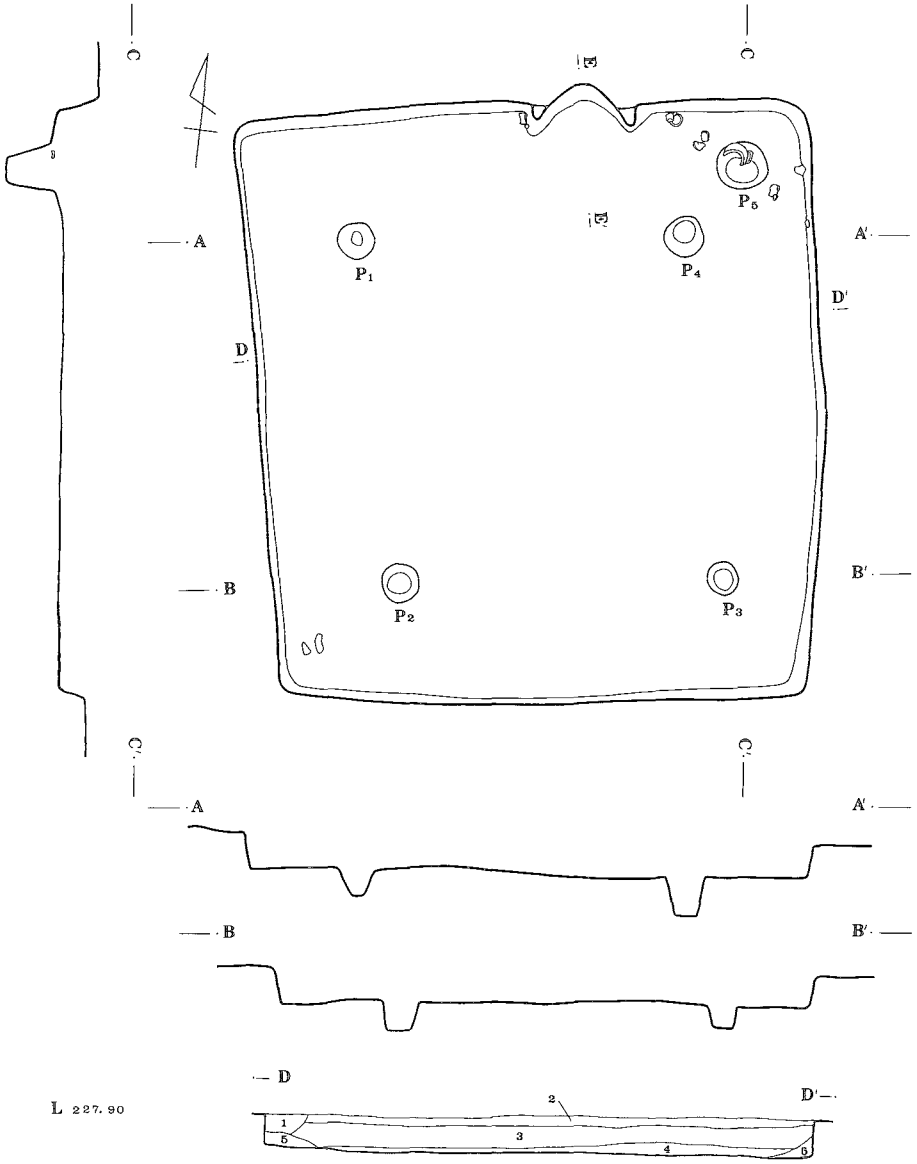
中央で東西6.0m×南北6.3mのほぼ正方形を呈し、各コーナーは角ばり、壁も直線的で僅かに東壁南側が内傾気味である。壁高は35～40cmを測る。

カマドは北壁東寄りに造られる。幅70cmで壁外への掘り込みは長さ25cmの三角形であり、壁内には粘質土の短い袖部痕が残る。火床は浅く掘り凹めた地山に焼土混じりのロームを埋め戻し、焚口とフラットにして使用している。燃焼部の中心は壁の内側であろう。石材は全く検出されなかった。

本住居では柱穴及び貯蔵穴が検出された。柱穴は$P_1$、$P_2$、$P_4$が径40cm内外で$P_3$が34cmと小さめ。深さは$P_1$26cm、$P_2$30cm、$P_3$22cm、$P_4$40cmである。位置は$P_3$がやや北東にずれる他は全て対角線上にあり、コーナーからの距離は1.4m～1.8mである。

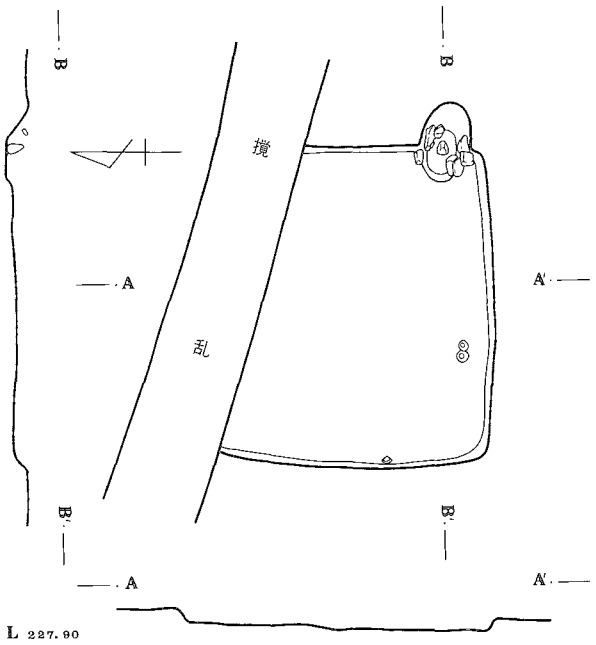
貯蔵穴は北東コーナー対角線上にある。径52cmで深さ50cm弱、北側肩口に土師甕口縁片が出土する。

遺物はカマドから貯蔵穴付近に多い。カマド左手床面に土師小型甕、右手より土師坏が、また貯蔵穴付近では床面やや上より土師坏が5個体分と南西コーナー床面に土師甕片、覆土より土師甕片が少々出土し、須恵器は全く伴っていなかった。




1層：撹乱層。A軽石を多量に含む黒色層でよくしまる。
2層：1層よりA軽石の少ない黒色層。
3層：A軽石及びローム微粒子を少々含む暗褐色砂層。
4層：ロームブロックを多量に含む暗褐色砂層。しまりはない。
5層：ロームブロック主体層。第1次堆積層。

1層：住居内覆土2層と同じA軽石を含む黒色層。
2層：天井崩落層。灰褐色粘質土層で僅かに焼土を含む。
3層：焼土層。全体に赤灰色でしまりなく脆い。
4層：貼床層。ローム及び焼土の混在。

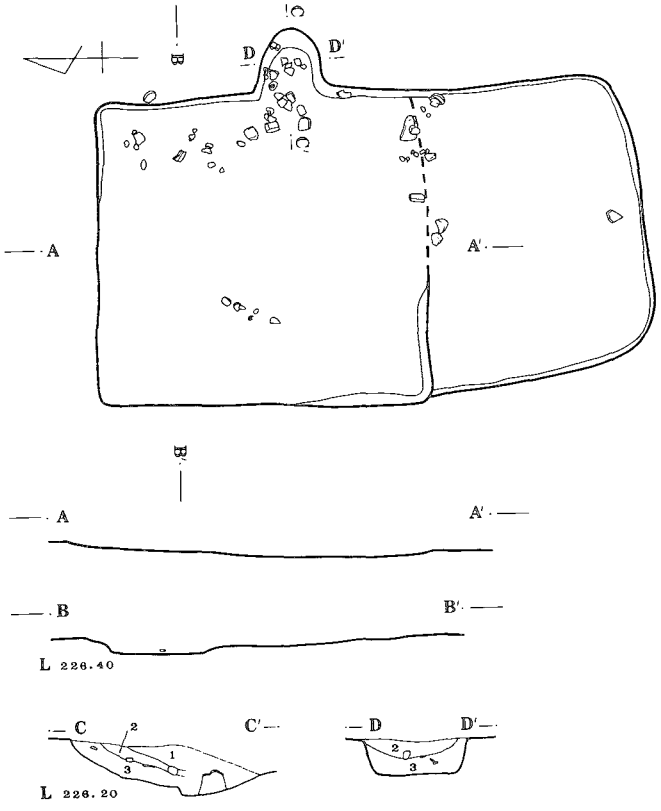



E－131号住居跡

北壁は溝状の攪乱に切られるため存在しない。東西3.4m、南北は西壁際で2.9mを残す。壁高は12cm程を測る。

カマドは東壁南端に造られる。掘り込みは幅50cm、長さ48cmの楕円形で側壁には自然石が据えられ、右側は数個が重なって少々崩れかかっているようである。火床は地山面で中央に自然石の支脚を置く。住居内にピット類は存在しなかった。

遺物はカマド内より羽釜片、覆土より土師質小型坏、須恵甕片、坏片が出土した。




1層：焼土混じりの暗褐色土。
2層：天井崩落層。粘質黄灰色土で焼土を少々含む。
3層：焼土層。灰及び僅かなローム粒を含む。

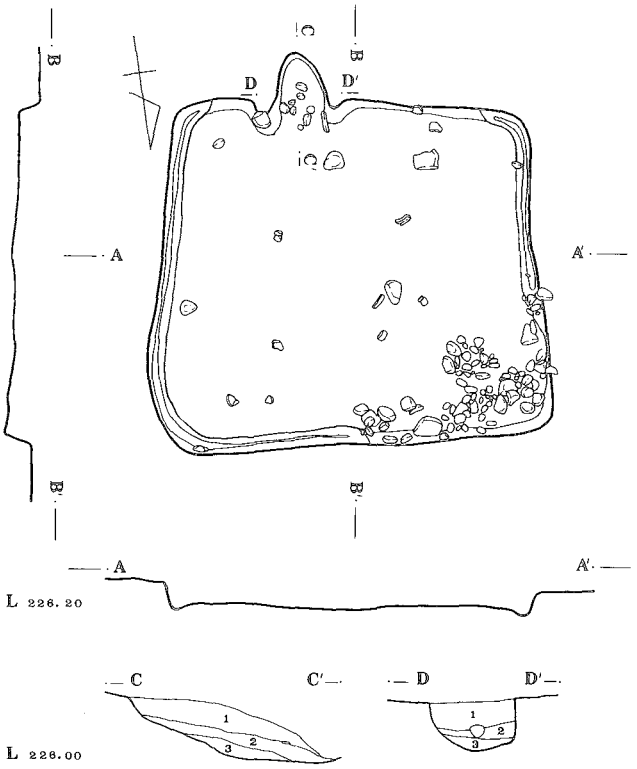
E－136号住居跡・住居外遺構

東西3.4m、南北は残りが悪いが推定で3.5m程と思われ、正方形の住居であろう。南側に続くプランは当初、重複か136号に伴うものかの判断がつかなかったが、本住居のプランとしては軸が東へ傾き、段差がつくことと伴うと思われる遺物の時期的な差異などから、別の遺構の重複と判断し「136号住居外」として扱う。

さて、本住居のカマドは東壁中央に造られる。幅70cmで楕円形の掘り込みは長さ65cm。カマド内及び手前には土器と共に板状石片が散在し、石組みであったことを窮わせるが原位置で残るものは無い。袖部痕も存在しない。カマド部貼床、ピット類も検出されなかった。

遺物はカマド内及びその手前より土師質甕片、須恵埦片、坏片、南東コーナー床面より土師質甕片等が出土した。なお、南東コーナー部南側の土師坏は、136号住居外遺構に伴うと考えられる。

136号住居外の遺構は、東西3.1mで南北は不明。カマドやピット類は検出されず、住居と断定は出来ない。残存部北東部床面より土師坏、覆土より土師小型甕、台付甕片等が出土している。



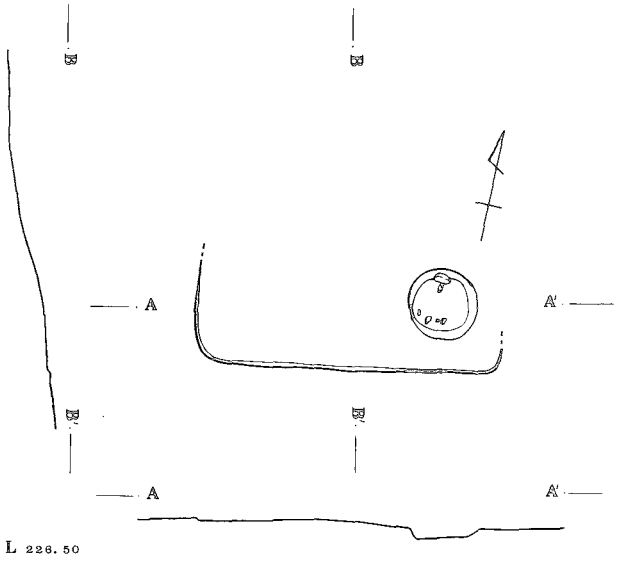

1層：天井崩落層。灰褐色粘質土。
2層：焼土層。赤灰色で所々に黒灰色の灰が混存する。
3層：貼床層。ロームと黒色土の混在。

E－137号住居跡

中央で東西4.0m×南北3.6mを測る。住居北西部は徐々に傾斜し地山のロームが存在しない。自然礫を伴う何らかの攪乱が斜めに入り込み、この礫群は住居プラン外にも続く。よって北西コーナーは推定プランとして掘り残してある。

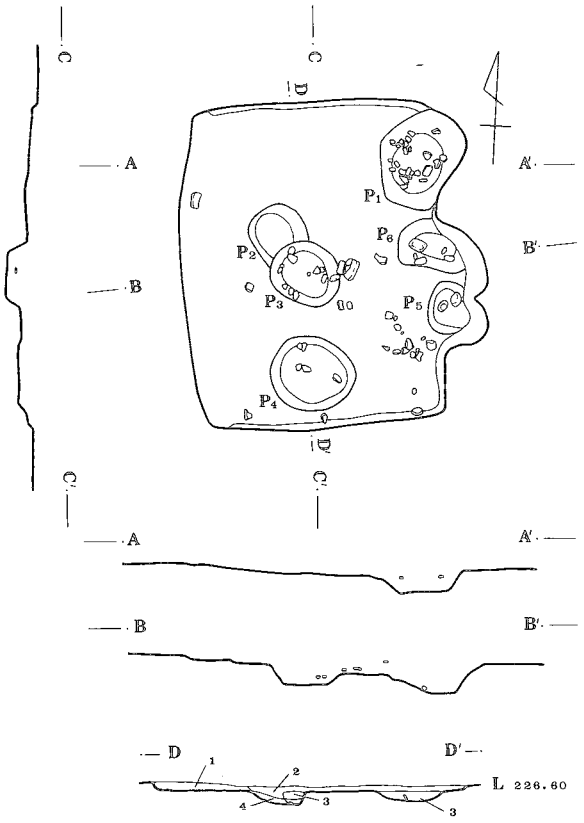
カマドは南壁東寄りに造られる。幅50cm、長さ50cmで壁内両脇に袖部痕と思われる灰褐色粘質土部分が残る。右側の板状石は原位置と思われるが左袖部と右袖部手前の自然石は明らかに崩れ落ちており、これらは焚口に置かれていたものであろう。またカマド内部から細かな自然礫が数個出土し、これらは皆焼けていた。どういうものかは不明である。石材は他によく焼けた板状石がカマド右手床面にも出土した。住居に伴うピット類は検出されない。壁周溝がカマド両側及び攪乱部以外に巡り、平均幅18cm、深さ4～5cm程の規模をもつものである。

遺物は床面より土師坏、覆土より土師甕片、坏片、小型埦、須恵甕等が出土した。




E－139号住居跡（？）

南壁と思われるプランと円形ピットのみで住居と断定は出来ない。西、東両壁の僅かな立ち上がりはその距離が3.3mであり、南面コーナー部の残りは約5cm。南東部のピットは径75cmの正円で深さ約10cmである。底面からは須恵坏片、土師甕片、焼けた板状石片が出土した。また南東コーナー際には須恵坏片、土師坏片が出土した。



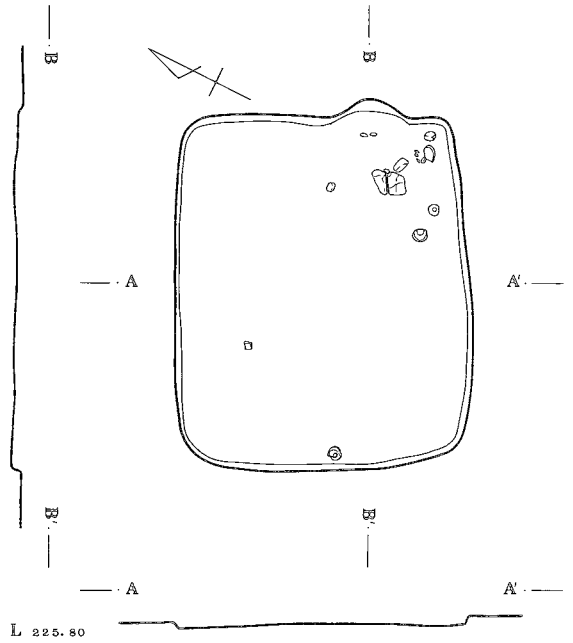

1層：ロームブロックを多量に含む暗褐色土でしまりが悪い。
2層：焼土粒及びローム粒をまばらに含む黒色土層。
3層：焼土中に少々ロームブロックが混在する。
4層：1層と同じだが、よくしまっている。

## E－138号住居跡

南北3.4m、東西は南壁際で2.6mを測る長方形住居。残存状態は南壁で10cm程だが北壁部では3～4cmしか残ってはいない。

本住居ではピットが多く掘り込まれ、カマド部分のものも含めて$P_6$までとした。$P_1$及び$P_5$、$P_6$は東壁にかかり大きく外へ張り出すものである。このうち、$P_6$東側の少々テラス状になった斜面から焼土が出土しており、この部分がカマドではないかと思われる。$P_6$上面にも焼土は僅かに存在しており、また、すぐ南側の$P_5$も覆土に少々焼土を含む。土層断面からこれらの前後関係はつかめなかったが、$P_6$は後に掘立柱建物の柱穴列の一部と考えた。カマドが東壁であることは他にその形跡が無いことからも明らかであろう。$P_1$、$P_5$、$P_6$共に覆土より遺物片が多く出土する。$P_5$と$P_6$の下位に頭を出す自然石は段丘礫である。

$P_2$～$P_4$は住居中央から南側にかけて検出されたピットである。このうち、$P_2$の覆土の主体は焼土であった。$P_2$、$P_3$には遺物が伴い、$P_2$底面にはコの字状口縁土師坏片が出土している。全体的に見ると遺物は他に須恵坏片、埦片等が多い。



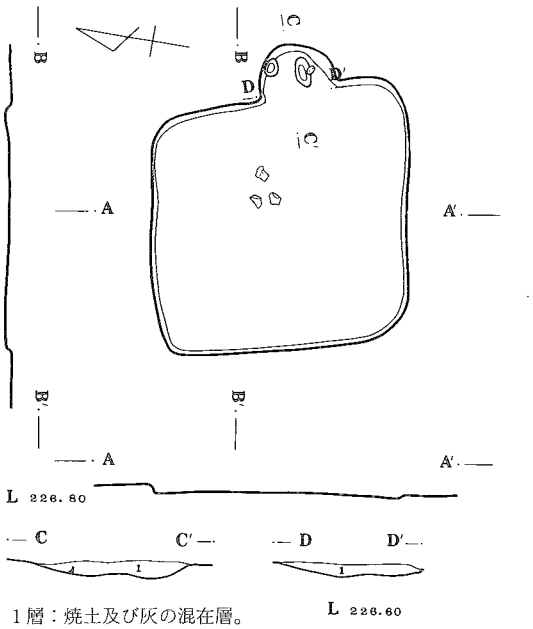

## E－140号住居跡

中央で東西3.7m×南北3.1m、壁高10cm弱の長方形住居。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約80cmで壁外へは15cm程弧状に少々張り出す。壁内側左右は地山が少々盛り上がる。カマド内から焚口付近には焼けた板状石片が散在し石組み材の残骸と思われる。また、南東コーナーにかけて焼土が床面上に存在する。

住居内にピット類は検出されなかった。

遺物は南東コーナー床面よりコの字状口縁土師甕、覆土より須恵坏、高坏片等が出土した。



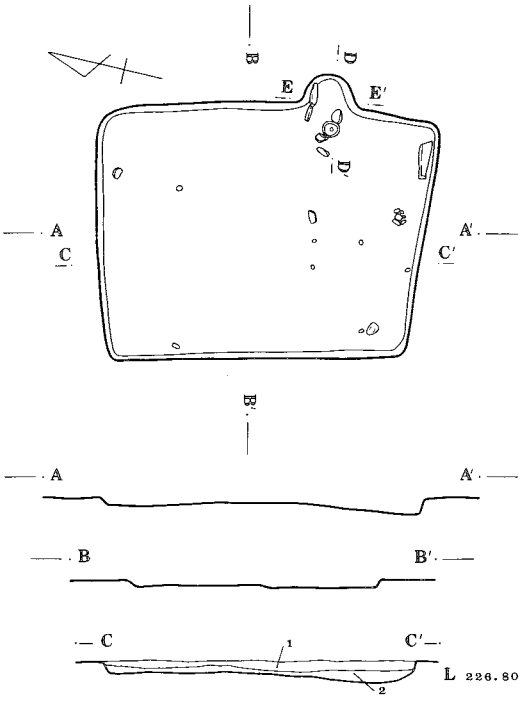

1層：焼土及び灰の混在層。

## E－141号住居跡

東西2.7m×南北2.7mの小型隅丸方形の住居。カマド右手の南東コーナーは少々東側に張り出している。壁高は6～7cmを残すのみ。

カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。幅80cmで長さ50cm弱の半円状掘り込みを残し、内部中央やや右と左端にある小ピットは石材が抜けた痕か。それらしき石材は無くカマド内には板状石小片1片のみであった。袖部痕も存在しない。貼床も不明で、僅かに凹んだ地山上には焼土と灰の混在層が少々確認されたのみ。

カマド内のピットの他、住居内にピットは検出されなかった。遺物も土器類は全く無く、住居中央の自然石片及びカマド内の石片のみである。




1層：ローム粒及び軽石微粒子を僅かに含む暗褐色土層。
2層：基本的には1層で、ロームブロックを多量に含む。

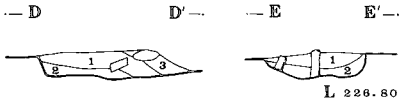
## E－142号住居跡

東西2.7m、南北は南東コーナーが張り出すために西壁で3.2m、東壁で3.6mである。壁高は10～15cmで各壁は直線的にきちんと掘られている。

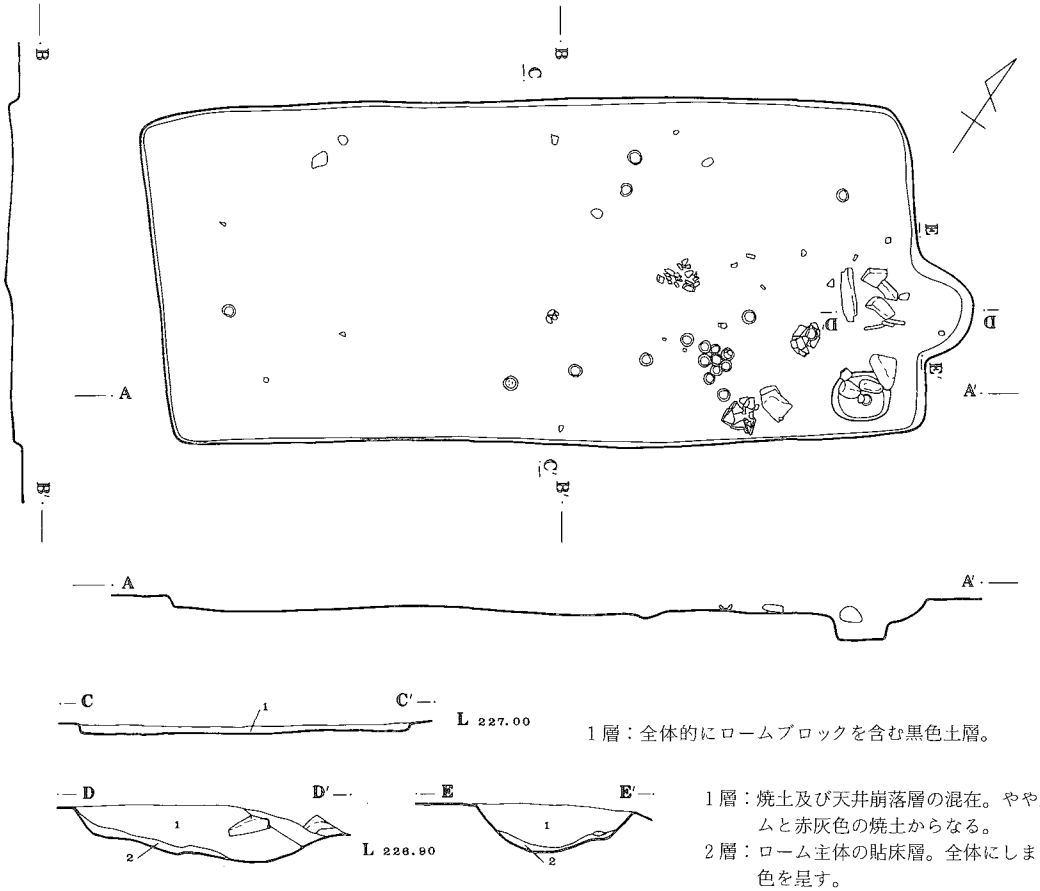
カマドは東壁南寄りに造られる。幅55cmで壁外部は長さ26cm、左側壁には板状石が残り、中央に立つ板状石は支脚としての機能をもつものかは不明。また焚口手前には細長い自然石がある。火床はロームと褐色土の混土で貼床をしている状況が確認され、直上に焼土を多量に含む層が乗る。覆土中には崩れた板状石片が数片混じっていた。

住居内にはピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド焚口付近より須恵坏、覆土より須恵塊が、また、南東コーナー床面から長さ40cmの大きな板状石が横立ちの状態で出土した。




1層：天井崩落層と焼土の混在。全体に赤灰色。
2層：貼床層。ローム及び黒色土。
3層：住居内覆土の1層と同じ。




1層：全体的にロームブロックを含む黒色土層。

1層：焼土及び天井崩落層の混在。やや灰色がかるロームと赤灰色の焼土からなる。
2層：ローム主体の貼床層。全体にしまりは悪く、黄灰色を呈す。

### E－143号住居跡

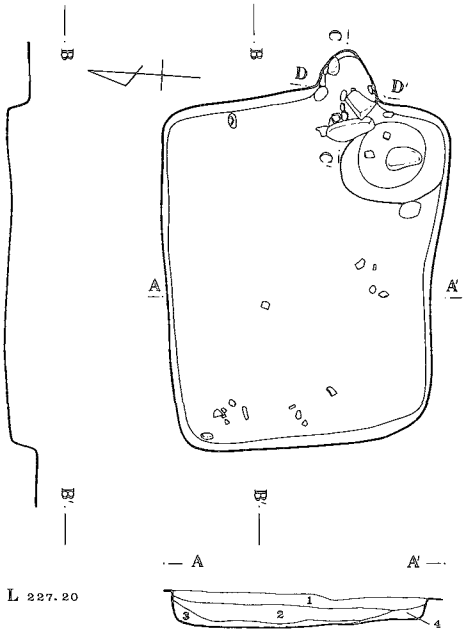
143号から149号まではE区南端拡張部に検出された。

本住居は長軸を東西にとるが軸がかなり北に傾き、北東コーナーがほぼ北に向いている。東西8.2m、南北3.7mで超縦長長方形の住居。壁高約10cm。

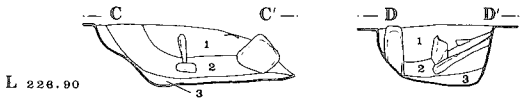
カマドは東壁中央やや南寄りに造られる。幅約90cmで壁外部は長さ50cmの半円状掘り込みを残し、壁内側約30cmの位置には板状石が左右の焚口を構成するように横立ち状態で検出された。左側は斜めに傾き、その手前の大きなものは上部に架けられたものの崩落と思われる。掘り込み部から石材部にかけては地山上にローム埋戻しの貼床が5cmとその上部は大量の焼土及び粘質土からなる崩落層である。

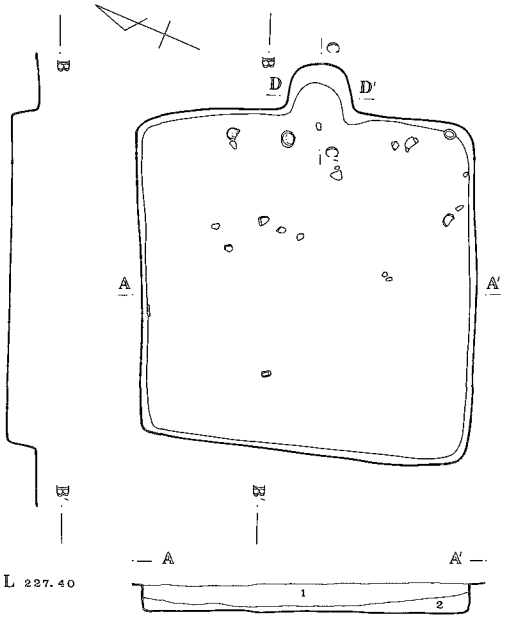
カマド右手の南東コーナーには貯蔵穴があり、径60×50cm、深さ20cmである。底面に土師坏、覆土直上には板状石と自然石が乗っていた。住居内には貯蔵穴以外のピットは存在しなかった。

遺物は土師坏が大量に出土しており、24個体分を数える。これらは貯蔵穴内の1個以外全て住居床面レベルの出土である。特に住居南東部には10個が集中し、西壁付近の1個を除いては全て住居東側に集まる。坏以外には土師甕がカマド手前とやや西の坏集中部の北側に潰れた状態で存在し坏集中部南側には大型甑がやはり潰れて出土した。他、土師甕片、須恵坏片が僅かに覆土より出土している。




1層：軽石微粒子をまばらに含む暗褐色土層。
2層：1層と同じで軽石を含まない。
3層：径5cmのローム ブロックを多量に含む灰褐色土層。
4層：ローム粒を僅かに含む黒色土層。しまり悪い。




1層：ロームブロックを多量に含む暗褐色層で遺物の出土多し。
2層：1層よりロームが少なく、全体に黒色を帯びる。

## E－145号住居跡

中央で東西3.7m、南北2.8mを測り、住居南東部南壁側は30cm程弧状に張り出している。壁高は25～30cmと比較的良好に残る。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅60cmで壁外部は長さ45cmの三角状掘り込みである。焚口両脇に自然石を立て、側壁は左側に自然石と板状石が原位置で存在する。焚口には板状石片と脆化した長い自然石のカマド構成石材が崩れ落ちていた。火床は焚口とフラットで掘り込み部から立ち上がりまで地山上に灰層を確認した。貼床は無い。

カマド右手の南東コーナーには貯蔵穴状の凹みが存在する。壁から続いてカマド焚口付近まで達する浅いピット状の凹みで径110×100cm、深さはボウル状断面の中心で床面より13cmである。覆土は炭化物混じりの焼土からなり、直上には大きな自然石、須恵甕片、坏片、土師甕片が散在する。ピット類は他には存在しなかった。

遺物はカマドより土師甕片、坏片、貯蔵穴部の須恵坏片等、東壁際覆土より須恵皿、西壁際覆土より須恵部、土師小型甕片等が出土した。

1層：天井崩落層が混在する住居覆土。黒色土層。
2層：天井崩落層。黄～赤灰色で粘性あり。
3層：灰層。しまりなく湿気を帯びる黒灰色。

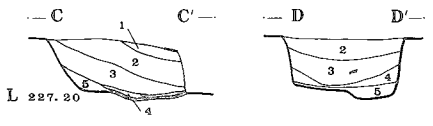
## E－146号住居跡

中央で3.6m×3.6mを測る少々歪んだ正方形の住居。壁高は25～35cmである。

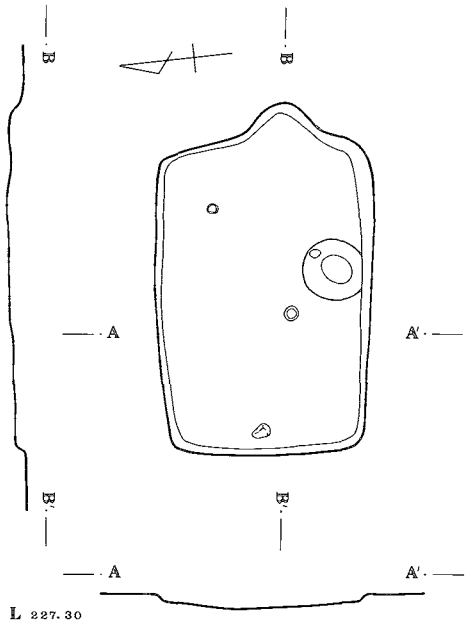
カマドは東壁中央に造られる。幅65cmで壁外部は長さ45cmの半円状掘り込みである。火床は地山面と思われ、最下層は灰層である。覆土より板状石片が僅かに検出された。右袖部の位置はロームが少々掘り残され突出気味であり、袖部痕と思われる。

住居内にピットは全く存在しない。

遺物はカマド内に土師甕片、カマド焚口床面に須恵坏、南東コーナー床面に土師坏、覆土より土師坏が数点出土。




1層：住居覆土。ロームブロック混じりの黒色土層。
2層：天井崩落層。やや粘性のある暗灰色土層。
3層：焼土層。赤灰色を呈す。
4層：焼土層。明橙灰色でやや粘性を帯びる。
5層：灰層。黒灰色を呈す。



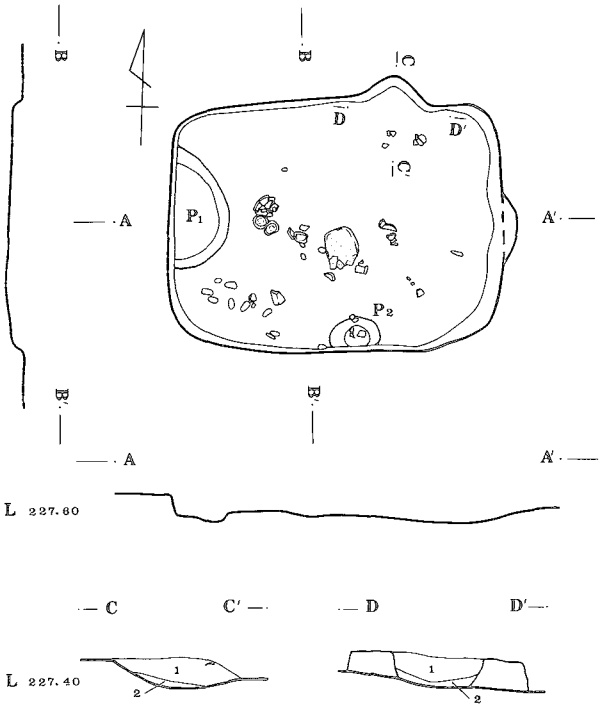

## E－147号住居跡

147、148、149の重複関係は平面精査で149→147、149→148の所見を得た。

東西3.3m、南北2.3mの小型長方形住居、壁高は5cm程と僅かで、住居床面中央付近では掘り込みがやや深いため、上端より15cmを測る。

カマドは東壁中央である。掘り込み幅は広く、80cm程で三角形状に25cm程張り出す。石材、袖部痕は全く無い。南壁中央のピットは149号の柱穴であり本住居に伴うものではない。このピットには径10～20cm程の自然礫が放り込まれるように入っており、それが本住居床面よりも上位に盛り上がっていた。何のための礫かは分からない。

遺物は床面中央より須恵坏、北東部覆土より土師質小型埦、覆土全般では土師甕片、坏片、須恵甕片、坏片が出土している。




1層：焼土と炭化物を多量に含む粘質土層。
2層：灰を主とする黄灰色粘質土層。

## E－148号住居跡

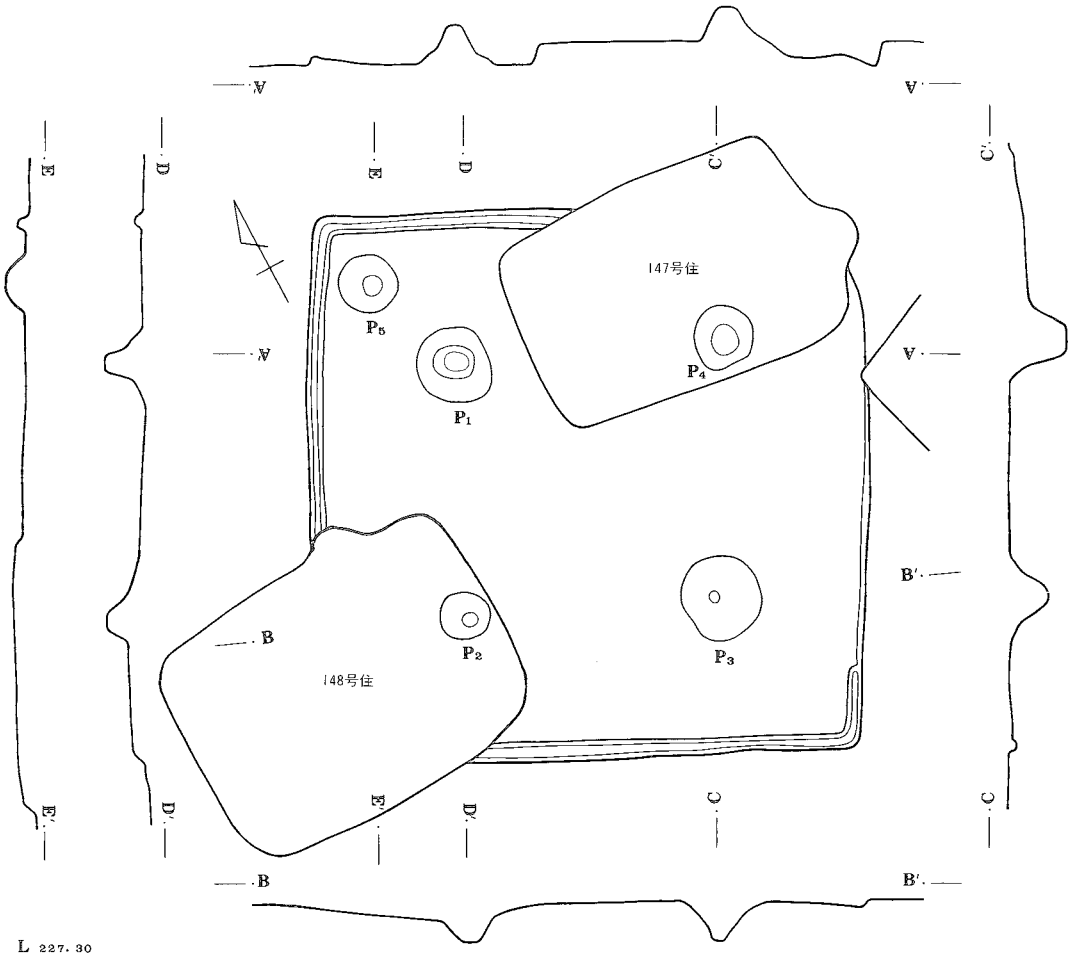
重複する149号の西側コーナー部分を切り込んで構築されている。東壁中央は149号の柱穴の位置にあたり、壁をやや掘り過ぎたが本来は直線になるものである。

本住居の規模は東西3.5m、南北2.6mの小型隅丸長方形で壁高20cm弱である。東壁の立ち上がりは149号の柱穴部以外でも比較的ゆるやかである。

カマドは北壁南寄りに造られる。幅70cm、壁外部は30cmの長さで袖部痕や石材は全く伴わない。焚口よりやや低い位置に火床面があり、明確な貼床層は無い。

本住居と伴うと思われるピットが2か所検出された。$P_1$は西壁際に半円状に掘り込まれるもので東西65cm、南北は110cm、深さは床面より約10cmである。一方、$P_2$も南壁にかかっており、直径52cm×南北35cmの楕円形と思われる。深さは約10cmでこちらは覆土に焼土が混じる。双方共に遺物は伴わない。

遺物は覆土より土師甕片、須恵蓋、坏、長頸壺片等と共に長さ7～12cm程の小さなこも石状礫が南西コーナーに集中していた。




E－149号住居跡

北壁が大きく東に傾いている。住居東側と西側は147号と148号に切り込まれ残存しない。中央で東西6.0m×南北5.8m、壁高10cm弱の整った大型正方形住居。

カマドの痕跡は全く検出されないが、住居西壁及び南壁カマドの例が極端に少なく、又、一辺5mを越す正方形住居では例外なく北壁カマドであることから、本住居も北壁カマドであり、147号に切られたものと考えられる。

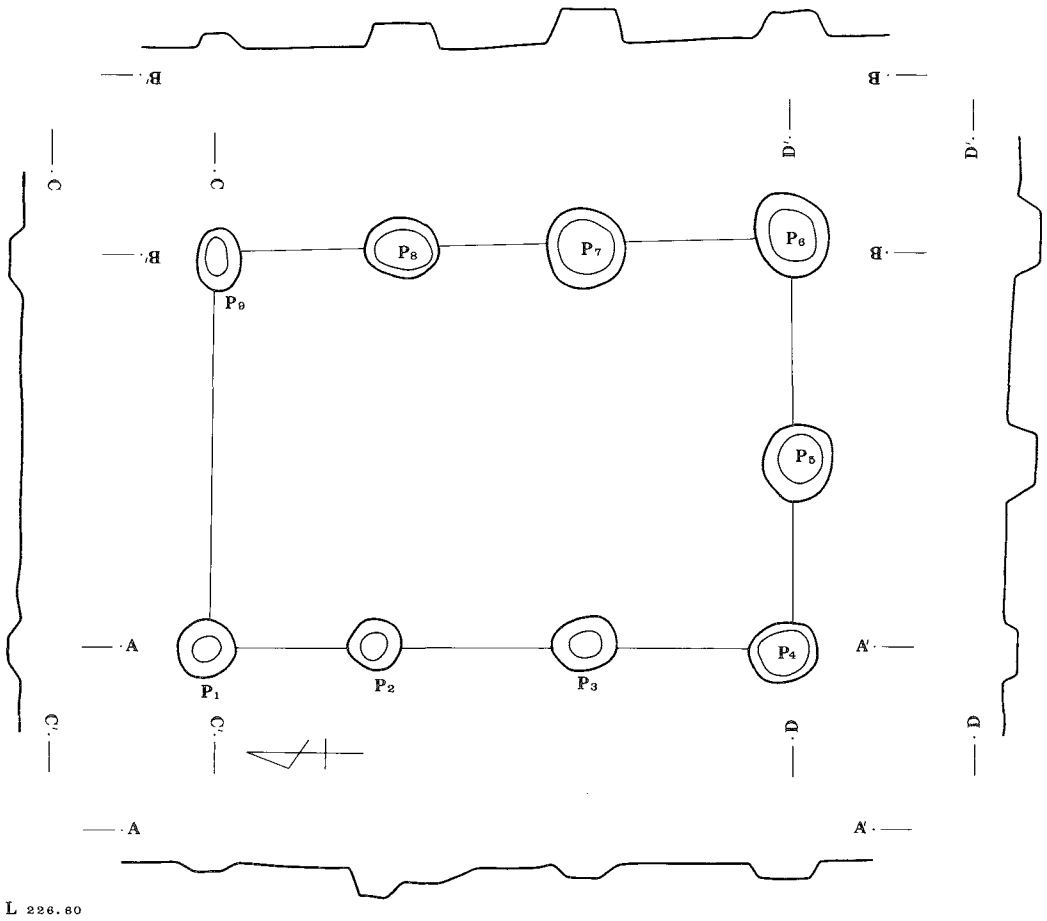
本住居には柱穴、貯蔵穴、壁周溝が検出されており、以下各々についてその規模、形状を概観する。

$P_1$～$P_4$の4基が柱穴である。このうち$P_2$と$P_4$は上部が重複する住居に削られており、$P_1$と$P_3$が本住居柱穴としてよく残る。掘り方は上部で斜めに内傾し、その後底面まで急に落ち込む形状である。上端径は双方共80cm内外、深さは40cmである。$P_2$と$P_4$も多少の差はあるがほぼ同じ深さになると思われる。

貯蔵穴$P_5$は北西コーナーに存在する。径62cm、深さ20cmで遺物、焼土等は検出されなかった。

周溝は東壁南端から北壁にかけて存在する。幅約15cmで深さ8cmを測り、床面からの落ち込みは比較的急であった。

遺物は全く出土していない。




E－150号掘立柱建物跡

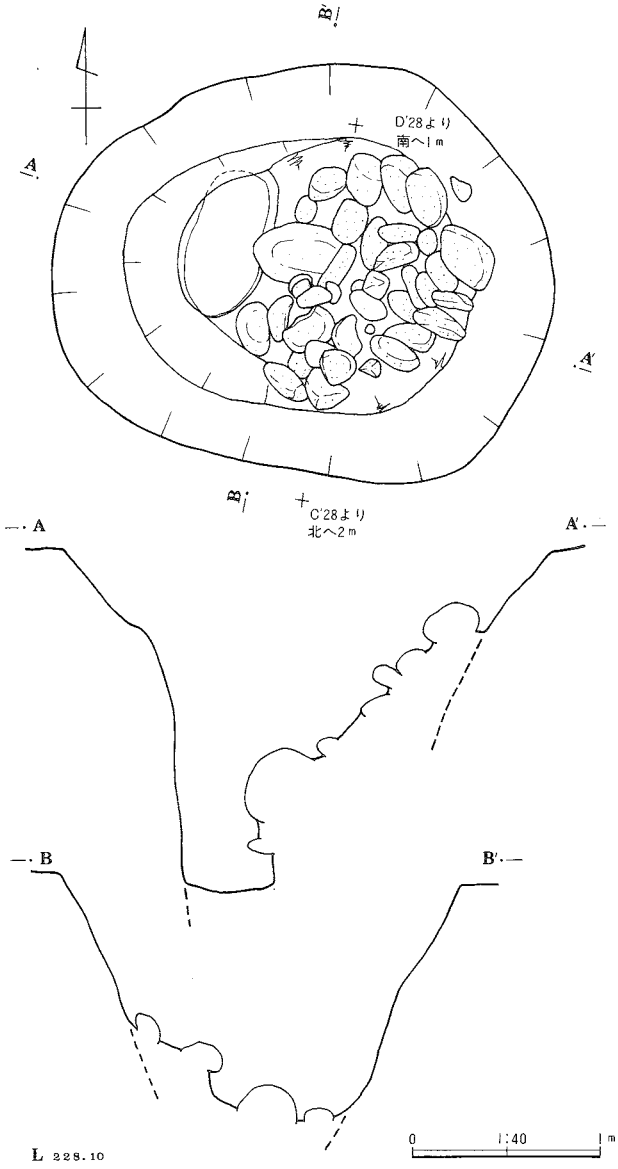
主軸を南北にもつ。桁行３間。梁行は南壁で２間だが北壁では１間で対応しない。柱間は桁行で平均2.0m、梁行は南壁の$P_4$～$P_5$が2.0m、$P_5$～$P_6$が2.3m、北壁で4.2mである。

柱穴の規模、形状にはややバラつきがある。径は50～85cmで$P_5$～$P_8$が大きめであり、他は１まわりから２まわり程小さい。$P_3$、$P_4$、$P_8$、$P_9$は楕円形を呈す。深さは１番浅い$P_1$ 8cmから最深の$P_7$38cmまでバラつきがあり、北壁にあたる$P_1$と$P_9$は径、深さ共に規模が小さくなっている。

遺物は$P_2$より出土したが、これは138号住居のカマド部を掘り込んだもので、138号の覆土遺物であると考えられ150号には伴わないであろう。

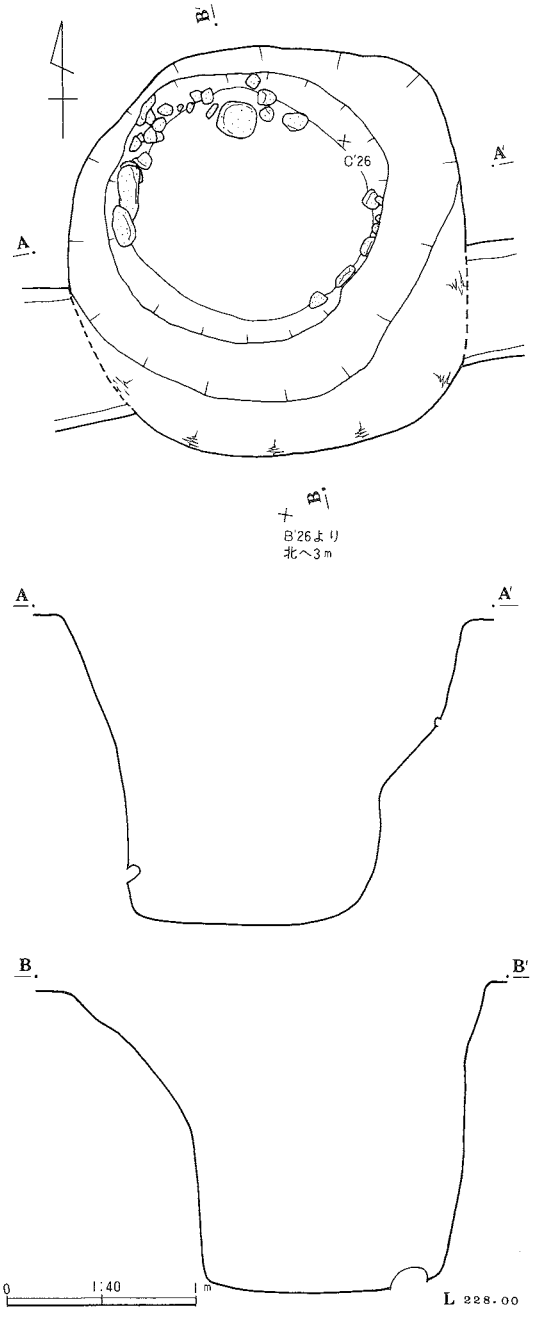
### E－1号井戸跡

E区北側中央付近に位置している。東西に長く長径2.7m×短径2.1mの楕円形を呈す。深さは1.8mまで確認したが、以下は狭くなり最深部には至っていない。東壁中～下位には長径20～30cm程の自然礫が斜めに落ち込むように存在する。これらは井戸の掘り方内部の褐色土に支えられ、地山のローム層にくい込んではいないため、石組み井戸としての原位置は保っていないのであろう。しかし、礫が比較的大型であるせいか、全体にしっかりしており、3号井戸のような脆さはない。掘り方は遺構確認面から40cm程までは斜め45度に落ち、以下、未掘の底面まではほぼ垂直に落ち込むようである。遺物は全く出土しなかった。



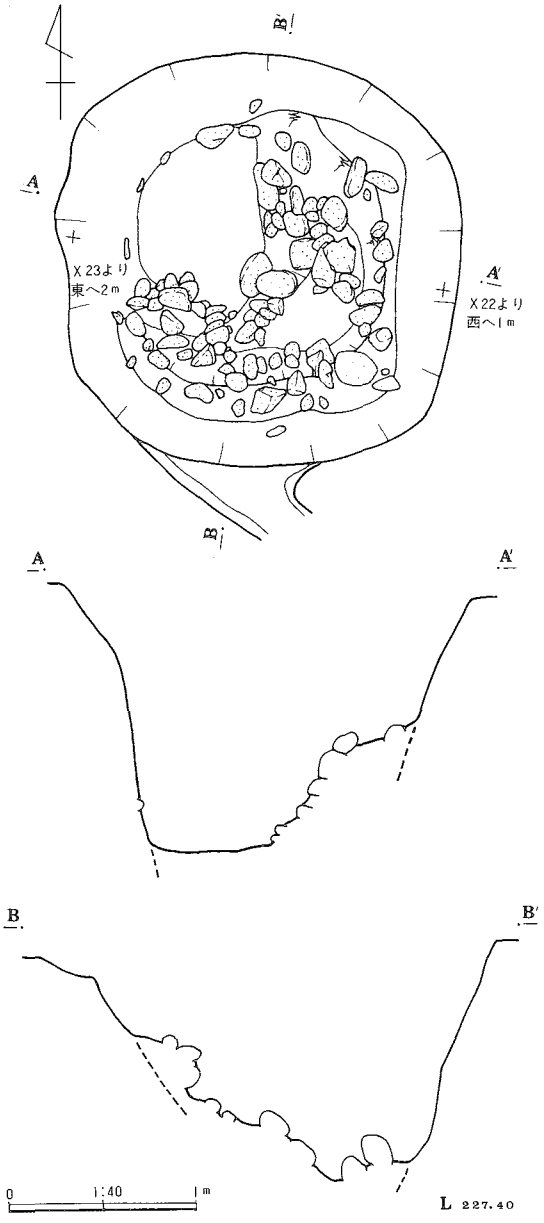

### E－2号井戸跡

E区北側中央で1号井戸跡の南東約10mに位置する。南側上部は後世の溝に切り込まれている。径は2.1mでやや不整な円形を呈し、基盤層を掘り抜いた底面までの深さは1.6mを測る。底面及び壁面下位には段丘礫層の一部が顔を出している。掘り方は北壁では確認面よりほぼ垂直であり、南壁から東壁にかけては上半部で約45度の角度の斜面の後に底面まで直下する。底面は平坦で広い。遺物は全く出土しなかった。



### E－3号井戸跡

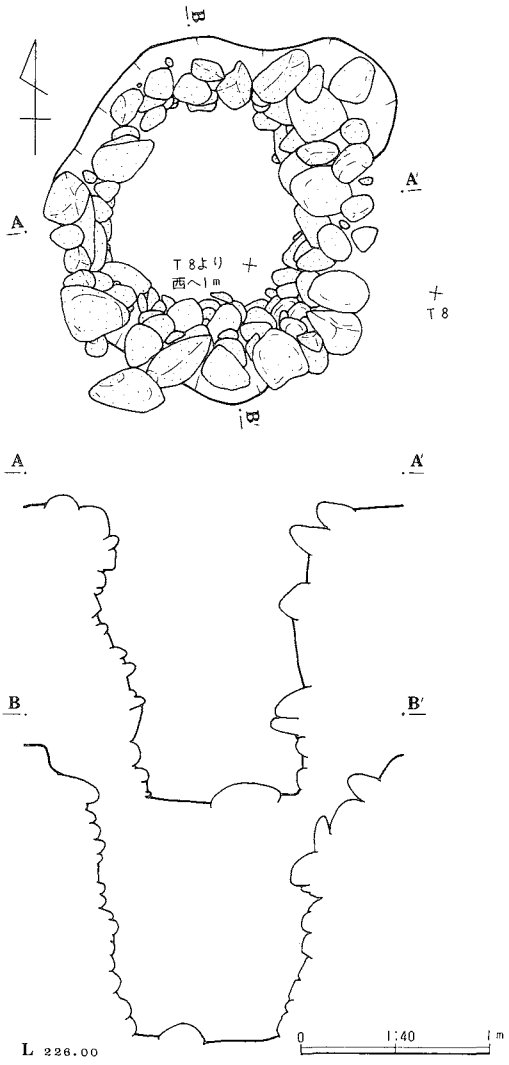
E区中央のX22～23グリッドに位置している。南壁上部は後世の溝に少々切り込まれる。形状はやや角ばった円形で径2.2m、深さ1.4mを測る。壁内は円形と言うよりは隅丸方形で、東壁から南壁にかけて径10～20cm程の自然礫が中程より崩れるように落ち込んでいる。気をつけないとすぐに崩れ落ちるような状況であった。掘り方は壁上部にかすかな段をもって底面まで落ちる。西壁に数個ある小礫は基盤層のもので、それ以下に検出されている底面は未だ井戸の底には至らない。南壁の礫群最下部より須恵埦片が出土しており、他に遺物は伴っていない。

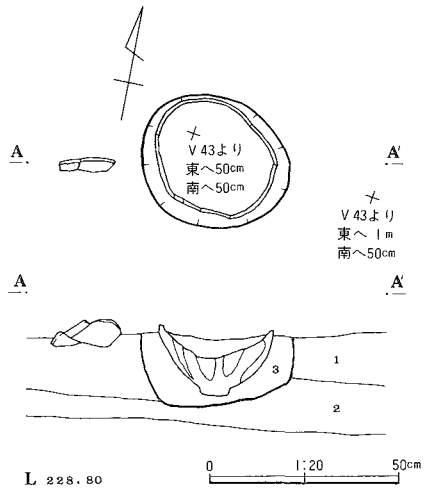



### E－4号井戸跡

E区南東部の134号住居中央に掘り込まれている。134号住居精査中に確認されたもので、当初、集石遺構として調査を進めたが、外周部の礫がしっかりと石組み状をなし内部の礫は覆土内に不規則に落ち込む状況が確認出来たため、井戸と判明した。

掘り方上端ラインが北側と南側の一部に確認された。この幅（径）は1.9m、南北径は石端部で1.7mを測り、やや角ばった円形状と言える。深さは壁石上部から底面まで1.6mでほぼ垂直に壁面が落ちている。壁面は最下位まで礫が組まれている。覆土は炭化物と僅かな焼土粒を含む褐色砂質層が上部50cmまで存在し、以下は焼土粒と軽石粒を僅かに含む褐色砂質層である。上より50cmの所に一部焼土の純層が塊状に検出された。全体に自然礫が含まれており遺物は須恵皿、坏片、甕片等が上半部より出土した。

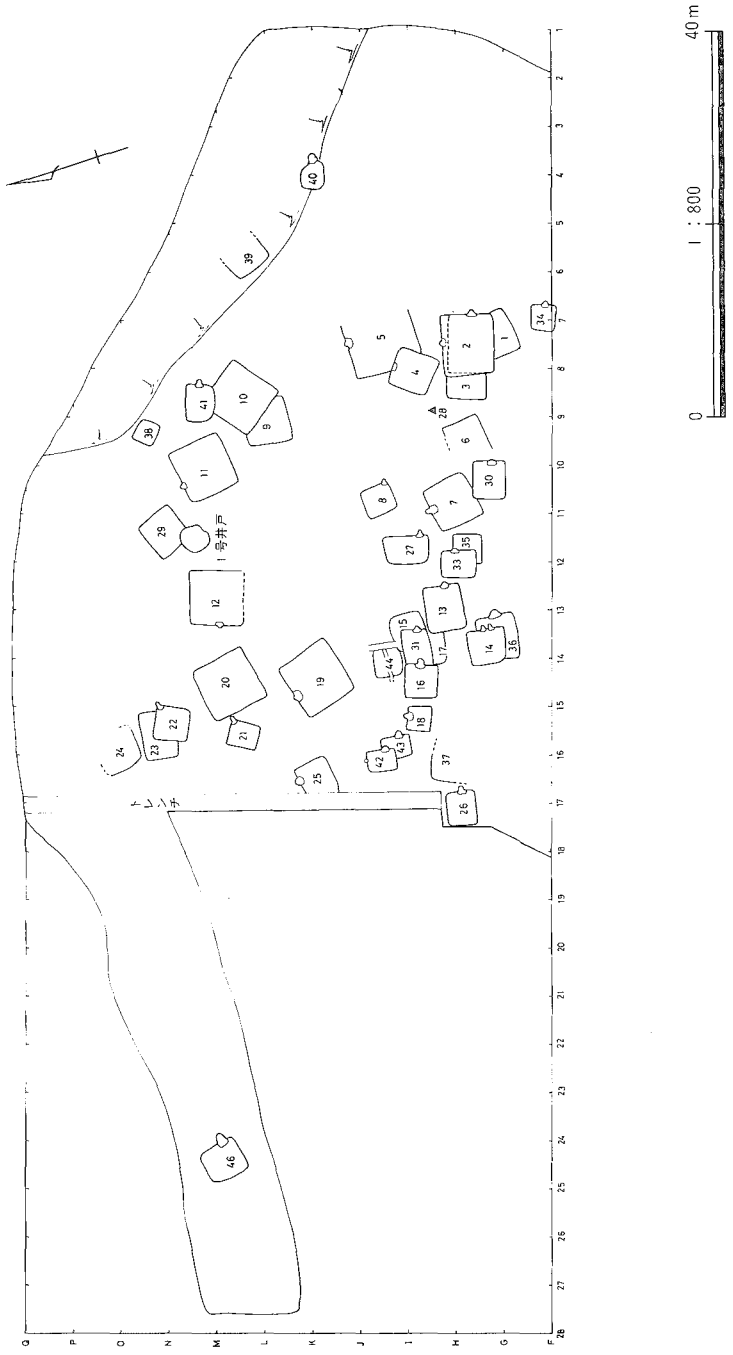




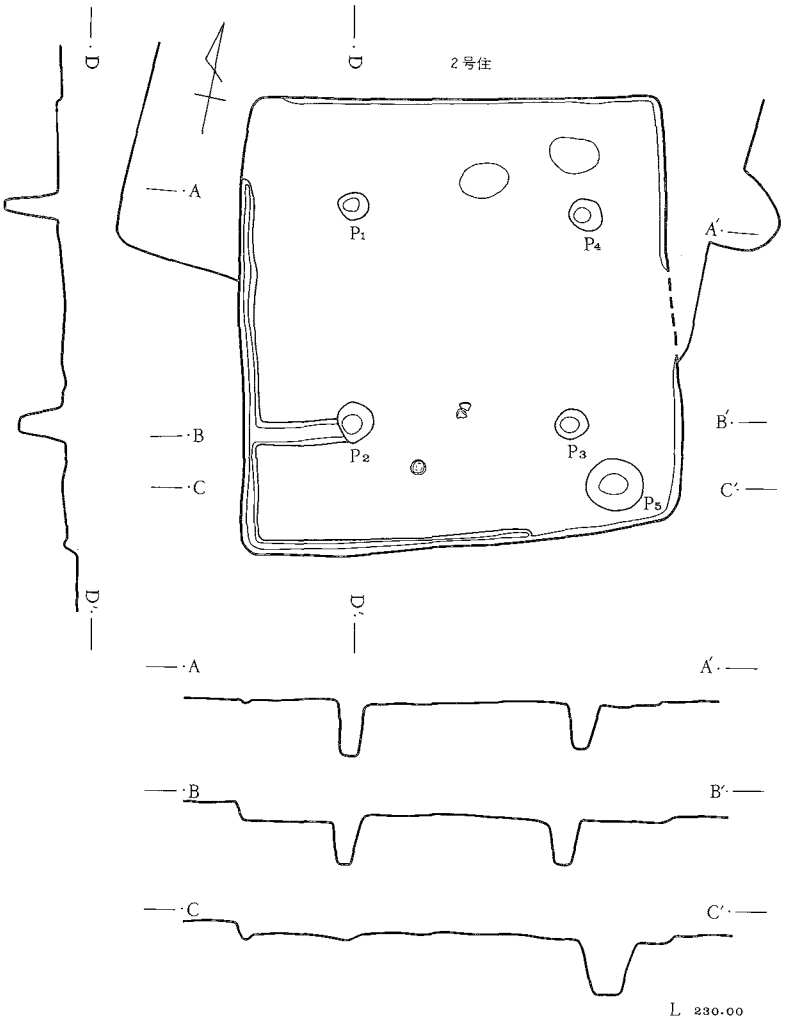

### E一埋甕遺構

E区西部のV43グリッドに埋甕が単独で検出された。確認面はローム ブロック混在の褐色層で、径約40cm、深さ20cmの円形ピットに縄文浅鉢がすっぽりと納まる。口縁部は平面精査の際に紛失してしまったようである。付近に掘り込みは全く無く、遺構は土器が納まるピットのみ。

1層：暗褐色砂層で下位に少々ロームブロックを含む。
2層：ローム層。黄褐色でよくしまる。
3層：掘り込み覆土。黒褐色砂層でしまりなし。




挿図７　G区全体図




### G－1号住居跡

中央で東西4.6m×南北4.7mを測り、各コーナーはほぼ直角を呈す正方形の住居。壁高は確認面より5～10cm。住居北半は2号住居が切り込むが床面まで達しなかったためにプランが確認出来た。

カマドの痕跡は無い。東壁中央は2号住居のプランに沿って掘り過ぎたがここにもカマドらしき痕跡は検出されなかった。北壁やや内側に焼土が少々検出されており、火の形跡を思わせる部分は他には無い。

本住居は柱穴、貯蔵穴及び周溝を伴う。柱穴$P_1$～$P_4$は径30～40cm弱、深さ45～55cmと比較的統一された規模である。貯蔵穴$P_5$は住居南東コーナーにあり、径55×60cm、深さ55cmである。周溝は南壁から西壁にかけて検出された。上幅12～18cm、深さは床面より3～4cmで西壁から$P_2$にかけて上幅25cmの間仕切り状の溝が延びている。

遺物は覆土より土師坏、甕片が出土した。

### G－3号住居跡

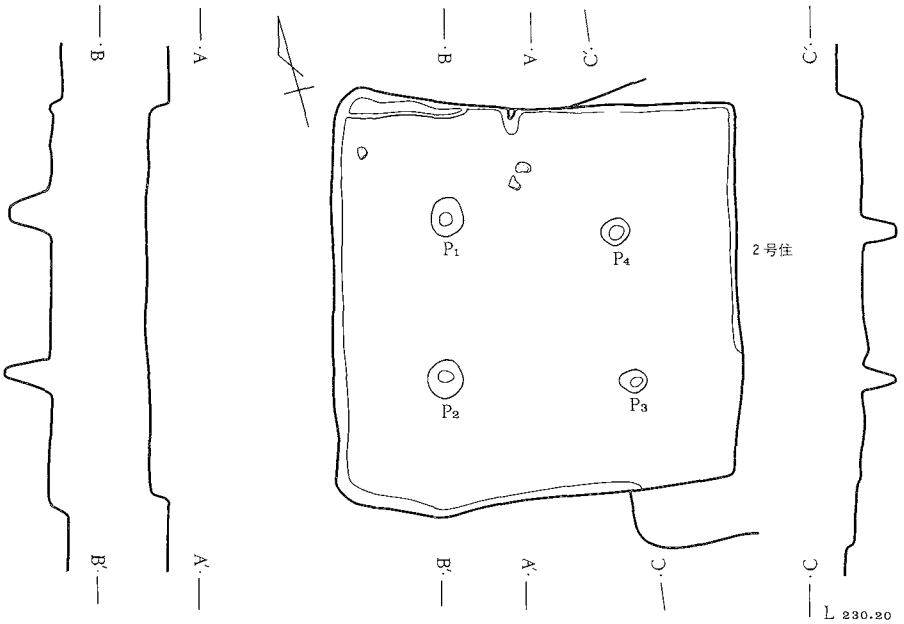
住居東側は2号及びその重複住居に切り込まれているが僅かに壁が残るためプランは確認出来た。東西は4.3m、南北は西壁付近で4.4m、東壁側で4.0mを測り、南壁西側が少々突出した不整方形の住居。壁高は確認面より約20cmである。

カマドは北壁中央と思われる。壁面から遺物が残る80cm程の範囲で僅かに焼土痕があり、黄灰色粘性土部分を左袖推定部として掘り残した。壁外への掘り込み及び床面の凹みはない。

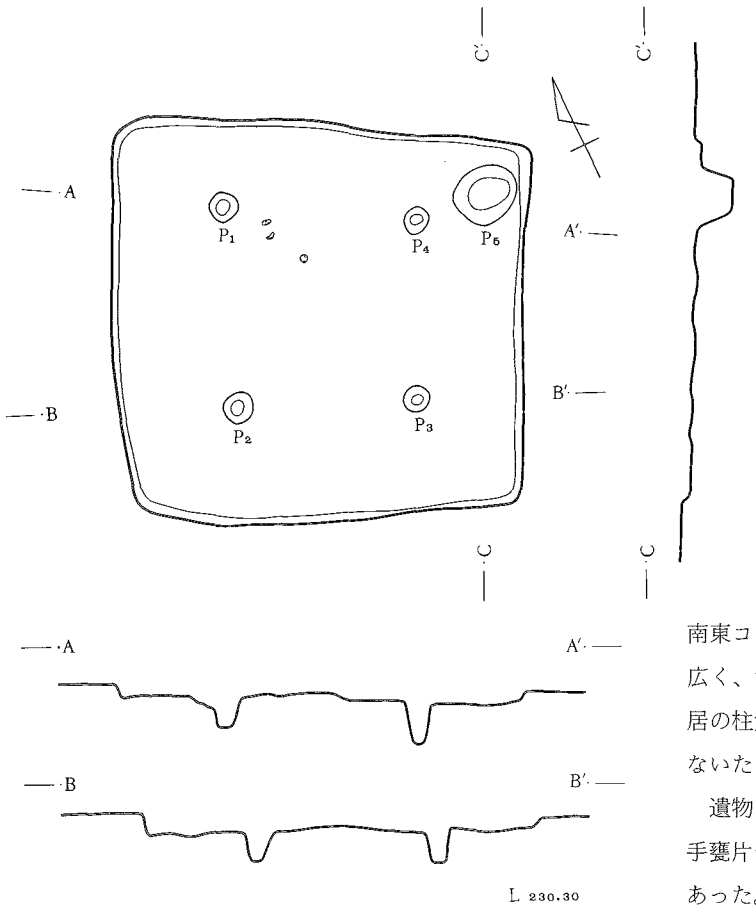
本住居に伴うと思われるピットは4基と思われる。これはその規模及び位置から柱穴と考えてよいであろう。$P_1$と$P_2$、$P_3$と$P_4$がそれぞれ同等の規模であり、これらは全て、ほぼ対角線上に位置している。$P_1$は径44×35cmの楕円形で深さ43cm、$P_2$径40cmで深さ42cm、$P_3$径25cmで深さ30cm、$P_4$は径27cmで深さ32cmであった。

他、北壁西端には長さ1.3m、上幅10～20cm、深さ5cm程の短い溝が存在していた。

遺物は覆土より土師甕片、小型甕片、台付甕片及び坏片が出土した。




G－3号住居跡



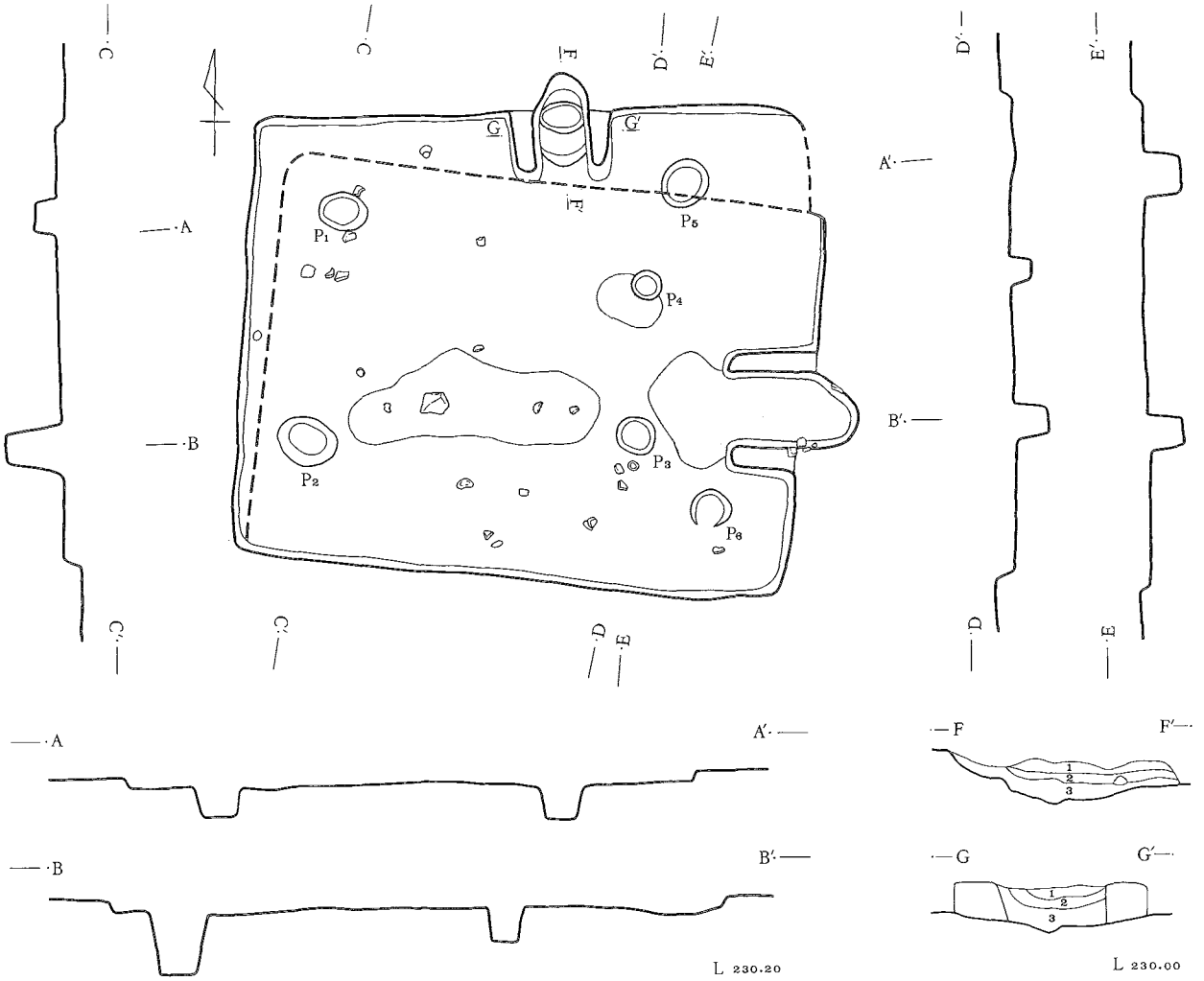

G－4号住居跡

東西4.4m、南北は西壁で4.1m、東壁で3.9mとやや不整な方形を呈す。壁高は西壁で20cm強を測り、軸は北壁が東へ大きく傾いている。北壁中央から南東コーナーにかけての部分は5号住居を切り込む重複部分である。

カマドの掘り込みは検出されないが、痕跡と思われる焼土及び粘質土が北壁中央やや西より僅かに検出された。壁より1mの位置にはよく焼けて脆化した板状石片があり、カマド構築材ではないかと思われる。

本住居には柱穴4基と貯蔵穴1基が伴う。柱穴の規模は統一し、径は30cm内外、深さも30cm内外で$P_4$が40cmとやや深い。貯蔵穴$P_5$は南東コーナー際に存在する。径76×58cmの楕円形で底面は広く、深さは34cmであった。このピットは重複する5号住居の柱穴位置にあたり、5号の他の柱穴の径と規模が合わないため、本住居の貯蔵穴と判断した。

遺物は覆土より羽釜片、回転糸切り底須恵坏、土師の厚手甕片や坏片が混在するが、図示出来たのは羽釜片のみであった。




1層：住居内覆土で暗褐色層。
2層：天井崩落層。粘質土及び焼土。
3層：焼土と炭化物の混在層。

### G－2号住居跡・重複住居跡

1号住居跡北半を切り込んで構築される。本住居跡は当初、北壁と東壁にカマドをもつ住居として調査したが、プランが不整形であること、カマドが2か所あること、そして出土遺物相互に時期差が認められること等より、西～北壁のプランは2号住居に切られる別住居と考え、ここでは重複住居跡として扱うことにする。

東壁カマドが2号住居に伴うものである。幅80cmで壁外部は50～70cmの不整半円状を呈す。両側壁には板状石の残骸があり石組みであったことを示す。壁内に残した袖部は推定位置でこれといって根拠のあるものではない。壁延長ライン上付近が火床として凹む中心であり、この部分は特に地山がよく焼けていた。貼床の痕跡は無い。

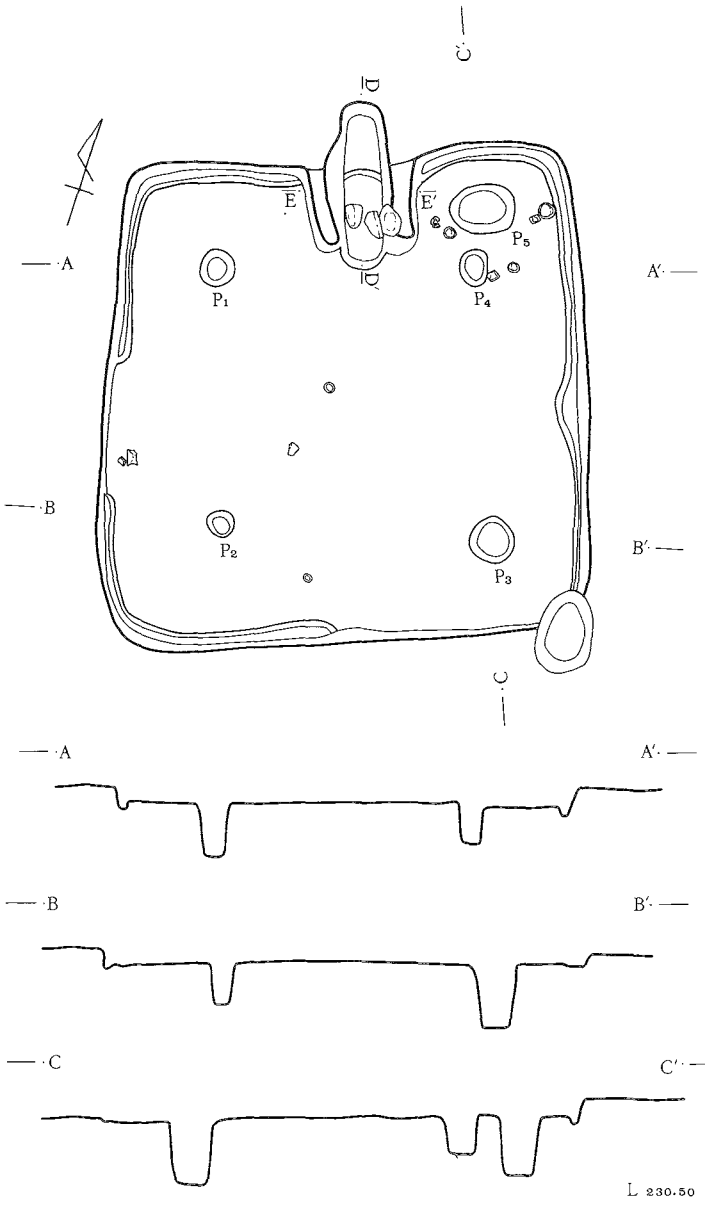
一方、重複住居に伴う北カマドは北壁ほぼ中央に造られる。幅60cmで長さ40cm、壁外部は左壁が内傾する不整半円状。焚口より浅く掘り込まれた火床の内部は、その中心がさらに浅いピット状になっている。直上に焼土と炭化物の混在層が乗り、貼床層は無い。

住居の規模は明確ではない。2号住居跡では北東コーナーかと思われる僅かな巡り込み部が残るが、攪乱の掘り込みが隣接し明確ではなく、又、西壁は後述するように$P_1$と$P_2$が2号に伴うものと仮定した推定ラインである。これらより2号は東西が6.0mかそれ以下、南北は4.4m内外の長方形になろう。また、重複住居は東壁が攪乱内にあり、推定6m強、南北は5m以内の長方形になると思われる。

ピットは$P_1$～$P_6$までで、そのうち$P_5$は2号推定プラン外のため重複住居に伴うものと考えられる。径は50cm、深さ42cmで底面は広い。他、規模と形状は以下のとおりである。$P_1$径54×41cm、深さ21cmの楕円形、$P_2$径66×54cm、深さ60cmの楕円形、$P_3$径40～45cmの不整円形で深さ38cm、$P_4$径33cm、深さ20cm、$P_6$は南側が傾斜しており完璧なピットではないが、径約44cm、深さは15cmである。全体にバラつきがあり、対応するピット等はつかめないが、その位置より、$P_1$と$P_2$及び$P_3$と$P_4$が2号に伴う柱穴的なピットになろうか。また$P_6$は重複住居の$P_5$と同じでカマド右手に存在しており貯蔵穴としての可能性が考えられる。

2号住居跡推定プラン内は全面的に焼土が多く、炭化物等は伴わないが、焼失家屋であるかもしれない。

遺物は2号プラン床面より須恵坏、覆土よりコの字状口縁土師甕片、坏、須恵塊片、坏片、蓋片、皿片等で、重複住居部西壁床面より小型の須恵蓋、北壁側床面より須恵鉢片が出土した。




## G－7号住居跡

中央で東西5.2m×南北5.0m、壁高10～20cmを測る正方形に近い形状の住居。北側は東西4.7mで少々狭まる。

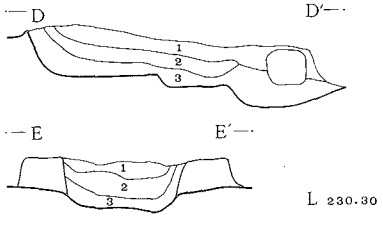
カマドは北壁中央に造られる。幅65cmで壁外部は細長く65cmの掘り込みが残る。壁内には粘質土による袖部痕と焚口に自然石3個が検出された。浅いピット状掘り方の上に貼床を施す。

住居内には柱穴4基と貯蔵穴1基が検出された。柱穴は$P_1$～$P_4$で、径は$P_1$38cm、$P_2$28cm、$P_3$47cm、$P_4$38×27cm。深さは$P_1$55cm、$P_2$44cm、$P_3$65cm、$P_4$42cmである。

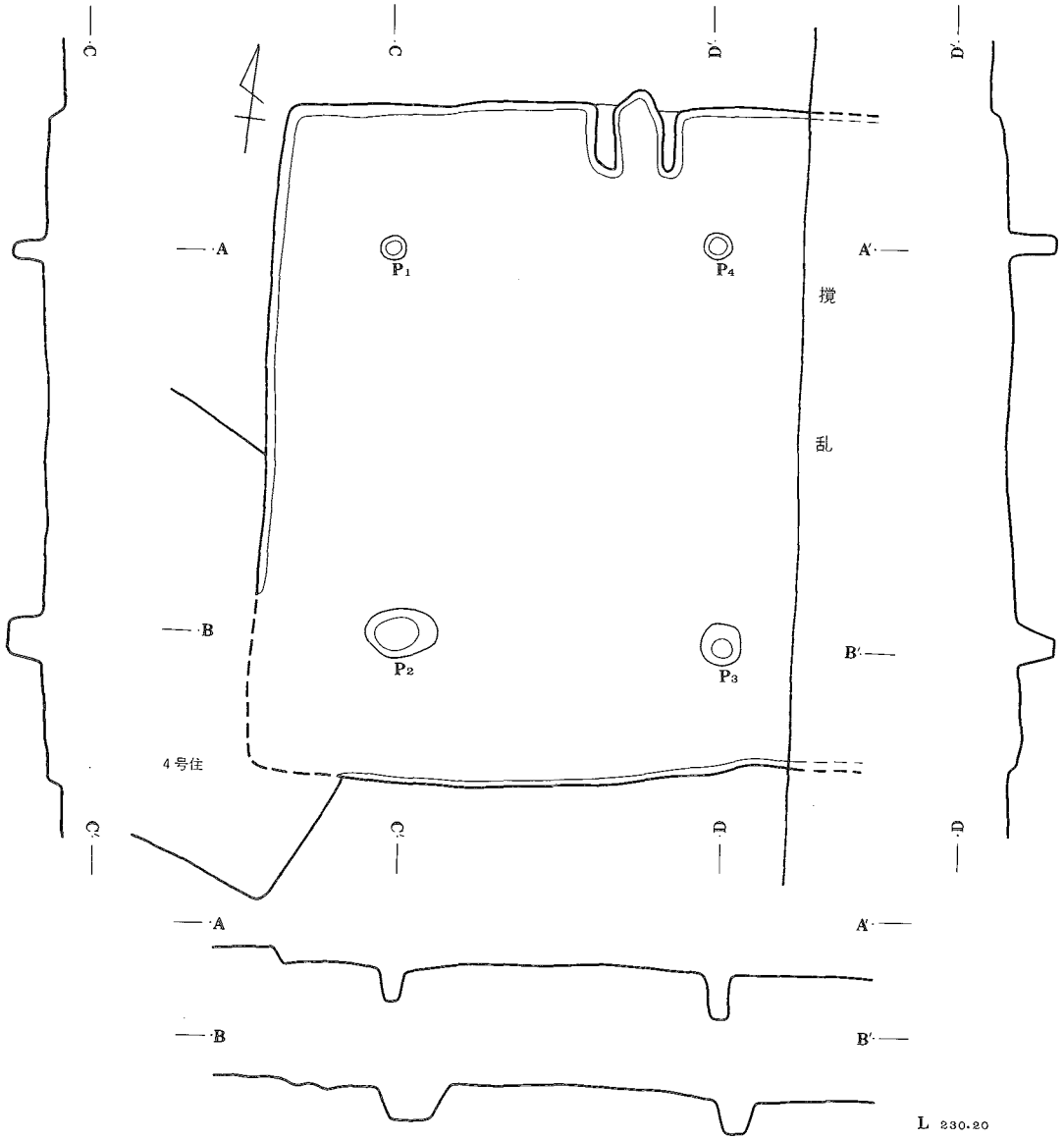
貯蔵穴$P_5$はカマド右手の北東コーナーに存在する。68×49cmの楕円形で深さは62cmであった。また、南東コーナー上のピットは他に対応するものもなく、本住居には伴わないものである。

西壁中央と南壁東半部以外では周溝が確認された。上幅は10～20cm程で深さは床面より2～8cmである。

遺物は貯蔵穴脇床面に集中し、土師球胴甕口縁片、坏、台付甕台部片等が存在する。他、覆土より土師甕片、須恵甕片等が出土した。




1層：天井崩落層。粘質土及び焼土の混在。
2層：焼土層。　3層：貼床層。



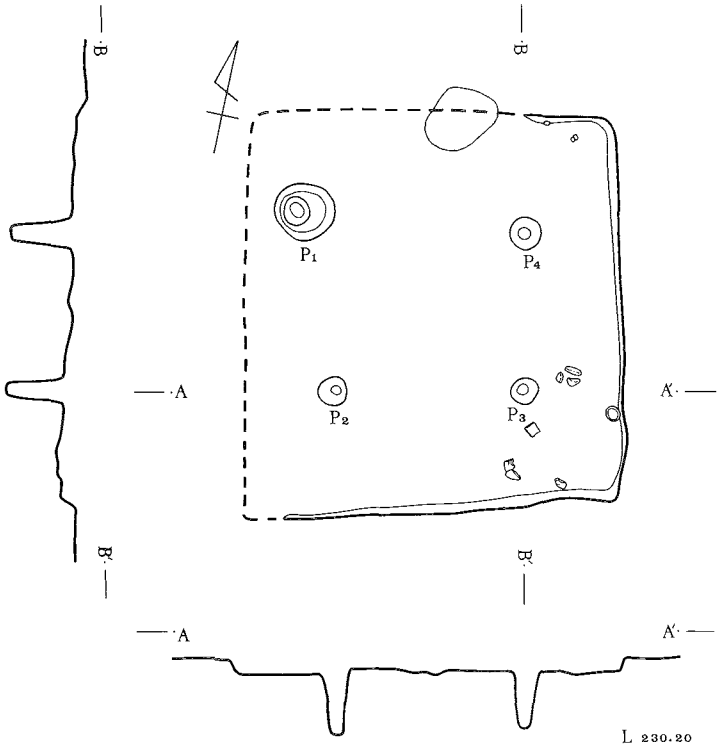

G－5号住居跡

住居東側は溝状遺構に切られており不明。南西コーナーも4号重複のために切られるが西壁側は少々残在している。東西は溝端部まで5.8m、南北は7.3m、壁高10～15cmを測る大型住居。

カマドは北壁に造られる。幅42cm、壁外部は小さな三角状に25cm掘り込みが残る。壁内両脇に残る黄灰色の粘質土より推定袖部を掘り残した。残存状態が悪く、内部は僅かに焼土を検出したのみ。石材は全く無し。

柱穴は$P_1$～$P_4$まで検出された。このうち$P_2$は4号住居の貯蔵穴であり、本住居の柱穴がそっくり掘られてしまったと考える。$P_1$と$P_4$は径25～30cmとさほど差は無く、深さは$P_1$30cm、$P_4$48cmである。$P_3$は径46cm、深さ37cmであった。住居東側は不明であるが、この規模の住居跡は正方形である類例が多く、本住居もそうであれば柱穴$P_3$と$P_4$はだいぶ西に寄った位置にあることになる。

遺物は土師小型甕片、土師坏片が少量出土した。



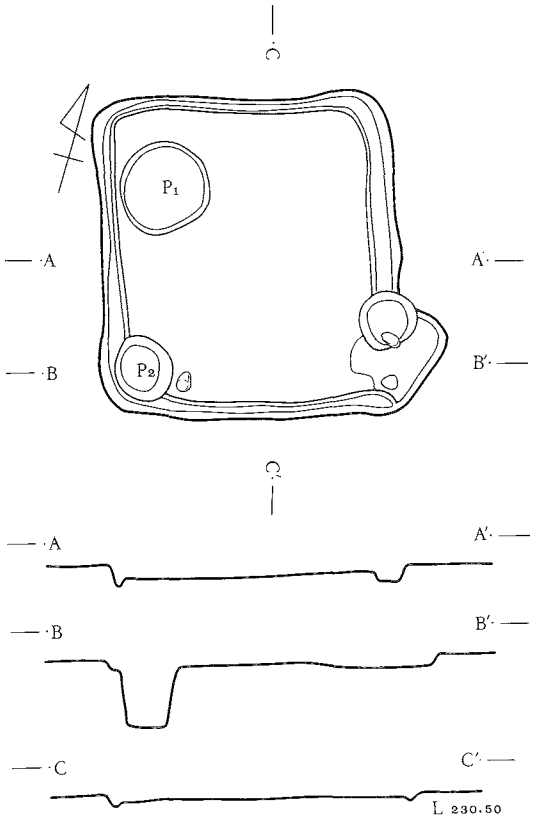

G－6号住居跡

西壁及び北壁の大半は攪乱に切られており不明。東西は推定4ｍ内外、南北は東壁際で4.0m、壁高15cmを測り、正方形であると思われる。

カマドは不明だが、北壁中央付近に焼土痕が認められており、この位置であると思われる。石材、袖部痕は無い。

柱穴は$P_1$～$P_4$が検出された。このうち$P_1$は径62cmのピット内にさらに小ピットが掘られ、他ピットと別形態である。深さは65cmを測る。他ピットは径30cm内外で深さは60～70cmと揃っている。

遺物は北東コーナー際床面より土師坏、南東コーナー付近覆土より土師甕片、坏、及びこも石状礫が2個と、他、覆土より土師甕片、甑片、坏片等が出土した。




G－8号住居跡

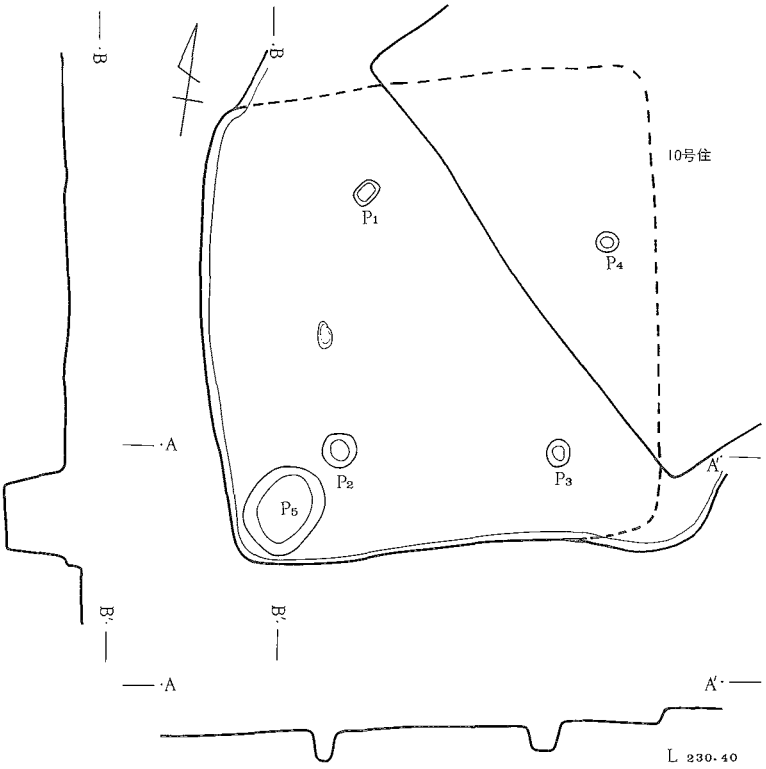
東西3.2m×南北3.4m、壁高は確認面より15cmを測る。全体に周溝をもつ小型で正方形に近い形状の住居。

カマドは南東コーナーに造られる。掘り込みは不整形で左側はピットの攪乱をうけるが、全体に焼土がよく残っていた。袖部痕及びカマド石材と思われるものは検出されない。

周溝は全体に幅広で、東壁では幅30cmの内部の中央が盛り上がり細い2本の溝状になっている。北壁では幅12cm、西～南壁では16～20cm程である。深さは4～8cm。

本住居に伴うと思われるピットは$P_1$と$P_2$である。$P_1$はピットと言うよりは円形の凹みで径95cm、深さは僅か2cmである。$P_2$は南西コーナーに存在し、径72×60cmの楕円形で深さは62cmと深い。北壁、南壁付近及びカマド左手にもピットが存在するが、覆土及び確認面等より本住居には伴わないものと考えた。

遺物は土師甕片及び須恵坏片いずれも小片が数片のみであった。

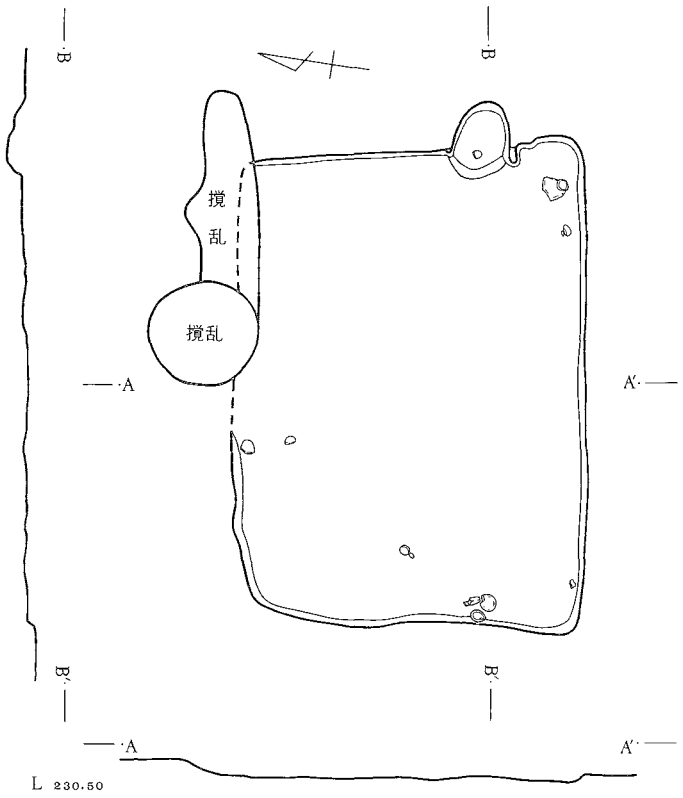



G－9号住居跡

北東部分は10号住居が切り込んでおり不明。北西コーナー、南東コーナーは攪乱のため掘り過ぎであり、推定プランを点線で示した。規模は東西4.7m、南北4.9m内外と思われ、壁高は15cmが残存する。カマドは10号住居に切られたらしく、その痕跡も全く検出されていない。

本住居に伴うと思われるピットは$P_1$～$P_5$である。このうち$P_1$、$P_3$、$P_4$の径は24～28cm、深さが$P_1$40cm、$P_3$30cm、$P_4$25cmを測り、$P_2$は径36cm、深さ26cmである。規模のバラつきと共に$P_1$と$P_4$の位置が東側へずれるため、これらを柱穴と断定は出来ないが、他に対応するピットもなく、柱穴の可能性も考えられる。南西コーナーの$P_5$は径96cm×80cmの楕円形で深さは62cmを測る。底面は広くなっている。

遺物は覆土より土師甕片等が少々出土した。

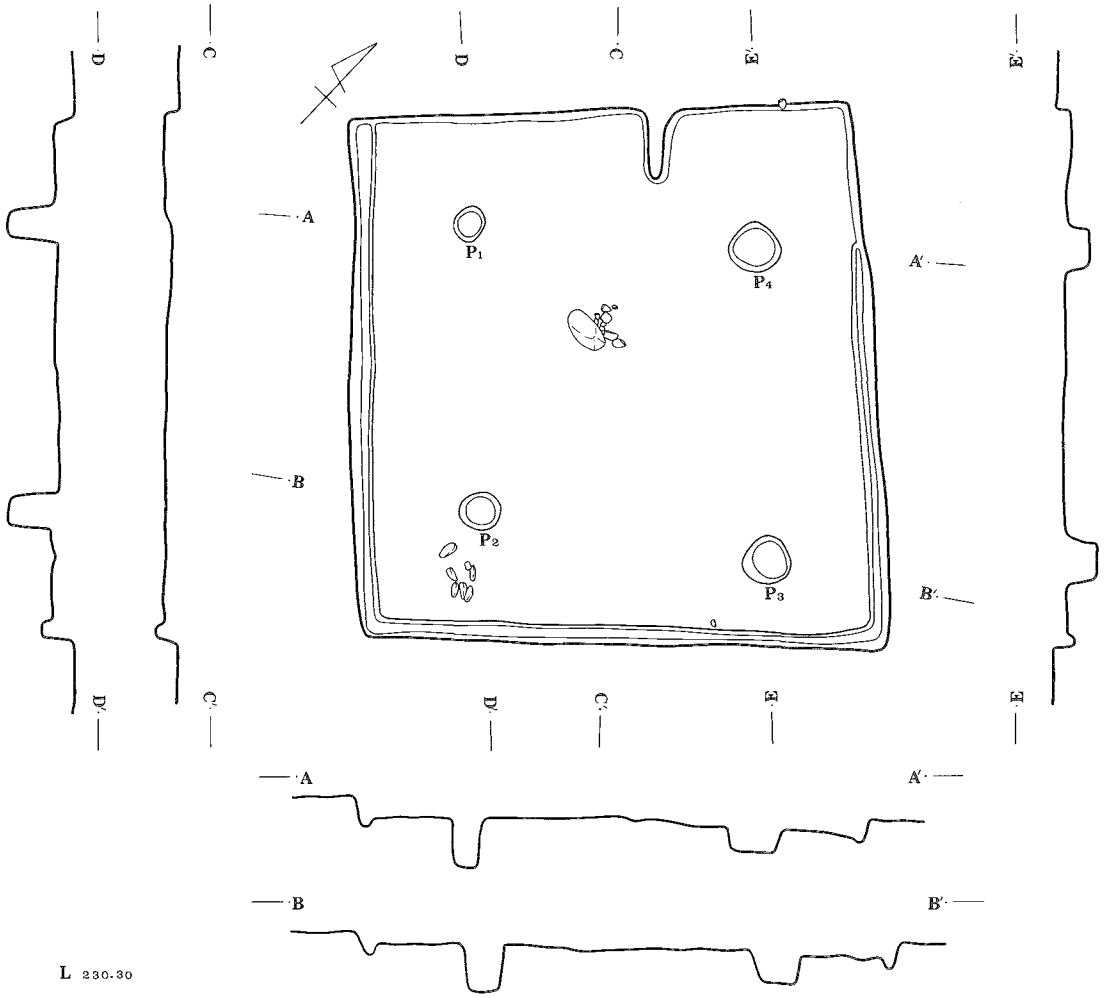



G－13号住居跡

中央で東西5.0m、南北は住居西側で3.8mを測り、北壁東半は攪乱のため残存しない。壁高は10cm弱である。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅60cm、長さは壁外へ48cmを測り、右袖部には板状石が袖芯として残る。内部は全体に焼土と粘質土の混在する覆土があり、焚口面より18cm程低いピット状の掘り方を呈す。明確な貼床面は検出されなかった。

遺物はカマドより須恵坏片、カマド右手床面より須恵坏片、西壁際床面より須恵坏、蓋及び長頸壺他、床面より須恵小型壺、蓋、土師坏片等が出土した。




G－10号住居跡

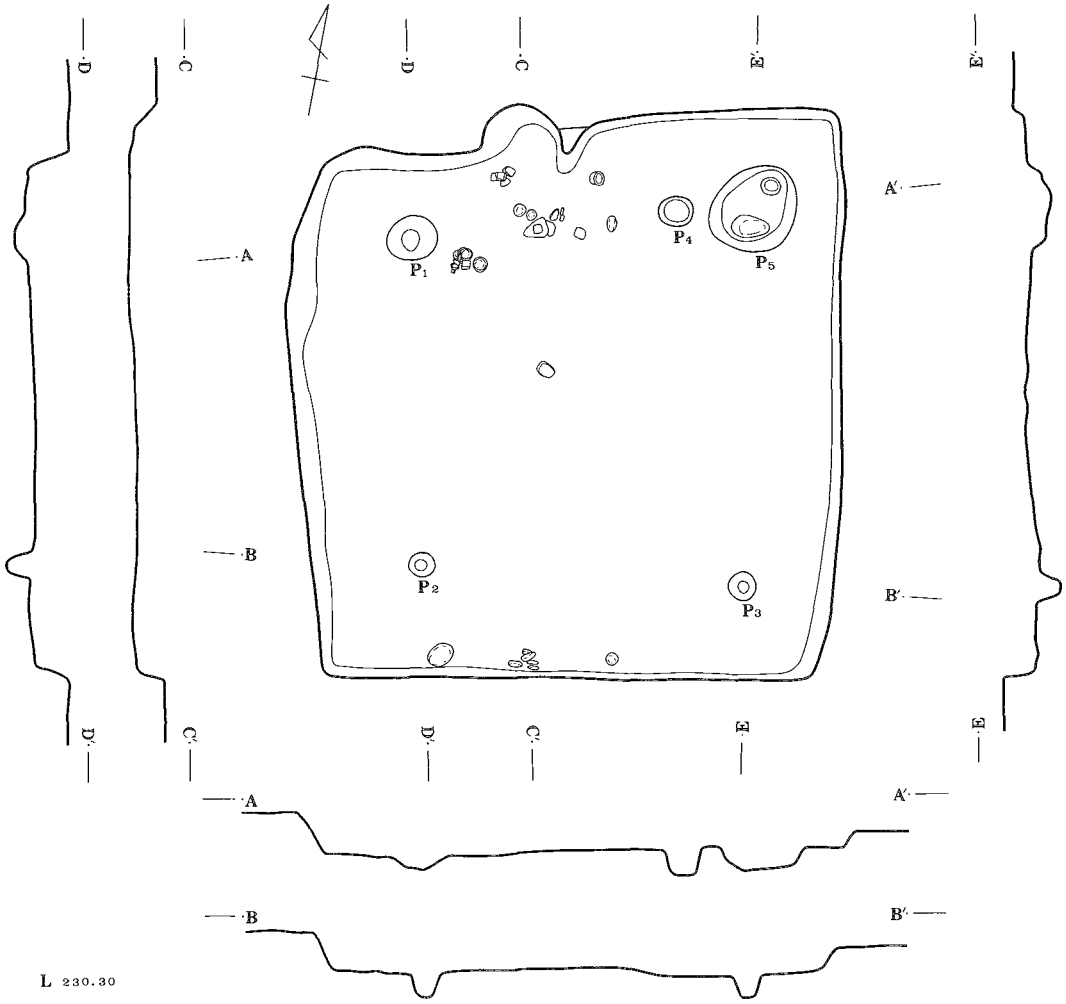
5.6m×5.6mで各辺共直線的でコーナーも直角に造られており、しっかりとした正方形を呈す。北側コーナーがほぼ真北に向かい、カマドのある壁を一応北壁と呼ぶことにする。

カマドは北壁中央部分である。粘質土及び焼土が集中しており、壁内側両脇には50～60cmの間隔で袖部痕と思われる粘質土部分が存在した。壁外への掘り込みは全く無く、又、他部分に焼土は存在しないので壁内に設けられた北壁カマドと言えよう。石材は検出されない。

北壁及び東壁北側の一部を除いては周溝が存在する。幅15～20cm、深さ5～10cmで、床面側は非常にはっきりした掘り込みである。

柱穴が$P_1$～$P_4$の4基検出された。規模は$P_3$と$P_4$がほぼ50cm、$P_1$30cm、$P_2$40cmの径、深さは$P_1$48cm、$P_2$52cm、$P_3$30cm、$P_4$26cmで$P_1$と$P_2$、$P_3$と$P_4$がほぼ同じと言える。位置は$P_4$がやや東へずれる他はほぼ対角線上にあり、各コーナーより1.5m～1.7mの範囲にある。また、図化し得なかったが$P_2$底面には角柱状の石がほぼ中央に存在していた。

遺物は覆土より土師甕、須恵台付坏、土師小型短頸壺片、又、$P_2$の南側床面やや上よりこも石状の礫が6個まとまっており、住居中央には長径50cmの自然石が出土した。他に北壁東側にくい込んで底部中央穿孔の須恵坏が出土したが他の遺物と時期的に全く符合せず、その位置からみても本住居には伴うものではない。



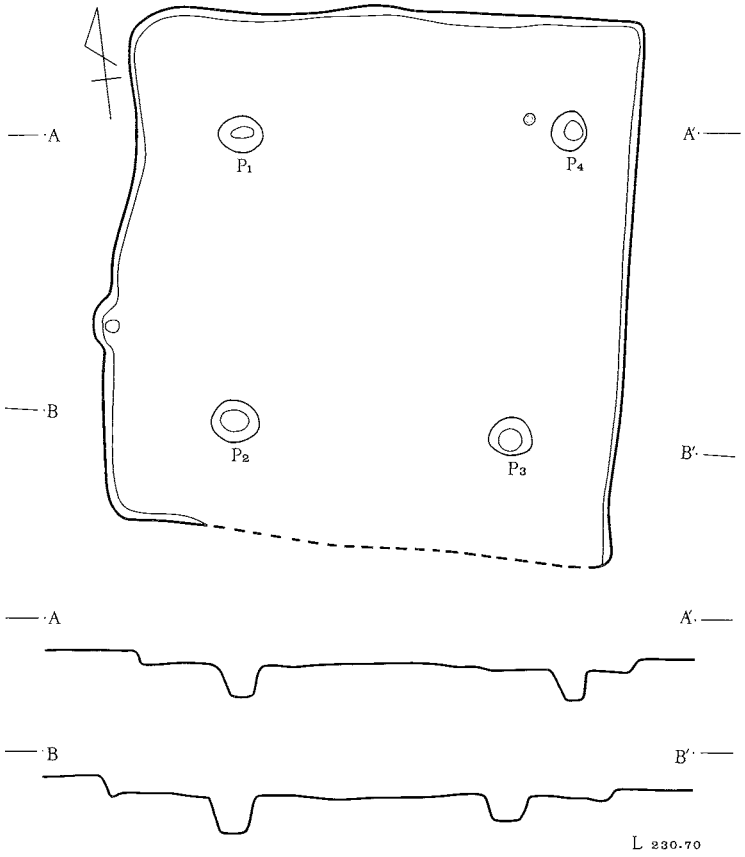

G－11号住居跡

中央で東西5.8m、南北5.8mを測る。住居北西コーナーは内側に弧状を呈し、他はほぼ直角に掘られ、壁も直線的である。北側斜面に立地するため、壁高は南壁45cm、北壁20cmと大きな差異がある。

カマドは北壁西寄りに造られる。幅80cmの半円状を呈しカマドの左右両壁にくい違いがあり、中間付近で35cm程壁外へ掘り込まれている。壁内は黄色粘質土と黒色土からなる右袖部のみが残存し、石材や明確な焼土痕は伴わないが、焚口部手前覆土より脆化した板状石片と床面レベルで自然石が２個（うち、左側は横倒しだが）出ており、カマドに関係する遺物かと思われる。唯、自然石２個はカマド掘り込み部よりだいぶ東側へずれ込んでいる。

本住居にはピット$P_1$～$P_5$が伴う。規模は径が$P_1$54×45cm、$P_2$28cm、$P_3$30cm、$P_4$35cm、深さは$P_1$12cm、$P_2$25cm、$P_3$22cm、$P_4$26cmである。$P_5$は径85cm×95cm、深さ25cmではっきりと他の４基とは区別される。$P_1$の規模の違い、$P_4$の位置等は$P_1$～$P_4$を柱穴と考えにくくする要因ではあるが、ここでは一応柱穴としておきたい。又、$P_5$は貯蔵穴と思われ、覆土中位には自然石と土師甕下半一周部が出土している。

遺物はカマド付近に多く、土師甕片、坏、須恵坏、蓋、又、南壁際よりこも石状礫６個と一m程西に扁平な円形自然石が出土した。これらの遺物は全て床面より10～20cm上であるが、これは床面とした面が地山面であり、遺物出土レベルが床面であったようである。



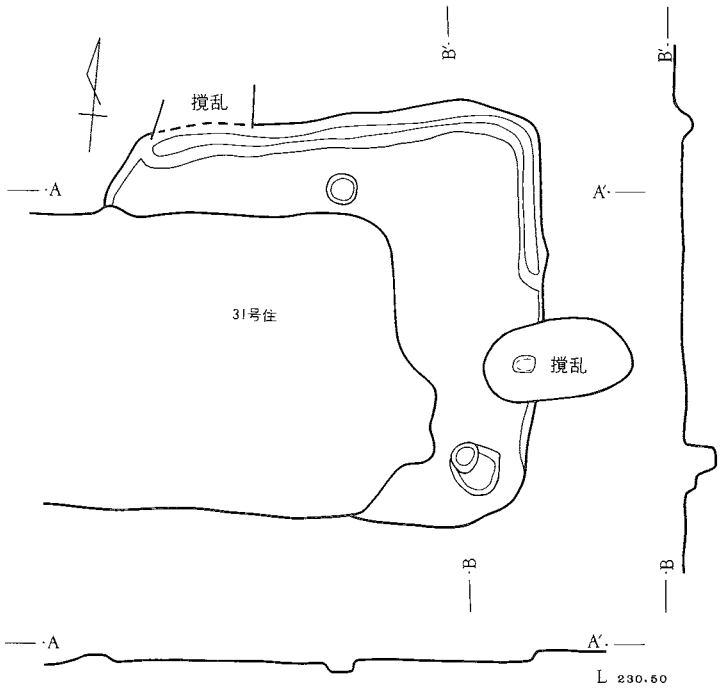

### G－12号住居跡

東西5.5m、南北は残存する西側でやはり5.5mを測る。南壁は当初、壁を誤認し掘り過ぎ、又、西壁内側に攪乱の細い溝が入り込む。

カマドは不明である。西壁に石を伴う突出部があるが焼土が袖部等、カマドとするに足り得る資料は無く、他部分にも同様の痕跡は無い。

本住居は$P_1$～$P_4$の柱穴を伴う。規模は径35～50cm、深さ28～36cmを測り、位置は$P_4$以外はほぼ対角線上に乗り、各コーナーより1.4～1.7mの距離である。

遺物は覆土より羽釜片、土師甕片、土師質塊、坏、土師坏片等が入り混じり、時期的に符合しない。




### G－15号住居跡

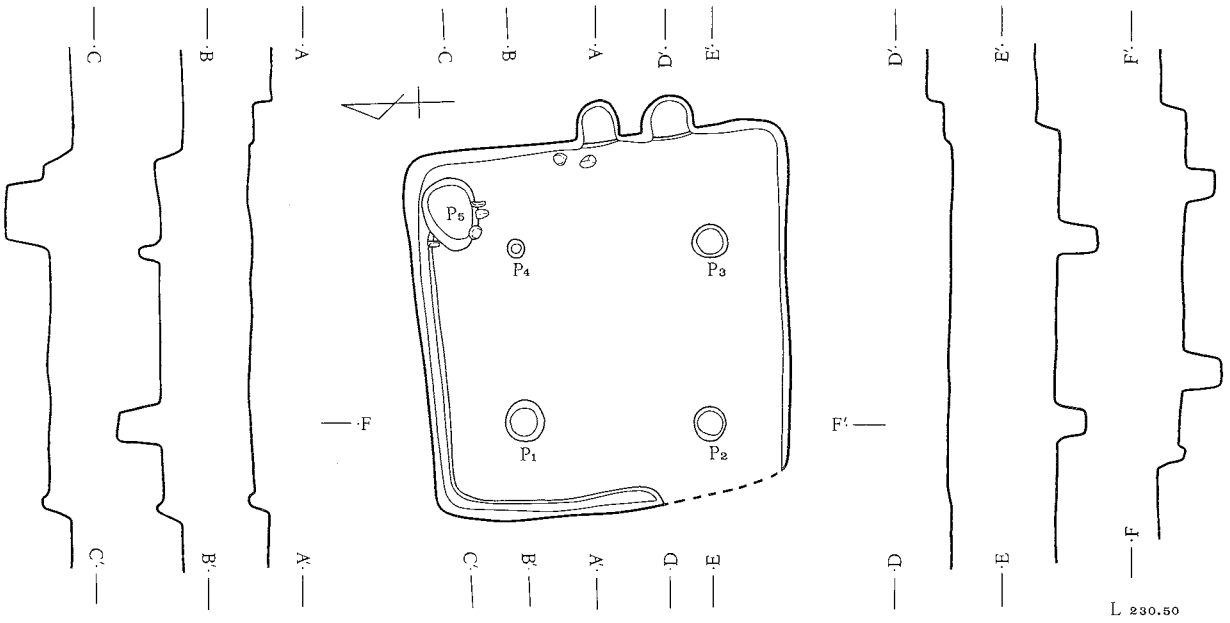
中央から南西部にかけて31号が深く切り込んでいる。東西は住居北側で4.6m、南北は南壁東側の立ち上がりが不明ながら4.5m程と思われる。

カマド痕は全く認められなかった。西壁、南壁にその可能性を求めるのは類例がほとんど無いことから疑問であると思われ、東壁に切り込む攪乱部分であったのかもしれない。ただ、焼土やカマド構築材の痕跡は全く無い。

住居南東部及び北壁中央やや内側にピットが存在する。南東部においては径50cm程のピット内北西部にさらに径30cm、深さ20cmの小ピットを伴う。北壁内側ピットは径30cm、深さ15cmを測る。

東壁北側から北壁全体にわたり周溝があり、これは床面レベルで幅20～30cm、深さ約10cmと比較的幅広のしっかりしたものであった。

遺物は全く伴わず、攪乱部分の石も攪乱覆土中のものである。




G－14号住居跡

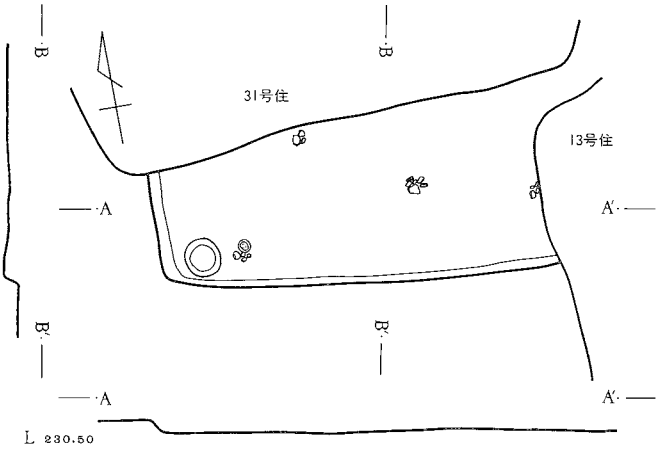
中央で東西4.0m×南北3.9m、西壁の南側にかけて少々掘り過ぎ、周溝の巡る延長ラインが壁である。全体に東側がやや広くなる正方形状で壁高は26cm程を測る。

カマドは東壁中央と南寄りの2か所が検出された。北カマドは幅44cm、南は55cm、壁外部は共に38cm程でやや長い半円状を呈す。袖部痕は全く無く、北カマド焚口付近とその左側に自然石が存在するが火を受けた痕跡は認められない。南カマドは焚口からカマド内部中央まで焼土がしっかりと認められた。火床面とした面は住居床面より僅かに高いがこれは地山である。貼床層は存在していない。

本住居に伴うピットは5基である。$P_1$～$P_4$はほぼ正円で$P_3$がやや西へずれる他は対角線上に乗る。径は$P_1$42cm、$P_2$35cm、$P_3$35cm、$P_4$20cm、深さは$P_1$42cm、$P_2$33cm、$P_3$40cm、$P_4$22cmである。$P_4$が極端に小さいが位置からみて他の3基と共に柱穴と考えてよいであろう。$P_5$は貯蔵穴と思われ、径75cm×58cm、深さは40cmである。肩口に4個の自然石を伴う。遺物の出土は無い。

北壁貯蔵穴部から西壁中程にかけては周溝が巡る。床面レベルで上端幅14～18cm、深さ5～8cmでしっかりと掘られている。

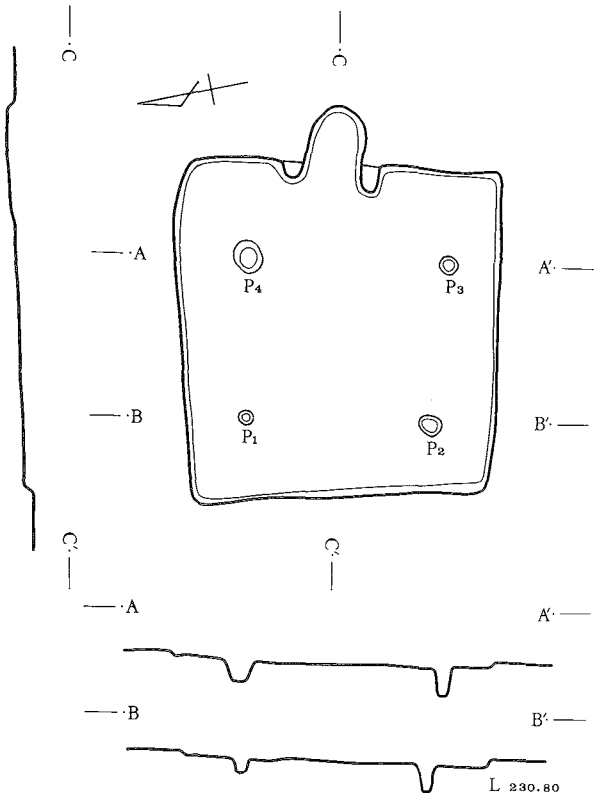
遺物は覆土より羽釜片、コの字状口縁土師甕片、土師質埦片等が出土した。




G－17号住居跡

31号と13号に大半を切り込まれ、形状は不明。31号東の15号との関係は、両者の立ち上がりが明確でなく、15号に遺物が伴わないこと等より不明である。

カマドの痕跡は存在しない。ピットは南西コーナーに径38cm、深さ20cmで存在する。遺物は覆土より土師小型甕片、甑片、坏、須恵坏片等が出土した。



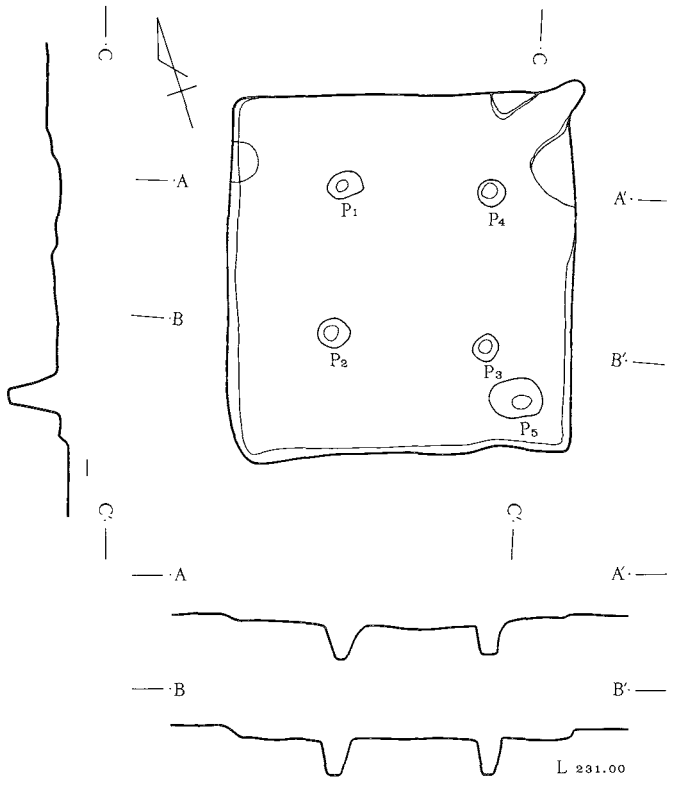

G－16号住居跡

中央で東西3.5m×南北3.4mのほぼ正方形を呈す。壁高は5～10cmと非常に浅い状況である。本住居は東側に重複する31号と17号を切って構築されていた。

カマドは東壁中央に造られる。幅60cmで壁外へは楕円形に60cmの掘り込みが残る。袖部は地山掘り残しと思われるがいまひとつ判断としない。火床面は住居床面より僅かに低くほぼフラットで壁外部中央付近に少々焼土が検出された。

$P_1$～$P_4$は柱穴と思われるが$P_1$だけ規模が非常に小さく、位置が他に対応するのみである。径は$P_1$15cm、$P_2$23cm、$P_3$19cm、$P_4$30cm、深さは$P_1$14cm、$P_2$30cm、$P_3$28cm、$P_4$22cmである。

遺物はほぼ床面レベルの覆土よりコの字状口縁土師甕片及び須恵坏が出土した。



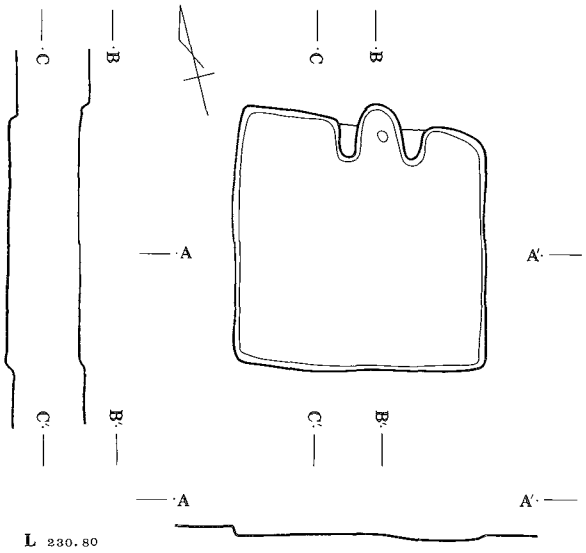

G－22号住居跡

東西3.7m×南北3.8mで壁高は南西部で10cm強を測る。小型の整った正方形を呈し、住居北西部は重複する23号を切り込む状況である。

カマドは北東コーナー部に21号と同様斜めに掘り込まれている。幅30cm、長さ30cmの壁外煙道部と壁内は床面より僅かに低く地山の火床面がよく焼けている。両脇は地山掘り残しでカマドの内壁の一部としている。石材は全く伴っていない。

柱穴は$P_1$～$P_4$で径は$P_1$40×25cm、$P_2$32cm、$P_3$25cm、$P_4$30cm、深さは$P_1$35cm、$P_2$と$P_3$が36cm、$P_4$30cmで規模は比較的統一されている。位置にはさほどずれもなく全体に少々東寄り気味である。南東コーナーの$P_5$は55cm×40cmの楕円形で深さは40cmと深く、貯蔵穴と思われるが遺物は伴っていない。また西壁北側床面には焼土の凝結が存在する。

遺物は覆土より羽釜片、土師坏片、須恵甕片いずれも小片で時期差のあるものが混在する。

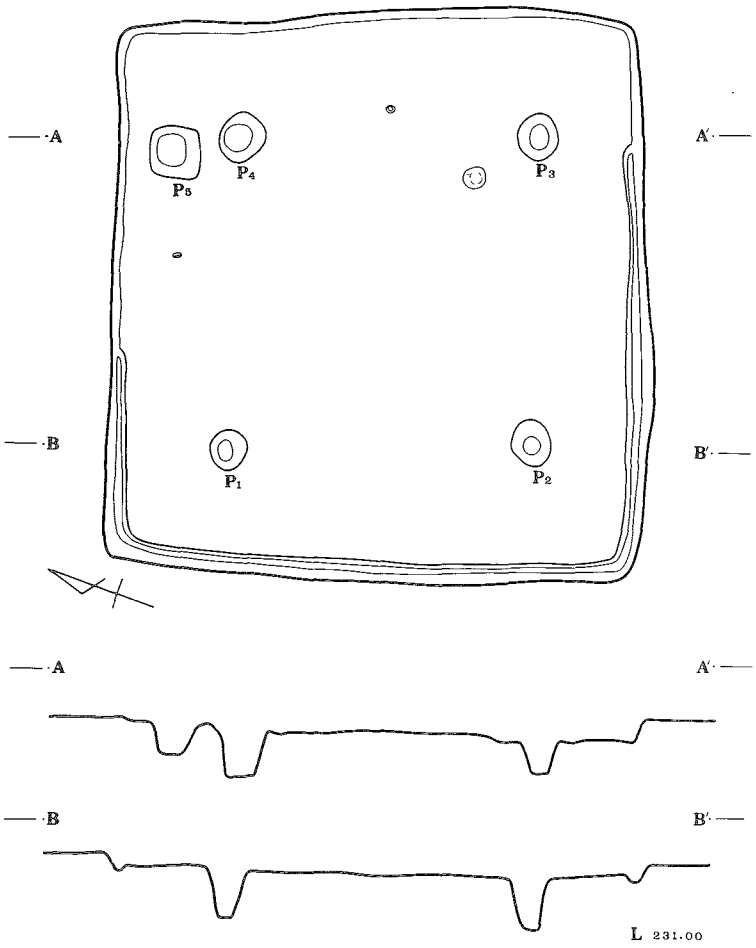



G－18号住居跡

東西2.7m×南北2.5mで北西コーナーがやや北へ張り出す小型正方形住居。壁高は5～8cmを測る。

カマドは北壁中央やや東寄りに造られる。幅45cmで壁外部は20cm。両袖部は粘質土残存部からの推定で、壁内側に支脚と思われる長さ15cm程の自然石が立っており、燃焼部の中心は壁内部になると思われる。火床面は地山のローム面である。カマド構築石材等は検出されなかった。また、住居に伴うピットも無い。

遺物はカマド内より土師甕片、須恵甕片、坏片が少量出土している。



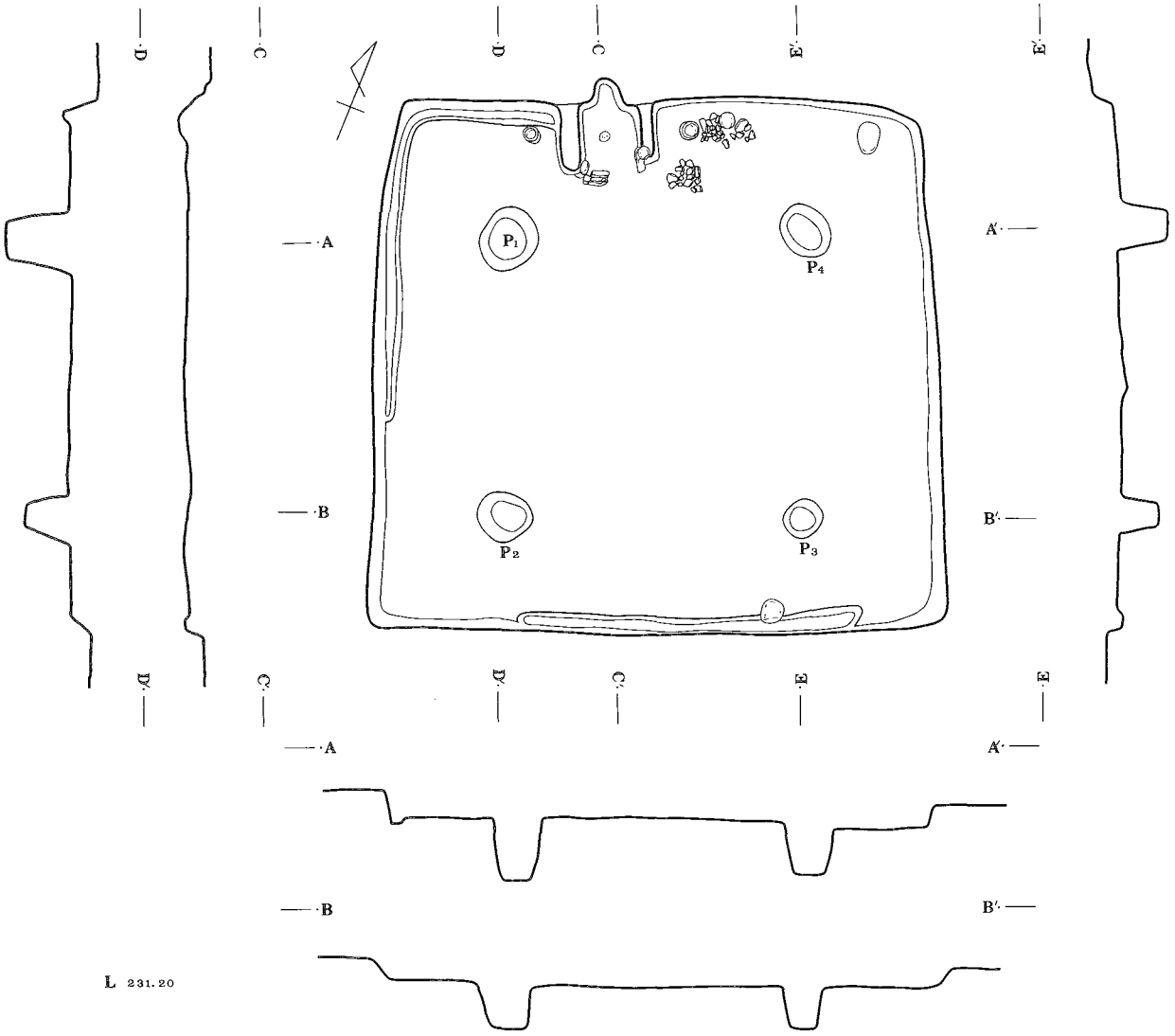

G－20号住居跡

中央で東西6.0m×南北5.7m、壁高約15cmで東壁中央から北側は僅かに壁の立ち上がりが残るのみ、各壁、コーナー共にきっちりと掘られ、19号と規模、形状がよく似ている。

カマドの掘り込みは全く検出されないが、北壁中央付近壁内60cmの位置に脆化した板状石が立った状態で検出された。これがカマド袖部に伴うものと思われ、北カマドであったのではないか、ただ、焼土は検出されなかった。

柱穴は$P_1$～$P_4$である。径は$P_1$42cm、$P_2$44cm、$P_3$45cm、$P_4$45cm、深さは$P_1$48cm、$P_2$55cm、$P_3$35cm、$P_4$48cmである。各々コーナーより1.6m～1.7mでほぼ対角線上にあり、位置的な正確さがある。$P_5$は貯蔵穴と思われ、55cm×53cmの方形ピット。深さは33cmを測る。また、北壁西側から西壁及び南壁の大半にかけて周溝が巡る。床面レベルで幅5～20cm、深さは5～10cm弱である。

遺物は覆土より須恵埦片、土師質坏片、埦片、灰釉皿片等が出土した。また、$P_3$の内側床面にめり込むように径25cm程の円形の扁平石が出土した。




G－19号住居跡

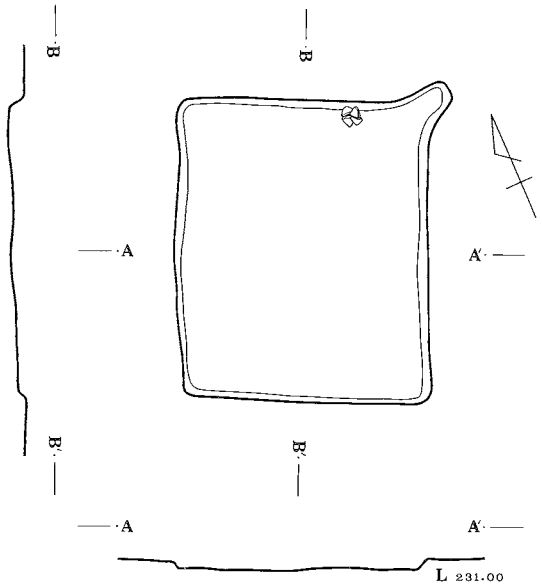
中央で東西6.4m、南北6.0m、壁高20～25cmを測る。各コーナーは角ばり壁も直線的に掘られている。

カマドは北壁西寄りに造られる。壁外部上面に桑根の攪乱が入り少々壊されている。確認し得た掘り込み部は幅30cm、長さ25cmの煙道立ち上がりで壁内に明確な袖部は存在しない。掘り残したものは推定位置であり、壁より50～60cmの位置に60cmの間隔で自然石の立石を伴っている。その内側にはよく焼けて脆化した板状石があり、壁もしくは天井部構成材、そして自然石が焚口を構成していたことを窮わせる。また、火床中央には坏部が欠損した高坏脚部が、袖部推定位置両脇には土師長胴甕上半部が倒置状態で出土する。甕の位置が何を意味するのかは判断出来ないが、高坏片は支脚に転用されたものと思われる。

本住居は柱穴$P_1$～$P_4$が検出された。径は$P_1$65cm、$P_2$58cm、$P_3$40cm、$P_4$50×62cm、深さは$P_1$69cm、$P_2$48cm、$P_3$44cm、$P_4$52cmである。$P_2$、$P_4$は対角線上、$P_1$、$P_3$はやや西へずれ、それぞれは各コーナーより1.7～1.9mの位置にある。

北壁カマド西側から西壁中央付近及び南壁の中央3.8mの長さで周溝が検出された。床面レベルでの幅は10～15cm、深さは５～10cm弱であった。

遺物はカマド内の高坏、両脇床面の土師甕の他にカマド右床面やや上より土師甕片、小型甕片、覆土より土師坏が、また、北東コーナー覆土と南壁際より径20～30cmの扁平な自然石が出土した。

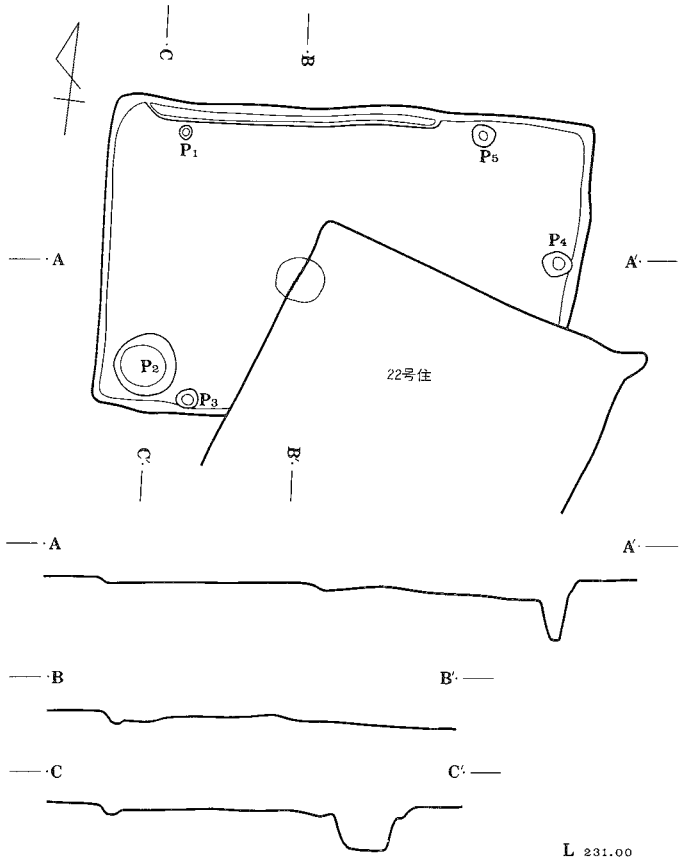



G－21号住居跡

東西2.7m×南北3.2mで南北に長軸をもつ小型長方形の住居。壁高は10cm内外で、各壁共直線的で整った長方形と言える。

カマドは北東コーナーに細長く突出しており、幅50cm、長さ50cmで石材や袖部は全く検出されない。

ピット類は全く検出されなかった。遺物はカマド焚口左手床面より土師甕片及び覆土より土師坏片が出土した。



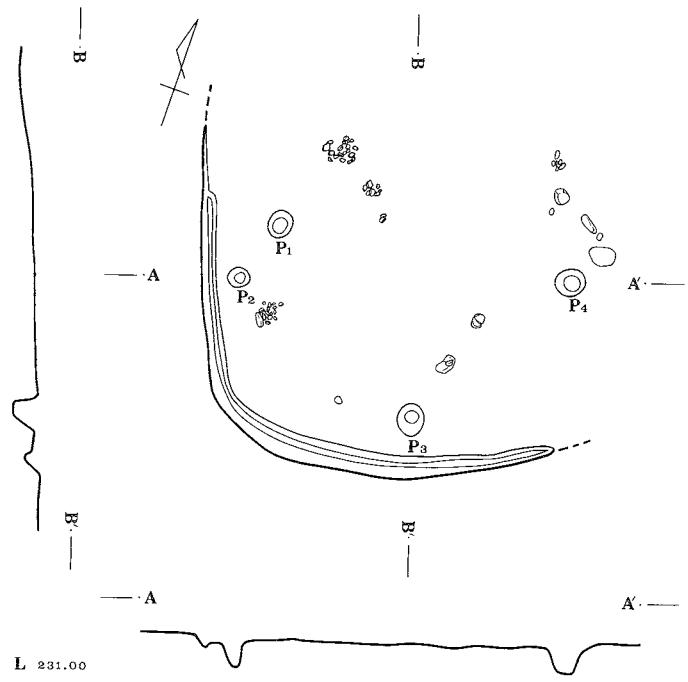

G－23号住居跡

住居南東部は22号に切り込まれ壁は存在しないが床面レベルはほぼ同じである。東西5.1m、南北3.3mの長方形で壁高は約10cmを測る。

本住居はカマドの掘り込みが全く確認されない、ただ、住居中央やや西の床面レベルで径50cm程の焼土凝結部分があり、これが炉の痕跡ではないかと考えられた。しかし、重複関係を22→23と考えると、22号のカマド部としたのが23号の東カマド、焼土凝結部分が22号の西カマド、とそれぞれの位置に納まる位置にある。22号のカマドとした部分は21号のそれと同じ位置にあり、無理な位置ではないと思うが、22号と23号の関係が逆転し得る可能性も上述のように考えられる。遺物の関係では全くつかめない。

さて、本住居床面にはピットが5基検出された。このうち$P_2$が径62cm、深さ34cmと大きく、貯蔵穴と思われるが遺物は伴わない。他、$P_1$径13cm、$P_3$ 22cm、$P_4$30cm、$P_5$25cm、深さは$P_1$15cm、$P_3$20cm、$P_4$38cm、$P_5$37cmであり、各々壁際に存在するが並びは不規則で性格は不明である。また、他に北壁に3.2mの距離で周溝が存在しており、床面レベルでの幅は10～15cm、深さ約5cmであった。

遺物は覆土より土師甕片が1片のみであった。

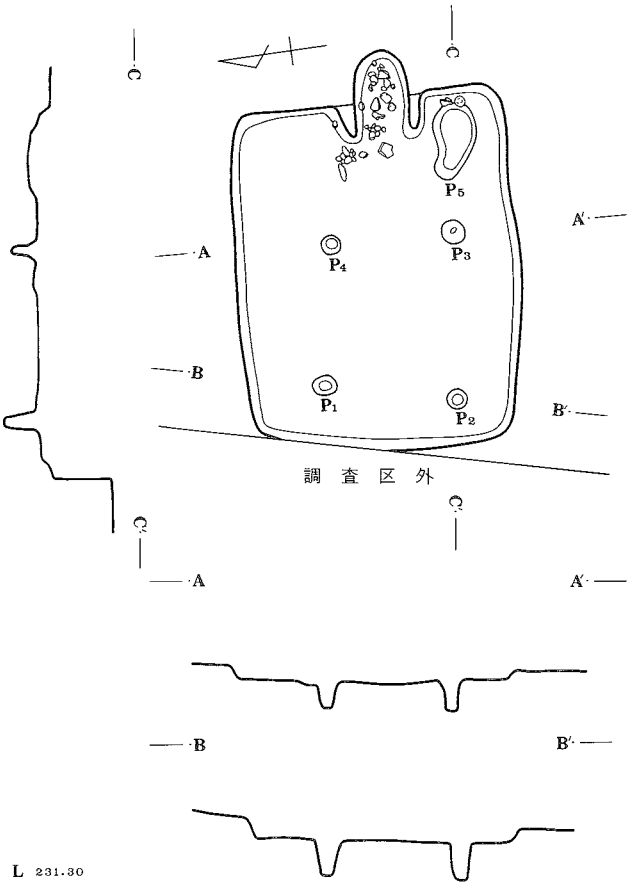



G－24号住居跡

北側は緩い斜面でそれに沿って耕作がなされていたために住居北半は削られている。住居南西部の周溝がプランの一部を示す。なだらかなカーブを描く隅丸(長)方形ではないか。周溝は幅13～14cmで深さは8cm程。ピットは4基確認され、径は$P_1$25cm、$P_2$22cm、$P_3$35cm×28cm、$P_4$28cm、深さは$P_1$28cm、$P_2$25cm、$P_3$24cm、$P_4$25cmであった。これらは柱穴になろうが、北側にはピットは存在せず、$P_1$～$P_4$が対応する位置関係にないため、断定は出来ない。

$P_4$の北東部に径25cm程の焼土部分があり、これは地山のロームが焼けて橙褐色になったものである。本住居ではこれが炉の位置であろう。すぐ北側に自然石が数点散在するが、火を受けた痕跡は認められず炉との関係は不明。

遺物は床面やや上より弥生甕片が出土し、完形をある程度想定出来得るものは2点である。



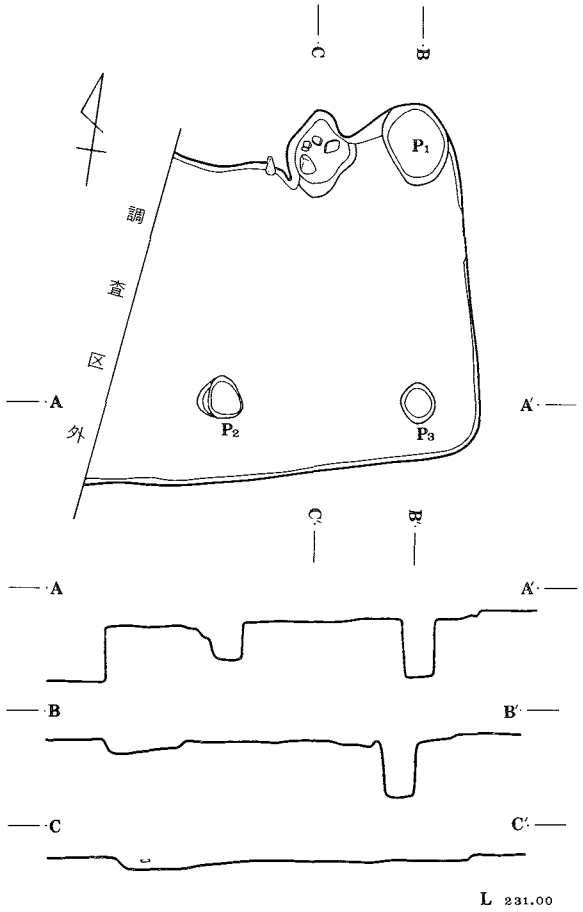

G－26号住居跡

東西3.8m×南北3.0mで全体に張り気味の長方形を呈す。壁高は10～20cmで、住居西側上端は調査区外の為僅かに切れる。

カマドは東壁中央に造られる。幅56cm、長さ50cmの楕円形掘り込みで壁内推定ラインに袖部を掘り残した。覆土中にコの字状口縁土師甕片が多数出土し、焚口付近にはよく焼けて脆化した板状石片が出土し、石組みカマドの一端を示す。

ピットは5基検出され、$P_1$～$P_4$が柱穴、$P_5$が貯蔵穴である。$P_1$～$P_4$は径20cm内外で深さは$P_1$36cm、$P_2$35cm、$P_3$28cm、$P_4$31cmである。このうち$P_3$は断面が漏斗状で下半部が狭い。住居プランの中での位置が全体的に南西にずれている。$P_5$は径75cm×45cmの不整楕円形で中央での深さが10cmと浅いボウル状である。東肩口に土師甕片を伴う。

遺物はカマド内及び貯蔵穴脇の土師甕片の他、覆土より土師坏片、須恵坏片、蓋片、焚口左手床面よりこも石状礫が出土した。



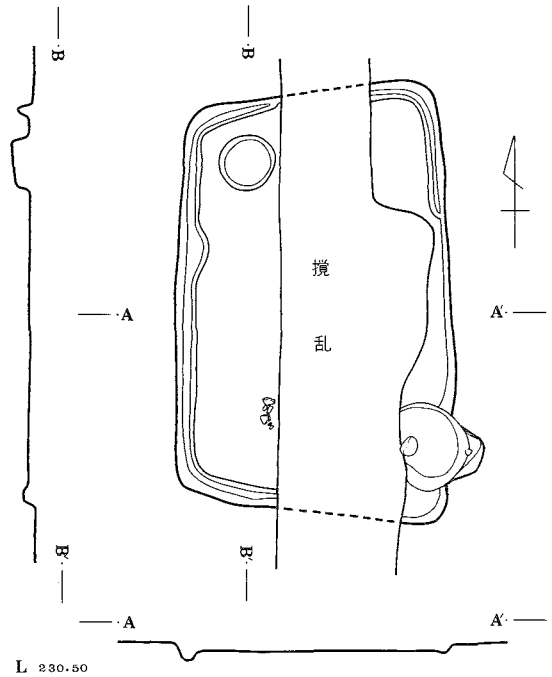

### G－25号住居跡

試掘用トレンチをローム下まで掘り抜いたために住居西側は残存しない。北壁は凹凸があるが、カマド右脇で南北3.5m、東西は南壁付近で4.2mが残存、壁高は10cm弱である。

カマドは北壁東寄りに造られる。左袖部は地山を掘り残し、壁外部は半円状に掘った先端部に煙道部が少々突出している。浅いピット状の中程部で幅70cmを測り、火床はよく焼けて橙褐色を呈す。内部には欠損した自然石及び板状石が共によく焼けた状態で出土しており、カマド構築材と思われる。

本住居に伴うピットは3基検出された。$P_1$は貯蔵穴と思われ径85cm×65cm、深さ10cm弱の浅い楕円形ピットである。北壁側に大きく張り出し、底面はなだらかな弧状を呈す。$P_2$と$P_3$は柱穴と思われるが、概ね4本主柱であるのに対し2基しか検出されず、とりあえず2本主柱の柱穴としてとらえたい。$P_2$は径45cm×36cmの楕円形で西側に一段浅い掘り込みをもつ。深さは37cm。$P_3$は径42cm×36cmで深さ56cmであった。

遺物は須恵坏片、埦片、土師甕片いずれも小片が少々出土した。




### G－27号住居跡

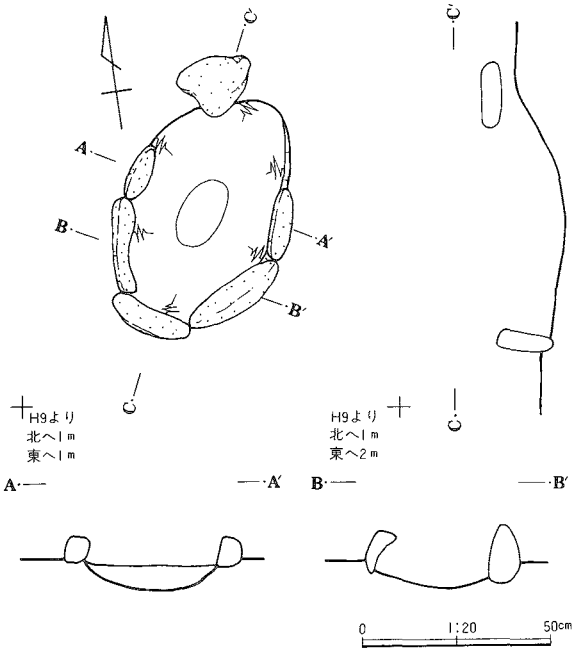
中央で東西2.8m、南北は中央を耕作による攪乱が入り込み、西側で4.1m、東側で4.6mの少々台形状長方形住居。

カマドは東壁南端に造られる。耕作以前の土坑掘り込みが大半を覆い、壁外部が僅かに残るのみである。残存部には焼土がよく残り、なだらかな傾斜で立ち上がっている。石材等は全く伴わず、手前の自然石は土坑覆土のものである。

住居北西部に土坑を伴う。径60cmの正円で深さ15cm、底面は広く平坦である。

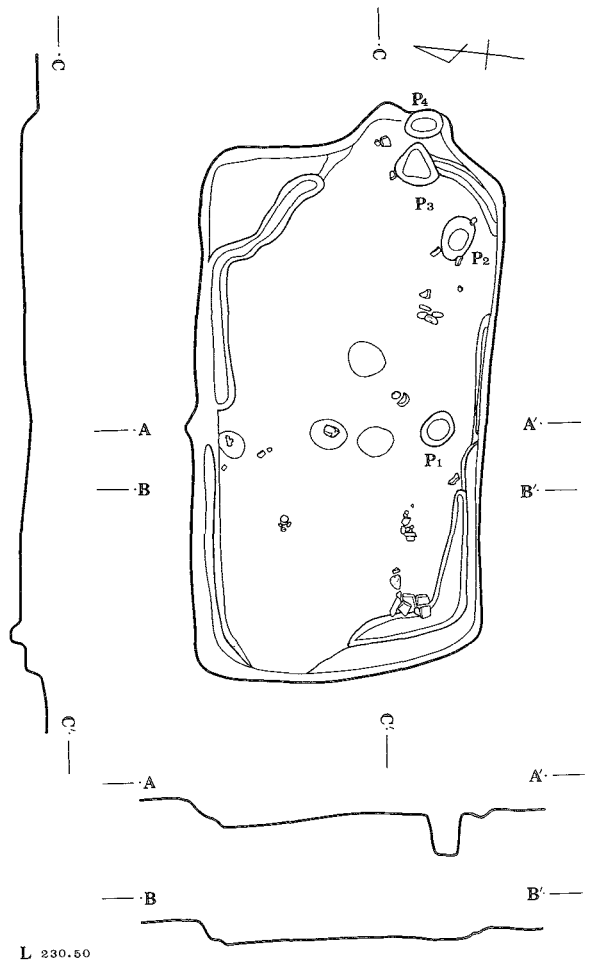
攪乱の西側と北東コーナー部分には周溝が巡る。床面レベルで幅10～16cm、深さは5～10cmではっきりとした掘り込みである。西壁側には一部幅広の部分が存在している。

遺物はカマドより羽釜片、須恵坏片、床面やや上より土釜片、須恵埦片が出土した。




G－28号住居跡（？）

石組みのカマドもしくは炉跡が残るのみでこれに伴うプランは全く検出されなかった。40cm×65cm、深さ7～8cmの皿状の浅い楕円形の掘り方で長辺に2個ずつと短辺に一個の扁平な自然石を組む。北側の一個は地山にくい込まず移動したものである。石の内面から上面にかけてはよく焼け暗赤色がかり、イとエには煤の付着が顕著であった。イはこれのみ内面が欠損面である。また、カは下面に焼け痕が認められた。覆土は焼土粒を多量に含む黒色土層で大粒のロームブロックが少々混じる。遺物は全く伴わない。




G－31号住居跡

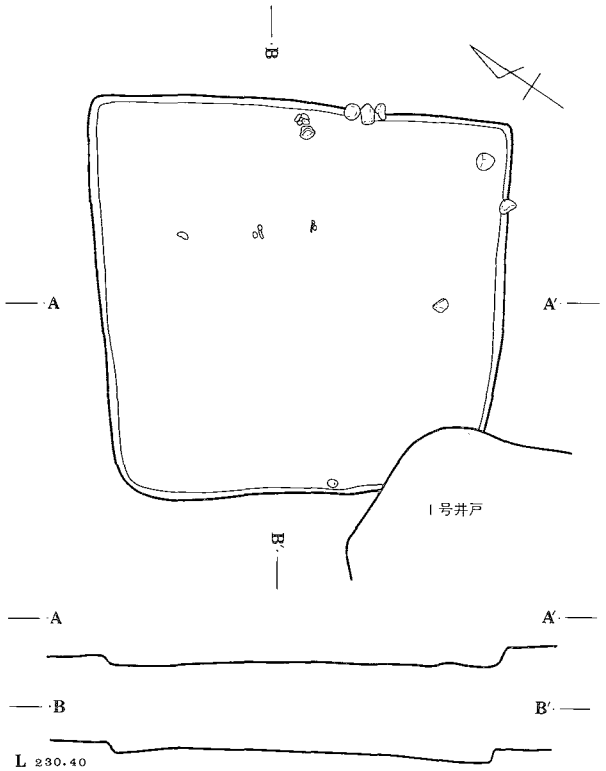
平面精査では15号と17号を切り、16号に切られるという所見を得ている。本住居西壁は16号に上部を切り込まれていたが、本住居の掘り込みが深いためによく残存していた。

規模は上端中央で東西5.7m、南北3.1mの不整長方形を呈し、壁高は北側で20～30cmを測る。本住居では北東コーナーと住居西側にテラス状の部分が存在する。床面より5～6cm高く、北東コーナー部は三角状にはっきり残り、住居西壁南側も幅25cm程であるが北壁及び南壁にかかる所では平坦面がほとんど無く、中程で住居下端へと合流する。床面との境は周溝が幅10～30cm、深さ5～6cmの規模で巡り、全体に整わない壁面としている。

カマドは東壁やや南寄りで、壁より約40cm外部に突出し不整形なうえに右側にピットが存在するために本来の燃焼部の範囲を確認し難い。焚口になると思われる付近には周溝は届かず、レベルは床面からほぼフラットに続いている。

ピットは4基検出された。このうち$P_1$は径30×38cm、深さ42cm、その他は全体に不整形で深さも10～15cmで凹み状のピットである。床面レベルで確認された$P_1$以外は本住居に伴うかどうかは判然としない。また、住居中央付近には焼土部分が円形に数か所散在していた。

遺物は床面より土師甕片、坏片、須恵坏片、覆土より土師小型甕片、又、床面南東部にこも石状の礫が4個と南西コーナー付近には焼けた板状石片がまとまって出土した。

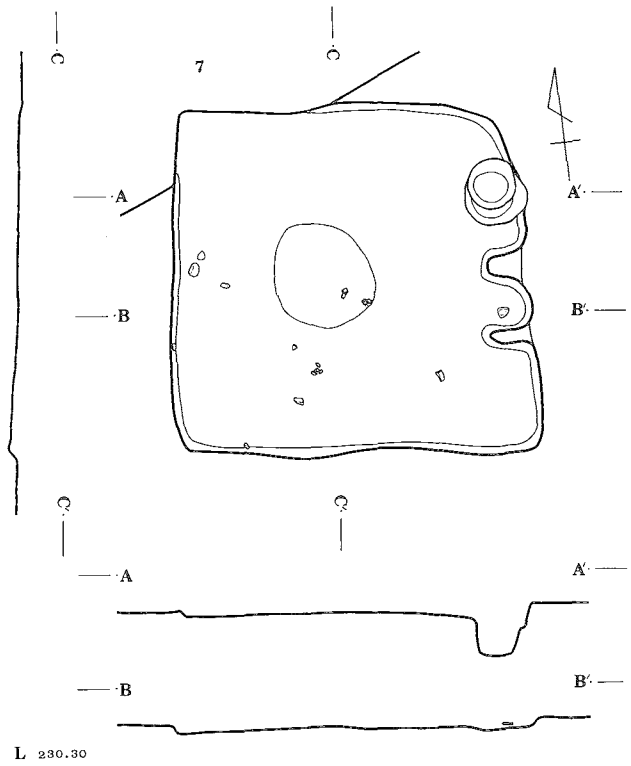



G－29号住居跡

中央で東西4.2m、南北は西側で4.0m、東側で4.5mと少々台形状を呈している。壁高は10～15cm。南西コーナーは井戸の掘り込みが重複するために存在しない。

カマド、焼土等の痕跡は全く検出されず、その位置は不明であった。

遺物は床面東壁際より土師小型甕と甑が組まれた状態で出土、他に床面より土師球胴甕片、坏片、埦片が出土した。



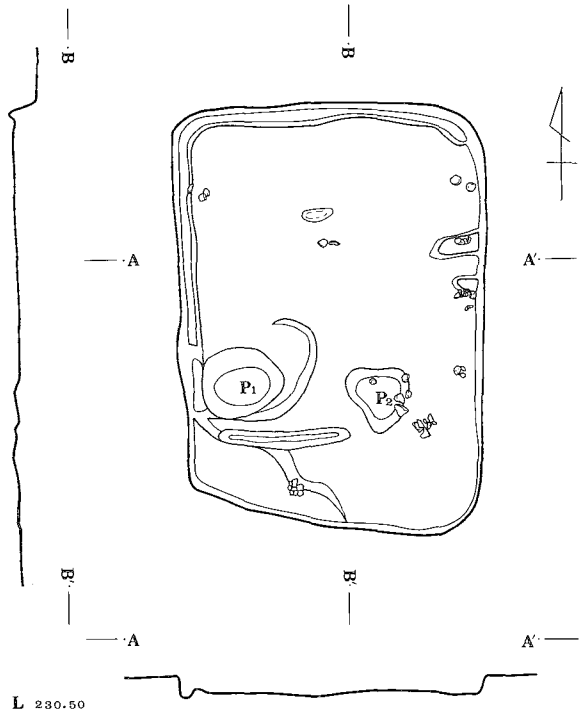

G－30号住居跡

中央で東西3.6m×南北3.7m、壁高約8cmを測る正方形住居、北東コーナーは少々内傾する。北西コーナーは7号との重複であるが、本住居は7号調査後に確認したもので、重複部の壁は残存しないが伴出遺物は明らかに7→30の関係を示している。

カマドは東壁ほぼ中央である。燃焼部は壁内にあり、袖部は粘質土の残り具合より推定して掘り残した。幅は50cm内外で火床面は焚口より僅かに低く、覆土は粘質土、焼土及び黒色土が混在していた。内部火床面やや上より須恵坏片が出土している。

カマド左手の東壁にやや張り出してピットが存在する。径約70cmでピット南側は一段の平坦面をもって底面に落ち込む。床面からは40cmの深さであった。

遺物はカマド部の須恵坏の他、床面よりコの字状口縁土師甕片、須恵坏片、埦片、覆土より羽釜片等が出土した。



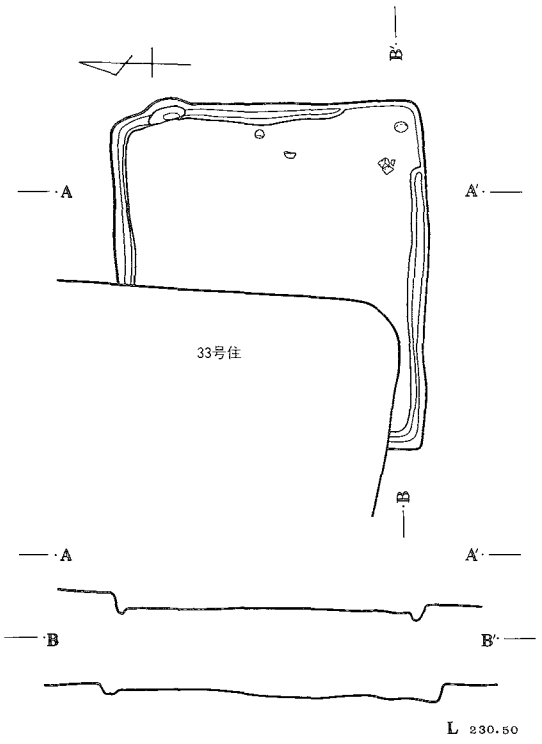

G－33号住居跡

東西3.3m、南北は西側で4.1m、南側で4.5mを測る不整長方形を呈し、壁高は北壁で20cm強である。

カマドの位置は明確ではないが、東壁北寄りの位置に地山を袖部状に細長く掘り残した部分があり、焼けた角柱状の石片を伴っておりその可能性を考えられる。ただ、焼土の痕跡、壁外への掘り込みは検出されていない。

北壁と西壁には周溝が伴う、また西壁南側から東に向かって中程まで同じような溝が入り込んでおり、その南側は床面より一段高いテラス状になっている。周溝及びテラス部北の溝は幅10～15cm、深さ５cm内外である。また、ピットが２基確認されたが、これはその規模や形状等が整っておらず、性格不明である。$P_1$は西壁際にあり88cm×74cmの不整楕円形で中央での深さ約30cmを測る。$P_2$は平均径60cm程の不整形で深さはやはり30cmである。肩口及び覆土より遺物が出土している。

遺物は$P_2$覆土より土師台付甕片、住居覆土より土師甕片、坏、須恵塊片、また住居中央には長径35cmの自然石が横たわって出土した。



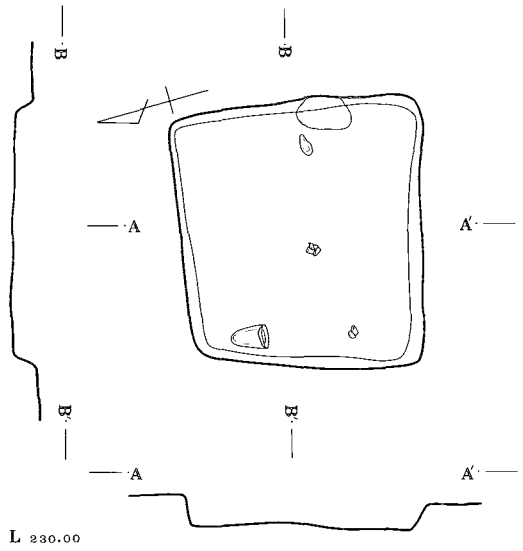

G－35号住居跡

住居北西部は33号に切り込まれており残存しない。東西は残存する南壁際で3.7m、南北3.3m、壁高20cm弱を測る。

カマドの痕跡は全く検出されない。南東コーナー付近床面に焼けた板状石片が存在し、カマド構築材の可能性をもつが、他に火の痕を思わせるものは全く無かった。

壁沿いには周溝が確認され、南東コーナー部のみ途切れている。床面レベルでの幅は７～15cm、深さは３～５cm程である。東壁北側は細長いピットにより、壁上端が少々張り出す。覆土は住居のものと同じで本住居に伴うものであろうが性格は不明である。

遺物は東壁付近床面に土師坏、須恵坏片、覆土より須恵坏片等が出土した。



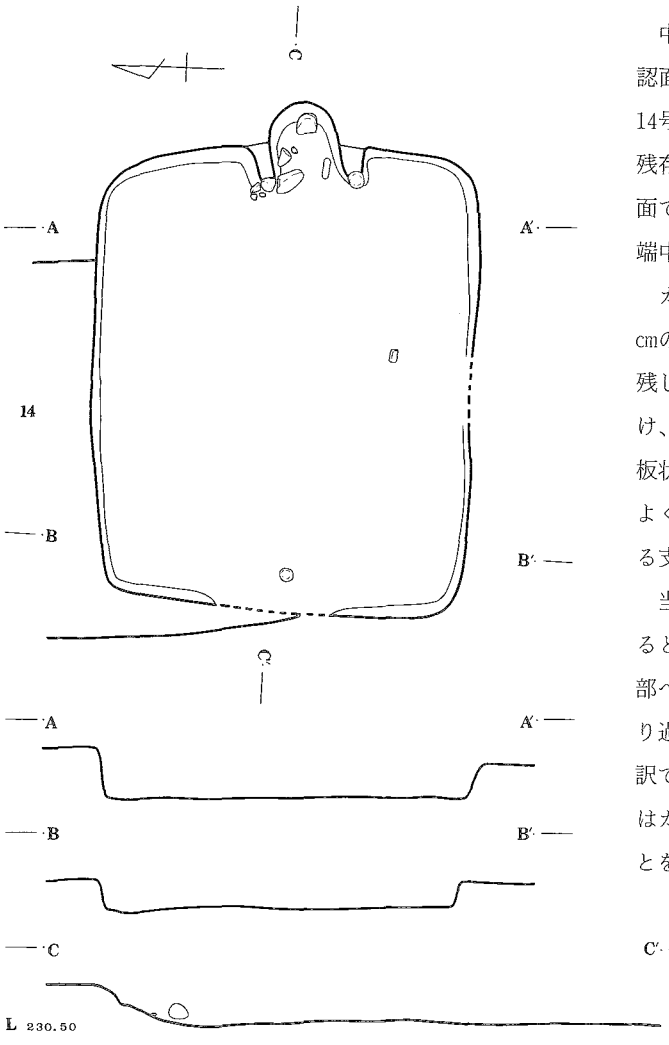

G－34号住居跡

G区南端の緩斜面に位置する。中央で東西2.8m、南北2.5m、壁高20～30cmの小型住居である。

カマドの明確な痕跡は無いが、東壁中央やや南寄りのところに地山が少々焼土化した部分があり、これがカマド痕と思われる。手前に存在する自然石には焼けた痕は無く、カマドに伴うものかどうかは不明。

ピット、周溝等は全く検出されなかった。

遺物は北西コーナー床面より土師甕、覆土より土師甕片、坏片が出土した。



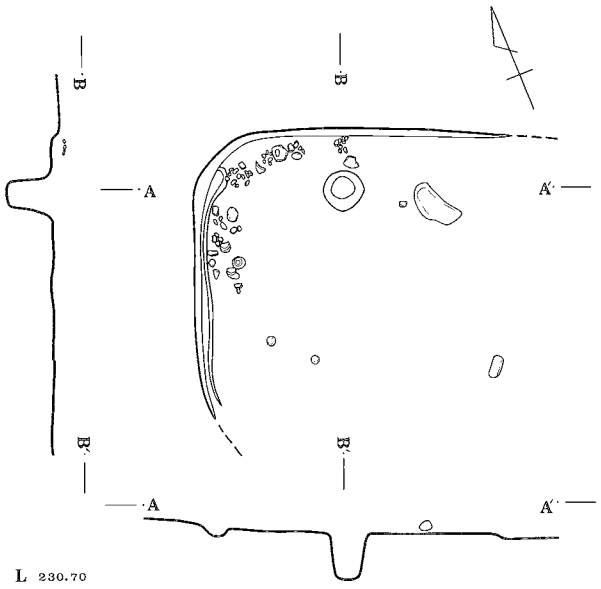

G－36号住居跡

中央で東西4.9m、南北4.0m、壁高は平面精査時での確認面の北東コーナー部で52cmを測る。北西部は壁中程まで14号が切り込むが本住居の掘り込みが深いために重複部も残存していた。また、立地がG区南端の沖積地へかかる斜面であり、住居南西部の壁はいまひとつ明確ではない。西端中央部はプラン確認のために掘った小トレンチである。

カマドは東壁中央に造られる。幅80cmで壁外部は半径40cmの半円状を呈す。袖部は右側部分で地山のロームを掘り残し、左袖は粘質土の痕跡から掘り残した。内側はよく焼け、板状石が内壁を構成していたことを示す。手前左側の板状石はその位置より焚口上部からの崩落であろう。共によく焼けて脆化していた。内部中央左寄りには自然石による支脚が検出された。

当初、南壁中央にも焼土部分があり、これもカマドであるとして袖部を掘り残したが、これは誤認であった。壁外部への掘り込みは無く、南斜面にかかる部分の黒色層を掘り過ぎ、また袖部とした部分にも床面まで焼土が存在する訳でなく、床面にも焼土は全く達していなかった。写真ではカマド状に掘り残してあるが、これはカマドではないことをおことわりしておきたい。

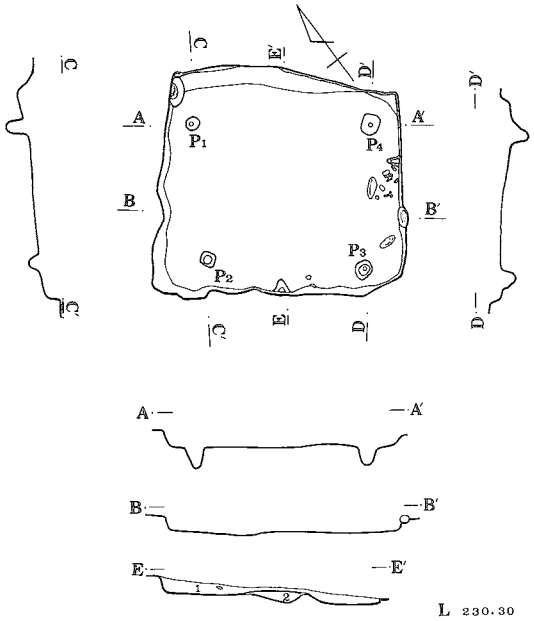
遺物はカマド壁外部斜面より土師甕、右袖部分より須恵皿、西壁際床面やや上より須恵坏、その他覆土より土師鉢片、坏片、須恵塊片等が出土した。




## G－37号住居跡

G区南西部の低湿地へ続く緩斜面に検出された。プランは北側のコーナー部分以外は不明。西壁部分に幅10～20cm程の周溝があり、北壁側には認められない。遺物はコーナー部に集中し、弥生時代の甕、壺片、高坏片、石器等が出土した。これらは床面直上もしくはやや浮いた状態であり、それらより南側床面に出土する高坏、甕片と共に本住居に伴うものと考えられる。コーナー部には須恵皿、坏片が数点混在するが、これらは後世の攪乱による混入物と思われる。

住居北側にピットが１基確認された。写真ではその南西部にもう一つ存在するがこれは覆土が全く別で本住居に伴うものではないので図示していない。伴う方のピットは径40cm、深さ45cmの円形で、遺物等は伴ってはいなかった。また、ピット東側床面レベルで長径50cmの自然石、さらに南側に径25cmの自然石が出土している。




1層：ローム微粒子をまばらに含む黒色土層。パラつく。
2層：地山（掘りすぎ）。

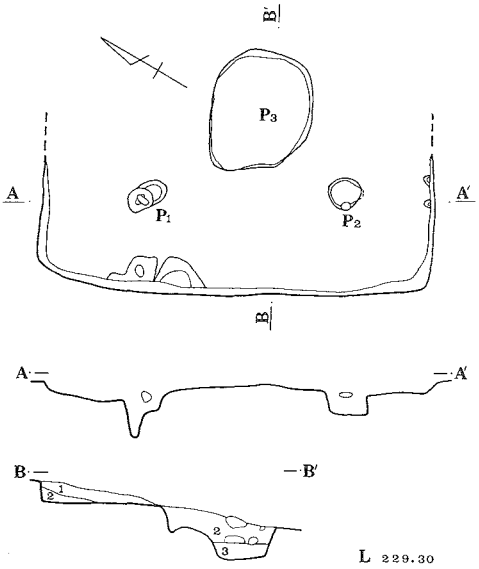
## G－38号住居跡

G区北側の斜面上に位置するため北東部の残存状況は悪い。中央で2.6m×2.4mを測り、長軸を東西としておく。壁高は南壁で30cmである。

カマドを示す痕跡は全く無い。東壁中央付近に自然石が数点出土するが火を受けた形跡は無く、住居内部にも焼土痕は認められなかった。

ピットは４基検出された。全体に住居壁側へ近い位置にあり、位置や統一された規模から柱穴と考えられる。径は15～20cm、深さは15～20cmを測り、$P_3$では中位に段をもって下位が狭くなっていた。

遺物は住居東壁際中央床面を中心に土師甕片が散在していた。



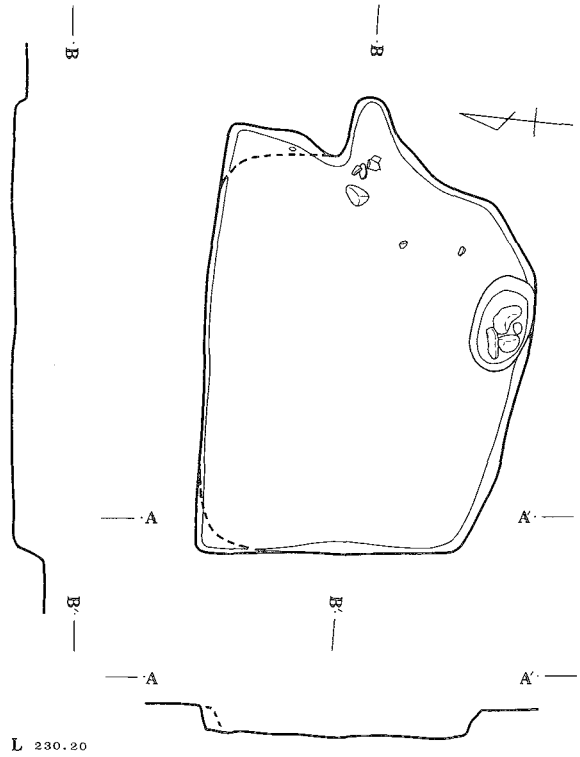

1層：ローム微粒子をまばらに含む黒色土層でしまりはない。
2層：1層に大型ロームブロックが混入する。
3層：湿気を帯びる黒色土層。

## G—39号住居跡

低湿地へと続くG区北東部の斜面に占地している。斜面山側を西壁と考えて、住居東側半分は残存しない。南北で4.2m、西壁は20cm残存する。

本住居に伴う掘り込みはピットが3基である。$P_1$は径45cm×25cmの楕円形でコーナー側が深さ40cmと大きく落ち込む。$P_2$は径35～40cmで深さは20cm、底面は広く平坦である。位置的にはこの2基が柱穴だがその掘り方が全く異なっているために断定は出来ない。$P_3$は住居中央に穿たれた所謂床下土坑である。径130cm×105cmで深さは底面北側で30cmを測る。覆土上位には大型のロームブロックが散在するが遺物は全く伴わない。この$P_3$の西～北側は床面が少々荒れ、狭いU字状の凹みになっていた。

遺物は全体を通して全く出土しなかった。



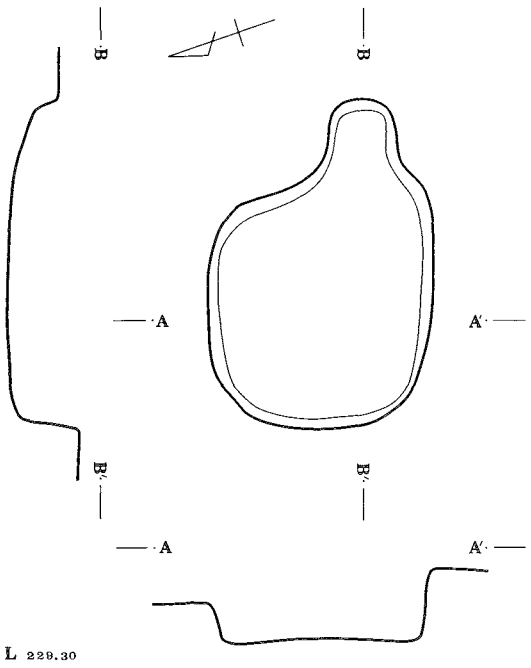

## G—41号住居跡

10号住居跡北側を切り込んで構築される。住居北側は北斜面にかかり出し、地山は黒色土がだいぶ入り込んでいる。そのために北壁中央付近で確実な壁を確認したが両脇の北東、北西両コーナーは掘りすぎたようである。点線が推定のプランである。一方南壁は外へ不整に張り出し、壁際やや東にピットが存在している。

カマドは東壁中央に造られる。壁外の長さは65cmでカマド南壁は南へなだれ込むように曲がり不整形である。袖部の痕跡は無く、石材も伴うと思われるものは無かった。手前覆土の自然石に焼け跡は全く無い。

南壁際のピットは径102cm×64cmの楕円形で深さは42cmを測る。自然石4個が底面に出土する。

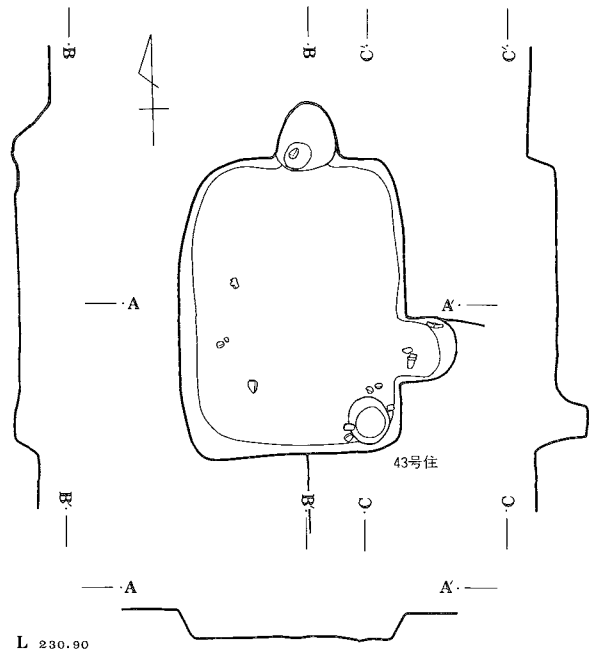
遺物はカマド部より羽釜片、須恵大甕片、土師甕片、土師質坏片、埦片と集中しており、床面にも羽釜片、須恵甕片、覆土からも同様の破片が数点出土している。




G－40号住居跡

39号の東側に同じく斜面上に造られている。カマドのつけ根で東西2.7m、南北2.4mと非常に小さく、全体に丸みを帯びている。壁高は斜面山側の南壁で75cm、北壁で40cmと深い。

カマドは東壁南寄りである。幅は80cm、長さは70～80cm程で整った楕円状を呈す。石材は伴わず、覆土は焼土混じりの黒色土であった。遺物も出土しない。住居全体の覆土からは羽釜片、須恵坏片が出土した。




G－42号住居跡

東西2.4m×南北3.1m、壁高25～30cmの全体にやや丸味をおびた小型長方形を呈す。

カマドは当初北壁と判断したが、ここには全く焼土が検出されず床面よりやや低いピット状のものであった。その後、南東部に重複する43号住居を掘ったところ、42号の東壁部に焼土と板状石を伴う掘り込みが出現したため、これを42号のカマドと判断した。北壁部はカマドではなく、ピットと考えられるが本住居に伴うか否かは覆土からは判断出来ない。

さて、この東壁カマドから43号との新旧関係を考えると、本住居発掘時にはこの部分は確認されず、43号によって削られたと見ることが出来る。しかし、カマド左側壁に残る板状石は43号北壁の周溝上に突き出しており、このことは43→42とした平面精査時の判断と符合する。故に43→42の関係と考えることとする。

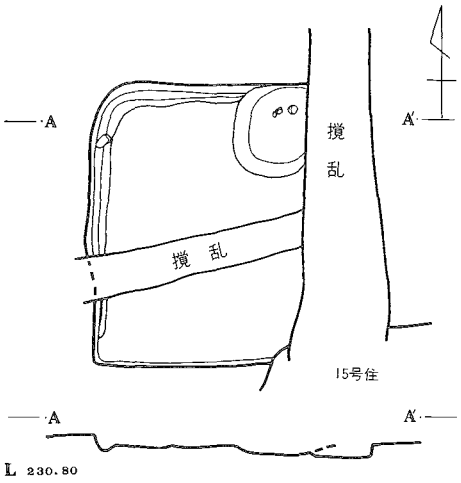
カマドの規模は幅65cm、長さ55cmが残る。左側壁部の板状石が構築材の一部を示している。袖部痕は検出されない。

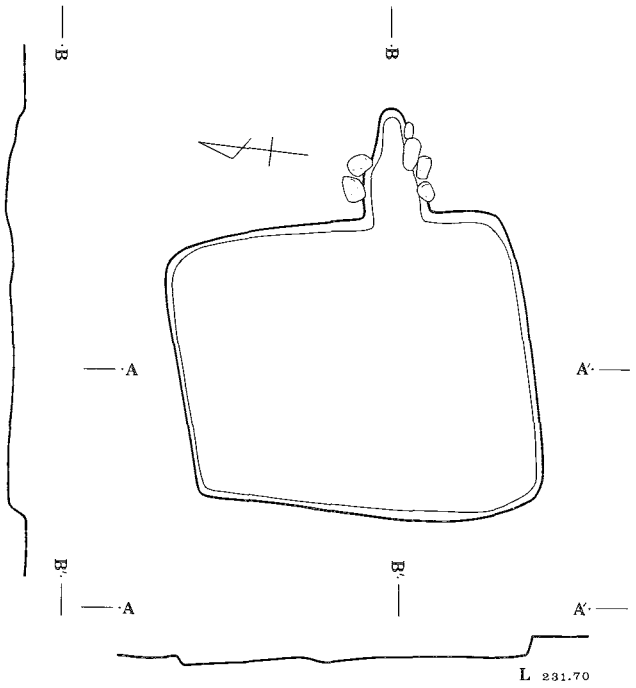
住居南東コーナー際のピットは貯蔵穴と思われ、径45cm、深さ35cm、肩口より灰釉埦片、須恵埦片等が出土している。これらも含めて遺物は全て覆土レベルであるが、本住居の床面とした地山面がＹＰ層であり、地盤としては軟弱であることを考えると、遺物出土レベル付近が床面であって貼床層の下の掘り方まで掘ってしまったと考えた方が妥当に思われる。その「床面レベル」と考えられる遺物は、羽釜片、須恵坏片、埦片、灰釉埦片、長頸壺片等が出土している。

### G－44号住居跡

東壁は攪乱に切られ、住居中央も東西に走る攪乱によって切られている。南北で3.0m、東西も３m以下の小型住居。壁高は10cm弱。カマドの痕跡は全く無いので可能性としては東壁部の攪乱内が考えられる。北壁際東側は径１m程の範囲で円形に浅く凹むが焼土等は検出されない。北壁から西壁にかけては周溝が巡り、幅10～15cm、深さ５cm程である。

遺物は覆土より土師質甕片、埦片、蓋片、須恵埦片等が出土した。



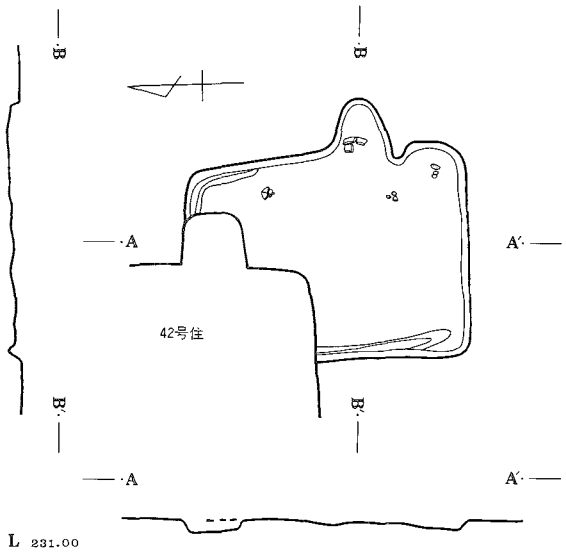

### G－43号住居跡

42号の欄でふれたように43→42の重複関係を示すと思われ、住居北西部は存在しない。中央で東西2.2m、南北は3.0m、壁高10cmの小型長方形住居。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約60cm、壁外部は50cmを測る。板状石小片が焼土に混じって数点検出された。袖部痕は存在しない。

北東コーナー部と西壁に周溝が検出された。床面レベルでの幅は約10cm、深さは５～10cmで、西壁の周溝は住居上端よりやや内側に南へ向かって回り込み、南壁までは届かない。ピットは存在しないが南東コーナー付近が全体に皿状に凹みがちになっている。

遺物はカマドより須恵大甕片、床面より須恵壺片、覆土より須恵坏片、鉢片（？）が出土した。

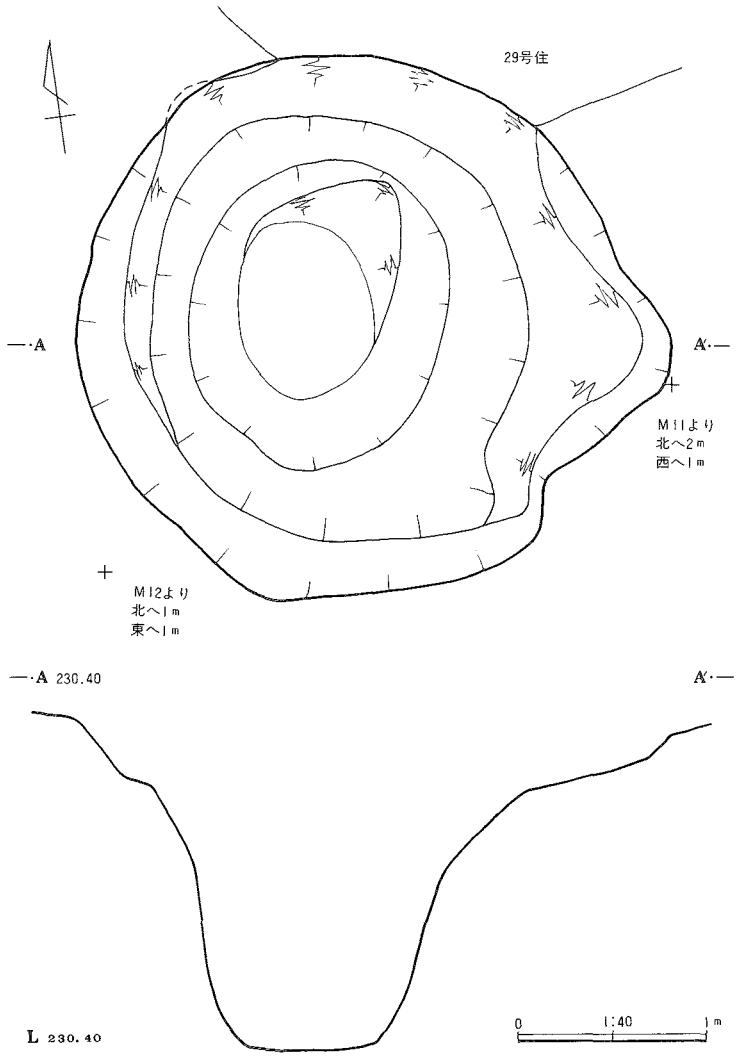



### G－46号住居跡

G区の拡張部に単独で位置する。南北3.8m、東西は北壁で2.5m、南壁で3.1mとやや不整形。壁高は北壁10cm、南壁22cmである。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅65cmで壁外部は除々に細くなり端部で110cmを測る。左右両脇に構築石材が残るが左壁の石は原位置を保っていない。

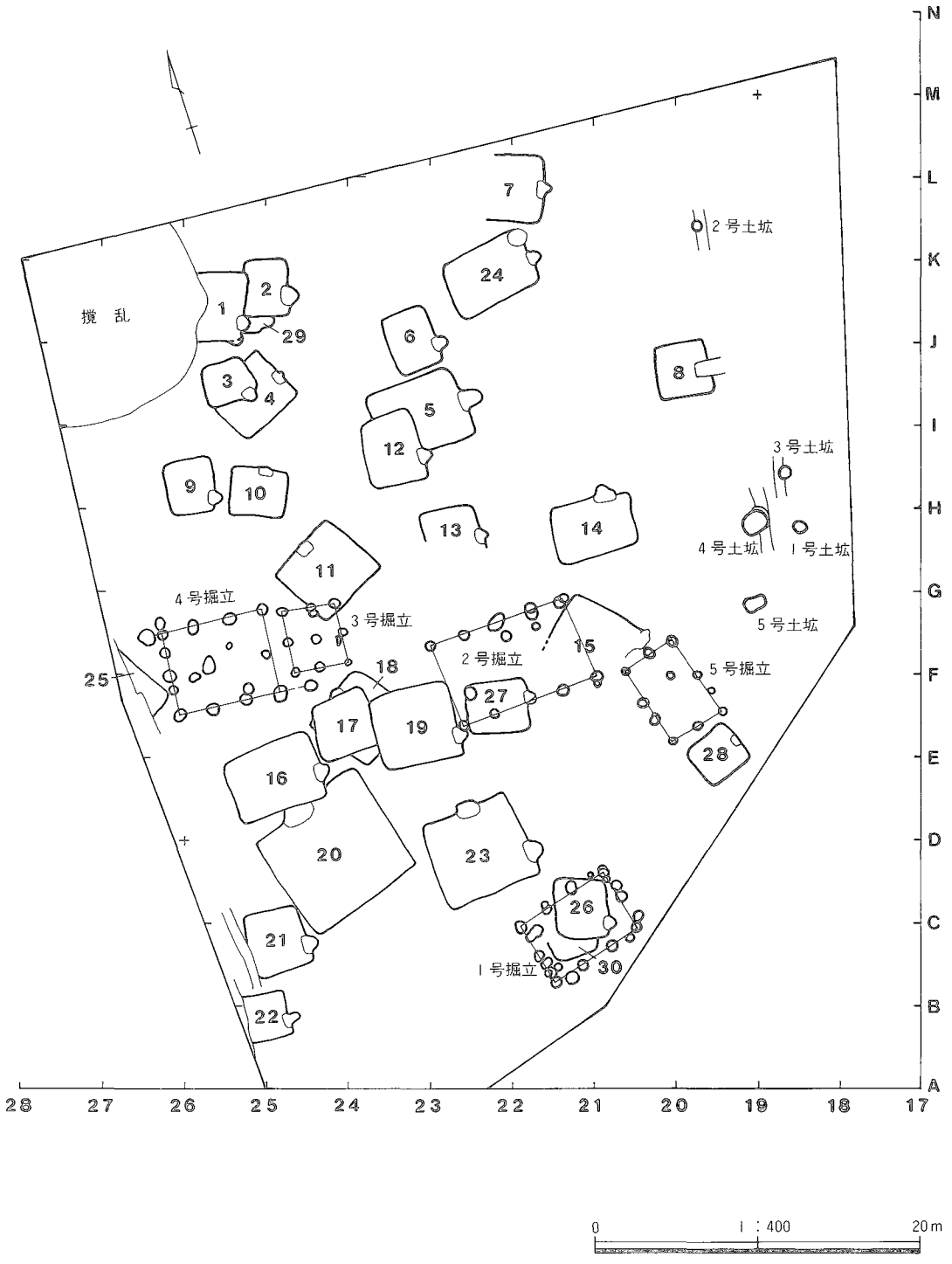
住居に伴うピットは検出されない。遺物は覆土より羽釜片、灰釉皿片が出土した。



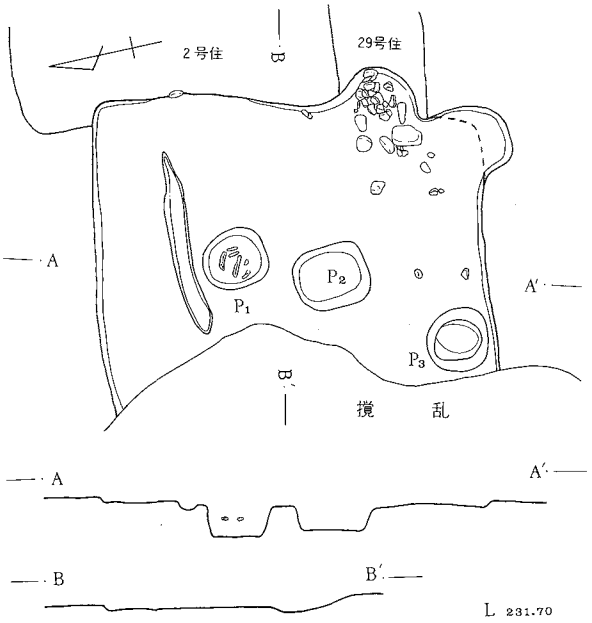

G－1号井戸跡

G区北側に位置し、29号住居跡の南西コーナー部を切り込む。径2.8mで東側が僅かに突出する他はほぼ正円形を呈している。断面は上半が比較的なだらかで下半部は垂下する。壁には礫は存在せず、覆土より径10～20cm程の自然礫が放り込まれるように数多く出土した。底面は常に水が湧き出す状態であったためにいまひとつ明確ではない。遺物は伴出しなかった。

# G II 区




挿図8　G Ⅱ区全体図




## GII－1号住居跡

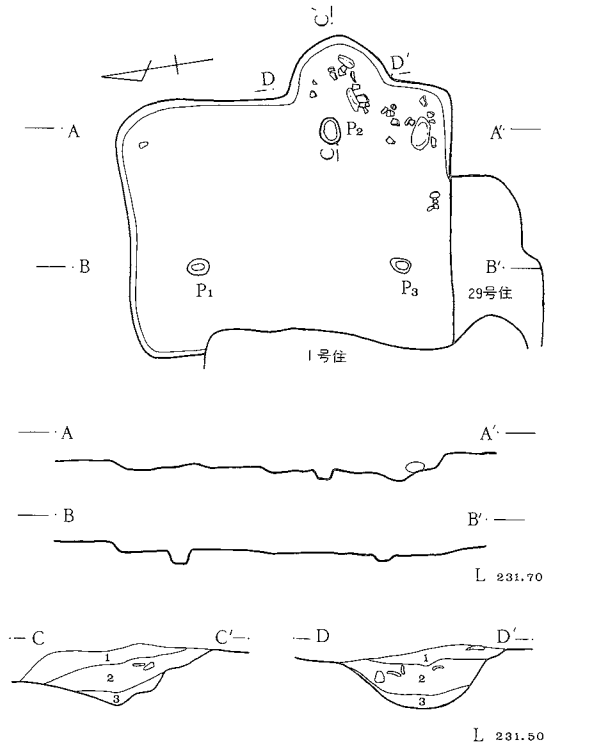
GII区北西部に位置する。住居西側は攪乱のため不明。南北で4.1m、壁高は5cm程が残存する。南東コーナーの張り出しは当初貯蔵穴と考えていたが、ほとんど凹みがなく、中央付近に壁の廻り込みが僅かに検出されたために貯蔵穴ではなく、本住居には伴わない浅い掘り込みと判断した。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅約80cmで半円状に40cm程の掘り込みであるが、29号との重複部のために壁がいまひとつ明確でなく、やや幅広に掘り過ぎたようである。内部から焚口側にかけて土器と礫が集中する。焚口付近両脇には自然石が立てられており、これが焚口幅を示すと思われる。手前の石も石組みカマドの一部と思われ、僅かに焼け痕をもつ。

住居内にはピットが3基検出された。北側から$P_1$、$P_2$、$P_3$とし、$P_1$は径65cm、深さ30cm、$P_2$径65cm×78cm、深さは25cm、$P_3$径65cmで少々漏斗状に落ち深さは45cmであった。このうち、$P_1$覆土中位より棒状炭化物が、$P_3$覆土中位～下位より土器が検出された。

$P_1$の北側には東西に走る僅かな溝状の凹みが存在し、これが北壁かと思ったがさらに北側にしっかりした壁が存在しており、本住居の壁ではないことが分かった。凹みが途中で消えており、性格も不明である。

遺物はカマド部に土釜が割れて散らばり、他に土師質坏片が、また$P_3$より土釜片、灰釉埦片等が出土した。




## GII－2号住居跡

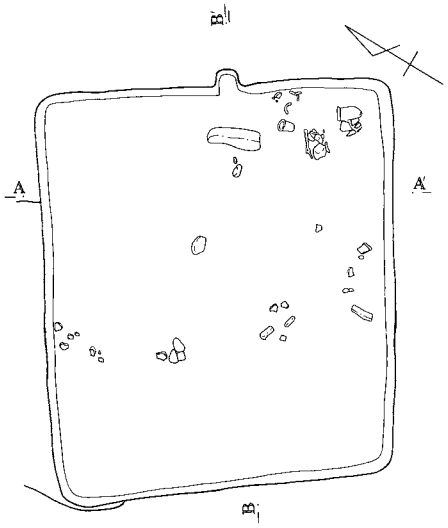
1号の東側に西壁を切り込まれている。南側の29号は後になって住居跡と判断した掘り込みで、平面精査時点では不明であり、前後関係は確かでない。住居北側で東西2.7m、東側で南北3.6m、壁高10cm強を測る。

カマドは東壁南寄りである。幅1mで半円状の大きな掘り込みの内部にはカマド石の残骸と思われる石片と土器類が散在する。カマド右手の南東コーナーは不整形に凹んでおり、ここにもカマド石と思われる焼けた板状石片、自然礫、土器片が数片存在している。

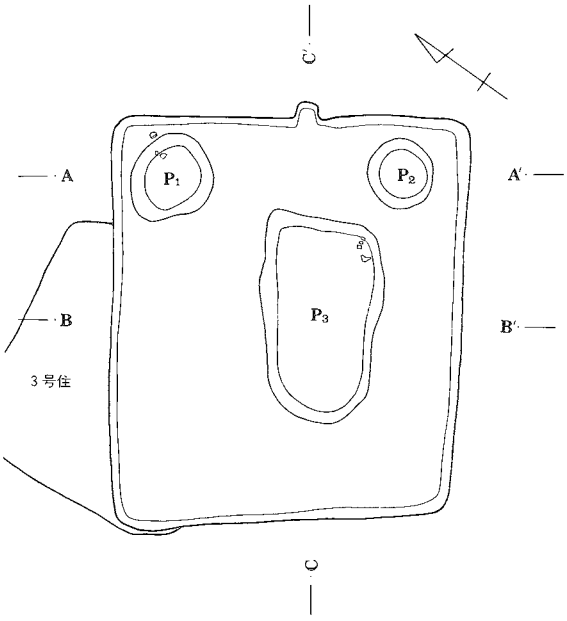
住居内には小さなピットが3基検出された。径15cm～30cm弱の楕円形を呈し、深さは$P_1$15cm、$P_2$10cm、$P_3$6cmである。

遺物はカマド部及び南東コーナー部分より羽釜片、須恵埦片、北東コーナー覆土にも羽釜片が出土した。

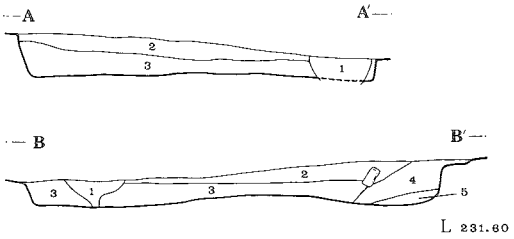
1層：しまりのない黒色土層。
2層：焼土粒をまばらに含む黒色土層。
3層：貼床層。わずかにロームブロックを含む黒色土層。



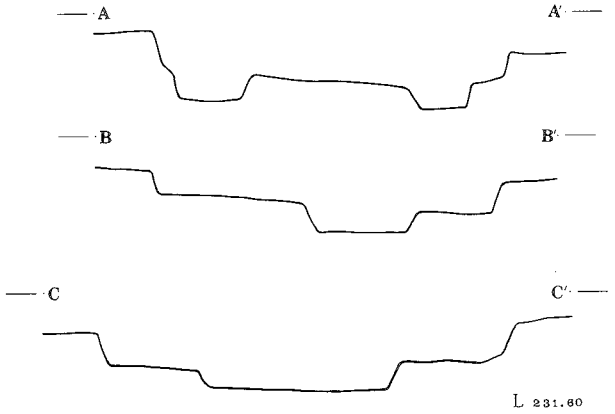

GII－4号住居跡床面




GII－4号住居跡掘り方




1層：撹乱層。黒色土とA軽石の混在。
2層：暗褐色砂層。軽石微粒子を僅かに含む。
3層：ローム微粒子をまばらに含むやや明るめの黒色土層。
4層：カマド覆土。黒色土にローム粒子が少々混じり、焼けてやや赤みを帯びる。
5層：4層に焼土粒子が混じる。




## GII－4号住居跡

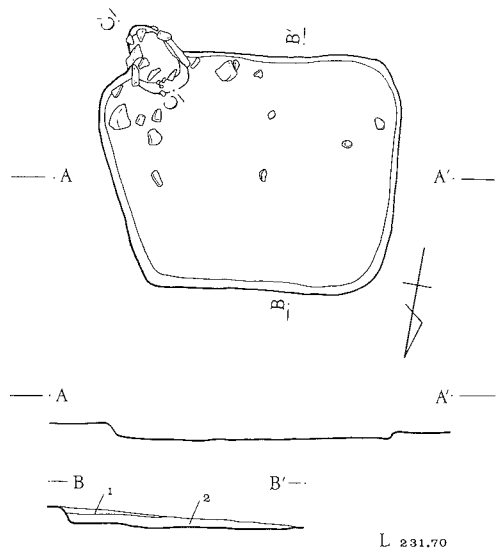
東西4.3m、南北3.7m、壁高40cmを測り、整った長方形である。北西部は壁上半を3号が切り込むが、本住居の掘り込みがより深いために床面は残っていた。

カマドは東壁中央に造られる。幅22cm、長さ20cmの四角い掘り込みはまるで板状石を抜きとったように直線的である。これが煙道になっており、壁内50cmの所に板状石を鳥居状に組んだ焚口が設けられている。

床面はローム微粒子を含む黒色土で10～20cmの貼床を施しているのが認められた。

遺物は床面レベルに集中する。南東コーナーより土師甕甑等が良好な状態で出土した。

掘り方のレベルではピットを3基検出した。$P_1$径90cmで深さ25cm、$P_2$径70cmで深さ25cm、$P_3$は住居中央で2.2m×1.2m、深さ20～25cmの不整形大型ピットである。$P_1$覆土下位と$P_3$覆土上位に焼土が認められた。また、遺物は$P_3$覆土上位に土師甕片が検出された。地山は全体にＹＰを混ぜる柔らかい面で、ピット内、住居内部共にやや軟弱であった。



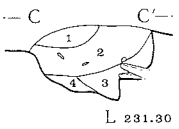

1層：僅かにローム微粒子を含む黒色土層。
2層：ローム粒を多量に含む黒色土層。

## G II－3号住居跡

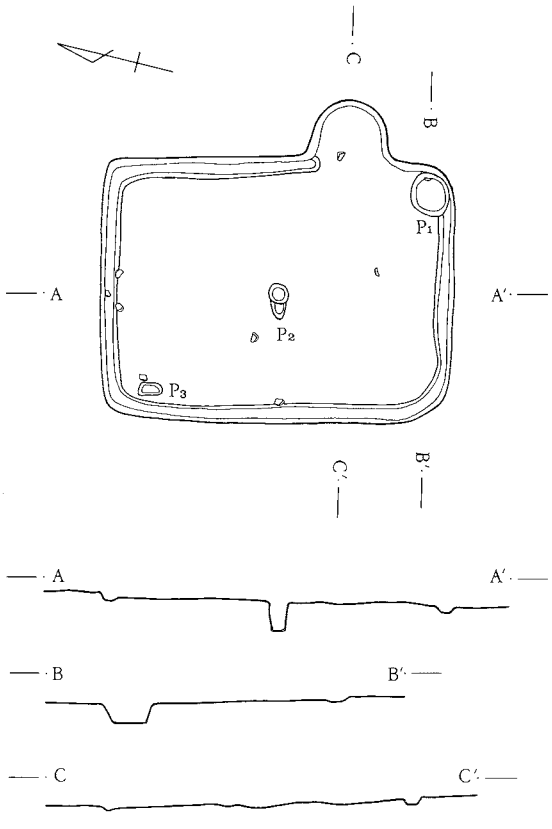
中央で東西3.0m、南北2.5mの不整小型長方形を呈す。壁高は10～15cmを測る。4号の北側に切り込んで住居が構築されている。

カマドは南壁東寄りに造られる。内壁は板状石で組み、先端部は深く、急に立ち上がる。幅は50cm、壁外部の長さは約40cmである。内部は焼土に混じって脆化した板状石片が散在していた。また、カマド手前及び右手の床面にも板状石片が検出された。住居に伴うピット類は全く検出されなかった。

遺物はカマド左手床面より須恵大甕片、床面中央から西側にかけ須恵埦片、坏片が出土した。




1層：しまりのない黒色土層。
2層：焼土主体層で黒色土を少々含む。
3層：焼土層。
4層：黒色土とローム粒の混在。貼床層か。



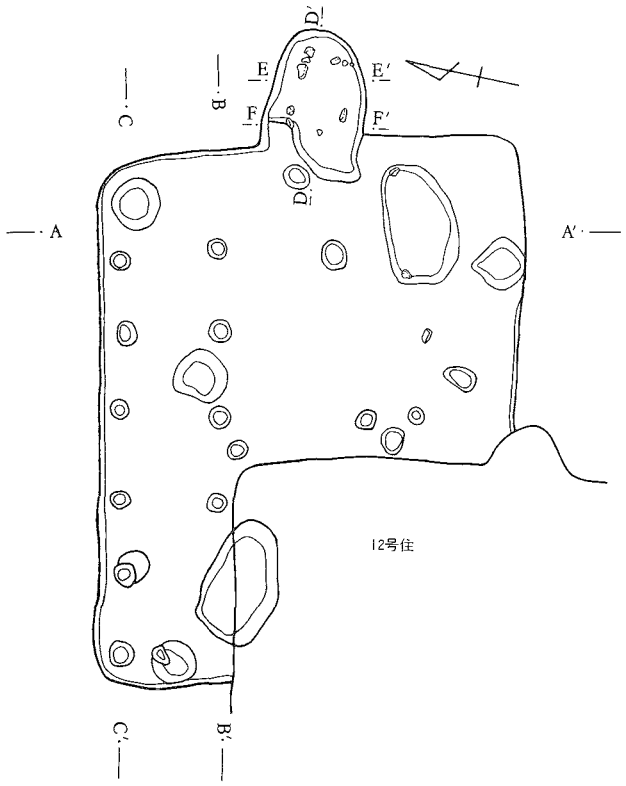

## G II－6号住居跡

東西2.8m×南北3.8m、全体に周溝が巡り、これによりプランが確認出来た。整った小型の長方形住居である。

カマドは東壁南寄りに造られている。残存状態が悪く、僅かに残る焼土より幅90cm、長さ60cmの半円状掘り込みを検出した。右側壁中程に小さな板状石が残っており、構築材の一部を示す。その他の石材や袖部痕等は伴っていない。

周溝はカマド掘り込み右手以外に全周する。幅15～20cm、深さは5～6cmで規模は比較的均一である。また、南東コーナーの$P_1$は貯蔵穴と思われ、径44cm、深さ20cmの中程より土師甕片が出土した。住居中央に$P_2$、北西コーナーに$P_3$ともう2基のピットが検出されたが、伴う遺物もなく性格不明である。

遺物はカマド内及び住居床面に土師甕片が数片、須恵甕片等が出土した。



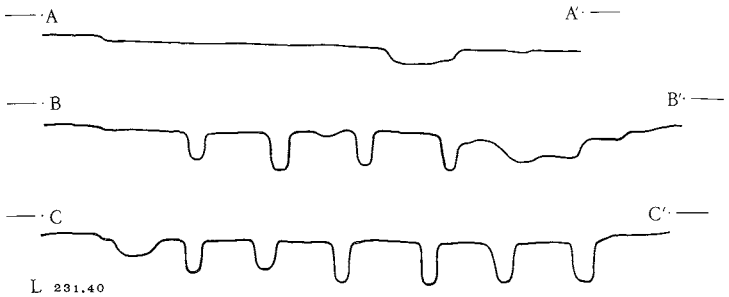

## G II－5号住居跡

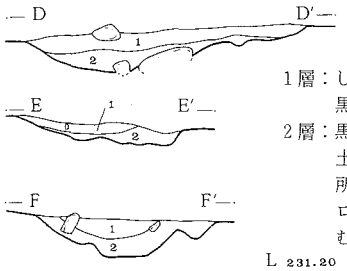
住居南西部は12号に切り込まれる。北側で東西5.6m、南北4.5mを測り、壁高は5cm程度とごく僅かである。

カマドは東壁中央に造られる。幅約1m、長さも1m強の大きな楕円形の掘り込みで、内部は細かな凹凸を呈す。地山中央はよく焼け、鮮やかな赤褐色を呈しており、カマド石の残骸の板状石片が数片散在していた。

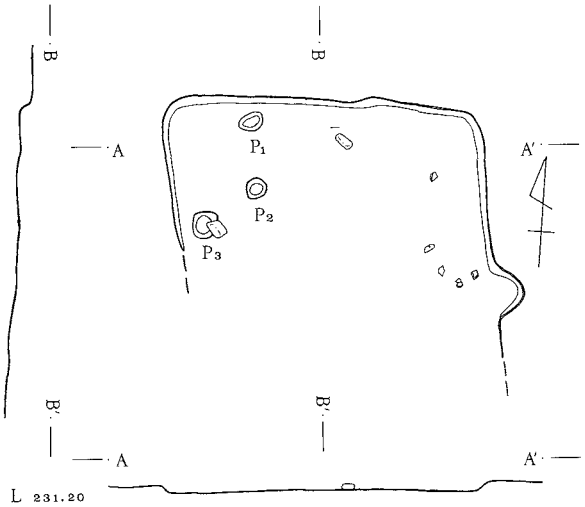
本住居内部にはピットが多数検出された。住居北壁に沿って径20～25cm、深さ30～40cm程度の小ピットが6個一線上に並び、さらにその南側には同様のピットが4個並ぶ。これらは柱穴と思われるが、南側にはそれらに対応するものは無い。また、住居南東部の楕円形ピットは径1.3m×80cm、深さ15cmで内部に遺物を伴う。貯蔵穴と思われる。

遺物は貯蔵穴に須恵坏片、北東部床面より土師甕片が、また覆土より鉄鏃が出土している。




1層：しまりのない黒色土層。
2層：黒色土及び焼土の混在で所々焼土ブロックを含む。

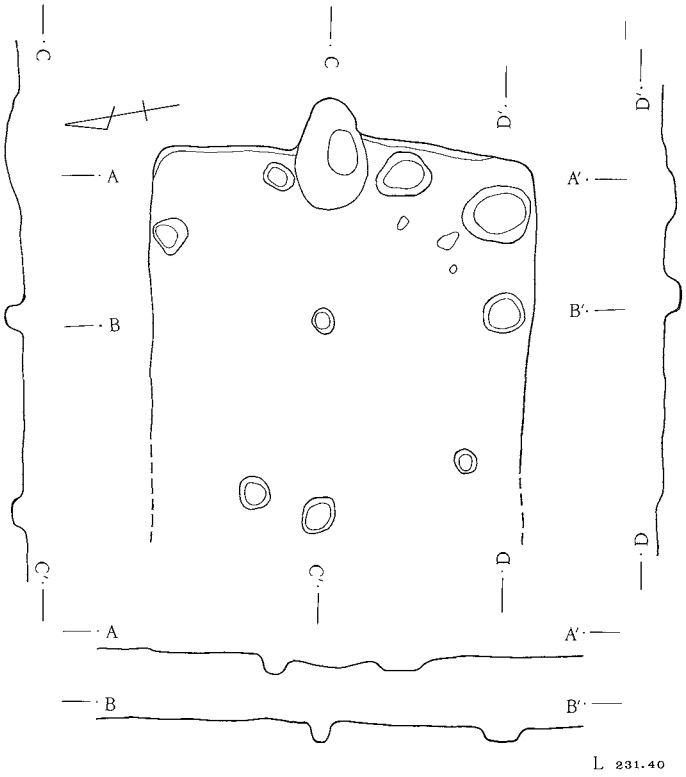



## G II－13号住居跡

G II区中央付近に位置する。緩い南傾斜のために住居南半分は残存せず、北半部で東西3.4m、壁高14cmを測る。

カマドは東壁残存部南端に辛うじて確認されたが、その規模、形状等は大部分が削平される為に定かではない。掘り込み手前にコの字状口縁土師甕片とカマド構築材と思われる板状石片が出土した。

ピットは住居北西部に3基存在し、径は20～30cm、深さは$P_1$12cm、$P_2$17cm、$P_3$11cmであった。$P_3$の肩口には扁平な自然石が伴い、また住居北側床面にもやや細長の自然石が出土した。



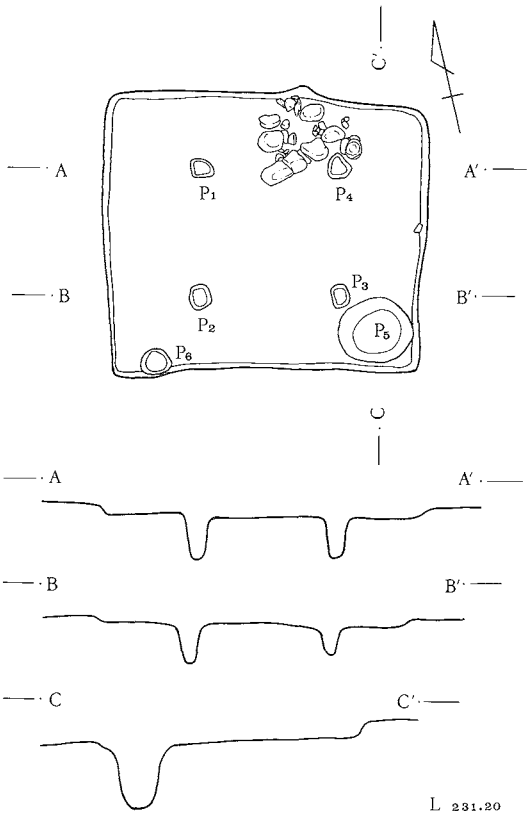

### GII－7号住居跡

GII区北端に位置する。壁はほとんど残存せず僅かな覆土がプランを示す。西壁は全く不明である。南北で推定4m内外であろう。

カマドは東壁中央やや北寄りで壁外部幅60cm、長さ30～55cmを測る。壁内は浅いピット状を呈し、石材や袖部の痕跡は無かった。

プラン内には数基のピットが存在し、南東コーナー部のピットはその位置より貯蔵穴と思われる他は性格的に判然としない。

遺物はカマド内他より土師質埦片が出土した。



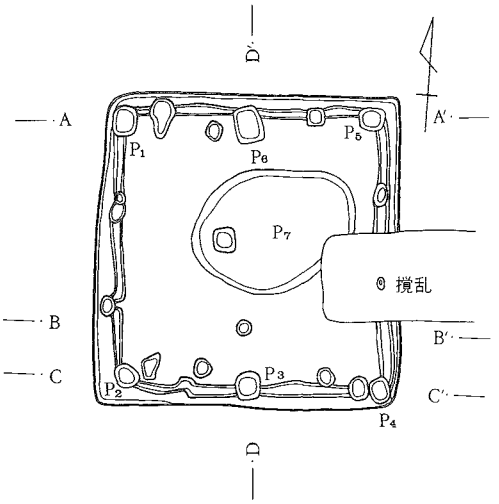

### GII－10号住居跡

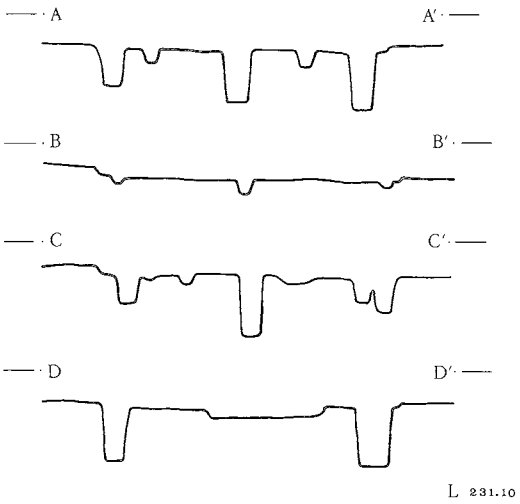
9号住居の東に隣接し、この辺りが僅かな南向きの緩斜面のため北壁で16cm、南壁では6cmが残存する。整った長方形を呈し、東西3.5m、南北は2.9mである。

カマドは北壁中央付近である。自然石による石組みカマドで中央の支脚以外は原位置を保っていなかった。壁外への掘り込みは壁上半部で僅かに認められた程度である。石を除去してみると、これらが据えられていたと思われる凹みが両脇に縦長に残っており、内側焚口付近は地山が焼けて朱色になっているのが認められた。遺物は右手床面に倒置状態で土師甑？の上半部、その北に土師坏片、石の内側に土師大型球胴甕片、坏片が出土した。

ピットは6基検出された。$P_1$～$P_4$は柱穴で概ね隅丸方形を呈し20×25cm程度、深さは$P_3$が30cmと浅く、他は40～50cmの規模である。4基共各コーナーより1～1.2m内側でほぼ対角上に位置するという整った位置関係にあった。$P_5$は貯蔵穴で径80×70cmの楕円形を呈し、中位で狭まり底面へ急に落ち込む漏斗状の断面である。深さは65cmと深い。$P_6$は南壁際西側で径30cm、深さ20cmであった。

遺物はカマド部以外では東壁際床面に砥石、覆土より土師坏片が出土した。



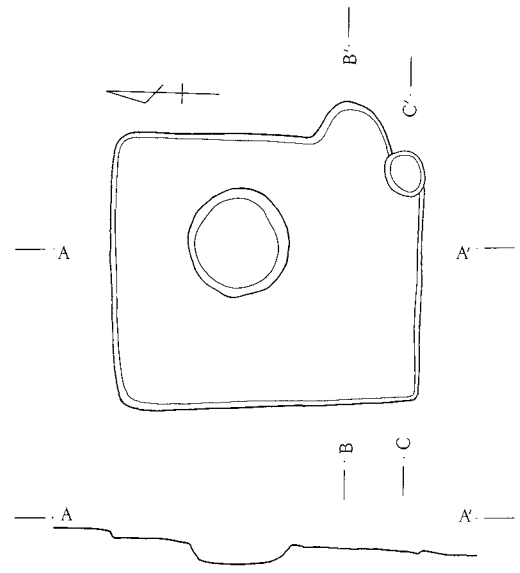




### G II－8号住居跡

3.2m四方の整った正方形の住居。東壁中央は攪乱が入り込んでおり不明である。カマドや焼土痕は全く検出されず、攪乱が床面より10cm強掘り込まれているために、これに切られたものと推察する。

本住居は壁より10～15cm内側に周溝が全周している。幅は平均10cm、深さ5～8cm程で周溝上にピットが集中する。このうち、各コーナー部及び南北両辺中央の$P_1$～$P_6$が主柱穴と考えられる。これらは概ね形状が隅丸方形で深さは30cmから65cmと他のピットに比べ深い。また、他に各辺3等分するように小ピットが2箇所ずつ検出されており、支柱穴的なものと思われる。$P_1$及び$P_2$双方の東側の不整形掘り込み、中央付近の2基についてもこれに類するものであろう。中央の床下土坑$P_7$は1.8m×1.3mの楕円形で深さは10cm程度。しまりのない黒色土にロームブロックが混じる覆土である。

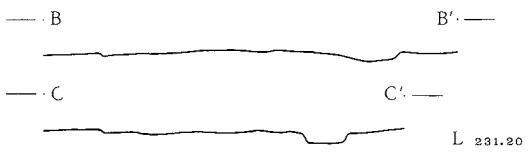
遺物は住居北側覆土より須恵甕片、$P_7$覆土上位より羽釜片が出土した。

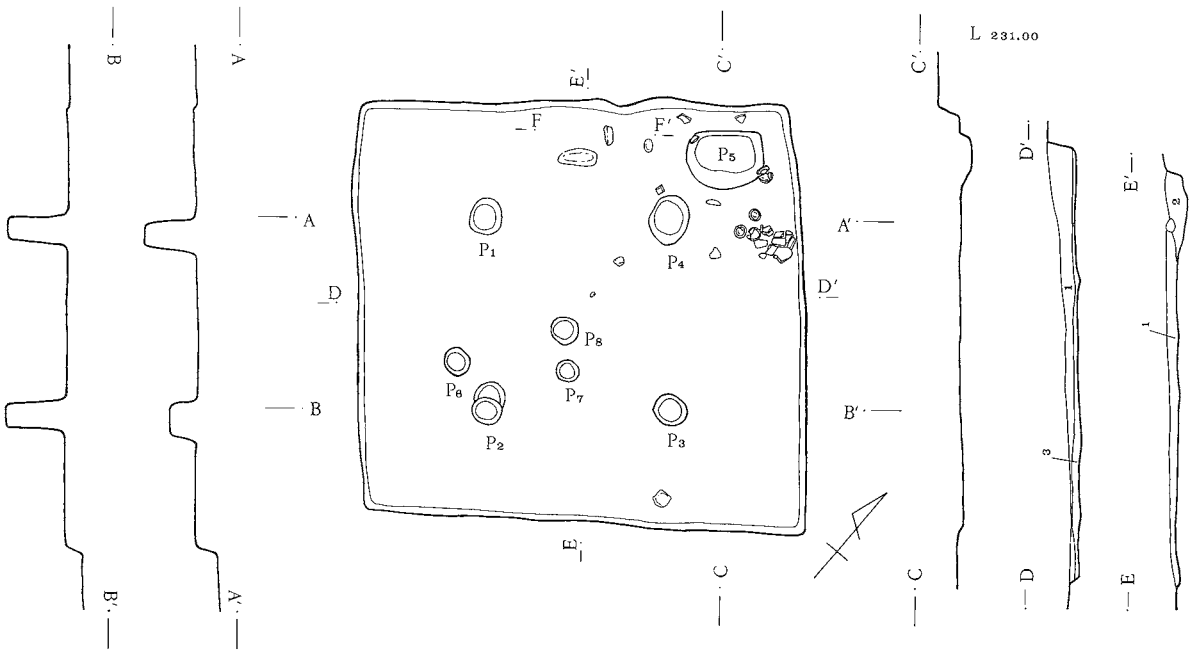


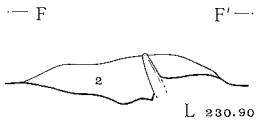

### G II－9号住居跡

東西2.9m、南北3.3m、壁高5cm強を測る長方形住居。

カマドは東壁南際に位置しており、幅80cm、長さ45cmの浅い掘り込みが残る。石材、袖部痕等全く検出されない。カマド右手の南東コーナーに径45cm、深さ10cmの貯蔵穴が存在するが遺物は全く伴わない。住居中央やや北寄りには床下土坑があり、径1.1m、深さ20cmの円形を呈す。このピットの北側床面レベルで土師甕小片が出土し、他に遺物は伴っていない。

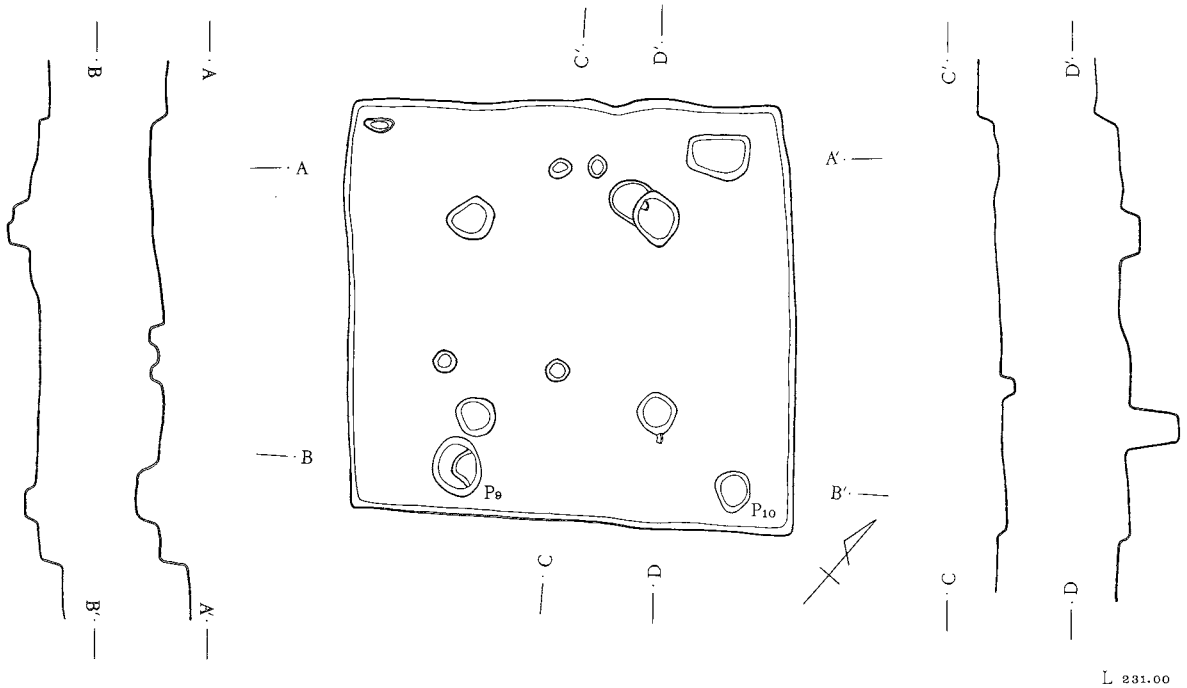





GⅡ—11号住居跡床面

1層：ローム微粒子をまばらに含む黒色土層。よくしまっている。
2層：カマド部覆土。全体に焼土粒を含む赤みがかった黒色土層。湿気をもつ。
3層：貼床層。径5～10cm程のロームブロック・褐色土・黒色土の混土でよく堅まっている。




GⅡ—11号住居跡掘り方

### G II－11号住居跡

北西側を北壁と呼称する。東西4.8m、南北4.5mで西壁では4.3mと少々短い。壁高は住居北東で約25cm、南西では5cmにも満たない。僅かに東西軸が長いが、総じて整った正方形といえよう。

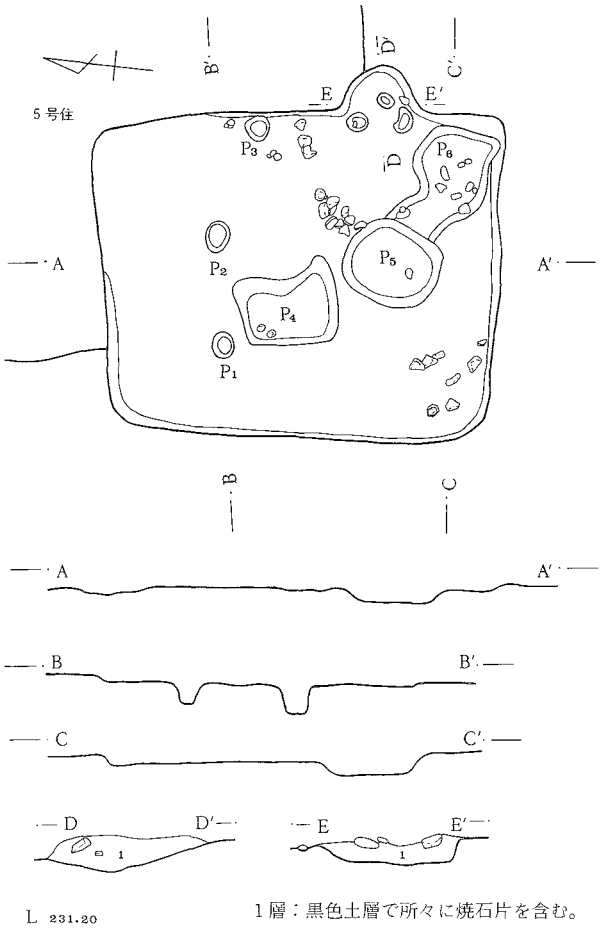
カマドは北壁中央に造られる。壁外の掘り込みはほとんど無く、右袖部に板状石、焚口部に崩れ落ちたと思われる自然石が検出された。火床はなだらかに10cm程低くなっており、焼土粒を含む黒色土がカマドを覆っていた。石を除去して精査したところ、手前に横たわる自然石のほぼ両脇部分に深さ7～8cmの小ピットが現れた。石抜き痕であろう。

本住居の床面は全面に貼床であった。南西部では10cm弱、北東では数cmと薄く、これによって床面レベルはほぼ均一に保たれていた。ロームブロック主体で黒色土が混在する貼床層でしっかりと固まり、ブロックが多いためにつっつくとパラパラ剝がれる。

ピットは床面レベルで8箇所検出された。$P_1$～$P_4$を柱穴と考えるが$P_4$は他が60cm程なのに比べ30cmと半分しかない。また$P_8$は貼床除去で無くなってしまう程度の浅いものであった。$P_6$、$P_8$は共に径30cm、深さは25cm前後である。貯蔵穴$P_5$は径84cm×62cmの楕円形で深さ15cmを測り、内部に遺物は伴わなかった。

貼床除去後の掘り方レベルにおいて南壁際に$P_9$と$P_{10}$が出現した。$P_{10}$は径40cm、深さ15cmであり、$P_9$は後に3号掘立の柱穴であることが判明した。

遺物は床面レベルでは貯蔵穴の周りに集中しており、土師甕片、甑、坏がまとまって出土した。床下ではやや広がった$P_4$の中腹に須恵甕片、$P_3$脇に土師坏片が出土した。




1層：黒色土層で所々に焼石片を含む。

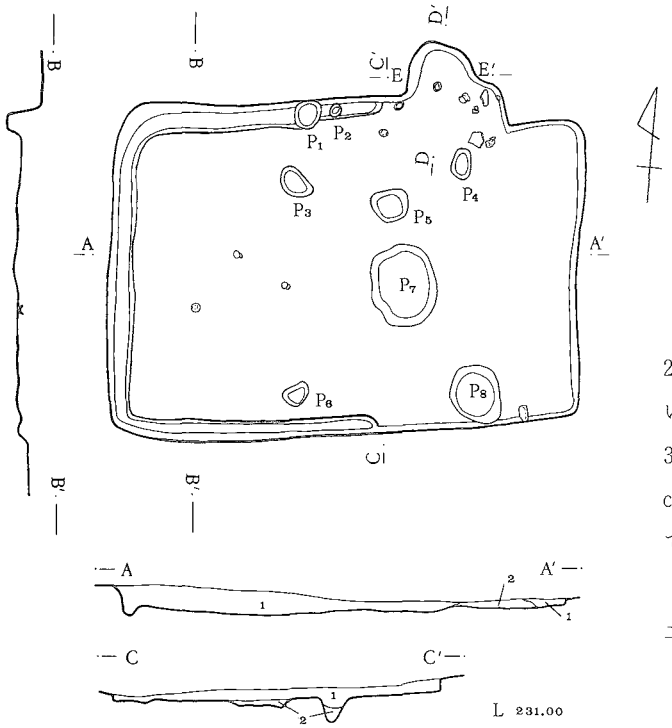
### G II－12号住居跡

5号住居南西部を切り込む形で確認された。中央で東西3.5m×南北4.2mの不整長方形住居。壁高は住居南西部で約10cmを測る。

カマドは東壁南寄りである。壁外掘り込みは幅90cm、長さ45cm程が残り、手前両脇及び中央に小ピットが存在する。袖石と支脚の位置を示すものであろうが使用された石は検出されなかった。覆土には焼けた板状石片が所々に散在していた。

ピットはカマド部以外で6基検出された。$P_1$～$P_3$は規模、形状が比較的揃っており、径25～30cm、深さ20～30cmの円形ピットである。柱穴と思われるが住居南側にこれらと対応するものは検出出来なかった。$P_4$と$P_5$は所謂床下土坑で$P_4$は1m×70cm程の不整な形状を呈し、深さは中央で18cm、底面より円形小礫2個が出土した。$P_5$は1m×90cm、深さ15cmの楕円形で覆土からは焼けた板状石片が多数出土した。板状石片はカマド内及び焚口左手、貯蔵穴内にも存在するが$P_5$では量的に多く、カマド部に不要となったものをここに入れたのではないだろうか。$P_6$は不整な形状の貯蔵穴で深さは15cm、内部には板状石片が数片検出された。

遺物はカマド焚口手前床面より羽釜片、南西コーナー部覆土より土師甕片、須恵埦片等が出土した。




1層：暗褐色土層で径8cm内外のロームブロックをまばらに含む。
2層：ローム微粒子を少々含む暗褐色土層。
3層：風倒木痕。黄褐色ローム。

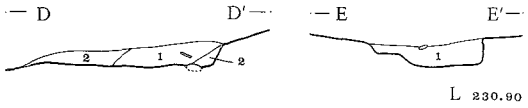
## GII－14号住居跡

東西5.0m、南北3.5m、壁高10～20cmを測る長方形住居。東壁際中央は一部攪乱を受けている。

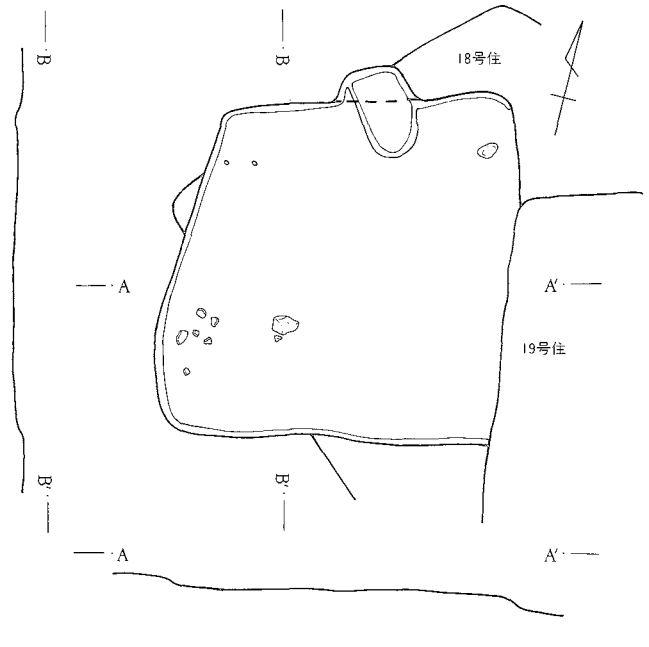
カマドは北壁東寄りである。東側壁は不整形で、中央付近で幅75cm、長さは50cmを測る。焚口付近右側に構築材と思われる板状石片があり、カマド内部及び付近には土師質小型坏、足高の台付坏等が伴う。

カマド左手から南壁中央付近までは周溝が巡り、幅は約20cm、深さは5～20cmであった。また、ピットは8基が伴い、小ピットの$P_1$～$P_6$のうち$P_3$は深さ20cm、$P_4$31cm、$P_5$は30cmとやや深い他は10cm程度であった。中央の$P_7$は径88cm×70cm、深さは中央で15cm、$P_8$は50cm×65cm、深さ45cmであった。共に遺物は伴っていない。

遺物はカマド付近以外住居床面西側に土師質小型坏片、土釜片等が出土している。




1層：焼土粒を多量に含む暗褐色層。
2層：ロームブロックをまばらに含む暗褐色土層。

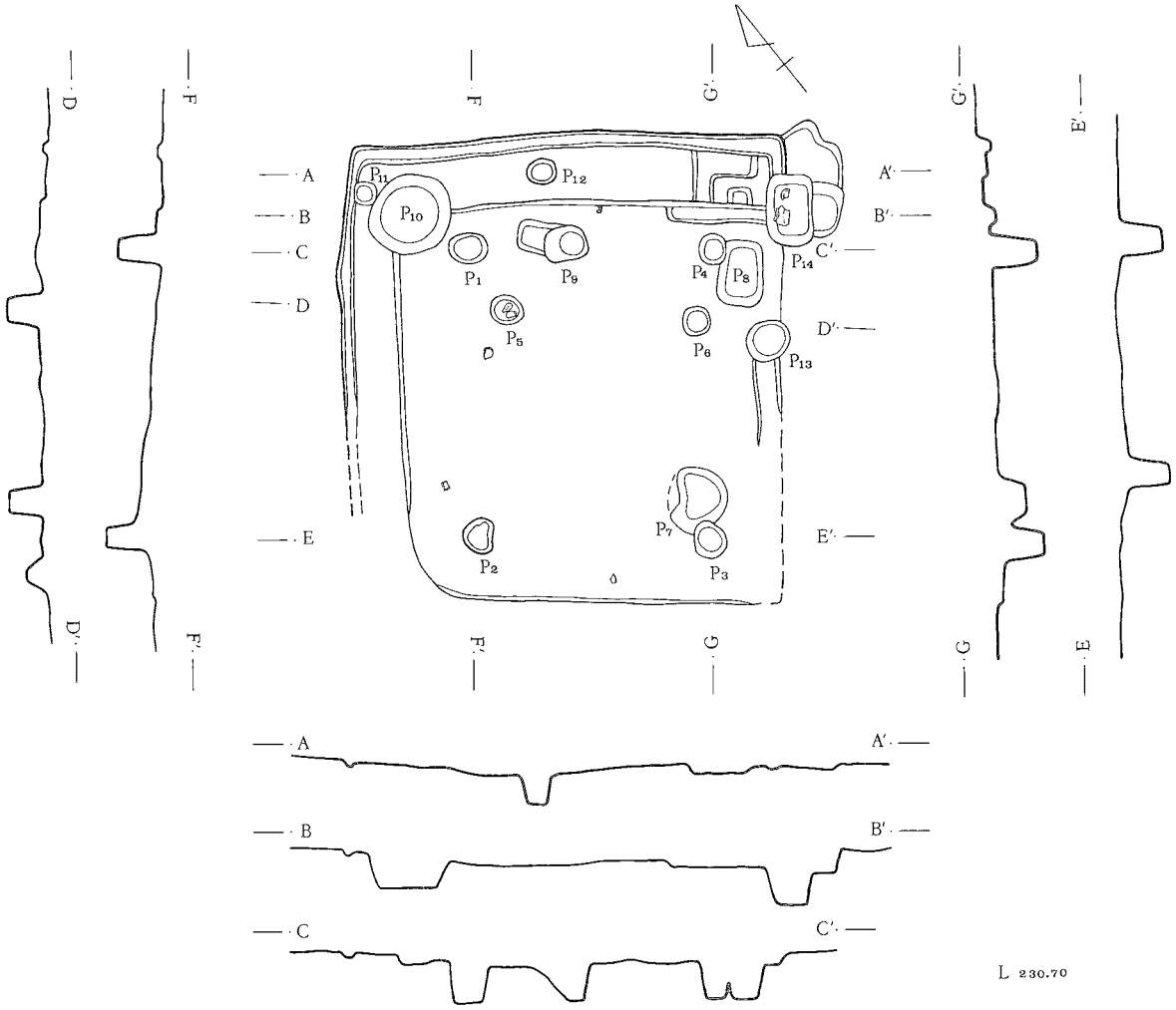



## GII－17号住居跡

不整方形で南北は3.5m、東西は北壁で3.1m、南側にかけて広まり西壁端部で巡り込み3.5mが残存する。東壁は19号との重複であるが重複部分が僅かだと思われ新旧関係はいまひとつはっきりしない。ただ、本住居のカマドとした北壁中央の掘り込みが後に18号のものと判明したため、本住居に伴うカマドが無いことになり、より掘り込みの深い19号に切られたと考えれば17→19と言える。

住居に伴うと思われるピットは存在しなかった。

遺物は南西コーナー覆土より土師甕片、須恵坏片、埦片等が出土した。




GII－15号住居跡

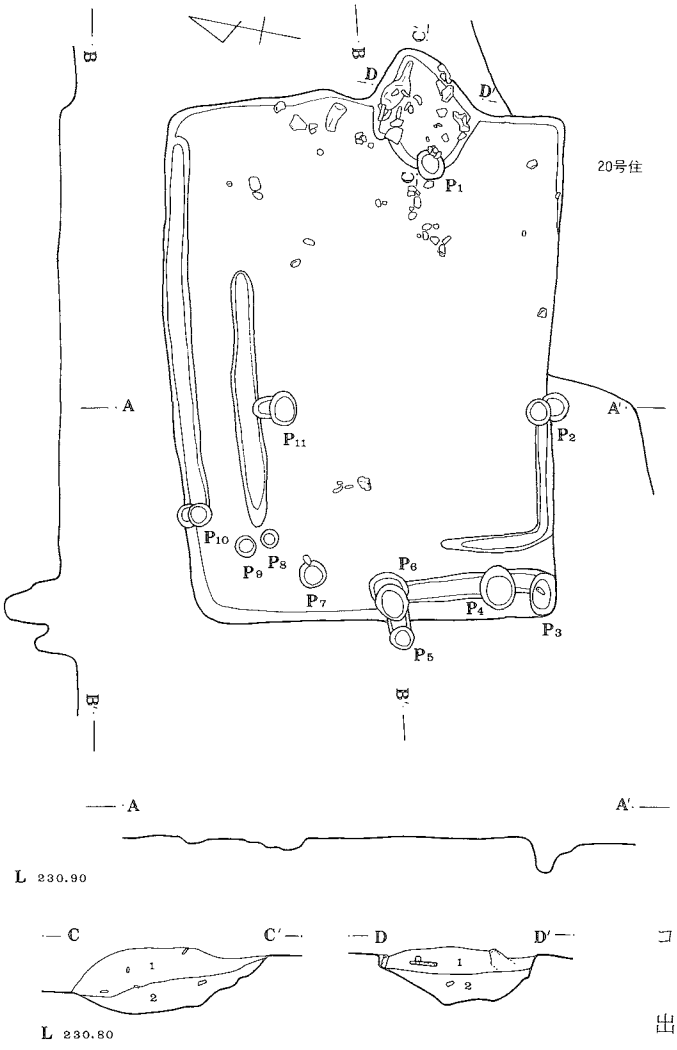
ほぼ真北にコーナーをもつため、この東側を一応北壁と呼称することにする。住居北半部に周溝をもち、東壁には存在しない。南壁は緩斜面の下位にあたるため不明。北壁、西壁共に周溝よりほぼ50cm内側に並行する掘り込みがあり、このプラン上では北壁東端と東壁中央に周溝状の掘り込みが存在していた。東西4.1m、南北4.2mとほぼ正方形であり、北側の周溝までは東西4.7m、南北5.0mであった。周溝レベルからの内側プランの壁高は約10cmである。

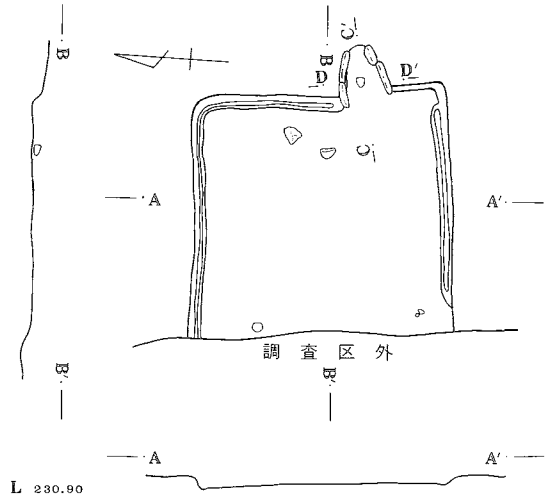
カマドの痕跡は全く確認出来ない。

北東コーナー部は、周溝内側に入り組んだ凹凸と外側にピットという複雑な状況である。これらは攪乱ではなく本住居に伴うものだが性格については不明と言わざるを得ない。

ピットは全部で14基である。$P_1$～$P_4$が主柱穴と思われ、径30～40cm、深さは40cm内外とほぼ同規模である。また$P_5$と$P_6$はこれらより少々浅いがその位置及び規模から柱穴と思われる。$P_5$底面にはこも石状の礫が2個検出された。北東コーナーの$P_8$と$P_{14}$は形状、規模共酷似しており、$P_{14}$覆土下位からは土師甕片が出土している。$P_{10}$は径90cmと大型で深さは中央で35cm、$P_7$は2号掘立に伴う柱穴である。

遺物は$P_{14}$内以外に土師甕片、坏片が出土している。




### GII－16号住居跡

東西5.5m、南北は西壁3.9m、東壁で4.2mと少々西側が狭まる長方形で壁高は10cm弱である。

カマドは東壁南寄りに検出された。掘り込みは幅1.1m、長さ60cm程の不整三角形で構築材の板状石の細かな破片がほぼ両脇に多数検出された。火床は焚口より約10cm低く、貼床層は無い。

住居床面はほぼ全面的に貼床となっており、軽石粒及びローム粒を含む黒色土によって形成される。この面ではっきりと確認されたピットは11箇所で$P_2$、$P_5$、$P_{10}$は明らかにプラン外へ張り出している。全体的に規模に大差はなく、径20～30cm、深さは$P_2$、$P_5$が50cm、$P_6$が60cmで他は10～15cmであった。

住居に伴う溝では北壁に周溝が、またその内側に周溝状の凹みがあり、西壁内側、南壁西側にも確認された。南壁のものは西壁よりずっと内側で北側へ巡り込んでおり、この延長ラインをつなぐとふたまわり程小さな相似形のプランが出来る。西壁南側は北側プランとのくい違いが生じており、$P_6$で途切れている状況であった。

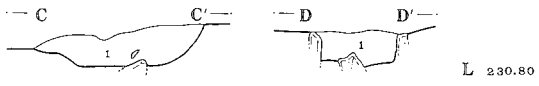
床面レベルでの遺物はカマド手前より土師甕片、南東コーナーより須恵坏片、須恵甕片等が出土した。

貼床除去後の掘り方面においては新たにピットが7基検出された。$P_{12}$～$P_{15}$は不整形な大型ピットで深さは60～80cmと深い。覆土はローム粒及びブロック混じりの黒色土で、$P_{14}$の上位には焼土が多量に存在した。$P_{16}$覆土には土師甕片が、また貼床除去中にも土師甕片、坏片が少々出土した。$P_{17}$、$P_{18}$は共に径30cm弱、深さ10cm弱の小ピットであった。

### GII－22号住居跡

住居西壁は調査区域外にあたるために不明。残存部で東西2.5m、南北は2.8mを測る。壁高は約10cm。

カマドは東壁南寄りに造られる。両側壁は板状石で構築され、これは脆化してブロック状にボロボロと崩れる。石

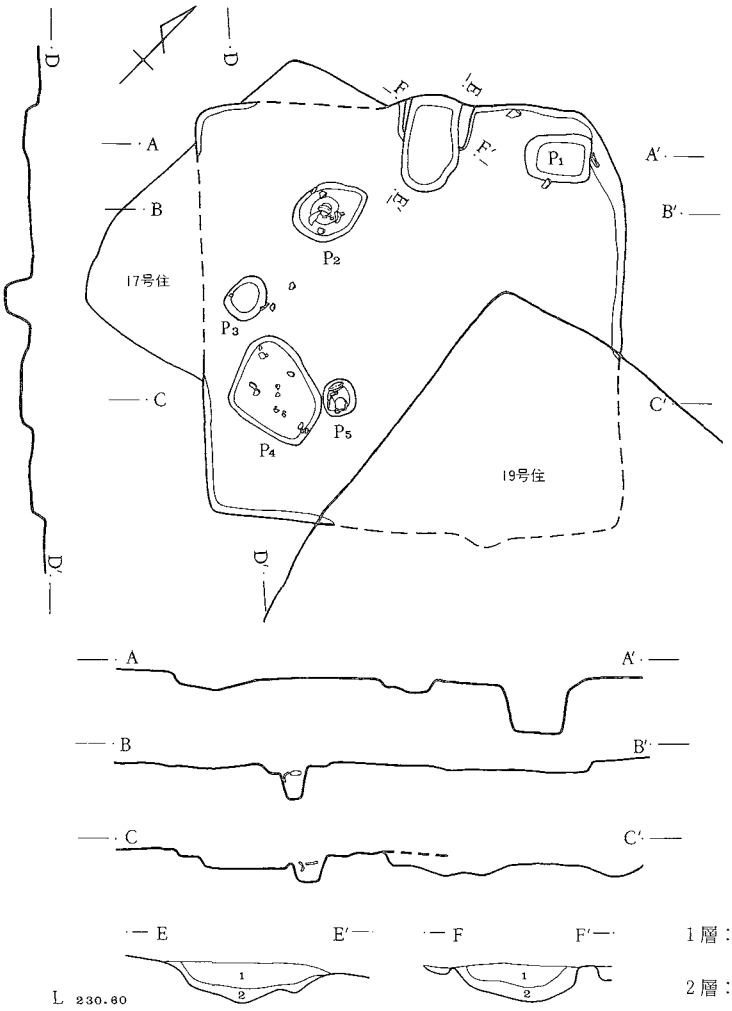



1層：ロームブロック及び微粒子と、下位に少々焼土を含む暗褐色土層。しまりはない。

内側で幅40cm、長さは60cmを測る。

ピットは全く伴っていなかった。

遺物は覆土より須恵坏が出土した。










1層：焼土を多量に含む天井崩落層。上部に灰がまだらに混じる。
2層：僅かに焼土粒を含む暗褐色土層。

### G II－18号住居跡

17号及び19号に切り込まれており、残存部より東西4.5m、南北4.4mのほぼ正方形と言える。

カマドは北壁中央である。(こちらを北壁と呼称する) 当初、17号のカマドとしたが掘り込みの向きが本住居に符合していたためである。壁外への張り出しがほとんど無い燃焼部壁内タイプで、幅55cm、長さ1mの楕円形ピット状を呈す。両袖部は地山のロームを掘り残した芯の部分が確認された。

本住居に伴うと思われるピットは$P_1$～$P_5$である。$P_1$は貯蔵穴で70×48cmの長方形を呈し深さは50cm。$P_2$は中心で深く掘り込まれており深さは床面より40cmを測る。覆土上位には石及び土師甕片が伴う。$P_3$は径40×50cmの楕円形で深さは25cm、$P_4$は径80～90cmの不整楕円形で深さは10cmと浅く、覆土には土師甕片数片を伴う。$P_5$は径38cmで深さ25cm、覆土には土師坏及び甑とこも石状礫が伴う。

遺物は他に$P_1$肩口に土師甕片が出土している。

### G II－19号住居跡

中央で東西5.0m×南北4.7m、壁高5～10cm程の比較的形状の整った住居。

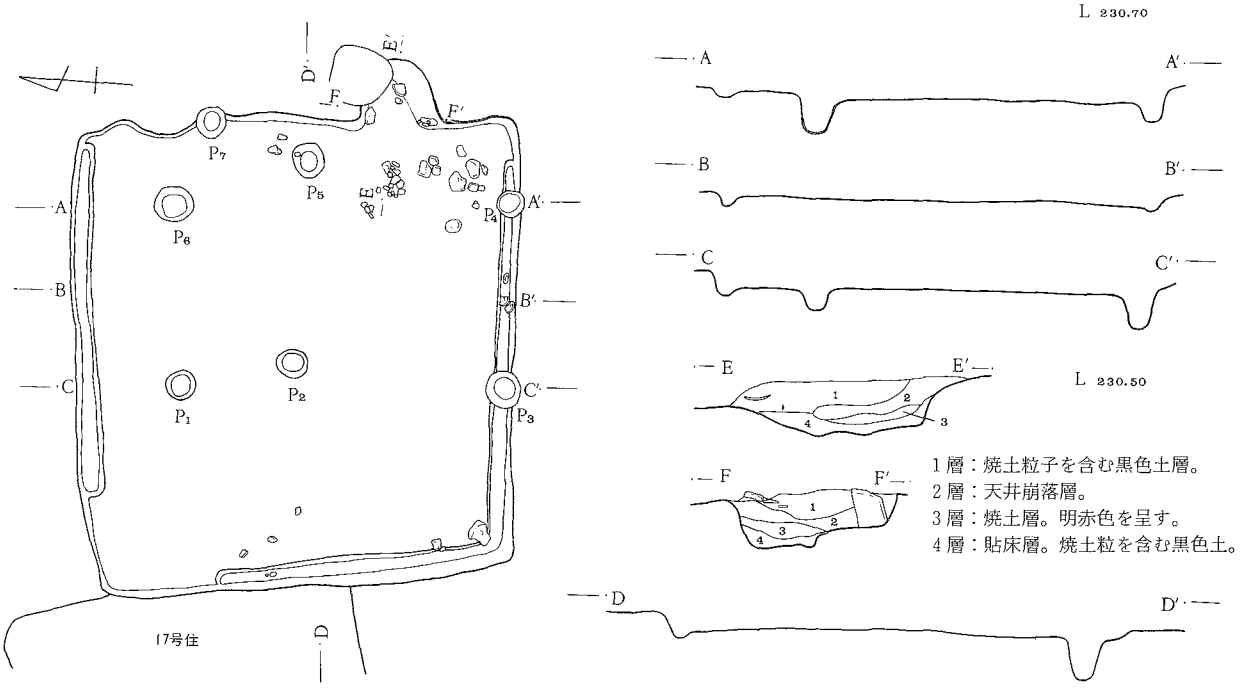
カマドは東壁南寄りに造られる。幅85cm、長さ60cmの楕円形掘り込みは右側壁がなだらかに落ち込み、左側壁は2号掘立のピットが切り込むが手前には5cmの貼床が残る。覆土及び焚口右手の板状石片が石組みカマドを示す。

北西コーナーを除く北、西壁と南壁には周溝が確認された。幅約20cm、深さは5cm内外で幅のわりには浅目である。南壁には周溝上にピットが2基存在し、双方共に住居プラン外へ少々はみ出している。$P_3$は径40cm、深さは床面から35cm、$P_4$は径30cm、深さ20cmであった。ピットはこれらを含めて計7基あり、他の5基も径30～40cmと比較的揃っている。深さは$P_1$18cm、$P_2$39cm、$P_5$40cm、$P_6$38cm、$P_7$55cmで$P_2$、$P_5$、$P_6$がほぼ同じ値を示す。これらは柱穴と思われる。

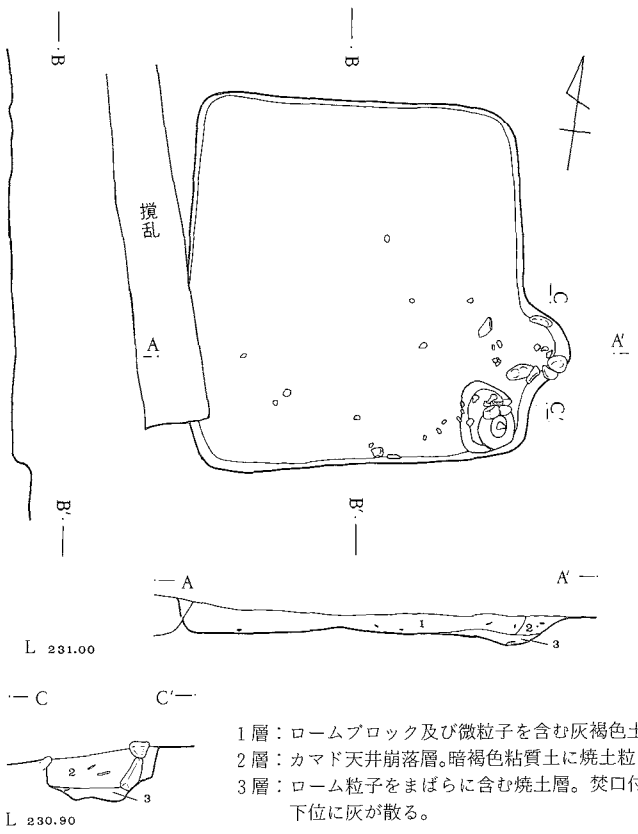
床面は住居中央付近は地山のロームが露出するが、他は貼床であった。黒色土と細かなローム粒によるもので10～20cmの厚さで施されていた。中央やや東側には径1m、深さ15cmの床下土坑があり、断面擂鉢状を呈し覆土は最上位に焼土、他は貼床と同様であった。

遺物はカマド内及び焚口付近より土師甕及び坏片、その

右手も同様、南壁際覆土より須恵埦、坏等が出土した。




## GII－19号住居跡




### GII－21号住居跡

東西3.6m、南北は西壁で4.0m、東壁で3.6mの台形状を呈す。壁高は北壁で2.3cm、南壁で20cmを測る。西壁南側は攪乱に切られるが床面までは切り込まれていない。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅1m、長さ45cmの壁外掘り込みの上端部及び左右両脇に自然石が残っており、石組みカマドを示す。カマド右手の南東コーナーに遺物が集中し、精査後に貯蔵穴が検出された。径90×70cmのピットは中程に段をもちさらに小ピットが存在する。深さは中央で約40cmを測り、覆土に少々遺物を伴う。他部にピットは存在しなかった。

遺物はカマド内に須恵坏片、土師甕片、貯蔵穴上面にも須恵坏片、土師甕片等が出土した。

### G II—20号住居跡

東西7.6m、南北はカマドを境に北壁ラインがくい違い、西側で6.8m、東側で7.2mを測る。各コーナーは整った角をもち、四辺も直線的な大型の住居である。確認面になだらかな凹凸があるために壁高は南東部で60cm、西壁北半では5cmにも満たない。

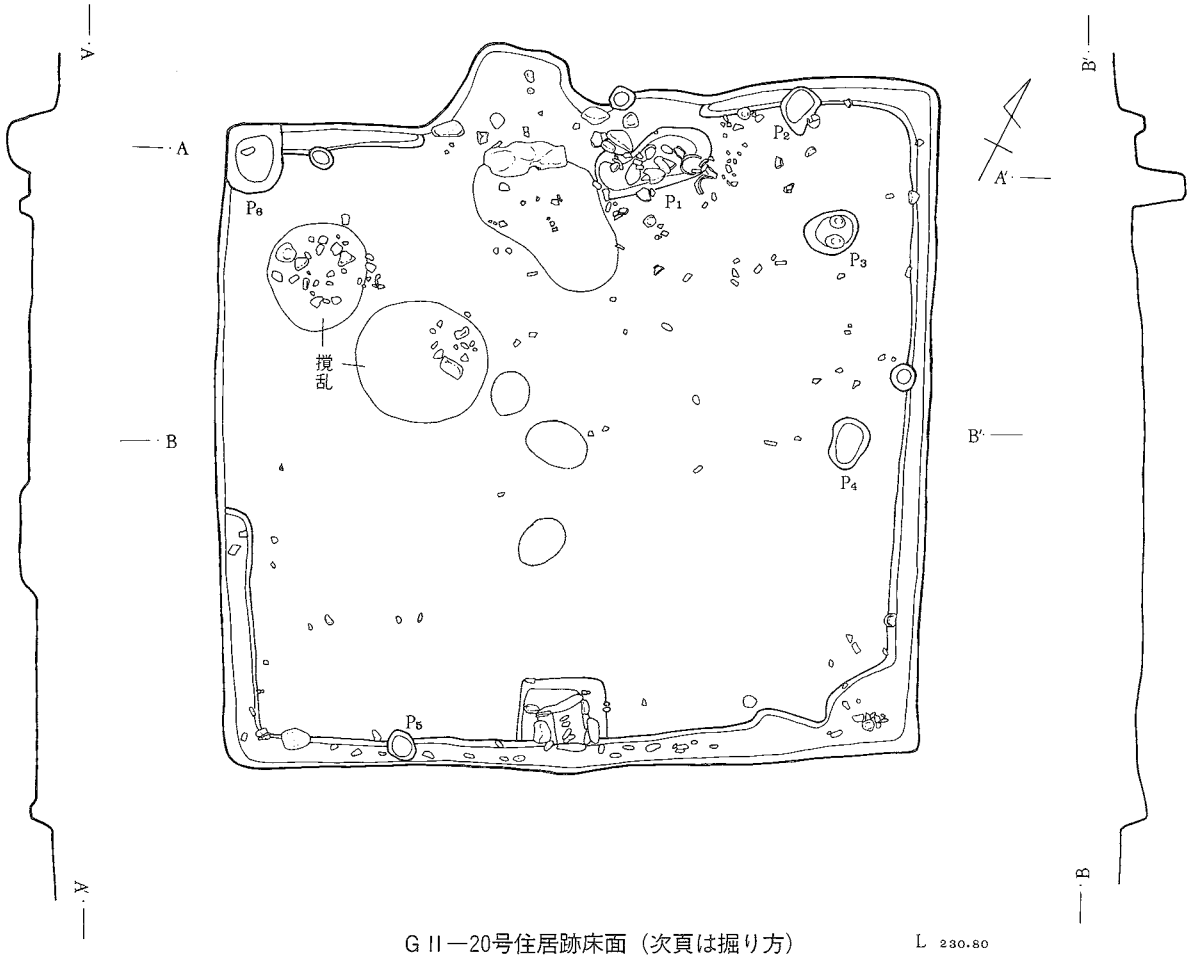
カマドは北壁西寄りに造られる。壁外部は少々16号に削られており、残存部は不整台形を呈す。北壁部での幅1.7m、長さ75cmと幅広で、両脇に扁平な自然石、焚口にはよく焼けた板状石が伴う。

周溝は西壁北半以外に全周する。幅20～25cm、深さは5～10cmを測り、南東コーナーではコーナー付近が全体的に低くなっている。

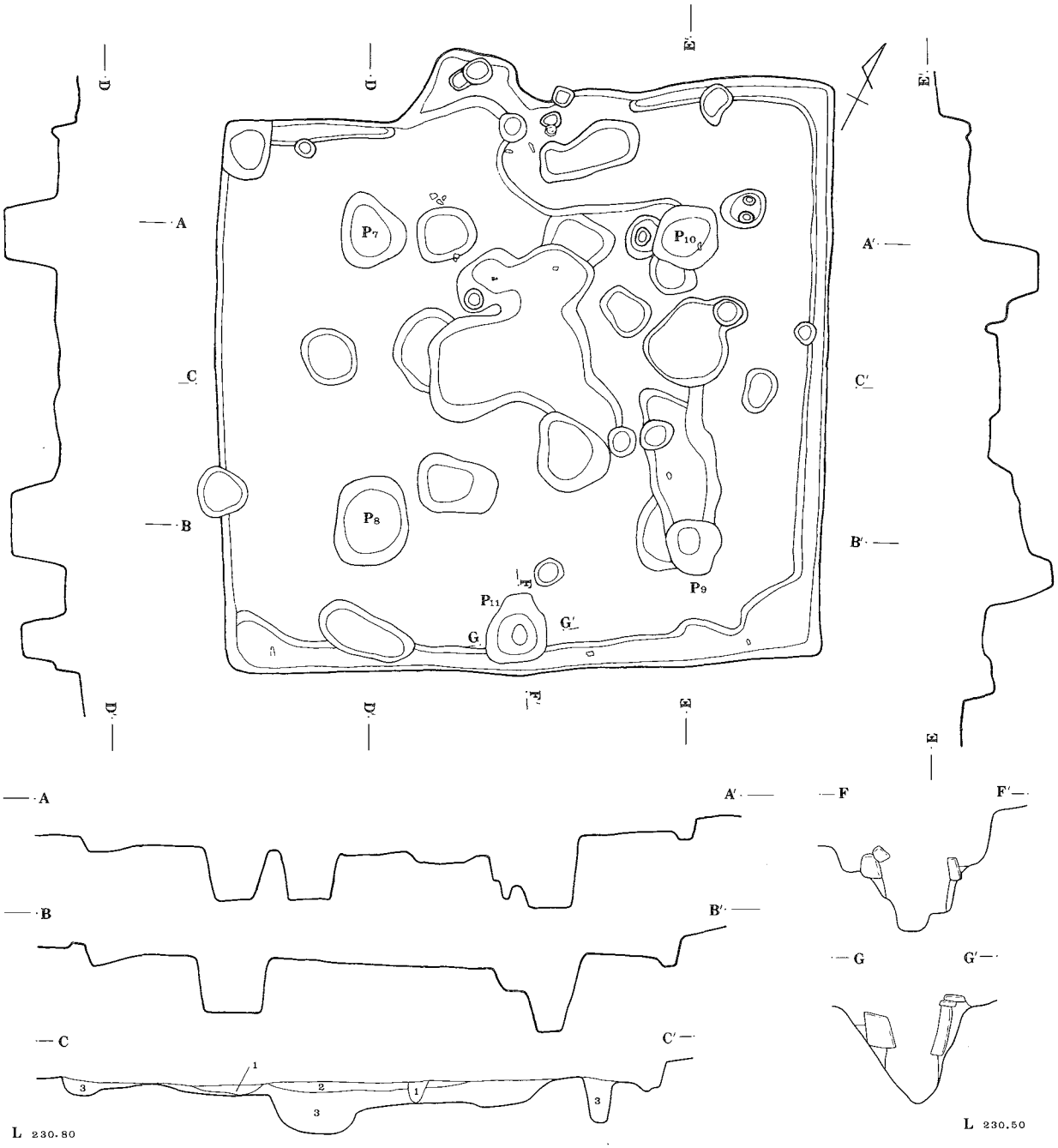
床面は全面的に貼床である。後述する掘り方をローム粒混じりの黒色土で埋め戻しており、深い所では60cm程を測る。この床面レベルにおいてはピットが数箇所確認されたがナンバリングしたもの以外は深さが10cm以内の小規模なものであった。$P_1$はカマド右手の貯蔵穴である。1.1m×50cmの不整楕円形で深さは約20cm、覆土及びその付近には遺物が集中する。$P_3$は60×45cm、深さ23cmの楕円ピット内に小ピットを2個伴う。$P_6$は北西コーナー際に密着するもので径60×75cm、深さ25cmで覆土にはこも石状礫を伴う。

住居南壁中央には方形掘り込みを伴う石囲いの施設が検出された。85×65cmの方形プランを精査したところ、板状石を方形に組んだピットが出現した。北側（住居内側）2枚、他は一枚の板状石で囲み、深さは中央で55cmを測る。石の周りにははっきりと掘り方が残り、精査ではこの壁に覆土と同じ粘質のロームと黒色土で石を貼った状況が確認された。覆土中～下位にこも石状の礫及び土師甕片が出土した。

遺物はカマド～北東コーナー及び主に南の周溝上に集中していた。本住居ではこも石状の礫の数が著しく多く、カマドの焚口の石や石囲部を構成する板状石を除いて確認さ




G II—20号住居跡床面（次頁は掘り方）　L 230.80




1層：攪乱層。
2層：黒色土及びローム粒が主体をなし、焼土粒と灰をまばらに含む。よくしまっている。
3層：貼床層。黒色土とローム粒の混在。

れた石86個のうちの９割以上にあたる。また、土器は貯蔵穴内部及び付近より土師甕、坏、鉢、須恵坏、蓋、壺、鉢等多く、東壁及び南壁の周溝部、南東コーナーの周溝内からも土師坏を中心に土器が出土した。

本住居の床下はピットを多数伴う掘り方である。概観すると$P_7$～$P_{10}$を結んだ内部にピットが多く、レベル的にはこのラインの外側（壁側）が少々高い傾向を示している。$P_7$～$P_{10}$は位置的には柱穴だが床面レベルでは確認されなかったもので断定は出来ない。また、$P_{11}$は石囲部の掘り方である。

### G II—23号住居跡

中央で東西6.0m、南北5.3m、壁高は10～20cmを測る大型住居。

カマドは北壁中央と東壁南寄りの2箇所に検出された。北カマドは幅1.2m、長さは中央で40cmを測る台形状の掘り込みである。北壁ライン上の位置に方形の小ピットが3個並び、中央のものは両脇に比べ小さい。深さは両脇約10cm、中央約5cmである。両脇は袖石、中央は支脚石それぞれの抜き痕と思われる。火床は地山のローム面で焼土が上面にはっきりと検出された。

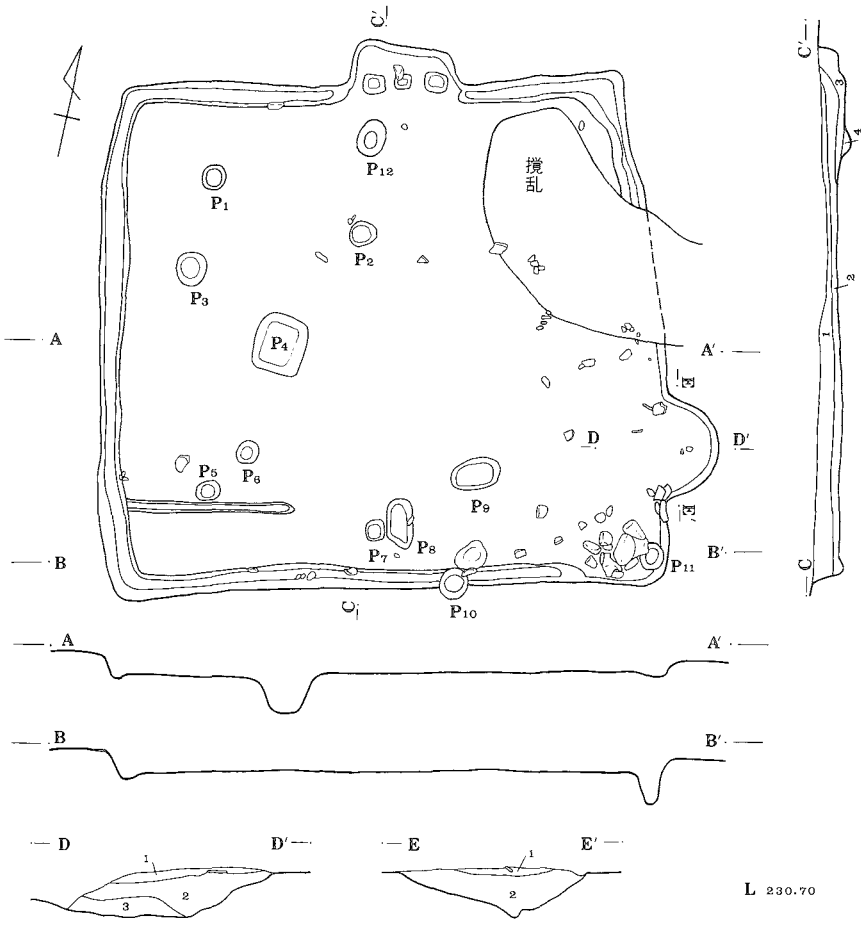
一方、東カマドは幅1.1m、長さ55cmの半円形で両脇と右手に板状石片が伴っている。火床は地山のローム面で焼土が直上に検出された。石除去後の精査では左右両脇に石抜き痕と思われる浅い凹みが検出された。

カマド部以外ではピットが10基確認されたが$P_3$、$P_4$、$P_6$の3基は掘り方精査で消滅した。深さは$P_3$53cm、$P_9$15cm以外は30cm内外で大きなバラつきは無かった。

壁際には全体に周溝が巡る。幅15～20cm、深さは5～10cm程である。南西部には西壁から東へ1.8mの長さで間仕切り状の細い溝が延び、これは掘り方精査でさらに東へ続くことが分かった。

遺物はカマド内及びその付近より土師甕片多数、須恵坏、南東コーナー際に焼けた自然石数点、覆土からも土師甕片の他に坏、甑片、南壁際床面には皿状の扁平な自然石、こも石状礫、須恵蓋等が出土した。

掘り方においては住居西側に広く浅い不整形ピット、カマド手前にもひょうたん形の浅い凹みが現れた。全体的に中央付近が壁際よりも10～20cm低い傾向を示し、これは20号住居の場合とよく似ており興味深い。遺物はカマド手前のひょうたん形凹み内に土師甕片、中央付近地山面に須恵蓋、土師坏等が出土した。

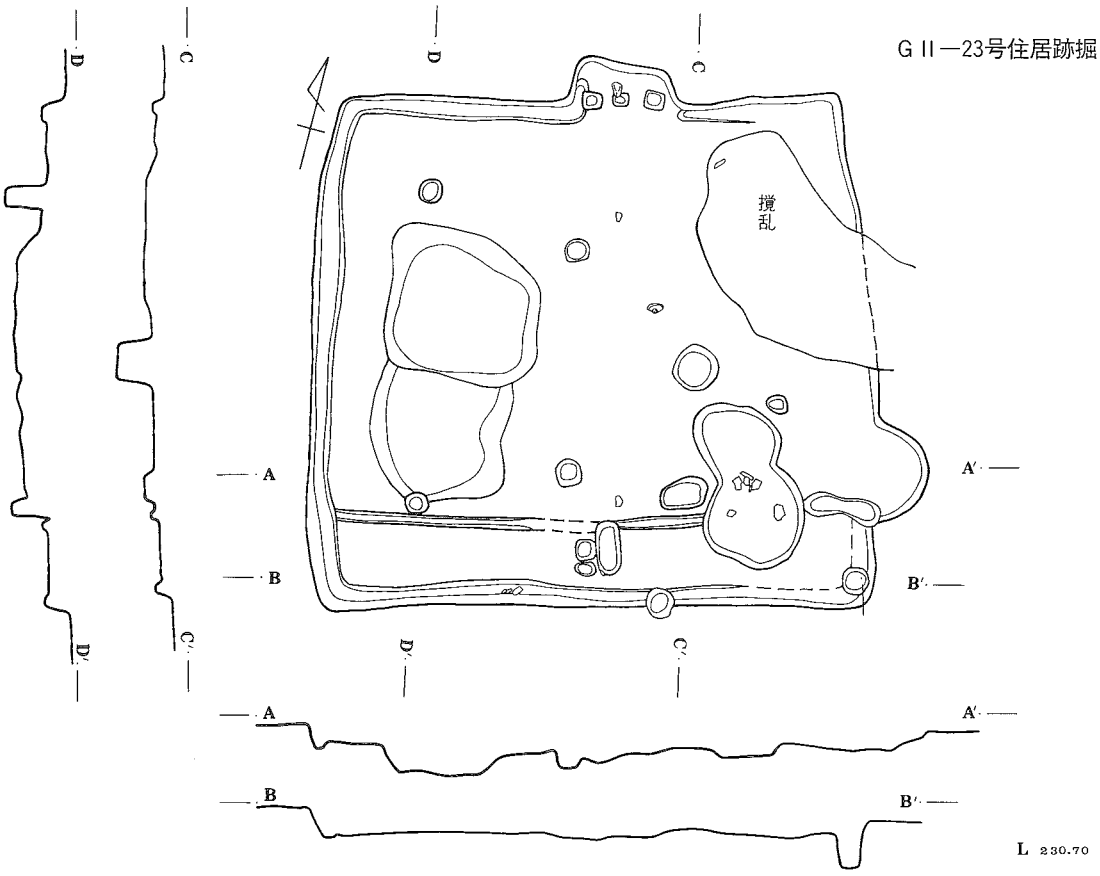



1層：ローム微粒子をまばらに含む暗褐色砂層。
2層：径1～2cmのロームブロックをまばらに含む暗褐色砂層。
3層：焼土を多量に含む暗褐色砂層。
4層：北カマド土坑覆土。黒色土とロームブロックの混在。

G II—23号住居跡床面

1層：焼土粒を含む黒色土層。
2層：天井崩落層。暗褐色・灰色の粘質土に焼土が混在。
3層：焼土層。

GII—23号住居跡掘り方

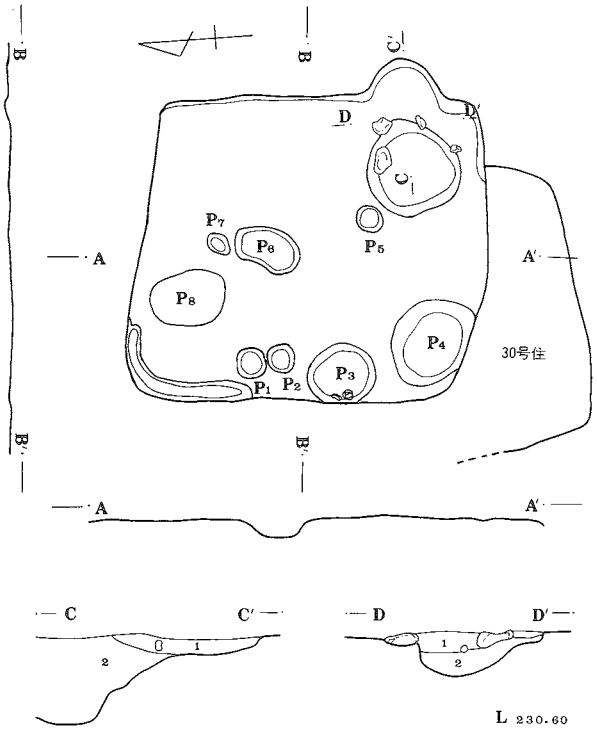



GII—26号住居跡

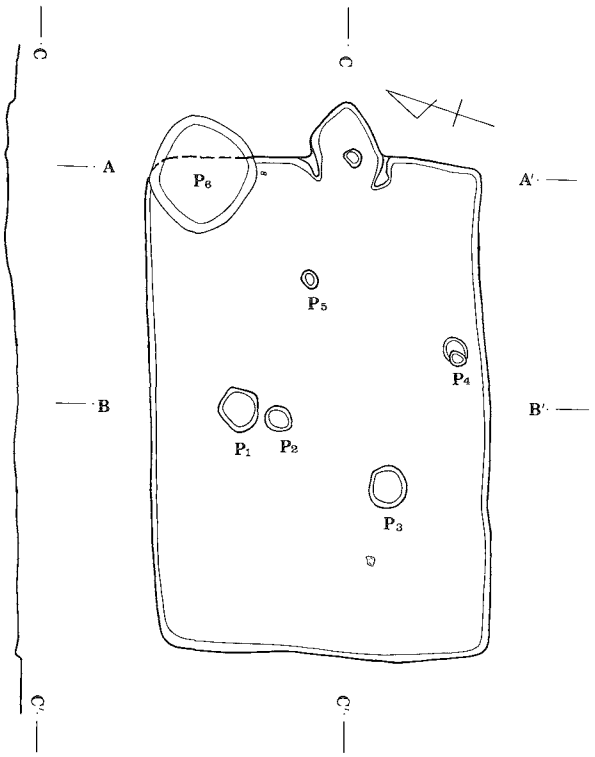
東西3.2m、南北は壁がほとんど残存しないがコーナーの巡る位置から3.7m内外と思われる。

カマドは東壁南寄りに造られる。幅80cm、長さ40cmの浅い掘り込みが残り、焚口付近には焼けて脆化した板状石片が出土する。手前には径1m、深さ45cmの円形ピットがあり、カマド火床面はこの上部に確認された。ピットが本住居に伴うかどうかは不明。住居内には他に8基のピットが検出された。このうち$P_8$は1号掘立の柱穴の一部である。$P_3$は深さ16cmで覆土上位に遺物を伴う。遺物を伴うものは他に無く、覆土は全てロームブロック混じりの黒色土であった。また、北西コーナー部には周溝が一部確認された。

遺物は他に床面より土師質埦片が出土した。




1層：天井崩落層。粘質土及び焼土の混在。
2層：土坑覆土。全体にローム粒を含む黒色土層。



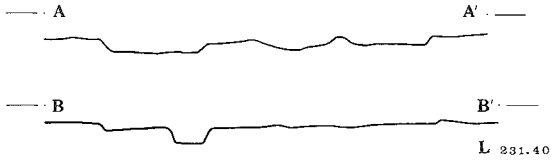

### G II—24号住居跡

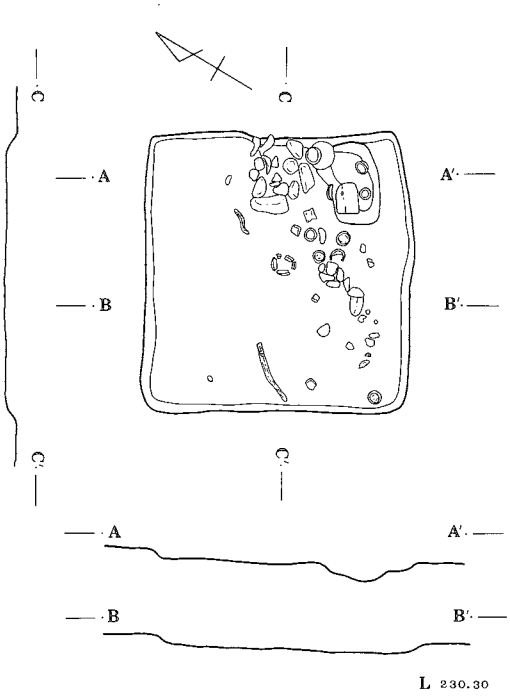
G II区北部に位置する。東西5.2m、南北3.6m、壁高は5～10cm弱を残すのみである。

カマドは東壁中央に造られる。幅70cm、長さ55cmの三角形を呈し壁内両側には地山のロームを掘り残した袖芯が存在していた。石材は全く検出されず、中央やや右に深さ4cm程のピットが認められた。

ピットは他に6基検出され、このうち$P_5$が46cmと深く、他は10～20cmの範囲内である。$P_6$は東壁に張り出すが、これは本住居を切り込むもので伴うピットではない。

遺物は床面より灰釉埦片、土師質埦片、鉄製刀子片等が出土している。



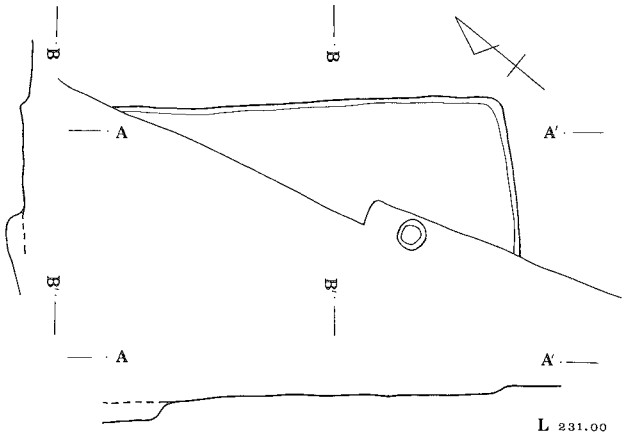

### G II—28号住居跡

東西2.9m×南北2.8m、壁高10cm弱の正方形住居。

カマドは東壁中央に造られる。壁外への掘り込みは全く無く、壁内右に3個、左に4個の自然石を置く石組みカマドである。手前に横たわる自然石は鳥居状焚口の崩落したものか。

本住居にはカマド部を中心に遺物が多い。床面をやや掘り過ぎたため、遺物は全体に浮いている。カマド右手に球胴甕、内部にも球胴甕片が多く、他に土師坏、甕片が出土した。また、カマド手前と西壁際には棒状の炭化物があり、覆土にも炭化物が全体的に検出されている。明確な焼土はカマド部のみであるが、焼失家屋の可能性が考えられる。

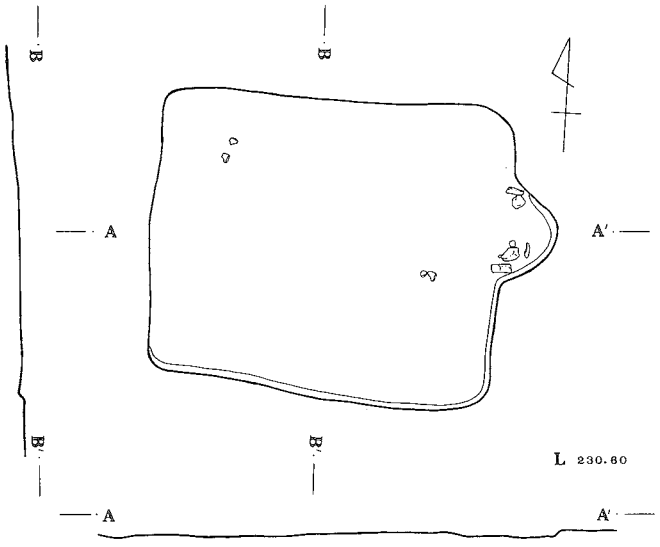
遺物除去後、カマド右手に貯蔵穴が出現した。径90cm×50cmの不整楕円形を呈し、深さは中央で13cm。内部に土師甕片、坏、上位に割れた自然石を伴っていた。本住居に伴うピットはこれのみである。




### GII—25号住居跡

GII区西端部に住居の一部のみ検出された。東壁及び南壁の残存部は直線的であり整った（長）方形プランを推定出来る。壁高は7～8cmで床面はロームブロック混じりの黒色土を10cm程埋め戻した貼床であった。攪乱部をさらに掘り下げたところ、ピットが1基出現した。径30cmで深さは床面より56cmを測り、柱穴の一つと思われる。

遺物は床面より土師甕片とこも石状の礫、貼床内には全く伴っていなかった。

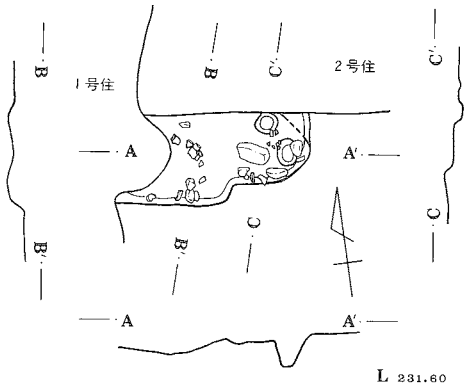



### GII—27号住居跡

残存状態は非常に悪く、南壁と東壁が僅かに確認される他は覆土よりプランを推定した。東西3.7m、南北3.2m内外と思われる。

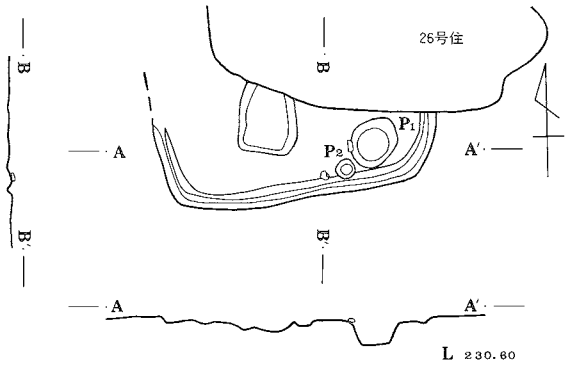
カマドは東壁北寄りで左右両壁に板状石を据える。幅は約1m、長さ45cmの半円状の浅い掘り込みが確認された。このカマドの直下より後に2号掘立に伴うと思われるピットが検出されたが、カマドは本住居確認面よりやや上まである程度残存しており、掘立に掘り込まれた状況ではない。

遺物はカマド手前床面に土師坏片、須恵小型瓶片等が出土した。




### GII—29号住居跡

2号住居精査時に確認されたもので双方の新旧関係は判然としないが西側は確実に1号住居に切り込まれている。残存部は東壁南寄りのカマド部付近である。ほとんど南端部で約80cm長さをもつ。壁内先端部と右側壁の自然石は原位置を保つ石組み材で内側が焼けて赤色化し少々剝離している。内部には土師甕片、須恵甕片、埦片が伴う。また、カマド手前から右側には自然石の他に土師甕片、須恵坏片、（墨書）、灰釉埦片が床面レベルから出土している。



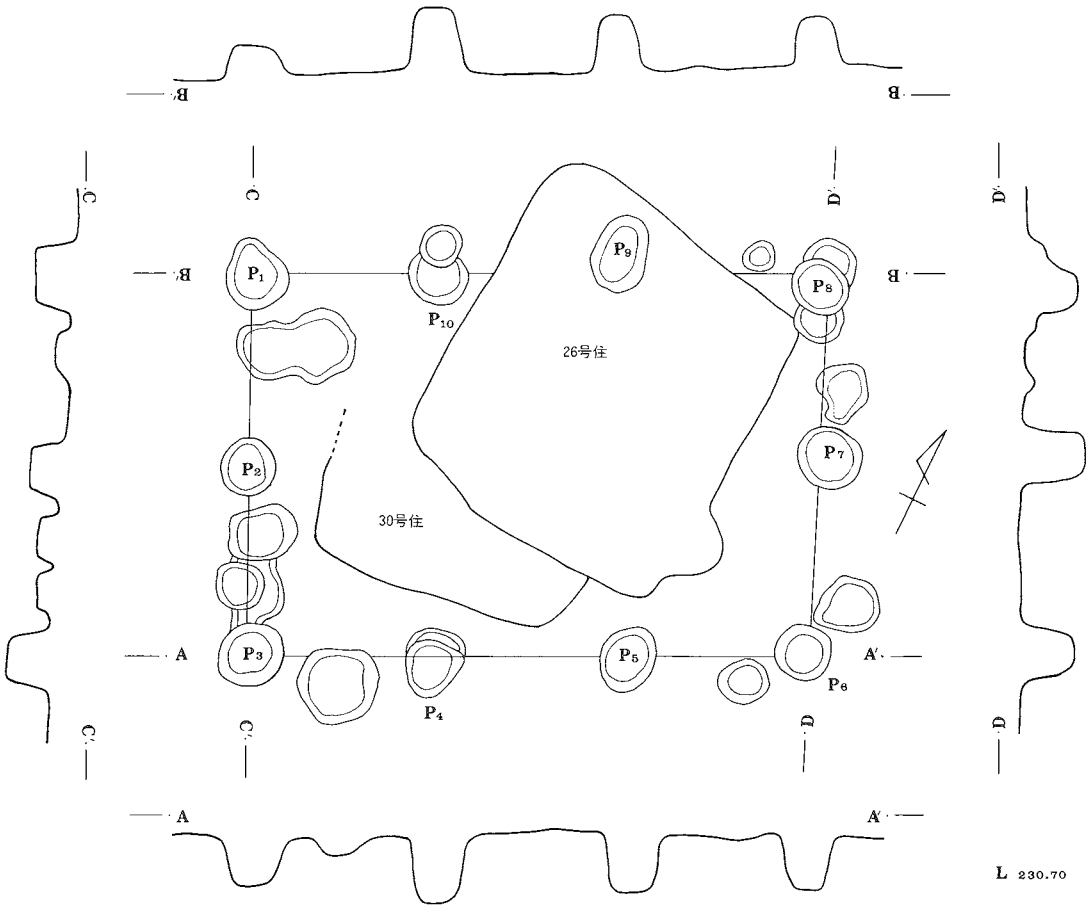

### G II－30号住居跡

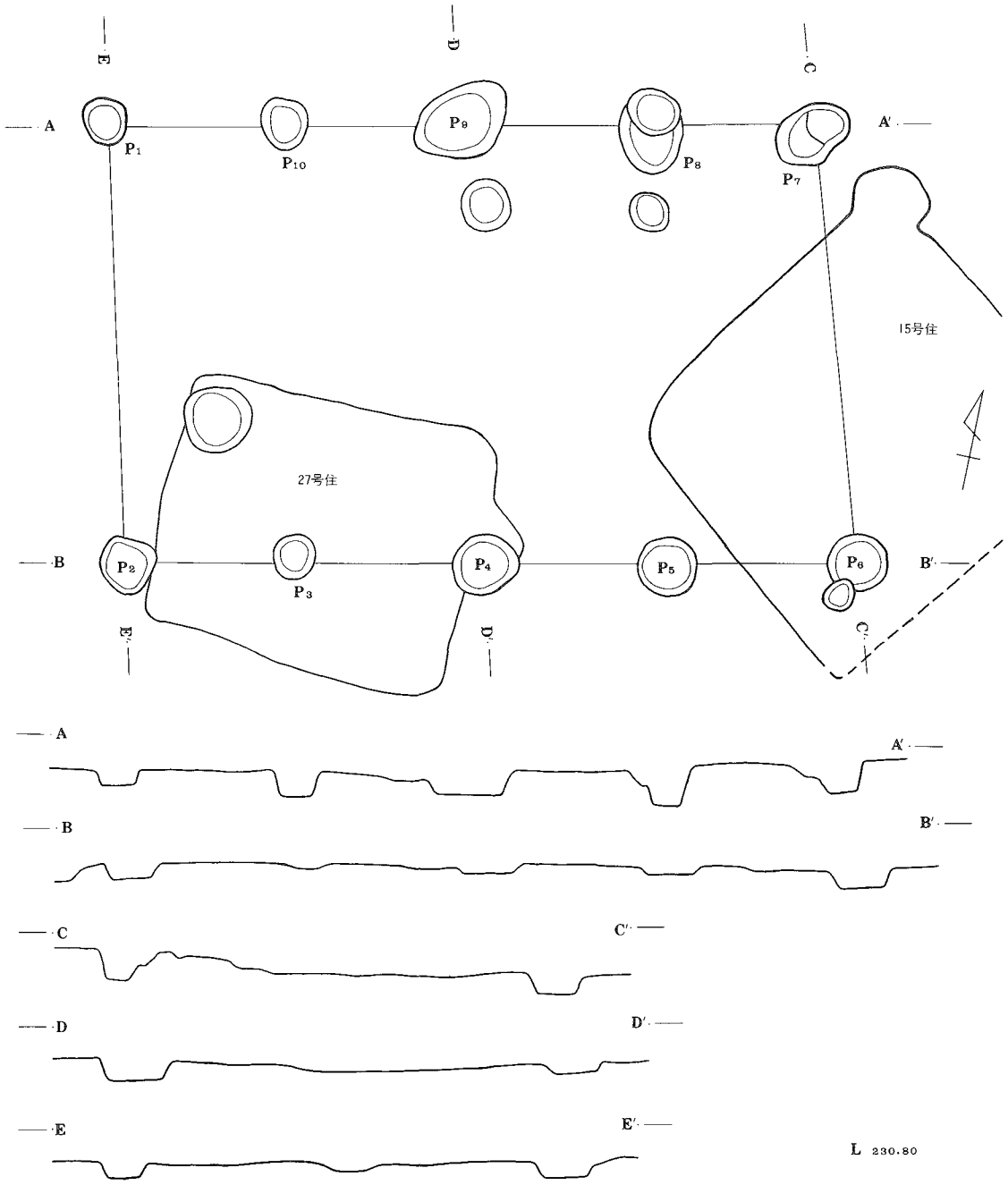
26号住居の南側に確認された。当初、26号住居のプランと思われたが、北側に26号の南壁プランが現れ、また方向も合わないことから30号住居と命名した。浅い周溝は東西で3.0mを測り、南東部にピットが2基確認された。規模は$P_1$が径45×55cm、深さ22cm、$P_2$は径18cm、深さ16cmであった。中央の長方形の凹みは26号の$P_4$とつながっており、ピットと言える程のものではない。

遺物は南壁周溝上に土師質埦小片が出土している。

### G II－1号掘立柱建物跡

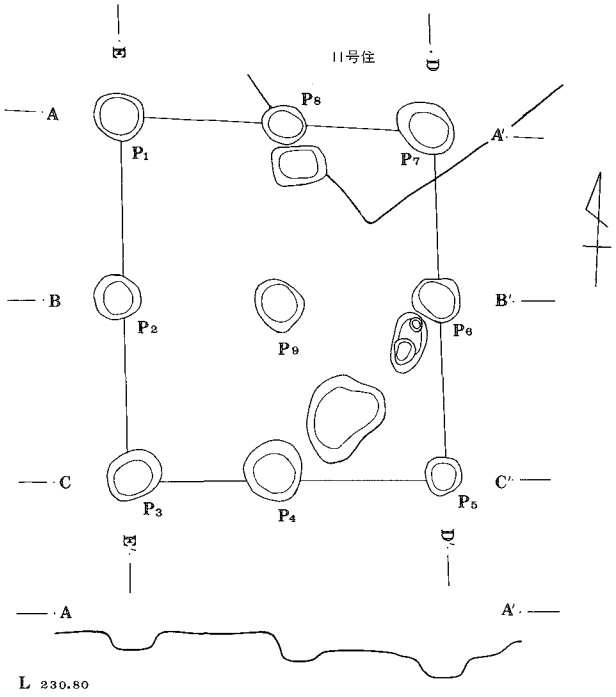
G II区南端の26号、30号上に検出された。主軸を東西にもつ、桁行3間、梁行2間の掘立柱建物。柱間は約2.0mで統一している。柱穴は径60～70cm前後、深さ35～70cmとバラつきがあり、$P_3$、$P_5$～$P_7$の他は平面形がややひょうたん状をなす。全体にバランスのとれた形状である。遺物は$P_2$覆土よりこも石状礫1個、$P_7$より土師甕片と坏片が出土した。






GII－2号掘立柱建物跡

東西に長軸をもつ大型掘立柱建物。桁行4間8.6m、梁行1間5.2mである。桁行の柱間は2m内外で揃っている。柱穴の規模はバラつきが多く径55～1.2m、深さは最も浅い$P_3$の5cm～最深$P_8$の45cmだが、これは地盤が南西向きの緩斜面ゆえ、$P_2$～$P_6$が浅いという傾向を示すとも言える。また、形状は$P_7$と$P_8$がひょうたん型で外側が深く掘り込まれ、$P_9$、$P_2$も不整形である。$P_1$、$P_4$、$P_7$、$P_8$、$P_9$、$P_{10}$覆土より土師甕片、坏片が10数点出土し、また$P_4$にはこも石状の礫も伴っていた。この$P_4$は27号住居のカマド部と重複しているが、$P_4$の上位にカマド火床面が残っていることから本掘立は27号住居に先行するものと判断出来る。

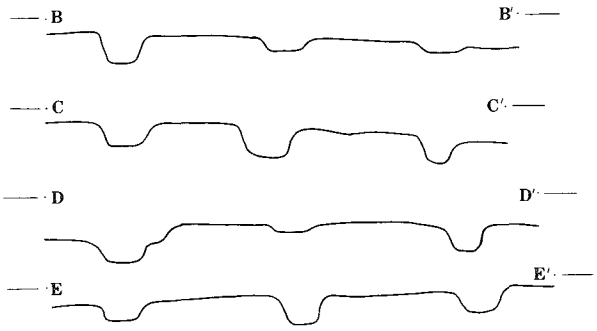


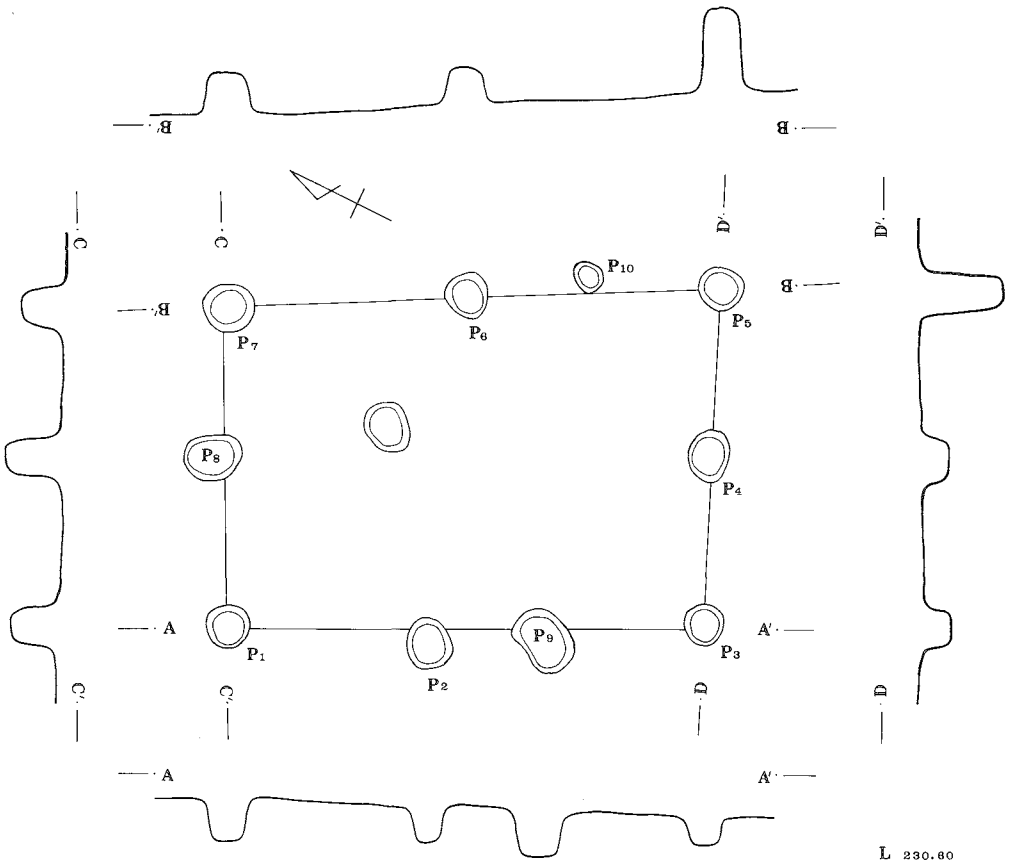

GII－3号掘立柱建物跡

2間×2間の総柱建物である。柱間は東西軸約1.5m、南北軸約1.8mで僅かに南北が長い。4号掘立の東隣で軸も同一であることから関係のあるものかもしれない。

柱穴は径50～60cm内外で揃っており、$P_5$は40cmと小さめ、深さは20～30cmで$P_6$のみ10cmに満たない。

遺物は$P_1$、$P_4$、$P_8$、$P_9$より土師甕片及び須恵甕片、$P_3$覆土より扁平な自然石が出土した。




GII－5号掘立柱建物跡

### G II－5号掘立柱建物跡

基本的に桁行、梁行共に2間の建物跡と思われる。$P_9$と$P_{10}$は他柱穴との規模の違いや位置に難があり、本建物のものとは断言出来ない。長軸は南北にとっており、柱間は桁東側で2.6m、西側は$P_2$が北に30cm程ずれている。梁側は1.5～1.7mとほぼ均等。柱穴規模は径40～50cm内外で深さは$P_3$の30cmから$P_5$の90cmまでバラつく。$P_9$は径68cm×50cmで深さ52cm、$P_{10}$は径32cmで深さ29cmであった。

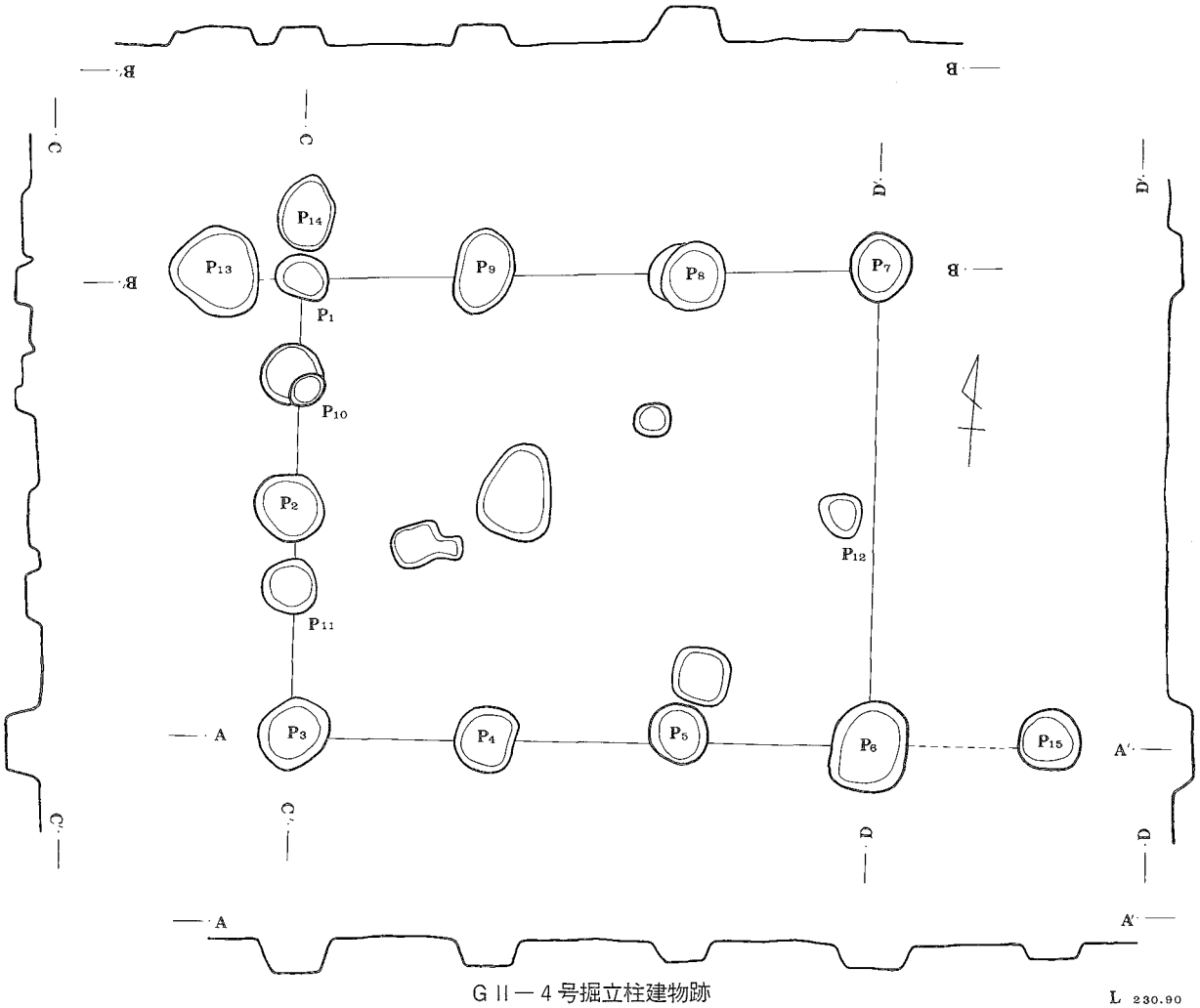
遺物は$P_2$、$P_6$、$P_7$、$P_8$、$P_9$覆土より土師甕、坏いずれも小片が数点出土した。

### G II－4号掘立柱建物跡

桁行3間で梁行は2間と思われるがはっきりしない。$P_1$～$P_9$は確実であろうが$P_{10}$～$P_{15}$は柱列上に並ぶことと規模が似ているので一応ナンバリングした。但し$P_{12}$は$P_2$に対応する可能性を考えて図示した。柱間は東西約2m、南北は約2.5mで$P_{10}$と$P_{11}$が$P_1$～$P_2$～$P_3$各間に存在する。

規模は$P_1$～$P_9$では径50cm～1m、深さは16cm～38cmとバラつきがある。

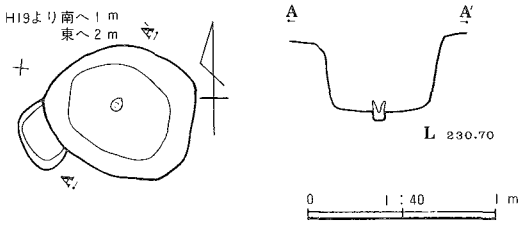
遺物は$P_2$、$P_3$、$P_9$、$P_{13}$より土師甕片、$P_3$からはこも石状の礫も1個出土した。




G II－4号掘立柱建物跡

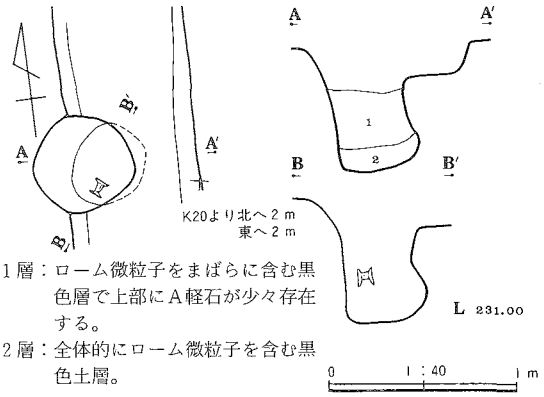
### G II－1号土坑

径60×70cm、深さ40cmを測る。壁の立ち上がりは急で底面は広く平坦である。底面中央に須恵高坏の裾部のない脚片が倒置状態で出土。地山にめり込んでおり、明らかに人為的に「据えた」と見ることができる。覆土遺物は土師甕片、須恵甕片、坏片等である。




### G II－2号土坑

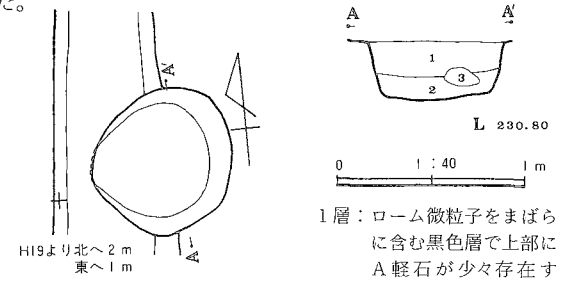
径50cm、深さ65cmを測る。壁は東側が袋状になっており底面は平坦である。覆土中位より体部から口縁がそっくり欠損した土師高坏が出土し、他に遺物は全く無い。




1層：ローム微粒子をまばらに含む黒色層で上部にA軽石が少々存在する。
2層：全体的にローム微粒子を含む黒色土層。

### G II－3号土坑

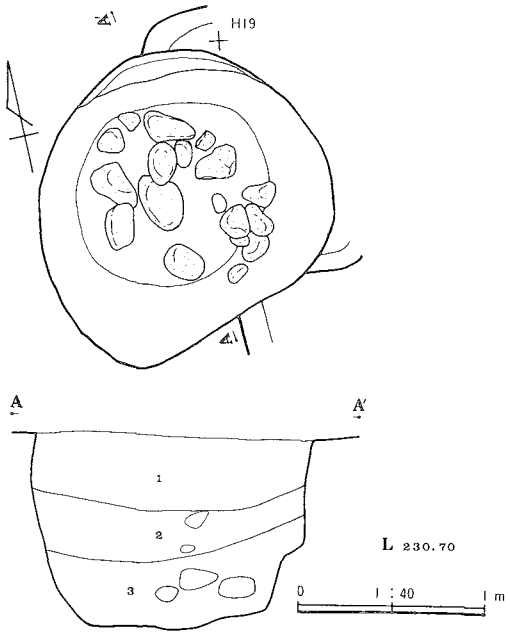
径80×72cmの楕円形で深さ30cmを測る浅いピット。底面は広く平坦で断面は鍋状を呈す。遺物は全く出土しなかった。




1層：ローム微粒子をまばらに含む黒色層で上部にA軽石が少々存在する。
2層：全体的にローム微粒子を含む黒色土層。

### G II－4号土坑

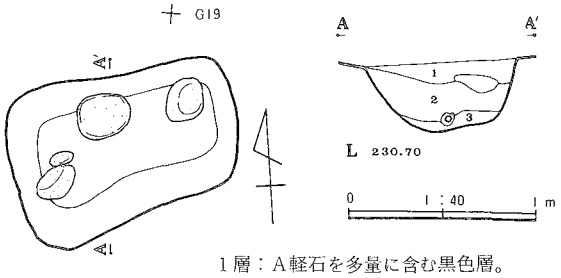
径1.4m×1.6m、深さ95cmの楕円形ピット。東側は浅い掘り込みが重複し、上部を少々切られている。覆土中位から下位にかけて径10～20cm内外の自然礫が放り込まれるように多数出土。上位の1層中に弥生期と思われる大型石鏃が出土するが覆土から考えて紛れ込みである。また、同層には弥生甕片、須恵甕片、埦片等も混在する。




1層：全体にA軽石を含む黒色土層でしまりよい。
2層：径1～5cm程のロームブロックを少々含む黒色土層。
3層：全体にローム微粒子を含む黒色土層で、少々粘性をもつ。

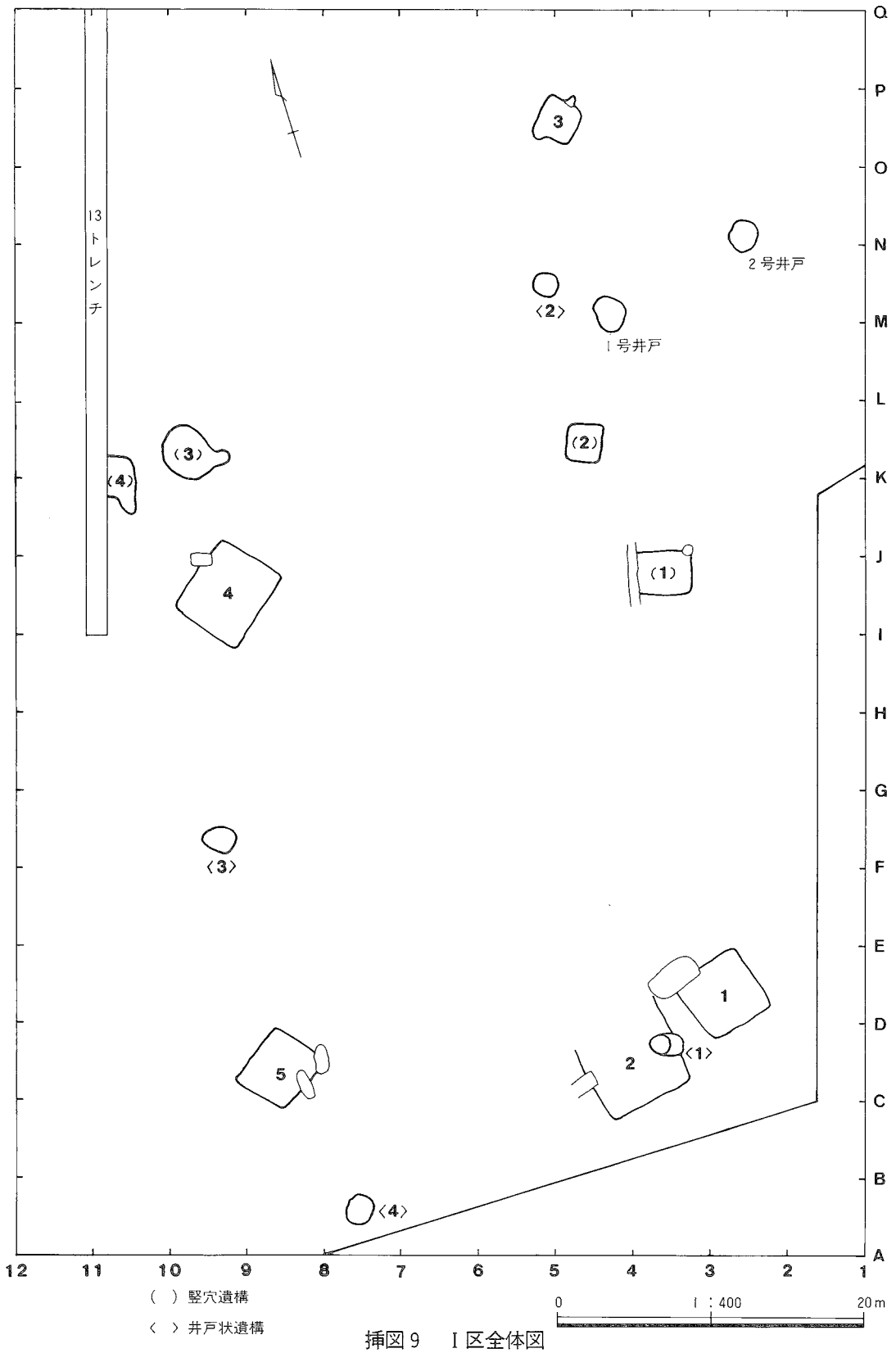
### G II－5号土坑

径77cm×1.24m、深さ37cmで南北壁中央が少々くびれる形状を呈す。底面は平坦である。覆土上～中位より径10～30cm内外の自然礫が数個、下位より土師質大型埦片が出土する。

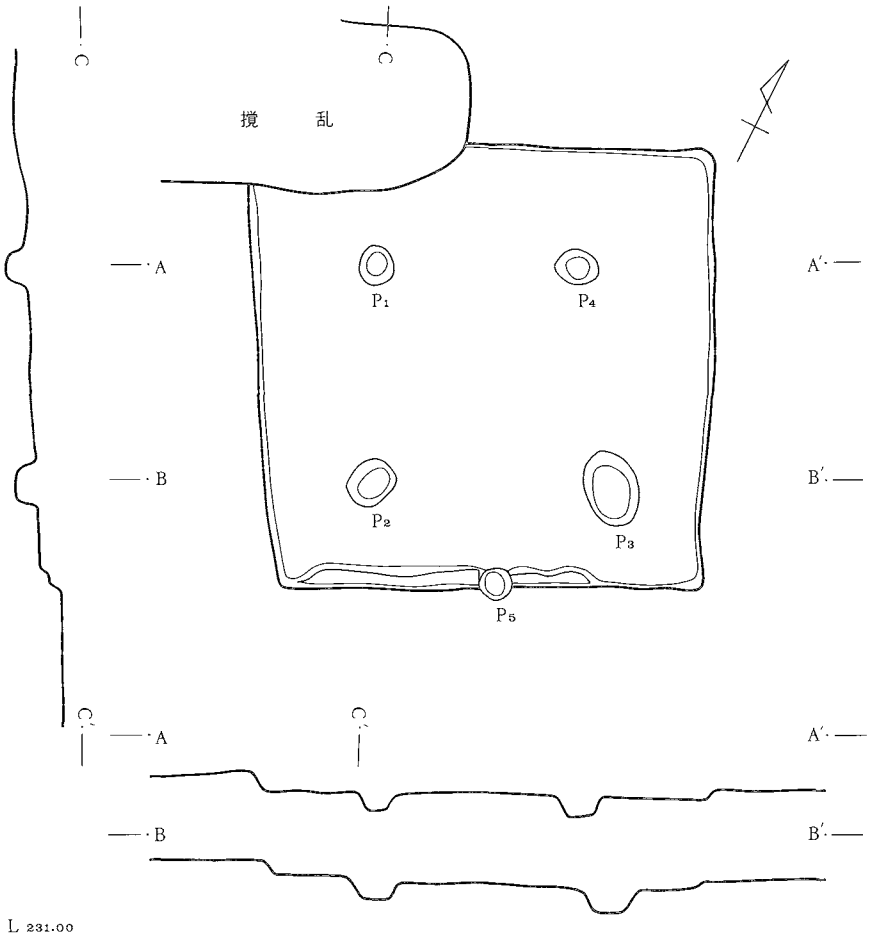



1層：A軽石を多量に含む黒色層。
2層：ロームブロック及び微粒子を少量含む黒色層で少々湿気をおびる。
3層：YPを多量に含むローム主体層で黒色土はまばらに混在する。

# Ⅰ　　区


Q
P
O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
12
11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
13トレンチ
3
2号井戸
〈2〉
1号井戸
(3)
(4)
(2)
(1)
4
〈3〉
1
2
〈1〉
5
〈4〉
( ) 竪穴遺構
〈 〉井戸状遺構
0
1：400
20m

挿図9　Ⅰ区全体図



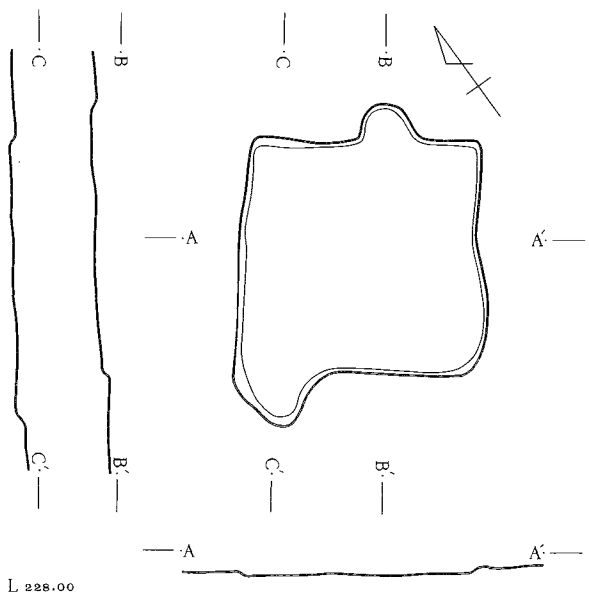

### Ⅰ－1号住居跡

中央で東西4.9m、南北4.7m、壁高10～20cmを測る。各コーナーは角ばり、壁は直線的に掘られる正方形の住居である。北西コーナー部は攪乱を受け、不明。

カマドの痕跡は全く検出されなかった。攪乱部においても掘り込みの深さは床面と同じ位だがそれらしい痕跡は無い。

ピットは$P_1$～$P_5$の5基検出された。$P_1$～$P_4$が主柱穴と思われ、規模は$P_1$・$P_2$・$P_4$が径30～50cm、$P_3$は55×80cmで大きめである。深さは20cm内外で揃っている。$P_5$は南壁上中央で径35cm、深さ30cmを測る。この南壁部は中位に幅10～15cm程のテラス状の段が存在していた。

遺物は鬼高期の土師坏、土師甕いずれも小片が数片出土した。



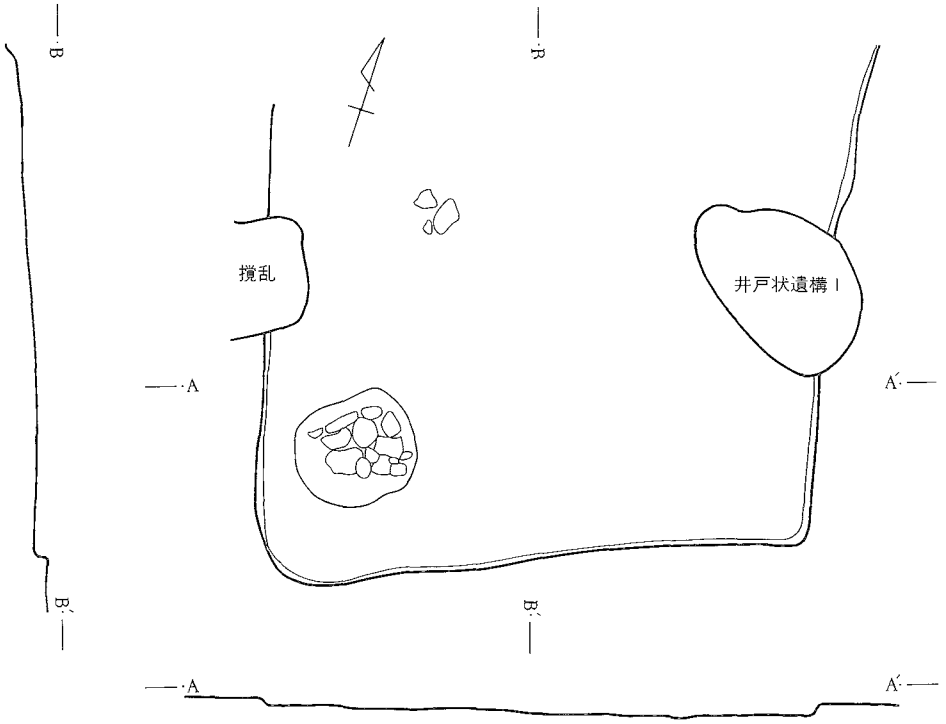

### Ⅰ－3号住居跡

壁中央に掘り込むカマド側を北壁と呼称すると東西、南北共に約2.5mの小型正方形で、南壁西端部に約50cmの不整形掘り込みがある。壁高は5～10cm弱と浅い。

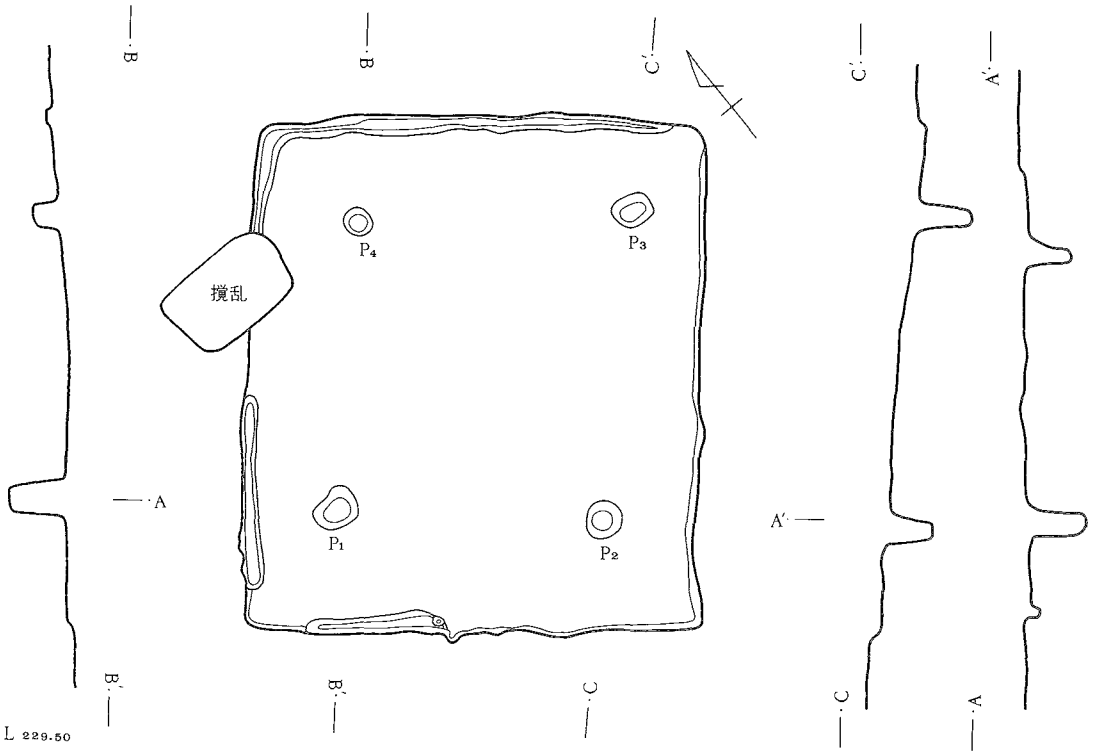
カマドは幅60cm、長さ35cmの半円状掘り込みが残っており、袖部や石材等は全く存在しなかった。火床は中央付近がよく焼けていた。

ピット類は全く検出されなかった。また、南西部の張り出しは他にはほとんど類例のないものであるが、性格は把握出来ない。

遺物は土師球胴甕と思われるものが数片出土した。




Ⅰ－2号住居跡




Ⅰ－4号住居跡

### Ⅰ－2号住居跡

南壁際で東西5.8m、南北は北壁が残存せず不明だが、6m強程と思われる。東壁は中央に井戸状遺構1が切り込み、北側には攪乱が、西壁にもやはり攪乱が切り込む。壁高は南壁で約15cmを測る。

カマドは不明であるが、残存しない住居北壁及び東壁中央にその可能性が考えられよう。焼土等の検出はプラン内には全く無かった。また、南西部には大型の自然礫を伴うピットがあり、径1.1m×1.3m、断面ボウル状を呈している。これが本住居に伴うものかは不明であり、覆土からは判断出来なかった。

遺物は住居覆土より厚手の土師甕小片が数点出土した。

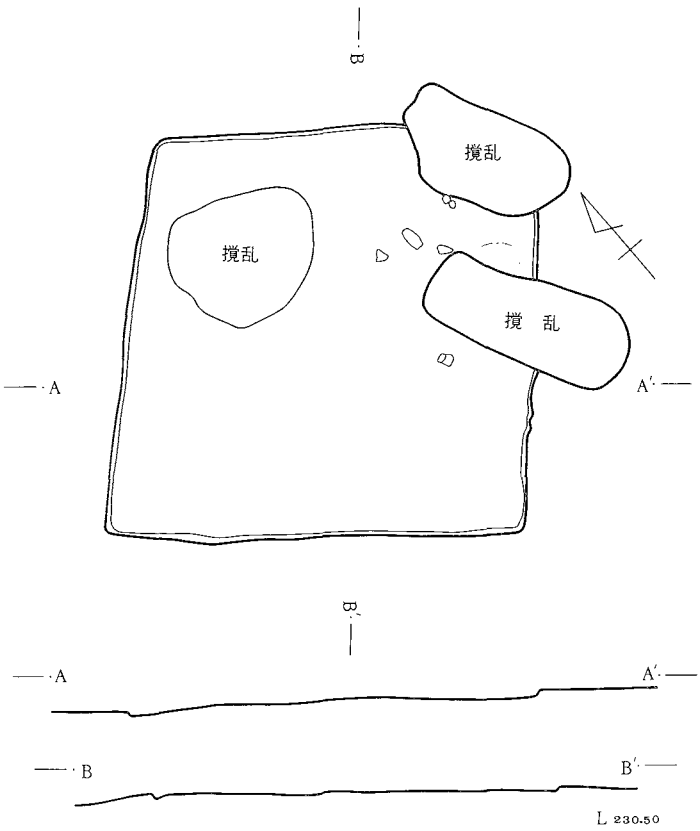
### Ⅰ－4号住居跡

攪乱の入る壁を北壁とすると南北は4.9m、東西5.4m、壁高は5～10cm程度で整った方形の住居である。

カマドは北壁中央付近と思われる。攪乱部分左側は壁の掘り込みが確認出来ず不明瞭な状態であるが、僅かに焼土が混じり、遺物を伴っていることから、プランは不明乍らカマド位置と考えてよいであろう。

本住居は主柱穴$P_1$～$P_4$を伴う。径は30～40cm程で$P_4$のみふたまわり程小さい。深さは$P_1$60cm、$P_2$48cm、$P_3$58cm、$P_4$27cmである。位置は各コーナーより1.5m程内側で$P_3$はややコーナー寄りにあり、全て対角線上である。また、東壁と北～西壁の一部に周溝が確認された。

遺物はカマド推定部他より土師甕片が数片出土した。




### Ⅰ－5号住居跡

住居西側のコーナー部は大きく外へ張り、全体に少々平行四辺形状である。各壁は直線的でコーナーもきちんと角ばっている。中央で東西4.4m、南北4.3m、壁高5cm弱で残存状態は悪く、東壁中央、北東コーナー、住居内北西部には攪乱の切り込みが入っている。

カマドの位置は明確ではない。しかし、東壁の攪乱部北側には焼土があり、付近に焼けた石片が散在することから、東壁中央部のカマドが攪乱に切り込まれたと考えられる。他にはカマドらしき痕跡は全く存在しない。

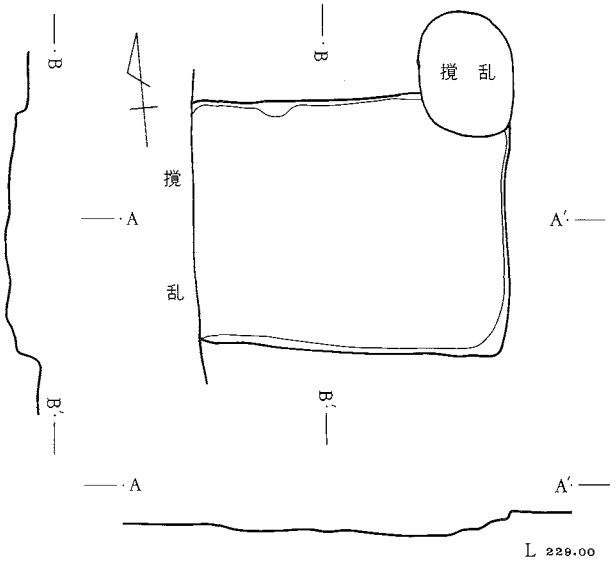
本住居に伴うと思われるピットは検出されなかった。遺物は土師甕片が石片付近より数点出土している。

I－竪穴遺構1

南北2.7m、東西は西壁が攪乱に切られ残存部で3.4mを測る長方形を呈す。底面は不整な浅い擂鉢状で、住居床面とは考えにくい。中央やや南側最深部で確認面より35cmを測る。

プラン内には焼土や焼け石等「火」の痕跡を示すものは全く存在しない。

遺物は覆土より土師甕片、坏片、須恵坏片がいずれも小片で数点出土した。

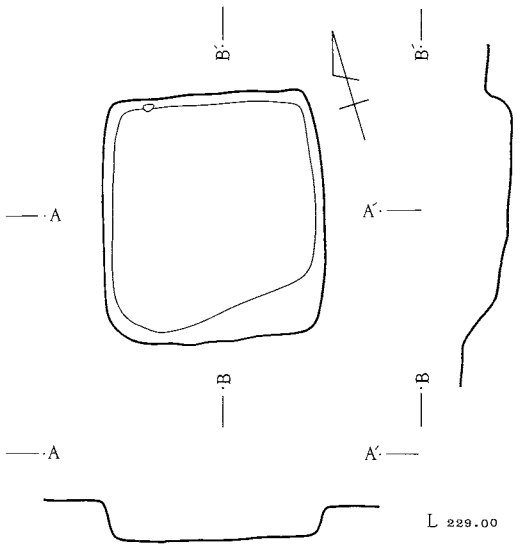


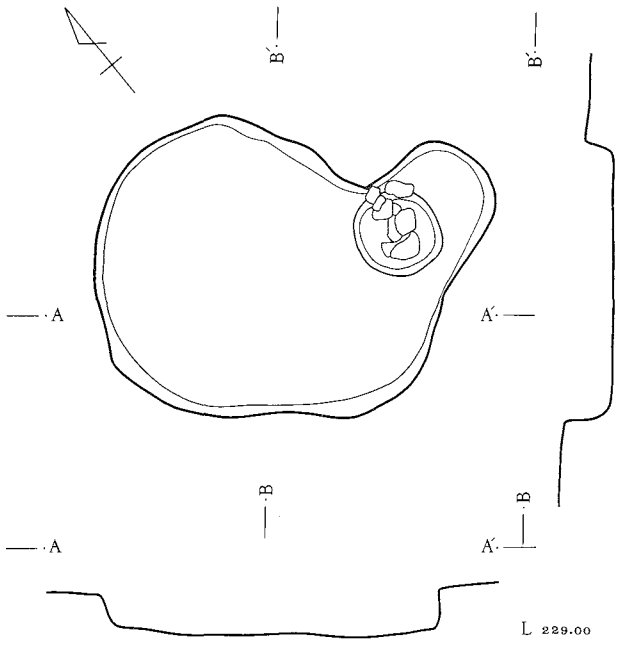

I－竪穴遺構2

東西2.3m×南北2.6mの整った小型方形を呈す。全体にやや張り気味でコーナーもゆるいカーブを描く。深さは中央で35～40cm弱で壁際は浅めになり、特に南東部はゆるい傾斜で上端へと続く。

覆土は基本的にローム粒を含む暗褐色層の単層で下半部では黒色土が少々混在していた。プラン内に施設的なものは皆無で焼土痕等も全く検出されなかった。

遺物は覆土中に土師坏片、甕片、須恵塊片、擂鉢片等が混在していた。

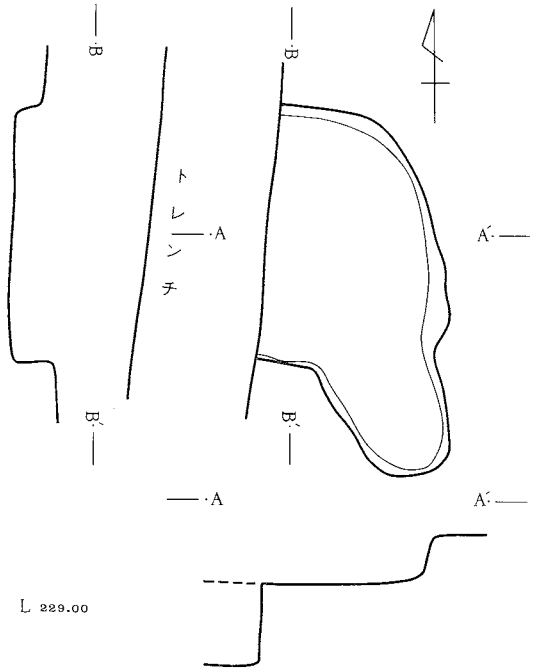



I－竪穴遺構3

楕円形に張り出し状の掘り込みをもつ形状で長径3.8m、短径2.7m、張り出し部は幅1.2mである。壁高は30～40cmで中央は45cmとやや深い。プラン東側の張り出し部の付け根に自然石数個を伴う円形ピットがあり、径90cm、深さは5cmで底面は平坦であった。竪穴自体の底面もほとんど平坦であり、このピット以外に施設的なものは無い。

遺物は覆土より土師甕片、須恵甕片いずれも小片が数点出土したのみ。




### Ⅰ－竪穴遺構４

竪穴遺構３の西に隣接する。遺構西側はトレンチが切り込んでしまったため不明。残存部は南北方向で2.8mで南東部に幅1.2mの楕円形の張り出しをもつ。本遺構残存部のプランは不整形で張り出しをもつ点等からも竪穴遺構３と規模、形状共に類似している。底面は平坦で深さは40cm内外であることも同様に類似点である。ただ、内部に掘り込みは全く存在しなかった。

遺物は覆土より土師甕小片が数点のみであった。

### Ⅰ－１号井戸跡

径２m強の不整円形を呈し、深さは中央で1.6mである。断面は概して半円状だが湧水のために深さ・形状は明確とは言えない。上位20～30cmでは立ち上がりがやや緩やかになっており、その段にひっかかる形で径15cm程の丸太状木材が２本並んで中央を東西方向に架かっている。木材の出土は他にはなく、中央を通っている状態から井戸枠とは考えられず、「足場」的な機能を推定し得る。

覆土中には径10～30cm程の自然礫が多く、土と一緒に埋め戻したようである。壁面に残るものも地山中のものではなく、覆土中のものである。遺物は検出されなかった。

### Ⅰ－２号井戸跡

径1.8m×2.0mの円形で深さは1.3mを測る。断面は漏斗状を呈しており、中位より径90cm程のピットが垂直近くに急に落ち込むといった感じである。この段の境目には１号井戸と同様に木材が中央に架かり、両端は壁へ刺さっている状態である。これは丸太というよりは太枝片であり、断面は半円状でもろい。腐蝕を考えても、「足場」としては弱そうである。

上端付近及び覆土より自然礫が出土したが数はさほどではない。遺物は検出されなかった。

### Ⅰ－井戸状遺構１

２号住居跡東壁部分に切り込む遺構である。確認面では2.1m×1.3mの楕円形プランであったが東側は20cmで地山に達してしまい、西側が径1.2m、深さ1.1mの掘り込みとなった。壁面はほとんど垂直で下面は平坦。湧水は無く、覆土より数個の自然礫と土師甕口縁付近片が出土した。

### Ⅰ－井戸状遺構２

径1.6mの不整円形で東側壁はなだらかな斜面で落ち込み、下位西側で径50cmの小ピット状落ち込みが垂下する。確認面より90cm程のレベルで湧水が始まり、最下面は1.1mの深さであるが明確ではない。石、土器等遺物は全く出土しなかった。

### Ⅰ－井戸状遺構３

径2.2m×1.6mの楕円形で深さは中央で1.9mを測る。壁面は２段になっており、下位の垂下する掘り込み(幅85cm)の肩口は狭いテラス状部分がある。確認面より1.8mの所で湧水があった。

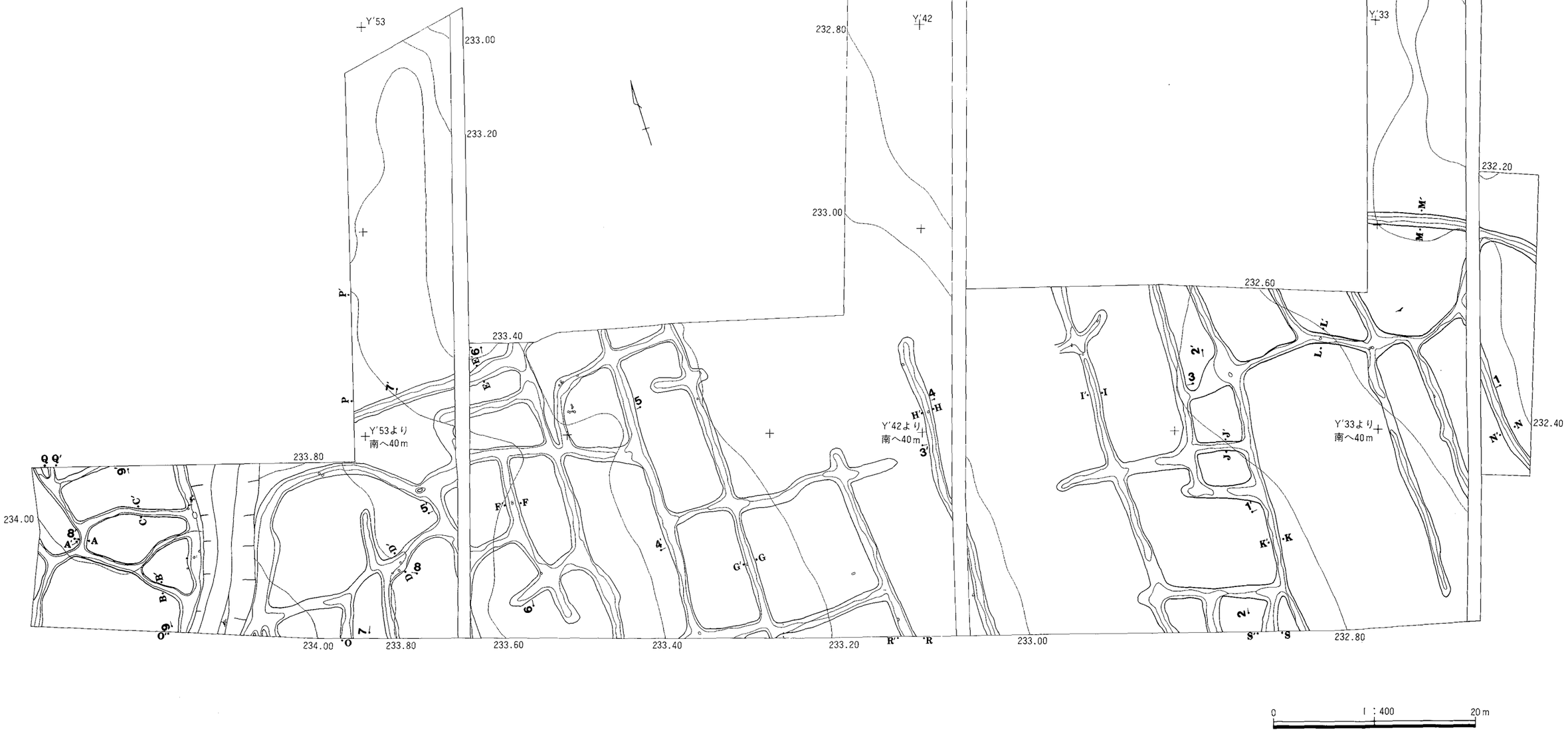
遺物は覆土より擂鉢片が出土した。

Ⅰ－井戸状遺構４

Ⅰ区北端の台地上部に位置する。径1.8m×1.6mの不整楕円形で確認面からの深さは2.1mである。遺構確認用の小トレンチで北側上部を半分程削ってしまったが、残る南側は40cm垂下した所が緩い傾斜のテラス状になっており、北側もそれより25cm程下にやはりテラス状平坦面がある。この中心に径60cmの細長い掘り込みがなされ、底面まで垂下する。湧水は無かった。

遺物は覆土より内耳の平底鍋型土器片が出土した。

A　区




挿図10　A区全体図

西から東への緩い傾斜をなすＡ区では、地表より70cm～１m下で浅間Ｂ軽石純層（1108年）が確認された。遺存は10～20cmと良好であり、直下に「黒のっぺ」と呼ばれる黒色粘質土が厚く堆積することから、トレンチ掘削段階で古代水田の存在が予想されていた。

〈水田面〉

調査区西から東までは約145mを測り、比高差は約170cmである。この緩傾斜を利用して棚田状水田が形成されている。区域内で確認出来た水田面のうち、完全に区面されているものは13面だが、畦畔の遺存が極めて悪いため、本来はさらに面数が多いと考えられる。個々の面積については全体にバラつきが見られ、畦畔の残存状態が悪いことを考えてもさほど規則性は感じられない。しかし、南北走向する畦畔が全体的に長く並行しているのに対し、東西走向のそれはつながりが悪く、水田面区面の際には南北軸を基本としていたことが推察される。また、区域西側に検出された水路によって、その西側の水田部は地形的な制約を受け、規模、形状に変化が見られている。

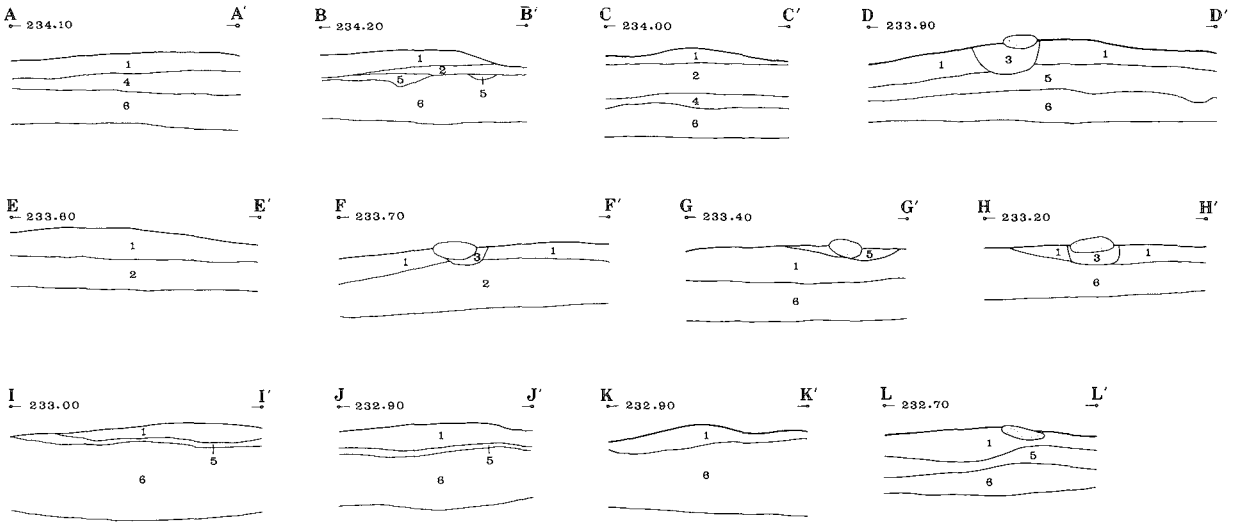
足跡等の耕作遺構は、それと断定出来るものの検出は無かった。これは、一つには耕作面が軟弱であり、土圧によって潰れたことが考えられよう。

〈畦畔〉

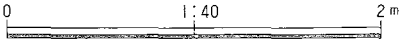
北側３箇所の拡張部を除くほぼ全域に検出された。北側拡張部は台地であるＢ区へ続く緩い傾斜になっており、水田部の北限は、拡張部両端の根元を東西に走向する畦畔にあるようである。

畦畔の走向は原則として南北軸に規則性があり、東西軸はそれに直交するものとしないものが短く存在する。これは前述したように、土圧により畦畔自体の遺存状態が極めて悪いために確認し得なかったものもあると考えられる。幅は下端で50cm～1.5mで平均して１m内外のものが多い。高さは数cm～10cm程を測り、断面形は殆どが緩い弧状である。また、水田全体が棚田状を示すため、南北走向する畦畔の西側はフラットがやや隆起し、東側ではそれより急な傾斜を示している。

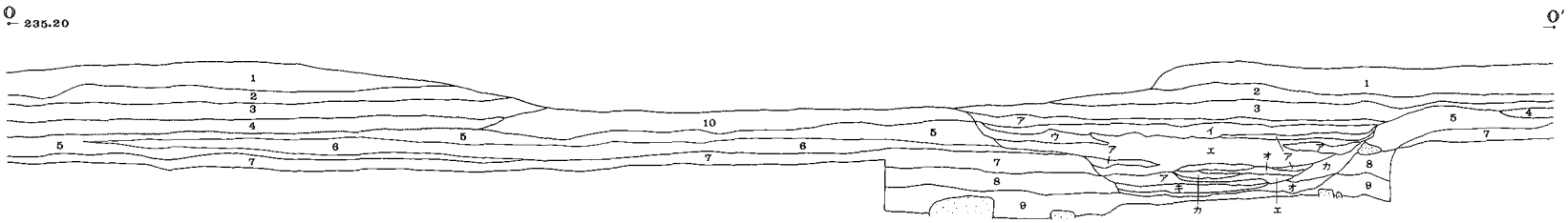
畦畔上の数か所に１～２・３個の円石を伴う部分が見ら



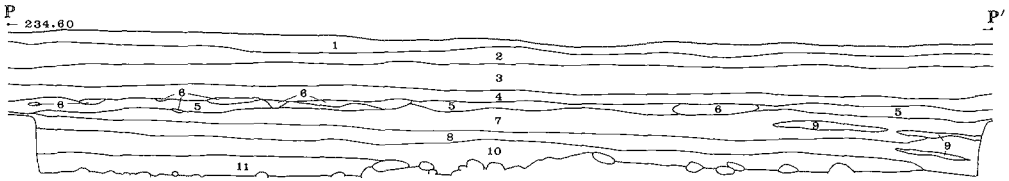

1層―やや青味をおびた黒色粘質土層。よくしまり、粘性も強い。
2層―基本的には１層で粘性の強さに欠ける。
3層―基本的には１層で、ほとんどしまりが無い。石の掘り込み（掘り方）。
4層―砂粒を主体とする層。上位は褐色、下位は黒灰色で砂粒も微小である。
5層―明茶褐色の粘質土層。基本的には１層と同様で、鉄分の凝集部分である。
6層―植物の遺体を多量に含む黒色粘質土層。白色の軽石微粒子もまばらに含まれる。
7層―微砂粒を多量に含む黒灰色土層。植物の遺体も含み粘性はさほどなく水気をおびる。



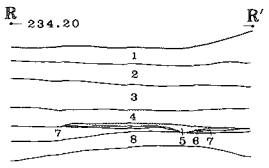

挿図11　A区畦畔部セクション



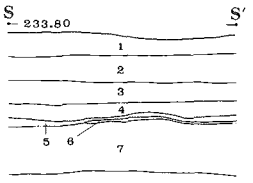

1層—表土（現耕作土）。比較的しまりのある暗褐色砂層でA軽石をまばらに含む。
2層—しまりのない褐色砂層。A軽石をまばらに含む。
3層—B軽石を多量に含む暗褐色砂層。上位は黄色がかる。
4層—B軽石純層。上位では径1～3㎜、下位では5～8㎜程で最下位には青灰色の灰層が存在する。全体には灰褐色を呈す。
5層—B軽石直下の水田耕作土。やや青味がかった黒色の粘質土層で非常によくしまっている。
6層—基本的には5層中に存在している。鉄分凝集部で茶褐色の粘質土層。
7層—植物遺体を含む黒色粘質土層。軽石微粒子も見られよく水気をおびる。
8層—植物遺体を多量に含む、7層よりも濃い黒色の粘質土層。水気をおび、軽石粒は含まない。
9層—暗灰色砂層。水気が多く、掘ると湧いてくる。上半部に植物遺体を含み、また、径2㎝～数10㎝の礫も含んでいる。
10層—基本的には3層と同様であるが、所々に泥状のものやB軽石の純層塊が見られる。
ア—微砂粒からなる灰色の砂利層で所々に泥を含んでいる。
イ—しまりのない暗褐色砂層でB軽石をまばらに含む。
ウ—明褐色の砂利層。
エ—しまりのない黒褐色砂層。
オ—純黒色の泥層。
カ—暗灰色砂層で、つつくとサクサクと崩れる。
キ—泥と砂の混在する暗灰色層。



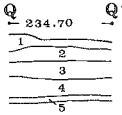

1層—表土（現耕作土）。暗褐色を呈し、A軽石をまばらに含む。
2層—現耕作土に含まれる、やや赤味がかった暗褐色砂層。
3層—しまりのよい明褐色砂層でA軽石をまばらに含む。
4層—基本的に3層と思われ、暗褐色を呈す。
5層—やや粘性のある明褐色土層。A軽石及び黄色微砂粒をまばらに含む。
6層—黄色砂粒のブロック。河原砂という感じである。
7層—B軽石を多量に含む暗褐色砂層。よくしまっている。
8層—B軽石を多量に含む黒色砂層。
9層—暗灰色砂利層で径は1～2㎜。
10層—黒色粘質土層。鉄分の凝集する茶褐色部を含む。
11層—10層よりもやや砂質な黒色粘質土層。



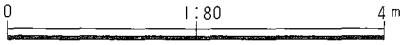

1層—現水田耕作土。A軽石をまばらに含む暗褐色砂層。
2層—1層と同様だがしまりに欠ける。
3層—B軽石をまばらに含む褐色砂層。
4層—B軽石純層。
5層—B軽石純層の最下位にあたる灰層。
6層—基本的に7層だが、僅かに赤味がかる。
7層—黒色粘質土層。水田耕作土。
8層—やや褐色がかった黒色粘質土層。




1層—現水田耕作土。暗褐色砂層でA軽石をまばらに含む。
2層—さほどしまりのない暗褐色砂層。A軽石をまばらに含む。
3層—B軽石をまばらに含む褐色砂層。よくしまっている。
4層—B軽石純層。
5層—B軽石純層。上位の4層に比べ、粒子が1㎝近くと粗く、差が顕著である。
6層—青味がかった白灰色の灰層、B軽石純層の最下位。
7層—B軽石直下水田耕作土。黒色粘質土層。




1層—現耕作土。A軽石をまばらに含む暗褐色砂層。
2層—基本的に1層と同様で、しまりに欠ける。
3層—しまりのよい暗褐色砂層。
4層—B軽石をまばらに含む暗褐色砂層。よくしまる。
5層—B軽石純層。




**挿図12　A区壁部セクション**

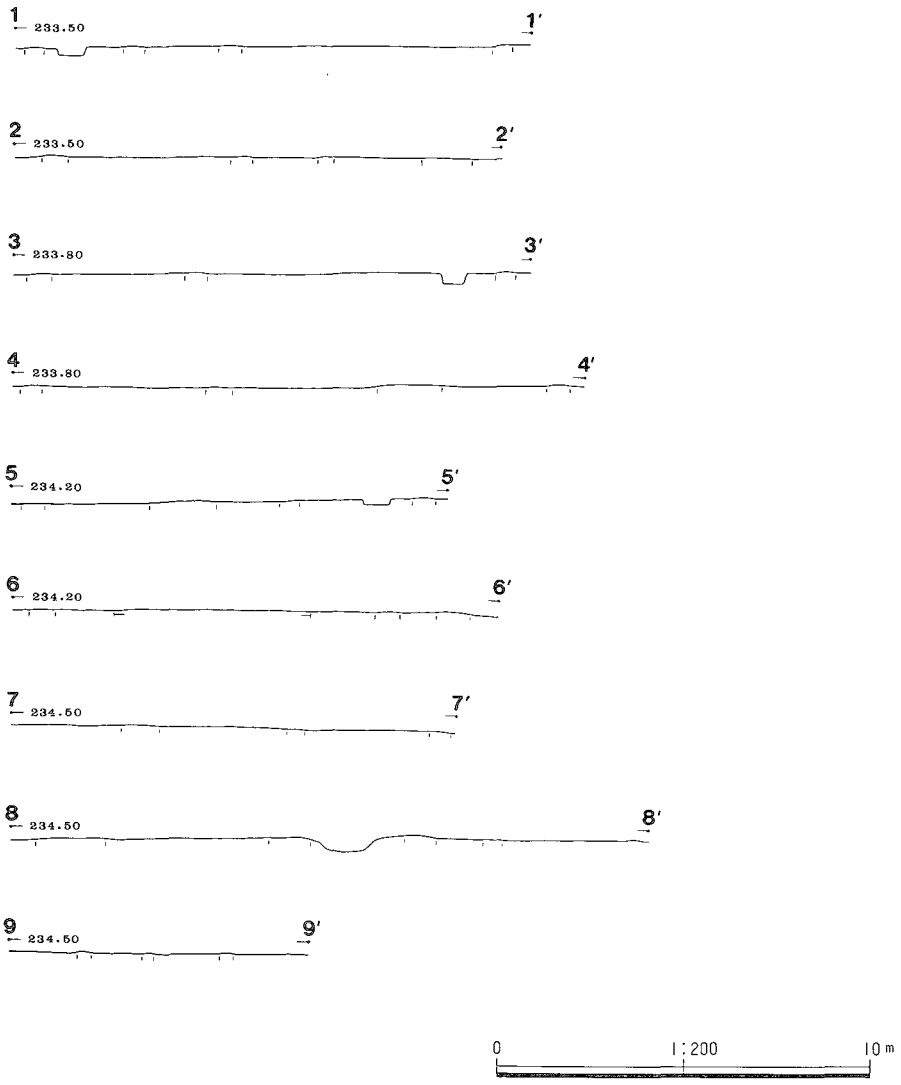
れた。石は10数cm～30cm程度であり、こういった石の存在は水田面には見られない。畦畔上の交差点に多く、石の下に掘り方と思われる掘り込みがあることから、意図的なものと考えられよう。

〈その他〉

北側３箇所の拡張部には畦畔は全く検出されなかった。これは南側に比べてＢ軽石の堆積が薄く（０～10cm程）、確認しにくかったことも考えられるが、北側の台地（Ｂ区）へ続く緩斜面であること、また、拡張部付け根に東西走向している畦畔からみて、この畦畔が水田区域の北端であり拡張部には水田は存在しないと考えた方がよいであろう。

また、水口と思われる部位は確認出来なかった。

区域西側には南北方向の水路が検出された。この上端は両脇の畦畔となっており、セクションはＢ下水田面からの落ち込みを示す。上端幅は５ｍ弱、下端は約２ｍ、深さは70～１ｍを測る。また、溝以東の水田がここより水を引いていたことは充分考えられ、セクションは水位が水田面近くにまで及んでいたことを示していた。




挿図13　A区エレベーション

# Ⅵ．プラント・オパール分析結果報告

古環境研究所

## 1．はじめに

当遺跡のA区では、浅間B軽石純層直下から畦畔が広範囲にわたって検出され、平安時代の水田跡と考えられた。この分析的裏付けを主目的とし、さらには生産されたイネ籾総量、古環境の推定等も合わせてプラント・オパール分析調査を行なった。

## 2．試　　料

サンプリングは昭和61年6月3日・4日の2日間行なった。この時点では、発掘調査は終了しており、浅間B軽石層直下の畦畔が残存していた。

サンプリングはA区の2地点を任意に選定した（挿図14）。ここに深さ1.5m程度のピットを掘削し、層相の変化ごとに分層した。層名は地点ごとに上部から番号を付けたもので、地点間の対応（共通）関係はない。試料は、土層壁面各層ごとに5～10cm間隔で、容積100ccのサンプル管ならびにポリ袋を用いて採取した。A地点においては、浅間B直後から現在に至るまでの稲作の変遷を調べるため、数mずらした壁面で地表面まで採取した。

## 3．プラント・オパール分析法

①プラント・オパール

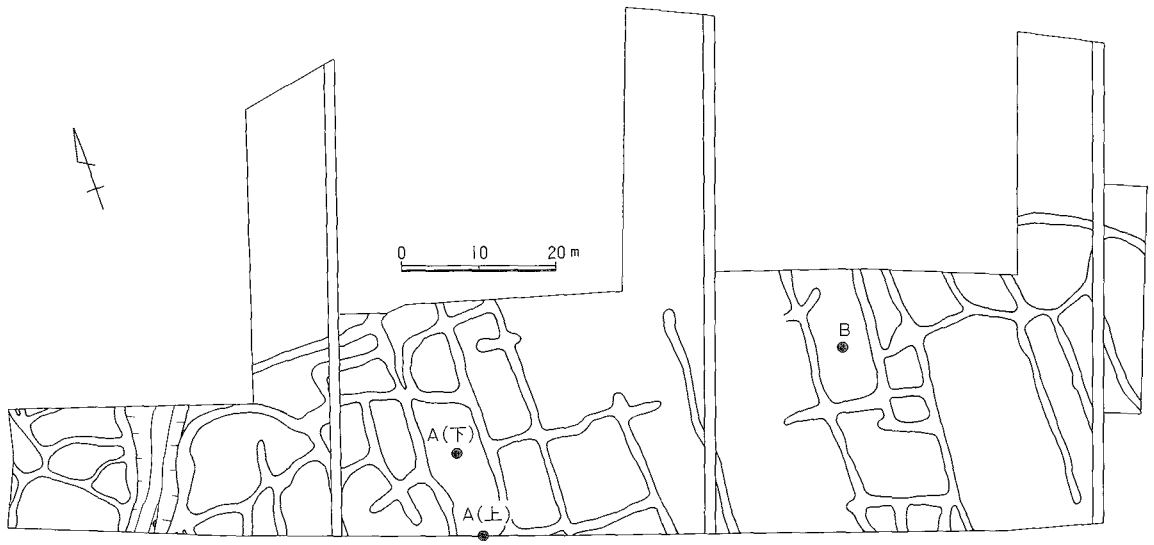
イネ科植物には、ススキ、ヨシ、タケなど、数多くの野草・雑草の他に、イネ、アワ、キビ、ムギなどの栽培植物が含まれている。これらは別名「珪酸植物」とも言われ、多重の珪酸（$SiO_2$）を吸収する。

植物体内に吸収された珪酸は葉身中の特定の細胞の細胞壁に選択的に集積され、植物学的にはこれを「植物珪酸体」と呼んでいる。植物珪酸体は、その主成分が化学的に安定な珪酸であるため、植物が枯死した後も土壌中に永く残留し、「プラント・オパール（Plant Opal）と呼ばれる微化石となる。

このうち、機動細胞珪酸体（葉身の強度を保ち、乾燥時に葉身を巻き込んで水分の蒸発散をおさえる作用をしていると思われる）は、比較的大型で（約0.05mm）植物種により固有の形状をもっていることから、これを用いて給源植物を同定することが可能である。

②プラント・オパール定量分析法の手順

採取試料の絶乾（105°C、24時間）、仮比重測定→1gを抽出し、ガラスビーズを混入（径約0.05mm）→脱有機物処理→起音波処理→ストークス法処理（以上はプラント・オパールと土粒子の分離、汚れの除去、ガラスビーズの均等分散




挿図14　プラント・オパール分析試料採取地点

などのため）→乾燥・プレパラート作成→検鏡・計数。

検鏡時に、視野の中にあるプラント・オパールを同定し、同時にガラスビーズもカウントしガラスビーズの数が3000個以上になるまで続ける。これらの比率をとり、試料土1gあたりに混入されたガラスビーズの個数を掛けることで、1gあたりのプラント・オパール含有個数が算出される。この値に仮比重を掛けて、試料土1ccあたりのプラント・オパール含有個数が求められる。

以上のようにして、各土層におけるイネの機動細胞プラント・オパール密度を測定してゆくと、水田址等が埋蔵されている層にピークが現れるのが通例である。通常、密度が5,000個/cc以上の場合、水田址等の可能性が高いと判断している。

また、このプラント・オパール密度に表2の換算計数を掛けることで、試料土1cc中に供給された植物体量を推定し、これに各層の層厚を掛け、その層で生産された植物の総量（t/10a）を求めた。なお、この生産量の値は、植物の葉身が全て水田内に残されていることを前提にしており、例えばイネの収穫方法は穂刈りでなくてはならない。

表2　各植物の換算計数（単位：$10^{-5}$g）

| 植物名 | 葉身 | 全地上部 | 種実 |
|---|---|---|---|
| イネ | 0.51 | 2.94 | 1.03 |
| 栽培ヒエ | 1.34 | 12.20 | 5.54 |
| ヨシ | 1.33 | 6.31 | — |
| ゴキダケ | 0.24 | 0.48 | — |
| ススキ | 0.38 | 1.24 | — |

## 4．分析結果

イネ、キビ族（ヒエ等）、ヨシ属、タケ亜科（竹笹類）、ウシクサ族（ススキ等）について同定・定量を行ない、数値データを表3に示した。その他については検出数が少ないため割愛した。

イネについてはプラント・オパールの出現状況をグラフで表し、挿図15に示した。

イネ、ヨシ属、タケ亜科については、植物体生産量を推定し、挿図16にグラフで示した。

## 5．考　察

①稲作について

各地点共に浅間Bの下層ではイネのプラント・オパールが高い密度で検出された。浅間Bは10～50cmと厚く堆積しており、ここからはプラント・オパールは全く検出されなかった。プラント・オパールが上層から浅間B軽石層を通過して落み込んだとは考えられないため、B軽石層の下層でイネが生産されていたことは確実であろう。発掘調査で検出された畦畔は水田稲作に伴うものであることが分析的に裏付けられたと言える。

また、A（上）地点では、イネのプラント・オパールが浅間Bの直上から地表面まで連続して多量に検出された。浅間Bによって中断された水田稲作は、その直後から再開され、現在まで継続的に行なわれていたものと推定される。

②イネ籾生産総量について

稲作の開始時から、浅間Bによって中断される間に生産されたイネ籾の総量を、上記分析法の換算計数により算出した。その結果、面積10aあたり換算で、A地点が46.7t、B地点が70.5tと推定された。

吉田武彦（1975）によると、奈良時代～平安時代初期の10aあたりの収量は約100kgであったとされている。イネ籾の総量をこの値で割ると、稲作が開始されてから浅間Bによって中断されるまでの期間は、A地点で約470年間、B地点で約700年間であったものと推定出来る。

③古環境について

上記分析法③で述べたように、ヨシ属とタケ亜科の生産量と消長を調べることにより、当時の周辺の乾湿環境と変遷を推定し得る。（挿図16参照、横軸のスケールが地点間で異なっている。）

A地点ではヨシ属の卓越が目立ち、イネの出現まで続いている。稲作が開始される以前は、ここはヨシの繁茂する

③古環境の推定

イネ科植物の中で、特にヨシ（アシ）やマコモは低湿地など湿潤な土壌条件の所に生育し、逆にススキやタケ、ササは比較的乾いた土壌を好む。このことから、これらの植物の生産量の消長を調べることにより、当時の周辺の土壌水分条件（乾湿環境）と変遷が推定出来る。

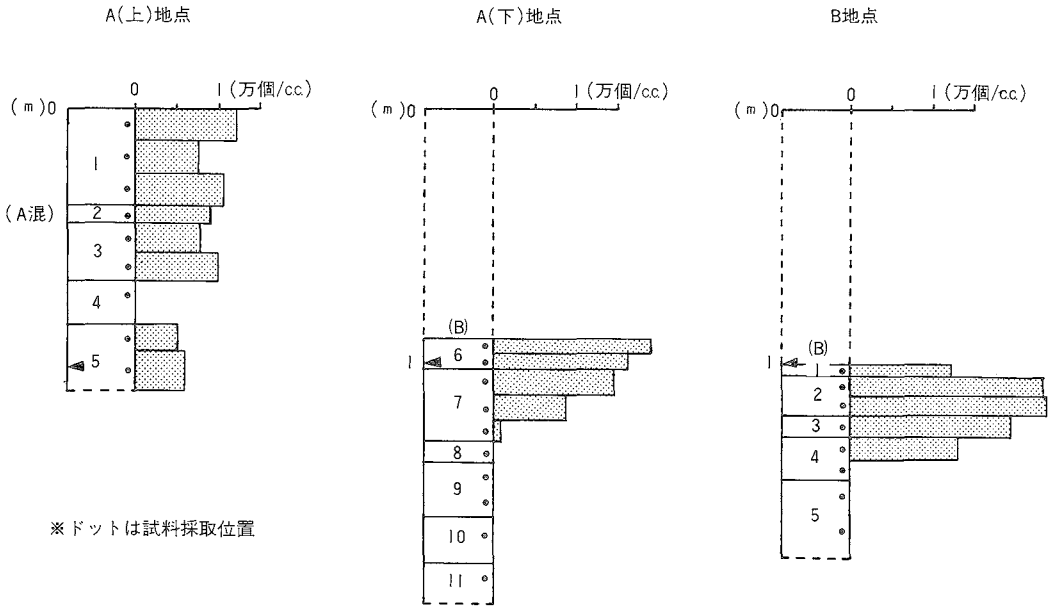
湿地であり、このヨシ原を開墾して水田が造成されたものと推定される。イネの出現以後、ヨシ属は激減しているがこれは土壌の乾燥化とともに、人為的な作用によるものが大きいと考えられる。

B地点ではヨシ属が比較的少なく、タケ亜科が卓越している。同地点は5層が河床と思われる砂礫層であり、その上部も砂質土であることから、水はけのよい比較的乾いた環境条件で推移したものと推定される。

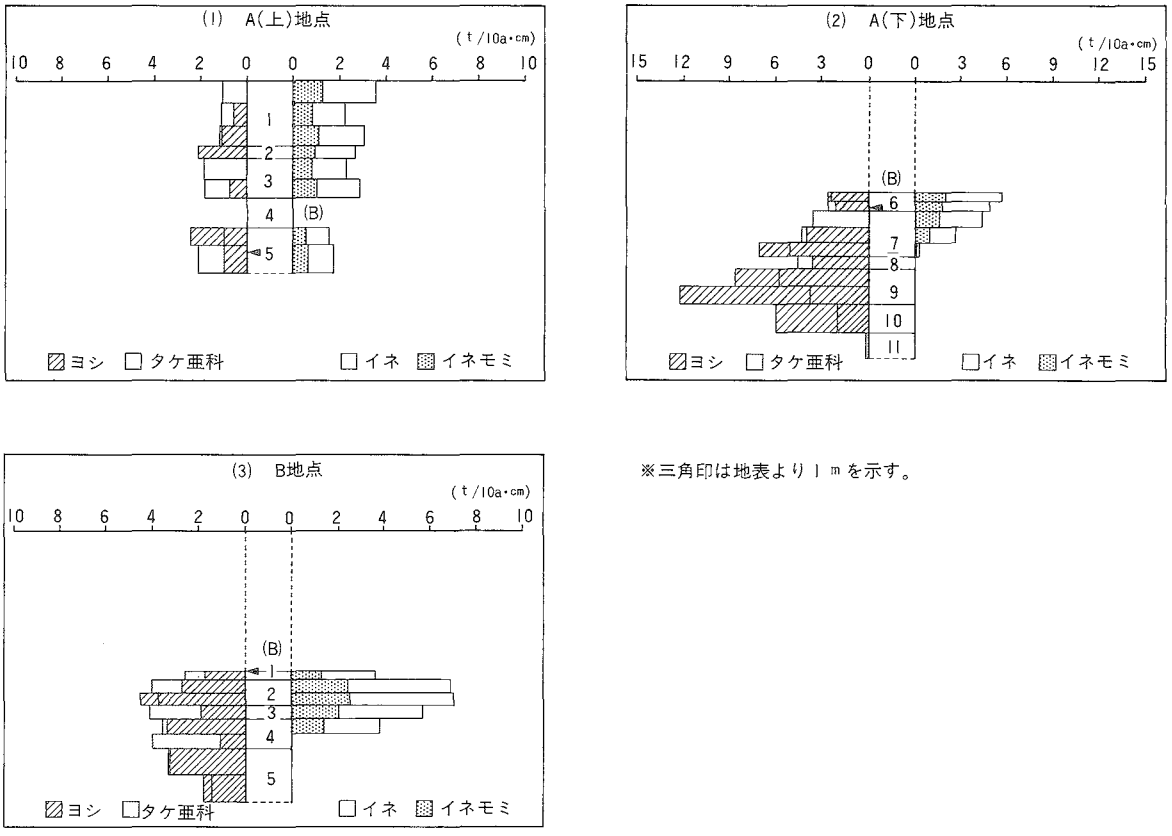
（参考文献）
1．藤原宏志（1976）：プラント・オパール分析による古代栽培植物遺物の探索、考古学雑誌62：148-156
2．藤原宏志（1976）：プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―、考古学と自然科学9：15-29
3．藤原宏志・佐々木章（1978）：プラント・オパール分析法の基礎的研究（2）―イネ科（Oryza）植物における機動細胞珪酸体の形状―、考古学と自然科学11：9-20
4．藤原宏志（1979）：プラント・オパール分析法の基礎的研究（3）―福岡・板付遺跡（夜臼式）水田および群馬・日高遺跡（弥生時代）水田におけるイネ（O. sativa L.）生産総量の推定―、考古学と自然科学12：29-41
5．杉山真二・藤原宏志（1984）：プラント・オパール分析による水田址の探査、那珂君休遺跡II、福岡市埋蔵文化財調査報告書（福岡市教育委員会）第106集：5-9、11-14
6．藤原宏志・杉山真二（1984）：プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）―プラント・オパール分析による水田址の探査―、考古学と自然科学17：73-85

表3　試料別プラント・オパール個数（単位：万個／cc）

| | 試料名 | イネ | キビ族 | ヨシ属 | タケ亜科 | ウシクサ科 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| A（上）地点 | 1—1 | 12,057 | 0 | 0 | 22,506 | 3,215 |
| | 1—2 | 7,578 | 0 | 842 | 23,575 | 1,684 |
| | 1—3 | 10,319 | 0 | 1,587 | 24,606 | 794 |
| | 2（A混） | 9,017 | 0 | 3,006 | 44,083 | 1,002 |
| | 3—1 | 7,741 | 0 | 0 | 38,705 | 4,423 |
| | 3—2 | 9,728 | 0 | 1,081 | 37,833 | 1,081 |
| | 4（B） | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| | 5—1 | 5,041 | 0 | 3,529 | 20,669 | 1,008 |
| | 5—2 | 5,787 | 0 | 1,447 | 44,369 | 965 |
| A（下）地点 | 6—1 | 19,043 | 0 | 3,809 | 51,417 | 0 |
| | 6—2 | 16,272 | 1,017 | 3,051 | 54,918 | 1,017 |
| | 7—1 | 14,644 | 0 | 0 | 77,125 | 1,953 |
| | 7—2 | 8,787 | 0 | 5,858 | 91,776 | 4,882 |
| | 7—3 | 861 | 0 | 10,336 | 106,809 | 5,168 |
| | 8 | 0 | 0 | 5,342 | 96,162 | 1,068 |
| | 9—1 | 0 | 0 | 12,514 | 121,726 | 0 |
| | 9—2 | 0 | 0 | 17,782 | 78,908 | 6,668 |
| | 10 | 0 | 0 | 8,725 | 42,654 | 1,939 |
| | 11 | 0 | 0 | 0 | 3,798 | 0 |
| B地点 | 1 | 12,223 | 0 | 2,445 | 53,782 | 3,260 |
| | 2—1 | 23,431 | 0 | 3,905 | 84,353 | 3,905 |
| | 2—2 | 23,765 | 0 | 6,556 | 77,852 | 6,556 |
| | 3 | 19,332 | 0 | 2,762 | 86,533 | 2,762 |
| | 4—1 | 12,889 | 0 | 4,957 | 74,359 | 2,974 |
| | 4—2 | 0 | 0 | 1,537 | 83,769 | 769 |
| | 5—1 | 0 | 0 | 4,767 | 69,605 | 0 |
| | 5—2 | 0 | 0 | 2,644 | 29,960 | 881 |




**挿図15　試料別プラント・オパール出現状況（イネ）**




**挿図16　各植物の推定生産量と推移**

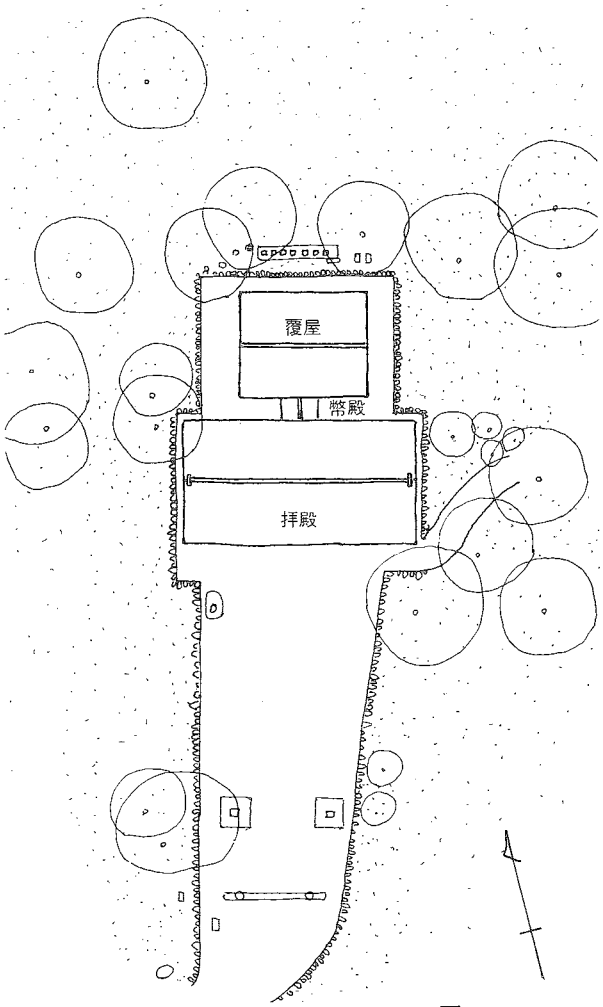
# Ⅶ．大宮神社建造物調査報告

群馬県教育委員会高校教育課指導主事
上毛歴史建築研究所　主任研究員　村田敬一

## 1．はじめに

本調査は工業団地造成のため移転する大宮神社の建造物調査である。昭和62年３月14日に現地調査、同年５月16日に文献、聞き取り調査を実施した。以下、その概要について記す。

なお、調査においては小此木浅好氏(松井田町人見1771、明治34年生まれ)、塩谷武次氏(同町人見1773、明治45年生まれ)、小此木敬次郎氏（同町人見1818、大正６年生まれ）の３名の神社総代、および小此木林樹氏（同町人見1771、昭和４年生まれ)、さらに松井田町教育委員会社会教育課主事にご協力頂きました。ここに記して厚くお礼申し上げます。




挿図17　大宮神社境内配置図

## 2．境内配置

境内配置は挿図17に示す通りである。境内は高さ約50cm程度の石垣により、高い部分と低い部分に分けられている。建造物としては社殿のみで、神楽殿や手水舎などは建てられていない。

社殿は低い部分の北側奥にほぼ南を正面として建てられている。手前から拝殿、幣殿、覆屋の順で配置されており、各棟は接続している。本殿は覆屋の中に鎮座している。社殿の西、北、東面は杉の大木によって囲まれている。

境内への入口は拝殿の南側および拝殿前方部東脇の２か所となっている。南側の入口より入ると石鳥居の手前左側に道祖神、衣笠神を祀り、鳥居をくぐり抜けた両側に石燈籠を配置している。この石燈籠は昭和15年に小此木辰雄氏の寄贈したものである。さらに進んだ拝殿の手前左側には神社由緒を刻んだ明治25年の石碑が建つ。覆屋の裏側には摩利支天をはじめ、数多くの石祠および石碑が祀られている。

## 3．建築解説

### ①　拝　　殿

正面三間、側面三間、背面五間の切妻造平入の建物で幣殿に接続している。平面を挿図18に示す。当遺構は割拝殿に近い形式をとっており、中央一間通りを低くし板張りの通路としている。通路と両側の板張りの床部分との高低差は約52cmである。

柱間装置をみてみると、通路と床との境界部には何も設けずに開放とし、正面は通路部分を除いて高欄としている。古くは通路入口部に腰高の格子戸を嵌め込んでいたという。現在も柱に戸を嵌め込む時のガイドとなる桟木が残っており、それを裏付けている。側面は西側を板壁、東側を腰のみの板壁とし上部を開放としている。背面は幣殿との接続部を開放とし、他の全面を板壁としている。

柱脚部は土台を巡らし、その下の柱下にあたる部分に自然石を配している。軒は正側背面の四方を、柱上部から腕木を突出して小天井を張るせがい造りとしている。内部天井は張られておらず、直接屋根裏をみせる構造になってい

る。当遺構は、社寺建築によくみられる組物（くみもの）等の様式的な手法を用いず、全体的に簡素な意匠でまとめられている。

当遺構は慶応元年（1865）12月の「鎮守拝殿再建寄進連名」、昭和10年12月17日の「大宮神社本殿屋改築寄附芳名」「本殿上屋々根替落成祝糯米並寄贈品寄附者連名」の建造に関する扁額、および昭和10年12月17日の棟札を残している（挿図19）。

当遺構の建造年代は扁額の通り慶応元年とみてよいであろう。現在の瓦葺屋根は、昭和23年に草葺を葺替えしたものであるという。当神社は昭和20年３月の「大宮神社拝殿屋根替諸経費帳」を残しているが、これは草葺から草葺に葺替えた時の文書である。

昭和10年の扁額と棟札は、聞き取り及び本殿上屋という建物名などから判断して、覆屋のものと考えられる。なお、当遺構には、大正４年４月３日の「奉額義太夫」、昭和３年４月３・４日の「奉額天狗義太夫大會」、昭和16年１月の「大宮神社奉納将棋大會」などの扁額も掲げられている。

② 幣　　殿

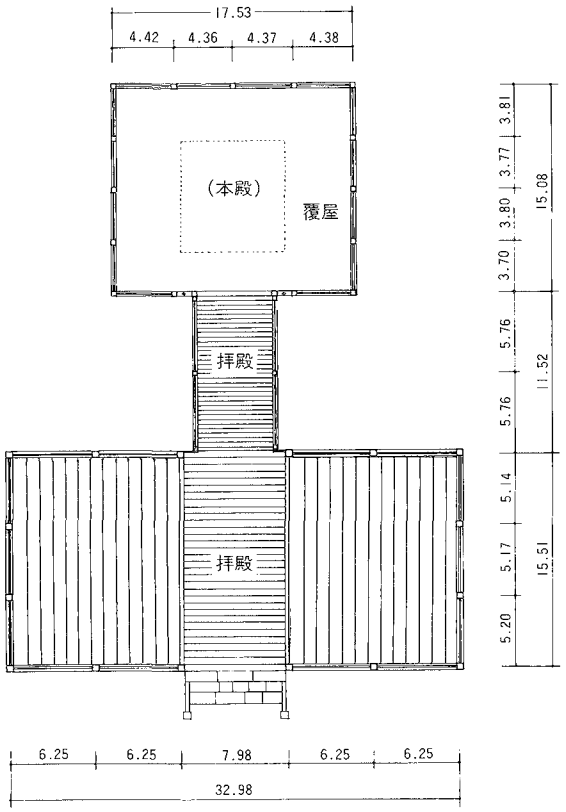
正面一間、側面二間の切妻造妻入（つまいり）の建物で拝殿と覆屋をつないでいる。屋根は亜鉛鉄板一文字葺である。両側壁面の腰を金属板貼りとし、上部を関放としている。建設に関する資料も無く、詳細は不明である。

③ 覆　　屋

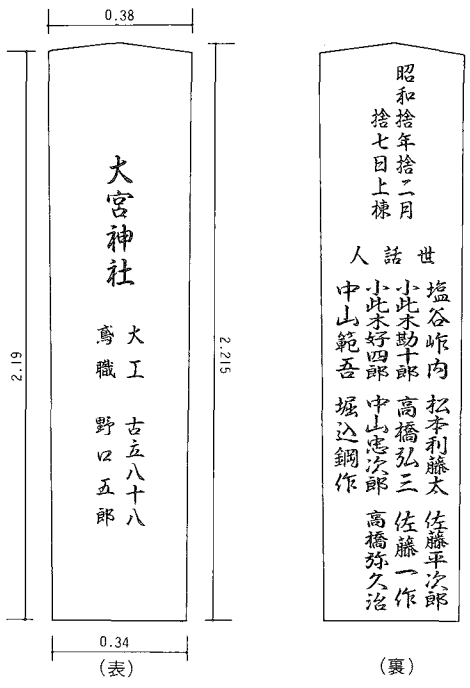
正面五間、側面二間、背面四間の切妻造平入の建物で幣殿と接続し、その延長上に本殿を置いている。柱間装置をみてみると、正面中央柱間のみを開放とし、他は桟木を嵌め込んだ開放に近い開口部（高さ45cm程度）をもつ金属板貼りの壁としている。古くは正面中央柱間に上半分を格子とした引違戸を設けていたという。しかし、現在その痕跡は見当らない。

拝殿の項で記した昭和10年12月17日の扁額と棟札は、当遺構の屋根替に関するものであり、この時に草から瓦に葺替えしたと考えられる。

当遺構の建造年代は不明であるが、全体的に簡略した様式であることや、材料の風化の度合いなどからみて、拝殿の建造年代より降るとみてよいであろう。正面中央柱間にみられる虹梁は取合などからみて当遺構建造時のものでなく、前身建物あるいは他に使用されていたものを再利用したものと推察する。




挿図18　社殿平面図（単位尺）



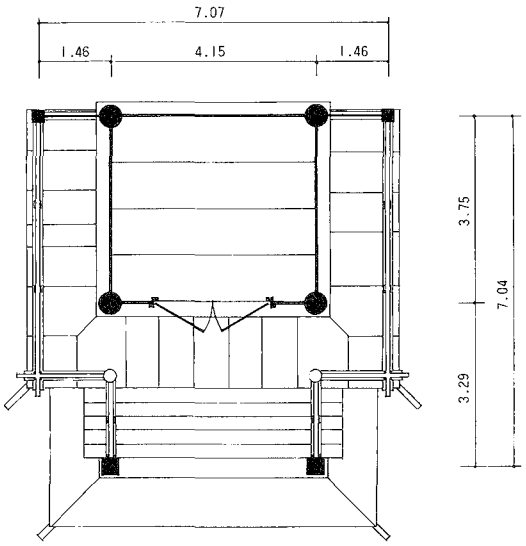

挿図19　昭和10年の棟札（単位尺）

④ 本　殿

一間社流造で覆屋の中に鎮座する。当遺構は建造に関する棟札などの資料を残していない。平面を挿図20に示す。

屋根は柿葺とし、軒は正面に打越二軒繁垂木としている。正側三方に大床を巡らし、脇障子を置く。組物は身舎、向拝とも出組とし、中備として身舎のみに蟇股を用いている。蟇股は比較的肩も張っておらず脚も長い。海老虹梁はかなり段違いに架けられ、反りも大きい。妻飾は虹梁と彫刻の複合式をとっている。各虹梁にみられる唐草絵様は渦と若葉の区分も明確でなくなり、刻線も太い。水引虹梁のものは波をあしらったような複雑な意匠になっている。木鼻は身舎、向拝とも拳鼻である。彫刻は妻飾および蟇股内部のものが目立つ程度で多用されていない。

当遺構の建築年代判定は、細部手法において新しいものと古いものを混用していること、および当地区における他の神社建築が未調査であることなどから苦慮するところである。しかし、筆者の過去における県内各地の調査結果より作成した編年指標からみると、19世紀初期～中期頃に建造したものといえよう。




**挿図20　本殿平面図（単位尺）**

## 4．ま と め

今回の移転において取壊すことになった拝殿・幣殿・覆屋の3棟の中で注目すべきものは拝殿であろう。拝殿は平安末期頃に現れたとみられる拝殿形式のひとつである割拝殿に近い形式であった。割拝殿は神社建築の発展とその背景を知るうえで大変貴重な遺構であるといえよう。筆者の過去の調査においても、割拝殿形式をもつ神社は非常に少ない。藤岡市で68社中2社、子持村、伊勢崎市、渋川市ではそれぞれ29社、31社、40社において皆無であった。今後、この拝殿の遡った時点での利用目的、形態などを探ることは重要なことであると考える。

当神社は村社であり、人見地区の総鎮守であった。春（4月3日）・秋（10月15日）の祭り、雨乞い、兵隊出兵の際の戦勝祈願など、氏子にとっては何かにつけよりどころでもあった。今後、この移転を機会に当神社の祭礼や年中行事などが調査記録されることを切に希望するものである。それらの記録は、人見地区の人々の歴史を知るうえで欠くことのできない、大変貴重なひとつの史料となり得るであろう。

（昭和62年5月記）

# Ⅷ。ま と め

本遺跡においては、縄文時代から中～近世に至るまでの数多くの資料が検出された。このうち、主たるものは古墳時代～平安時代の竪穴住居跡とそれに伴う遺物、及び浅間Ｂ軽石層によって埋没した水田跡である。

調査対象地（造成区域）27haの約⅓、9.3haを広げて面的な調査を行い、他の低湿地帯はトレンチによる土層確認と遺構確認に留めたわけであるが、Ａ区の状況から見て同様の立地条件を示すこれらの地域においても水田跡が存在する可能性は充分考えられる。

以下、検出された遺構・遺物をまとめてみる。

〈遺構〉

| | |
|---|---|
| ○竪穴住居跡 | 445 |
| ○掘立柱建物跡 | 11 |
| ○井　戸　跡 | 7 |
| ○土　　坑 | 7 |
| ○古　　墳 | 1 |
| ○水　田　跡 | 5.280㎡ |
| ○その他（性格不明の竪穴遺構・土坑類など） | |

〈遺物〉

| | |
|---|---|
| ○土製品（土器・土錘など） | 2.075 |
| ○石製品（こも石・石器・砥石・紡錘車・他） | 433 |
| ○鉄製品（紡錘車・刀子・鎌・鏃など） | 27 |
| ○銭 | 9 |

以上は報告書に掲載されている数値であり、掲載出来なかった遺物等もあることを記しておきたい。

さて、住居跡に生活していた人々の生産基盤を考えると、水田による耕作がその主体をなしていたように思われる。プラント・オパール分析調査の結果は、浅間Ｂ軽石の降下（1108）以前より稲作が営まれていたことを強く示唆しており（層厚で30～40cm）、その開始時期は不確かであるが検出された住居跡とある程度の並行期間はあったであろう。住居跡の時期的な変遷のデータを出していないために憶測の域を出ないが、このことは今後の検討課題としたい。

「ムラ」としてのまとまりを考えるうえで、居住区域、生産区域と共に「墓域」の存在を念頭におく必要があろう。本遺跡で検出された遺構のうち、埋葬施設とし得るものはＢ区の古墳があり、また、同じくＢ区の１号土坑はその形態や伴出遺物から「土坑墓」と言えるものかと思われる。他にその可能性が考えられる遺構は無いが、上記の遺構にしても、集落との位置関係や単体で存在していることなどからみて「墓域」を示すものとは言えない。

本遺構より北東200～300ｍを隔てた場所に、通称「塚原古墳群」と呼ばれている後期の小円墳群が存在する（塚原、足名田、法正寺地区）。正確な基数は把握されていないが、現在は10数基が残存しており、これらの正式調査例はなく、被葬者についても全く分かっていない。古墳群に近接する地域での発掘調査例もなく、現状では縄文土器の散布（ある程度まとまった量を確認している）及び平安期の土器が僅かに散布するのを筆者が確認しているのみである。このようなことから、ここでは本遺跡の墓域の１つの可能性としてこの古墳群を捉えておきたいと考える。本遺跡のデータ分析と共に当地域の調査例の増加によって、このことも解明されなければならないであろう。

日常什器として全般的に出土した須恵器について、胎土分析調査を行なった。その結果、隣市秋間窯址からの搬入の可能性と共に、それ以外の生産地を示唆する須恵器の存在が明らかになった。しかし、分析資料点数の少ないことやバックデータの不充分さなどを考慮すれば、あくまでもこの結果は参考資料としておくべきであり、須恵器生産及び流通を研究するうえでの一端であろう。また、土師器についてもその生産地は謎のままであり、須恵器研究と共に今後の分析、及び調査資料の増加を待って慎重に検討してゆく必要がある。

さて、発掘調査は「発見」であると同時に「破壊」でもある。それ故、いかに事実に添った正確な追体験を第３者にさせ得るか、ということが作業を通じての１つの要点であることは言うまでもない。しかし本報告書でそれをなし得たかと言うと、残念ながら不充分であったと言わざるを得ない。これは筆者の力量不足によるところが大きく、資料をベストな状態で提示出来なかったことは反省の一語に尽きる。以下、今後の課題としてそれらを述べることにする。

〈遺物の取扱い〉

遺構内に検出された遺物のポイントについては、個々の遺物についての対照及びそのレベル（要するに出土位置）の正確なデータを記載していない。各遺構実測図中に図化した平面的位置と、記述文中で大まかな出土状況を記したのみであり、遺構と遺物の共存関係を充分に検討するには

無理があろうかと思われる。

また、縄文土器片、弥生土器片及び中～近世の陶磁器片が、遺構には伴なわないながらも各数10点程出土しているが、紙面の都合上ほとんどが提示出来なかった。縄文土器は中期後半の加曽利Ｅ式期の後半と思われるものが９割以上を占めており、この中には中部地方的な要素をもつものも見受けられる。また、前期諸磯Ｃ式期の土器も若干検出された。弥生土器は中期後半の竜見町式期から後期樽式期のものである。

〈遺構の取扱い〉

検出された遺構の提示の仕方は、現場調査時にナンバリングした順に、各区ごとに掲載したのみである。時期ごとの集計は行なわず、各遺構間の重複から窺える新旧関係を遺構記述文中に記すに留まっている。本来ならば総合的な分析を行ない、所属時期ごとの提示と、さらには伴出土器の編年観を示すべきであろう。

水田跡については、畦畔の残存状況が悪く確認が困難なこともあったが、水系等、総合的な点についての問題意識が担当者に足りなかったことは否めない。このため、遺構の状況を正確に把握出来なかった可能性もあろう。畦畔や水田面の規模や規格などについても具体的な数値を示しておらず、平・断面図の提示と概観的な記述をするに留まっている。

遺構実測図を作成するにあたり、現場作業の効率化のために写真測量を導入したことは「II　調査の経過」、「III　調査の方法」でも触れた。これは作業時間の短縮や担当者及び測量従事者の労力軽減には極めて有効な手段であった。しかしながら、遺物取り上げ後に撮影のミスが判明し、結果として充分な作図が出来なかったものが数点あったり、ピットの中などの暗がり部分の図化の不出来を補足する作図が不備であったり、という、致命的とも言えるミスも犯した。これらの事は、今後充分に留意しなければならないと痛感している次第である。

以上、反省すべき点を挙げてきたが、他にも不備は多々あろうかと思う。これらの事は今後の大きな課題であり、整理・分析すべき事項は、後に何らかの形で提示してゆきたいと考えている。

現在、本町では上信越自動車道の建設に伴う数々の埋蔵文化財調査が大規模に行なわれており、大きな成果が上がっている。激変してゆく環境の中、本遺構で得られた資料も、これらと共に先に述べた課題を含め、報告書刊行という形の後に、残された資料に対するアプローチの仕方が問われていると言えよう。

本報告書刊行には、現場調査から今までに数多くの関係機関や各位からの援助・協力があり、担当者の支えとなって頂いた。最後になったが、ここに心からの謝意を申し上げてまとめとしたい。

# 松井田工業団地遺跡（遺構編）

印　刷　平成２年３月26日
発　行　平成２年３月31日

編　集　松井田町教育委員会
発　行　松井田町教育委員会
　　群馬県企業局
印　刷　朝日印刷工業株式会社